昭和四年十一月一日印刷
昭和四年十一月五日發行

國譯一切經 阿含部 九

編輯兼發行者 岩野眞雄
東京市芝區芝公園地七號地一番

印刷者 長尾文雄
東京市芝區芝浦町二丁目三番地

印刷所 日進舍
東京市芝區芝浦町二丁目三番地



發行所 東京市芝區芝公園地七號地一番
大東出版社
振替東京一九四七一番
電話芝(二一)一一六番
(三〇)四〇番

製本所 雨角製本所

# 索　　　　引

（頁數は通頁を表す）

## —ス—



## —セ—



## —ソ—



## —タ—



## —チ—



## —ツ—

—テ—



—ト—



—ナ—



—ニ—



—ネ—



—ハ—



—ヒ—



—フ—

—阿含部九索引終—

べし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて、歡喜奉行しぬ。



増壹阿含經卷第四十五

丘の身上に積み、火を以て燒き、已に之を捨て去りぬ。是の時等壽比丘、即ち三昧從り起ち、衣服を正し、便ち退いて去りぬ。是の時比丘、即ち其の日を以て、衣を著け、鉢を持し、村に入つて乞食しぬ。時に諸の薪草を取るの人、此の比丘の村の中を乞食するを見、各々自ら相謂ひて言く、『此の比丘は昨日已に命終を取り、我等火を以て焚燒せしに、今日復、還り活く。今當に字を立てん、字して還活と曰ふべし』と。若し比丘有りて、金剛三昧を得ば、火の燒かざる所、刀斫入らず、水の漂はざる所にして、他の爲に中傷せ所れざるなり。是の如く比丘、金剛三昧の威德是の如し。今舍利弗は此の三昧を得たり。舍利弗比丘は多く二處に遊ぶ。空三昧と金剛三昧となり。是の故に諸比丘、當に方便を求めて、金剛三昧を行ずべし。是の如く比丘、當に是の學を作すべし」と。

爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「我當に汝に敎ふべし、舍利弗比丘の如きは、智慧大智・分別廣智・無邊智・捷疾之智・普遊智・利智・甚深智・斷智を(得)、少欲知足にして、閑靜に勇猛にして、念じて分散せず、戒成就し、三昧成就し、智慧解脫見慧成就し、柔和にして爭ふこと無く、惡を去り、辯了して諸の言語を忍び、離惡を歎說し、常に念じて去離し、生萠を愍念し、正法を然熾し、人の與に說法して厭足有ること無し」と。爾の時世尊、便ち此の偈を說きたまはく、

十千の諸天人　盡く是れ梵迦夷なり　自ら舍利弗に歸し　靈鷲山の頂に於てす　人中の上に歸命し　人中の尊に歸命す　我今知ること能はず　何等の禪に依ると爲すやと　是の如き弟子の花　佛の道樹を莊嚴すること　天の晝度園の如く　快樂比ひ有ること無し。

と。弟子の華とは即ち是れ舍利弗比丘是れなり。然る所以は、此の人則ち能く佛樹を莊嚴すればなり。道樹とは即ち如來是れなり。如來は能く一切の衆生を覆蓋すればなり。是の故に比丘、當に念じて勤加し、勇猛精進すること、舍利弗比丘の如くなるべし。是の如く比丘、當に是の學を作す

設し汝手を以て此の沙門を打たば、此の地は當に分れて二分と爲るべし。正しく爾り、當に暴風疾雨し、地も亦振動し、諸天驚動すべし。地已に振動せば、四天王も亦當に驚怖すべし。四天王にして已に知る、我等に於ては其の所に安ぜじ」と。是の時惡鬼曰く、「我今此の沙門を辱しむるに堪任す」と。善鬼聞き已つて便ち捨てゝ去りぬ。

時に彼の惡鬼、卽ち手を以て舍利弗の頭を打ちぬ。是の時天地大に動き、四面に暴風疾雨有りて、尋いで時に來至し、地は卽ち分れて二分を爲し、此の惡鬼卽ち以て全身地獄に墮しぬ。爾の時尊者舍利弗、卽ち三昧從り起ち、衣服を整へて耆闍崛山を下り、竹園に往詣して世尊の所に至り、頭面に足を禮し、一面に在りて坐しぬ。爾の時佛、舍利弗に告げて曰はく、「汝今身體に疾病有ること無き乎」と。舍利弗言さく、「體素患ひ無し。唯、頭痛に苦しむ」と。世尊告げて曰はく、「伽羅鬼手を以て汝の頭を打てり。若し當に彼の鬼、手を以て須彌山を打つべくんば、卽時に須彌山便ち二分と爲らん。然る所以は、彼の鬼大力有るが故なり。今此の鬼其の罪報を受くるが故に、全身阿鼻地獄の中に入れり」と。

爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「甚奇・甚特、金剛三昧の力乃ち斯に至る。此の三昧力に由るが故に傷害せ所るゝこと無し。正使須彌山其の頭を打たば、終に其の毫毛を動かすこと能はず。然る所以は、比丘、之を聽け、此の賢劫中に於て佛有り、拘屢孫如來・至眞・等正覺と名く。彼の佛に二大聲聞有り、一を等壽と名け、二を大智と名く。比丘等壽は神足第一にして、比丘大智は智慧第一なること、我今日の舍利弗の智慧第一、目揵連の神足第一なるが如し。爾の時等壽・大智の二比丘、俱に金剛三昧を得たり。一時に於て、等壽比丘、閑靜之處に在りて、金剛三昧に入るに當り、時に諸の牧牛の人、牧羊の人、薪草を取るの人、此の比丘の坐禪するを見、各々自ら相謂ひて言く、『此の沙門は今日已に無常を取れり』と。是の時牧牛人・及び取薪人、諸の草木を集め、比

告げたまはく、我優婆塞中、第一の弟子にして、平等施の者は、所謂師子長者是れなり」と。爾の時諸比丘、佛の所説を聞いて歡喜奉行しぬ。

六

【一七】聞くこと是の如し。一時佛、羅閱城迦蘭陀竹園所に在し、大比丘衆五百人と俱なりき。爾の時尊者舍利弗、耆闍崛山中の屏猥の處に在りて、【一八】故衣を補納しぬ。爾の時十千の梵迦夷天有り、梵天從り沒して來り、舍利弗の所に至り、頭面に足を禮し、各圍遶して侍しぬ。又此の偈を以て歎頌して曰く。

人中の上に歸命し　人中の尊に歸命す　我等今知らず　何等の禪に依ると爲すや。

と。是の時十千の梵迦夷天、此の語を說き已り、舍利弗默然として之を可しぬ。爾の時諸天、以て舍利弗の默然として可せるを見已つて、即ち足を禮して退き去りぬ。諸天去りて未だ遠からざるに、舍利弗即ち金剛三昧に入れり。

是の時二鬼有り、一を伽羅と名け、二を優波伽羅と名く。毘沙門天王の使遣、毘留勒天王の所に至り、人天の事を論ぜんと欲す。是の時二鬼、彼の虛空從りして過ぎ、遙に舍利弗の結跏趺坐し、繫念して前に在りて、意寂然として定まれるを見、伽羅鬼、第二鬼に語げて曰く、「我今拳を以て此の沙門の頭を打つて堪任す」と。優波伽羅鬼、彼の鬼に謂ひて言く、「汝此の意を興して、沙門の頭を打つこと勿れ。然る所以は、此の沙門は極めて神德有り、大威力有り、此の尊は舍利弗と名け、世尊の弟子の中、聰明高才にして、復、過ぐるもの無し。是れ智慧の弟子中最も第一と爲し、備長夜に於て苦を受くること無量なり」と。是の時彼の鬼再三曰く、「我能く此の沙門の頭を打つに堪任す」と。優波伽羅鬼報へて曰く、「汝今我語に隨はずば、汝便ち此に住まれ、吾汝を捨てゝ此れを去らんと欲す」と。惡鬼曰く、「汝は此の沙門を畏るゝ乎」と。優波伽羅鬼曰く、「我實に之を畏る。



【一七】Udāna 4. 4. 「雜阿含經」第一三三〇經（卷五〇）。
【一八】故衣、古き衣をいふ。

敎誡は選擇して施さゞればなり。爾の時師子長者、復、餘時を以て世尊の所に至り、頭面に足を禮し、一面に在りて坐し、「我自ら憶念して聖衆を請じ、之に飯はせしに、天有り、來つて我に告げて言く、『此れは是れ持戒なり、此れは是れ犯戒なり、此の人は向須陀洹、此の人は得須陀洹、乃至三乘なり』と、皆悉く分別し、又此の偈を說けり。

如來は擇施を歎じたまへり　此の諸の德士に與へよ　此れに施せば福を獲ること多きこと　良田の苗を生ずるが如し。

と。時に我復、是の念を作さく、『如來の敎誡は違戾す可からず、豈に當に心を生じて、施を選擇すべけん乎』と、終に是非之心、高下の意無きなり。時に我復、是の念を作さく、『我當に盡く一切の衆生の類に施すべし。汝自ら戒を持たば、福を受くること窮り無く、若し戒を犯さば、自ら其の殃ひを受け使めん。但衆生を愍れみて、食するに非らずば、命を濟はさらん』と」。佛長者に告げたまはく、「善い哉、善い哉、長者、行ずること弘誓に過ぎ、菩薩の施す所は、心恒に平等なり。長者、當に知るべし、若し菩薩惠施の日、諸天來つて之に告げん。『族姓子、當に知るべし。此れは是れ持戒の人、此れは是れ犯戒の人なり。此れに施さば福を得ること多く、此れに施さば福を得ること少し』と。其の時菩薩、終に此の心無し。『此れに施す應し、此れに施す應からず』と。然も菩薩、意に執じて是非無く、亦此れは持戒と言はず、亦此れ犯戒と言はず。是の故に長者、當に念じて平等に惠施すべくんば、長夜の中に、福を獲ること無量ならん」と。

是の時師子長者、如來の敎誡を憶ひ、世尊を熟視しまつりて、意移動せず、即ち座上に於て法眼淨を得たり。是の時師子長者、即ち座從り起ち、頭面に足を禮し、便ち退いて去りぬ。爾の時長者去りて未だ久しからさるに、佛、諸比丘に告げて曰はく、「此の師子長者は、平等の施しを憶ふが故に、又如來を視るに、頭從り是に至り、即ち座上に於て法眼淨を得たり。爾の時世尊、諸比丘に

『當に聖衆を供養すべし。餘人を供養せざれ』と。今畜生に施すも猶其の福を獲、何に況んや餘人をや。但我說きし所は、福に多少有り。然る所以は、如來の聖衆は敬ふ可く、貴ぶ可く、是れ世間の無上の福田なり。今此の衆中に四向四得及び聲聞乘、辟支佛、佛乘有り、其れ善男子・善女人有りて、三乘之道を得んと欲せば、當に衆中に從つて之を求むべし。然る所以は、三乘之道は皆衆より出づればなり。長者、我此の因緣の義を觀ずるが故に、此の語を說きし耳。亦人に『聖衆に施す應し、餘人に施す應からず』と敎へざるなり」と。爾の時長者、世尊に白して言さく、「是の如し、尊の敎勅の如し。今自り已後、若し福業を作さば、盡く當に聖衆に供養し人を選擇して施さゞるべし」と。爾の時世尊、彼の長者の與に微妙の法を說き、歡悅の心を發さ令めたまひぬ。長者、法を聞き已つて、即ち座從り起ち、頭面に足を禮し、便ち退いて去りぬ。爾の時師子長者、意に福業を施立せんと欲せり。

爾の時諸天、來つて之に告げて曰く、「此れは是れ向須陀洹の人なり。此れは是れ須陀洹を得、此れを施せば、福を得ること多く、此れを施せば福を得ること少し」と。爾の時天人、即ち歎じて頌して曰く、

如來は擇施を歎じたまへば　此の諸德の士に與へよ　此に施せば福を獲ること多く　良田の苗を生ずるが如し。

と。爾の時師子長者、默然として對へず。爾の時天人復、長者に語ぐらく、「此れは是れ持戒の人、此れは是れ犯戒の人、此れは是れ向須陀洹の人、此れは是れ得須陀洹の人、此れは向斯陀含の人、此れは是れ得斯陀含の人、此れは向阿那含、此れは得阿那含、此れは向阿羅漢、此れは得阿羅漢、此れは是れ聲聞乘、此れは是れ辟支佛乘、此れは是れ佛乘、此れに施せば福を得ること少く、此れに施せば福を得ること多し」と。爾の時師子長者、默然として對へず。何を以ての故に爾るや。但如來の

水を飲みて、盡さ使むること能はず、但其の功を勞して、事終に成らざるなり」。彼の人復、是の說を作さく、『我自ら方便因緣有りて、諸水を飲み、盡くさ使むることを得可し』と、「云何が因緣有りて、諸水を飲むことを得るや。爾の時彼の人便ち是の念を作さく、『我當に海水を飲むべし。然る所以は、一切の諸流皆海に歸投すればなり』と、云何が羅云、彼の人能く諸水を飲むことを得る乎」と。羅云、佛に白して言さく、「此の如く方便せば、水を飲みて盡くさ使むることを得可し。然る所以は、一切の諸流、皆海に歸すればなり。此の因緣に由るが故に、彼の人水を飲みて盡くすことを得」と。佛之に告げて曰はく、「是の如し、羅云、一切の私の施しは、猶し彼の流の如く、或は福を獲、或は福を獲ず。衆僧とは彼の大海の如し。然る所以は、流河水を決し、以て海に入れば、便ち本名を滅し、但大海の名有る耳。羅云、此れも亦是の如し。今此の十人は皆、衆中從り出づ。衆に非らずば成ぜず。云何が十と爲すや、所謂向須陀洹・得須陀洹・向斯陀含・得斯陀含・向阿那含・得阿那含・向阿羅漢・得阿羅漢・辟支佛・佛なり。是れを十人皆、衆中に由り、獨り自立するに非らずと謂ふなり、羅云、當に此の方便を以て知るべし。其れ衆中差ぶとは、其の福限量す可からず。是の故に羅云、善男子・善女人にして、其の福の稱計す可からざるを求めんと欲せば、當に聖衆を供養すべし。羅云、當に知るべし、猶し人有りて、酥を以て水凝に投ぜば、廣普することを得ず、若し油を以て水に投ぜば、則ち其の上に遍滿するが如し。是の故に羅云、當に念じて聖衆比丘僧を供養すべし。是の如く羅云、當に是の學を作すべし」と。

爾の時師子長者、如來の衆に施すの福を歎說し、餘福を歎說したまはざるを聞きぬ。爾の時長者、餘時を以て世尊の所に往至し、頭面に足を禮し、一面に在りて坐す。爾の時師子長者、世尊に白して言さく、「適ま聞くに、如來は衆に施すの福を歎說して、別に人を請ずるの福を歎じたまはずと、今自り已後、常に當に聖衆を供養すべし」と。佛之に告げて曰はく、「我爾の說を作さず、

爾の時諸の大聲聞、各三衣を著け、鉢を持して城に入り、長者の家に至る。時に長者、諸の最尊の座已に定まるを見、手自ら斟酌して、種々の飮食を行く。諸の聖衆食し已訖るを見て淸淨水を行く。人一の白氎を施し、前んで呪願を受けぬ。是の時尊者舍利弗、長者の與に極妙の法を說き、便ち座從り起ちて去り、還つて靜室に詣りぬ。

爾の時羅云、世尊の所に至り、頭面に足を禮し、一面に在りて坐す。爾の時世尊、問ふて曰はく、「汝今何れ從り來りしと爲すや」と。羅云報へて云さく、「師子長者今日來り、請ぜ見れしなり」と。佛之に告げて曰はく、「云何が羅云、飮食は妙と爲すや、妙ならずと爲すや。細と爲す耶、麁と爲す耶」と。羅云報へて曰さく、「飮食極妙にして、又且つ豐多なり。今此の白氎は彼從り之を得しなり」と。佛、羅云に告げたまはく、「衆僧斯に幾人有りて、上座は是誰れなりしや」と。羅云、佛に白して言さく、「和上舍利弗を最も上首と爲し、及び諸の神德の弟子五百人有り」と。佛、羅云に告げたまはく、「云何が羅云、彼の長者は福を獲ること多しと爲す乎」と。羅云、佛に白して言さく、「唯、然り、世尊、彼の長者は福を得るの報ひ、稱計す可からず。一羅漢に施す其の福限り難し、何に況んや大神妙の天人の敬奉する所をや。今五百人は均しく是れ眞人なれば、其の福何んぞ量る可きこと有らんや」と。佛、羅云に告げたまはく、「今は五百の羅漢に施す之功德なり。若し衆中從り僧次、一沙門を請じ、請じ已つて供養せんに、此の衆中、人を差ぶの福と、及び五百羅漢の福とを計せんに、百倍千倍巨億萬倍にして、譬喩を以て比を爲す可からず。然る所以は、衆中差ぶ所、其の福限り難く、甘露滅盡の處を獲ん。羅云、當に知るべし。猶し人有りて、自ら誓說して曰ふが如く、『吾要らず當に此の江河の諸水を飮むべし』と、彼の人堪任を爲すや不乎」と。羅云、佛に白して言さく、「不なり、世尊。然る所以は、此の閻浮地は極めて廣大爲り。此の閻浮地に四大河有り、一には恒河、二に新頭、三に私陀、四に博叉なり。一一の河は從つて五百有り。然れば此の人終に

亦當に七佛の本末を記したまふべし。若し承柔順佛の世に出づる時、亦當に七佛の本末を記したまふべし。若し光焰佛の世に出現する時、亦當に七佛の名號を記したまふべし。若し無垢佛の世に出現する時、亦當に釋迦文の本末を記したまふべし」と。爾の時世尊、便ち此の偈を說きたまはく、

師子柔順光　と　無垢及び寶光　彌勒之次第　皆當に佛道を成ずべし　彌勒は式佛を記し　師子は毘舍を記し　柔順は拘孫を記し　光焰は牟尼を記す　無垢は迦葉を記し　皆曩に所緣を說く　寶光は三佛を成じ、亦當に我號を記すべし　過去の諸の三佛　及以將來の者　皆當に七佛の曩所の本末を記すべし。

此の因緣に由るが故に、如來は七佛の名號を記する耳」と。爾の時阿難、世尊に白して言さく、「此の經は何等と名け、當に云何が奉行すべきや」と。佛、阿難に告げたまはく、「此の經は名けて記佛名號と曰ひ、當に念じて奉行すべし」と。爾の時阿難、及び諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

五

聞くこと是の如し。一時佛、羅閱城迦蘭陀竹園所に在しき。是の時師子長者、舍利弗の所に往至し、頭面に足を禮し、一面に在りて坐しぬ。爾の時師子長者、舍利弗に白して言く、「唯、願くは尊者、當に我請を受くべし」と。是の時舍利弗、默然として請を受けぬ。是の時長者、尊者の默然として請を受けしを見、即ち座從り起ち、足を禮して退きぬ、復、大目犍連・離越・大迦葉・阿那律・迦旃延・滿願子・優波離・須菩提・羅云・均頭沙彌に至る、此の如き上首の者五百人を請ぜり。是の時師子長者、即ち還つて種々の極妙の飲食を辦具し、好座具を敷き、又時の到れることを白す。「諸の眞人羅漢、臨せさる所靡し、今食具已に辦ぜり、唯、願くは屈顧して、下舍に臨赴せよ」と。

文は千二百五十なり　皆是れ眞人の行にして　法教を布現し　遺法の餘の弟子　其の數計る可からず。

と。「毘婆尸如來の侍者は、名けて[1]大導師と曰ひ、式詰如來の侍者は、名けて[2]善覺と曰ひ、毘舍羅婆如來の侍者は、名けて[3]勝衆と曰ひ、拘屢孫如來の侍者は、名けて[4]吉祥と曰ひ、拘那含牟尼如來の侍者は、名けて[5]毘羅先と曰ひ、迦葉如來の侍者は、名けて[6]導師と曰ひ、我今侍者は名けて阿難と曰ふなり」と。爾の時世尊、便ち此の偈を說きたまはく、

大導及び善覺と　勝衆と吉祥と　毘羅先と導師と　阿難は第七侍なり　此の人聖を供養して時を得ざること有ること無し　諷誦して又受持し　其の義理を失はず。

と。「毘婆尸如來の壽は八萬四千歲、式詰如來の壽は七萬歲、毘舍羅婆如來の壽は六萬歲、拘屢孫如來の壽は五萬歲、拘那含如來の壽は四萬歲、迦葉如來の壽は二萬歲、我今日の如きは、壽極めて減少し、極壽百歲に過ぎず」と。爾の時世尊、便ち斯の偈を說きたまはく、

初佛は八萬四　次佛は七萬歲　毘舍婆は六萬　拘留の壽は五萬なり　一萬二萬年　是れ拘那含の壽なり　迦葉の壽は二萬　唯我は壽百年なり。

と。「是の如く諸比丘、如來は諸佛の姓・名・號・字を觀知し、皆悉く分明し、種類出處貫練せざるは靡く、持戒・智慧・禪定・解脫皆悉く了知す」と。

　爾の時阿難、世尊に白して言さく、「如來は亦過去恒沙の諸佛の、滅度を取りたまひしこと、如來も亦知りたまひ、當來恒沙の諸佛の、方に當來したまふこと、如來は亦知りたまふ。如來は何故に爾許の佛の所造を記したまはずして、今は但七佛の本末を說きたまふや」と。佛、阿難に告げたまはく、「皆因緣本末有るが故に、如來は七佛の本末を說くなり。過去恒沙の諸佛も亦七佛の本末を說きたまへり、將來彌勒の世に出現する時、亦當に七佛の本末を記すべし。若し師子應如來出づる時、

【一】巴利文には(Asoka)。
【二】巴利文には(Khemaṅkara)。
【三】巴利文には(Upasannaka)。
【四】巴利文には(Buddhija)。
【五】巴利文には(Sotthija)。
【六】巴利文には(Sabbamitta)。

比丘當に知るべし。毘婆尸如來の姓は　[二]拘鄰若、式詰如來も亦拘鄰若より出で、毘舍羅婆如來も亦拘鄰若より出で、拘屢孫如來は　[三]婆羅墮より出で、拘那含牟尼如來も亦婆羅墮より出で、迦葉如來も亦婆羅墮より出で、我の如きは今、如來・至眞・等正覺は拘鄰若より出でたり」と。爾の時世尊、便ち此の偈を說きたまはく、

初めの諸の三佛の如きは　拘鄰若より出でたまひ　後の三迦葉に至るは　婆羅墮より出でたまへり　我今現在の如きは　天人の奉敬する所　諸根淡泊にして　拘鄰若より出でたり。

と。「毘婆尸如來は　[四]波羅利華樹の下に坐して、佛道を成じ、式詰如來は　[五]分陀利樹の下に坐して佛道を成じたまひ、毘舍羅婆如來は　[六]波羅樹の下に坐して、佛道を成じ、拘屢孫如來は　[七]尸利沙樹の下に坐して、佛道を成じ、拘那含牟尼如來は　[八]優頭跋羅樹の下に坐して、佛道を成じ、迦葉如來は[九]尼拘留樹下に坐して、道果を成じ、我今日の如き如來は、[一〇]吉祥樹の下に坐して、佛道を成ぜり」と。爾の時世尊、便ち此の偈を說きたまはく、

初めの一佛道を成ずるに　波羅利樹の下にし　式は分陀利に坐し　毘舍は波羅に坐したまへり
拘孫は尸利に坐し　拘那は跋羅の下に　迦葉は拘留樹に　吉祥に我道を成ぜり　七佛は天中の天にして　世間を照明す　因緣諸樹に坐し　各其の道果を成ぜり

と。「毘婆尸如來の弟子、十六萬八千之衆有り、式詰如來の弟子の衆十六萬有り、毘舍羅婆如來の弟子の衆十萬、拘樓孫如來の弟子の衆、八萬人有り、拘那含牟尼如來の弟子の衆、七萬人有り、迦葉如來の弟子の衆、六萬衆有りき。我今日の如きは、弟子の衆、千二百五十人有り、皆是れ阿羅漢にして、諸漏永く盡きて、復、諸縛無し。爾の時世尊、便ち此の偈を說きたまはく、

百千六萬八は　毘婆尸の弟子　百千及び六萬は　式詰の弟子衆なり　百千比丘衆は　毘舍婆の弟子にして　拘孫は八萬衆　拘那含は七萬なり　迦葉は六萬衆　皆是れ阿羅漢なり　我今釋迦

---

【二】拘鄰若(Koṇḍañña)。
【三】巴利文には迦葉(Kassapa)。
【四】波羅利華(Pāṭali)。
【五】分陀利樹(Puṇḍarīka)。
【六】波羅樹(Sāla)。
【七】尸利沙樹(Sirīsa)。
【八】優頭跋羅樹(Udumbara)
【九】尼拘留樹(Nigrodha)。
【一〇】吉祥樹(Assattha)。

世尊告げて曰はく、「比丘、當に知るべし。過去九十一劫に佛有りて出世し、毘婆尸如來・至眞・等正覺と號す。復、次に三十一劫に佛有りて出世し、式詰如來・至眞・等正覺と名く。復、彼の三十一劫の內に於て佛有り、毘舍羅婆如來と名けて出世し、此の賢劫の中に於て佛有りて出世し、拘屢孫如來と名く。復、賢劫の中に於て佛有りて出世し、拘那含牟尼如來・至眞・等正覺と名く。復、賢劫中に於て佛有りて出世し、名けて迦葉と曰ふ。復、賢劫中に於て我世に出現す、釋迦文如來・至眞・等正覺なり」と。爾の時世尊、便ち、此の偈を說きたまはく、

九十一劫中に　佛毘婆尸有り　三十一劫中に式詰如來出でたまへり　復彼の劫中に於て　毘舍如來現れたまひ　今日賢劫中に　四佛復出世したまへり　拘孫那迦葉　日の世間を照らすが如し　名字を知らんと欲せば　其の號悉く是の如し。

毘婆尸如來は刹利種より出で、式詰如來も亦刹利種より出で、毘舍羅婆如來も亦刹利種より出で、拘屢孫如來は婆羅門種より出で、拘那含牟尼如來は婆羅門より出で、迦葉如來は婆羅門種より出でたまひ、我の如きは今刹利種より出づ」と。爾の時世尊、便ち此の偈を說きたまはく、

前佛の現れたまふこと有れば　皆刹利種より出でたまへり　拘孫より迦葉に至るは　婆羅門より出でたまへり　最尊にして能く及ぶもの無く　我今天人師たり　諸根淡泊にして　刹利の姓より出でたり。

毘婆尸如來は瞿曇を姓とし、式詰如來も亦瞿曇より出で、毘舍羅婆も亦瞿曇より出で、迦葉如來は迦葉姓より出でたまひ、拘樓孫・拘那含牟尼も亦、迦葉姓より出でたまふこと、上と同じくして、異ること無し。我今如來は瞿曇を姓とす」と。爾の時世尊、便ち此の偈を說きたまはく、

初の諸の三佛の如きは　瞿曇種より出で　後の三迦葉に至るまでは　迦葉姓より出でたまへり　我今現在の如きは　天人の奉敬する所なり　諸根淡泊にして　瞿曇姓より出でたり。

# 卷の第四十五

## 不善品第四十八之前品中

四

[一]聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時衆多の比丘、普會講堂に集り、各此の念を生ずらく、「今如來は甚奇甚特なり、過去に般涅槃を取りし者も、亦復、彼の姓・名・種族を知りたまひ、持戒、翼從皆悉く分明に、三昧・智慧・解脫・解脫見慧、身壽に長短有り、皆悉く之を知りたまへり。云何が諸賢、是れを如來、法處を分別すること、極めて清淨爲り、彼の諸佛の姓字、所出の處を知りたまふと爲す乎。是れ諸天、佛所に來至して、此れを告ぐると爲す耶」と。爾の時世尊、天耳を以て、徹して衆多の比丘の、各此の論を興すを聞きたまひ、便ち諸比丘の所に往至し、中央に在りて坐したまひぬ。

爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「汝等此に集りて、何等の論を爲し、何の法を說かんと欲するや」と。諸比丘、佛に白して言さく、「我等此に集りしは、正法の要を論ぜんとなり。諸人各此の論議を興せり。『如來は甚奇甚特なり。乃ち能く過去の諸佛世尊の名字、姓號を知りたまひ、智慧の多少貫博せざるは靡し。甚だ奇雅す可し。云何が諸賢、是れ如來に法界を分別したまふこと、極めて清淨爲り。彼の諸佛の姓字、所出の處を知りたまふと爲す乎、是れ諸天の佛所に來至して、此れを告ぐると爲す耶』と」。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「汝等過去の諸佛の神智之力を聞くことを得んと欲する乎」。諸比丘對へて曰さく、「今正に是れ時なり。唯、願くは世尊、其の義を敷演したまへ」と。佛諸比丘に告げたまはく、「汝等善く之を思念せよ。吾當に汝の與に其の義を演ぶべし」と。爾の時衆多の比丘、佛從り敎へを受けぬ。

---

[一] cf. D. 14. Mahāpadāna. 「長阿含經」第一經、「大本經」。

と。

「阿難、當に知るべし。彌勒如來彼の衆中に在りて、當に此の偈を說くべし。爾の時衆中の諸天人民、此の十想を思惟し、十一の姟人、諸の塵垢盡きて法眼淨を得ん。彌勒如來の千歲之中、衆僧瑕穢有ること無く、爾の時恒に一偈を以て、口に禁戒と爲さん。

口意に惡を行ぜず　身も亦犯す所無し　當に此の三行を除き　速に生死の淵を脫るべし

と。千歲を過ぐる之後、當に犯戒之人有るべく、遂に復戒を立てん。彌勒如來は當に壽八萬四千歲にして、般涅槃すべく、後に遺法當に八萬四千歲存すべし。然る所以は、爾の時の衆生は、皆是れ利根なればなり。其れ善男子・善女人有りて、彌勒佛及び三會の聲聞衆、及び雞頭城、及び蠰佉王を見、幷せて四大藏の珍寶を見ることを得んと欲し、自然の粳米を食し、幷せて自然の衣裳を著け、身壞命終して、天上に生ぜんと欲せば、彼の善男子・善女人、當に勤加精進して、懈怠を生ずること無かるべし。亦當に諸の法師を供養し、承事し、名華・擣香・種々の供養をして、失ふこと有ら令むること無かるべし。是の如く阿難、當に是の學を作すべし」と。爾の時阿難、及び諸大會、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

# 增壹阿含經卷第四十四

十不善品第四十八

令めたまひしなり。若し復此の衆中の釋迦文佛の弟子は、過去の時梵行を修めて我所に來至せしなり。或は釋迦文佛の所に於て、其の法を奉持して我所に來至せしなり。或は復、釋迦文佛の所に於て、三寶を供養して、我所に來至せしなり。或は釋迦文佛の所に於て、彈指之頃に善本を修めて、此の間に來至せしなり。或は釋迦文佛の所に於て、四等心を行じて、此に來至せし者、或は釋迦文佛の所に於て、五戒三自歸を受持して、我所に來至し、或は釋迦文佛の所に於て、神寺の廟を起して、我所に來至せしなり。或は釋迦文佛の所に於て、故寺を補治して、我所に來至し、或は釋迦文佛の所に於て、八關齋法を受けて、我所に來至せしなり。或は釋迦文佛の所に於て、香華を供養して此に來至せし者、或は復彼に於て佛法を聞いて、悲泣し、涙を墮して、我所に來至し、或は復、釋迦文佛に於て、專ら意に法を聽いて、我所に來至し、復、形壽を盡くして善く梵行を修めて我所に來至せしなり。或は復、書讀諷誦して我所に來至せし者、承事供養して我所に來至せし者なり』と、

是の時彌勒便ち此の偈を說かん、

戒聞德　禪及び思惟の業を增益し　善く梵行を修して　我所に來至せしなり　施を勸めて歡心を發し　心原本を修行し　意若干想無くして　皆我所に來至せしなり　或は平等の心を發し
諸佛に承事し　聖衆に飯食して　皆我所に來至せしなり　或は戒の契經を誦し　善く習ひて人の與に說き　法の本を熾然して　今我所に來至せしなり　釋種は善能く化し　諸の舍利を供養し　法に承事して供養し　今我所に來至せしなり　若しは經を書寫し　素上に頒宣する有り
其れ經を供養する有りて　皆我所に來至せしなり　繒綵及び衆拘　神寺に供養し　自ら南無佛と稱して　皆我所に來至せしなり　現在の諸佛　過去の者に供養し　禪定正しく平等にして
亦增減有ること無し　是の故に佛法に於て　聖衆に承事して　專心に三寶に事へば　必ず無爲に至らん

【八】彈指の頃とは、指を彈く程の一瞬間をいふ。

然る後に、乃ち當に般涅槃すべし。大迦葉も亦般涅槃す應からず。要らず彌勒の世間に出現するを須て。然る所以は、彌勒所化の弟子は、盡く是れ釋迦文佛の弟子にして、我遺化に由つて有漏を盡くすことを得ればなり。摩竭國界の毘提村の中、大迦葉は彼の山中に於て住せよ。又彌勒如來は無數千人の衆を將ひ、前後に圍遶せられて、此の山中に往至し、遂に佛恩を蒙むり、諸の鬼神は當に與に門を開き、迦葉の禪窟を見ることを得使むべし。是の時彌勒、右手を伸して迦葉を指示し、諸の人民に告げん。『過去久遠の釋迦文佛の弟子にして、名けて迦葉と曰ひ、今日現在、頭陀苦行最も第一と爲す』と。是の時諸の人民、見已つて未曾有と歎じ。無數百千の衆生、諸の塵垢盡きて法眼淨を得ん。或は復、衆生有りて、迦葉を見已らん。此れを名けて最初の會と爲し、九十六億の人、皆阿羅漢を得ん。斯等の人は皆是れ我弟子なり。然る所以は、悉く我教訓を受けしに由るの致す所なり。亦四事の因緣に由る。惠施・仁愛・利人・等利なり』と。

爾の時阿難、「彌勒如來は、當に迦葉の僧伽梨を取りて之を著けたまふべきや」と。是の時迦葉の身體、奄然として星散しぬ。是の時彌勒、復、種々の香華を取りて迦葉を供養せん。然る所以は、諸佛世尊は心に正法に於て恭敬有るが故なり。彌勒も亦我所に由つて、正法の化を受け、無上正眞之道を成ずることを得ればなり。阿難、當に知るべし。彌勒佛の第二會の時、九十四億人有らん。皆是れ阿羅漢なり。亦復、是れ我遺教の弟子にして、四事の供養を行ずるの致す所なり。又彌勒の第三の會には、九十二億の人、皆是れ阿羅漢にして、亦復、是れ、我遺教の弟子なり。爾の時比丘の姓號は、皆慈氏の弟子と名くること、我今日の諸の聲聞、皆釋迦の弟子と稱するが如し。爾の時彌勒、諸弟子の與に說法せん。『汝等比丘、當に無常之想・樂有苦想・計我無我想・實有空想・色變之想・青瘀之想・腹脹之想・食不消想・血想・一切世間不可樂想を思惟すべし。然る所以は、比丘、當に知るべし。此の十想とは、皆是れ過去釋迦文佛の汝等の與に說き有漏を盡くすことを得て、心解脫を得



【七一】慈氏、前卷索引彌勒をみよ。

に廣く義を分別し爾の時座上の八萬四千人、諸の塵垢盡きて法眼淨を得ん。是の時善財八萬四千人等と、即ち前んで佛に白さく『出家を求索し、善く梵行を修め、盡く阿羅漢道を成ぜん。爾の時彌勒の初會に八萬四千の阿羅漢あり。是の時蠰佉王、彌勒已に佛道を成ぜしを聞き、便ち佛所に往至し、法を聞くことを得んと欲す。時に彌勒佛、王の與に說法し、初も善く、中も善く、竟りも善く、義理深邃なり。爾の時大王、復、異時に於て太子を立て、剃頭師に珍寶を賜ひ、復、雜寶を以て、諸の梵志に與へ八萬四千の衆生を將ひ、佛所に往至して沙門と作らんことを求め、盡く道果を成じ、阿羅漢を得ん。是の時修梵摩大長者、彌勒の已に佛道を成ぜしを聞き、八萬四千の梵志の衆を將ひ、佛所に往至して沙門と作ることを求めて阿羅漢を得ん。唯、須梵摩一人、三結使を斷じ、必ず苦際を盡くさん。是の時佛母梵摩越、復、八萬四千の婇女之衆を將ひて、佛所に往至して、沙門と作ることを求めん。是の時諸の女人、盡く羅漢を得ん。唯、梵摩越一人有りて、三結使を斷じて、須陀洹を成ぜん。爾の時諸の刹利婦、彌勒如來の世間に出現し、等正覺を成ぜしを聞き、數千萬衆、佛所に、往至し、頭面に足を禮し、一面に在りて坐す。各々心を生じ、沙門と作りて、出家學道せんことを求め、或は次を越えて證を取る有り、或は證を取らざる者有り、爾の時阿難、其の次を越えて證を取らざる者、盡く是れ奉法の人にして、一切世間不可樂想を患厭せん。爾の時彌勒當に三乘の敎へを說くべし。我今日の弟子の中、大迦葉の如きは、十二頭陀を行じ、過去の諸佛の所に、善く梵行を修めしが、此の人常に彌勒を佐けて人民を勸化せん」と。

爾の時迦葉、如來を去ること遠からずして、結跏趺坐し、正身正意に繫念して前に在り。爾の時世尊、迦葉に告げて曰はく、「吾今年已に衰耗せり。年八十餘に向へり。然るに今如來に四大聲聞有、遊化に堪任し、智慧盡くること無く、衆德具足せり。云何が四と爲すや、所謂大迦葉比丘・君屠鉢漢比丘・賓頭盧比丘・羅云比丘なり。汝等四大聲聞は要らず般涅槃せざれ。吾法の沒盡を須ちて、

厳し、身黄金色なり。爾の時人壽、極めて長く、諸患有ること無し。皆壽八萬四千歳にして、女人の年は五百歳。然して後に出でゝ適く。爾の時彌勒、家に在りて、未だ幾時を經ざるに便ち當に出家學道すべし。

爾の時鷄頭城を去ること遠からざるに、道樹有り、名けて龍華と曰ひ、高さ一由旬にして、廣さ五百歩なり。時に彌勒菩薩、彼の樹下に坐し、無上の道果を成じ、其の夜半に當りて彌勒出家し、卽ち其の夜に無上道を成ぜん。時に三千大千刹土、六變震動し、地神各々相告げて曰く、『今彌勒已に成佛せり』と。轉至して四天王宮に聞こえん。『彌勒已に佛道を成ぜり』と。轉々して聞こえて、三十三天・焰天・兜率天・化自在天・他化自在天に徹し、聲展轉して乃ち梵天に至らん。『彌勒已に佛道を成ぜり』と。爾の時魔、大將と名け、法を以て治化す、如來の名教音響の聲を聞き、歡喜踊躍して自ら勝ふること能はず、七日七夜眠らず、寐ねず。是の時魔王、欲界無數の天人を將ひて、彌勒佛の所に至り、恭敬禮拜しぬ。彌勒聖尊、諸天の與に漸々に微妙の論を說法せん。所謂論とは施論・戒論・生天の論、欲は不淨想、出要を妙と爲すなり。爾の時彌勒、諸の人民の發心歡喜せしを見、諸佛世尊の說法したまふ所の苦・集・盡・道悉く諸天人の與に、廣く其の義を分別せん。爾の時座上の八萬四千の天子、諸の塵垢盡きて法眼淨を得ん。爾の時大將魔王、彼の界の人民之類に告げて曰く、『汝等速に出家せよ、然る所以は、彌勒今日已に彼岸を度し、亦當に汝等を度して、彼岸に至ら使むべし』と。

爾の時鷄頭城中の長者、名けて善財と曰ふ。魔王の敎令を聞き、又佛の音響を聞き、八萬四千衆を將ひて、彌勒の佛所に至り、頭面に足を禮し、一面に在りて坐す。爾の時彌勒、漸く與に微妙の論を說法せん。所謂論とは施論・戒論・生天の論、欲は不淨想、出要を妙と爲すと。爾の時彌勒、諸の人民の心開け、意解せるを見、諸佛世尊の常に說法する所の如く、苦・集・盡・道、諸の人民の與

食するに患苦無し。所謂金銀・珍寶・車渠・瑪瑙・眞珠・琥珀、各地に散在し、人の省錄するもの無し。是の時人民、手に此の寶を執りて、自ら相謂ひて言く、『昔の人は此の寶に由るが故に、各相傷害し、牢獄に繫閉して、更に無數に苦惱せるも、如今此の寶は瓦石と同流にして、人を守護すること無し』と。爾の時法王出現せん。名けて蠰佉と曰ひ、正法もて治化し、七寶成就せん。所謂七寶とは、輪寶・象寶・馬寶・珠寶・玉女寶・典兵寶・守藏之寶、是れを七寶と謂ふなり。此の閻浮地內を領するに刀杖を以てせずして、自然に靡伏す。今阿難、四珍之藏の如し。乾陀越國の伊羅鉢寶藏、諸の珍琦の異物多く、稱計す可からず。第二は彌梯羅國の般綢大藏、亦珍寶多し、第三の須賴吒大國に寶藏有りて、亦珍寶多し。第四に婆羅㮈蠰佉に大藏有りて、諸の珍寶多く、稱計す可からず。此の四大藏は自然に應現す。諸の守藏人、各來つて王に白さく、『唯、願くは大王、此の寶藏の物を以て、貧窮に惠施したまへ』と。爾の時蠰佉大王、此の寶を得已つて、亦復、之を省錄せず、意財物之想無し。時に閻浮地內に自然に樹の上に衣を生ず、極めて細柔軟なり。人取りて之を著くること、今の鬱單曰の人、自然に樹の上に衣を生ずるが如くして、異り有ること無し。

　爾の時彼の王に大臣有り、名けて修梵摩と曰ふ。是の王少小にして同好なり。王甚だ愛敬す。又且つ顏貌端正にして、長からず短かゝらず、肥えず、瘦せず、白からず、黑からず、老ひず、少からざるなり。是の時修梵摩に妻有り、名けて梵摩越と曰ひ、玉女中最も極めて殊妙爲ること、天帝の妃の如く、口に優鉢蓮花の香を作し、身栴檀香を作し、諸の婦人の八十四態、永く復、有ること無く、亦疾病亂想の念無し。爾の時彌勒菩薩、兜率天に於て、父母の老ひず、少なからざるを觀察し、便ち降神下應して、右脇從り生ぜんこと、我の今日右脇より生ぜしが如く、異ること無し。彌勒菩薩も亦復、是の如し。兜率の諸天、各々唱令すらく、『彌勒菩薩、已に降神して下る』と。是の時修梵摩、卽ち子の與に字を立て、名けて彌勒と曰ひ、三十二相八十種好有りて、其の身を莊

したまはざるは無く、當來・過去・現在三世皆悉く明了に、諸の過去の諸佛の姓字・名號、弟子・菩薩の翼從の多少、皆悉く之を知りたまひ、一劫・百劫若しは無數劫悉く觀察して知りたまふ。亦復、國王・大臣・人民の姓字を知り、斯れを能く分別したまふ。如今現在の國界若干亦復、明了にし、將來久遠の彌勒の出現、至眞・等正覺、其の變を聞かんと欲す、弟子の翼從、佛境の豐樂、幾時を經と爲すや」と。佛、阿難に告げたまはく、「汝還つて座に就いて我所說を聽け、彌勒の出現、國土の豐樂・弟子の多少を、善く之を思念して、心懷に執在せよ」と。是の時阿難、佛從り教へを受け、即ち還つて座に就きぬ。

爾の時世尊、阿難に告げて曰はく、「將來久遠に、此の國界に於て、當に城郭有るべし。名けて鷄頭と曰ひ、東西十二由旬、南北七由旬にして、土地豐熟し、人民熾盛、街巷行くを成ず。爾の時城中に龍王有り、名けて水光と曰ひ、夜は雨澤香り。晝は則ち淸和なり。是の時鷄頭城中に羅刹鬼有り、名けて葉華と曰ひ、所行法に順つて正敎に違せず、常に人民の寢寐の後を伺ひ、穢惡諸の不淨者を除去し、又香汁を以て其の地に灑ぎ、極めて香淨爲り。阿難、當に知るべし。爾の時閻浮地の東西南北十萬由旬、諸の山河石壁皆自ら消滅し、四大海水各一方に據る。時に閻浮地は極めて平整爲り、鏡の淸明なるが如し。閻浮地內を擧げて穀食豐賤し、人民熾盛にして、諸の珍寶多く、諸の村落相近く、鷄鳴相接す。是の時弊花果樹枯渴し、穢惡亦自ら消滅す。其の餘の甘美の果樹、香氣殊好なる者、皆地に生ず。爾の時氣適し、四時節に順ひ、人身の中百八の患ひ有ること無し。貪欲・瞋恚・愚癡・大殷勤ならず。人心平均して皆同一意なり。相見て歡悅し、善言相向ひ、言辭一類にして差別有ること無し。彼の欝單曰人の如くして、異り有ること無し。是の時閻浮地內の人民、大小皆同一嚮にして、若干の差別無きなり。彼の時男女の類、意大小便を欲せば、地自然に開け、事訖りて後地復還えり合す。爾の時閻浮地內に自然に粳米生ずるも、亦皮裹無く、極めて香美を爲し、

と。十二年中此の一偈を說き、以て禁戒と爲し、犯律の人の生ぜしを以て、轉た二百五十戒有り。今自り已後衆僧集會し、啓白すること律の如く、『諸賢咸聽け、今十五日は說戒なり。今僧忍べば、衆僧和合せん』と、禁戒を說き、以て此れを啓し已つて、設し比丘有りて所說有らば、說戒す應からず。各共に默然たれ。若し語ること無くば、應に說戒を爲すべし。乃至說戒序後、復、諸賢に問ふべし。『誰れか不清淨なるや』と。是くの如くすること再三、『誰か不清淨なるや』と。清淨者は默然として之を持せん。然るに今人の壽命極めて短く、盡壽も百年を過ぎず、是の故に阿難、當に之を受持すべし」と。

爾の時阿難、世尊に白して言さく、「過去久遠の諸佛世尊は、壽命極めて長く、律を犯す者も少く瑕穢有ること無し。然るに今人民の壽命極めて短少爲り、十々を過ぎず。過去の諸佛の滅度の後、遺法の世に住まる有ること、幾時を經と爲すや」と。佛、阿難に告げたまはく、「過去の諸佛滅度の後、法久しく存せざりき」と。阿難、佛に白して言さく、「設し如來滅度の後、正法世に存すること、當に幾時を經べきや」と。佛、阿難に告げて曰はく、「我滅度の後、法は當に久しく存すべし。迦葉佛の滅度の後、遺法の住すること七日の中なりき。汝今阿難『如來の弟子は少しく爲す』と。是の觀を作すこと莫かれ。東方に弟子無數億千、南方に弟子無數億千なり。是の故に阿難、當に此の意を建つべし。我釋迦文佛の壽命は極めて長し。然る所以は、肉身滅度を取ると雖も、法身存在す、此れは是れ其の義なり。當に念じて奉行すべし」と。爾の時阿難及び諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

三

聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在し、大比丘衆五百人と倶なりき。爾の時阿難、偏へに右肩を露はし、右膝を地に著け、世尊に白して言さく、「如來は玄鑒にして、事として察

以て禁戒と爲したまひき。

譬へば蜂の華を採るが如く　其の色甚だ香潔なり　味を以て他に惠施せば　道士聚落に遊ばん
人を誹謗せず　亦是非を觀ぜず　但自ら身行を觀じ　正不正を諦觀せよ

と。六十年中、此の二偈を說き、以て禁戒と爲したまひ、此れ自り以來瑕穢有りしを以て、便ち禁戒を立てたまひき。彼の佛の壽は六萬歲なり。

此の賢劫の中に於て、佛有りて出世し、名けて拘那含牟尼如來・至眞・等正覺と曰ひ、爾の時二會の聖衆なりき。初會の時は六十萬の聖衆、皆是れ阿羅漢なり。第二會の時四十萬の聖衆、皆是れ阿羅漢なり。爾の時彼の佛、四十年中瑕穢有ること無く、一偈を以て禁戒と爲したまひき。

志を執して輕戲すること莫く　當に尊寂の道を學ぶべし　賢者は愁憂無く　常に志の所念を滅す

と。四十年中、此の一偈を以て禁戒と爲し。此れ自り以來便ち瑕穢有れば、更に禁戒を立てたまひ、彼の佛の壽は四萬歲なりき。此の賢劫に於て佛有り、名けて迦葉と爲し、世間に出現したまひき。爾の時彼の佛も亦二會の聖衆にして、初會の時は四十萬衆、第二會の時は三十萬衆、皆是れ阿羅漢なり。二十年中瑕穢有ること無く、恒に一偈を以て、以て禁戒と爲したまひき。

一切の惡は作すこと莫かれ　當に其の善を奉行すべし　自ら其の志意を淨ふせよ　是れ則ち諸佛の敎へなり

と。二十年中此の一偈を說いて、以て禁戒と爲し、犯禁の後更に制限を立てたまひき。爾の時迦葉佛の壽は二萬歲なりき。我今如來世に出現するや、一會の聖衆千二百五十人にして、十二年中瑕穢有ること無く、亦一偈を以て禁戒と爲しき。

口意を護りて清淨に　身行も亦清淨　此の三行跡を淨め　仙人道を修行せよ

萬の聖衆、第三會の時は十萬の聖衆、皆是れ阿羅漢なり。彼の佛の壽八萬四千歳、百歳の中、聖衆清淨にして、彼の佛は恒に一偈を以て禁戒と爲したまはく、

　[六]忍辱を第一と爲し　佛說は無爲最たり　鬚髮を剃り　他を害するを以て沙門と爲さず

と。是の時彼の佛、此の一偈を以て、百歳の中、禁戒と爲したまひ、已に瑕穢を生ぜしかば、便ち禁戒を立てたまひぬ。

復、三十一劫中に於て佛有り、試詰如來・至眞・等正覺と名け、世に出現したまへり。爾の時亦復、三會の聖衆、初の一會の時は十六萬の聖衆有り、第二會の時は十四萬衆、第三會の時十萬の聖衆なり。彼の佛爾の時八十年中、清淨にして瑕穢無く、亦一偈を說きたまはく、

　若し眼見るも邪に非らず　慧者は護りて著せず　衆惡を棄捐し　世に在りて黠慧爲り

と。爾の時彼の佛の八十年中に、此の一偈を說きたまひ、後に瑕穢有りて、便ち禁戒を立てたまひぬ。

爾の時試詰佛の壽七萬歳なり。彼の劫中に於て、復、佛有りて世間に出現したまひ、名けて毘舍羅婆と曰ひ、亦三會の聖衆、初會の時十萬の聖衆、盡く是れ羅漢なり。第二會の時は八萬の羅漢、第三會の時七萬の羅漢にして、諸漏已に盡きたり。毘舍羅婆如來は七十年中瑕穢無く、爾の時復、一偈半を以て禁戒と爲したまひぬ。

　不害亦不非　大戒を奉行し　食に於て止足を知り　床座も亦復然り　志を執じて專一爲り　是れ則ち諸佛の教へなり

と。七十年中、此の一偈半を以て禁戒と爲し、後に瑕穢有りて更に禁戒を立てたまへり。毘舍羅婆如來は壽七萬歳なりき。此の賢劫の中に於て佛有りて出世し名けて拘樓孫如來と曰ひ。世間に出現したまへり。爾の時二會の聖衆なり。初會の時は七萬の聖衆、皆是れ阿羅漢なり。第二會の時は六萬の阿羅漢なり。彼の佛、爾の時六十年中、瑕穢有ること無かりき。彼の佛、爾の時二偈を以て、

【六】忍辱(Khanti)とは、よく堪え忍ぶこと。

の酬雜果の如くして、異り有ること無けん」と。
是の時阿難、悲泣交集して、並に是の說を作さく、「聖衆今日便ち孤窮爲ん。如來の正法の去ること何ぞ速疾きや、不淨の人の出づること、何ぞ速疾きや」と。是の時大目犍連、便ち是の念を作さく、「此の衆中に何等の毀法の人か、此の衆中に在りて、乃ち如來をして禁戒を說かざら令むるや」と。是の時大目犍連、三昧定に入つて、遍く聖衆の心中の瑕穢を觀じぬ。爾の時目連、馬師・[四]滿宿の二比丘の衆會の中に在るを見、是の時目連、卽ち座從り起ち、彼の比丘の所に至つて、之に告げて曰く、「汝等速に起ちて、此の座中を離れしよ。如來に譏見る。卿等に由るが故に、如來は禁戒を說きたまはざるなり」と。爾の時二比丘、默然として語らず。是の時目連復、再三告げて曰く、「汝等速に起て、此に住まることを須ひざれ」と。是の時彼の比丘、默然として對へず。是の時目連、卽ち前んで手を捉らへ、將ひて門外に至り、還つて門を取りて閉ざし、前んで佛に白して言さく、「不淨の比丘は已に將ひて時に在り、唯、然り、世尊、時に禁戒を說きたまへ」と。佛、目連に告げたまはく、「止みなん、止みなん、目連、如來は更に比丘の與に說戒せじ。如來の所說の言に二有らず」と。還つて座所に至りたまひぬ。

是の時目連、復、佛に白して言さく、「今此の衆中已に瑕穢を生ぜり。我[五]維那法を行ずるに堪任せず。唯、願くは世尊、更に餘人を差びたまへ」と。爾の時世尊、默然として之を可したまひぬ。是の時目連、頭面に世尊の足を禮し、還つて本座に就きぬ。

是の時阿難、世尊に白して言さく、「毘婆尸如來の世に出現したまひし時、聖衆の多少、幾時を經と爲し、乃ち瑕穢を生ぜしや。乃至迦葉如來の弟子の多少、云何が說戒したまひしや」と。佛、阿難に告げたまはく、「九十一劫に佛有りて出世し、毘婆尸如來・至眞・等正覺と名け、世間に出現したまへり。爾の時三會の聖衆、初めの一會の時の比丘、百千六萬八千の聖衆有り、第二會の時、十六



【四】滿宿、前卷索引滿願子に同じ。

【五】維那法、維那(Karma-dāna 梵)とは、寺中の事務を司る役名、維那法はこゝに衆の統別をいふ。

と無し。若し衆生有りて、邪見を行ぜば、三惡道を種え、若し人中に生るれば、乃ち邊地に在りて中國に生れず、三尊道法の義を覩ず、或は復、聾盲瘖瘂にして、身形正ならず、善法惡法の趣きを解せざらん。然る所以は、皆前世に信根無きに由るが故に、亦沙門・婆羅門・父母兄弟を信ぜざらん。比丘之を知れ。此の十惡之報ひに由つて、此の殃罟を致すなり。是の故に比丘、當に十惡を離れて正見を修行すべし。是の如く比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

二

[二]聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、十五日[三]說戒の時、諸比丘を將ひて前後に圍遶せられ、普會講堂に往詣したまひぬ。爾の時世尊、默然として觀察したまひ、諸の聖衆、寂寞として語らざりき。是の時阿難、佛に白して言さく、「今日聖衆盡く講堂に集れり。唯、然り世尊、當に諸比丘の與に禁戒を說きたまふべし」と。

爾の時世尊、亦復、默然として語りたまはず。是の時阿難、須臾にして復、佛に白して言さく、「今正に是れ時なり、宜しく禁戒を說きたまふべし。初夜盡きんと欲す」と。爾の時世尊、復、默して語りたまはず。爾の時阿難、須臾にして復、佛に白して言さく、「中夜竟らんと欲し、衆僧勞頓せり。唯、願くは世尊、時を以て說戒したまへ」と。爾の時世尊、復、默然として語りたまはず。是の時阿難、須臾にして復佛に白して言さく、「後夜盡きんと欲す、唯、願くは世尊、時を以て說戒したまへ」と。佛阿難に告げたまはく、「衆中の不淨なる者の故に說戒せざるなり。今上座に聽して禁戒を說か使めん。若し僧の上座にして、說戒するに堪任せずば、持律に聽して禁戒を說か(使めん)。若し持律の者無くば、其れ能く戒を誦する通利の者、當に之を唱へて說々せ使むべし。今自り以後、如來は更に說戒せじ。衆中の不淨に、如來中に於て說戒せば、彼の人の頭破れて七分爲んこと、彼

【二】前半は A. XIII. 20.後半は Dhp. A. III. p. 236.

【三】說戒(Uposatha)とは、律の作法にして、月に二回卽ち八日と十五日(又は十四日)に、大衆を集めて、律の箇條をあげし波羅提木叉を誦し、大衆の中にその箇條の一に觸れしや否やを訊し、若しあらばその罪を懺悔する、教團の內省の日なり。此の日在家の信者は八戒を守り、精舍に詣りて法を聽けり。音譯して布薩といふ。

# 卷の第四十四

## 十不善品第四十八

一

「聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「其れ衆生有りて、殺生を修行し、廣く殺生を布けば、地獄の罪、餓鬼・畜生の行を種えん。若し人中に生ずれば、壽命極めて短からん。然る所以は、他の命を害するに由ればなり。若し衆生有りて、他物を盜まば、三惡道の罪を種えん。若し人中に生ぜば、恒に貧匱に遭ひ、食は口を充さず、衣は形を蓋はず、皆盜むに由るが故なり。物を劫奪せば、即ち他の命根を斷たん。若し衆生有りて、貪泆を好貴せば、三惡道を種えん。若し人中に生ずれば、門貞良ならず、竊盜淫泆ならん。若し衆生有りて妄語せば、地獄の罪を種ゑ、若し人中に生るれば、人の爲に輕んぜ所れ、言信受せず、人の爲に賤しめ所れん。然る所以は、皆前世の妄語に由るの致す所なり。若し衆生有りて、兩舌せば三惡道の罪を種え、設し人中に生るれば、心恒に定まらず、常に愁憂ひを懷かん。然る所以は、彼の人に由つて、兩頭虛言を傳ふるが故に。若し衆生有りて麁言せば、三惡道の罪を種え、若し人中に生るれば、人の爲に醜弊常に喜罵して呼ばれん。然る所以は、彼の人言辜正ならざるに由るの致す所なり。若し衆生有りて、彼此を鬪亂せば、三惡道の罪を種え、設し人中に生るれば、諸の怨憎多く、親々離散せん。然る所以は、皆前世の鬪亂に由るの致す所なり。若し衆生有りて嫉妬せば、三惡道を種え、若し人中に生るれば、諸の衣裳乏しからん。然る所以は、彼の人貪嫉を起すに由るが故に、若し衆生有りて害意を起さば、三惡道を種え、設し人中に生るれば、恒に虛妄多く、至理を解せず、心亂れて定まらざらん。然る所以は、皆前世の恚怒に由るの致す所にして、慈仁有るこ

【一】「雜阿含經」第一〇四八經(卷三七)。

〔一五〕經に百歳と言ふは、當に三百の冬・夏・秋を經べし。謂く冬・夏・秋各々一百なるが故に三百と言ひて、春を言はざるは、此れ西域の三時に順ふなり。三時と言ふは、寒・熱・雨の三なり。冬と言ふは卽ち彼の寒時、夏は卽ち彼の熱時、秋は卽ち彼の雨時なり。然して彼の三時は各四月にして、一年を計せば十二月有り。今冬・夏・秋を以て彼の三時に擬す、月數少きは蓋し譯者は方言に善からざるなり。

【一五】此の記は宋・元・明藏に依りて載せしもの。

一たび擊ちて、時に失は令むること無かれ』と。王の教誡を受け、百歲に一たび擊ちぬ。時に諸の人民、此の鼓の音を聞きて怪しみ『未だ曾て有らず』と、諸人に語げて曰く、『何者の音響ぞや、是れ誰の聲爲るや、乃ち斯に徹す』と。王之に告げて曰く、『此れは是れ死人の皮の響きなり』と。衆生聞き已つて各念を興して曰く、『奇なる哉、乃ち此の聲を聞く』と。汝等比丘、爾の時の王とは豈異人ならん乎。是の觀を作すこと莫かれ。然る所以は、爾の時の王とは卽ち我身是れなり。此れを以て之を知るも昔日閻浮地の壽命は極めて長く、如今閻浮地の人民は極めて短命爲り。滅する者限り難し。然る所以は、殺害多きに由るが故に、命極めて短かく、華色を失ふことを致す乎。此の因緣に由るが故に變怪を致す。比丘、當に知るべし。閻浮地の五十歲は、四天王中の一日一夜なり。彼の日夜の數を計するに、三十日を一月と爲し、十二月を一歲と爲して、四天王の壽命五百歲なり。或は復中夭の者有り。人中の壽十八億歲を計するに、還活地獄の一日一夜なり。彼の一日一夜の數を計して、三十日を一月と爲し、十二月を一歲と爲して、還活地獄の極壽は千歲なり。復、中夭の者有り。人中の壽三十六億歲を計す。人中の百歲を計するに、三十三天の一日一夜なり。彼の日月年歲の數を計するに、三十三天の壽は千歲なり。其の間に或は中夭の者有り。人中の壽三十六億歲を計するに、阿鼻地獄の中の一日一夜なり。復、彼の日月の數を計するに、三十日を一月と爲し、十二月を一歲と爲し、彼の日夜之數壽二萬歲を計す。人中の壽を計するに壽一[二]拘利なり。是の如く比丘、此の壽を計するに、轉々增倍す。[三]無想天を除く。無想天の壽八萬四千劫にして、[四]淨居天を除き、此の世に來らず。是の故に比丘、放逸を懷くこと勿れ。現身の上に於て有漏を盡くすことを得、是の如く比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

# 增壹阿含經卷第四十三



【二】拘利(Koṭi)とは、又俱胝とも音譯し、數の名、千萬をいふ。
【三】無想天(Asaññiāyatana)とは、色界第四禪天の第四、この天界に生るれば、一生の間想ひ生ぜざるが故にこの名あり。
【四】淨居天とは、色界第四禪の無煩天・無熱天・善現天・善見天・色究竟天の五をいひ、これらの五天にありては離欲の聖者のみ住つて凡夫雜はらざるが故に此の名あり。又淨居地ともいふ。

め、又食を持して與へぬ。然るに彼の子飮まず、食せず、亦坐を起たず。何を以ての故に爾るや。命終を以ての故なり。是の時彼の父母便ち此の念を生ずらく『我子は今日何をか瞋恚を爲して肯て食飮せず、亦言語せざるや』と。然る所以は、彼の人民、死亡者の音響の致す所を聞かざるに由つてなり。

爾の時彼の父母、便ち復念じて曰く『我子は今已に七日を經るも、飮まず、食はず、亦復、何に由つての默然たるかを知らず。『我今此の因緣を以て、往いて療病大王に白して知ら使む可し』と。是の時父母、王の所に往至し、此の因緣を以て具に大王に白せり。是の時大王、便ち是の念を作さく『今日已に死亡の音響を聞けり。』と、王之に告げて曰く『汝等此の小兒を持して、吾所に到る可し』と。爾の時父母即ち小兒を抱き、國王の所に至る。王見已つて父母に告げて曰く『此の兒は已に命終せり』と。時に父母、王に白して言く『云何が名けて命終と爲すや』と。王告げて曰く『此の兒は更に起ちて行き、言對、談說、飮食、戲樂せず、身體正直にして、復、爲す所無きが故に、名けて命終と爲すなり』と。是の時夫婦復王に白して言く『此の如きの變は當に幾時を經べきや』と。王之に告げて曰く『此の兒は久しからずして身體爛壞し、膖脹臭處にして、復、任ずる所無し』と。爾の時父母、王の語を信ぜず、復、死兒を抱きて還えり、家の中に至り未だ幾時を經ざるに、身體盡く壞れ、極めて臭穢爲り。是の時父母、方に王の語を信じて云く『此の兒は久しからずして、身體膖脹して、盡く當に壞敗すべし』と。

是の時夫婦復、此の膖脹せし小兒を抱き、國王の所に至り、王に白して言く『唯、然り大王、今此の兒を持して大王に奉貢せん』と。時に父母も亦啼哭せざりき。然る所以は、死亡の音を聞かざるに由るが故に、是の時大王、其の皮を剝取して大鼓と作し、復、勅して七重の樓閣を作り、此の鼓を持して其の上に安處し、即ち一人に勅すらく『汝當に之を知るべし、此の鼓を守護せ令め、百歲に

「地獄の衆生は其の罪報を受くるの極は一劫に至り、或は其の中間の夭者有り。畜生の罪報を受くるの極は一劫に至り、其の間に中夭の者有り。餓鬼の報ひを受くるの極は一劫に至り、其の間に中夭の者有り、比丘、當に知るべし。欝單曰の人壽は、千歳にして、中夭の者有ること無し。然る所以は、彼の土の人民、係屬する所無く、設し彼に於て命終せば、善處天上に生じ、墮落者有ること無ければなり。弗于逮の人民の壽は五百歳にして、亦中夭の者有り、瞿耶尼の人民の壽は二百五十歳にして、亦中夭の者有り、閻浮提の人民は極壽百歳にして、亦中夭の者有ること多し。正使人の壽命の極十十に至るも、人民の兆、壽十十を以て其の行同じからず、性分各異るなり。初め十の幼小は識知する所無く、第二十は少多知ること有るも、猶貫了せず。第三十は欲意熾盛にして色に貪著し、第四十は諸の伎術多く、所行に端無し。第五十は義を解すること明了にして、習ふ所を忘れず、第六十は財物に慳著し、意決了せず、第七十は懈怠にして眠りを喜び、體性遲緩し、第八十は少壯の心有ること無く、亦榮飾無し。第九十は諸の病痛多く、皮緩み、面皺み、第十十は諸根衰耗し、骨節相連り、多く忘れ、意錯る。比丘之を知れ、設し人壽百歳なれば、當に爾許の難を經歴せん。設し人壽百歳なれば、當に三百の冬夏春秋を經べく、其の壽命を計するも、蓋し言ふに足らず。若し人壽百歳ならば、當に三萬六千食を食すべし。其の間或は食せざる時有り、瞋りて食せず、與へずして食せず、病に食せず。彼の食すると食せざるとを計し、及び母乳を飲む。要を取りて之を言はゞ、三萬六千食なり。比丘、若し人壽百歳は其の限歳の數にして、飲食之法其の狀是の如し。

　比丘當に知るべし。閻浮地の人民、或は壽極めて長きは無量壽と等し。過去久遠不可計の世に王有り、療衆病と名け、壽命極めて長く、顏色端正にして樂を受くること無量なり。爾の時疾病・老・死の患ひ無し。時に夫婦二人有りて一子を生み、子便ち命終せり。是の時父母抱き擧げて坐せ令

諸天の說く所　此れは是れ歎譽の言にして　還つて自ら羇難に著するなり　梵天人民を生じ
地主は世間を造る　或は言く餘者造ると　此の語は誰か審なりや　恚欲に惑はさ所　三事共
に合集す　心自在を得ずして　自ら稱して我世勝ると　天神世間を造る　亦梵天の生ぜしに非
らずと　設し復、梵天造らば　此れ虛妄に非らず耶　跡を尋ねて遂に復多し　審諦方に言ふ虛
なりと　其の行各々異れば　此の行審實ならず。

均頭、當に知るべし。衆生の類、所見不同にして、其の念各異れり。此の諸見は皆是れ無常なり。其れ此の見を懷抱くこと有らば、則ち是れ無常變易の法なり。『若し他人殺生するも、我等は當に殺生を離るべし。設し他盜むも當に之を遠離すべし。其の行を習はず、其の心意を專らにして錯亂せ使めず、思惟挍計して、邪見の興る所、乃至十惡の法皆當に去離して、其の行を習はざるべし。若し他瞋恚するも、我等忍辱を學び、他人嫉妬を懷くも、我當に捨離すべし。他憍慢を興すも、我念じて捨離し、若し他自ら稱へて餘人を毀るも、我等自ら稱へず、他人を毀らず、他人少欲ならざるも、我等は當に少欲を學ぶべし。他人戒を犯すも、我其の戒を修め、他人懈怠有るも、我當に精進すべし。他人三昧を行ぜざるも、我三昧を行ぜん』と、當に是の學を作すべし。『他人愚惑なるも、我智慧を行ぜん』と。其れ能く觀察して其の法を分別せば、邪見消滅して餘者を生ぜじ』と。是の時均頭、如來の敎へを受け已つて、閑靜之處に在りて思惟し、挍計し、族姓子の出家學道する所以の三法衣を著け、無上の梵行を修め、生死已に盡き、梵行已に立ち、所造已に辦じて、更に復、有を受けず、實の如くに之を知りぬ。是の時均頭、便ち阿羅漢を成じぬ。爾の時均頭、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

十

聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、

犯すも、我梵行を行じ、他妄語するも、我妄語を行ぜず、他兩舌・鬪亂彼此・綺語・惡口・嫉妬・恚・邪見を行ずるも、我正見を行ぜん』と、均頭當に知るべし。如し惡道に從つて正道に値ふことを得、如し邪見に從つて正見に至ることを得、邪を廻して正に就くこと、猶し人有りて、自己沒溺して復人を渡さんと欲するも、総に此の理無きが如し。已れ未だ滅度せずして、他人をして滅度せ使めんと欲すること、此の事然らず、如し、人有りて自ら沒溺せずして、便ち能く人を渡すこと、此の理有る可し。今も亦是の如し。自ら般涅槃して、復、他人をして滅度を取ら使むること、此の理有る可し。是の故に均頭、當に念じて殺を離れ、殺さずして滅度し、盜を離れ、盜まずして滅度し、淫を離れ淫せずして滅度し、妄語を離れ、妄語せずして滅度し、綺語を離れ、綺語せずして滅度し、麁言を離れ、麁言せずして滅度し、鬪亂彼此を離れ、鬪亂彼此せずして滅度し、嫉妬を離れ、嫉妬せずして滅度し、恚りを離れ、恚らずして滅度し、邪見を離れ、正見を得て滅度すべし。

均頭當に知るべし。若し凡夫の人、便ち此の念を生ぜん、『我有りと爲す耶、我無しと爲す耶、我有りて我無き耶、世は有常なる耶、世は無常なる耶、世は、[一〇]有邊なる耶、世は無邊なる耶、命は是れ身なる耶、[一一]命異身異と爲す耶、如來は死する耶、如來は死せざる耶、死有りと爲す耶、死無しと爲す耶、誰か此の世を造りしと爲す耶』と、諸の邪見を生じ、『是れ梵天此の世を造ると爲すや、是れ地主此の世を施設すと爲すや、又梵天此の衆生を造り、地主此の世間を造りしや、衆生は本無くして今有り、已に有りて便ち滅するや』と。凡夫の人は聞無く、見無くして、便ち此の念を生ぜん」と。

爾の時世尊、便ち此の偈を説きたまはく、

自然に梵天有りと　此れは是れ梵志の語なり　此の見は眞正ならず　彼の所見の如し　我主は
蓮華を生じ　梵天中に於て出づ　地主梵天を生ずと　自ら生ずるに相應せず　地主は刹利種と
梵志の父母なりと　云何が刹利の子　梵志と還つて相生ずるや　其の所生の處を尋ぬるに



【一〇】有邊無邊とは、有限無限の意。
【一一】命異身異とは、靈魂と身體との同異のこと。

平等施に非らざるなり。若し復人有りて、彼の人の物を奪ひ、持して聖衆に施し、若しは復、人有りて、還つて聖衆より奪ひ、持し用つて人に與ふるは、此れ平等の施を爲すに非らず、亦清淨の施に非らざるなり。轉輪聖王は自ら境界に於て猶自在を得たり。比丘は己の衣鉢に於て亦自在を得たり。若し復、彼の人、口に許すを見ずして、他人の物を取りて人に與ふれば、此れ平等の施に非らざるなり。我今諸比丘に告ぐ、施主は與ふるを見、受主與ふる者を見ずば、此れ平等の施に非らざるなり。若し復、彼の比丘命終に會遇はゞ、當に此の一房を持して、衆中に在りて、結羯磨し、傳告唱令すべし。『某甲の比丘命終せり、今此の房を持して衆分處に在り、何人を安處せんと欲するや。聖衆の敎へに隨はん。諸賢、任ずるに某甲の比丘をして住せ使めば、各共に之を忍ばん』と、若し聽さゞれば、今便ち說くこと再三、亦當に是れを作して之を說くべし。若し衆僧の一人にして、聽さずして與ふれば、則ち平等の施に非らず、則ち雜濁の物と爲すなり。今還つて羅云に房を與へん。清淨に之を受けよ」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

九

聞くこと是の如し。一時佛、羅閱城迦蘭陀竹園所に在し、大比丘衆五百人と倶なりき。時に尊者大均頭、靜寂の處に在りて此の念想を興しぬ。「諸の前後中央の見、云何が知ることを得るや」と。爾の時大均頭、時到つて衣を著け、鉢を持して世尊の所に到り、頭面に足を禮し、一面に在りて坐す。爾の時均頭、世尊に白して言さく、「今此の諸見前後相應せり、云何が此の見を滅することを得るや、又餘者をして生ぜざら使むるや」と。世尊告げて曰はく、「是に於て均頭、此の見の出づる所と所滅之處とは、皆是れ無常にして苦、空なり。均頭之を知りて當に此の意を建つべし。夫れ見の法は六十二種（あり）、要らず當に十善の地に住して、此の見を除去すべし、云何が十と爲すや、是に於て均頭、『他殺生を好むとも、我等は當に殺す應からず、他盜みを好むも我盜まず、他梵行を

【八】結羯磨、羯磨（Kamma）とは所作、作法などと譯す。受戒又は懺悔、その他敎團に協讃を求める時に行ふ作法を云ふ。

【九】六十二種とは、六十二見のこと。釋尊時代に於ける諸種の主張を六十二に分類せしもの。六十二種とは、過去に關するものに常住論に四、半常半無常論に四、世界の有限無限論に四、異問異答論に四、無因論に二の計十八見、未來に關する諸論に、死後有識論に十六、死後無識論に八、死後非有識非無識論に八、斷滅論に七、現在生涅槃論に五の計四十四。合して六十二をいふ。その一々の內容は「長阿含經」第二一經「梵動經」をみよ。

是の時尊者羅云、便ち是の念を作さく、「我世尊を離るゝこと積久なり。今往いて問訊す可し」と。是の時尊者羅云、即ち世尊の所に往至し、頭面に足を禮し、一面に在りて坐す。須臾の間に即ち座從り起ち、還つて房中に詣るに、異比丘有り、屋中に在りて住するを見、見已つて彼の比丘に語げて曰く、「誰か我房を持するや、卿の與に任せ使むるや」と。比丘報へて曰く、「衆僧差次して、我をして此の房中に住せ令めたり」と。

是の時羅云、還つて世尊の所に至り、此の緣本に因つて、具に世尊に白さく、「不審なり、如來、衆僧我房を差次し、道人をして此に在りて止住せ使むる耶」と。佛、羅云に告げたまはく、「汝長者の家に往至し、長者に語げて曰へ、『我所行の法に、身・口・意行に過有りて有ること無き乎。又身三・口四・意三の過非らず乎。長者先きに房を持して我に施し、後復、持して聖衆に與へり』」と。是の時羅云、佛の教へを受け已つて、即ち長者の家に往き、長者に語げて曰く、「我身三・口四・意三の過有るに非らず乎」と[七]。長者、報へて曰く、「我亦羅云に身・口・意の過を見ず」と。羅云、長者に語げて曰く、「何故に我房舍を奪ひ、持して聖衆に與へしや」と。長者報へて曰く、「我房の空なるを見たり。是の故に持して聖衆に施せり。時に我復、是の念を作しぬ。『尊者羅云は必ず我房中を樂しまざるなり』と、故に持して惠施せし耳」と。是の時羅云、長者の語を聞き已つて、即ち還つて世尊の所に至り、此の因緣を以て、具さに如來に白せり。是の時世尊、即ち阿難に告げたまはく、「速に揵椎を打ちて、諸有の比丘の祇洹精舍に在る者を、盡く普會講堂に集めよ」と。

時に阿難、即ち佛の教へを受け、諸比丘を召して普會講堂に在り。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「我今當に惠施清淨を說くべし。汝等善く之を思念せよ」と。爾の時諸比丘、佛に從つて教へを受く。世尊告げて曰はく、「彼云何が名けて惠施清淨と爲すや」と。是に於て比丘、若し人有りて物を以て惠施し、後復、還つて奪ひ更に餘人に與ふれば、此れを名けて施均整ならずと爲し、

【七】身三・口四・意三とは、十不善をいふ。身三とは、身に行ふ殺生・偷盜・邪淫の三惡をいひ、口四とは、口に行ふ妄語・綺語・惡口・兩舌の四惡をいひ、意三とは、意についての貪欲・瞋恚・邪見の三惡をいふ。

想を除去して愁憂有ること無し。是の如く比丘、能く自ら其の行を熾然して、法樂を興隆し、自ら最尊に歸せよ。諸有の將來、現在の比丘は、能く自ら熾然して行の本を失はずば、便ち、我所生を爲さん。是の故に比丘、若し所論有らんと欲せば、當に十事を論ずべし。云何が十と爲すや、所謂精勤の比丘、少欲知足にして勇猛心有り、多聞にして能く人の與に法を說き、畏れ無く、恐るゝこと無く、戒律具足し、三昧成就し、智慧成就し、解脫成就し、解脫見慧成就す。汝等設し論ぜんと欲せば、當に此の十事を論ずべし。然る所以は、一切に潤及して、饒益する所多く、梵行を修して、滅盡之處・無爲涅槃界に至ることを得ればなり。此の論は沙門の義なり、當に念じて思惟し、心を去離すること勿るべし。是の如く比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

## 八

聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時舍衞城中に一長者有り、羅云の與に坐禪の屋を作る、爾の時羅云、中に在りて坐禪し、其の日數に隨つて彼の屋中に止まり、後便ち人間に遊化す。時に彼の長者竊に此の心を生ず。我當に往いて尊者羅云を覲るべし」と。爾の時長者、羅云の房中を見るに、寂寞として人の住するを見ず。見已つて諸比丘に語げて曰く、「尊者羅云は今所在爲るや」と。比丘報へて曰く、「羅云は人間に在りて遊化す」と。長者報へて曰く、「唯、願くは諸賢、人を差次して吾房中に在りて住せよ。世尊も亦說きたまへり、『園果を造立し、及び橋船を作り、道の近くに圊廁を作り、持用して惠施せば、長夜に其の福を獲、戒法成就して、死せば必ず天上に生ぜん』と。是れを以ての故に、我羅云の與に屋を作りし耳。今羅云は我房を樂します。唯、願くは諸賢、人を差次して我房中に住せよ」と。諸比丘對へて曰く、「長者の敎への如し」と。爾の時諸比丘、卽ち一比丘を差次して房中に住す。

の土に止まること勿る應し。然る所以は、王の非行を行ずる時、王の大臣も亦非法を行ず。大臣已に非法を行ぜば、左右の吏佐亦非法を行ず。吏佐已に非法を行ぜば、諸の庶人の類も亦非法を行ず。我今宜しく遠國に在りて乞求し、此の邦に止まらざるべし。又彼の風俗の化を觀ず可し。已に風俗の化を見れば、則ち殊異之處を見るなり」と。

爾の時世尊、天耳を以て諸比丘の各此の論を興すと聽聞き、即ち諸比丘の所に往至し、中央に在りて坐したまへり。爾の時、佛、諸比丘に告げたまはく、「汝等此に集りて、何の論說を爲すや」と。衆多の比丘、世尊に白して言さく、「我等此に在りて波斯匿王を論ぜり。『王非法を行じ、聖律の敎へを犯し、十二年中比丘尼を閉藏し、深宮の內に在りて、接待するに色を以てし、又彼の得道の人の行三界を過ぐるに、然るに王亦佛法及び衆僧に事へず、篤信の心の阿羅漢に向ふ無く、已に此の心無ければ、則ち此の心三尊に於て無し。我等宜しく遠く遊ぶべし。此に住まることを須ひず。然る所以は、王の非法を行ずる時は、臣佐の人民も亦復、惡を行ず。又世間の風化の法を觀ずればなり』と。爾の時世尊、告げて曰はく、「汝等國界の事を論ずること勿れ、當に自ら己を剋して思惟し、內省し、挍計分別すべし。此の論を言ふ者至理に合はず。亦復、人をして梵行を修め、滅盡無爲涅槃之處を得令めず。當に自ら己れを修め、法行を熾然して、自ら最尊に歸すべし。若し比丘にして、能く自ら己を修めて、法樂を興隆する者は、此の人の類は便ち我躬自ら所生を爲さん。

云何が比丘、能く自ら熾然して、法樂を興隆し、虛妄有ること無く、自ら最尊に歸するや。是に於て比丘、內に自ら身を觀じ、身意を止め、自ら其の心を攝し、亂想を除去して、憂愁有ること無く、外に自ら身を觀じ、身意を止め、自ら其の意を攝し、亂想を除去して愁憂有ること無く、又復、內外に身を觀じ、身意を止め、內に痛を觀じ、外に痛を觀じ、內外に痛を觀じ、內に心を觀じ、外に心を觀じ、內外に心を觀じ、內に法を觀じ、外に法を觀じ、法意を止め、自ら其の心を攝し、亂

彼に在りて乞食す宜からず』と。復、比丘有りて說いて曰く、『我等は拘睒・婆羅㮈城・優塡王所治の處に在る宜し。篤く佛法を信じ、意移動せず、宜しく彼に在りて乞食すべし。所願違ふこと無けん』と。此に在りて論ずる所は、正しく此れを謂ふ耳」と。

爾の時佛、諸比丘に告げたまはく、「汝等王治の國家界を稱譏すること莫かれ。亦王に勝劣有るを論ずること莫かれ」と。爾の時世尊、便ち此の偈を說きたまはく、

夫れ人の善惡を作さば　行本所因有り　彼々其の報ひを獲て　終に毀敗有らじ　夫れ人善惡を作さば　行本所因有り　善を爲さば善報を受け　惡には惡果報を受けん

是の故に比丘、斯の意を興して國事の緣を論ずること勿れ。此の論に由つて、滅盡涅槃の處に至ることを得ず。亦沙門正行の法を得ざるなり。設し是の論を作さんと欲せば、是れ正業に非らず。汝等當に十事の善論を學ぶ應し。云何が十と爲すや。若し精勤の比丘にして、少欲知足にして勇猛心有り、多聞にして能く人の與に法を說き、畏れ無く、恐るゝこと無く、戒律具足し、三昧成就し、智慧成就し、解脫成就し、解脫見慧成就す。汝設し論ぜんと欲せば、當に此の十事を論ずべし。然る所以は、普く一切を潤し、梵行を修することを得、滅盡涅槃の處に至ることを得ればなり。汝等已に出家學道して、世俗を離るれば、當に勤めて思惟して、心を去離すること勿るべし。是の如く比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

七

[六]聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時衆多の比丘、普會講堂に集まり、各此の論を興しぬ。今波斯匿王は主として非法を行じ、聖律の教へを犯し、比丘尼の阿羅漢道を得しを譏つて、十二年中宮內に閉在して、與共に交通し、又佛・法・比丘僧に事へず、篤信の心を阿羅漢に向くることと無く、則ち佛・法・聖衆を信心すること無ければ、我等は宜しく遠く離れて、此

【六】 Dhp. A. I. p. 337f.

各共に摩竭國に詣り、彼に於て乞求せば、又且つ穀米豐賤にして、飲食極めて饒からん」と。更に復比丘有りて說いて曰く、「我等彼の國に在りて乞食す宜からず。然る所以は、阿闍世王彼に在りて治化し、主として非法を行じ、又父王を殺し、提婆達兜と友と爲れり。此の因緣を以ての故に、彼に在りて乞求す宜からず」と。

復、比丘有りて說いて曰く、「今此の[五]拘留沙の國土は、人民熾盛にして饒財多寶なり。彼の土に在りて乞求す宜し」と。復、比丘有りて是の說を作さく、「我等は彼の土に在りて乞食す宜からず。然る所以は惡生王彼の土に於て治化し、極めて兇弊爲り、慈仁有ること無く、人民麁暴にして、鬪訟を好喜す。此の因緣を以ての故に、彼に在りて乞食す應からず」と。復、比丘有りて說いて曰く、「我等宜しく拘睒・婆羅㮈城・優塡王所治の處に在るべし。篤く佛法を信じて意移動せず。我等は宜しく彼の土に在りて乞食すべし。所願違ふこと無けん」と。

爾の時世尊、天耳を以て、諸比丘の各此の論を生ずるを聞き、即ち衣服を嚴整して、諸比丘の所に至り、中央に在りて諸比丘に問ひて曰はく、「汝等此に集りて何等を論ぜんと欲するや、何事を說くと爲すや」と。是の時諸比丘、佛に白して言さく、「我等此に集まりて、各此の論を興せり『今舍衞城は穀米勇貴にして、乞求するも得叵ければ、各當に共に摩竭國界に詣りて、彼に於て乞求すべし。又彼の國土は饒財多寶にして索むる所得易し』と。其の中に或は比丘有りて說いて曰く、『我等は彼國に乞食す宜からず。然る所以は、阿闍世王、彼に在りて治化し、主として非法を行じ、又父王を殺し、提婆達兜と友爲り。此の因緣を以ての故に、彼に在りて乞求す宜からず』と。其の中に復比丘有り、說いて曰く、『今拘留沙國は人民熾盛にして饒財多寶なり。宜しく彼の國に在りて乞食す宜し』と。復比丘有りて是の說を作さく、『我等は彼に在りて乞食す宜からず。然る所以は、惡生王彼に於て治化し、人と爲り兇惡にして慈仁有ること無く、鬪訟を好喜す。此の因緣を以ての故に、



【五】拘留沙、前卷索引拘留を見よ。

し、共に衣を差ち、一人次第に乞食し、時に隨うて好色の妙服、及び衣被・飲食・床臥の具・病瘦の醫藥を見ることを得んと欲す。我等の論ずる所は、正しく此れを論ずる耳」と。佛、比丘に告げたまはく、「若し乞求の比丘にして、四事の供養、衣被・飲食・床臥の具・病瘦の醫藥、復、色・聲・香・味・細滑の法を見んことを用ふる乎。我恒に敎勅すらく、『乞食して求むに二事有りて、親しむ可し、親しむ可からず。設し衣被・飲食・床臥の具・病瘦の醫藥を得るも、惡法を增益し、善法有ること無くば、此れ親しむ可からず。若し衣被・飲食・床臥の具・病瘦の醫藥を乞求し、善法を增益し、惡法を增さずば、此れ便ち親しむ可し。汝等比丘、此の法の中に於て、何等の論を作さんと欲するや。汝等の論ずる所は正法の論に非らず、當に此の法を捨つべし。更に思惟すること莫かれ。此れに由つて休息滅盡涅槃の處に至ることを得ざるなり。設し論ぜんと欲せば、當に此の十法を論ずべし。云何が十と爲すや、若し精勤の比丘にして、少欲知足にして勇猛の心有り、多聞にして能く人の與に法を說き、畏れ無く、恐るゝこと無く、戒律具足し、三昧成就し、智慧成就し、解脫成就し、解脫見慧成就す。汝等設し論ぜんと欲せば、當に此の十事を論ずべし。然る所以は一切に潤及し、饒益する所多く、梵行を修することを得、滅盡の處無爲涅槃界に至ることを得ればなり。此の論は沙門の義なり。當に念じて思惟し、心を去離すること勿るべし。是の如く比丘、當に是の學を作すべし」と。

爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

六

聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時衆多の比丘、各普會講堂に集まりて、是の異論を作さく、「今舍衞城は乞食するも得がたし。比丘の所安の處に非らず。我等一人次第に乞食して立つ可し。此の乞比丘は能く衣被・飲食・床臥の具・病瘦の醫藥を辦じ、乏短する所無けん」と。爾の時衆中に一比丘有りて、諸人に白して曰く、「我等此に在りて乞求するに堪任せず。

共に此の不要の事を論ぜり」と。是の時佛、諸比丘に告げて曰はく、「止みなん、止みなん、比丘、此の論を作すこと勿れ、然る所以は、此の論は義に非らず、亦善法の趣無し。此の論に由つて梵行を修むることを得ず、滅盡涅槃の處を得ることを得ず、沙門の平等の道を得ず。此れ皆俗論にして正趣の論に非らず。汝等已に俗を離れて道を修む。敗行之論を思惟す應からず。汝等設し論ぜんと欲せば、當に十事の功徳の論を論ずべし。云何が十と爲すや、若し精勤の比丘にして、少欲知足にして勇猛心有り、多聞にして能く人の與に法を説き、畏れ無く、恐れ無く、戒律具足し、三昧成就し、智慧成就し、解脱成就し、解脱見慧成就せん。汝等設し論ぜんと欲せば、當に此の十事を論ずべし。然る所以は、一切に潤ひ及び、饒益する所多く、梵行を修することを得、滅盡無爲之處に至ることを得る涅槃の要なればなり。汝今族姓子、已に出家學道したれば、當に此の十事を思惟す應し。此の論とは正法之論にして惡趣を去離す。是の如く比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所説を聞いて歡喜奉行しぬ。

## 五

聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時衆多の比丘、皆普會講堂に集まり、各此の論を生ず。「今舍衞城の穀米は勇貴[四]にして乞求するも果し難し。世尊は又說きたまへり『飲食に依りて人身は存することを得、四大は心の所念の法に依倚し、法は善趣之本に依るなり』と、我等は今日便ち當に次を差ち、人々乞求すべし。乞求の人をして、好妙の色を見ることを得ば、極妙の更樂を得、衣裳・飲食・床臥の具・病瘦の醫藥を得使めん、亦善からず耶」と。

爾の時世尊、清淨にして瑕穢無き天耳を以て、遙に諸比丘の各此の論を生ずるを聞きたまひぬ。爾の時世尊、卽ち普會講堂の所に往至し、衆中に在りて坐し、諸比丘に告げたまはく、「汝等此に集まりて、何の論義を爲すや」と。比丘對へて曰さく、「我等の論ずる所は、今舍衞城に乞求するも得難



【四】勇貴とは、凶作の意。

きに來りて言ふが如く、我に幻法有りて、能く世人を迴轉す」と。王、佛に白して言さく、「何者か名けて迴轉幻法と爲すや」。佛、王に告げて曰はく、「其れ殺生の者は其の罪量り難く、其れ不殺の者は福を受くること無量なり。其れ不與取の者は罪を獲ること無量にして、其れ不盜の者は福を獲ること無量なり。夫れ淫泆の者は罪を受くること無量にして、其の不淫の者は福を受くること無量なり。其れ邪見の者は罪を受くること無量にして、其れ正見の者は福を獲ること無量なり。我の解る所の幻法とは正しく此れを謂ふ耳」と。

是の時波斯匿王、世尊に白して言さく、「若し當に世間の人民・魔、若しは魔天有形の類にして、深く此の幻術を解せば、則ち大幸を獲べし。今自り以後、復、外道異學の我國界に入るを聽さじ、四部の衆の恒に我宮に在るを聽し、常に當に供養して其の所須に隨ふべし」と。佛、大王に告げたまはく、「是の語を作すこと勿れ、然る所以は、畜生の類に施すも猶其の福を獲、及び犯戒之人に施すも亦其の福を獲、持戒之人に施すの福も亦量り難し、外仙道の人に施さば一億の福を獲、須陀洹・斯陀含・阿那含・阿羅漢・辟支佛及び佛に施さば、其の福量る可からず。是の故に大王、當に發意を興して當來過去の諸佛の聲聞の弟子に供給すべし。是の如く大王、當に是の學を作すべし」と。爾の時波斯匿王、佛の所説を聞いて歡喜奉行しぬ。

## 四

[三]聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時衆多の比丘、食後皆普會講堂に集り、咸共に此の義を論説しぬ。所謂論とは、衣裳・服飾・飲食の論・鄰國賊寇戰鬪の論・飲酒淫泆五樂之論・歌舞戲笑妓樂之論、此の如きの非要、稱計す可からず。爾の時世尊、天耳を以て諸比丘の各是の論を作すを聽聞き、即ち普會講堂の所に往至し、諸比丘に問ひたまはく、「汝等此に集りて何をか論説する所（あらん）と欲するや」と。是の時諸比丘、世尊に白して言さく、「我等此に集まりて、

【三】 A. X. 70. Kathāvatthu.

由るが故に、衆生の壽命極めて短く、不與取の報ひに由るが故に衆生生るれば便ち貧賤なり。淫泆の報ひに由るが故に衆生の門は貞良ならず、妄語の報ひに由るが故に衆生の口氣醜弊にして、不鮮潔を致し、綺語の報ひに由るが故に土地の平整ならざることを致し、兩舌の報ひに由るが故に土地に荊棘を生じ、惡口の報ひに由るが故に語に若干種有り、嫉妬に由るが故に以て穀豐熟ならざることを致し、恚害の報ひに由るが故に諸の穢惡之物多く、邪見の報ひに由るが故に自然に八大地獄を生ず。此の十惡の報ひに由るが故に諸の外物をして衰耗せ使む。何に況んや內物をや。是れを比丘、當に念じて十惡の法を捨離し、十善法を修行すべしと謂ふなり。是の如く比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

三

聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時波斯匿王、世尊の所に往至し頭面に足を禮し、一面に在りて坐す。爾の時波斯匿王、往いて世尊に白して言さく、「如來は審に是の語有り、『我に施せば福を獲ること多く、餘の者には福を獲ること少し。我弟子に施して、餘人に施すこと勿れ』と。設し人有りて是の語を作さば、豈如來の法を毀るに非らず乎」と。佛、王に告げて曰はく、「我に此の語無し、『獨り我に施す應し、餘人に施すこと勿れ』と。大王、當に知るべし。我恒に此の語有り、『若し比丘にして、鉢の中の遺餘を、水の中に擲著せば、蠕蟲之を食ふも猶其の福を得、何に況んや人に施して福を獲ざらん乎』と、但大王、我に是の語有り『持戒の人に施さば、其の福益多く、犯戒之人に勝さるなり』と」。爾の時波斯匿王、前んで佛に白して言さく、「唯、然り、世尊、持戒の人に施さば、其の福倍す犯戒之人者の上に於けるより多し」と。

王復、佛に白して言さく、「尼揵子來りて我に語げて言く、『沙門瞿曇は幻術を知り、能く世人を迴轉す』と。世尊、此の語を審と爲す乎。非と爲す耶」と。佛王に告げて曰はく、「是の如し、大王、向

# 卷の第四十三

## 善惡品第四十七

### 一

聞くこと是の如し。[一]一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「若し衆生有りて十法を奉行せば、便ち天上に生じ、又十法を行ぜば、便ち惡趣に生じ、又十法を行ぜば涅槃界に入らん。云何が十法を修行せば惡趣の中に生ずるや。是に於て人有り、[二]殺生・盜劫・淫泆・妄言・綺語・惡口・兩舌彼れと此れと鬪亂し、嫉妬・瞋恚・邪見を興起す。是れを十法と謂ひ、其れ衆生有りて、此の十法を行ぜば、惡趣の中に入るなり。

云何が十法を修行せば天上に生ずることを得るや。是に於て人有りて、不殺・不盜・不淫・不妄言・不綺語・不惡口・不兩舌、彼と此と亂鬪せず、不嫉妬・瞋恚・邪見を興起す。若し人有りて此の十法を行ぜば、便ち天上に生ぜん。云何が十法を修行せば、涅槃に至ることを得るや、所謂十念とは、念佛・念法・念比丘僧・念天・念戒・念施・念休息・念安般・念身・念死、是れを十法を修行せば、涅槃に至ることを得と謂ふなり。比丘、當に知るべし。其れ天及び惡趣に生ぜん者は、當に念じて其の十法を捨離すべし。涅槃に至ることを得ん者は善く修めて奉行せよ。是の如く比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

### 二

聞くこと是の如し、一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「十惡の本に由つて、外物衰耗す、何に況んや內法をや。云何が十と爲すや、所謂殺・盜・淫・妄言・綺語・惡口・兩舌、彼れと此れとを鬪亂すると、嫉妬・瞋恚・害心と邪見を懷くとなり。殺生の報ひに

---

【一】A. X. 210.

【二】殺生以下の十を、十不善又は十惡といふ。

んと欲す。今自ら懺悔せん、後更に犯さじ、唯、願くは如來、其の重き過を受け、及ばざるを原恕したまへ」と。佛、比丘に告げたまはく、「汝の改過を聽さん、復、更に犯すこと勿れ。又如來は汝の與に十想を說きしに、肯て奉持せざりしなり」と。是の時彼の比丘、世尊の教誡を聞き已つて、閑靜處に在りて、己を剋して思惟し、族姓子の鬚髮を剃除し、三法衣を著け、無上の梵行を修むる所以の、其の所願を果さんと欲し、生死已に盡き、梵行已に立ち、所作已に辦じて、更に復胎を受けず、實の如くに之を知りぬ。爾の時彼の比丘、便ち阿羅漢を成ぜり。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

結禁と聖賢居と　二力及び十念と　親國と無罣礙と　十輪と想と觀想となり。

# 增壹阿含經卷第四十二

## 五

[一八]聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「十念有り、廣く分別して修行せば、盡く欲愛・色愛・無色愛・憍慢・無明を斷ぜん。云何が十と爲すや、所謂念佛・念法・念比丘僧・念戒・念施・念天・念止觀・念安般・念身・念死なり。是れを比丘、衆座有りて、此の十念を修行する者は、盡く欲愛・色愛・無色愛一切の無明憍慢を斷じ、皆悉く除盡すと謂ふなり。是の如く比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。



【一八】此經は宋藏及び聖語藏に欠く。

十

聞くこと是の如し、一時佛、舍衛國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時一比丘有り、世尊の所に至り、頭面に足を禮し、一面に在りて坐す。爾の時彼の比丘、世尊に白して言さく、「如來は今日、諸比丘の與に十想の法を說きたまひ、『其れ能く修する者は、諸の有漏を斷じ、無漏の行を成ぜん』と、我の如きは世尊、此の十想を行ずるに堪任せず。然る所以は、欲心多きが故に、身意熾盛にして寧息を得ざればなり」と。爾の時世尊、彼の比丘に告げたまはく、「汝今當に淨想を捨てゝ不淨想を思惟し、有常想を捨てゝ無常想を思惟し、有我想を捨てゝ無我想を思惟し、可樂想を捨てゝ不可樂想を思惟すべし。然る所以は、若し比丘にして、淨想を思惟せば、欲心便ち熾盛なり、若し不淨想を思惟せば、便ち欲心無けん。比丘、當に知るべし、欲は不淨爲り、彼の屎聚の如し。欲は鸜鵒の如く諸の音響饒し。鵒は返復無きこと、彼の毒蛇の如し。欲は幻化の如く、日の雪を消すが如し。當に念じて欲を捨つること、塚間に棄つるが如くなるべし。欲は還つて自ら害すること、蛇の毒を懷くが如し。欲は厭患無きこと鹹水を飲むが如し。欲は滿つ可き難きこと、海の流を呑むが如し。欲は畏る可きこと多きことゝ羅刹の村の如し。欲は猶し怨家のごとく、恒に當に遠離すべし。欲は猶し少味のごときこと、蜜を刀に塗るが如し。欲は愛す可からざること、路の白骨の如し。欲は外形を現はすこと、廁に華を生ずるが如し。欲は眞ならずと爲すこと、彼の畫瓶の內に醜物を盛り、外殊特なるを見るが如し。欲の牢固無きこと、亦聚沫の如し。是の故に比丘、當に念じて貪欲の想を遠離し、不淨の想を思惟すべし。汝今比丘、當に憶ふべし。昔迦葉佛の所に十想を奉行せり。今當に重ねて十想を思惟すべくんば、有漏心便ち解脫せん」と。

爾の時彼の比丘、悲泣して涙を墮して、自ら止むること能はず。即時に頭面に佛を禮し、世尊に白して言さく、「唯、然り、世尊、愚惑積むこと久し、如來は躬自ら十想を說きたまへり、方に遠離せ

【一七】鸜鵒とは、形百舌に似て、頭に幘ある一種の鳥。

の義を解する者は、現法中に於て最尊第一の人なり。若し復比丘、比丘尼にして、此の義を思惟し、乃至十歳せば、必ず二果若しは阿羅漢、若しは阿那含を成ぜん。比丘にして且つ十歳を捨て、若しは一年之中、此の義を思惟する者は、必ず二果を成じ、終に中退すること無からん。比丘にして且つ一年を捨て、其れ四部の衆十月、若しは一月に至りて此の義を思惟する者は、必ず二果を成じ、亦中退せざらん。且つ一月を捨て、若し四部の衆にして、七日の中此の義を思惟せば、必ず二果を成じ、終に疑ひ有らざらん」と。

爾の時阿難、世尊の後に在りて、扇を執りて佛を扇ぐ。爾の時阿難、佛に白して言さく、「世尊、此の法は極めて甚深爲り、若し所在の方面に此の法有らば、當に知るべし、便ち如來に遇ひまつらん。唯、然り、世尊、此の法は何等と名け、當に云何が奉行すべきや」と。佛、阿難に告げたまはく、「此の經を名けて十法の義と爲す。當に念じて奉行すべし」と。爾の時阿難及び諸比丘、佛の所説を聞いて歡喜奉行しぬ。

九

[一五]聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「其れ[一六]十想を修行すること有らば、便ち有漏を盡くして通を獲、證を作して、漸く涅槃に至らん。云何が十と爲すや、所謂白骨想・青瘀想・膖脹想・食不消想・血想・噉想・有常無常想・貪食想・死想・一切世間不可樂想なり。是れを比丘、此の十想を修むる者は、有漏を盡くすことを得、涅槃界に至ることを得と謂ふなり。又是れ比丘、十想の中一切世間不可樂想を最も第一と爲すなり。然る所以は、其れ不可樂想を修行すること有らば、信を持し、法を奉ぜん、此の二人は必ず次を越えて證を取ればなり。是の故に比丘、若し樹下靜處露坐に在らば、當に此の十想を思惟すべし。是の故に比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所説を聞いて歡喜奉行しぬ。



【一五】 A. X. 56—57. Saññā.

【一六】 十想(Dasa saññā)。巴利文には(一)Asubhasaññā(不淨想)(二)Maraṇasaññā(死想)(三)āhārepaṭikkūlasaññā(食不消想)(四)Sabbaloke anabhiratasaññā(一切世間不可樂想)(五)Aniccasaññā(無常想)(六)Anicce dukkhasaññā(無常苦想)(七)Dukkhe anattasaññā(苦無我想)(八)Pahānasaññā(捨離想)(九)Virāgasaññā(離貪想)(一〇)Nirodhasaññā(滅想)。

音天是れなり。或は衆生有り、一身にして若干想、所謂遍淨天是れなり。或は衆生有り、空處無量、所謂空處天是れなり。或は衆生有り、識處無量、所謂識處天是れなり。或は衆生有り、無所有處無量、所謂不用處天是れなり。或は衆生有り、有想無想處無量、所謂有想無想天是れなり。是れを比丘、七神止處と謂ひ、是に於て平等に解脱し、乃至平等に苦際を盡くす。七論・七義・七演とは、我の說く所は正しく此れを謂ふ耳。

八論・八義・八演と我の說く所は、何等に由るが故に此れを說く乎。所謂世間の八法、是れ世に隨つて迴轉す。云何が八と爲すや、利・衰・毀・譽・稱・譏・苦・樂、是れを世間の八法と謂ひ、世に隨つて迴轉するなり。若し比丘、中に於て平等に解脱し、乃至苦際を盡くす。八論・八義・八演とは、我說く所の者は正しく此れを謂ふ耳。九論・九義・九演とは、我說く所は、何等に由るが故に此れを說く乎。所謂九衆生居處なり。云何が九と爲すや、若し衆生有りて、若干種の身、所謂天及び人なり。或は衆生有り、若干種の身にして一想、所謂梵迦夷天の最初に出づる時是れなり。或は衆生有りて一想一身、所謂光音天是れなり。或は衆生有り一身にして若干想、所謂遍淨天是れなり。或は衆生有りて空處無量、所謂空處天是れなり。或は衆生有りて識處無量、所謂識處天是れなり。或は衆生有りて無所有處無量、所謂不用處天是れなり。或は衆生有りて、有想無想處無量、所謂有想無想天是れなり。無想の衆生及び諸の所生の類を九神止處と爲す。是に於て比丘、平等に解脱し、乃至苦際を盡くす。九論・九義・九演とは我說く所の者は、正しく此れを謂ふ耳。

十論・十義・十演とは何等に由つて說く乎。所謂十念とは念佛・念法・念比丘僧・念戒・念施・念天・念休息・念安般・念身・念死、是れを十念と謂ひ、若し比丘平等に解脱し、乃至苦際を盡くす。十論・十義・十演とは、是の如く比丘、一從り十に至るなり。比丘、當に知るべし。若し外道異學にして、此の語を聞かば、猶顏色を熟視すること能はず、況んや之に報へんと欲するをや。其れ比丘有りて此

と爲すと謂ふなり。彼云何が名けて念根と爲すや、所謂念根とは誦する所を忘れず、恒に心懐に在りて、總持して失はず、有爲・無漏の法終に忘失せず。是れを名けて念根と爲すと謂ふなり。彼云何が名けて定根と爲すや、所謂定根とは、心中に錯亂無く、若干想無く、恒に專精一意なり。是れを名けて、三昧根と爲すと謂ふなり。彼云何が智慧根と名くるや。所謂苦を知り、集を知り、盡を知り、道を知る。是れを智慧の根と名くと謂ひ、此れを五根と名くるなり。比丘、中に於て平等に解脱し、平等に其の義を分別し、平等に其の苦際を盡くす五論・五義・五演とは、我の說く所は正しく此れを謂ふ耳。

六論・六義・六演とは、我の說く所は何等の故に出る乎。所謂六重の法なり。云何が六と爲すや、是に於て比丘、恒に身に慈心を行じ、若し閑靜の室中に在らば、常に若し一心に學ぶ可く、貴ぶ可く、恒に與に和合す。是れを比丘、第一重の法と謂ふなり。復、次に口に慈心を行じ、終に虚妄無く、敬ふ可く、貴ぶ可し。是れを第二重の法と謂ふなり。復、次に意に慈を行じ、憎嫉を起さず、敬ふ可く、貴ぶ可し。是れを第三重の法と謂ふなり。復、次に若し法利の養を得、鉢の中の遺餘は、諸の梵行之人の與に【四】等心に施與す。是れを第四重の法、敬ふ可く、貴ぶ可しと謂ふなり。復、次に禁戒を奉持して脱失する所無く、賢聖の人の貴ぶ所、是れを第五重の法、敬ふ可く、貴ぶ可しと謂ふなり。復、次に正見の賢聖は出要を得、苦際を盡くすことを得、意錯亂せず、法の梵行の人と等しく其の行を修む。是れを第六の法、敬ふ可く、貴ぶ可しと謂ふなり。爾の時比丘、平等に厭患し、平等に解脱し、平等に其の義を分別し、平等に苦際を盡くす六論・六義・六演とは、我說く所は正しく此れを謂ふ耳。七論・七義・七演とは、何等に由るが故に此れを說く乎。所謂七神識の止處なり。云何が七と爲すや。或は衆生有り、若干の想にして、若干種の身、所謂天及び人なり。或は衆生有り、若干種身にして一想、所謂梵迦夷天最初に出づる時なり。或は衆生有りて、一想一身、所謂光



【四】 等心とは、平等の心。

所謂苦痛・樂痛・不苦不樂痛なり。彼云何が名けて樂痛と爲すや、所謂心中の樂想、亦分散せず。是れを名けて樂痛と爲すと謂ふなり。彼云何が名けて苦痛と爲すや、所謂心中憒亂して定一ならず、若干想を思惟す。是れを名けて苦痛と謂ふなり。彼云何が名けて不苦不樂痛と爲すや、所謂心中に苦無く、樂想無く、復、一定なるに非らず、復、亂想に非らず、亦法と非法とを思惟せず、恒に自ら寂默にして、心記有ること無し。是の故に名けて不苦不樂痛と爲し、是れを三痛と謂ふなり。若し比丘にして平等に厭患し、平等に解脱し、平等に觀察し、平等に其の子を分別し、平等に其の苦際を盡す、我所說の三論三義三演とは正しく是れを謂ふ耳。四義・四論・四演は、何等に由るが故に復、此の義を說く乎。所謂四諦なり。云何が四と爲すや、所謂苦・集・盡・道聖諦なり。彼云何が苦諦と爲すや、所謂[一]生苦・老苦・病苦・死苦・憂悲惱苦・怨憎會苦・恩愛別苦・所欲不得苦、要を取りて之を言はゞ、五盛陰苦、是れを苦諦と謂ふなり。彼れ云何が名けて集諦と爲すや、所謂愛の本、欲と相應する者、是を名けて集諦と爲すと謂ふなり。彼云何名けて苦盡諦と爲すや、所謂彼の愛永く盡きて餘り無く、更に復生ぜず。是れを名けて苦盡諦と謂ふなり。彼云何が名けて苦出要諦と爲すや、所謂賢聖八品道、正見・正治・正語・正命・正業・正方便・正念・正三昧、是れを名けて八品之道と爲すなり。若し比丘にして平等に厭患し、平等に解脱し、平等に其の義を分別し、平等に觀察し、平等に其の苦際を盡くす。是れを四論・四義・四演と謂ひ、我所說は正しく此れを謂ふ耳。五論・五義・五演とは、我今所說は何等に由るが故に說くや。所謂五根なり、云何が五と爲すや、信根・精進根・念根・定根・慧根なり。云何が名けて信根と爲すや、所謂賢聖の弟子、如來の道法を信じ、彼の如來・至眞・等正覺・明行成・善逝と爲し、世間解・無上士・道法御・天人師・佛・衆祐と號し、世に出現せしを信ず。是れを名けて信根と爲すと謂ふなり。彼れ云何が名けて精進根と爲すや、所謂身心意幷せて勤勞して倦まず、不善の法を滅し、善法をして增益せ使め、恒に心に執持す。是れを名けて精進根

【一】生苦以下八を八苦といひ、初めの四を四苦といふ。

道異學の所說を聞くも亦善しと稱せず、復、惡しと言ふにも非らず、卽ち座從り起ちて、各退いて去りぬ。

是の時衆多の比丘、自ら相謂ひて言く、「我等當に此の義を持して、往いて世尊に白すべし。若し如來にして所說有らば、我等當に念じて奉行すべし」と。爾の時衆多の比丘、羅閱城に入り、乞食し已つて還つて房中に至り、衣鉢を收攝し、世尊の所に往至し、頭面に足を禮し、一面に在りて住す。爾の時衆多の比丘、此の緣本を以て、盡く如來に向つて之を說きまつりぬ。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「彼の外道異學にして、此の義を問ひ已らば、汝等此の語を持して、之に報ふ應し。『[一]一論一議一演、乃至十論十議十演し、此の語を說く時何等の義有らんや』と。設し汝此の語を持して往いて問はゞ、彼の人則ち之に報ふること能はず、彼の外道異學遂に愚惑を增さん、然る所以は、彼の所有の境界に非らざればなり。是の故に比丘、我は天及び人民、魔、若しは魔天、釋・梵・天王を見ず。能く此の語に報ふる者は、如來及び如來の弟子にして、吾に從つて聞く者を除く。此れ則ち一論一議一演を論ぜざるなり。我此の義を說くと雖も、何故に由つて說く乎、一切衆生は食するに由つて存し、食すること無くば、則ち死せん。彼の比丘に平等に厭患し、平等に解脫し、平等に觀察し、平等に其の義を分別し、平等に苦際を盡くし、同一義にして二ならず。我所說とは正しく此れを謂ふ耳。一義一論一演、乃至十論十義十演、我此の義を說くと雖も、何に由つて說く乎、名と色と、彼何等を名と謂ふや、所謂痛・想・念・更樂・思惟、是れを名と謂ふなり。彼云何が名けて色と爲す耶、四大及び四大所造の色、是れを名けて色と爲すと謂ふなり。此の緣本を以ての故に名けて色と爲すなり。二論二義二演とは、此の因緣に由るが故に、我今之を說くなり。若し比丘平等が厭患し、平等に解脫し、平等に觀察し、平等に其の義を分別し、平等に其の苦際を盡くすなり。三論三義三演は、何等に由るが故に此の義を說く乎。所謂[三]三痛なり。云何が三と爲すや、

【一】 一論一議一演(eka pañha eka uddesa eka veyyākaraṇa)。

【三】 三痛(Ti vedanā)は、三受とも譯し、苦・樂・不苦不樂の三をいふ。受・痛は感覺のこと。

天上に生ずることを得と謂ふなり。復、次に比丘、自ら意を用ひず、恒に戒法に隨ふ。是れを名けて第六の法を成就せば、善處に生ずと謂ふなり。復、次に比丘、事務に著せず、常に喜びて坐禪す。是れを第七の法を成就し、天上に生ずることを得と謂ふなり。復、次に比丘、閑靜の處を樂しみて人間に在らず。是れを第八の法を成就し、善處に生ずと謂ふなり。復、次に比丘、惡知識と與に從事せず、常に善知識と與に從事す。是れを第九の法を成就し、善處に生ずることを得と謂ふなり。復、次に比丘、常に梵行を修めて惡法を離れ、多聞にして義を學び、次叙を失はず。是の如く比丘、十法を成就せば、臂を屈伸するが如き頃に、善處天上に生ぜん。是れを比丘、十の非法の行は地獄に入れば、當に念じて捨離すべし。十の正法の行は、當に共に奉修すべしと謂ふなり。是の如く比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

## 八

[10] 聞くこと是の如し。一時佛、羅閱城迦蘭陀竹園所に在し、大比丘衆五百人と俱なりき。是の時衆多の比丘、時到つて衣を著け、鉢を持して羅閱城に入りて乞食しぬ。是の時衆多の比丘、便ち是の念を作さく、「我等城に入つて乞食するに、日猶故に早し。我等外道異學に至りて、與共に論議す可し」と。是の時衆多の比丘、便ち外道異學の所に至りぬ。時に諸の外道、遙に諸の沙門の來るを見、各々自ら相謂ひて言く、「各々寂寞にして高聲の語言有ること勿れ。沙門瞿曇の弟子、今此の間に來る。然るに沙門の法は寂寞の人を稱譽せば、我等の正法を知ら令め、亂れず亂有らん」と。爾の時衆多の比丘、便ち外道異學の所に至り、共に相問訊し、一面に在りて坐す。爾の時外道、諸比丘に問ふ、「汝等沙門瞿曇は、諸弟子の與に此の妙法を說き、是の比丘盡く一切の諸法を解して、自ら遊戲するや不乎。我等も亦復、諸弟子の與に此の妙法を說いて、自ら遊戲す。我の說く所と、汝と何等の異り有りや、何の差別有るや、說法敎誡一類にして異ること無し」と。是の時衆多の比丘、外

【10】 A. X. 27. Mahāpañhā.

しく存することを得と謂ふなり。復次に國王、群臣の諫めを受けて其の辭に逆はず、是れを第二の法を成就せば、便ち久しく存することを得と謂ふなり。復、次に國王、常に惠施を好み、民と歡びを同じうす。是れを第三の法、便ち久しく存することを得と謂ふなり。復、次に國王、法を以て物を取り、非法を以てせず。是れを第四の法、便ち久しく存することを得と謂ふなり。復、次に國王、他色に著せず、恒に自ら其の妻を守護す。是れを第五の法を成就せば、便ち久しく存することを得と謂ふなり。復、次に國王、亦酒を飲まず、心荒亂せず、是れを第六の法を成就せば、便ち久しく存することを得と謂ふなり。復、次に國王、亦戲笑せず、外敵を降伏す。是れを第七の法を成就せば、便ち久しく存することを得と謂ふなり。復、次に國王、法を案じて治化し、終に阿曲無し。是れを第八の法と成就せば、便ち久しく存することを得と謂ふなり。復、次に國王、群臣と和睦し、競ひ爭ふこと有ること無し。是れを第九の法を成就せば、便ち久しく存することを得と謂ふなり。復、次に國王、病患有ること無く、氣力强盛なり。是れを第十の法、便ち久しく存することを得と謂ふなり。若し國王にして、此の十法を成就せば、便ち、久しく存することを得ん。之奈何無からんや。

比丘衆も亦復、是の如し。若し十法を成就せば、臂を屈伸するが如き頃に、便ち天上に生ぜん。云何が十と爲すや、是に於て比丘、禁戒を奉持し、戒德具足して、正法を犯さず、是れを比丘、此の初法を成就せば、身壞命終して善處天上に生ずと謂ふなり。復次に比丘、如來の所に於て、恭敬の心有り。是れを比丘、此の第二法を成就し、善處に生ずることを得と謂ふなり。復次に比丘、法敎に順從し、一に所犯無し。是れを比丘、第三の法を成就し、善處に生ずることを得と謂ふなり。復、次に比丘、聖衆に恭奉して、懈惰の心有ること無し。是れを第四の法を成就せば、天上に生ずることを得と謂ふなり。復、次に比丘、少欲知足にして、利養に著せず。是れを比丘、第五の法、

是れを第九の法、久しく存することを得ずと謂ふなり。復、次に國王、忠孝の臣を信ぜず、翅羽尠少くして、强佐有ること無し。是れを國王此の十法を成就し、久しく存することを得ずと謂ふなり。

今比丘衆も亦復、是の如く、若し十法を成就せば、善本功德を增さず、身壞命終して地獄の中に入らん。何をか十法と謂ふや、是に於て比丘、禁戒を持たず、亦恭恪の心無し。是れを比丘、初法を成就せば、究竟して至到する所有らずと謂ふなり。復、次に比丘、佛に承事せず、眞言を信ぜずば、是れを比丘、第二の法を成就して、久しく住することを得ずと謂ふなり。復、次に比丘、法に承事せず、諸の戒律を漏らす。是れを比丘、第三の法を成就し、久しく住することを得ずと謂ふなり。復、次に比丘、聖衆に承事し、恒に自ら意を卑しめて、彼の意を信ぜず、是れを比丘、第四の法を成就し、久しく住することを得ずと謂ふなり。復、次に比丘、利養心に貪著して放捨せず。是れを比丘、第五の法を成就し、久しく住することを得ずと謂ふなり。復、次に比丘、多く學問せず、勤加誦讀翫習せず、是れを比丘、六法を成就して、久しく存することを得ずと謂ふなり。復、次に比丘、善知識と與に從事せず、恒に惡知識と與に從事す。是れを比丘、第七の法、久しく存することを得ずと謂ふなり。復、次に比丘、恒に事役を喜び、坐禪を念ぜず。是れを第八の法、久しく存することを得ずと謂ふなり。復、次に比丘、復算數に著し、道を返へし、俗に就いて正法を習はず。是れを比丘、第九の法、久しく存することを得ずと謂ふなり。復、次に比丘、梵行を修むることを樂しまず、不淨に貪著す。是れを比丘、第十の法久しく存することを得ずと謂ふなり。是れを比丘、此の十法を成就せば、必ず三惡趣に墮し、善處に生ぜずと謂ふなり。

若し國王にして十法を成就せば、便ち久しく世に住することを得ん、云何が十と爲すや、是に於て國王、財物に著せず、瞋恚を興さず、亦復、小事を以て怒害心を起さず、是れを第一の法便ち久

寶を取りしに、今復、非法を以て民の財寶を取る。此れ必ず沙門の所爲ならん』と、是れを第九の非法、國に親しむの難と謂ふなり。復次に國土の人民、普く疫病を得ること、皆宿緣に由るに、是の時人民各斯の念を生ぜん、『我等昔日復疾病無かりしに、今各、患ひを得、死者路に盈つ。必ず是れ沙門の呪術の致す所ならん』と。是れを第十の非法、國に親しむの難と謂ふなり。是れを比丘十の非法國に入るの難と謂ふなり。是の故に比丘、復、心を生じて、國家に親近すること莫かれ、是の如く比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

## 七

聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「若し國王にして十法を成就せば、久しく存することを得ず、諸の盜賊多からん。云何が十と爲すや、是に於て國王慳貪にして、小輕事を以て便ち瞋恚を興し、義理を觀ぜず、若し王にして初法を成就せば、則ち久しく存することを得ず、國に盜賊饒からん。復次に彼の王、財物に貪著し、肯て庶幾せず。是れを國王、此の二法を成就せば、則ち久しく存することを得ずと謂ふなり。復次に彼の王、人の諫めを受けず、人に暴虐を爲して慈心有ること無し。是れを第三法、久しく存することを得ずと謂ふなり。復、次に彼の王、諸の人民を枉げ、橫取繫閉し、牢獄の中に在りて出期有ること無し。是れを第四法の久しく存することを得ずと謂ふなり。復、次に國王の非法の相佐、正行を案ぜず。是れを第五法、久しく存することを得ずと謂ふなり。

復、次に彼の王、他色に貪著して、己の妻を遠離す。是れを彼の王第六法を成就し、久しく存することを得ずと謂ふなり。復次に國王、好喜して酒を嗜み、官事を理めず。是れを七法を成就し、久しく存することを得ずと謂ふなり。復次に國王、歌舞戲樂を好喜して、官事を理めず。是れを第八法の久しく存することを得ずと謂ふなり。復次に國王、恒に長患を抱き、强健の日有ること無し。

は數、來つて往返せり。此れは必ず是れ沙門の所爲ならん』と。是れを初の非法にして、國に親しむの難と謂ふなり。復、次に大臣叛逆し、王の爲に收め所れ、皆取りて之を害せば、是の時人民便ち是の念を作さん、『此の沙門道士は數、來つて往返せり。此れ必ず是れ沙門の所爲ならん』と、是れを第二の非法、國に入るの難と謂ふなり。復次に國家にして、財寶を亡失せば、時に收藏人復、此の念を生ぜん、『今此の寶物は我恒に守護して、更に餘人の來つて此に入る者無し。必ず沙門之を取りしならん』と、是れを沙門第三の非法の國に入るの難と謂ふなり。復、次に國王の女、年盛時に在りて、猶未だ出でゝ適がざるに、身便ち懷妊せば、是の時人民是の念を作さん。『此の中に更に餘人の往返する無し、必ず沙門の所爲ならん』と。是れを第四の非法の國に親しむの難と謂ふなり。復、次に國王、身に重患を抱き、他人の藥に中れば、是の時人民復、是の念を作さん、『其の中りしは更に餘人無し。此れ必ず沙門の所爲ならん』と、是れを第五の非法の國に親しむの難と謂ふなり。

復、次に國王・大臣、各共に競ひ諍ふて、共に相傷害せんに、是の時人民便ち是の念を作さん、『此れ諸大臣は本共に和合せしに、今共に競ひ諍ふ。此れ餘人の所爲に非らず、必ず是れ沙門道士ならん』と、是れを第六の非法、國に親しむの難と謂ふなり。復次に二國共に鬪ひ、各、勝を諍はゞ、是の時人民便ち是の念を作さん、『此れ沙門道士數、來つて內に在りき、必ず是れ沙門の所爲ならん』と。是れを第七の非法、國に親しむの難と謂ふなり。復次に國王本惠施を好み、民の與に財を分ちしに、後便ち悋悔して、肯て惠施せずば、是の時人民各、斯の念を生ぜん、『我等の國主は本、惠施を喜びしに、今復慳貪にして惠施の心無し。此れ必ず沙門の所爲ならん』と。是れを第八の非法、國に親しむの難と謂ふなり。復、次に國王恒に正法を以て、民の財寶を取りしに、後復、非法（を以て）民の財寶を取らば、是の時人民各、斯の意を生ぜん、『我等の國主は本、法を以て民の財

云何が如來は四無所畏を得るや。如來成等正覺と言はんと欲し、若し衆生有りて、知者と言はんと欲せば、此の處無し。若し復沙門・婆羅門有りて、來つて佛を誹謗せんと欲し、等正覺を成ぜずば、則ち此の處無し。此の處無きを以て則ち安隱を獲るなり。然るに我今日已に有漏を盡くせりと言はんと欲し、設し復沙門・婆羅門・天・若しは魔天有りて、來つて未だ有漏を盡さずと言はば、則ち此の處無し。此の處無きを以て、則ち安隱を獲るなり。復、次に我說く所の法、賢聖にして出要を得ば、實の如く苦際を盡くす。設し沙門・婆羅門・天、若しは魔天有りて、來つて未だ苦際を盡くさずと言はんと欲せば、此の處無し。此の處無きを以て、則ち安隱を獲たり。復次に『我說く所の內法とは惡趣に墮する者なり』と。設し復沙門・婆羅門有りて、來りて非なりと言はんと欲する者、則ち此の處無し。是れを比丘、如來に四無所畏有りと謂ふなり。

設し外道異學有りて、『彼の沙門瞿曇に何等の力有り、何の無畏有りて、自ら無著最尊と稱するや』と言はゞ、汝等當に此の十力を持つて、往いて之に報ふべし。設し復、外道異學の重ねて是の說を作して、『我等も亦十力を成就す』と(言はゞ)、汝等比丘、復當に問ふて曰ふべし。『汝に何の十力有りや』と、是の時外道異學則ち報ふること能はざるなり。遂に其の惑を增さん。然る所以は、我終に沙門・婆羅門の、自ら稱して、四無所畏を得たりと言ふを見ず、如來を除けばなり。是の故に比丘、當に方便を求めて、十力・四無所畏を成ずべし。是の如く比丘、當に是の學を作すべし」と。

爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて、歡喜奉行しぬ。

六

[九] 聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「國家に親近するに十の非法有り、云何が十と爲すや。是に於て國家に謀害心を起し、國王を殺さんと欲し、此の陰謀に緣つて王命終を致さば、彼の人民の類、便ち是の念を作さん、『此の沙門道士



【九】 A. X. 45. Pavesana.

り、實の如くに之を知る。欲心有れば欲心有りと知り、欲心無くば欲心無しと知り、瞋恚心有れば瞋恚心有りと知り、瞋恚心無くば瞋恚心無しと知り、愚癡心有れば愚癡心有りと知り、愚癡心無くば愚癡心無しと知り、愛心有れば愛心有りと知り、愛心無くば愛心無しと知り、受心有れば受心有りと知り、受心無くば受心無しと知り、亂心(有れば)亂心有りと知り、亂心無くば亂心無しと知り、散心(有れば)散心有りと知り、散心無くば散心無しと知り、少心(有れば)少心有りと知り、少心無くば少心無しと知り、廣心(有れば)廣心有りと知り、廣心無くば廣心無しと知り、無量心(有れば)無量心を知り、有量心(有れば)有量心(有りと)知り、實の如くに之を知る。定心(有れば)定心有りと知り、定心無くば定心無しと知り、解脫心(有れば)解脫心(有りと)知り、解脫心無くば解脫心無しと知る。

復次に如來は盡く一切所趣心の道を知る。或は一生・二生・三生・四生・五生・十生・五十生・百生・千生・億百千生・無量生・成劫・敗劫・無數成敗劫の中、『我昔彼處に生じ、名は是れ、字は是れ、此の如きの食を食し、其の苦樂を受け、壽命の長短、此に死して彼に生れ、彼に死して此に生る』と、自ら是の如き無數の宿命の事を憶ふ。復次に如來は衆生の生死之趣を知り、天眼を以て衆生の類を觀じ、善色・惡色・善趣・惡趣、行に隨つて種うる所皆悉く之を知る。或は復衆生の身・口・意に惡を行じ、賢聖を誹謗し、邪見の業を造れば、身壞命終して地獄の中に生ず。或は復衆生、身・口・意に善を行じ、賢聖を誹謗せず、恒に正見を行ぜば、身壞命終して善處天上に生ぜん。是れを名けて天眼清淨にして、衆生の類の所趣の行を觀ずと謂ふなり。復次に如來は有漏盡きて無漏を成じ、心解脫し、智慧解脫し、生死已に盡き、梵行已に立ち、所作已に辦じて、更に復有を受けず、實の如くに之を知る。是れを如來に此の十力有り、名けて無著と爲し、四無所畏を得て、大衆の中に在りて、師子吼を作し、梵輪を轉ずと謂ふなり。

に縁り、痛は愛に縁り、愛は取に縁り、取は有に縁り、有は死に縁り、死は愁・憂・苦・惱に縁り、稱計す可からず。此の五陰の身に因つて此の集法有るなり。

此れ滅すれば則ち滅し、此れ無くば則ち無し。無明盡くれば行盡き、行盡くれば識盡き、識盡くれば名色盡き、名色盡くれば六入盡き、六入盡くれば更樂盡き、更樂盡くれば痛盡き、痛盡くれば愛盡き、愛盡くれば取盡き、取盡くれば有盡き、有盡くれば死盡き、死盡くれば愁憂苦惱皆悉く除盡す。比丘、當に知るべし。我法は甚だ廣大無崖の底爲り。諸の狐疑を斷じ、安隱に正法に處る。若し善男子・善女人にして、勤めて用心して、缺くること有ら令めずば、正使身枯壞するも、終に精進の行を捨てず、意を繫けて忘れず、苦法を修行すること、甚だ易からずと爲す。閑居の處を樂しみ、靜寂にして思惟し、頭陀の行を捨つること莫かれ。如今如來は現在善く梵行を修するなり。是の故に比丘、若し自ら觀察する時、微妙の法を思惟し、又當に二義を察し、放逸の所無く、果實を成ぜ使め、甘露滅盡の處に至るべし。若し當に他の供養・衣被・飲食・床臥の具・病瘦の醫藥を受け、其の勞を唐はざるべし。亦父母をして其の果報を得、諸佛に承事し、禮敬供養せ使めよ。是の如く比丘、當に是の如く學ぶべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

四

[八]聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「如來は十種の力を成じ、四無所畏を得、大衆の中に在りて能く師子吼す。云何が十力と爲すや、是に於て如來は是處を實の如くに之を知り、非處を實の如くに之を知る。復次に如來は處所他の衆生の因緣の所變する處の其の果報を知る。復次に如來は若干種の界・若干種の持・若干種の入を知り、實の如くに之を知る。復次に如來は若干種の解脫・無量の解脫を實の如くに之を知る。復次に如來は他の衆生の智慧の多少を知り、實の如くに之を知る。復次に如來は他の衆生の心中の所念を知



【八】A. X. 21. Sīha.

事を護るや、是に於て比丘、恒に心に有漏・無漏・有爲・無爲を護り、涅槃の門に至るなり。是の如く比丘、恒に一事を護るなり。云何が比丘、四部の衆を將護するや、是に於て比丘、四神足を成就するなり。是の如く便ち四部の衆を將護すと爲すなり。云何が比丘、劣弱を觀ずるや。是に於て比丘、生死の衆行已に盡くるなり。是の如く比丘、劣弱を觀ずるなり。云何が比丘、平等に親近するや、是に於て比丘、三結已に盡く、是れを比丘、平等に親近すと謂ふなり。云何が比丘、正しく無漏に向ふや。是に於て比丘、憍慢を除去す。是の如く比丘、正しく無漏に向ふなり。云何が比丘、身行依倚するや。是に於て比丘、無明を除き已る。是の如く比丘、身行を依倚するなり。云何が比丘、心善く解脫を得るや。是に於て比丘、愛已に除盡す。是の如く比丘、心善く解脫を得るなり。云何か比丘、智慧解脫するや、是に於て比丘、苦諦・集・盡・道諦を觀じ、實の如くに之を知る。是の如く比丘、智慧解脫するなり。是れを比丘、聖賢の十事の所居の處と謂ふなり。昔日の賢聖も亦此の處に居り、已に居り、方に居る。是の故に比丘、念じて五事を除き、六法を成就し、一法を守護し、四部の衆を將護し、劣弱を觀察し、平等に親近し、正しく無漏に向ひ、身行に依倚し、心解脫を得、智慧解脫するなり。是の如く比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

三

(七) 聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「如來は十力を成就し、自ら無著を爲すを知り、大衆の中に在りて能く師子吼し、無上の梵輪を轉じて、衆生を度するなり。所謂此れは色、此れは色の集、此れは色の盡、此れは色の出要なり。此の痛・想・行・識、識の集、識の盡、識の出要を觀じ、是れに因て是れ有り、此れ生ずれば則ち生ず。無明は行に緣り、行は識に緣り、識は名色に緣り、名色は六入に緣り、六入は更樂に緣り、更樂は痛

【七】 S. 12. 21. Dasabala.

# 卷の第四十二

## 結禁品第四十六[一]

### 一

[二]聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「十事の功德有りて、如來は諸比丘の與に禁戒を說く。云何が十と爲すや、所謂聖衆に承事し、和合將順し、聖衆を安隱し、惡人を降伏し、諸の慚愧の比丘をして惱み有ら令めず、不信の人をして信根を立て使め、已信有る者をして、倍す增益せ令め、現法中に於て有漏を盡くすことを得、亦後世の諸漏の病をして、皆悉く除盡せ令め、復、正法をして久しく世に住することを得令め、常に念じて、當に何の方便して、正法を久しく存すべきやを思惟す。是れを比丘、十法の功德、如來は諸比丘の與に禁戒を說くと謂ふなり。是の故に比丘、當に方便を求めて禁戒を成就し、失ふこと有ら令むること勿るべし。是の如く比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

### 二

[三]聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「[四]聖賢所居の處に十事有りて、三世の諸聖常に其の中に處る。云何が十と爲すや、是に於て比丘、五事は已に除き、六事を成就し、恒に一事を護りて四部衆を將護し、諸の劣弱を觀じ、平等に親近し、正しく無漏に向ひ、[六]身行を依倚し、心善く解脫し、智慧解脫するなり。云何が比丘、五事已に除くや、是に於て比丘、五結已に斷ず。是の如く五事已に除くなり。云何が比丘、六事を成就するや、是に於て比丘、六重の法を承くるなり。是の如く比丘、六事を成就するなり。云何が比丘、恒に一

【一】 結禁品以下十不善品の三品は十法を明す。

【二】 A. X. 31 の前半。

【三】 A. X. 20. Ariyavāsa.

【四】 巴利文には拘樓瘦劍磨必曇(Kurūsu kammāsadhamma)に於ける說法。

【五】 聖賢所居處(Ariyavāsa)。

【六】 身行を依倚す(Passad-dhakāyasaṅkhāro)とは、身の行ひを靜めること。

て已に道跡を見、已に法を見、法を得、諸法を分別し、諸の狐疑を度して無所畏を得、更に餘佛に事へず、自ら佛・法・僧に歸しまつりて五戒を受けぬ。

爾の時尸利掘長者、自ら道跡を得しを知り、前んで佛に白して言さく、「寧んぞ如來に毒を施して大果報を獲ば、餘の外道異學に甘露を與ふる。更に其の罪を受けざらん。然る所以は、我今毒食を以て佛及び比丘僧を請じ、現法中に於て此の證驗を得たり。長夜に此の外道の爲に惑さ所、乃ち斯の心を興し、如來の所に於て其れ外道異學に事ふること有らば、皆邊際に墮せん」と。佛長者に告げたまはく、「汝の所言の如くして、異り有ること無し。皆他の爲に誑らかさ所しなり」と。

爾の時尸利掘、佛に言して言さく、「今自り已後、復、此の外道異學を信ぜず、諸の四部の衆の、家に在りて供養するを聽さじ」と。佛、長者に告げたまはく、「是の說を作すこと勿れ、然る所以は、汝今恒に斯の諸の外士を供養し、諸の畜生に施さば、其の福量り難し、況んや復人を乎。若し外道異學有りて、問ふて尸利掘は是れ誰の弟子なるやと曰はゞ、汝等云何が之に報ふるや」と。爾の時尸利掘即ち座從り起ち、長跪叉手して世尊に白して言さく、「勇猛にして解脫し、今此の人身を受けし、是の第七の仙人[15]、是の釋迦文の弟子なり」と。世尊告げて曰はく、「善い哉、長者、乃ち能く此の微妙の歎を說けり」と。爾の時世尊、重ねて長者の與に甚深の法を說き、即時に便ち斯の嚫を說きたまはく、

祠祀は火を上と爲し　詩書は頌を最と爲す　人中王を尊しと爲し　衆流は海を原と爲す　星中月を明と爲し　光明は日を上と爲す　上下及び四方　一切の有形の類　諸天及び世間に　佛を最第一と爲す　其の福を求めんと欲せば　當に三佛を供養すべし

と。爾の時世尊、此の偈を說き已つて、即ち座從り起ちたまひぬ。爾の時尸利掘及び諸の來會せしもの、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

# 増壹阿含經卷第四十一

【一五】第七の仙人とは、過去七佛の第七、釋尊をいふ。

時尸利掘長者、世尊に白して言さく、「我設けし所の食は皆悉く毒有り、唯、願くは世尊、小しく停りたまへ、今當に更に食を施すべし。然る所以は、如來の體をして、增損有ら令むること無からん」と。佛、長者に告げたまはく、「如來及び弟子は終に他の爲に害せ所れず。但長者、食已に辦ぜば時に隨つて供設せよ」と。爾の時長者、手自ら斟酌して、種々の飲食を行きぬ。爾の時世尊、便ち斯の偈を說きたまはく、

至誠の佛・法・衆は　毒を害ひて遺餘無し　諸佛は毒有ること無く　至誠の佛は毒を害す　至誠の佛・法・衆は　毒を害ひて遺餘無し　諸佛は毒有ること無く　至誠の法は毒を害ふ　至誠の佛・法・衆は　毒を害ひて遺餘無し　諸佛は毒有ること無く　至誠の僧は毒を害ふ　貪欲・瞋恚の毒　世間に三毒有り　如來は永く毒無く　至誠の佛は毒を害ふ　欲怒・瞋恚の毒　此の三は世間の毒なり　如來の法は毒無し　至誠の法は毒を害ふ　欲怒・瞋恚の毒　世間に三毒有り　如來の僧は毒無し　至誠の僧は毒を害ふ　と。

爾の時世尊、此の語を說き已つて、便ち雜毒の食を食したまへり。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「汝等皆先きに食ふこと莫かれ。要らず如來の食し已るを須ちて、然る後に乃ち食せよ」と。爾の時長者、手自ら斟酌し、種々の飲食を行き、佛及び比丘僧を供養しぬ。爾の時尸利掘長者、如來の食し訖りしを見、鉢器を除去して、更に小座を取りて如來の前に在りて坐しぬ。爾の時世尊、長者及び八萬四千の衆の與に、微妙の論を說きたまへり。所謂論とは、施論・戒論・生天の論、欲は不淨想、淫泆は大患たり、出要を樂と爲すと。如來は彼の長者の心意及び八萬四千の衆の心開け、意解して、復、塵垢無きを觀じ、諸佛世尊の常に說法したまふ所の苦・集・盡・道を、盡く八萬四千の衆の與に說き、廣く其の行を分別したまひぬ。爾の時衆人、即ち座上に於て、諸の塵垢盡きて法眼淨を得しこと、猶し新衣の染むるに色を爲し易きが如く、爾の時庶人も亦復是の如し。各座上に於

實に是の如來の出世は遇ひ難し」と。此れを覺知し已つて、卽時に涕零し、頭面に足を禮し、佛に白して言さく、「唯、願くは如來、我悔過を聽したまへ。往を改め、來を修めん。自ら罪有りて、如來を觸嬈しまつりしを知りぬ。唯、願くは世尊、我悔過を受けたまへ、更に之を犯さじ」と。佛、長者に告げたまはく、「過を改めて本意を捐捨し、乃ち能く自ら如來を觸犯せしを知る、賢聖の法中、甚だ曠大と爲す。汝の過を改め、法に隨つて捨てしを聽さん、我今汝の改悔を受けん、後更に犯すこと莫かれ」と。是の如きこと再三なり。

爾の時阿闍世王、尸利掘長者の大火坑及び雜毒の食を施して、如來を害しまつらんと欲すと聞き、聞き已つて瞋恚すること熾盛なり。群臣に告げて曰く、「要らず當に、閻浮里地に此の人と同じき尸利掘の名字の者を消滅すべし」と。又復阿闍世王、如來の功德を憶ひ已つて、悲泣し、涕零し、天冠を脱し已つて、群臣に告げて曰く、「吾今復、活きんことを用ひ爲に、乃ち如來をして火の爲に燒か所、及び比丘僧皆當に燒か被べから使めば、汝等速に長者の家に來至し、如來を觀視まつれ」と。

爾の時耆婆伽王子、阿闍世王に白さく、「大王、愁憂を懷くこと勿れ、亦惡想を興すこと莫かれ、然る所以は、如來は終に他の爲に害せ所れじ、今日尸利掘長者は當に如來の爲に弟子と爲るべし。唯、願くは大王、當に往いて變化を觀たまふべし」と。時に阿闍世王、耆婆伽の爲に誨喩せ所れ、雪山の大象に乘り、尋いで時に尸利掘長者の家に至り、象を下りて卽ち尸利掘の舍內に至る。爾の時衆人普く門外に集まり、八萬四千人有り、爾の時阿闍世王、蓮華の大なること車輪の如きを見、歡喜踊躍して自ら勝ふること能はず、並に是の說を作さく、「如來をして恒に衆魔に勝た使めん」と。耆婆伽王子に告げて曰く、「善い哉、耆婆伽、乃ち如來の斯の如きの要を信ず」と。時に阿闍世王、世尊の所に至り、頭面に足を禮し、一面に在りて坐す。爾の時阿闍世王、如來の口の光明を出したまふを見、亦復、遍く如來の顏色の殊特なるを見、極めて歡喜を懷き、自ら勝ふること能はず。爾の

復、害心無きを知る」と。爾の時世尊、比丘僧と與に前後に圍遶せられて羅閱城に入り、長者の家に至りたまひぬ。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「汝等先きに長者の家に入ること勿れ、亦先きに食すること莫かれ。要らず如來の食するを須ちて、然る後に乃ち食せよ」と。

爾の時世尊、適、足を門の閾上に擧げたまふや、爾の時火坑自然に化して浴池と作り、極めて清涼爲り、衆華其の中に滿ちたり。亦蓮華を生じ、大なること車輪の如く、七寶を莖と爲し、亦餘の蓮華を生じ、蜜蜂の王其の中に遊戲せり。爾の時釋提桓因、梵天王及び四天王、及び乾沓和、阿須倫及び諸の閱叉、鬼神等、火坑の中に此の蓮華を生ぜしを見、各々稱慶して、異音同聲に各々說いて曰く、「便ち如來の勝中の第一爲り」と。爾の時彼の長者の家に種々の外道異學有りて、其の家に集在せり。爾の時優婆塞・優婆夷、如來の變化を見已つて、歡喜踊躍して自ら勝ふること能はず。外道異學は如來の變化を見已つて甚だ愁憂ひを懷けり。上の虛空中の諸尊神天、種々の名華を如來の身上に散ぜり。爾の時世尊、空を履み、地を去ること四寸にして長者の家に至りたまひ、如來擧足の處に便ち蓮華を生ずること、大なること車輪の如し。爾の時世尊、右に廻りて諸比丘に告げたまはく、「汝等悉く皆此の蓮華の上を踏めよ」と。時に諸の聲聞、皆蓮華の上從り長者の家に至りぬ。爾の時世尊、便ち古昔の喩を說きたまはく、「設し我過去以來恒沙の諸佛を供養し、承事し、禮敬して、未だ聖意を失はずば、是の至誠の誓ひを持せん。『此の諸の座をして、皆悉く牢固なら使めん』と。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「我今諸比丘に、先づ手を以て座に憑れ、然る後に乃ち坐することを聽さん。此れは是れ我の敎へなり」と。爾の時世尊及び諸の比丘僧、皆悉く座に就きぬ。是の座の下に皆蓮華を生じ、極めて芬香爲り。

是の時尸利掘、如來の斯の如きの變化を見、便ち斯の念を生ずらく、「吾外道異學の爲に誤ら所たり。我人中の行を失ひ、永く天路を失ひ、心意憒然として、必ず當に此の三惡道の中に趣くべし、

て、一切智有りて、三世の事を知らば、則ち請を受けじ、設し一切智無くば、便ち當に請を受け、諸弟子を將ひて、盡く火の爲に燒か所、天人安きを得て、火害有ること無かるべし」と。

是の時尸利掘默然として、六師の語に隨ひ、卽ち城を出でゝ世尊の所に至り、頭面に足を禮し、雜毒の心を持して、如來に白して言さく、「唯、願くは世尊、及び比丘、當に我請を受くべし」と。爾の時世尊、彼の心中の所念を知り、默然として請を受けたまへり。是の時尸利掘、如來の默然として請を受けたまひしを見しを以て、便ち座從り起ち、頭面に足を禮し、便ち退いて去りぬ。中道に便ち是の念を作さく、「今我六師の所說は審諦なり。然るに沙門は我心中の所念を知らず、必ず當に大火の爲に燒か所べし」と。是の時尸利掘、卽ち家に還つて勅して大坑を作り、大熾火を燃やし、復、約勅して種々の飲食を辦じ、皆悉く毒を著けたり。復、門外に於て大火坑を作り、大火を燃やし、又火上に於て敷床を施設し、皆惡毒を以て飲食の中に著けて、時の至りしことを白ふせり。爾の時世尊、已に時の至りしことを知り、衣を著け、鉢を持し、諸の比丘衆を將ひて前後に圍遶せられて、彼の家に往至したまへり。又諸の比丘僧に勅したまはく、「諸人皆吾に先んじて前行することを得ざれ。亦吾に先んじて前に坐することを得ざれ、亦復、吾に先んじて前食することを得ざれ」と。

是の時羅閱城中の人民の類、尸利掘大火坑を作り、又毒食を作して、佛及び比丘僧を請ぜりと聞き、四部の衆悉く皆涕泣して、「將に如來及び比丘僧を害するに非らず乎」と。或は復世尊の所に至り、頭面に足を禮し、佛に白さく、「願くは世尊、彼の長者の家に至りたまふこと莫かれ。又彼の人大火坑を作り、兼ねて毒食を作る」と。言ふ有り。佛之に告げて曰はく、「諸人恐怖を懷くこと勿れ、如來は終に他の爲に害せ所れじ。正使閻浮里內の火、梵天に至るとも、猶吾を燒くこと能はず、何に況んや此の小火をや。如來を害せんと欲するも、終に此の理り無し。優婆塞當に知るべし。吾

ば、便ち生死之分を受けん。若し是の空三昧を得て、亦所願無くば、便ち無願三昧を得ん。無願三昧を得るを以て、此に死し、彼に生ずることを求めず、都て想念無き時は、彼の行者復、無想三昧有りて娯樂を得可し。此の衆生の類、皆三三昧を得ざるが故に、生死に流浪するなり。諸法を觀察し已つて便ち空三昧を得、已に空三昧を得ば、便ち [一三]阿耨多羅三藐三菩提を成ぜん。我爾の時に當り、空三昧を得しを以て、七日七夜道樹を觀視し、目未だ曾て眴ざるなり。舍利弗、此の方便を以て知る、空三昧とは、諸の三昧に於て最も第一の三昧爲り。王三昧とは空三昧是れなり。是の故に舍利弗、當に方便を求めて、空三昧を辦ずべし。是の如く舍利弗、當に是の學を作すべし」と。爾の時舍利弗、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

七

[一四]聞くこと是の如し。一時佛、羅閱城迦蘭陀竹園所に在し、大比丘衆千二百五十人と倶なりき。爾の時羅閱城中に長者有り、名けて尸利掘と曰ひ、饒財多寶にして、金銀珍寶・車璖・馬瑙、稱計す可からず、又且つ佛法を踈薄し、但外道尼犍子に事ふること、國王・大臣、皆悉く識知せり。是の時外道梵志及び尼犍子、在家・出家の者自ら誹謗して言く、「我有り、我身有り」と計しぬ。并せて六師の輩、皆悉く雲集して、共に此の論を作さく、「今沙門瞿曇事として知らざるは靡く、一切智有り、然れば我等利養を得ず、今此の沙門は多く利養を得、要らず當に方宜を作して、利養を得ざら使むべし。我等當に尸利掘の舍に往至し、彼の長者に權宜を作すことを敎ふべし」と。

是の時梵志尼犍子、及び彼の六師、尸利掘長者の家に往至し、長者に語げて曰く、「大姓、當に知るべし。汝は是れ梵天の所生なり、是れ梵天の子にして、饒益する所多し、汝今沙門瞿曇の所に往至し、我等を愍れむが故に、沙門及び比丘衆を請じ、來つて家に在りて之を祠る可し。又屋中に勅して大火坑を作し、極めて火を燃熾し、食は皆毒を著け、請じて來り食せ使めよ。若し沙門瞿曇にし

【一三】阿耨多羅三藐三菩提(Anuttara sammāsambodhi)とは、無上正等覺と譯す、佛陀の正覺のこと。

【一四】Dhp. A. I. p. 434f.

の部に在りと爲すや、聲聞部なりや、辟支部なりや、佛部と爲ん耶」と。佛、阿難に告げたまはく、「彼の人は當に正しく辟支部に在りと名くべし。然る所以は、此の人は皆諸の功德を造り、衆の善本を行じ、清淨の四諦を修め、諸法を分別するに由ればなり。夫れ善法を行ずとは卽ち慈心是れなり、然る所以は、仁を履み、慈を行ずる此の德廣大なればなり。吾昔此の慈仁の鎧を著け、魔の官屬を降伏し、樹王下に坐して無上道を成じぬ。此の方便を以て慈に最第一なりと知るなり。慈は最勝の法なり。阿難、當に知るべし。故に名けて最勝と爲すなり。慈心を行ずる者は、其の德是の如く稱計す可からず。當に方便を求めて、慈心を修行すべし。是の如く阿難、當に是の學を作すべし」と。爾の時阿難、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

六

〔三〕聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時尊者舍利弗、淸且靜室從り起ちて世尊の所に至り、頭面に足を禮し、一面に在りて坐す。爾の時佛、舍利弗に告げて曰はく、「汝今諸根淸淨にして、顏貌人と異ること有り、汝今何れの三昧に遊ぶや」と。舍利弗、佛に白して言さく、「唯、然り、世尊、我恒に空三昧に遊べり」と。佛、舍利弗に告げて言はく、「善い哉、善い哉、舍利弗、乃ち能く空三昧に遊ぶ。然る所以は、諸の虛空三昧を最も第一と爲すなり。其れ比丘有りて、虛空三昧に遊ばゞ、吾、我人の壽命無きことを計り、亦衆生有るを見ず、亦復、諸行の本末を見ず、已に見ざれば亦行本を造らず、已に行無くば、更に有を受けず、已に有を受くること無くば、復、苦樂之報ひを受けず。舍利弗、當に知るべし。我昔未だ佛道を成ぜず、樹王の下に坐して便ち是の念を作さく、「此の衆生の類は何の法を剋獲せざるが爲に、生死に流轉して解脫を得ざるや」と。時に我復、是の念を作さく、「空三昧有ること無くんば、便ち生死に流浪し、竟に解脫に至ることを得じ。此の空三昧有り。但衆生未だ剋せず、衆生をして想著の念を起さ使む。已に世間の想を起せ

【三】 cf. M. 151. Piṇḍapātapārisuddhi. 「雜阿含經」第二三六經(卷九)參照。

慈を行ぜば、中正の國に生ぜん。復次に慈を行ぜば、顏貌端正にして、諸根缺けず、形體完具せん。復次に其れ慈心を行ぜば、躬自ら如來を見、諸佛に承事し、在家を樂しまず、出家學道することを得て、三法衣を著し、鬚髮を剃除し、沙門の法を修め、無上の梵行を修めんと欲す。比丘、當に知るべし。猶し金剛を人取りて之を食ひ、終に消化せず、要らず當に下過するが如く、其れ慈心を行ずるの人も亦復是の如し。若し如來出世せば、要らず當に道を作して、無上の梵行を修め、生死已に盡き、梵行已に立ち、所作已に辦じて、更に復有を受けず、實の如くに之を知るべし」と。

是の時尊者阿難、佛に白して言さく、「世尊、設し如來世に出でたまはざる時は、彼の善男子は在家を樂しまず、當に何れの所に趣向すべきや」と。佛、阿難に告げて曰はく、「若し如來出でざる時は、然も善男子在家を樂しまず、自ら鬚髮を剃除し、閑靜の處に在りて、己を剋して自ら修めば、卽ち彼の處に於て、諸の有漏を盡して、無漏行を成ぜん」と。是の時阿難、佛に白して言さく、「云何が世尊、彼の人は自ら梵行三乘之行を修めば、彼の人何れの所に趣向せんや」と。佛阿難に告げたまはく、「汝の所言の如く、吾恒に三乘之行を說けり。過去將來を三世の諸佛は、盡く當に三乘の法を說くべし。阿難、當に知るべし。或は是の時有りて、衆生の類、顏貌壽命轉々して減少し、形器瘦弱にして復、威神無く、諸の瞋怒・嫉妬・恚癡・姦僞・幻惑多くして眞ならず、或は復、利根捷疾なる有りて、展轉して諍ひ競ひ、共に相鬪訟し、或は手拳・瓦石・刀杖を以て、共に相傷害せん。是の時衆生の類、草を執りて、便ち刀劍と成して、其の命根を斷たん。其の中の衆生、慈心を行ぜば、瞋怒有ること無く此の變怪を見て、皆恐懼を懷き、悉く共に馳走して此の惡處を離れ、山野の中に在りて、自然に鬚髮を剃除し、三法衣を著し、無上の梵行を修め、己を剋して自ら修め、有漏心を盡くして解脫を得ば便ち無漏の境に入り、各々自ら相謂ひて言く、『我等已に怨家に勝てり』と。阿難、當に知るべし。彼を名けて最勝と爲すなり」と。是の時阿難、復佛に白して言さく、「彼の人は何れ

隱くして去りぬ。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

五

[二] 聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「當に慈心を行じて、廣く慈心を布くべし。慈心を行ずるを以て、所有の瞋恚の心、自ら當に消除すべし。然る所以は、比丘當に知るべし。昔日鬼有り、極めて弊暴爲り、來つて釋提桓因の座上に在りて坐しぬ。是の時三十三天、極めて瞋恚を爲さく、『云何が此の鬼は我主の床上に在りて坐する乎』と。是の時諸天、適ゝ恚心を興す。彼の鬼遂に轉じて、端正にして顏貌常と殊る。爾の時釋提桓因、普集講堂の上に在りて坐し、玉女と共に相娛樂しむ。是の時天子有り、釋提桓因の所へ往至し、帝釋に白して言く、『拘翼、當に知るべし。今惡鬼有りて、尊座の上に在りて坐せり、今三十三天極めて恚怒を懷き、諸天適ま恚怒を興せしに、彼の鬼遂に轉じて端正にして顏貌常に勝されり』と。是の時釋提桓因、便ち是の念を作さく、『此の鬼は必ず是れ神妙の鬼なり』と。

是の時釋提桓因、彼の鬼の所に往至し、相去ること遠からずして、自ら姓名を稱すらく、『吾は是れ釋提桓因、諸天の王なり』と、時に釋提桓因、自ら姓名を稱せり。時に彼の惡鬼、轉じて醜形を成じ、顏貌惡む可し。是れ彼の惡鬼即時に消滅しぬ。比丘、當に此の方便を以て知るべし。其れ慈心を行じて捨離せずば、其の德是の如し。又且つ比丘、吾昔日時に七歲の中、恒に慈心を修め、七成劫、敗劫を經歷し、生死に往來せず、劫壞せんと欲する時、便ち光音天に生じ、劫成ぜんと欲する時、便ち無想天上に生じ、或は梵天と作りて諸天を統領し、十千世界を領し、又復三十七變釋提桓因と爲り、又無數反轉輪聖王と爲りぬ。比丘、此の方便を以て知る、其れ慈心を行ぜば、其の德是の如し。

復次に慈心を行ぜば、身壞命終して梵天上に生じ、三惡道を離れ、八難を去離せん。復次に其れ

【二】「雜阿含經」第一一〇七經（卷四十）Itivuttaka 22. S. 11. 3. 2. Dubbaṇṇiya.

入つて乞食す。爾の時諸比丘、竟に食を得ず。卽ち還つて村を出でぬ。爾の時彼の佛、諸比丘に告げたまはく、『此の如きの妙法を說かん。夫れ食を觀ずるに九事有り[10]、四種の人間の食と、五種の人間を出づるの食となり。云何が四種は是れ人間の食なるや。一には摶食、二に更樂食、三には念食、四には識食なり。是れを世間に四種の食有りと謂ふなり。彼云何が名けて、五種の食世間の表に出づるや。一には禪食、二は願食、三には念食、四には八解脫食、五には喜食なり。是れを名けて五種の食と爲すと謂ふなり。是の如く比丘、五種の食は世間の表に出づ。當に共に專念して、四種の食を捨除し、方便を求めて五種の食を辦ずべし。是の如く比丘、當に是の學を作すべし』と。爾の時諸比丘、彼の佛の敎へを受け已り、卽ち自ら剋し已つて、五種の食を成辦しぬ。是の時彼の魔波旬、其の便りを得ること能はざりき。

是の時波旬、是の念を作さく、『吾今此の沙門に方便を得ること能はず、今當に眼・耳・鼻・口・身・意の便りを求むべし。吾今當に村の中に往いて、諸の人民を敎へ、沙門衆等をして、利養を得ることを求め、之を得せ使令め、以て利養を辦じ、倍す增多せ使むべきなり。彼の比丘をして、利養に貪著し、暫くも捨つること能はざら使め、復眼・耳・鼻・口・身・意に從つて、方便を得んと欲する乎』と。是の時彼の佛の聲聞、時到つて衣を著け、鉢を持して村に入つて乞食す。是の時婆羅村の人民、比丘に衣被・飲食・床臥の具・病瘦の醫藥を供給して、乏しきこと有ら令めず、皆前んで僧伽梨を捉へ、物を以て强施しぬ。是の時彼の佛、衆の聲聞の與に、此の如きの法を說きたまひぬ。『夫れ利養は人を惡趣に墮して、無爲の處に至ら令めず。汝等比丘、想著の心を起して、利養に向ふこと莫かれ。當に念じて捨離すべし。其れ比丘有りて、利養に著せば、五分法身を成ぜず、戒德を具せざるなり』と、是の故に比丘、未だ利養の心を生ぜずば、當に生ぜざら使むべし。已に利養の心を生ぜば、時に速に之を滅せ令めよ、是の如く比丘、當に是の學を作すべし」と。時に魔波旬、卽ち形を

【一〇】四種食とは、摶食・更樂食・念食・識食の四。(一)摶食(Kabaliṅkārāhāra) 物質的食物、(二)更樂食(Phassāhāra) は又觸食ともいひ、觸覺の素材となるもの、(三)念食(Manosañcetanāhāra) は又意志食ともいひ、記憶の素材となるもの、(四)識食(Viññāṇāhāra) とは意識の素材となるもの。食(Āhāra)とは食物の外に原因の義あり。

精神を勞苦して乃ち衣食を求む。彼云何が善法を生じ、彼の村落に住して遠く遊ばざるや」と。佛、阿難に告げたまはく、「衣被・飲食・床臥の具・病瘦の醫藥に三種有り。若し復、比丘にして、專ら四事の供養を念ぜば、所欲果さじ、此れは是れに依つて苦なり。若し復、知足の心を興し、想著を起さずば、諸天人民其れに代つて歡喜せん。又比丘、當に是の學を作すべし。我れ此に由るが故に此の義を說けり。是の故に阿難、比丘は當に少欲知足を念ずべし」と。是の如く阿難當に是の學を作すべし」と。爾の時阿難、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

四

[九] 聞くこと是の如し。一時佛、婆羅園中に在しき。爾の時世尊、時到つて衣を著け、鉢を持して婆羅村に入つて乞食したまひぬ。是の時弊魔波旬、便ち是の念を作さく、「今此の沙門は村に入つて乞食せんと欲す。我今當に方宜を以て、諸の男女を敎へ、食を與へ令めざるべし」と。是の時弊魔波旬、尋いで國界の人民の類に告ぐらく、「彼の沙門瞿曇に食を施さ令むること無かれ」と。爾の時世尊、村に入つて乞食したまふに、人民の類、皆如來と共に言談する者あらず、亦來つて承事し、供養する者有ること無し。如來は乞食して竟に得ざれば、便ち還つて村を出でたまひぬ。是の時弊魔波旬、如來の所に至り、佛に問ひて言さく、「沙門、乞食して竟に得ざりし乎」と。世尊、告げて曰はく、「魔の所爲に由つて、吾をして食を得ざら使めぬ。汝も亦久しからずして、當に其の報ひを受くべし。魔、今吾れの說くを聽け、賢劫の中に佛有りき、名けて拘樓孫如來・至眞・等正覺・明行成・善逝と爲し、世間解・無上士・道法御・天人師・佛・衆祐と號し、世に出現したまひき。是の時彼も亦此の村に依つて居止し、四十萬衆を將ひたり。爾の時弊魔波旬、便ち是の念を作さく、『吾今此の沙門に方便を求めて、終に果獲せじ』と、時に魔復是の念を作さく、『吾今當に婆羅村の中の人民の類に約勅して、沙門に食を施さざら使むべし』と。是の時諸の聖衆、衣を著け、鉢を持して、村に

【九】 Dhp. A. III. p. 257—8
S. 4. 2. 8.

三

[八]聞くこと是の如し。一時佛、舍衛國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「若し比丘有りて、村落に依りて住せば、善法消滅して、惡法遂に增さん。彼の比丘當に是の學を作すべし。『我今村落に在りて居止す、惡法遂に增して、善法漸く滅ぜん。念じて專一ならずば、有漏を盡くすことを得ず、無爲安隱の處に至らざらん。我得る所の衣被・飲食・床臥の具・病瘦の醫藥は、勞苦して乃ち獲ん』と、彼の比丘、當に是の學を作すべし。『吾今此の村落の中に住するに、惡法遂に增し善法消滅せん。我亦衣被・飲食・床臥の具・醫藥を以ての故に、來つて沙門と作らず、吾求願する所の者は今果を獲ず』と、又彼の比丘、當に村落を遠離して去るべし。

若し復、比丘有りて、村落に依りて住せば、善法增益し、惡法消滅し、得る所の衣被・飲食・床臥の具は勤勞して乃ち獲。彼の比丘、當に是の學を作すべし。『我今此の村落に依りて住せば、善法增益し、惡法消滅し、得る所の供養の具は、勤勞して乃ち得ん。又我衣被を以てせざるが故に、出家學道して梵行を修めたり。我學道し求願する所の者、必ず其の法を成ぜん。當に形壽を盡くして承事し供養す應し』」と。爾の時世尊、便ち偈を說いて曰はく、

衣被及び飲食　床臥及び安ずる所に　貪著の想ある應からず　亦此の世に來ること莫かれ　衣被を以てせざるが故に　出家して學道す　學道する所以の者は　必ず其の所願を果さん　比丘尋いで時に應じ　形を盡くして彼の村に住し　彼に於て般涅槃して　其の命の根本を盡くせ

と。是の時彼の比丘、若し人間に在りて、所遊の村に靜處せば、善法增益し、惡法自ら滅せん。彼の比丘、形壽を盡くして彼の村の中に住し、遠く遊ぶ應からず」と。

是の時阿難、世尊に白して言さく、「如來は常に說きたまはず、四大は食に依つて存することを得、亦心所念の法に依り、諸の善の法は心に依つて生ずることを」と。又彼の比丘、村落に依つて住し、

【八】 cf. A. IX. 6.

て、中退して生死に墮落せ令むること無から使めよ。若し比丘有りて九法を成就せば、現法中に於て長大を得ざらん。云何が九と爲すや、惡知識と從事し、親近し、非事に恒に喜び、遊行して恒に長患を抱き、好く財貨を畜へ、衣鉢に貪著し虛り多く、健忘にして、意を亂して定まること非らず、慧明有ること無く、義趣を解せず、時に隨つて誨へを受けず、是れを目連、若し比丘にして此の九を成就せば、現法中に於て長大を得ず、潤及する所有りと謂ふなり。設し比丘有りて、能く九法を成就せば、便ち成辦する所有らん。云何が九と爲すや、善知識と與に從事し、正法を修行して邪業に著せず、恒に獨處に遊びて人間を樂しまず、病少くして患ひ無く、亦復、多く諸の財寶を畜へず、衣鉢に貪著せず、勤行精進して亂心有ること無く、義を聞けば便ち解し、更に重ねて受けず、時に隨つて法を聽き、厭足有ること無し、是れを目連、若し比丘有りて、此の九法を成就せば、現法中に於て饒益する所多しと謂ふなり。是の故に目連、當に念じて勤加し、往いて諸比丘を誨へ、長夜の中に無爲の處に到ら使むべし」と。爾の時世尊、便ち此の偈を說きたまはく、

常に念じて自ら覺悟し　非法に著すること勿れ　修むる所正に行ず應くんば　生死の難を度することを得ん　是れを作して是れを獲　此れを作さば此の福を獲ん　衆生流浪すること久し　老・病・死を斷てよ　已に辦じて更に習はず　復更に非行を造る　此の如きの放逸の人は　有漏の行を成ぜん　設し勤加の心有りて　恒に心首に在りて　展轉して相教誡せば　便ち無漏行を成ぜん

是の故に目揵連、當に諸比丘の與に、是の誨へを作すべし。當に念じて是の學を作すべし」と。是の時世尊、諸比丘の與に極妙の法を說き、歡喜の心を發さ令めたまひぬ。是の時諸比丘、法を聞き已り、彼の衆中に於て、六十餘の比丘漏盡きて意に解しぬ。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

當に此の正法を遠離すべし」と。爾の時世尊、便ち釋種の諫めて、及び梵天王の犢子の喩を受けたまひぬ。是の時世尊、阿難を顧眄したまふ、(阿難)便ち斯の念を生ずらく、「如來は已に諸の人民及び天人の諫めを受けたまへり」と。是の時阿難、即ち舍利弗・目犍連比丘の所に往至して、之に語げて曰く、「如來は衆僧と相見ることを得んと欲したまふ。天及び人民皆此の理を陳啓べまつりぬ」と。爾の時舍利弗、諸比丘に告げて曰く、「汝等各衣鉢を收攝し、共に世尊の所に往至せん、然して如來は已に我等の懺悔を受けたまへり」と。是の時舍利弗・目犍連、五百の比丘を將ひて、世尊の所に至り、頭面に足を禮し、一面に在りて坐しぬ。是の時佛、舍利弗に問ふて曰はく、「吾向者諸の比丘僧を遣りしこと、汝の意に於て云何ん」と。舍利弗言さく、「向者如來の諸の衆僧を遣りたまふや、我便ち是の念を作さく、『如來は好く閑靜に遊びたまひ獨處無爲にして閙に在ることを樂しみたまはず、是の故に諸の聖衆を遣りたまひし耳』」と。佛、舍利弗に告げて曰はく、「汝後に復、何の念を生ぜしや、聖衆は是の時誰の累ひなるや」と。舍利弗、佛に白して言さく、「時に我、世尊、復、此の念を生ぜり、『我亦當に閑靜に在りて、獨り遊ぶべし、市閙の中に處らじ』」と。佛、舍利弗に告げて曰はく、「是の語を作すこと勿れ、亦此の念を生ずること莫かれ。云何が當に閑靜の處に在るべきや。如今聖衆の累ひは、豈舍利弗・目犍連比丘に依るに非らず乎」と。爾の時世尊、大目犍連に告げて曰はく、「我諸の衆僧を遣りし(時)汝何の念有りしや」と。目犍連佛に白して言さく、「如來衆僧を遣りたまふや、我便ち斯の念を生じき『如來は獨處無爲を得んと欲したまふが故に、聖衆を遣りたまひし耳』」と。佛、目犍連に告げたまはく、「汝後に復何の念を生ぜしや」と。目犍連、佛に白して言さく、「然るに今如來は諸の聖衆を遣りたまへり。我等宜しく還つて之を收集し、分散せざら令むべし」と。佛、目犍連に告げたまはく、「善い哉、目連、汝の所説の如し、衆中の標首は、唯吾、汝と二人耳。今自り已往、目犍連は當に諸の後學の比丘を敎誨すべし。長夜の中に永く安隱の處に處り

住まることを須ひざれ」と。

是の時阿難、教へを受け已つて、即ち舍利弗、目揵連比丘の所に往至し、即ち之を語げて曰く、「世尊教へ有り、速に此を離れ去りて、此に住まることを須ひざれ」と。舍利弗報へて曰く、「唯、然り、教へを受く」と。爾の時舍利弗・目揵連、即ち彼の園中を出で、五百の比丘を將ひ、道を涉りて去りぬ。

爾の時諸釋、舍利弗・目揵連比丘の世尊の爲に遣所れしを聞き、即ち舍利弗・目揵連比丘の所に往至し、頭面に足を禮し、舍利弗に白して曰く、「諸賢、何れの所に趣向せんと欲するや」と。舍利弗報へて曰く、「我等如來の爲に遣所れたれり。各安處を求めん」と。是の時諸釋、舍利弗に白して言く、「諸賢、小しく意を留めよ、我等當に如來に向つて懺悔すべし」と。是の時諸釋、即ち世尊の所に往至し、頭面に足を禮し、一面に在りて坐し、世尊に白して言さく、「唯、願くは世尊、遠來の比丘の過咎を原捨したまはんことを。唯、願くは世尊、時を以て教誨したまはんことを、其の中に遠來の比丘にして、初めて道を學ぶ者、新しく法中に來入して、未だ尊顏を觀たてまつらず、備ふるに(六)變悔の心有ること、猶し茂苗の潤澤に遇はずば、便ち成就せざるが如く、今此の比丘も亦復、是の如し。如來を觀たてまつらずして去らば、恐らく能く變悔の心有らん」と。

是の時梵天王、如來の心中の所念を知り、猶し力士の臂を屈伸するが如き頃に、梵天從り沒して如來の處に來至し、頭面に足を禮し、一面に在りて立つ。爾の時梵天王、世尊に白して言さく、「唯、願くは世尊、遠來の比丘の所作の愆過を原捨し、時を以て教誨したまはんことを、其の中に或は比丘有りて、未だ究竟せざる者は、便ち變悔の心を懷かん。彼の人如來の顏像を觀たてまつらずば、便ち變意有りて、還つて(七)本業に就かんこと、亦新生の犢子生れて其の母を失へば、憂愁ひて食はざるが如く、此れも亦是の如し。若し新學の比丘にして、如來を視たてまつることを得ずば、便ち

【六】變悔の心とは、入團せしことを後悔して變心を起すこと。

【七】本業に就くとは、還俗して家業に從ふこと。

王之に問ふて曰く、『汝實に用ひずば、吾當に之を揷るべし』と。商主、王に白さく、『此れは是れ羅刹なれば、王の聖意に隨はん』と。

是の時梵摩達王、即ち此の女を將ひて、深宮に內著し、時に隨つて、接納して怨み有ら令めず。是の時羅刹非人、時に王を取りて食噉ひ、唯、骨の存する有り、便ち捨てゝ去りぬ。比丘斯の觀を作すこと勿れ、爾の時の商主とは舍利弗比丘是れなり。爾の時の羅刹とは、今此の女人是れなり。爾の時の梵摩達王とは、今の長老の比丘是れなり。是の時の馬王とは、今の我身是れなり。爾の時の五百の商人とは、今の五百の比丘是れなり。此の方便を以て、欲を不淨想と爲すことを知る。今故に意を興して想著を起さん乎』と。爾の時彼の比丘、即ち佛足を禮し、佛世尊に白して言さく、『唯、願くは悔を受けて、其の重過を恕したまへ。今自り已後更に復犯さじ』と。是の時彼の比丘、如來の敎へを受け已つて、即ち閑靜の處に在りて、尅し已つて自ら修め、族姓子の梵行を勤修する所以の、無上の梵行を修することを得んと欲せり。是の時彼の比丘、便ち阿羅漢を成ぜり。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

二

[三]聞くこと是の如し。一時佛、釋翅[四]闍婆梨果園に在し、大比丘衆五百人と倶なりき。是の時尊者舍利弗、尊者目犍連、彼に於て夏坐し已つて、五百の比丘を將ひ、人間に在りて遊化し、漸々に[五]釋翅の村中に來至しぬ。爾の時行來の比丘、及び住比丘、各々自ら相謂ひ、共に相問訊し、又且つ聲音高大なり。爾の時世尊、諸比丘の音響の高大なるを聞き、即ち阿難に告げて曰はく、『今此の園中、是れ誰の音響の聲大にして乃ち爾るや。木石を破るの聲に如似たり』と。阿難佛に白して言さく、『今舍利弗及び目連、五百の比丘を將ひ來つて此に在り、行來の比丘と久住の比丘と、共に相問訊せり。故に此の聲有る耳』と。佛、阿難に告げて曰はく、『汝速に舍利弗、目犍連比丘を遣りて、此に

【三】 M. 67. Cātumā. 後漢康孟詳譯「舍利弗摩訶目連遊四衢經」一卷。
【四】 闍婆利果園（Āmalaki-vana）。
【五】 釋翅の村、巴利文には Cātumā 村。

是の時商主復偈を以て報へて曰く、

汝等實に厄に遭へり　此れに惑ひて歸へることを肯ぜず　此の如きこと復久しからじ　盡く鬼の爲に食せ所れん

と。此の偈を說き已つて、便ち捨てゝ去り、馬王の所に往至し、頭面に足を禮し、即ち乘りて去りぬ。是の時諸人、遙に其の主の已に馬王に乘れるを見、其の中に或は喚呼する有り、或は復怨みを稱へざる者有り。是の時最大羅刹の主、復諸の羅刹に向つて此の偈を說きぬ。

已に師子の口に墮せり　外に出づること甚だ難しと爲す　何に況んや我渚に入りては　出でんと欲するも實に難しと爲す

と。

是の時羅刹の主、即ち化して女人の形を作し、極めて端正なり。又兩手を以て胸を指し、說いて曰く、「設し食はずば、汝等終に羅刹と爲さゞるなり」と。是の時馬王、即ち商主を負ひ、度つて海岸に至りぬ。爾の時餘の五百の商人、盡く其の困しみを受けぬ。

爾の時婆羅㮈城中に王有り、梵摩達と名け、人民を治化せり。是の時羅刹、尋いで大商主の後に從ひ、「咄、我夫主を失ふ」と。是の時賈主即ち還つて家に詣りぬ、是の時羅刹、化して男兒を抱き、梵摩達王の所に至る。王之に告げて曰く、「世間に何の災怪有るや、盡く當に滅壞すべき耶」と。羅刹、王に白さく、「夫の爲に棄て所れたり、又我夫主に過無かりき」と。是の時梵摩達王、此の女人の極めて殊妙爲るを見、想著を興起し、女人に語げて曰く、「汝の夫主は乃ち人の義無くして、汝を捨て去りしか」と。是の時梵摩達王、人を遣して其の夫を呼んで曰く、「汝實に此の好き婦を棄てし乎」と。商主報へて曰く、「此れは是れ羅刹にして、女人に非らざるなり」と。羅刹女復王に白して言さく、「此の人は夫主の義無し、今日棄て見れて、復我を罵りて言ふ、「是れ羅刹なり」と云ふ」と。

【二】梵摩達（Brahmadatta）。

しぬ。是の時普富商主、便ち是の念を作さく、『此の大海の中、人の所居之處に非らず、那んぞ此の女人有りて此に止住することを得んや、必ず是れ羅刹ならん、狐疑するに足る勿れ』と。是の時商主女人に語げて言く、『止みなん、止みなん、諸妹、我等は女色を貪らず』と。是の時月の八日、十四日、十五日に、馬王虛空に在りて周施して、此の告勅を作さく、『誰か大海の難を渡らんと欲せば、我能く負ふて度さん』と。比丘、當に知るべし、爾の時に當つて、彼の商主、高樹の上に上りて、遙に馬王を見、音響の聲を聞き、歡喜踊躍して自ら勝ふること能はず、往いて馬王の所に趣き、到り已つて馬王に語げて曰く、『我等五百の商人、風の爲に吹か所て、今來つて此の極難の處に墮せり、海を渡ることを得んと欲す、唯、願くは之を渡せよ』と。是の時馬王、彼の商人に語げて曰く、『汝等悉く來れ、吾當に渡して海の際に至るべし』と。是の時普富長者、衆の商人に語げて曰く、『今馬王近くに在り、悉く來りて彼に就いて、共に海難を渡らん』と。是の時人衆報へて曰く、『止みなん、止みなん、大主、我等は且らく此の間に在りて、自ら相娛樂まん。閻浮提に在りて勤苦する所以は、快樂の義を欲求するなり、珍奇の寶物及び玉女、此の間に悉く備はれり。便ち此の間に五欲自ら娛樂む可し。後日漸々に財貨を合集して、當に共に難を度るべし』と。時に彼の大商主、諸人に告げて曰く、『止みなん、止みなん、愚人、此の間に女人有ること無し、大海之中に、云何が人の居處有らんや』と。諸の商人報へて曰く、『且らく止みなん、大主、我等は此れを捨てゝ去ること能はず』と、是の時普富商主、便ち此の偈を說けり。

　我等此の難に墮せり　男無く女の想ひ無し　斯れは是れ羅刹種なり　漸く當に我等を食ふべし

設し當に汝等、我と共に去らざるべくんば、各自ら將護せよ。設し我身・口・意犯さ所れば、悉く原を見て捨て、心意を繆ること莫かれ』と。是の時諸の商人、與に共に別れの偈を說きぬ。

　我與に彼の　閻浮親里の輩を問訊せよ　此に在りて娛樂しみ　時に家に還えることを得ず　と。

して言さく、「唯、願くは如來、此の女人を受けたまへ。若し如來にして須ひたまはずば、我等に給して使令(たらしめたまへ)」と。是の時世尊、長老の比丘に告げたまはく、「汝愚惑爲り、乃ち能く如來の前に在りて、此の惡音を吐く。汝云何が意を繫ぎて、此の女人の所に在るや。夫れ女人は九の惡法有りと爲す。云何が九と爲すや、一に女人は臭穢にして不淨なり。二に女人は惡口す、三に女人は反復無し、四に女人は嫉妬す、五に女人は慳嫉なり、六に女人は多く遊行を喜ぶ。七に女人は瞋恚多し、八に女人は妄語多く、女に女人は言ふ所輕擧なり。是れを比丘、女人に此の九法の弊惡の行有りと謂ふなり」と。爾の時世尊、便ち此の偈を說きたまはく、

常に喜笑し啼哭し　親しみを現はすも實に親しまず　當に他の方便を求めよ　汝亂念を興すこと勿れ

と。

是の時長老の比丘、世尊に白して言さく、「女人に此の九の弊惡の法有りと雖も、然も我今日此の女を觀察するに、瑕疵有ること無し」と。佛、比丘に告げたまはく、「汝愚人、如來の神口の所說を信ぜざる乎。吾今當に說くべし、過去久遠に婆羅㮈城中に商客有り、名けて普富と曰ふ。五百の商人を將ひて、海に入つて寶を採れり。然るに彼の大海の側に羅剎所居の處有りて、恒に人民を食噉へり。是の時海中に風起り、此の船筏を吹き、彼の羅剎部の中に墮しぬ。是の時羅剎、遙に商客の來るを見、歡喜すること無量なり。卽ち羅剎の形を隱し、化して女人と作り、端正にして比ひ無し。諸の商人に語げて曰く、「善くぞ來れり、諸賢、此の寶渚の上は、彼の天宮と異ること無し。諸の珍寶多きこと、數千百種にして、諸の飮食饒し、又好女有りて、皆夫主無し。我等と共に相娛樂しむ可し」と。

比丘、當に知るべし、彼の商客衆の中、其の愚惑なる者は、女人を見已つて、便ち想著の念を起

# 巻の第四十一

## 馬王品第四十五

一

聞くこと是の如し。一時佛、羅閲城迦蘭陀竹園所に在し、大比丘衆五百人と倶なりき。爾の時彼の城中に婆羅門有り、名けて摩醯提利と曰ひ、善く外道の經術を明かにし、天文地理に貫練せざるは靡く、世間に周旋す可き所の法、悉く皆明了なり。彼の婆羅門の女を名けて意愛と曰ひ、極めて聰朗爲り、顏貌端正にして世の希有なり。是の時婆羅門、「經籍に是の語有り、『二人有りて出世すること、甚だ遇ひ難しと爲し、實に値ふ可からず。云何が二人と爲すや、所謂如來・至眞・等正覺と轉輪聖王となり。若し轉輪聖王出世の時は、便ち七寶有りて、自然に嚮應す』と。我今此の女寶有り、顏貌殊妙にして、玉女中最第一なり。如今轉輪聖王有ること無し。又我れ聞く、『眞淨王子を名けて悉達と曰ひ、出家學道して三十二大人の相八十種好有り、彼れ若し當に家に在るべくんば、便ち當に轉輪聖王と爲るべし、若し出家學道せば、便ち佛道を成ぜん』と、我今此の女を將つて、彼の沙門に與ふ可し」と。

是の時婆羅門、卽ち此の女を將ひて、世尊の所に至り、前んで佛に白して言さく、「唯、願くは沙門、此の玉女を受けたまへ」と。佛、婆羅門に告げて曰はく、「止みなん、止みなん、梵志、吾れ此の著欲の人を須ひず」と。時に婆羅門復、再三佛に白して言さく、「沙門、此の玉女を受けたまへ、方に世界に比するに此の女比ひ無し」と。佛、梵志に告げたまはく、「已に汝の意を受けぬ。但吾已に家を離れて、復、欲を習はざるなり」と。

爾の時長老の比丘有り、如來の後に在りて、扇を執りて佛を扇ぐ、是の時長老の比丘、世尊に白



【一】 J. I. 96. Valāhassa.「中阿含經」第一三六經、商人求財經(巻三四)。

に淨有りとの想、正路に邪路有りとの想、惡に福有りとの想、福に惡有りとの想を起す。此の方便を以て知る、衆生の類は、其の根量り難く、性行各異るなり。若し當に衆生にして、盡く同一想にして、若干想無かるべくんば、九衆生居處は則ち知る可からず、亦分別し難からん。九衆生居は神識の止まる所なるも、亦復、明にし難く、亦復、八大地獄、畜生の所趣有ることを知らず、亦復、知り難し。地獄の苦有ることを別たず、四姓の豪貴有ることを知らず、阿須倫所趣の道有るを知らず、亦復、三十三天を知らざらん。設し當に盡く共に同一心なるべくんば、當に光音天の如くなるべし。衆生若干種なれば、想念も亦若干種なるを以て、是の故に九衆生居處、九神の所止處有るを知り、八大地獄・三惡道有るを知るなり、三十三天に至るも亦復、是の如し。此の方便を以て知る、衆生の類は其性同じからず、所行各異るなり」と。

是の時釋提桓因、世尊に白して言さく、「如來の所說は甚だ奇雅と爲す、『衆生の性は其の行同じからず、想念各異る。其の衆生の所行同じからざるを以ての故に、青・黃・白・黑・長・短の均しからざる有るを致すなり』と、又且つ世尊、諸の天事煩猥なり、天上に還えらんと欲す」と。佛、釋提桓因に告げて曰はく、「宜しく是れ時を知るべし」と。是の時釋提桓因、即ち座從り起ち、頭面に足を禮し、便ち退いて去りぬ。爾の時釋提桓因、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

九止と瞋と孔雀　繫縛と法之本と　病と供養と槃持と　梵行と若干想となり。

# 増壹阿含經卷第四十

復、次に阿難、若しは善男子、善女人にして、善知識と共に從事せば、信根增益し、聞・施・慧・德、皆悉備具すること、猶し月の盛滿せんと欲し、光明漸く增して常時に倍するが如し。此れも亦是の如く。若し善男子・善女人有りて、善知識に親近せば、信・聞・念・施・慧皆悉く增益せん。此の方便を以て知る。其れ善知識とは卽ち是れ全梵行の人なり。若し我れ昔日善知識と與に從事せずば、終に燈光佛の爲に授決せ所見れざりしなり。善知識と與に從事せしを以ての故に、[一]提和竭羅佛の爲に授決せ所見るゝことを得しなり。此の方便を以て知る、其れ善知識とは卽ち是れ全梵行の人なり。若し當に阿難、世間に善知識無くば、則ち尊卑の叙、父母・師長・兄弟・宗親有ること無かるべく、則ち彼の猪犬の屬と與共に一類にして、諸の惡緣を造り、地獄の罪緣を種えん。善知識有るが故に、便ち別に父母・師長・兄弟・宗親有るなり」と。是の時世尊、便ち此の偈を說きたまはく。

善知識は惡に非らず　親法を食と爲すに非らず　善き路に將導す　此の親最尊の說なり

是の故に阿難、復、更に說言すること勿れ、『善知識とは是れ半梵行の人なり』と」。爾の時阿難、佛に從つて敎へを受け、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

## 十一

[二]聞くこと是の如し、一時佛、羅閱城耆闍崛山中に在し、大比丘の衆五百人と俱なりき。是の時釋提桓因、三十三天從り沒して佛所に來至し、頭面に足を禮し、一面に在りて立ち、世尊に白して言さく、「天及び人民に何の想念有り、意に何をか所求するや」と。佛之に告げて曰はく、「世間は流浪し、其の性同じからず、所趣各異り、想念一に非らず、天帝當に知るべし、昔我無數阿僧祇劫に亦此の念を生ぜり、『天及び衆生の類、竟に何をか趣向する所ぞや、何の願ひを求むと爲んや』と、彼の劫從り今日に至るも、一人として心共に同じき者を見ず、釋提桓因當に知るべし、世間の衆生は顚倒の想、無常を常と計するの想、無樂を樂と計するの想、無我なるに我有りとの想、不淨なる



【一】提和竭羅佛(Dīpaṅkara buddha)、譯して然灯佛、燈光佛、錠光佛ともいひ、過去久遠の世に出現せし佛陀にして、釋尊に豫告をせられし佛。

【二】A. IX. 24. Satta.

の理有る可き耳」と。

是の時滿呼王子、卽時に朱利槃特比丘に向ひ、禮して自ら姓名を稱へて、其の懺悔を求むらく、「大神足の比丘、意輕慢を生ぜり、今自り已後、更に敢えて犯さず。唯、願くは懺悔を受けよ、更に敢えて犯さじ」と。朱利槃特比丘、報へて曰く、「汝の悔過を聽さん、後復、犯すこと莫かれ、亦復、賢聖を誹謗すること莫かれ」と。「王子、當に知るべし、其れ衆生有りて、聖人を誹謗せば、必ず當に三惡趣に墮して、地獄の中に生ずべし。是の如く王子、當に是の學を作すべし」と。爾の時佛、滿呼王子の與に極妙の法を說き、勸發して喜ば令めたまひ、卽ち座上に於て此の呪願を演べたまはく。

祠祀は火を上と爲し　經書は頌を最と爲す　人中王を尊しと爲し　衆流は海を首と爲す　星中月を先と爲し　光明は日第一たり　上下及び四方　諸の所有の形物　天及び世間人　佛は最も尊しと爲す　其の福を求めんと欲せば　三佛陀を供養せよ

と。爾の時世尊、此の偈を說き已つて、卽ち座從り起ちたまひぬ。是の時滿呼王子、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

十

〇

聞くこと是の如し、一時佛、舍衛國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時阿難、世尊に白して言さく、「所謂善知識とは卽ち是れ半梵行の人なり、善道に將引して以て無爲に至る」と。佛、阿難に告げたまはく、「是の言を作すこと勿れ、『善知識と言ふは卽ち是れ半梵行の人なり』と、然る所以は、夫れ善知識の人は卽ち是れ全梵行の人にして、與共に從事し、將つて好道を視る。我も亦善知識に由つて、無上正眞・等正覺を成じ、以て道果を成じ、衆生を度脫せしこと稱計す可からず。皆悉く生・老・病・死を免れたり。此の方便を以て知る、夫れ善知識の人は、全梵行の人なり」と。

---

【10】 S. 45. 2.

き。此の比丘は極めて神足大威力有り」と。佛、王子に告げて曰はく、「汝の懺悔を聽さん、如來の所説は終に二有ること無し。又此の世間に九種の人有りて周旋往來す。云何が九と爲すや、一には豫じめ人の情を知る、二には聞き已つて便ち知る、三には相を觀じて然る後に乃ち知り、四には義理を觀察して然る後に乃ち知り、五には味を知りて然る後に乃ち知り、六には義を知り、味を知りて然る後に乃ち知り、七には義を知らず、味を知らず、八には思惟神足の力を學び、九には受けし所の義尠し。是れを王子、九種の人世間に出現すと謂ふなり。是の如く王子、彼の觀相の人を八人中に於て最も第一と爲し、是れに過ぐる者無し。今此の朱利槃特比丘は、神足を習ひて餘の法を學ばず、此の比丘は恒に神足を以て、人の與に說法するなり。我今阿難比丘は相を觀じて便ち知り、豫じめ人の情を知り、『如來は是れを須ひ、是れを用ひたまはず』と知り、亦、『如來は當に是れを說き、是れを離れたまふ應し』と知り、皆分明なら令む。如今阿難比丘の上に出づる者有ること無く、諸經の義を博覽し、周遍せざるは靡し。又此の朱利槃特比丘は、能く一の形を化して若干の形と作し、復還えり合して一と爲す。此の比丘は後日、當に虛空中に於て滅度を取るべし。吾更に餘人の滅度を取るに、阿難比丘、朱利槃特比丘の比の如きを見ざるなり」と。

是の時佛、復諸比丘に告げて曰はく、「我聲聞中、第一の比丘にして、身形を變化し能く大、能小なること、朱利槃特比丘の比の如き有ること無し」と。是の時滿呼王子、手自ら斟酌して衆僧を供養し、鉢器を除去し、更に小座を取りて、如來の前に在りて、叉手して世尊に白して言さく、「唯、願くは世尊、朱利槃特比丘の、恒に我家に至り、其れに隨つて須ふる所の衣被・雜物・沙門の法、盡く我家に在りて之を取ることを聽さん。當に形壽を盡くして所須を供給すべし」と。佛王子に告げたまはく、「汝今王子、還つて朱利槃特比丘に向つて懺悔し、躬自ら之を請ぜよ。然る所以は、非智の人の智者を別たんと欲すること、此の事遇ひ難く、智者の能く有智の人を別つと言はんと欲せば、此

右に遶ること三匝して、便ち退いて去りぬ。即ち其の夜、種々の甘饌・飲食を辦じ、好座具を敷き、時の到れることを白して、「今正に是れ時なり」と。爾の時世尊、鉢を以て朱利槃特比丘をして、捉へて後に在りて侍使め、諸の比丘衆を將ひて、前後に圍遶せられて羅閱城に入りたまひ、彼の王子の所に至り、各次第して坐しぬ。爾の時王子、世尊に白して言さく、「唯、願くは如來、手づから我に鉢を授けたまへ、我今躬自ら如來に飯はしまつらんと欲す」と。佛、王子に告げて曰はく、「今鉢は朱利槃特比丘の所に在り、竟に持ち來らざりき」と。王子佛に白して言さく、「願くは世尊、一比丘を往いて鉢を取り來るに遣はしたまへ」と。佛、王子に告げたまはく、「汝、今自ら往いて如來の鉢を取り來れ」と。

爾の時朱利槃特比丘、五百の華樹を化作し、其の樹下に皆朱利槃特比丘有りて坐せり。爾の時王子、佛の敎へを聞き已つて、往いて鉢を取るに、遙に五百樹の下に皆朱利槃特比丘有りて、樹下に於て坐禪し、繫念在前して、分散有ること無きを見、見已つて便ち是の念を作さく、「何れの者か是れ朱利槃特比丘なるや」と。是の時滿呼王子、即ち世尊の所に還えり來つて、佛に白して言さく、「彼の園中に往くに、均しく是れ朱利槃特比丘なり。知らず、何れの者か是れ朱利槃特比丘なるや」と。佛、王子に告げて曰はく、「還つて園中に至り、最も中央に在りて住し、彈指して是の說を作せ、『其れ實に是れ朱利槃特比丘ならば、唯、願くは座從り起て』」と。是の時滿呼王子、敎へを受け已つて、復園中に至り、中央に在りて立ちて是の說を作さく、「其れ實に是れ朱利槃特比丘ならば、便ち座從り起て」と。王子是の語を作し已れば、其の餘の五百の化比丘、自然に消滅し、唯、一朱利槃特比丘の在る有り。是の時滿呼王子、朱利槃特比丘と共に、世尊の所に至り、頭面に足を禮し、一面に在りて立ちぬ。

爾の時滿呼王子、佛に白して言さく、「唯、願くは世尊、今自ら悔ひて責む。如來の言敎を信ぜざり

よ。若し復、比丘にして、知りて爲さゞれば、當に法律を案ずべし。此れは是れ我の教誡なり」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

八

[七]聞くこと是の如し、一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「九種の人有り、敬ふ可く、貴ぶ可く、之に供(養)せば福を得ん。云何が九と爲すや、所謂向阿羅漢・得阿羅漢・向阿那含・得阿那含・向斯陀含・得斯陀含・向須陀洹・得須陀洹・向種性の人を九と爲す。是れを比丘、九種の人之を供(養)せば、福を得て終に耗減無けんと謂ふなり」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

九

[九]聞くこと是の如し。一時佛、羅閱城迦蘭陀竹園所に在し、大比丘衆五百人と俱なりき。是の時滿呼王子、世尊の所に至り、頭面に足を禮し、一面に在りて坐す。是の時滿呼王子、世尊に白して言さく、「我曾て聞く、『朱利槃特比丘は盧迦延梵志と共に論ぜり。然るに此の比丘答對すること能はざりき』と。我又曾て聞く『如來の弟子の衆中、諸根闇鈍にして、慧明有ること無きもの、此の比丘の上に出づる者無し』と、如來の優婆塞中、居家に在る者にして、迦毘羅衞城中の瞿曇釋種は、諸根闇鈍にして、情意閉塞す』と。佛、王子に告げて曰はく、「朱利槃特比丘は神足の力有りて、上人の法を得るも、世間の談論の宜を習はず。又王子、當に知るべし、此の比丘には極めて妙義有り」と。是の時滿呼王子、世尊に白して言さく、「佛の說きたまふ所、爾りと雖も、然も我れ意の中に此の念を生ず、『云何が大神力有りて、彼の外道異學と共に論議すること能はざるや』と、我今佛及び比丘僧を請ずるも、唯、朱利槃特一人を除かん」と。是の時世尊默然として請を受けたまへり。
是の時王子、已に世尊の請を受けたまひしを見已つて、即ち座從り起ち、頭面に世尊の足を禮し、

---

【七】 A. IX. 10. Ākuneyya.

【八】 向種性の人(Gotrabhū)とは、聖法の顯現する種子をもつてゐる人の意。

【九】 cf. Mano. p. 1316.

を得、諸根缺けずして、其の正法を聞くに堪任するに、今殷懃ならずば、後に悔ひるも及ぶこと無けん。此れは是れ我之教誡なり」と。爾の時彼の比丘、如來の教へを聞き已つて、熟ら尊顏を視たてまつり、即ち座上に於て三明を得、漏盡きて意に解せり。佛比丘に告げたまはく、「汝已に病の原本を解せり乎」と。比丘、佛に白さく、「我已に病の原本を解し、此の生・老・病・死を去離せり。皆是れ如來の神力の加へたまふ所にして、四等の心を以て一切を覆護したまふこと、無量無限にして稱計す可からず。身・口・意淨し」と。是の時世尊、具足して法を說き已つて、即ち座從り起ちて去りたまひぬ。

爾の時世尊、阿難に告げて曰はく、「汝今速に揵椎を打ち、諸有の比丘にして、羅閱城に在る者を盡く普會講堂に集めよ」と。是の時阿難、佛從り教へを受け、即ち諸比丘を集めて普會講堂に在り。前んで佛に白して言さく、「比丘已に集れり、唯、願くは世尊、宜しく是れ時を知りたまふべし」と。爾の時世尊、講堂の所に往至し、座に就て坐したまへり。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「汝等の學道は國王盜賊を畏れしが爲に出家せし乎、比丘、信堅固にして無上の梵行を修め、生・老・病・死・憂・悲・苦・惱を捨つることを得んと欲するや、亦十二牽連を離れんと欲するや」と。諸比丘對へて曰さく、「是の如し、世尊」と。佛、諸比丘に告げたまはく、「汝等出家せし所以は、共に一師の同一の水乳なり。然るに各々相瞻視せざりき。今自り已後、當に展轉して相瞻視すべし。設し病比丘にして弟子無き者は、當に衆中に於て次を差ち、病人を看せ使むべし。然る所以は、此れを離れ已つて、更に所爲の處福、病之人を視るに勝さる者を見ざればなり。其れ病を瞻る者は我を瞻ると異ること無し」と。爾の時、世尊便ち斯の偈を說きたまはく、

設し我れ及び　過去の諸佛を供養する有らば　我に施すの福德　瞻病に異ること無けん

と。爾の時世尊、此の教へを說き已つて、阿難に告げて曰はく、「今自り已後諸比丘、各々相瞻視せ

一鴿に由るが故に、自ら命根を投ぜり、何に況んや今日已に佛道を成ぜり、當に此の比丘を捨つべけん乎。終に此の處無し。又釋提桓因先きに此の病比丘を瞻ず、毘沙門天王護世の主も亦相瞻視せざりき」と。皆默然として對へまつらず。爾の時如來、手に掃箒を執りて汚泥を除去し、更に座具を施設し、復、與に衣裳を浣き、三法之を視、病比丘を扶けて坐せ令め、淨水に沐浴すれば、諸天上に在りて、香水を以て之に灌ぐ有り。是の時世尊、以て比丘を沐浴し已り、還つて床上に坐し、手自ら食を授けたまへり。

爾の時世尊、比丘の食し訖れるを見、鉢器を除去し、彼の比丘に告げて曰はく、「汝今當に三世の病を捨つべし。然る所以は、比丘、當に知るべし。生るれば處胎之厄有り、生に因つて老有り、夫れ老を爲さば、形羸へ、氣竭くるなり。老に因つて病有り、夫れ病を爲さば、坐臥に呻吟し、四百四病一時に俱臻す。病に因つて死有り、夫れ死を爲す者は、形神分離し、善惡に往趣す。設し罪多ければ、當に地獄に入るべし。刀山劍樹、火車爐炭、融銅を呑飲し、或は畜生と爲つて人の爲に使はれ、食するに芻草を以てし、苦を受くること無量なり。復、不可稱計無數劫中に於て、餓鬼の形と作り、身長數十由旬にして、咽細きこと針の如し。復、融銅を以て其の口に灌ぎ、無數劫中を經歷し、人身と作ることを得るも、榜笞搒掠せらるゝこと稱計す可からず。復、無數劫中に於て、天上に生ずることを得るも、亦恩愛合會を經、又恩愛別離に遇ひ、厭足無からんと欲す。賢聖道を得ば爾して乃ち苦を離る。今九種の人有りて、苦患を離る。云何が九と爲すや、所謂向阿羅漢・得阿羅漢・向阿那含・得阿那含・向斯陀含・得斯陀含・向須陀洹・得須陀洹・種性の人を九と爲す。是れを比丘、如來世間に出現すること、甚だ値ひ難く、人身得難く、正しく國中に生ずるも亦復、遭ひ難く、善知識と相遇ふことも亦復、是の如く、說法の言を聞くことも亦遇ふ可からず。法々相生ずること、時時にして乃ち有りと謂ふなり。比丘、當に知るべし。如來は今日世間に現在せり。正法を聞くこと

案行したまひぬ。爾の時病比丘、遙に世尊の來りたまふを見、卽ち座從り起たんと欲して、自ら轉搖すること能はず。是の時如來、彼の比丘の所に到つて、之に告げて曰はく、「止みなん、止みなん、比丘、自ら動轉すること勿れ。吾自ら座有りて具足し、坐することを得る耳」と。是の時毘沙門天王、如來の心中の所念を知り、野馬世界從り沒して、佛所に來至し、頭面に足を禮し、一面に在りて立つ、是の時釋提桓因、如來の心中の所念を知り、卽ち佛所に來至し、梵天王も亦復、如來の心中の所念を知り、梵天從り沒して佛所に來至し、頭面に足を禮し、一面に在りて坐しぬ。時に四天王、如來の心中の所念を知り、佛所に來至し、頭面に足を禮し、一面に在りて立ちぬ。

是の時佛、病比丘に告げて曰はく、「汝今患苦損ずるところ有りや、增すに至らざる乎」と。比丘對へて曰さく、「弟子の患苦は、遂に增して損せず、極めて賴り少しと爲す」と。佛、比丘に告げたまはく、「瞻病人は今所在爲るや、何人が來つて相瞻視するや」と。比丘、佛に白して言さく、「今此の病に遇ふも、人の相瞻視するもの無きなり」と。佛、比丘に告げたまはく、「汝昔日未だ病まざるの時、頗ふらくは病人を問訊せし乎」と。比丘、佛に白して言さく、「往いて諸の病人を問訊せざりき」と。佛、比丘に告げたまはく、「汝、今正法中に善利有ること無し。然る所以は、皆往いて病を瞻視せざりしに由るが故なり。汝、今比丘、恐懼を懷くこと勿れ、當に躬自ら供養して、乏しきこと有らざら令むべし。我今日の如きは、天上人中に獨歩して侶無し、亦能く一切の病人を瞻視し、救護無き者には與に救護を作し、盲者には與に眼目と作り、諸の病人を救へり」と。是の時世尊、自ら不淨を除き、更に與に座具を敷きたまひぬ。

是の時毘沙門天王及び釋提桓因、佛に白して言さく、「我等自ら當に此の病比丘を瞻るべし。如來は復勞を執りたまふこと勿れ」と。佛諸天に告げて曰はく、「汝等且く止みなん、如來は自ら當に時を知るべし。我の如きは、自ら昔日を憶ふに、未だ佛道を成ぜずして、菩薩の行を修せし(時)、

見・聞・念・知・一種・若干種乃至涅槃に於ても亦涅槃に著せず、涅槃の想を起さず、然る所以は、皆善き分別と善き觀察とに由ればなり、若し彼の比丘、漏盡阿羅漢の、所作已に辦じて重擔を捨て、生死の原本を盡くし、平等に解脫し、彼能く地種を分別して、都て想著を起さず、地種・人・天・梵王乃至有想無想處も亦復、是の如く、涅槃に至りて涅槃に著せず、涅槃の想を起さず。然る所以は、皆婬・怒・癡を壞くに由るの致す所なり。比丘、當に知るべし。如來・至眞・等正覺は善く地を分別し、亦地種に著せず、地種の想を起さず。然る所以は、皆愛の網を破るに由るの致す所にして、有に因つて生有り、生に因つて老死有るを、皆悉く除盡すればなり。是の故に如來は最正覺を成ぜしなり」と。佛此の語を說きたまひし時、是の時諸比丘、其の敎へを受けざりき。然る所以は、魔波旬、心意を閉塞せしに由るが故に。此の經を名けて一切諸法の本と曰ひ、我今具足して之を說けり。諸佛世尊の修行す應き所は、我今已に具足して施行せり。汝等當に念じて樹下に閑居し、意を端し、坐禪して、妙義を思惟すべし。今爲さずば後に悔ひるも益無けん。此れは是れ、我の敎誡なり」と、爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

## 七

[六]聞くこと是の如し、一時佛、羅閱城迦蘭陀竹園所に在し、大比丘衆五百人と俱なりき。爾の時羅閱城中に一比丘有り、身疾病に遇ひ、至つて困悴を爲し、臥して大小便し、自ら起ちて止まること能はず、亦比丘の往いて瞻視する者無く、晝夜に佛の名號を稱へき。「云何が世尊は獨り愍ま見さるや」と。

是の時如來、天耳を以て、彼の比丘の怨みを稱へ、喚呼して如來に歸投するを聞きたまひぬ。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「吾汝等と與に、悉く諸房を案行して、諸の住處を觀ん」と。諸比丘對へて曰さく、「是の如し、世尊」と。是の時世尊、比丘僧と與に前後に圍遶して、諸房の間を



【六】cf. Dhp. A. I. p. 319.

聞くこと是の如し、一時佛、優迦羅竹園中に在し、大比丘衆五百人と倶なりき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「我今汝の與に、當に妙法を說くべし。初も善く、中も善く、竟りも善く、義理深邃にして、清淨の梵行を修行す。此の經を名けて一切諸法の本と曰ふなり。汝等善く之を思念せよ」と。諸比丘對へて曰さく、「是の如し、世尊」と。是の時諸比丘、佛從り敎へを受けぬ。佛之に告げて曰はく、「彼云何が名けて一切諸法之本と爲すや。是に於て比丘、凡夫の人は賢聖之敎へを覩ず、亦、如來の言敎を掌護せず、善知識に親近せず。善知識の言敎を受けず、彼れ此の地を觀じて實の如く之を知る。『此れは是れ地、如審に是れは地、如實に是れは地なり。亦復、是れ水、亦復、是れ火、亦復、是れ風』と、四事合して以て人を爲す、愚者の娯樂する所なり。天は自ら天爲るを知り、天中の天を樂しみ、梵天は自ら梵天爲ることを知り、大梵は自ら大梵爲ることを知り、能く出づる者無し。光音天は還つて自ら相知り、光音天に由つて來り、遍淨天は自ら遍淨天爲ることを知り、果實天は自ら果實天爲ることを知つて錯亂せず、阿毘耶陀天は自ら阿毘耶陀天爲ることを知り、空處天は自ら空處天爲ることを知り、識處天は自ら識處天爲ることを知り、不用處天は自ら不用處天爲ることを知り、有想無想處天は自ら有想無想處天爲ることを知り、見者は自ら見を爲すことを知り、聞者は自ら聞を爲すことを知り、欲者は自ら欲を爲すことを知り、智者は自ら智を爲すことを知り、一類は自ら一類爲ることを知り、若干類は自ら若干類爲ることを知り、悉く具足するものは、自ら悉く具足を爲すことを知り、涅槃するものは、自ら涅槃爲ることを知り、中に於て自ら娯樂しむ。然る所以は、智者の所說に非らざればなり。

若し聖弟子にして、往いて聖人を覲、其の法を承受し、善知識に從事し、恒に善知識に親近し、此の地種を觀じて皆悉く分明し、所來の處を知らば、亦地に著せず、汚染の心有ること無し。水・火・風も亦復、是の如し。人・天・梵王・光音・遍淨・果實・阿毘耶陀天・空處・識處・不用處・有想無想處・

す可きに默を知り、起つ可きに起つを知る。是の如く比丘は時節を知るなり。云何が比丘、時を知つて行くや。是に於て比丘、往く應きに即ち往き、住る應きに即ち住り、節に隨つて法を聽く。是の如く比丘、時を知つて行くなり。云何が比丘、飲食に節を知るや、是に於て比丘、得し所の遺餘は、人と共に分ちて所有を惜まず。是の如く比丘、飲食に節を知るなり。云何が比丘、睡眠を少くするや。是に於て比丘、初夜の時警寤を習ひ、三十七品を習ひて、漏脫有ること無く、恒に以て經行し、臥して覺めて其の意を淨め、又中夜に於て深奧を思惟し、後夜の時に至つて、右脇を地に著け、脚と脚とを相累ね、計明の想を思惟し、復、起ちて經行して其の意を淨む。是の如く比丘、睡眠を少くするなり。云何が比丘、少欲にして返復を知るや、是に於て比丘、三尊を承事し、師長を奉敬す。是の如く比丘、少欲にして返復を知るなり。是の如く賢善の比丘は九法を成就す。今此の九法は當に念じて奉行すべし。是の如く比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

五

[五] 聞くこと是の如し、一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げて曰はく、「女人は九法を成就して男子を繫縛す。云何が九と爲すや、所謂歌舞・伎樂・笑啼・常に方宜を求め、自ら幻術を以てし、顏色形體、爾許の事を計る中、唯、更樂有りて、人を縛すること最も急なり。百倍千倍終に相比せず。我今日の如きは、諸義を觀察するに、更樂の人を縛すること、最も急にして、是れを出づる者無し。彼の男子に隨つて之を繫ぐこと牢固なり。是の故に諸比丘、當に念じて此の九法を捨つべし。是の如く比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

六



【五】 A. VIII. 17. Bandha.

就するなり。云何が惡比丘、睡眠を少くするや、是に於て惡比丘、思惟す應き所の法にして、思惟せず、是の如きの惡比丘は睡眠を少くす。云何が惡比丘、匿處に淫泆なるや。是に於て惡比丘、隱匿を爲す所を人に向つて說かず『我今淫を行ず、人に知ら令むること勿れ』と、是の如きの比丘、隱匿する所に淫泆なるなり。云何が惡比丘は返復無きや。是に於て惡比丘は恭敬の心無く、師長に奉事して、貴重の人を學ばず、是の如きの惡比丘は返復有ること無きなり。若し惡比丘にして、此の九法を成就して、念捨離せずば、終に道果を成ぜじ。是の故に比丘、諸の惡の法は、念じて當に之を捨つべし。是の如く比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

四

聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「孔雀鳥は九法を成就す。云何が九と爲すや、是に於て孔雀鳥は顏貌端正にして、音響清徹なり。行步庠序として、時を知つて行き、飮食に節を知り、常に念じて足るを知り、念じて分散せず、睡眠を少くし、亦復、少欲にして返復を知る。是れを比丘、孔雀之鳥は此の九法を成就すと謂ふなり。賢哲の比丘も亦復、九法を成就す。云何が九と爲すや、是に於て賢善の比丘は、顏貌端正にして、音響清徹なり。行步庠序として、時を知つて行き、飮食に節を知り、常に念じて足るを知り、念じて分散せず、睡眠を少くし、亦復、少欲にして返復を知るなり。

云何が賢善の比丘は顏貌端正なるや、所謂彼の比丘は、出入・行來・進止の宜、終に叙を失はず。是の如く賢善の比丘は顏貌端正なり。云何が比丘、音響清徹なるや、是に於て比丘、善く義理を別ち、終に錯亂せず。是の如く比丘は音響清徹なり。云何が比丘、行步庠序なるや。是に於て比丘、時を知りて行くに次叙を失はず。又誦す可きを知り、知りて誦し、習ふ可きに習ふことを知り、默

彼の檀越施主は云何が三法を成就するや、是に於て檀越施主は信成就し、誓願成就し、亦殺生せず、是れを檀越施主は此の三法を成就すと謂ふなり。所施の物云何が此の三法を成就するや、是に於て施物は色成就し、香成就し、味成就す。是れを施物の三事成就と謂ふなり。云何が受物の人は三事を成就するや、是に於て受物の人、戒成就し、智慧成就し、三昧成就す。是れを受施の人三法を成就すと謂ふなり。是の如く達嚫は此の九法を成就し、大果報を獲て、甘露滅盡の處に至るなり。夫れ施主と爲りて其の福を求めんと欲せば、當に方便を求めて、此の九法を成就すべし。是の如く比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

三

聞くこと是の如し。一時佛、舍衛國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく「九法を成就することを爲す。云何が九と爲すや、强顏耐辱・貪心・慳著・心念捨離せず、健忘、少睡、隱匿、婬泆、亦、返復無きを九と爲す。是れを比丘、此の九法を成就すと爲すと謂ふなり。惡比丘も亦復九法を成就す。云何が九と爲すや。是に於て惡比丘は强顏、耐辱、貪心、慳著、健忘、少睡、婬泆、隱匿、亦、返復無く、念じて捨離せざるを九と爲すなり。

云何が惡比丘は强顏なるや、是に於て惡比丘は、求む應からざる者にして之を求め、沙門の行に違ふ。是の如きの比丘を、名けて强顏と爲すなり。云何が惡比丘は耐辱なるや、是に於て惡比丘は諸の賢善の比丘の所に在りて、自稱歎說して、他人を毀呰す。是の如きの比丘を名けて耐辱と爲すなり。云何が比丘、貪心を生ずるや、是に於て比丘、他の財物を見て皆貪心を生ず、此れを名けて貪と爲すなり。云何が比丘慳著なるや、是に於て比丘、得る所の衣鉢を人と共にせず、恒に自ら藏擧す。是の如きを名けて慳著と爲すなり。云何が比丘、健忘なるや、是に於て惡比丘、恒に多く妙善の言を漏失し、亦、方便を思惟せず、國事兵戰の法を論說す。是の如きの惡比丘、此の健忘を成

# 卷の第四十

## 九衆生居品第四十四[一]

### 一

[二]聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「[三]九衆生居處有り、是れ衆生の所居の處なり。云何が九と爲すや、或は衆生有りて、若干種の身にして、若干種の想なり、所謂天及び人なり。或は衆生有りて、若干種の身にして一想なり。所謂梵迦夷天にして、最初に出現せしなり。或は衆生有りて、一身にして若干想なり、所謂光音天なり、或は衆生有りて、一身にして一想なり、所謂遍淨天なり。或は衆生有りて、無量の空なり、所謂空處天なり。或は衆生有りて、無量の識なり、所謂識處天なり。或は衆生有りて不用處なり、所謂不用處天なり。或は衆生有りて有想無想の有想無想處天なり。諸の所生の處を名けて九と爲すなり。是れを比丘、九衆生居處と謂ひ、[四]群萠の類、曾て居し、已に居し、當に居するなり。是の故に比丘當に方便を求めて、此の九處を離るべし。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

### 二

聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「當に嚫願に九種の德有ることを說くべくんば、汝等善く之を思念せよ。吾今當に其の義を敷演すべし」と。是の時諸比丘、佛の教誡を受けぬ。佛、比丘に告げたまはく、「彼れ云何が名けて嚫願の九種の德と爲すや、比丘、當に知るべし。檀越施主は三法を成就し、所施の物も亦三法を成就し、受物の人も亦三法を成就す。

---

【一】九衆生居品及び次の馬王品は九法を明す。

【二】A. IX. 24. Sattāvāsa.

【三】九衆生居處(Navasattāvāsā)。

【四】群萠とは、衆生のこと。

「八種の人有りて、生死に流轉し、生死に住せず。云何が八と爲すや、趣須陀洹・得須陀洹・趣斯陀含・得斯陀含・趣阿那含・得阿那含・趣阿羅漢・得阿羅漢なり。是れを比丘、此の八人有りて、生死に流轉し、生死に住せずと謂ふなり。是の故に比丘、其の方便を求めて、生死の難を度し、生死に住すること勿れ。是の如く比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所説を聞いて、歡喜奉行しぬ。

馬血と齋と難陀　提婆達と船筏と　牧牛と無根の信　世法と善と八人となり。

# 增壹阿含經卷第三十九

雖も今猶大幸を獲、無根の信を得たり。是の故に比丘、罪を爲すの人、當に方便を求めて、無根の信を成ずべし。我優婆塞の中、無根の信を得し者は、所謂阿闍世王是れなり」と。爾の時諸比丘、佛の所説を聞いて歡喜奉行しぬ。

八

一〇 聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「世に八法有り、生ずるに隨つて迴轉す。云何が八と爲すや、一には利、二には衰、三には毀、四には譽、五には稱、六には譏、七には苦、八には樂なり。是れを比丘、此の八法有りて、世に隨つて迴轉すと謂ふなり。諸比丘、當に方便を求めて、此の八法を除くべし。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所説を聞いて歡喜奉行しぬ。

九

聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「如來世間に出現し、又世界に於て佛道を成ずるに、然も世間の八法に著せざること、猶し與に周旋するがごとく、猶し淤泥の蓮華を出生し、極めて鮮潔を爲し、塵水に著せず、諸天に愛敬せ所れ、見る者心歡ぶが如し。如來も亦復是の如く、胞胎に由つて生じ、中に於て長養し、佛身を成ずることを得ること、亦琉璃之寶の淨水の珍にして、塵垢の染む所と爲らざるが如し。如來も亦復是の如く、亦世間に生じ、世間の八法の染著する所と爲らざるが如し。是の故に比丘、當に勤加精進して八法を修行せよ。是の如く比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所説を聞いて歡喜奉行しぬ。

十

一一 聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、

【10】 A. VIII. 5. Lokaparivatta.)°

【11】 cf. A. VIII. 60. Āhuneyya.

以て知るべし。現世に福を作せば、現報を受くることを得るなり」と。王、佛に白して言さく、「我今此の譬喩を以て、中に於て解を受けたり。今日世尊は重ねて其の義を演べたまへり。今自り已後其の義を信受しまつらん。唯、願くは世尊、弟子と爲ることを受けたまへ。自ら佛・法・比丘僧に歸しまつり。今復懺悔しまつる。愚の如く、惑の如くして、父王を過無くして、取りて之を害せり。今身命を以て、自ら歸しまつる。唯、願くは世尊、其の罪愆を除きたまへ、其の妙法を演べたまへば、長夜に無爲ならん。我自ら知る如く、所作の罪報、善本有ること無し」と。佛、王に告げて曰はく、「世に二種の人有りて、罪無くして命終す。臂を屈伸するが如き頃に、天上に生ずることを得、云何が二と爲すや、一には罪の本を造らずして、其の善を修む。二には罪を爲して、其の造りし所を改む。是れを二人、命終を取れば天上に生じ、亦流滯無しと謂ふなり」と。爾の時世尊、便ち此の偈を説きたまはく、

人極めて惡行を作すも　悔過せば轉じて微薄なり　日に悔ひて懈り息むこと無くば：罪根永く已に拔けん。

是の故に大王、當に法を以て治化して、非法を以てすること莫かるべし。夫れ法を以て治化せば、身壞命終して、善處天上に生ぜん。彼已に命終せば、名譽遠布し、周く四方に聞こえ、後人共に傳ふらく、『昔日王有り、正法もて治化し、阿曲有ること無かりき』と。人以て彼の人の所生の處を稱傳せば、壽を增し、算を益して中夭有ること無けん。是の故に大王、當に歡喜の心を發して、三尊佛・法・聖衆に向ふべし。是の如く大王、當に是の學を作すべし」と。

爾の時阿闍世王、即ち座從り起ち、頭面に佛足を禮し、即ち退いて去りぬ。王去ること遠からずして、佛、諸比丘に告げたまはく、「今此の阿闍世王は、父王を取りて害せずば、今日初沙門果の證を得て、四雙八輩の中に在り、亦復、賢聖八品道を得て、八愛を除去し、八難を超越すべし。爾りと

作せば、現報を受くることを得ん」と。佛、王に告げて曰はく、「彼の勞有るの人、年歳を經歷し、來つて王に白して言く、『我等功勞已に立ちたり。王に明に知ら所、王に從つて意の所願を求めんと欲す』と、王、當に之に與ふべきや不乎」と。王、佛に白して言さく、「彼れの所願に隨つて、之を違ぜじ」と。佛、王に告げて曰はく、「彼の勞有るの人、王を辭して鬚髮を剃除し、三法衣を著け、出家學道して、淸淨行を修むることを得んと欲せば、王聽すや不乎」と。王、佛に白して言さく、「唯、然り、之を聽さん」と。佛、王に告げて曰はく、「設し王、彼の鬚髮を剃除し、出家學道して、我左右に在るを見ば、王は何をか施爲せ所れんと欲するや」と。王、佛に白して言さく、「承事し、供養して、時に隨つて禮拜せん」と。佛、王に告げて曰はく、「此の方便を以て知る、現世に福を作さば、現報を受くることを得るなり。設し彼の勞有るの人、持戒完具して所犯有ること無きに、王は何をか施行せ所れんと欲するや」と、王、佛に白して言さく、「其の形壽を盡くして、衣被・飮食・床敷臥の具・病瘦の醫藥を供給し、缺減せ使めざらん」と。佛、王に告げて曰はく、「此の方便を以て知る、現身に福を作せば、現報を受くることを得るなり。設し復彼の人、已に沙門と作り、有漏を盡して、無漏心解脫・智慧解脫を成じ、己身に作證して自ら遊化し、生死已に盡き、梵行已に立ち、所作已に辦じて、更に復有を受けず、實の如く之を知れば、王何を爲さんと欲するや」と。王、佛に白して言さく、「我當に形壽を盡くして、衣被・飮食・床臥の具・病瘦の醫藥を承事し、供養して、乏しきこと有ら令めざるべし」と。佛、王に告げて曰はく、「當に此の方便を以て知るべし。現世に福を作せば、現報を受くることを得るなり。設し復彼の人、其の形壽を盡くして、無餘涅槃界に於て般涅槃せば、王は何を施設せ所れんと欲するや」と。王、佛に白して言さく、「當に四の道頭に於て、大神寺を起し、兼ねて香華を以て供養し、繒幡蓋を懸け、承事し、禮敬すべし。然る所以は、彼は是れ天身にして、人身を爲すに非らざればなり」と。佛、王に告げて曰はく、「當に此の方便を

の苦樂を受く』と。時に我復是の念を作さく、『我今問ふ所は現世の報ひなるに、乃ち生死せんとする來相を答ふ』と、復之を捨てゝ去りぬ。往いて先毘盧に問ふに、此の如きの義を持てせしに、彼の人我に報へて言く、『過去は已に滅して、更に復生ぜず。當來未だ至らざれば、亦復有らず。現在は住らず、住らば卽ち變易せん』と。時に我復是の念を作さく、『我の今問ふ所は現世の報ひなるに、乃ち三世を持つて相酬ふ。此れ正理に非らず』と、卽ち復捨て去りぬ。尼揵子の所に至りて此の義を問へり、『云何が尼揵子、頗ふらくは、現世に福を作して、現世に報ひを受くることを得ること有りや』と。彼我に報へて言く、『因無く、緣無くして衆生結縛す。亦因有ること無く、亦緣有ること無くして、衆生結縛に著す。因無く、緣無くして衆生清淨なり』と。時に我復是の念を作さく、『此の梵志等、斯れは是れ愚惑にして眞僞を別たざること、猶し盲ひの目無きがごとく、所問の義を竟に相報へず、轉輪聖王種を弄ぶに如似たり』と、尋いで復之れを捨て去りぬ。今我、世尊、故に其の義を問ひまつる。現世に福を作して、現に報ひを受くるや。唯、願くは世尊、其の義を演說したまへ」と。

　爾の時世尊、告げて曰はく、「大王、我今汝に義を問はんに、所樂に隨つて之を報へよ」大王、頗ふらくは、典酒厨宰有りて、物の左右使人を賞護する乎」と。王、佛に白して言さく、「唯、然り、之有り」と、「設し彼の使人勞を執ること久しきを經ば、復、當に賞遺すべきや不乎」と。王佛に白して言さく、「功に隨つて敍用して、怨有ら令めず」と。佛、王に告げて曰はく、「此の方便を以て知る、現世に福を作せば、現報を受くることを得るなり。云何が大王、旣に高位に處りて、民を恤すに禮を以てし、當に復賞遺すべきや不乎」と。王、佛に白して言さく、「唯、然り、世尊、食は共に甘を同じくし、命を幷せて恨まず」と。佛、王に告げて曰はく、「當に此の方便を以て知るべし。昔日出づる處極めて卑しきも、漸々に功を積み、王と歡びを同じうす。是れを以ての故に、現世に福を

に住して坐しぬ。

時に王、佛に白して言さく、「唯、願くは所問有らんと欲す。如來にして聽したまはゞ、乃ち敢えて問ひまつらん耳」と。佛、王に告げて曰はく、「疑難有らば、宜しく時に之を問ふべし」と。王、佛に白して言さく、「現世に於て福を造れば、現報を受くることを得るや不乎」と。佛、王に告げて曰はく、「古昔已來、頗ふらくは此の義を以て、曾て人に問ひし乎」と。王、佛に白して言さく、「我昔曾て此の義を以て、他人に問へり。不蘭迦葉なり」と、「云何が不蘭迦葉、現世に福を作して、現報を受くることを得る乎」と。不蘭迦葉我に報へて言く、『福無く、施無く、今世後世は善惡の報ひ無し。世に阿羅漢等の成就者無し』と。我爾の時に當つて、此の受果の報ひを問ひしに、彼報へて曰く、『無し』と。人有りて問ふに瓜の義を以てせしに、報ふるに榛の理を以てするが如く、今此の迦葉も亦復是の如し。時に我是の念を作さく、『此の梵志は已に我豪族の生種の所問の義を解せず。此の人方便して餘事を引いて報へり』と、時に我、世尊、我即ち其の頭を斷たんと欲せしも、即ち其の語を受けず、尋いで之を發遣しぬ。

時に我復阿夷耑の所に至りて、此の義を問ひしに、阿夷耑我に報へて言く、『若し江の左に於て衆生を殺害し、罪を作ること無量なるも、亦罪有ること無く、亦惡果の報ひ有ること無し』と。時に我、世尊、復是の念を作さく、『我今現世の受報の義を問ひしに、此の人乃ち殺害を持つて吾に報ふること、猶し人有りて、梨の義を問ふに、榛を以て之に報ふるが如し』と。即ち之を捨てゝ去りぬ。復羅耶樓の所に至りて、此の義を問ひしに、彼の人我に報へて曰く、『江の右邊に於て、諸の功德を造くること稱計す可からざるも、中に於て亦善の報ひ無し』と。我爾の時復是の念を作さく、『吾今問ふ所の義は、竟に其の理を報へず』と、復之を捨て去りぬ。復波休迦旃の所に往至して、斯の義を問ひしに、彼の人報へて曰く、『唯一人有りて出世せば、一人死す。一人往返して其

へ、今如來は此を去ること遠からざるなり」と。時に王阿闍世、意に猶恐れを懐き、重ねて耆婆伽に告げて曰く、「將に汝の爲に惑はさ所るに非らずや、又聞くならく、『如來は千二百五十の弟子を將ひたまふ』と、今其の聲を聞かず」と。耆婆伽報へて曰さく、「如來の弟子は恒に三昧に入りて亂想有ること無し。唯、願くは大王、小しく復前進したまへ」と。阿闍世王、即ち下車して歩みて門に入り、講堂の前に至り、默然として立ち、諸の聖衆を觀察し、還顧して耆婆伽に謂ひて曰く、「如來は今何處に在すや」と。爾の時一切の聖衆盡く炎光三昧に入りて、彼の講堂を照らし、周遍せざるは靡し。

是の時耆婆伽、即時に長跪し、右手を伸べて如來を指示して言く、「此れは是れ如來にして、最も中央に在す、日の雲を披くが如し」と。是の時王阿闍世、耆婆伽に語げて曰く、「甚だ奇なり、甚だ特なり、今此の聖衆は心定まること乃ち爾り。復何の緣を以て此の光明有るや」と。耆婆伽王に白さく、「三昧之力の故に光明を放つ耳」と。王、復告げて曰く、「我今日聖衆を觀察するに、極めて寂然爲るが如し。我優陀耶太子をして、亦當に是の如く寂然無爲たら使めん」と。時に王阿闍世、叉手して自ら稱說して曰さく、「唯、願くは世尊、當に觀察せ見るべし」と。世尊告げて曰はく、「善くぞ來れり、大王」と、王、如來の音響を聞き、極めて歡喜を懷きぬ。如來乃ち王號を稱說するを見たまへり。時に王阿闍世、即ち佛所に至り、五體を地に投げ、兩手を以て如來の足の上に著けて、自ら稱說すらく、「唯、願くは世尊、當に愍れみを垂れて、其の悔過を受け見るべし。父王を罪無くして、取りて之を害しまつれり。唯、願くは悔を受けたまへ、後更に犯さじ、自ら往を改めて、來を修せん」と。世尊告げて曰はく、「今正に是れ時なり、宜しく時に悔過して、失ふこと有ら令むること無かるべし。夫れ人の世に處するに、過有りて能く自ら改むる者、斯れを上人と名く。我法中に於て極めて廣大と爲す。宜しく時に懺悔すべし」と。是の時王、如來の足を禮し已つて、一面

と。是の時耆婆伽、復偈を以て王に報へて曰さく、

其の柔軟の音を聞き　摩竭魚を脱することを得ん　唯、願くは時に佛に詣でゝ　永く無爲の境に處りたまへ。

と。時に王復偈を以て報へて曰く、

我昔施行せし所　佛に於て益事無からん　彼の眞の佛子を害せり　名けて頻婆娑と曰ふ　今極めて羞恥を懐く　顔世尊を見たてまつること無し　汝云何が說くや　吾をして往いて之に見え使むるや。

と。是の時耆婆伽、復、偈を以て王に報へて曰さく、

諸佛は彼此無し　諸結永く已に除きたまへり　平等にして二心無し　此れは是れ佛法の義なり　設し旃檀香を以て　以て右手に塗らば　刀を執りて左手を斷つも　心增減を起さじ　羅云子を愍みたまふが如く　一息にして更に二無し　心を持して提婆に向ふも　怨親異り有ること無し　唯、願くは大王屈して　往いて如來の顔を覲たてまつり　當に其の狐疑を斷づべし　留滯有るに足ること勿れ。

と。

是の時王阿闍世、耆婆伽王子に告げて曰く、「汝今速に五百牙の像、五百の牸象を嚴駕し、五百燈を然やせ」と。耆婆伽對へて曰さく、「是の如し、大王」と。是の時耆婆伽王子、卽時に千象を嚴駕し、及び五百燈を然やし、前んで王に白して言さく、「嚴駕已に辦ぜり、王、是れ時を知れ」と。爾の時王阿闍世、諸の營從を將ひて梨園中に往詣し、中路に便ち恐怖を懐き、衣毛皆竪つ、還顧して耆婆伽王子に謂ひて曰く、「吾今將に汝の爲に誤ら所るに非らず乎。將に吾を持して怨家に與ふるに非らずや」と。耆婆伽王に白さく、「實に此の理無し。唯、願くは大王、小しく復前進したま

【九】摩竭魚とは、神話中の大魚。

きや」と。索摩報へて曰く、「先畢盧持近くに在りて遠からず、諸の算術を明にす。往いて其の義を問ふ可し」と。王此の語を聞き已つて亦其の意に合はず。復最勝大臣に告げて曰く、「如今十五日極めて清明爲り、應に何をか施行せ所るべきや」と。最勝、王に白して言さく、「今尼犍子有り、諸經を博覽し、師の中の最上なり。唯、願くは大王、往いて其の義を問ひたまへ」と。王此の語を聞き已つて其の意に合はず。復、是の思惟を作さく、「此の諸人等、斯れは是れ愚惑にして、眞僞を別たず、巧便有ること無し」と。

爾の時、耆婆伽王子、王の左側に在り。王顧みて耆婆伽に語げて曰く、「如今夜半、極めて清明爲り、應に何をか施行せ所るべきや」と。是の時耆婆伽即ち前んで長跪して、王に白して言さく、「今如來は近くに在りて遠からず、貧聚園中に遊び、千二百五十の弟子を將ひたまへり。唯、願くは大王、往いて其の義を問ひたまへ。然も彼の如來は明と爲り、光と爲つて、亦疑滯無く、三世の事を知りたまひて、貫博せざるは靡し。自ら當に王の與に其の事を演說したまひて、王の所有の狐疑燿然として自ら悟るべし」と。是の時王阿闍世、耆婆伽の語を聞き已つて、歡喜踊躍して善心生ぜり。即ち耆婆伽を歎じて曰く、「善い哉、善い哉、王子、快く斯の言を說けり。然る所以は、我今身心極めて熾然爲り。又復故無くして父王を取りて殺しまつれり。我恒に長夜に是の念を作さく、『誰か我心意を悟るに堪任する者ぞや』と。今耆婆伽の我に向つて說く所の者は、正しく我意に入れり。甚だ奇なり、甚だ特なり。如來の音響を聞いて、燿然として大悟せり」と、時に王、耆婆伽に向つて便ち此の偈を說けり。

今日極めて清明なるに　心意悟りを得ず　汝等人々の說　往いて誰に義を問ふ應きや　不蘭
阿夷耑　尼犍梵弟子　斯等は依る可からず　濟ふ所有る能はず　今日極めて清明なり　月滿ちて瑕穢無し　今耆婆伽に問はん　往いて誰にか義を問ふ應き。

【八】耆婆伽(Jīvaka)、もと王舍城の娼婦の子、無畏太子に養はる。長じて王舍城の侍醫となる。

是れ阿羅漢にして、諸漏已に盡き、六通清徹なり。唯一人阿難比丘を除く。爾の時王阿闍世、七月十五日受歲の時、夜半明星出現せり、月光夫人に告げて曰く、「今十五日月盛滿して、極めて清明爲り、當に何事を施行す應きや」と。夫人報へて曰く、「今十五日、說戒の日、當に倡伎樂を作し、五欲自ら娛樂しむ應し」と。時に王、此の語を聞き已るも、其の懷に入らず。王復優陀耶太子に告げて曰く、「今夜極めて清明なり。應に何事を作すべきや」と。優陀耶太子、王に白して言さく、「如今夜半極めて清明なれば、應に四種の兵を集むべし。諸の外敵異國の靡伏せざる者を、當に往いて攻伐すべし」と。是の時王阿闍世、此の語を聞き已るも亦復其の意に入らず。復無畏太子に語げて曰く、「如今極めて清明の夜なり、應に何をか施行せ所るべきや」と。無畏王子報へて曰く、「今不蘭迦葉、諸の算數を明にし、兼ねて天文地理を知り、衆人の宗仰する所なれば、彼に往至して此の疑難を問ふ可し。彼の人は當に尊の爲に、極妙の理を說いて留滯すること無かるべし」と。時に王、此の語を聞き已つて亦其の意に入らず。復須尼摩大臣に語げて曰く、「如今夜は極めて清明爲り、應に何をか施行せ所るべきや」と。須尼摩、王に白して言さく、「如今夜半極めて清明爲り、然れば阿夷耑近くに在りて遠からず、曉了する所多し。唯、願くは大王、往いて其の宜を問ひたまへ」と。王此の語を聞き已つて、亦復其の意に入らず。復婆沙婆羅門に告げて曰く、「如今夜半極めて清明爲り、應に何をか施行せ所るべきや」と。婆羅門報へて曰く、「如今十五日、極めて清明爲り。然るに瞿耶樓有り、近くに在りて遠からず。唯、願くは大王、往いて其の義を問ひたまへ」と。時に王、此の語を聞き已つて、復、其の意に合はず。復摩特梵志に語げて曰く、「如今夜半、極めて清明爲り、應に何事を作すべきや」と。梵志報へて曰く、「大王當に知るべし、波休迦旃、近くに在りて遠からず、唯、願くは大王、往いて其の情を問ひたまへ」と。王、此の語を聞き已つて、復、其の意に合はず。復索摩與兵師に告げて曰く、「如今夜半極めて清明爲り、應に何をか施行せ所るべ

ambavana)。

【五】月光夫人(Komadi)。

【六】優陀耶太子(Udayibhadda kumāra)。

【七】無畏(Abhaya)。

て、自ら遊化して魔の境界を度して無爲處に至るなり。亦彼の有力の牛の、彼の恒水を渡りて彼岸に至ることを得るが如く。我聲聞も亦復是の如く。五下結を斷じて阿那含を成じ、彼に於て般涅槃し、此の間に還來せず、魔の境界を度して無爲處に至るなり。彼の中流の牛の肥えず瘦せざるもの、恒水を渡ることを得て、疑難無きが如く、我弟子も亦復是の如し、三結使を斷じ、婬・怒・癡薄く、斯陀含を成じ、此の世に來至して、苦際を盡くし、魔の境界を斷ちて無爲の處に至るなり。彼の瘦せたるもの、諸の小犢を將ひて、彼の恒水を渡ることを得るが如く、我弟子も亦復是の如し。三結使を斷じて須陀洹を成じ、必ず度することを得るに至り、魔の境界を度し、生死の難を度するなり。彼の小犢の母に從つて渡ることを得るが如く、我弟子も亦復是の如し。信を持し、法を奉じて、魔の諸縛を斷ちて無爲處に至るなり」と。爾の時世尊、便ち斯の偈を說きたまはく、

魔王の獲應き所　生死の邊りを究めず　如來は今究竟して　世間に慧明を現ず　諸佛の覺了する所　梵志明らかに曉らず　獨り生死の岸を渉み　兼ねて未度者を度す　今此の五種の人　及び餘は計る可からず　生死の難を度せんと欲し　佛威神力を盡くさん。

是の故に比丘、當に其の心を專らにし、放逸の行無く、亦方便を求めて、賢聖八品の道を成じ、賢聖道に依り已れば、便ち能く自ら生死の海を度すべし。然る所以は、猶し彼の愚なる牧牛の人の如きは、外道梵志是れなり。自ら生死の流に溺れ、復他人を墮して罪の中に著す。彼の恒水とは即ち是れ生死の海なり。彼の黠慧の牧牛者とは、如來是れなり。生死の難を度するとは賢聖八品道に由るなり。是の故に比丘、當に方便を求めて、八聖道を成ずべし。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

七

[三]聞くこと是の如し。一時佛、羅閱城[四]耆婆伽梨園中に在し、千二百五十の弟子と倶なりき。盡く



【三】 D. 2. Sāmaññaphala. 「長阿含經」第二七經(卷一七)、東晋竺曇無蘭譯「寂志果經」一卷。

【四】 耆婆伽梨園(Jīvakamba-

當に是の念を作すべし」と。此の法を說きたまふ時に當り、彼の座上に於て三千の天子、諸の塵垢盡きて法眼淨を得、六十餘の比丘、還つて法服を捨てゝ白衣の行を習ひ、六十餘の比丘、漏盡き、意解して法眼淨を得たり。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

六

[一]聞くこと是の如し。一時佛、摩竭國神祇[二]恒水の側に在し、大比丘衆五百人と倶なりき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「猶し摩竭の牧牛人の愚惑にして、智慧少く、意に恒水の此岸從り、牛を渡して彼岸に至らんと欲し、亦復彼此の岸の深淺の處を觀ぜずして、便ち牛を駈つて水に入り、先づ瘦せし者を渡すに、又犢尙小なれば、水の中央に在りて、極めて羸劣爲り。彼岸に至ることを得る能はず。復次に中流を渡るの牛、肥えず、瘦せず、亦渡ることを得ず、中に於て其の苦惱を受く。次に復極めて力有る者を渡すに、亦水中に在りて、其の困厄を受くるが如く、今の我衆中の比丘も亦復是の如し。心意闇鈍にして、慧明有ること無く、生死の位を別たず。魔の橋船を別たず。意に生死の流を渡たらんと欲するも、禁戒の法を習はざれば、便ち波旬の爲に其の便りを得るなり。邪道に從つて涅槃を求め、滅度を望得するも、終に果獲せじ、自ら罪業を造り、復他人に隨つて罪の中に著すればなり。猶し摩竭の牧牛人の黠慧多智にして、意に牛を渡して彼此の岸に至らんと欲し、先づ深淺の處を觀察し、前に極めて盛力の牛を渡して彼岸に到り、次に中流之牛を渡すに、肥えず、瘦せざるを(以てせば)、亦渡つて彼岸に至ることを得、次に極羸の者を渡すに亦渡りて他無し。小犢は尋いで其の後に從つて濟渡して無爲なるがごとく、」丘、如來も亦復是の如し。善く今世、後世を察し、生死の海に魔の徑路を觀じ、自ら八正道を以て、生死の難を度す。復此の道を以て度せざる者を度すること、猶し牛を導くこと正しく、一正しければ、餘は悉く從ふが如く、我弟子も亦復是の如し。有漏を盡くして無漏心解脫・智慧解脫を成じ、現法中に於て、身を以て證を作し

【一】 M. 34. Gopālaka. 「雜阿含經」第一二四八經（卷四七）。
【二】 恒水（Gaṅgānadī）。恒河のこと。

以て邪見を滅し、邪見を以て正見を滅し、正治、邪治を滅し、邪治、正治を滅す。正語、邪語を滅し、邪語、正語を滅す。正業、邪業を滅し、邪業、正業を滅す。正命、邪命を滅し、邪命、正命を滅す。正方便、邪方便を滅し、邪方便、正方便を滅す、正念、邪念を滅し、邪念、正念を滅す。正定、邪定を滅し、邪定、正定を滅するなり』と。魔、我に語げて曰く、『沙門、今日斯の語有りと雖も、此の處剋し難きなり。汝今速に起ちて、吾をして海の表に擲著せ令むること無かれ』と。

時に我復波旬に語げて曰く、『汝本福を作すこと、唯一施有りて、今欲界の魔王と作ることを得たり。我昔造りし所の功德、能く稱計すること無し。汝今說く所、方に甚だ難しと言ふ耶』と。波旬報へて曰く、『我今福を作せし所は、汝今證知せり。汝自ら無數の福を造れりと稱說す、誰か證知を爲せしや』と。時に我、比丘、卽ち右手を伸し、指を以て地を案じ、波旬に語ぐらく、『我造りし所の功德は、地之を證知せん。我當に此の語を說くべし』と。是の時地神、地從り涌出し、叉手して白して言く、『世尊、我當に證知すべし』と。地神の語適ま訖りぬ。時に魔波旬、愁・憂・苦・惱して卽ち退きて現れざりき。比丘、當に此の方便を以て、之を知るべし。法猶尙滅す、何に況んや非法をや。我長夜に汝の與に一覺喩經を說きしも、其の文を錄せざりき。況んや其の義を解せんや。然る所以は、此の法は玄邃なれば、聲聞・辟支佛にして、此の法を修むる所の者は大功德を獲、甘露無爲の處を得ん。

彼れ云何が名けて乘筏の喩と爲すや。所謂慢に依つて慢を滅す。慢已に滅盡せば、復諸惱亂想の念無きこと、猶し野狸の皮を極めて之を修治し、手拳を以て之に加ふるに、亦聲響無く、堅鞕の處無きが如し。此れも亦是の如く、若し比丘にして、慢盡くれば、都て增減無し。是の故に我今汝等に告げて曰はん、『設し賊の爲に擒獲せ所るれば、惡念を興すこと勿れ。當に慈心を以て、諸方に遍滿すべきこと、猶し彼の極柔の皮の如くなれば、長夜に便ち無爲之處を獲ん』と。是の如く比丘、

と。

時に魔波旬、復、我に語げて曰く、『我沙門に於て饒益する所多し。設し我語に從はずば、正爾汝を取りて其の形を灰滅せん。又復沙門の顏貌端正にして、年壯可美なり。刹利轉輪王種より出處するや、速に此處を起ちて、五欲を習へ、我當に將和し、汝をして轉輪聖王と作ることを得使むべし』と。時に我復波旬に報へて曰く、『汝の說く所は、無常變易にして、久しく住まることを得ず、亦當に捨離すべし。吾の貪る所に非らず』と。時に弊魔波旬、復、我に語げて曰く、『沙門は今日何の所求を爲すや、志願は何物ぞや』と。時に我報へて曰く、『吾の願ふ所の者は、無憂畏處・安穩恬淡、涅槃の城中にして、此の衆生の生死に流浪し、苦惱に沈溺する者をして、正路に導引せ使むるなり』と。魔我に報へて曰く、『設し今沙門にして、速に座を起たずば、當に汝の脚を執りて、海の表に擲著すべし』と。時に我、波旬に報へて曰く、『我自ら天上人中を觀察するに、魔、若しは魔天人、若しは非人、及び汝四部の衆は、吾一毛をも動か使むること能はざるなり』と。魔我に報へて曰く、『沙門、今日吾と戰はんと欲する乎』と。我之に報へて曰く、『交戰することを得んと思ふ』と。魔我に報へて曰く、『汝の怨むは是れ誰ぞや』と。我復報へて曰く、『憍慢とは是れ增上慢・自慢・邪慢・慢中慢・增上慢なり』と。魔、我に語げて曰く、『汝何の義を以て、此の諸慢を滅するや』と。時に我報へて曰く、『波旬當に知るべし。慈仁三昧・悲三昧・喜三昧・護三昧・空三昧・無願三昧・無相三昧有り。慈三昧に由つて悲三昧を辦じ、悲三昧に緣つて喜三昧を得、喜三昧に緣つて護三昧を得、空三昧に由つて無願三昧を得、無願三昧に由つて無相三昧を得、此の三三昧の力を以て汝と共に戰はん。行盡くれば則ち苦盡き、苦盡くれば則ち結盡き、結盡くれば則ち涅槃に至るなり』と。魔、我に語げて曰く、『沙門、頗ふらくは法を以て法を滅する乎』と。時に我報へて曰く、『法を以て法を滅す可し』と。魔我に問ふて言く、『云何が法を以て法を滅するや』と。時に我告げて曰く、『正見を

# 巻の第三十九

## 馬血天子品第四十三の二

「是の時弊魔波旬、瞋恚熾盛にして、即ち師子大將に告げて曰く、『速に四部の衆を集めよ、往いて沙門を攻伐せんと欲す。又當に觀察すべし。何の力勢有りと爲すや、我と共に戰鬪ふに堪任せん耶』」と。我爾の時復更に思惟すべく、『凡人と交戰するも猶默然たらず。何に況んや欲界の豪貴なる者を乎。要らず當に彼と少多爭ひ競ふべし』と。時に我、比丘、仁慈の鎧を著け、手に三昧の弓、智慧の箭を執りて、彼の大衆を俟ちぬ。是の時弊魔大將、兵數十八億數なり。顏貌各異りて、猿猴師子我所に來至す。爾の時羅刹の衆、或は一身にして若干頭、或は數十身にして共に一頭なる有り、或は兩肩に三頸有り、心に當つて口有り、或は一手有り、或は兩手有る者、或は復四手、或は兩手に頭を擎げ、口に死蛇を銜み、或は頭上火燃として口に火光を出し、或は兩手に口を擘き、前んで之を噉らはんと欲す。或は腹を披きて相向ひ、手に刀劍を執りて戈矛を擔持し、或は舂と杵とを執り、或は山を擔ひ、石を負ひ、大樹を擔持する者、或は兩脚上に在りて、頭下に在り。或は象・師子・虎・狼・毒虫に乘り、或は歩みて來る者、或は空中を飛ぶ（ものあり）。是の時弊魔、爾許の衆を將ひて道樹を圍遶す。時に魔波旬、我左側に在りて、我に語げて曰く、『沙門、速に起て』と。時に我、比丘、默然として對へず。是の如きこと再三なり。魔我に語げて曰く、『沙門、我を畏るゝや不乎』と。我之に告げて曰く、『我今心を執じて、畏懼する所無し』と。時に波旬曰く、『沙門、頗ふらくは、我四部の衆を見ん耶、然も汝は一己にして器杖兵刃有ること無し。禿頭露形は此の三衣を著く（るのみ）』と。復言く、『吾畏るゝ所無し』と。爾の時我、波旬に向つて、便ち此の偈を說けり。

仁の鎧に三昧の弓　手に智慧の箭を執り　福業を兵衆と爲し　今當に汝の軍を壞るべし。

の安處を求め、彼れ大河の極めて深廣爲るを見るに、亦船橋にして渡りて彼の岸に至ることを得可き者無し。然るに所立の處、極めて恐難爲り。彼の岸は無爲なり。爾の時彼の人、方計を思惟すらく、『此の河水は極めて深く、且つ廣し、今材木草葉を收拾して、筏を縛して渡ることを求め、此の筏に依つて、已に此の岸從り彼の岸に至ることを得可し』と。爾の時彼の人、卽ち材木草葉を收拾し、筏を縛して渡り、此の岸從り彼の岸に至らん。彼の人已に岸を渡り、復是の念を作さく、『此の筏は我に於て饒益する所多し。此の筏に由つて厄難を濟ふことを得たり。恐れ有るの地從り、無爲の處に至ることを得たり。我今此の筏を捨てじ、持用自ら隨はん』と。云何が比丘、彼の人、至到せし處に能く此の筏を用ひて、自ら隨ふ乎、能はずと爲ん耶」と。諸比丘對へて曰さく、「不なり、世尊。彼の人の所願は、今已に果獲せり、復、筏を用ひて自ら隨はん乎」と。佛、比丘に告げたまはく、「善法も猶捨つ可し、何に況んや非法をや」と。

爾の時一比丘有り、世尊に白して言さく、「云何が『當に法を捨つべし、況んや非法をや』と、我等豈法に由つて學道するに非らず乎」と。世尊、告げて曰はく、「憍慢に依つて憍慢を滅す。慢々・增上慢・自慢・邪見慢・慢中慢・增上慢は慢無きを以て慢々を滅し、無慢正慢を滅し、邪慢增上の慢を滅し、盡く四慢を滅す。我昔未だ佛道を成ぜずして、樹王下に坐せし時、便ち此の念を生ぜり。『欲界の中、誰か最も豪貴なるや、我當に降伏すべし。此の欲界の中、天及び人民皆悉く靡伏せん』と。時に我復重ねて是の念を作さく、『聞くならく、弊魔波旬有り、今當に彼と戰ふべし』と。波旬を降すを以て、一切の憍慢豪貴の天、一切靡伏せり。時に我、比丘、座上に於て笑めり。魔波旬の境界をして皆悉く震動せ使め、虛空の中に偈を說く聲を聞けり。

眞淨の王法を捨て　出家して甘露を學び　設し廣願を剋せば　此の三惡趣を空くうせん　我今
兵衆を集め　彼の沙門の顏を瞻るに　設し我計を用ひずば　脚を執りて海の表に擲たん　と。

# 增壹阿含經卷第三十八

ざることを知るなり。汝等比丘、提婆達多の如く、利養に貪著すること莫かれ。夫れ利養は人を惡處に墮して善趣に至らず。若し利養に著せば、便ち邪見を習ひて、正見を離れ、邪治を習ひて正治を離れ、邪語を習ひて正語を離れ、邪業を習ひて正業を離れ、邪命を習ひて正命を離れ、邪方便を習ひて正方便を離れ、邪念を習ひて正念を離れ、邪定を習ひて正定を離る。是の故に比丘、若し利養の心を起さば、制して起さゞら令め、已に利養の心を起せば、方便を求めて之を滅せよ。是の如く比丘、當に是の學を作すべし」と。此の微妙の法を說きたまふに當り、六十餘比丘法服を捨除して白衣の行を習ひ、復、六十餘比丘有りて、漏盡意解し、諸の塵垢盡きて、法眼淨を得たり。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

## 五

[一八]聞くこと是の如し。一時佛、舍衛國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「我今當に船筏の譬喩を說くべし、汝等善く之を思念して、心懷に戢在せよ」と。諸比丘對へて曰さく、「是の如し、世尊」と。諸比丘、佛從り教へを受く。世尊告げて曰はく、「彼れ云何が名けて船筏の譬喩と爲すや。若し汝等行路に賊の爲に擒へ所るれば、當に心意を執りて惡情を起すこと無かるべし。當に護心を起して諸の方所に遍滿し、無量無限にして稱計す可からざるべし。心を持つこと當に地の如くなるべきこと、猶し此の地も亦淨を受け、亦不淨を受け、屎尿穢惡皆悉く之を受け、然も地は增減の心を起さず『此れは好し、此れは醜し』と言はざるが如し。汝今所行も亦當に是の如くなるべし。設し賊の爲に擒獲せ所るゝも、惡念を生じて、增減の心を起すこと莫かれ。亦地・水・火・風の如く、亦惡を受け、亦好を受くるも、都て增減の心無かれ。慈・悲・喜・護の心を起し、一切衆生に向へ。然る所以は、善を行ふの法猶之を捨つ可し。何に況んや惡法にして翫習す可けんや。猶し人有りて、恐難の處に遭ひ、難處を度して安隱の處に至らんと欲し、意に隨つて馳走して、其

【一八】M. 22. Alagaddūpama.

に、方便を求めて勇猛心を起さず。彼の人寶を求むるも得ず、智者の爲に棄て所るゝが如し。
設し比丘有りて、利養を得已るも、亦自ら擧めず、復他人を毀らず、或る時は復他人に向つて、自ら稱說すらく、『我は是れ持戒之人にして、彼は是れ犯戒の士なり』と、（これ）比丘所願にして果獲せず、人根を捨てゝ枝を持し、家に還えるが如く、智者は見已つて、『此の人枝を持して家に還えると雖も、然も根を識らず』と。此の中の比丘も亦復是の如く、利養を得るを以て、戒律を奉持し、幷せて梵行を修め、好く三昧を修む。彼此の三昧心を以て他に向つて自ら譽めて、『我今定を得たり、餘人は定無し』と。比丘の行ず應き所の法も亦果獲せざること、猶し人有りて、其れ實木を求めて、大樹に往至し、其の實を望みて其の枝葉を捨て、其の根を取りて持ち還えるが如し。智者は見已つて便ち是の說を作す。『此の人は其の根を別つ』と。今此の比丘も亦復、是の如く、利養を興起し、戒律を奉持するも亦、自ら譽めず、復、他人を毀らず、三昧を修行するも亦復、是の如く、漸く、智慧を行ず。夫れ智慧とは此の法中に於て、最も第一爲り。提婆達多比丘は此の法中に於てか竟に智慧三昧を獲ず、亦復、戒律の法を具せざるなり」と。
一比丘有り、世尊に白して言さく、「彼の提婆達多は云何が戒律の法を解せざるや。彼れ神德有りて諸行を成就す。此の智慧有るに、云何が戒律の法を解せざるや。智慧有れば則ち三昧有り、三昧有れば則ち戒律有らん」と。世尊告げて曰はく、「戒律の法は世俗の常數なり。三昧成就とは亦是れ世俗の常數なり。神足飛行も亦是れ世俗の常數なり。智慧成就は此れは是れ第一の義なり」と。是の時世尊、便ち此の偈を說きたまはく、

禪に由りて神足を得　上に至るも究竟せず　無爲際を獲ず　還つて五欲の中に墮す　智慧は最も上れりと爲す　憂ひ無く慮る所無し　究め畢つて等見を獲　生死の有を斷ずるなり

比丘、當に知るべし。此の方便を以て、提婆達多は戒律の法を解せず、亦復、智慧三昧の行を解せ

は身の滅することなり。中に沒すとは欲愛なり。岸上に在りとは五欲なり。人の爲に捉へ所るとは、族姓子有りて、此の誓願を發し、此の功德福祐を持して大國王と作り、若しは大臣と作るが如し。非人に捉へ所るとは、比丘有りて、此の誓願有り『四天王中に生じて、梵行を行じ、我今功德を持して、諸天の中に生ぜん』と(いふが)如きは、是れを名けて非人の爲に捉へ所ると謂ふなり。水の爲に迴轉せ所るとは、此れは是れ邪疑なり。腐敗とは邪見・邪治・邪語・邪業・邪命・邪方便・邪念・邪定、此れは是れ腐敗なり」と。是の時難陀比丘、閑靜の處に在りて、自ら修剋し、族姓子の鬚髮を剃除し出家學道する所無上の梵行を修め、生死已に盡き梵行已に立ち、所作已に辦じて、更に復受けず即ち座上に於て阿羅漢を成ぜり。爾の時難陀、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

## 四

[一六]聞くこと是の如し。一時佛、羅閱城[一七]迦蘭陀竹園所に在し、大比丘衆五百人と俱なりき。爾の時提婆達多、已に神足を失へり。阿闍世太子、日に五百釜の食を遣して之を供養しぬ。是の時衆多の比丘、提婆達多已に神足を失ひ、又阿闍世の爲に供養せ所るゝを聞き、共に相將ひて佛所に詣り、頭面に足を禮し、一面に在りて坐す。是の時衆多の比丘、佛に白して言さく「提婆達多は極めて大威力(あり)、今阿闍世王の爲に供養せ所れ、日に五百釜の食を遣はさる」と。爾の時世尊、此の語を聞き已つて、諸比丘に告げたまはく「汝等此の意を興して、提婆達多比丘の利養を貪ること莫かれ。彼愚人は此の利養に由りて、自ら當に滅亡すべし。然る所以は、是に於て比丘、提婆達多は出家して學びし所以の其の願ひを果さざればなり。比丘、當に知るべし。猶し人有りて、其の村落を出で、手に利斧を執り、大樹に往詣し、先づ意に望む所は、大樹を欲望し、其れ樹に到るに及びて、枝葉を持して還えるが如し、今此の比丘も亦復是の如く、利養に貪著す。此の利養に由つて、他に向つて自ら譽め、他人を毀呰す。比丘の所行の宜、則ち其の願を果さず。彼に此の利養に由るが故

【一六】M. 29. Saropama.
【一七】巴利文には耆闍崛山となる。

木、此岸に著せず、彼岸に著せず、又中に沒せず、復、岸上に在るに非らず、人の爲に捉へ所れず、復、非人の爲に捉へ所るゝに非らずば、復、水の爲に迴轉せ所れ、復、腐敗するに非らざるべくんば、便ち當に漸々に海に至るべし。然る所以は、海は諸江の原本なればなり。汝等比丘も亦是の如し。設し此岸に著せず、彼岸に著せず、又中に沒せず、復、岸上に在るに非らず、人非人の爲に捉へ所れず、亦水の爲に迴轉せ所れず、亦腐敗せずば、便ち當に漸々に[一三]涅槃處に至るべし。然る所以は、涅槃とは正見・正治・正語・正業・正命・正方便・正念・正定、是れ涅槃の原本なればなり」と。

爾の時[一四]牧牛の人有り、名けて[一五]難陀と曰ふ。杖に憑つて立てり。是の時彼の牧牛の人、遙に是の如きの所說を聞き、漸く世尊の所に來至して立つ、爾の時牧牛の人、世尊に白して言さく「我今亦此岸に著せず、彼岸に在らず、又中に沒するに非らず、復、岸上に在るに非らず、人の爲に捉へられず、復、非人の爲に捉へ所るゝに非らず、水の爲に迴轉せ所れず、亦腐敗するに非らず、漸々に當に涅槃之處に至るべし。唯、願くは世尊、道次に在ることを聽して沙門と作ることを得させたまへ」と。世尊告げて曰はく「汝今主牛を還えし已れ、然る後に乃ち沙門と作ることを得ん耳」と。牧牛人の難陀報へて曰さく「斯の牛は犢を哀念するが故に、自ら當に家に還えるべし。唯、願くは世尊、道次に在ることを聽したまへ」と。世尊告げて曰はく「此の牛は當に家に還えるべしと雖も、故に汝の往いて之を付授するを須ひん」と。是の時牧牛人、即ち其の教へを受け、往いて牛に付し已つて、還つて佛所に至り、世尊に白して言さく「今已に牛に付したり。唯、願くは世尊、沙門と作ることを聽したまへ」と。是の時如來、即ち沙門と作ることを聽したまひ、具足戒を受けぬ。

一異比丘有り、世尊に白して言さく「云何が此岸と爲し、云何が彼岸と爲し、云何が中に沒すと爲し、云何が岸上に在り、云何が人の爲に捉へ所れず、云何が非人の爲に捉へ所れず、云何が水の爲に迴轉せ所れず、云何が腐敗せざるや」と。佛、比丘に告げて曰はく「此岸とは身なり、彼岸と

---

【一三】涅槃處(Nibbānanin-nai)。
【一四】牧牛の人(Gopālaka)。
【一五】難陀(Nanda)。

明爾腋從り入り、若し餓鬼に生ずるの決を授けたまはゞ、是の時光明腋從り入り、若し畜生に生ずるの決を授けたまはゞ、光明膝從り入り、若し地獄に生ずるの決を授けたまはゞ、是の時光明脚底從り入るなり。是の時梵志、光の頂上從り入るを見、歡喜踊躍して自ら勝ふること能はず。卽ち髮を布き、地に在りて、並に是の說を作さく『設し如來にして、我に決を授けたまはずば、卽ち此の處に於て、自ら斷壞し、諸根を成ぜざらん』と。是の時燈光佛 梵志の心中の所念を知り、卽ち之に告げて曰はく『汝速に還えり起て、將來の世に、當に作佛を成じ、釋迦文如來・至眞・等正覺と號すべし』と。是の時 摩納[九]、佛の[一〇]授決を聞き已つて、心に踊躍を懷き、自ら勝ふること能はず。卽ち彼處に於て遍現三昧を得、虛空に踊在し、地を去ること七仞、叉手して燈光如來に向はん。汝優波離、異觀を作すこと莫かれ、爾の時の寶藏如來と、時の長老の比丘とは、豈是れ異人ならん乎。爾の時の燈光如來は是れなり。爾の時の王女牟尼は我今是れなり。時に寶藏如來、我名號を立てゝ釋迦文と字したまへり。我今此の因緣を以ての故に、此の八關齋法を說くなり。當に誓願を發すべし。願ふて果さゞるは無し。然る所以は、若し彼の女人にして、是の誓願を作さば、卽ち彼の劫に於て其の所願を成ずるなり。若し長老の比丘にして、誓願を發さずば、終に佛道を成ぜじ。誓願の福は稱記す可からず。甘露滅盡の處に至ることを得ん。是の如く優波離、當に是の學を作すべし」と。爾の時優波離、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

三

[一一]聞くこと是の如し。一時佛、摩竭國界に在し、大比丘衆五百人と倶に漸く[一二]江水の側に至りたまひき。爾の時世尊、江水中に大材木有りて、水の爲に漂はさ所ゝを見、卽ち水側に坐し、一樹下に坐したまひぬ。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「汝等頗ふらくは、木水の爲に漂はさ所ゝを見る乎」と。諸比丘、佛に白して言さく、「唯、然り之を見る」と。世尊告げて曰はく、「設し當に此の



【九】摩納(Māṇava)とは、青年と譯す。
【一〇】授決、受決に同じ、前卷索引受決をみよ。
【一一】S. 35. 200. Dārukkhandha.
【一二】江水(Gaṅgānadī)。恒河のこと。

十二相有らば、名けて佛を成ずと曰はん』と、即ち五華の華を以て如來の上に散じ、又三十二相を求むるに、唯三十相を見て、二相を見ず。即ち狐疑を興すらく『今世尊を觀ずるに　廣長舌及び陰馬藏を見ず』と。即時に此の偈を說きぬ。

三十二の　大人の相貌有りと聞きしに　今二相を見ず　相好具すると爲すや不や　願ふらくは
陰馬藏の　貞潔にして婬せざる有り乎　豈廣長舌の　耳を舐めて面を覆ふ有り乎　我爲に其
の相を現し　諸の狐疑の結を斷ちたまへ　陰馬及び舌相　唯、願くは之を見たてまつらんと欲
すと。

是の時燈光佛、即ち三昧定に入りて、彼の梵志をして其の二相を見せ使めたまはん。是の時燈光佛、復廣長舌を出して、左右に耳を舐め、大光明を放ち、還つて頂上從り入りたまふ。是の時梵志、如來の三十二相有りて具足するを見、見已つて歡喜踊躍して、自ら勝ふること能はず。並に是の說を作さく『唯、願くは世尊、當に觀察せ見るべし。我今五華を持して如來に奉上しまつり、又此の身を以て聖尊に供養しまつらん』と。此の誓願を發さん時、彼の五華、空中に在りて、化して寶台と成り、極めて殊妙の四柱四門を爲さん。彼れ時に交露台を見已つて、歡喜踊躍して自ら勝ふる能はず、此の誓願を發さん『我をして將來の世に作佛せ使むること、當に燈光佛の如くなるべし。弟子の翼從すること悉く皆是の如からん』と。是の時燈光佛、彼の梵志の心中の所念を知り、即時に便ち笑みたまひ、諸佛世尊の常法の『若し授決の時世尊笑みたまはゞ、口に五色の光明を出し、遍く三千大千世界を照したまふ』と。是の時光明已に三千大千世界を照らし、日月も復光明無し。還つて頂上從り入る。設し如來授決したまふ時は、光頂上從り入り、設し辟支佛に決を授けたまふ時は、光口從り出でゝ、還つて口中に入り、若し聲聞に莂を授けたまはゞ、光肩上從り入り、若し生天の決を授けたまはゞ、是の時光明臂中從り入り、若し人中に生ずるを莂したまはゞ、是の時光

【七】廣長舌とは、三十二相の一、前巻三十二相をみよ。
【八】陰馬藏とは、三十二相の一、前巻三十二相をみよ。

寶藏如來報へて曰はく『夫れ女人之身に處りて、轉輪聖王と作ることを求めんこと、終に獲ざるなり。帝釋と作ることを求めんことも亦獲可からざるなり。梵天王と作ることを求めんことも亦得可からざるなり。魔王と作ることを求めんことも亦得可からざるなり。如來と作ることを求めんことも亦得可からざるなり』と。女曰さく『我定んで無上道を成ずることを得ること能はざる乎』と。寶藏佛報へて曰はく『能ふなり。牟尼女、無上正眞道を成ぜん。然るに王女、當に知るべし、將來無數阿僧祇劫に佛有りて出世したまはん。是れ汝の善知識なり。彼の佛は當に汝に決を授けたまふべし』と。

是の時王女、彼の佛に白して言さく『受者清淨にして、施主は穢濁なる乎』と。寶藏佛告げて曰はく『吾今說く所は、心意清淨にして、發願牢固なり』と。是の時王女語り已つて卽ち座從り起ち、頭面に足を禮し、佛を遶ぐること三匝して、便ち退いて去りぬ。優波離、當に知るべし。無數阿僧祇劫に燈光佛乃ち世に出現したまひ、治して鉢頭摩大國に在り、大比丘衆十六萬八千衆と俱なり。國王人民悉く來つて承事せん。是の時彼の國に王有り、提波延那と名け、法を以て治化し、此の閻浮境界を領せん。是の時彼の王、佛及び比丘僧を請じて之に飯食す、是の時燈光如來、清旦衣を著け、鉢を持し、諸の比丘衆を將ひて城に入りたまふ。爾の時梵志子有り、名けて彌勒と曰ひ、顏貌端正にして、衆中に獨出し、像梵天の如し。諸の經藏に通じ、貫練せざるは靡く、諸書呪術皆悉く明了し、天文地理の了知せざるは靡し。是の時彼の梵志、遙に燈光佛の來りたまふを見、顏貌殊特にして世の奇異なり、諸根寂定にして、三十二相八十種好其の身を莊嚴す。見已つて便ち喜豫の意を發し、善心生ずらく『書籍に載する所(によれば)、如來の出現したまふこと、甚だ遇ひ難しと爲す。時々に乃ち出でたまふこと、猶し優曇鉢華の時に乃ち出づるが如き耳。我今當に往いて之を試むべし』と。是の時梵志、手に五華を執り、世尊の所に往至して、復是の念を作さく『其れ三

持して、無上正眞之道に施與し、口自ら演說すらく、『年既に衰大し又復鈍根にして智慧有りて禪法を行ずることを得ること無ければ、此の功德の業を持して、所生の處に惡趣に墮すること莫く、將來の世に、聖尊に値遇せ使むること、今の寶藏如來の如くして異ること無けん。亦聖衆に遇ふこと、今の聖衆の如くして、異り有ること無けん。說法も亦當に今の如く、異り無かるべし』と。是の時寶藏如來、彼の比丘の心中の所念を知り、即時に便ち笑みたまひ、口に五色の光を出して、之に告げて曰はく、『汝今比丘、將來無數阿僧祇劫に、當に佛と作り、號して燈光如來・至眞・等正覺と曰ふべし』と。是の時長老の比丘、歡喜踊躍して自ら勝ふること能はず、身心堅固にして、意退轉せず、顏色殊勝にして、常と同じからず。時に彼の牟尼女人、彼の比丘の顏貌殊特なるを見、即ち前んで問ふて曰く、『比丘、今日顏色極めて殊妙爲り、常と同じからず、何の意を得しが故にや』と。比丘報へて曰く、『王女、當に知るべし。向者如來は甘露を以て灌が見たり』と、牟尼女問ふて曰く、『云何が如來は甘露を以て灌が見しや』と。比丘報へて曰く、『我寶藏如來の爲に決を授け所れたり。言く、「將來無數阿僧祇劫に、當に作佛を得べし。號して燈光如來至・眞・等正覺と曰ひ、身心牢固にして、意退轉せじ」と。是の如く王女、彼の如來の爲に決を授け所れしなり』と。王女問ふて曰く、『彼の佛は頗ふらくは、我に決を授けたまふ乎』と。長老の比丘報へて曰く、『我も亦汝に莂を授け爲るゝや不やを知らず』と。

是の時王女、比丘の語を聞き已つて、即ち羽寶の車に乘り、寶藏如來の所に往至し、頭面に足を禮し、一面に在りて坐す。爾の時王女、佛に白して言さく、『我今是れ檀越施主なり。所須の脂油を恒に相供給す。然るに今世尊は、彼の比丘に決を授けたまひて、獨り莂を授け見れず』と。寶藏如來告げて曰はく、『發心求願せば、其の福量り難し、何に況んや財を以て惠施せんを乎』と。牟尼女報へて曰さく、『設し當に如來にして我に莂を授けたまはずば、當に自ら其の命根を斷つべし』と。

覺・明行成・善逝と爲し、世間解・無上士・道法御・天人師・佛・衆祐と號すと曰ひ、世に出現したまへり。彼の王に女有り、名けて牟尼と曰ひ、顏貌殊特にして、面桃華の色の如し。皆前世に諸佛を供養せしに由る之致す所なり。爾の時彼の佛も亦復三會にして、聲聞は初會の時、一億六萬八千の衆、第二の會には一億六萬の衆、第三の會には一億三萬之衆、皆是れ阿羅漢にして、諸漏已に盡きたり。是の時彼の佛、諸弟子の與に此の如きの法を說きたまひぬ。『諸比丘、當に念じて坐禪し、懈怠有ること勿るべし。復方便を求めて經戒を誦習せよ』と。彼の佛の侍者を名けて滿願と曰ひ、多聞第一にして、我今日の阿難比丘の多聞最勝なるが如し。時に彼の滿願比丘、寶藏佛に白して言さく、『諸有の比丘は、諸根闇鈍にして、亦精進ならず、禪定法に於て又誦習せず。今日世尊、此の人を安んずるに、何れの聚中に著せんと欲したまふや』と。寶藏佛、告げて曰はく、『設し比丘有りて、諸根闇鈍にして、禪法を行ずるに堪任せずば、當に三上人法の業を修むべし。『云何が三と爲すや、所謂坐禪・誦經・佐勸衆事なり』と、是の如く彼の佛は諸弟子の與に、此の如きの微妙の法を說きたまはん。

爾の時長老の比丘有り、亦禪法を修行するに堪任せず。時に彼の比丘便ち是の念を作さく、『我今年衰へ長大せり。亦其の禪法を修すること能はず。今當に求願して、勸助の法を行ずべし』と。是の時彼の長老の比丘、野馬城中に入りて、燭火の麻油を求め、日來寶藏如來を供養し、明りを斷たざら使む。是の時王女牟尼、此の長老の比丘の里巷に乞求するを見、即ち彼の比丘に問ふて曰く、『比丘、今日何をか求むる所と爲すや』と、比丘報へて曰く、『聖女、當に知るべし、我年衰邁にして、禪法を行ずるに堪えず、故に脂油を求乞し、用つて佛に供養し、尊の光明を續けまつらん』と。是の時彼の女、佛の名號を聞き、歡喜踊躍して自ら勝ふること能はず、彼の長老の比丘に白して曰く、『汝今比丘、餘處に在りて乞求すること勿れ、我自ら相供給せん、麻油燈炷盡く相惠施せん』と。是の時長老の比丘、彼の女の施しを受け、日來油を取りて寶藏如來を供養し、此の功德の福業を

す、刀杖を群生に加へず、普く一切を慈しみ、『我今齊法を受けんに、一の所犯無く、殺心を起さず、彼の眞人の教へを習ひ、不盜・不淫・不妄語・不飮酒、時を過ぎて食せず、高廣の座に在らず、倡伎樂を作して、香華を身に塗ることを習はじ』と、設し智慧有らば、當に是の說を作すべし。假令智無くば、當に彼に此の如きの教へを教ふべし。又彼の比丘、一一指授して失は令むること無かるべし、次に亦超越すること莫かれ。復當に教へて誓願を發さ使むべし」と。

優波離、佛に白して言さく「云何が當に發願すべきや」と。世尊告げて曰はく「彼發願する時、『我今此の八關齊法を以て、地獄・餓鬼・畜生に墮すること莫く、亦八難の處に墮すること莫く、邊境に處ること莫く、凶弊之處に墮すること莫く、惡知識と與に從ふこと莫く。父母に事ふること專正にして、邪見を習ふこと無く、中國の中に生じて此の善法を聞き、分別思惟して法について法を成就し、此の齊法の功德を持して、一切衆生の善を攝取し、此の功德を以て彼の人に惠施し、無上正眞の道を成せ使め、此の誓願の福を持して、三乘を施成して、中退せざら使め、復此の八關齊法を持ち、用つて佛道・辟支佛道・阿羅漢道を學び、諸の世界に正法を學ぶ者は、亦此の業を習ひ、正使將來に彌勒佛、世に出現する時、如來・至眞・等正覺・彼の會に値遇し、時に度することを得使めん』と彌勒世に出現する時、聲聞は〔六〕三會にして、初會の時九十六億の比丘の衆なり。第二之會には九十四億比丘の衆、第三會に九十二億の比丘之衆なり、皆是れ阿羅漢にして、諸漏已に盡きたり。亦彼の王及び國土の教授師に値ひ、是の如きの教へを作して、缺漏せ令むること無し」と。

是の時優波離、世尊に白して言さく「設し彼の善男子・善女人にして、八關齊法を持つと雖も、中に於て誓願を發さずば、豈大功德を得ざらん乎」と。世尊告げて曰はく『其の福を獲と雖も、福は言ふに足らず。然る所以は、我今當に說くべし。過去世の時に王有り。寶岳と名く、法を以て治化して、阿曲有ること無く、此の閻浮提の境界を領せり。爾の時佛有り、名けて寶藏如來・至眞・等正

【六】三會とは、三回の說法の會座。

此の聖賢道を修め　晝夜に之を習行せば　便ち無爲處に至らん

と。

是の時馬血天子・如來從り賢聖八品道を說きたまふを聞き、卽ち座上に於て諸の塵垢盡きて法眼淨を得たり。爾の時天子、卽ち頭面を以て足を禮し、佛を遶ぐること三匝して、便ち退いて去りぬ。是の時彼の天子、卽ち其の日に、天の種々の好華を以て如來の上に散らし、時に斯の偈を說きぬ。

生死に流轉すること久しく　世界を涉度せんと欲して　賢聖八品道　知らず又見ざりき　今我諦を見　又八品道を聞きしを以て　便ち邊際を盡くすことを得たり　諸佛の到りたまふの處なり

と。爾の時世尊、彼の天子の所說を可したまひぬ。時に彼の天子、以て佛の之を可したまひしを見、卽ち世尊の足を禮して、便ち退いて去りぬ。爾の時彼の天子、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

二

[四]聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「我今當に賢聖[五]八關齊法を說くべし。汝等善く之を思念して、隨喜奉行せよ」と。爾の時諸比丘、佛從り敎へを受く、世尊、告げて曰はく、「彼れ云何が名けて八關齊法と爲すや、一には不殺生、二には不與不取、三には不婬、四には不妄語、五には不飮酒、六には時を過ぎて食せず、七には高廣の大床に處らず、八には倡伎樂を作し、香華を身に塗るを遠離す。是れを比丘、名けて賢聖八關齊法と爲すと謂ふなり」と。

是の時彼の優波離、佛に白して言さく、「云何が八關齊法を修行するや」と。世尊告げて曰はく、「是に於て優波離、若しは善男子・善女人、八日・十四日・十五日に於て、沙門若しは長老の比丘の所に往詣し、自ら名字を稱へ、朝從り暮に至る（まで）、阿羅漢の如く、心を持ちて移らず、動せ



【四】A. VIII. 41. Saṅkhitta.
【五】八關齊法(Aṭṭhaṅgasamannāgata uposatha)、前卷索引八關齊をみよ。

計る。故に三十三天の速疾きに如かざるなり。三十三天の疾きを計るも、艶天の疾きに如かず。是の如く諸天の所有の神足、各々相及ばざるなり。假使汝今此の神德有るも、彼の諸天の劫從り、劫に至り、乃至百劫なるも、世の境界を盡くすこと能はざるが如し。然る所以は、地界の方域に稱計す可からざればなり。天子、當に知るべし、我過去久遠世の時、曾て仙人と作り、名けて馬血と爲し、汝と字を同じうしぬ。欲愛已に盡きて虛空を飛行し、觸礙する所無し。我爾の時神足、人と異ること有り、彈指の頃に、能く此の四方の箭を攝せしを以て、墮落せざら使めき。時に我、此の神足有りしを以て、便ち是の念を作しき。『我今能く此の神足を以て、境地の邊際を盡くす可き乎』と、卽ち世界を涉りて其の方域を盡すこと能はざりき。命終の後、德を進め、業を修めて佛道を成じ、樹王下に坐し、端坐して往昔經歷し、施爲せし所の事を思惟しき。本仙人爲り此の神德を以てして、猶其の方面を盡くすこと能はざりき。當に何の神力を以て、其の邊際を究めんことを爲すべき乎。時に我復是の念を作しき。『要らず當に賢聖八品の徑路に來り、然る後に乃ち生死の邊際を盡くすことを得べし』と、彼れ云何が名けて賢聖八品の徑路に乘ると爲すや。所謂正見・正治・正語・正業・正命・正方便・正念・正三昧なり。天子、又知る。斯れを賢聖八品道と名け、世界の邊際を盡くすことを得るなり。諸の過去恒沙の諸佛の、世界を盡すことを得し者は、盡く此の賢聖八品道を用ひて、世界を究めしなり。正使將來の諸佛世尊の、世に出現せん者は、當に此の賢聖之道を以て、邊際を盡くすことを得べし」と。爾の時世尊、便ち此の偈を說きたまはく、

歩涉して究竟すること無し　世界を盡くすことを得んこと　地種は稱る可からず　神足の及ぶ所に非らず　凡夫の施設の意は　中に於て迷惑を起し　眞の正法を別たずして　五道の中に流轉す　賢聖八品道　此れを以て舟船と爲す　諸佛の所行にして　世界の邊りを究む　正使當來の佛　彌勒の等類も　亦八種の道を用ひて　世界を盡くすことを得ん　是の故に有智の士は

# 巻の第三十八

## 馬血天子問八政品第四十三

### 一

聞くこと是の如し。一時佛、舍衛國祇樹給孤獨園に在しき。馬血天子非人の時、世尊の所に至り、頭面に足を禮し、一面に在りて立つ。爾の時天子、世尊に白して言さく、「向者此の念を生ずらく、『地に在りて歩度せば、此の世界を盡す可きや不乎』と、我今世尊に問ひまつらん、歩を以て世界を盡す可きや不耶」と。世尊告げて曰はく、「汝今何の義理を以て此の問ひを作すや」と。天子、佛に白して言さく、「我昔日、一時婆伽梵天の所に至りき。是の時梵天遙に我の來るを見て、我に語げて言く、『善くぞ來れり、馬血天子、此の處は無爲の境にして、生無く、老無く、病ひ無く、死無く、終り無く、始め無く、亦愁・憂・苦・惱無し』と。我爾の時に當つて、復是の念を作さく、『此れは是れ涅槃の道なる耶、何を以ての故に、涅槃の中に生・老・病・死・愁・憂・苦・惱無ければなり。此れは是れ世界の極邊なる耶、設し當に是れ世界の邊際なるべくんば、是れ世間は歩度す可しと爲す耶』」と。世尊告げて曰はく、「汝今神足は何等の類と爲すや」と。天子、佛に白して言さく、「猶し力士の射術を善くし、箭去りて無礙なるが如く、我今神足は其の德是の如くして、罣礙する所無し」と。世尊告げて曰はく、「我今汝に問はんに、所樂に隨つて之を報へよ。猶し四男子有りて、射術を善くす。然るに彼の四人、各四方に向つて射るが如く、設し人有りて來り、意に盡く四面の箭をして、地に墮ちざら使めんと欲す。云何が天子、此の人極めて捷疾爲るや不耶。乃ち能く箭をして地に墮ちざら使めんや。天子、當に知るべし。上に日月、前に捷歩天子有り、行來進止復斯の人の捷疾を踰ゆるや、然るに日月の宮殿は行くこと斯れより甚だし。彼の人天子及び日月の宮殿の疾きを



【一】A. IV. 45. Rohitassa.
【二】馬血天子(Rohitassadevaputta)。
【三】歩度とは、徒歩すること

「我今當に泥犂に趣くの路、涅槃に向ふの道を説くべし。善く之を思念して、漏失せ令むること無かれ」と。諸比丘、佛に白して言さく、「是の如し、世尊」と。諸比丘、佛從り教へを受く。佛、比丘に告げたまはく、「彼れ云何が泥犂に趣くの路、涅槃に向ふの道なるや。邪見は泥犂に趣く路にして、正見は涅槃に向ふの道なり。邪治は泥犂に趣くの路にして、正治は涅槃に向ふの道なり。邪語は泥犂に趣くの路にして、正語は涅槃に向ふの道なり。邪業は泥犂に趣くの路にして、正業は涅槃に向ふの道なり。邪命は泥犂に趣くの路にして、正命は涅槃に向ふの道なり。邪方便は泥犂に趣くの路にして、正方便は涅槃に向ふの道なり。邪念は泥犂に趣くの路にして、正念は涅槃に向ふの道なり。邪定は泥犂に趣くの路にして、正定は涅槃に向ふの道なり。是れを比丘、泥犂に趣くの路、涅槃に向ふの道と謂ふなり。諸佛世尊の常に說法す應き所は、今已に果せり。汝等樂しみて閑居の處に在りて、樹下に露坐し、善法を念行して、懈慢を起すこと無かれ。今勤めて行ぜずば、後に悔ひるも及ぶこと無けん」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

非時と泥犂と道　須倫天と地動と　大人八念と衆　善男子施と道となり。

増壹阿含經卷第三十七

と。「過去久遠の諸佛世尊にも亦復此の賢聖の衆有りて、我今日の如く、異り無し。正使當來の諸佛世尊、世に出現すとも、亦此の如き賢聖の衆を得ん。是の故に長者、歡喜悅心して、聖衆を供養せよ」と。是の時世尊、彼の長者の與に微妙の法を說き、不退轉の地に立てたまふ。長者法を聞き已つて、喜慶すること無量なり。即ち座從り起ち、頭面に足を禮し、佛を遶ること三匝して、便ち退いて去りぬ。是の時阿那邠邸長者、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

## 九

[二一]聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「若し善男子・善女人にして、財物を以て惠施せば、[二二]八功德を獲ん。云何が八と爲すや、一には時に隨つて惠施し、非時に爲すに非らず。二には鮮潔にして惠施し、穢濁を爲すに非らず。三に手自ら斟酌して、他人にせ使めず。四には誓願して惠施し、憍恣の心無し。五には解脫して惠施し、其の報ひを望まず。六には惠施して滅を求め、生天を求めず。七には施すに良田を求め、荒地を施さず。八には然も此の功德を持して衆生に惠施し、自ら己の爲にせず。是の如く比丘、善男子・善女人にして、財物を以て惠施せば、八功德を獲ん」と。爾の時世尊、便ち斯の偈を說きたまはく、

智者は時に隨つて施し　慳貪の心有ること無し　所作の功德已つて　盡く用つて人に惠施す
此の施は最勝爲り　諸佛の加歎する所　現身に其の果を受け　逝けば則ち天福を受けん。

是の故に比丘、其の果報を求めんと欲せば、當に此の八事を行ずべし。其の報ひ無量にして稱計す可からず。甘露の寶を獲て、漸く滅度に至らん。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

## 十

聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、



【二一】A. VIII, 37. Sappurisa.
【二二】八功德(Attha sappurisadānāni 八善人施)。

衣を須ひんには衣を與へ、食を須ひんには食を與へ、國中の珍寶、終に違逆せず、衣被・飲食・床臥の具、病瘦の醫藥悉く之を給施す。亦諸天有りて我所に來至し、虚空中に在つて、我に告げて曰く、『尊卑を分別せよ。此の者は戒を持ち、此の者は戒を犯す、此れに與ふれば福を獲、彼に與ふれば報ひ無し』と、然るに我心は、正しく彼此有ること無く、增減の心を起さず、普く慈心もて一切衆生に等しくす。又且つ衆生は命根に依りて形を存し、食有れば則ち存し、食するに非らされば、命濟はず。一切衆生に惠施せば、其の報ひ無量にして、其の果報を受くるに增減有ること無し」と。佛、長者に告げたまはく、「善い哉、善い哉、長者、平等に施す者の福は第一にして等し。然るに衆生の心、復勝る有り、持戒の人に施すが如きは、犯戒の者に勝る」と。是の時虚空の神天、稱慶すること無量なり。即時に此の偈を說きぬ。

佛は施しを擇ぶの尊きを說きたまふ　愚衆は增減有り　其の良福田を求むること　何ぞ如來の衆に過ぎんや。

然るに今世尊の所說は極めて快哉爲り、持戒の人に施すは犯戒者に勝る」と。

爾の時世尊、阿那邠邸長者に告げたまはく、「今當に汝の與に賢聖の衆を說くべし。善く之を思念して、心懷に抱在せよ。或は施すこと少くして、福を獲ること多し。或は施すこと多くして、福を獲ること多し」と。阿那邠邸長者、佛に白して言さく、「唯、願くは世尊、其の義を敷演したまへ、云何が施すこと少くして、福を獲ること多きや、云何が施すこと多くして、福を獲ること多きや」と。佛、長者に告げたまはく、「向阿羅漢・得阿羅漢・向阿那含・得阿那含・向斯陀含・得斯陀含・向須陀洹・得須陀洹、是れを長者、賢聖の衆、施すこと少くして、福を獲ること多く、施すこと多くして福を獲ること多しと謂ふなり」と。爾の時世尊、便ち此の偈を說きたまはく、

[一九]四向成就の人　[二〇]四は果實を成ず　此れを賢聖の衆と名け　惠施ば福を獲ること廣からん。

---

【一九】四向成就の人とは、須陀洹向、斯陀含向、阿那含向、阿羅漢向の四。(前卷索引四雙八輩をみよ)。
【二〇】四は果實を成ずとは、須陀洹果・斯陀含果・阿那含果・阿羅漢果の四。(四雙八輩及び各項をみよ)。

## 七

[八]聞くこと是の如し、一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、[九]「八部の衆有り、汝等當に知るべし。云何が八と爲すや、所謂[一〇]刹利衆・[一一]婆羅門衆・[一二]長者衆・[一三]沙門衆・[一四]四天王衆・[一五]三十三天衆・[一六]魔衆・[一七]梵天衆なり。比丘、當に知るべし。我曩昔以來、刹利衆中に至り、共に相問訊し、言談講論し、亦復人我と等しき者無く、獨歩にして侶無く、亦儔匹無し。少欲知足にして、念じて錯亂せず、戒成就・三昧成就・智慧成就・解脫成就・多聞成就・精進成就す。復自ら憶念するに、婆羅門衆中・長者衆中・沙門衆中・四天王衆中・三十三天衆中・魔王衆中・梵天王衆中に至り、共に相問訊し、言談講論し、獨歩にして侶無く、亦儔匹無く、中に於て最尊にして、亦等倫無し。少欲知足にして、意錯亂せず、戒成就・三昧成就・智慧成就・解脫成就・多聞成就・精進成就す、我當に爾の時八部衆の中に在りて、獨歩にして侶無く、爾許の衆生の與に大覆蓋を作すべし。是の時八部の衆の能く頂きを見るもの無く、亦敢えて顏を瞻ず。何に況んや當に共に論議すべけん乎。然る所以は「我も亦天上人中の魔、若しは魔天、沙門・婆羅門衆中に、能く此の八法を成就する者有るを見ず、如來を除きて存し、之を論ぜざればなり。是の故に比丘、當に方便を求めて、此の八法を行ずべし。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

## 八

[一八]聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時阿那邠邸長者、世尊の所に往至し、頭面に足を禮し、一面に在りて坐す。是の時世尊、長者に告げて曰はく、「長者、家の中に、廣く施すや不乎」と。長者佛に白さく、「貧しき家に惠施して、晝夜に斷たず、四の城門中、及び大市中、家中の行路、及び佛・比丘僧、是れを八處と爲して惠施す。是の如く世尊、其れ所須有りて、



---

[八] A. VIII. 69. Parisā.
[九] 八部の衆(Aṭṭha parisā)。
[一〇] 刹利衆(Khattiyaparisā)。
[一一] 婆羅門衆 (Brāhmaṇaparisā)。
[一二] 長者衆(Gahapatiparisā)。
[一三] 沙門衆(Samaṇaparisā)。
[一四] 四天王衆 (Cātummahārājikaparisā)。
[一五] 三十三天衆(Tāvatiṁsaparisā)。
[一六] 魔衆(Māraparisā)。
[一七] 梵天衆 (Brahmaparisā)。
[一八] cf. A. II. 44.

阿那律、汝今念ずる所の者は、正しく是れ大人の思惟する所なり。少欲知足にして、閑居之處に在り、戒成就、三昧成就、智慧成就、解脫成就、多聞成就なり。汝今阿那律、當に是の意を建てゝ、八大人念を思惟すべし。云何が八と爲すや、此の法は精進の者の所行にして、懈怠者の所行に非らず、然る所以は、彌勒菩薩は應に三十劫に當に無上正眞・等正覺を成ずべし。我精進の力を以て、超越して佛を成ぜり、阿那律之を知れ、諸佛世尊は皆同一にして、其の戒律解脫智慧を同じくして異り有ること無し。亦復空無相の願を同じくし、三十二相八十種好有りて、其の身を莊嚴し、視て厭足無く、能く頂を見る者無く、皆悉く異らず。唯、精進有りて同じからず。過去當來の諸佛世尊の精進者に於て、吾最も勝れ爲り。是の故に阿那律、此の第八大人の念は、此れを最と爲し、上と爲し、尊と爲し、貴と爲し、喩ふるもの有ること無しと爲すこと、猶し乳に由つて酪有り、酪に由つて酥有り、酥に由つて醍醐有り、然も復醍醐は中に於て最上にして、比するもの有ること無しと爲すが如し。此れも亦是の如く、精進の念は八大人念の中に於て、最上にして、實に比するもの有ること無し。是の故に阿那律、當に八大人念を奉ずべし。亦當に四部衆の與に、是の義を分別すべし。設し當に八大人念、流布して世に在らば、今、我弟子は皆、當に須陀洹道・斯陀含道・阿那含道・阿羅漢道を成ずべし。然る所以は、我法は少欲者の所行にして、多欲者の所行に非らざるなり。我法は知足者の所行にして、無厭者の所行に非らざるなり。我法は　閑居者の所行にして、衆中者の所行に非らざるなり。我法は持戒者の所行にして、犯戒者の所行に非らざるなり。我法は定者の所行にして、亂者の所行に非らざるなり。我法は智者の所行にして、愚者の所行に非らざるなり。我法は多聞者の所行にして、少聞者の所行に非らざるなり。我法は精進者の所行にして、懈怠者の所行に非らざるなり。是の故に阿那律、四部の衆は當に方便を求めて此の八大人念を行ずべし。是の如く阿那律、當に是の學を作すべし」と。爾の時阿那律、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

【七】閑靜處に獨りをる者の所行にして、衆中にをるものの所行に非らざるの意。

聞くこと是の如し、一時尊者阿那律、四佛所居の處に遊在しぬ。是の時阿那律、閑靜の處に在りて、便ち是の念を作さく、「諸の釋迦文佛の弟子の中、戒德智慧成就する者は、皆戒律に依り、此の正法中に於て長養を得、諸の聲聞中、戒律を具足せざる者、是れ等の類は皆正法を離れ、戒律と相應せず、如今此の二法、戒と聞と何れを勝ると爲すや、我今此の因緣の本を以て、往いて如來に問ひまつる可し。」と、時に阿那律、復是の念を作さく、「此の法は知足の者の所行にして、無厭の者の所行に非らず。少欲の者の所行にして、多欲の者の所行と爲すに非らず。此の法は應閑居者の所行にして、在憒閙のもの〻所行に非らず。此の法は持戒人の所行にして、犯戒者の所行に非らず。三昧者の所行にして、亂者の所行に非らず。智慧者の所行にして、愚者の所行に非らず。多聞者の所行にして、少聞者の所行に非らず」と。是の時阿那律、此（六）八大人念を思惟し、「今我世尊の所に往至して、此の義を問ふ可し」と。爾の時世尊は舍衞城祇樹給孤獨園に在せり。

是の時王波斯匿、如來及び比丘僧を請じて、夏坐九十日なり。是の時阿那律、漸々に人間(界)に、五百の比丘を將ひて遊化し、轉じて舍衞國に至り、如來の所に到り、頭面に足を禮し、一面に在りて坐す。時に阿那律、世尊に白して言さく、「我閑靜の處に在りて、此の義を思惟すらく、『戒と聞と此の二法は何者か最も勝ぐる〻乎』」と。是の時世尊、阿那律の與に便ち此の偈を說きたまはく、

　戒勝ぐるや聞勝ぐる耶と　汝今狐疑を起す　戒は聞に勝ぐる〻こと　中に於て何ぞ狐疑せんや。

然る所以は、阿那律、當に知るべし、若し比丘にして、戒成就せば、便ち定意を得、已に定意を得ば、便ち智慧を獲、已に智慧を得ば、便ち多聞を得、已に多聞を得ば、便ち解脫を得、已に解脫を得ば、無餘涅槃に於て滅度を取る。此れを以て之を明にせば、戒を最勝と爲すなり」と。是の時阿那律、世尊に向つて此の八大人念を說きまつりぬ。佛阿那律に告げて曰はく、「善い哉、善い哉、

【六】八大人念(Attha mahāpurisa-vitakka)。

天地の大に動くに八因縁有り、云何が、八と爲すや、比丘、當に知るべし此れ閻浮里地は、南北二萬一千由旬、東西七千由旬、厚さ六萬八千由旬、水の厚さ八萬四千由旬、火の厚さ八萬四千由旬、火の下に風有り、厚さ六萬八千由旬、風の下際に金剛輪有りて、過去の諸佛世尊の舍利盡く彼の間に在り。比丘當に知るべし、或は是れ時有つてか、大風正しく動けば、火も亦動く、火已に動けば、水便ち動く、水已に動けば、地便ち動く、是れを第一の因縁、地をして大動せ使むと謂ふなり。

復次に菩薩、兜術天從り降神來下して、母胎の中に在れば、是の時地も亦大動す。是れを第二の因縁地をして大動せ使むと謂ふなり。復次に菩薩、降神して母胎を出づる時天地大動す、是れを第三の因縁、地をして大動せ使むと謂ふなり。復、次に菩薩、出家學道して、無上正眞等正覺を成ぜば、是の時天地大動するなり。是れを第四の因縁、地をして大動せ使むと謂ふなり。復次に若し如來、無餘涅槃界に入りて、滅度を取れば、是の時天地は大動す。是れを第五の因縁、地をして大動せ使むと謂ふなり。復次に大神足の比丘有りて、心自在を得て、意に隨つて欲行じ、無數に變化し、或は身を分ちて百千の數と爲し、復還つて一と爲し、虛空を飛行し、石壁皆過ぎ、涌沒自由にして、地を觀じて地想無く、悉く空無なりと了れば、是の時地大動を爲す。是れを第六の因縁、地大動を爲すと謂ふなり。復次に諸天、大神足、神德無量にして、彼從り命終し、還つて彼の間に生じ、宿福の行に由つて諸德を具足し、本の天形を捨てゝ、帝釋若しは梵天王と作ることを得る時、地大動を爲す。是れを第七の因縁、地の大動を爲すと謂ふなり。復次に若し衆生命終して福盡けば、是の時國王本邦を樂します、各々相攻伐し、或は飢儉に死する者、或は刀刃に死する者(あれば)、是の時天地大動す。是れを第八の因縁、地をして大動せ使むと謂ふなり。是の如く比丘、八因縁有りて、天地をして大動せ使むるなり」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

六

ひ、諸比丘見已つて其の中に娯樂す。我法中に於て、此の八未曾有の法有りて、諸比丘其の中に於て、甚だ自ら娯樂す」と。
是の時阿須倫、世尊に白して曰さく、「如來の法中、一未曾有の法を有ら使むるも、彼の海中の八未曾有の法に勝ること百倍、千倍にして比を爲す可からず。所謂賢聖八道是れなり。善い哉、世尊、快く斯の言を説きたまへり」と。爾の時世尊、漸く與に法を説きたまふ。所謂施論・戒論・生天の論、欲は不淨想、漏を大患と爲し、出要を妙と爲すと、爾の時已に彼の心開け、意解するを見、諸佛世尊の常に説きたまふ所の法、苦・集・盡・道を盡く與に之を説きたまひぬ。爾の時阿須倫、便ち是の念を作さく、「應に五諦有るべきに、今世尊は但四諦を説きたまひ、諸天の與に五諦を説きたまふか」と。是の時天子卽ち座上に於て法眼淨を得たり。時に阿須倫、世尊に白して言さく、「善い哉、世尊、快く斯の言を説きたまへり。今所在に還らんと欲す」と。世尊告げて曰はく、「宜しく是れ時を知るべし」と、卽ち座從り起ち、頭面に足を禮し、道を復して去りぬ。
　時に天子阿須倫に語げて曰く、「汝の今の所念は、極めて不善と爲す、云く、『如來は諸天の與に五諦を説き、我與に四諦を説きたまふ』と。然る所以は、諸佛世尊は終に二言無し、諸佛は終に衆生を捨てたまはず、説法したまふも亦懈惓無し。説法したまふも亦復盡くること無く、亦復人を選擇して、與に説法したまはず。平等の心もて法を説きたまふ。四諦、苦・集・盡・道有り、汝今是の念を作すこと莫かれ、如來を咎めまつりて、五諦有りと言ふこと勿れ」と。是の時阿須倫、報へて曰く、「我今造くる所の不善を、自ら當に懺悔すべし。要らず當に如來の所に至りて、更に此の義を問ひまつるべし」と。爾の時阿須倫及び天子、佛の所説を聞いて歡喜奉行しぬ。

五

聞くこと是の如し、一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、

を第八未曾有の法と謂ふなり。此れを八未曾有の法と名け、諸の阿須倫をして、其の中に娯樂せ使む」と。

是の時阿須倫、世尊に白して曰さく、「如來の法中に何の奇特有りて、諸比丘をして、見已つて其の中に娯樂せ使むるや」と。佛、阿須倫に告げて曰はく、「八未曾有の法有りて、諸比丘をして其の中に娯樂せ使む。云何が八と爲すや、又我法中に、戒律具足して放逸の行無し。是れを初未曾有の法と謂ふなり。諸比丘見已つて其の中に娯樂す。彼の大海の極めて深く、且つ廣きが如し。復次に我法中に四の種姓有りて、我法中に於て沙門と作れば、前名を錄せずして、更に餘字を作ること、猶し彼の大海に四大江河皆海に投じて、同一味にして、更に餘名無きが如し。是れを第二の未曾有の法と謂ふなり。復次に我法中に、禁戒を施設し、相隨つて亦越叙せず。是れを第三の未曾有の法と謂ふなり。復次に我法中、皆同一味にして、所謂賢聖八品道味是れなり。是れを第四の未曾有の法と謂ふなり。彼の大海の悉く同一味なるが如し。復次に我法中に、種々の法其の中に充滿す。所謂四意斷・四神足・五根・五力・七覺意・[五]八眞直行にして、諸比丘見已つて其の中に娯樂すること、彼の大海に諸神其の中に居するが如し。是れを第五の未曾有の法と謂ふなり。復次に我法中に、種々の珍寶有り、所謂念覺意寶・法覺意寶・精進覺意寶・喜覺意寶・猗覺意寶・定覺意寶・護覺意寶にして、是れを第六未曾有の法と謂ひ、諸比丘見已つて其の中に娯樂すること、彼の大海の種々の珍寶を出すが如し。復次に我法中、諸有の衆生の類、鬚髮を剃除し、三法衣を著け、出家學道して、無餘涅槃界に於て滅度を取る。然も我法中に增減有ること無きこと、彼の大海の、諸河之に投ずるも、增減有ること無きが如し。是れを第七未曾有の法と謂ひ、諸比丘見已つて其の中に娯樂するなり。復次に我法中に金剛三昧有り、滅盡三昧・一切光明三昧・得不起三昧有りて、種々の三昧稱計す可からず。諸比丘見已つて娯樂すること、彼の大海の下に金沙有るが如し。是れを第八の未曾有の法と謂

---

【五】八眞直行とは、八正道のこと。

尊と稱し、小を賢と稱せよ、相視ること當に兄弟の如くなるべし。今自り以後、父母の作りし所の字を稱することを得ざれ」と。是の時阿難、世尊に白して言さく、「如今諸比丘は當に云何が自ら名號を稱すべきや」と。世尊告げて曰はく、「若し小比丘にして大比丘に向はゞ、長老と稱せよ、大比丘にして小比丘に向はゞ、姓字を稱せよ、又諸比丘にして、字を立てんと欲する者は、當に三尊に依るべし。此れは是れ我の教誡なり」と。是の時阿難、世尊の所説を聞いて歡喜奉行しぬ。

## 四

聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國鹿野苑中に在し、大比丘衆五百人と倶なりき。是の時波呵羅阿須倫及び牟提輪天子、時に非らざるに世尊の所に至り、頭面に足を禮し、一面に在りて坐す。是の時如來、阿須倫に問ふて曰はく、「汝等甚だ大海の中に樂しむ乎」と。阿須倫佛に白して言さく、「實に樂し、爲に樂しまざるには非らざるなり」と、世尊告げて曰はく、「大海の中に、何の奇特の法有りて、汝等見已つて中に於て娛樂するや」と。阿須倫佛に白して言さく、「大海之中に八未曾有の法有り、諸の阿須倫、其の中に娛樂す。云何が八と爲すや、是に於て大海の中は極めて深く、且廣し、是れを初未曾有の法と謂ふなり。復次に大海に此の神德有り、四大江河、一一の河に將に五百を從へて以て大海に投ずれば、便ち本の名字を失ふ。是れを第二の未曾有の法と謂ふなり。復次に大海は皆同一味なり。是れを第三の法と謂ふなり。復次に大海は時を以て朝賀して、時節を失はず、是れを第四の未曾有の法と謂ふなり。復次に大海は鬼神の居する所にして、有形の類の大海の中に在らざる者無し。是れを第五の未曾有の法と謂ふなり。復、次に大海の中に、皆極大の形は百由旬の形、千由旬の形、乃至七千由旬の形を容るゝも、亦逼迮せず。是れを第六の未曾有の法と謂ふなり。復次に大海の中に、若干種の珍寶を出す。硨磲・瑪瑙・眞珠・琥珀・水精・琉璃、是れを第七の未曾有の法と謂ふなり。復次に大海の中の下に金沙有り、又須彌山有りて、四寶の所成なり。是れ

賢聖八品道を得ざるに由りてなり。其れ賢聖八品道を得しを以ての故に佛道を成ぜり。是の故に須拔、當に方便を求めて、賢聖道を成ずべし」と。然るに須拔、復、佛に白して言さく、「我も亦賢聖八品道を聞くを樂しむ。唯、願くは演說したまへ」と。世尊告げて曰はく、「所謂八道とは、等見・等治・等語・等命・等業・等方便・等念・等三昧、是れを須拔、賢聖八品道と謂ふなり」と。

是の時須拔、即ち座上に於て法眼淨を得たり。爾の時須拔、阿難に語げて言く、「爾り我今快く善利を得たり。唯、願くは世尊、沙門と爲ることを聽るせ」と。阿難報へて言く、「汝今自ら世尊の所に往至して、沙門と作ることを求めよ」と。是の時須拔、世尊の所に往至し、頭面に足を禮し、世尊に白して言さく、「唯、願くは世尊、沙門と作ることを聽させたまへ」と。爾の時須拔、即ち沙門の身を成じ、三法衣を著けぬ。時に須拔、世尊のみ顏を仰ぎ觀、即ち座上に於て有漏より心解脫を得たり。爾の時世尊、阿難に告げて曰はく、「我最後の弟子の中、所謂須拔是れなり」と。

爾の時須拔、佛に白して言さく、「我今聞く、『世尊は夜半に當に般涅槃を取りたまふべし』と、唯、願くは世尊、先きに我の涅槃を取ることを聽したまへ、我如來の先きに滅度を取りたまふを見たてまつるに堪えず」と。爾の時世尊、默然として之を可したまひぬ。然る所以は、過去恒沙の諸佛世尊の、最後の取證の弟子は、先きに般涅槃を取り、如來は後に滅度を取りたまへばなり。此れは是れ諸佛世尊の常法にして、今日に適ふに非らざるなり。是の時須拔、世尊の已に之を可したまひしを見、即ち如來の前に在りて、正身正意に、繫念して前に在り、無餘涅槃界に於て滅度を取りぬ。是の時此の地六反震動せり。爾の時世尊、便ち此の偈を說きたまはく、

一切行は無常なり　生ずれば必ず死有り　生ぜずば則ち死せず　此の滅を最も樂しと爲す。

と。

是の時世尊、阿難に告げて曰はく、「今自り已後、諸比丘に勅す、卿僕[四]相向ふことを得されし、大を

【四】卿僕、比丘等互に呼ぶに「友よ」"āvuso" の語を以てせり。

無く、前んで覩たまふこと極り無し』と。然るに今日獨り接納せ見れざるや」と。
是の時世尊、天耳を以て遙に須拔の阿難に向つて、是の如きの論を作すを聞きたまひぬ。爾の時世尊、阿難に告げて曰はく、「止みなん、止みなん、阿難、須拔梵志を遮ぎること勿れ、然る所以は、此に來りて義を問はゞ、饒益する所多からん。若し我說法せば、卽ち度脫を得ん」と。是の時阿難須拔に語げて言く、「善い哉、善い哉、如來は今內に在りて法を問ふことを聽したまふ」と。是の時須拔、此の語を聞き已つて、歡喜踊躍して自ら勝ふること能はず。又復須拔、世尊の所に往至し、頭面に足を禮し、一面に在りて坐す。爾の時須拔、世尊に白して言さく、「我今所問有らんと欲す、唯、願くは聽許させたまへ」と。是の時世尊、須拔に告げて曰はく、「今正に是れ時なり、宜しく時に問ふ可し」と。是の時須拔、佛に白して言さく、「諸の沙門瞿曇と異り、諸の算術を知り、過度する所多きもの、所謂不蘭迦葉・阿夷耑・瞿耶樓・胝休迦旃・先毘盧持・尼犍子等、此の如きの輩は、三世の事を知る乎、解せずと爲ん耶。其の六師の中、復如來に勝るもの有り乎」と。爾の時世尊、告げて曰はく、「止みなん、止みなん、須拔、此の義を問ふこと勿れ、何んぞ煩はしくも、此れ如來に勝ると問ふ乎。然るに我、今日此の座上に在り、當に汝の與に說法すべし。善く之を思念せよ」と。須拔、佛に白して言さく、「今當に、爲に深義を問ふべし。唯、願くは世尊、時を以て之を說きたまへ」と。
爾の時世尊、告げて曰はく、「我初めて道を學びし時、年二十九なりき。人民を度せんと欲せしが故に。三十五年外道中に在りて學び、是れ自り已來、更に沙門婆羅門を見ず。其れ大衆の中に八賢聖道無くば、則ち沙門の四果無からん。是れを須拔、世間は空虛にして、更に眞人の得道の者無しと謂ふなり。其れ賢聖法中に、賢聖の法有るを以て、則ち沙門四果之報ひ有り。然る所以は、沙門の四果之報ひ有るに因り、皆賢聖八品道に由るなり。若し須拔、若し我無上正眞之道を得ずば、皆

後、復殺生せじ』と、復帝奢と名け、二を優波帝奢と名くる有り、復佛舍と名け、二を鷄頭と名くる有り、是の如き比皆來りて如來に歸しまつり、『唯、願くは世尊、聽して優婆塞と爲したまはんことを、今自り後、復殺生せず、五戒を奉持せん』」と。是の時世尊、廣く爲に說法して、發遣して歸へさ使めたまひぬ。是の時五百の摩羅衆、即ち座從り起ち、佛を遶ること三匝して、便ち退いて去りぬ。爾の時世尊、阿難に告げて曰はく、「吾最後の受證の弟子は、所謂拘尸那竭の五百の摩羅是れなり」と。

爾の時[三]須拔梵志、波々國從り來つて拘尸那竭國に至り、遙に五百人の來るを見、即ち之に問ふて曰く、「汝等何れ從り來ると爲すや」と。五百人報へて曰く、「須拔、當に知るべし、如來は今日當に滅度を取りたまふべし。雙樹の間に在せり」と。是の時須拔、便ち是の念を作さく、「如來の世に出現したまふこと、甚だ遇ひ難しと爲す。如來の出世は時々に乃ち有り、優曇鉢華の億劫に乃ち出づるが如し。我今少多疑ひ有りて、諸法を解せず、唯、彼の瞿曇沙門は能く我狐疑を解せん。我今彼の瞿曇の所に往至して、此の義を問ふ可し」と。

是の時須拔梵志、雙樹間に至り、阿難の所に到り、阿難に白して曰く、「吾聞く、『世尊は今日當に滅度を取りたまふべし』と、審に爾りと爲すや不や」と。阿難報へて曰く、「審に其の事有り」と。須拔白して言く、「然るに我今日猶狐疑有り、唯、願くは聽許して、世尊に此の言を白せ、餘人は六師の所說を解せず、沙門瞿曇の所說を見ることを得と爲ん乎」と。阿難白して言く、「止みなん、止みなん、須拔、如來を嬈すこと勿れ」と。是の如きこと再三なり、復阿難に白して曰く、「如來の出世したまふこと甚だ遇ふ可からず、優曇鉢華の時々に乃ち有るが如し。如來も亦復是の如く、時々に乃ち出でたまふ。然るに我今如來を觀ずるに、能く我狐疑を解するに足る。我今問ふ所の義は、蓋し言ふに足らず、又今阿難、我與に往いて世尊に白さず。又聞く、『如來は却いて覩たまふこと窮り

【三】須拔(Subhadda)。

# 卷の第三十七

## 八難品第四十二の二

「當に云何が[一]車那比丘と與に從事すべきや」と。世尊告げて曰はく、「當に[二]梵法を以て之を罰すべし」と。阿難佛に白して言さく、「云何が梵法之を罰するや」と。世尊告げて曰はく、「車那比丘の與に所說有る應からず。亦善しと言ふ莫かれ、後惡しと言ふ莫かれ。然れば此の比丘、亦復汝に向つて當に所說有るべからざらん」と。阿難、佛に白して言さく、「設し事を究めざる者は、此れ則ち罪を犯すも重からざる乎」と。世尊告げて曰はく、「但與に語らずば、卽ち是れ梵法の罰なり。然も由つて改めずば、當に將ひて衆中に詣り、諸人と共に彈じて出さ使むべし。與に說戒すること莫かれ、亦與に法會に從事すること莫かれ」と。爾の時世尊、便ち此の偈を說きたまはく、

彼の怨家の與に　其の怨を報ぜんと欲せば　恒に念じて與に語ること莫かれ　此の惡に過ぐる者無ければなり。

と。

是の時拘尸那竭の人民、如來の當に滅度を取りたまふべく、剋して夜半に在るを聞きぬ。是の時國土の人民、雙樹間に往至し、到り已つて頭面に足を禮し、一面に在りて坐す。爾の時人民、世尊に白して言さく、「今聞く、『如來は當に滅度を取りたまふべし』と。我等當に云何が敬ひを興すべきや」と。是の時世尊、阿難を顧視したまひぬ。是の時阿難、卽ち是の念を作さく、「如來は今日身體疲倦したまへば、我をして彼の義を旨授せ使めんと欲したまはん」と。是の時阿難、右膝を地に著け、長跪叉手して、世尊に白して言さく、「今二種の姓有り、一を婆阿陀と名け、二を須拔陀と名く。今來りて自ら如來聖衆に歸しまつり、『唯、願くは世尊、聽して優婆塞と爲したまへ、今自り已

【一】車那(Channa)。
【二】梵法(Brahmadaṇḍa)、共に語らず、非難すらなさゞる罰。

有の法有りと謂ふなり」と。是の時阿難、世尊に白して曰さく、「當に云何が女人に從事すべきや。然して今比丘、時到つて衣を著け、鉢を持して家家に乞食し、衆生を福度す」と。佛、阿難に告げたまはく、「與に相見ること莫かれ。設し相見ば、與共に語ること莫かれ。設し共に語らば、當に心意を專にすべし」と。爾の時世尊、便ち此の偈を說きたまはく、

女と與に交通すること莫かれ　亦共に言語すること莫かれ　能く遠離する者有らば　則ち八難を離れん

と。

増壹阿含經卷第三十六

是の時世尊、躬自ら僧伽梨を襞みて四疊とし、右脇を地に著け、脚と脚とを相累ねたまひぬ。是の時尊者阿難、悲泣涕零して自ら勝ふること能はず、又自ら考責すらく、「既に未だ道を成ぜず、結の爲に縛せ所る。然るに今世尊は我を捨てゝ滅度したまはんとす、當に何れに恃怙すべきや」と。是の時世尊、知りたまひて、諸比丘に告げて曰はく、「阿難比丘は今所在爲るや」と、諸比丘對へて曰さく、「阿難比丘は今如來の床の後に在りて、悲號して涙を墮し、自ら勝ふる能はず、又自ら考責すらく、『既に道を成ぜず、又結使を斷ぜざるに、然るに今世尊は我を捨てゝ涅槃したまはんとす』」と、爾の時世尊、阿難に告げて曰はく、「止みなん、止みなん、阿難、愁憂を爲すこと無かれ、夫れ物として世に處せば、當に壞敗す應きに、變易せざら使めんと欲すること、此の事然らざるなり。勤加精進して正法を念修せよ。是の如くんば、久しからずして亦當に苦際を盡くし、無漏行を成ずべし。過去世の時の多薩阿竭阿羅呵三耶三佛にも亦、此の如き侍者有りき。正使將來の恒沙の諸佛にも亦、當に此の侍者有るべく、阿難の此の如からん。轉輪聖王に四未曾有の法有り、云何が四と爲すや、是に於て轉輪聖王、國界を出でんと欲する時、人民の見る者喜悦せざるは莫し。爾の時轉輪聖王言教する所有りて、其の聞くこと有る者、喜悦せざるは靡し。其の言教を聞けば、乃ち厭足無し。爾の時轉輪聖王默然たれば、正使人民、王の默然たるを見るも亦復歡喜す。是れを比丘、轉輪聖王に此の四未曾有の法有りと謂ふなり。

比丘、當に知るべし。阿難に今日四未曾有の法有り、云何が四と爲すや、正しく阿難比丘をして、默然として大衆の中に至ら使めば、其れ見ること有る者、喜悦せざるは莫し。正しく阿難比丘をして所說有ら使めば、其の語を聞く者は皆共に歡喜す。假使默然たるも亦復是の如し。正使阿難比丘四部衆中、刹利・婆羅門衆中に至り、國王・居士衆中に入るも、皆悉く歡悅し、恭敬心を興し、視て厭足無し正使阿難比丘所說有らば、其れ法教を聞き、受くるに厭足無し。是れを比丘、此の四未曾

くに頭を北に向け(使めよ)と言ふや」と。佛、阿難に告げたまはく、「吾滅度の後、佛法は當に北天竺に在るべし。此の因緣を以ての故に、座を敷くに北に向け使めしなり」と。

是の時世尊、三衣を分別したまひぬ。爾の時阿難、佛に白さく、「何等を以ての故に、如來は今日三衣を分別したまひしや」、佛阿難に告げたまはく、「我當來の世に檀越施主を以ての故に、此の衣を分別せし耳、彼の人をして其の福を受け使めんと欲するが故に、衣を分別せし耳」と。是の時世尊、須臾の頃に、口より五色の光を出し、遍く方域を照らしたまひぬ。爾の時阿難、復佛に白して言さく、「復何の因緣を以て、如來は今日口より五色の光を出したまふや」と。世尊告げて曰はく、「我向きに是の念を作しぬ。『本未だ道を成ぜざりし時、長く地獄に處りて熱鐵丸を呑み、或は草木を食して、此の四大を長じぬ。或は騾驢・駱駝・象・馬・猪・羊と作り、或は餓鬼と作りて四大を長じ、形受胎の厄有り、或は天の福を受けて、自然の甘露を食しぬ。我今已に如來を成じ、根力覺道を以て如來の身を成ぜり。此の因緣に由るが故に、口より五色の光を出す耳」と。

是の時須臾の間に、口より微妙の光を出したまふ前の光に勝れたり。是の時阿難、世尊に白して言さく、「復何の因緣を以て、如來は重ねて妙光の前に勝るゝ者を出したまふや」と。世尊告げて曰はく、「我向者是の念を作しぬ。『過去の諸佛世尊の滅度を取りたまふや、遺法は久しく世に存せざりき』と、我復重ねて思惟すらく、『何の方便を以て我法をして久しく世に存在することを得使めんや。如來身は金剛の數なり、意此の身を碎きて芥子許りの如く、「世間に流布して、將來の世をして信樂し檀越の如來の形像を見ざる者をして、之を供養するの因緣を取ら使めんと欲してなり。是の福祐は當に四姓の家・四天王家・三十三天・豔天・兜術天・化自在天・他化自在天に生ずべし。此の福祐に因つて、當に欲界・色界・無色界に生ずべし。或は復、須陀洹道・斯陀含道・阿那含道・阿羅漢道・辟支佛道を得、若しは佛道を成ずる有り、此の因緣に由るが故に、斯の光明を出せし耳」と。

ふこと、將に久しからざるに在り」と。世尊告げて曰はく、「如來の滅度を取ること正に今日夜半に在る耳」と。是の時比丘尼、佛に白して言さく、「我今出家學道せし所以の又所願を果さず。然るに世尊は我を捨てゝ滅度したまはんとす、唯、願くは微妙の法を說きて、其の願ひを果さ使めたまへ」と。世尊告げて曰はく、「汝今當に苦の原本を思惟すべし」と。比丘尼、復佛に白して言さく、「實に苦なり、世尊、實に苦なり、世尊」と。世尊告げて曰はく、「汝何等の義を觀じて苦と言ふ乎」と、比丘尼、佛に白して言さく、「生苦・老苦・病苦・死苦・憂悲惱苦・怨憎會苦・恩愛別離苦なり。要を取りて之を言はゞ、五盛陰苦なり。是の如く世尊、我此の義を觀じ已るが故に、言ひて苦と謂ふなり」と。

是の時比丘尼、義を思惟し已つて、即ち座上に於て三達智を得たり。是の時比丘尼、佛に白して言さく、「我世尊の滅度を取りたまふを見るに堪えず、唯、願くは『先きに滅度を取ることを聽許したまへ」と。是の時世尊、默然として之を可したまひぬ。是の時比丘尼、即ち座從り起ち、世尊の足を禮し、尋いで佛前に於て、身虛空を飛在して十八變を作しぬ。或は行き、或は坐し、或は復經行し、身烟火を放ち、湧沒すること自由にして、觸礙する所無し。或は水火を出し、空中に遍滿せり。是の時比丘尼、無央數の變を作し已つて、即ち無餘涅槃界に於て滅度を取りぬ。是の時當に滅度を取るべきの日に、八萬の天子、法眼清淨を得たり。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「我聲聞中第一の比丘尼にして、智慧捷疾なる者は、所謂君荼羅比丘尼是れなり」と。

是の時世尊、阿難に告げて曰はく、「汝雙樹の間に往いて、如來の與に座を敷き、頭をして北首せ使めよ」と。對へて曰さく、「是の如し、世尊」と、即ち佛の敎へを受け、雙樹の間に往いて如來の與に座を敷き、還つて世尊の所に至り、頭面に足を禮し、世尊に白して曰さく、「座を敷き已訖れり、頭を北首せ使めたまへ、宜しく是れ時を知りたまふべし」と、即時に世尊、彼の樹の間に往き、敷か所し座に就きたまひぬ。是の時尊者阿難、世尊に白して言さく、「何の因緣有りて、如來は座を敷

以ても比を爲す可からず。如來の神足は其の德量る可からさるなり」と。

諸の童子、佛に白して言さく、「如來の智慧力とは何者か是れなる乎」と。世尊告げて曰はく、「我昔亦弟子有り、舍利弗と名く。智慧の中最も第一爲り。大海水の縱廣八萬四千由旬に、水其の中に滿つるが如く、又須彌山の高さ八萬四千由旬、水を入るゝこと亦是の如し。然るに閻浮里地は南北二萬一千由旬、東西七千由旬にして、今取りて之を較ぶるに、四大海水を以て墨と爲し、須彌山を以て樹皮と爲し、閻浮里地を現すに、草木を筆と作し、復三千大千刹土の人民をして、盡く能く書か使めて、舍利弗比丘の智慧の業を爲さんと欲す。然るに童子、當に知るべし、四大海水の墨、筆人の漸々に命終するも、舍利弗比丘の智慧をして、竭盡せ使むること能はず。是の如く童子、我弟子の中智慧第一なるものも、舍利弗の智慧の上に出でざるなり。此の舍利弗比丘を計するに、三千大千刹土に遍滿して、空缺の處無きも、如來の智慧に比せんと欲せば、百倍・千倍・巨億萬倍にして、譬喩を以て比を爲す可からず。如來の智慧力とは、其の事是の如し」と。

是の時童子復佛に白して言さく、「頗ふらくは、更に力にして、此の力に出づる者有り乎」と。世尊告げて曰はく、「亦此の力有りて、諸力の上に出づ。何者か是れなるや、所謂無常の力是れなり。今日如來は夜半、雙樹間に在りて、無常の力の爲に牽か所て、當に滅度を取るべし」と。爾の時諸の童子、咸共に涙を墮し、「如來の滅度を取りたまふこと、何ぞ其れ速なる哉、世は眼目を喪はん」と。爾の時君荼羅繋頭比丘尼、是れ婆羅陀長者の女なり。此の比丘尼、便ち是の念を作さく、「吾聞く、『世尊の滅度を取りたまふこと久しからじ』と、然るに日數已に盡きたり。今宜しく世尊の所に往至し、親覲問訊す可し」と。是の時彼の比丘尼、即ち毘舍離城を出で、世尊の所に往至し、遙に如來の、徑に諸の比丘衆及び五百の童子を將ひ、雙樹の間に詣らんと欲したまふを見たり。爾の時比丘尼、世尊の所に至り、頭面に足を禮し、世尊に白して言さく、「我聞く、世尊の滅度を取りたま

り、極めて香美爲り」と、唯、願くは世尊、弟子を聽許して、此の地肥を反へして上に在ら令め、此の人民をして、之を食噉することを得使め、又聖衆をして氣力を充たすことを得使めたまへ』と。我爾の時目連に告げて曰く、『諸の地中の蠕動の虫は、何れの所に安處せんと欲するや』と。目連、白して言く、『當に一手を化して此の地の形に似せ、又一手を以て此の地肥を反へし、蠕動の虫をして、各其の所に安ぜ使むべし』と。我爾の時、復目連に告げて曰く、『汝當に何の心識有りて、此の地を反へさんと欲すべきや』と。目連白して言く、『我今此の地形を反へすこと、猶し力人の一樹葉を反へすに疑難無きが如きなり』と。我爾の時、復目連に語げて曰く、『止みなん、止みなん、目連、此の地肥を反へすことを須ひざれ、然る所以は、衆生此れを覩ば當に恐怖を懷き、衣毛皆竪つべし。諸佛の神寺も亦當に毀壞すべし』と。是の時目連、佛に白して言く、『唯、願くは世尊、聖衆の、鬱單曰に詣りて乞食することを聽許したまへ』と。佛、目連に告げたまはく、『此の大衆の中、神足無き者は、當に云何が彼に詣りて乞食すべきや』と、目連佛に白して言さく、『其れ神足無き者は、我當に接して彼の土に詣るべし』と、佛、目連に告げたまはく、『止みなん、止みなん、目連、何んぞ聖衆の彼に詣りて乞食するを須ひんや、然る所以は、將來の世に亦當に、是の如き飢儉にして、乞求するも得難く、人顏色無かるべくんば、爾の時諸の長者、婆羅門は、當に比丘に語げて言ふべし、「汝等何んぞ鬱單越に詣りて乞食せざるや、昔日釋種の弟子、大神足有り、此の饑儉に遇ひて、皆共に鬱單曰に詣りて乞食して、自存して濟へり。今日釋迦の弟子に神足有ること無く、亦威神沙門の行無し」と、便ち比丘を輕易し、彼の長者居士をして、普く憍慢の心を懷か使め、罪を受くること無量なり、目連、當に知るべし。此の因緣を以て、諸の比丘衆は、盡く彼に往詣して乞食す宜からざるなり』と。諸童子、當に知るべし、目連の神足、其の德是の如し、目連の神足の力を許するに、三千大千刹土を遍くして、空缺の處無きも、世尊の神足の力に如かざること、百倍、千倍、巨億萬倍にして、譬喩を

と。諸の童子、佛に白して言さく、「不審なり、如來は父母の力を用ひたまふと、其の事云何ん」と。世尊告げて曰はく、「吾今當に汝の與に譬を引くべし。智者は譬喩を以て自ら解らん、童子、當に知るべし。十駱駝の力は一凡象の力に如かず、又十駱駝及び一凡象の力は一迦羅勒象の力に如かず。又復十駱駝及び一凡象の力、幷に迦羅勒象の力は一鳩陀延象の力に如かざるなり。正使十駱駝、一凡象の力、乃至鳩陀延象の力は、一婆摩那象の力に如かざるなり。復此の象の力を計するも、一迦泥留象の力に如かざるなり。復諸の象の力を計するに、復一優鉢象の力に如かざるなり。復爾許の象の力を計するに、復一鉢頭摩象の力に如かざるなり。復爾許の象の力を計挍するに、復一拘牟陀象の力に如かざるなり。復取りて之を計挍するに、復一分陀利象の力に如かざるなり。復取りて之を計挍するも、復一香象の力に如かざるなり。復取りて之を計挍するに、復一摩呵那極の力に如かざるなり。復之を計挍するに、復一那羅延の力に如かざるなり。復取りて之を計挍するも、復一轉輪聖王の力に如かざるなり、復取りて之を計挍するに、復一〔七〕阿維越致の力に如かざるなり。復取りて之を計挍するに、一〔八〕補處の菩薩の力に如かざるなり。復取りて之を計挍するに、復一道樹下に坐する菩薩の力に如かざるなり。復取りて之を計挍するに、復一如來父母の遺體の力に如かざるなり。吾今父母の力を以て此の石を安處せしなり」と。

爾の時五百の童子、復世尊に白して言さく、「如來の神足力は、其の事云何ん」と。世尊告げて曰はく、「吾昔弟子有り、名けて目犍連と曰ひ、神足の力最も第一爲り。爾の時共に毘羅若竹園村中に遊在せり。爾の時國土至儉にして、人民相食み、白骨路に盈てり。然れば出家學道して乞求するも得難く、聖衆羸瘦し、氣力虛竭せり。又復村中の生民の類、皆飢色を懷き、復聊も賴る無し。是の時大目犍連、我所に來至して、我に白して言く、『今此の毘羅若は、極めて飢儉爲り、乞求するも處無く、生民困悴して、復生路無し。我亦躬、如來從り此の言教を受く、「今此の地下に自然の地肥有

【七】阿維越致(Avivarti 梵)は、不退轉と譯す。

【八】補處の菩薩とは、前佛に次で成佛する菩薩のこと。前佛既に滅して後成佛してその處を補ふを補處といふ。

作し、此の石を移して世々に其の名を稱傳せ使めんと欲し、功を施して已來、乃ち七日を經しも、然も此の石を移轉せ令むること能はざるなり」と。佛諸童子に告げたまはく、「卿等、如來をして此の石を竪て使めんと欲する乎」と。童子報へて言さく、「今正に是れ時なり、唯、願くは世尊、當に此の石を安ずべし」と。

是の時世尊、右手を以て此の石を摩挍し、左手の中に擧著し、虛空中に擲著したまへり。是の時彼の石乃ち梵天上に至りぬ。是の時拘尸那竭の力士、此の石を見ずして、世尊に白して曰さく、「此の石は今何れに所至するや、我等今日咸共に見ず」と。世尊告げて曰はく、「此の石は今乃ち梵天上に至れり」と。童子佛に白して言さく、「此の石は何れの時にか、當に閻浮利の地上に來るべきや」と。世尊告げて曰はく、「我今當に譬喩を引くべし、智者は譬喩を以てせば自ら解らん。設し復人有りて、梵天上に往いて此の石を取り、閻浮地に投ぜば、十二年にして乃ち到らん。然るに今如來の威神の感ずる所は正爾にして當に還えすべし」と。如來此の語を說き已りたまふや、是の時彼の石尋いで時に還來し、虛空の中に諸の天華を雨らすこと、若干百種なり。是の時彼の童子五百餘人、遙に石の來るを見、各々馳せ散じて本處に安ぜず。佛童子に告げたまはく、「恐懼を懷くこと勿れ、如來は自ら當に時に知るべし」と。爾の時世尊、左手を舒べ、搖して彼の石に接し、右手の中に著して之を竪立したまひぬ。是の時三千大千刹土六反震動し、虛空中に諸の神妙の天、種々の優鉢蓮華を散じぬ。是の時五百の童子、皆未曾有、甚奇、甚特と嘆じ、「如來の威神は實に及ぶ可からず、此の石は今長さ百二十歩、廣さ六十歩なり。然るに一手を以て之を出處したまへり」と。

是の時五百の童子、佛に白して言さく、「如來は何の力を以て此の石を移動したまひしや、神足の力と爲すや、智慧の力を用ひて此の石を安處することを爲したまひし乎」と。佛、童子に告げて曰はく、「吾亦神足の力を用ひず、亦復、智慧の力を用ひず、吾今父母の力を用ひて、此の石を安處せり」

各々涙を墮し、自ら相謂ひて曰く、「如來滅度したまふこと、將に久しからざるに在り、世間は當に光明を失ふべし」と。世尊告げて曰はく、「止みなん、止みなん、諸人、愁憂を懐くこと勿れ、壞す應きの物をして、壞せざら使めんと欲すること、終に此の理無し。吾先きに此の四事の教へ有りしを以て、此れに由つて作證することを得たり。亦復、四部の衆の與に此の四事の教へを説かん。云何が四と爲すや、一切行は無常なり、是れを一法と謂ふなり。一切行は苦なり。是れを二法と謂ふなり。一切行は無我なり。是れを三法と謂ふなり。涅槃は滅盡爲り。是れを第四法の本と謂ふなり。是の如くば久しからずして、如來は當に滅度を取るべし。汝等當に四法の本を知り、普く一切衆生の與に其の義を説くべし」と。

爾の時世尊、毘舍離城の人民をして、還歸せ使めんと欲し、卽ち大坑を化作したまひ、如來は諸の比丘衆を將ひて彼の岸に在り、國土の人民は此の岸に在り。是の時世尊、卽ち己の鉢を擲ち、虚空中に在つて、彼の人民の與に又之を告げて曰はく、「汝等好んで此の鉢を供養し、亦當に高才の法師を供養すべくんば、長夜の中に福を獲ること無量ならん」と。是の時世尊、彼の鉢を與へ已つて、卽時に[五]拘尸那竭國に詣りたまひぬ。

是の時、拘尸那竭國の人民、五百餘の[六]力士、一處に集在して、各此の論を作さく、「我同じく共に奇特の事を造り、後命終の時、名稱遠布して、子孫をして共に傳へ使めん。昔日拘尸那竭の力士の勢及び巨し」と。斯須にして復是の念を作さく、「當に何の功德を造立すべきや」と。爾の時拘尸那竭國を去ること遠からざるに、大方石有り、長さ百二十歩、廣さ六十歩なり。我等當に共に之を竪つべし」と。其の筋力を盡くして竪立することを得んと欲するも、剋獲せず、亦動搖せず、何に況んや、能く之を擧げん乎。是の時世尊、便ち彼の所に往至して、之に告げて曰はく、「諸の童子、何をか施爲する所(あらんと)欲するや」と。時に諸の童子、佛に白して言さく、「我向者各此の論を

【五】拘尸那竭、前卷索引拘尸城をみよ。
【六】力士(Malla)。拘尸那竭城の末羅人のこと。古代印度の十六族の一。

時罪人復還つて、爾許の地獄を歷經し、中に於て苦を受くること數千萬歲にして、然る後に乃ち出す。比丘、當に知るべし、閻羅王は便ち是の念を作さく、『諸有の衆生・身・口・意に惡を行ぜば、盡く當に是の如きの罪を受くべし。諸有の衆生にして、身・口・意に善を行ぜば、是の如きの比皆當に光音天に生ずべし』」と。是の時世尊、便ち此の偈を說きたまはく、

愚者は常に歡喜すること　彼の光音天の如く　智者は常に懼れを懷くこと　猶し地獄に處るが如し

と。是の時罪人、閻羅王の是の敎令を作すを聞く、『我今何れの日にか、當に昔作りし所の罪を滅すべきや、此に於て命終して、人形を受くることを得て、中國の中に生ぜば、善知識と共に父母に會ひ、篤く佛法を信じ、如來の衆中に於て、出家學道することを得、現法中に於て、有漏を盡くして、無漏を成ずることを得ん』と、我今重ねて告げん、『汝勤加用意して、八難處を去離し、中國に生ずることを得、善知識と相遇ひ、梵行を修することを得て、所願果を成ずる(まで)、本誓を失はざれ』と、是の故に比丘、若しは善男子・善女人、八大地獄及び十六隔子を離れんと欲せば、當に方便を求めて、八正道を修むべし。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

三

〔四〕聞くこと是の如し。一時佛、毘舍離㮈氏園中に在し、大比丘衆五百人と倶なりき。漸々に復人中に在りて遊化したまひぬ。是の時世尊、還顧し毘舍離城を觀じ、尋いで時に便ち此の偈を說きたまはく、

今毘舍離を觀ずれば　更に後に復覩じ　亦復更に入らじ　是に於て當に別れ去るべし

と。是の時毘舍離城中の人民、此の偈を說きたまふを聞き、普く愁憂を懷き、世尊の後に從つて、



【四】 D. 16. Mahāparinibbāna 4—5. Dhp. A. II. p. 153f. 西晉竺法護譯「佛說力士移山經」一卷、同譯「佛說四未曾有法經」一卷、「長阿含經」第二經「遊行經」。

は耳と鼻とを斷ち、或は材木を取りて之を押し、或は草を以て其の腹に著し、或は髪を取りて之を懸け、或は其の皮を剝ぎて其の肉を割き、或は分ちて二分と爲し、或は還つて之を縫合し、或は取りて之を五刖し、或は火を取りて側に之を炙り、或は鐵を融して之を灑ぎ、或は之を五磔し、或は其の身を張し、或は利斧を以て其の首を梟し、尋いで復還つて生く。要は當に人中の罪畢つて、然る後に乃ち出づべし。

是の時獄卒、彼の衆生を取りて、大鎚にて其の形體を碎き、或は脊脈を取りて之を剝ぎ、叉復驅逐して劍樹に上ら使め、復驅使して下ら使む。是の時鐵嘴の烏有り、尋いで復之を食ふ。復取りて之を五繫し、動轉することを得ず。尋いで復大鑊湯の中に擧著し、加ふるに鐵叉を以てして其の身を害す。風其の身を吹けば、復還生すること故の如し。是の時獄卒、復衆生をして刀山、火山に上ら使め、停住せ令めず、中に於て苦を受くること稱計す可からず。要は當に人中に作せし所の罪畢つて、然る後に乃ち出づべし。是の時罪人、此の苦痛を受くるに堪えず。復求めて熱灰地獄中に入り、苦を受くること無量なり。復中從り出でゝ逆刺地獄に入る。其の中風吹きて、痛み計る可からず。復中從り出でゝ熱屎地獄の中に入る。是の時熱屎地獄の中に、軟細の虫有りて、彼の骨肉を噉ふ。是の時衆生、苦痛を受くるに堪えず、復移つて劍樹地獄に至り、形體を傷壞し、痛み忍ぶ可からず。

是の時獄卒、彼の衆生に語げて曰く、『汝等何れ從り來りしと爲すや』と。是の時罪人報へて曰く、『我曹亦復何れ從り來りしと爲すやを知らず』と。又問ふ、『何れ從り去ると爲すや』と、報へて曰く、『亦復當に何れに所至すべきやを知らず』と、又問ふ『今何等を求めんと欲するや』と、報へて曰く、『吾等は極めて飢渴を患ふ』と。是の時獄卒、熱鐵丸を以て、彼の罪人の口中に著し、身體を燒爛し、痛み堪ゆ可からず。要は當に其の罪の本を畢りて、然る後に乃ち命終すべし』と。是の

に由つて名けて大涕哭地獄と爲すなり。復何の因緣を以て、名けて阿鼻地獄と爲すや、然るに彼の衆生の類、父母を殺害し、佛の偸婆を壞り、衆僧と鬪亂し、邪を習ひ、倒見にして、邪見と共に相應し、一切療治す可からず。是れを以ての故に、名けて阿鼻地獄と爲すなり。復何の因緣を以て、名けて炎地獄と爲すや。然るに衆生の類、彼の獄中に在りて、形體より烟出で、皆融爛す。故に名けて炎地獄と爲すなり。復何の因緣を以て名けて大炎地獄と爲すや。然るに彼の衆生、此の獄中に在るも、都て罪人の遺餘を見ず、故に大炎地獄と名くるなり。是れを比丘、此の因緣に由つて、名けて八大地獄と爲すと謂ふなり。一一の地獄に十六の隔子有り、其れを優鉢地獄・鉢頭地獄・拘牟頭地獄・分陀利地獄・未曾有地獄・永無地獄・愚惑地獄・縮聚地獄・刀山地獄・湯火地獄・火山地獄・灰河地獄・荊棘地獄・沸屎地獄・劍樹地獄・熱鐵丸地獄と名く。是の如きは此れ十六隔子にして稱量す可からず。彼の衆生をして地獄の中に生ぜ使む。彼或は衆生有りて、正見を毀る者は、正法を誹謗して之を遠離し、命終の後皆還活地獄の中に生ず。諸有の衆生にして、好喜して生(類)を殺せば、便ち黑繩地獄の中に生ず。其れ衆生有りて、牛羊及び種々の類を屠殺せば、命終の後等害地獄の中に生ぜん。其れ衆生有りて、與へざるに取りて、他物を竊めば、便ち涕哭地獄の中に生ぜん、其れ衆生有りて、常に淫泆を喜び、復妄語有れば、命終の後大涕哭地獄の中に生ぜん。其れ衆生有りて、父母を殺害し、神寺を破壞し、聖衆と鬪亂し、聖人を誹謗し、邪見に習倒せば、命終の後阿鼻地獄の中に生ぜん。其れ衆生有りて、此の間に語を聞き、復傳來して彼に至る、設し彼の間に聞けば、復傳來して此に至り、人の方便を求めば、彼の人命終の後炎地獄の中に生ぜん。其れ衆生有りて、彼此と鬪亂し、他物に貪著し、慳疾を興起し、意猶豫を懷けば、命終の後大炎地獄中に生ぜん。其れ衆生有りて、諸の雜業を造れば、命終の後十六隔子の中に生ぜん。是の時獄卒彼の衆生を役し、苦痛量り難し。或は手を斷ち、或は脚を斷ち、或は手脚を斷ち、或は鼻を截り、或は耳を斷ち、或

聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「八大地獄有り、云何が八と爲すや、一には還活地獄、二には黑繩地獄、三には等害地獄、四には涕哭地獄、五には大涕哭地獄、六には阿鼻地獄、七には炎地獄、八には大炎地獄なり。是れを比丘八大地獄と謂ふなり」と。爾の時世尊、便ち此の偈を說きたまはく。

還活及び黑繩　等害と二の涕哭と　五逆阿鼻獄　炎大炎地獄　此れを八地獄と名け　其の中に處る可からず　皆惡行の本に由り　十六隔子圍む　然して彼の鐵獄の上は　火の爲に燒か所ること　一由旬の內に遍く　熾火極めて熱盛たり　四城と四の門戶　其の間甚だ平整なり　又鐵を以て城を作り　鐵板其の上を覆へり

斯れ衆生の罪報の緣に由つて、彼の衆生をして苦を受くること量り無く、肉血消盡して、唯骨有りて存せ令む、何等を以ての故に名けて還活地獄と爲すや、復彼の衆生の形體有りて、挺直して亦動搖せず、苦の爲に逼め所れて、移轉すること能はず、形體已に肉血無し。是の時衆生自ら相謂ひて言く、『衆生還活、還活』と。是の時彼の衆生便ち自ら還活す。此の因緣を以ての故に、名けて還活地獄と爲すなり。復何の因緣を以て名けて黑繩地獄と爲すや。然るに彼の衆生の形體、筋脈皆化して繩と爲り、鋸を以て身を鋸くが故に。名けて黑繩地獄と爲すなり。復何の因緣を以て、名けて等害地獄と爲すや。是の時彼の衆生、一處に集在して其の首を梟し、尋いで復還えり生く。此の因緣に由つて、名けて等害地獄と爲すなり。復何の因緣を以て名けて涕哭地獄と爲すや、然るに彼の衆生の善本斷滅して、毛髮の遺餘在ること無く、彼の地獄の中に在りて、惱みを受くること量り無く、中に於て稱怨喚呼の聲斷絕せず。此の因緣に由つて、名けて涕哭地獄と爲すなり。

復何の因緣を以て名けて大涕哭地獄と爲すや。然るに彼の衆生、地獄の中に在りて、無量の苦痛を受くること稱計す可からず。中に於て喚呼し、胸を椎ちて、自ら摑み、同聲唱喚す。此の因緣

に生在して、六情完具して受法に堪任し、聰明高才にして、法を聞けば則ち解し、正見を修行し、便ち『物有り、施有り、受者有り、善惡の報ひ有り、今世後世有り、世に沙門・婆羅門等の、正見を修して取證し、阿羅漢を得る者有り』と、是れを第八の難と謂ひ、梵行の人の修行する所に非らざるなり。是れを比丘、此の八難有りて、梵行の(人の)修行する所に非らずと謂ふなり。

是に於て比丘、一時節の法有りて、梵行の人の修行する所なり。云何が一と爲すや。是に於て如來世に出現する時、廣く法教を演べて、涅槃に至ることを得、然も此の人中國に生在し、世智辯聰にして、物に觸れて皆明かに正見を修行し、亦能く善惡の法を分別し『今世後世有り、世に沙門・婆羅門等の正見を修し、取證して阿羅漢を得る者有り』と、是れを梵行の人、一法を修行して、涅槃に至ることを得と謂ふなり。爾の時世尊、便ち此の偈を說きたまはく、

八難は一類に非らず　人をして得道せざら令む　如今現在前せば　世間は遇ふ可からず　亦當に正法を學ぶべし　亦是の處を失ふこと莫れ　過去等を追憶せば　便ち地獄の中に生ぜん　是に於て斷じて欲無く　正法を思惟せば　久しく世間に存して　斷滅するの時無からん　是に於て斷じて欲無く　正法を思惟し　永く生死の原を斷たば　久しく世間に存せん　已に人身を得て　正眞の法を分別し　諸の果を得ずば　必ず八難處に遊ばん　今八難有るを說くは　佛法の要行なり　一難猶尙劇しきこと　板の大海に浮かぶが如し　一難を離るべしと雖も　然も此の理有る可し　設し一の四諦を離るれば　永く正道を離れん　是の故に當に專心に　妙理を思惟して　至誠に正法を聽くべくんば　便ち無爲の處を得ん

是の故に比丘、當に方便を求めて、八難の處を遠離すべし。其の中を願ふこと莫かれ。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

二

【三】世智辯聰とは、世俗のことにさかしく利口なるをいふ。

# 卷の第三十六

## 八難品第四十二の一[一]

### 一

[二]聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「凡夫の人は說法の時節を聞かず、知らず。比丘、當に知るべし。八不聞の時節有りて、人修行することを得ず。云何が八と爲すや。若し如來世に出現する時、廣く法敎を演べば涅槃に至ることを得、如來の所行なり。然るに此の衆生、地獄の中に在りて聞かず、覩ず、是れを初めの一難と謂ふなり。若し復如來、世に出現する時、廣く法敎を演ぶるも、然も此の衆生、畜生の中に在りて聞かず、覩ず。是れを第二の難と謂ふなり。復次に如來世に出現する時、廣く法敎を說くも、然も此の衆生、餓鬼の中に在りて聞かず、覩ず、是れを此れ第三の難と謂ふなり。復次に如來世に出現する時、廣く法敎を演ぶるも、然も此の衆生、長壽天上に在りて聞かず、覩ず、是れを第四の難と謂ふなり。

復次に如來世に出現する時、廣く法敎を演ぶるも、然も此の衆生、邊地に在りて生じ、賢聖を誹謗し、諸の邪業を造る。是れを第五の難と謂ふなり。復次に如來世に出現する時、廣く法敎を演べ涅槃に至ることを得るも、然も此の衆生、中國に生じ、又且つ六情完具せず、亦復善惡の法を別たず。是れを第六の難と謂ふなり。若し復如來世に出現する時、廣く法敎を演べ、涅槃に至ることを得るも、然も此の衆生、中國に在りて、復六情完具し、缺漏する所無しと雖も、然も彼の衆生の心識邪見にして、『[三]人無く、施無く、亦受者無く、亦善惡の報ひ無く、今世後世無く、亦父母無く、世に沙門・婆羅門等の成就して阿羅漢を得る者、自身に作證して自ら遊樂するもの無し』と。是れを第七の難と謂ふなり。復次に如來世に出現せず、亦復、說法して涅槃に至ら使めざるも、又此の衆生、中國

【一】八難品及び馬血天子品の二品は八法を明す。

【三】A. VIII. 29. Akkhaṇa. 「中阿含經」第一二四經八難經(卷二九)。

葉・阿難比丘の比の如く、極めて殊妙爲り。然る所以は、過去の諸佛の〔二〇〕頭陀行の比丘は、法存すれば則ち存し、法沒すれば則ち沒す。然るに我今日、迦葉比丘留り住して世に在り。彌勒佛出世し、然る後に滅度を取らん。此の因緣に由つて、今の迦葉比丘は、過去の時の比丘の衆に勝れたり。又阿難比丘は、云何が過去の侍者に勝ぐることを得るや。過去の時の諸佛の侍者は、他の所說を聞いて、然る後乃ち解せり。然るに今日の阿難比丘は、如來未だ語を發せざるに、便ち解り、如來復語らざるに、是れ皆悉く之を知る。此の因緣に由つて、阿難比丘は、過去の時の諸佛の侍者に勝れたり。是の故に迦葉、阿難、吾今汝に付授し、汝に此の法寶を囑せんに、缺減せ令むること無かれ」と。爾の時世尊、便ち偈を說いて言はく、

一切行は無常なり　起れば必ず滅有り　生無くば則ち死無し　此の滅を最も樂と爲す。

と。是の時大迦葉及び阿難、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。」

# 增壹阿含經卷第三十五



〔二〇〕頭陀行、前卷索引頭陀をみよ。

便を用つて藥と爲さず、但餘の藥草の極めて甘美なる者に著し、或は其の中に於て財貨に貪著し、房舍を悋惜して、恒に共に鬪諍すべし。爾の時檀越施主、篤く佛法を信じ、惠施を好喜し、財物を惜しまず。是の時檀越施主、命終の後盡く天上に生ぜん。比丘にして懈怠なる者は、死して地獄の中に入らん。是の如く迦葉、一切諸行は皆悉く無常にして、久しく保つことを得ざるなり。

又迦葉、當に知るべし。將來の世に、當に比丘有りて、鬚髮を剃除して家業を習ひ、左に男を抱き、右に女を抱く、又箏簫を執り、街巷に在りて乞食すべし。爾の時檀越施主の福を受くること窮り無し。況んや復今日、至誠に乞食する者をや。是の如く迦葉、一切行は無常にして、久しく停る可からず。迦葉當に知るべし。將來の世に、若し沙門比丘有らば、當に八種道及び七種之法を捨つべし。我今日三阿僧祇劫に於て集めし所の法寶の如きは、將來の諸比丘は以て歌曲と爲し、衆人中に在りて乞食し、以て自ら命を濟ひ、然る後に檀越施主、彼の比丘衆に飯すも猶其の福を獲、況んや復今日にして其の福を得ざらん乎。我今此の法を持して、迦葉及び阿難比丘に付授せん。然る所以は、吾今年老ひたり、以て八十に向へり。然れば如來は久しからずして、當に滅度を取るべし。今法寶を持して二人に付囑せんに、善く念じて誦持し、斷絕せざら使めて、世間に流布せよ。其れ聖人の言敎を遏絕する有らば、便ち邊際に墮すと爲ん。是の故に今日汝に經法を囑累せんに、脫失せ令むること無かれ」と。

是の時大迦葉及び阿難、即ち座從り起ち、長跪叉手して世尊に白して言さく、「何等を以ての故に、此の經法を以て、二人に付授して、餘人に囑累したまはざる乎。又復如來の衆中に、神通第一のもの稱計す可からず、然るに囑累したまはず」と。世尊迦葉に告げて曰はく、「我天上人中に於て、終に此の人の能く此の法寶を受持するもの、迦葉、阿難の比の如きを見ず。然して聲聞中にも亦復二人の上に出づる者あらず。過去の諸佛も亦復此の二人有りて、經法を受持すること、今の迦

我今重ねて汝に告げん、其れ比丘有りて、八種道及び七法を思惟し修行する者は、彼の比丘便ち二果を成じて孤疑無く、阿羅漢を得、且つ此の事を捨てん。若し多なること能はずば、一日の中に此の八種道及び七法を行ぜば、其の福稱計す可からず、阿那含若しは阿羅漢を得ん。是の故に諸賢、當に方便を求めて、此の八種道及び七法を行ずべくんば、取道に於て狐疑有ること無けん」と。爾の時諸比丘、舍利弗の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

五

聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、迦葉に語げて曰はく、「汝今年已に朽邁せり、少壯の意無し。宜しく諸の長者の衣裳及び其の飲食を受くべし」と。大迦葉、佛に白して言さく、「我彼の衣食を受くるに堪任せず。今此の納衣、時に隨つて乞食すれば快樂比ひ無し。然る所以は、將來亦當に比丘有るべし。形體柔軟にして、心、好衣食を貪り、便ち禪に於て退轉し、復能く苦業を行ぜず、又當に是の語を作すべし。『過去佛の時、諸の比丘等、亦人の請を受け、人の衣食を受けぬ。我等何爲ぞ古時の聖人に法らざる乎。坐して衣食に貪著するが故に、便ち當に服を捨てゝ白衣と爲るべし。諸の聖賢をして復威神無から使め、四部の衆漸々に減少せん。聖衆已に減少せば、如來の神寺復當に毀壞すべし。如來の神寺已に毀壞するが故に、經法復當に凋落すべし。是の時衆生復精光無く、精光無きを以て壽命遂に短し。是の時彼の衆生、命終し已つて、皆三惡趣に墮すること、猶し今日の衆生の類の福多きを爲す者、皆天上に生ずるが如し。當來の世に罪を爲すこと多き者は、盡く地獄に入らん」と。世尊告げて曰はく、「善い哉、善い哉、迦葉、饒益する所多く、世の人民の爲に良友福田と作らん。迦葉當に知るべし、吾般涅槃の後、千歲餘に、當に比丘有り、禪に於て退轉し、復頭陀の法を行ぜず。亦乞食して、補納衣を著ること無く、長者の請を貪り受けて、其の衣食を受け、亦復樹下閑居の處に在らず、好喜して房舍を莊飾し、亦大小

之に報ふべし。色は無常なり、其れ無常なれば卽ち是れ苦なり。苦なれば無我なり、無我なれば空なり。空無我を以て彼れ空なり。是の如きは智者の觀ずる所なり。痛・想・所・識も亦復無常・苦・空・無我なり。其れ實に空なれば、彼れ無我空なり。是の如きは智者の學ぶ所なり。此の五盛陰は皆空、皆寂なり。因緣合會皆磨滅に歸して、久しく住まることを得ず、八種の道將に從つて七有り、我師の所說は正しく此れを謂ふ耳。若し剎利・婆羅門・人民の類にして、來つて我に義を問はゞ、我等當に此の義を以て之に報ふべし」と。是の時舍利弗、衆多の比丘に語げて曰く、「汝等、心意を堅く持して、輕擧を爲すこと勿れ」と。是の時舍利弗、具足して諸比丘の與に微妙の法を說き、卽ち座從り起ちて去りぬ。

是の時衆多の比丘、去りて遠からざるに、舍利弗、諸比丘に告ぐらく、「當に云何が八種の道及び七種の法を行ずるや」と。是の時衆多の比丘、舍利弗に白して言く、「我等乃ち遠く從り來りしは、其の義を聞かんと欲してなり。唯、願くは之を說け」と。舍利弗報へて曰く、「汝等諦に聽け、諦に聽いて善く之を思念せよ。吾今當に說くべし」と。是の時諸比丘、其の敎へを受く。舍利弗告げて曰く、「若し一心に正見を念ずれば、念覺意亂れざるなり。等治とは一心に一切諸法を念ずる法覺意なり。等語とは身意精進、精進覺意なり。等業とは一切諸法生ずることを得る喜覺意なり。等命とは賢聖の財に於て足るを知り、悉く家財を捨て其の形體を安ずる猗覺意なり。等方便とは賢聖の四諦を得、盡く諸結を除去する定覺意なり。等念とは四意止を觀じ、身牢固無く、皆空無我・護覺意なり。等三昧とは獲ざる者を獲、度せざる者を度し、證を得ざる者をして證を得使むるなり。設し當に人有り、來つて此の義を問はゞ、云何が八種道及び七法を修むるや、汝等當に是の如く之に報ふべし。然る所以は、八種道及び七法は、其れ比丘有りて此れを修めば、有漏より心便ち解脫を得ればなり。

止まり、外に心を觀じて心意止まる。內外に心を觀じて心意止まり、愁憂を除去し、復苦患無し。內に法を觀じて、法意止まる。外に法を觀じて法意止まる。內外に法を觀じて法意止まる。是の如く比丘、四法の善を觀ず。若し復比丘、是の如きの七處善及び四法を察するを、此の現法中に於て、名けて上人と爲すなり。是の故に比丘、當に方便を求めて、七處之善を辨じ、及び四法を觀ずべし。是の如く比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

## 四

[一九] 聞くこと是の如し。一時佛、釋翅迦毘羅越城尼拘律園に在し、大比丘衆五百人と倶なりき。是の時衆多の比丘、世尊の所に往至し、頭面に足を禮し、一面に在りて坐す。爾の時衆多の比丘、世尊に白して言さく、「我等北方に詣りて遊化せんと欲す」と。世尊告げて曰はく、「宜しく是れ時を知るべし」と。世尊復比丘に告げて曰はく、「汝等、舍利弗比丘に辭すると爲んや」と。諸比丘報へて曰さく、「不なり、世尊」と。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「汝等往いて舍利弗比丘に辭せよ。然る所以は、舍利弗比丘は恒に、諸の梵行人の與に其の法を敎誡し、說法に厭足無ければなり」と。爾の時世尊、諸比丘の與に微妙の法を說きたまひ、諸比丘法を聞き已つて、卽ち座從り起ち、世尊の足を禮し、佛を遶ること三匝して、便ち退いて去りぬ。

爾の時舍利弗、釋翅の神寺中に在りて遊びぬ。爾の時衆多の比丘、舍利弗の所に往至し、共に相問訊し、一面に在りて坐す。是の時衆多の比丘、舍利弗に白して言く、「我等北方に詣り、人間に遊化せんと欲す。今已に世尊を辭せり」と。舍利弗言く、「卿等當に知るべし、北方の人民、沙門婆羅門皆悉く聰明にして、智慧及ぶこと難し。復人民有りて喜び來つて相試みん。若し當に來つて卿に問ふべくんば、諸賢師は何等の論を作すや。設し當に是の問ひを作すべくんば、云何が之に報へんと欲するや」と。諸比丘報へて曰く、「設し當に人有りて來り問ふべくんば、我當に此の義を以て

[一九] cf. S. 22. 2. Devadaha.

と。是の時尊者那伽波羅、便ち此の偈を說く

想を除き多く憂ふること勿れ　久しからずして法眼を成ぜん　無常行は電の如く　此の大幸に遇はず　一一毛孔の　生者滅者の原を觀ず　無常行は電の如く　心に施して　涅槃に向ふ。

と。是の時彼の長老の比丘、是の如きの言教を受け、閑靜の處に在りて、此の業を思惟す。然る所以は、族姓子、鬚髮を剃除し、信堅固を以て出家學道する者は、無上の梵行を修め、生死已に盡き、梵行已に立ち、所作已に辦じて更に復胎を受けず、如實に之を知らんと欲し、是の時彼の比丘便ち阿羅漢を成じぬ。是の時天有り、是れ彼の比丘の舊知識なり。彼の比丘阿羅漢を成じ已れるを見、便ち那伽波羅の所に往至し、虛空中に在りて此の偈を說かく

已に[一五]具足戒を得　彼閑靜處に在りて　道心を得て著すること無く　諸の原惡本を除く。

と。是の時彼の天復、天華を以て尊者の上に散じ、空中に於て沒して現ぜず。爾の時彼の比丘及び天、尊者那伽波羅の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

三

[一六]聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、

「當に[一七]七處之善を觀じ、又四法を察すべし。此に於て現法之中に名けて上人と爲さん。云何が比丘、七處之善を觀ずるや。是に於て比丘、慈心を以て一方に遍滿し、二方・三方・四方・四維上下も亦復是の如く、世間を盡くすに、慈心を以てして、其の中に遍滿す。悲・喜・護心・空・無相願も亦復是の如し。諸根具足し、飲食自ら量り、恒に自ら覺悟す。是の如く比丘、七處を觀ず。

[一八]云何が比丘、四處之法を察するや。是に於て比丘、內に自ら身を觀じて、愁憂を除去し、身意止まる、外に復身を觀じて、身意止まる。內外に身を觀じて身意止まる、內に自ら痛を觀じ、痛意止まる。外に自ら痛を觀じて、痛意止まる。內外に痛を觀じて、痛意止まる。內に心を觀じて、心意

---

【一五】具足戒(Upasampadā)、出家して比丘、比丘尼となる時に受くる戒。その初めは三寶歸依によりしも、後種々に複雜なるものとなれり。

【一六】S. 22. 57. Saṭṭhāna.

【一七】七處之善(Sattaṭṭhāna-kusala)、巴利文にありては五蘊の各々及びその集・滅・道・味・禍・出要を知ることとなれり。

【一八】四處之法とは、四念處のこと、內外三世に身・受・心・法の四處を念じて惡念を除くもの、三十七道品の一。

是の時尊者那伽波羅、彼の梵志に告げて曰く、「汝何爲れぞ、方便を作して、彼の爾許の人をして、命終せざら使めざる乎」と。梵志對へて曰く、「我も亦多く方便を作し、死せざら令めんと欲せば、又時を失はず。亦復、時に隨つて布施し、諸の功德を作し、諸天を祠祀し、諸の長老梵志を供養し、諸神を擁護し、諸の呪術を誦し、亦能く星宿を瞻視し、亦復、能く藥草を和合し、亦甘饌飮食を以て彼の窮厄に施す。此の如きの比、稱る可からざるなり。然も復彼の命根を濟ふこと能はず」と。是の時尊者那伽波羅、便ち此の偈を說く

藥草諸の呪術　衣被飮食の具　施すと雖も而も益無きこと　猶し身に苦行を抱くがごとし　正使神祠を祭り　香花及び沐浴し　此の原本を計挍するも　能く療治する者無し　假使諸物を施し　精進して梵行を持し　此の原本を計挍するも　能く療治する者無し。

と。是の時梵志、問ふて曰く、「當に何れの法を行じて、此の苦惱の患ひを無から使むべきや」と。是の時尊者那伽波羅、便ち此の偈を說きぬ。

恩愛は無明の本なり　諸の苦惱患を興す　彼滅して餘り無くば　便ち復苦有ること無し。

と。是の時彼の梵志正しく語を聞き已つて、即時に便ち此の偈を說かく、

老ゆと雖も極めて老ひず　所行弟子の如し　願くは出家して學ぶことを聽し　此の災を離ることを得使めたまへ。

と。

是の時尊者那伽波羅、卽ち彼に三衣を授け、出家して道を學ば使め、又之に告げて曰く、「汝今比丘、當に觀ずべし。此の身頭從り足に至る此の髮毛爪齒は何れ從り來ると爲すや、形體・皮膚・骨髓・腸胃悉く何れ從り來るや。設し此れ從り去れば、當に何れの所に至るべきや。是の故に比丘、多く世間を憂念し、苦惱すること勿れ。又當に此の毛孔の中を觀じ、方便を求めて四諦を成ずべし」

村の左右に大池水有り、縱横一由旬にして、水其の中に滿つ。若し復人有り、來つて彼の一滴の水を取るが如し。云何が摩訶男、水は何れを多しと爲すや、一滴の水多きや、池水を多しと爲す乎」と。摩訶男曰く、「池水は多し、一滴の水多きに非らざるなり」と。世尊告げて曰はく、「此れも亦是の如し。賢聖の弟子、諸苦已に盡き、永く復有ること無し。餘の存在する者は一滴の水の如き耳。我衆中最下の道者の如きは、七死七生にして苦際を盡くすに過ぎず。若し復勇猛精進にして、便ち家家と爲らば、卽ち道跡を得るなり」と。爾の時世尊、重ねて摩訶男の與に、微妙の法を說きたまひ、彼法を聞き已つて、卽ち座從り起ちて去りぬ。爾の時摩訶男、佛の所說を聞いて、歡喜奉行しぬ。

## 二

聞くこと是の如し。一時尊者那伽波羅、鹿野城中に在し。是の時一婆羅門有り、年朽邁に垂んとす。昔尊者那伽波羅と、少小舊欵たり。是の時婆羅門、那伽波羅の所に往至し、共に相問訊し、一面に在りて坐す。爾の時梵志、那伽波羅に語げて曰く、「汝今樂の中に於て、最も快樂を爲すや」と。那伽波羅曰く、「汝何等の義を觀じて、是の說を作すや、『樂の中に於て、最も快樂を爲すや』」と。婆羅門報へて曰く、「我頻りに七日の中七男兒死せり。皆勇猛高才にして、智慧及び難し。近く六日の中に十二の作使人無常なり、能く作使に堪えて、懈怠有ること無し。近く五日以來、四兄弟無常にして、諸の伎術多く、事として閑かさること無し。近く四日如來、父母命終す、年百歲に向ひ、我を捨て世を去る。近く三日以來二婦復死す、顏貌端正にして、世の希有なり。又復家中に八窖の珍寶有り、昨日之を求めて、處を知らず。我今日の如きは、此の苦惱に遭ふ、稱計す可からず。然るに尊者、今日永く彼の患ひを離れ、復愁憂無く、正しく道法を以て自ら娛樂す。我此の義を觀じ已るが故に是の說を作せり、『樂の中に於て最も快樂爲り』」と。

ち自ら地に墮しぬ。時に我復是の念を作さく、『設し我中に於て命終せば、當に何處に生ずべきや』と。時に我復是の念を作さく、『我今命終せば、必ず惡道中に生ぜじ。然して復義趣樂從り樂に至る可からず。要らず當に苦に由りて然る後に樂に至るべし』と。

我爾の時復仙人窟中に遊在せり。爾の時衆多の尼犍子有りて、彼に在りて學道しき。是の時尼犍子、手を擧げ、日を指し、體を曝らして學道せり。或は復蹲りて學道する者有り。我爾の時彼の所に往至し、尼犍子に語ぐらく、『汝等何故に座を離れて、手を擧げ、翹足する乎』と。彼の尼犍子曰く、『瞿曇、當に知るべし、昔我先師、不善行を作せり。今苦しむ所以の者は、其の罪を滅せんと欲すればなり。今形體を露して慚辱の分有りと雖も、亦此の事を消滅すること有り。瞿曇、當に知るべし。行盡くれば、苦も亦盡き、苦盡きれば、行も亦盡く、苦行已に盡くれば、便ち涅槃に至る』と。

我爾の時復尼犍子に語げて曰く、『此の事然らず、亦行盡くるに由るも、苦亦盡くること無く、亦苦盡に由るも、行亦盡きて涅槃に至ることを得ず。但今苦行盡きて、涅槃に至ることを得とは、此の事然り。但樂從り樂に至る可からず』と。尼犍子曰く、『頻毘娑羅王は樂從り樂に至れり、何の苦有る哉』と。我爾の時復尼犍子に語げて曰く、『頻毘娑羅王の樂は何ぞ我樂に如かんや』と。尼犍子我に報へて言く、『頻毘娑羅王の樂は汝の樂に勝さるなり』と。我爾の時復尼犍子に語げて曰く、『頻毘娑羅王は能く、我をして七日七夜、結跏趺坐して形體を移動せざら使むる乎。正しく六・五・四・三・二乃至一日結跏趺坐せ使むる乎』と。尼犍子曰く、『不なり、瞿曇』と。世尊告げて曰はく、『我能く結跏趺坐するに堪任して、形移動せず。云何が尼犍子、誰をか樂と爲すや。頻毘娑羅王樂なる耶、我樂爲る耶』と。尼犍子報へて曰く、『瞿曇沙門の樂なり』と。是の如く摩訶男、當に此の方便を以て知るべし。樂從り樂に至る可からず。要らず當に苦從り樂に至るべし。猶し摩訶男、大

と。佛阿難に告げたまはく、「此の經は名けて甘露法味と曰ふ。當に念じて奉行すべし」と。爾の時阿難、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

## 莫畏品第四十一

### 一

【一二】聞くこと是の如し、一時佛、【一三】釋翅迦毘羅衞尼拘屢園中に在しき。是の時摩訶男釋、世尊の所に往至し、頭面に足を禮し、一面に在りて坐す。爾の時摩訶男釋世尊に白して言さく、「躬如來從り此の言教を受けぬ。『諸有の善男子・善女人にして、三結使を斷せば須陀洹を成じ、不退轉と名け、必ず道果を成ぜん。更に諸の外道異學を求めず、亦復餘人の所說を觀察せざれ』と、設し當に爾るべくんば、此の事然らず。我若し暴牛・馬・駱駝を見れば、即時に恐懼し、衣毛皆竪つ。復是の念を作せり、『設し我今日此の恐懼を懷き、當に命終を取るべくんば、何處に生ずと爲んや』と。世尊、摩訶男に告げたまはく、「恐畏の心を起すこと勿れ、設し當に命終を取るべくんば、三惡趣に墮せじ。然る所以、今三消滅の義有り、云何が三と爲すや、婬欲に著すること有りて、惱亂を起すが如く、復害心を起して他人に向ふ、已に此の欲無くば、則ち殺害の心を起さず、現法中に於て苦惱を起さず。諸有の惡不善の法、自ら己を害せんと欲するも、設し此れ無くば則ち擾亂無く、便ち愁憂無けん。是れを摩訶男、此の三義諸の惡不善の法便ち下に在り、諸の善之法便ち上に在りと謂ふなり。亦酥瓶の水中に在りて壞る、是の時瓦石便ち沈みて下に在り、酥便ち浮いて上に在るが如し。此れも亦是の如く、諸の惡不善の法便ち下に在りて、諸の善の法便ち浮いて上に在り。摩訶男、當に知るべし。我昔日、未だ佛道を成ぜず、【一四】優留毘に在りて、六年勤苦して美味を食せず、身體羸瘦として百年の人に如似たり。皆之を食せざりしに由るの致す所なり。若し我起たんと欲する時、便

【一二】 S. 55. 21. Mahānāma M. 14. Cūḷadukkhakkhandha.「雜阿含經」第九三〇經(卷三三)別譯「雜阿含經」第一五五經(卷八)。

【一三】 釋翅(Sakka)。

【一四】 優留毘(Uruvelā)。今のベンガルの伽耶地方、佛陀伽耶。

事然らず。設し復人有りて、言く、『耳無く、聲無く、鼻無く、香無く、舌無く、味無く、身無く、細滑無く、意無く、法無くして識有り』と言はゞ、終に此の理無きなり。設し識無くして更樂有りと言はゞ、此の事然らず。設し更樂無くして痛有りと言はゞ、此の事然らず。設し痛無くして想著有りと言はゞ、此の事然らず。若し復人有りて、眼有り、色有り、中に於て識を起すと言はゞ、此れは是れ必ず然り。若し耳・聲・鼻・香・舌・味・身・細滑・意・法あり、中に於て識を起すと言はゞ、此の事必ず然り。諸賢當に知るべし。此の因緣に由つて、世尊は說いて曰はく、『我の論ずる所は、天及び世人・魔・若しは魔天の能く及ぶ者あらず、亦世に著せず、復世に住せず。然も我欲に於て解脫を得、孤疑を斷じて、復猶豫無し』と。世尊は此の緣に因つて略して其の義を說きたまひし耳。汝等若し心に解せずば、更に如來の所に至りて、重ねて此の義を問ひまつれ。設し如來にして說きたまふ所有らば、好く念じて奉持せよ」と。

是の時衆多の比丘、迦旃延の所說を聞き、亦善しとも言はず、復非なりとも言はず、卽ち座從り起ちて去り、自ら相謂ひて言く、「我等當に此の義を持して、往いて如來に問ひまつるべし。設し世尊にして所說有らば、當に之を奉行すべし」と。

是の時衆多の比丘、世尊の所に往至し、頭面に足を禮し、一面に在りて坐す。爾の時衆多の比丘、此の本緣を以て具に世尊に白す。爾の時如來、比丘に告げて曰はく、「迦旃延比丘は聰明にして、辯才廣く其の義を演ぶ。設し汝等吾所に至りて此の義を問はゞ、我も亦當に此れを以て汝の與に之を說くべし」と。爾の時阿難、如來の後に在り。是の時阿難、佛に白して言さく、「此の經の義理極めて甚深爲ること、猶し人有りて路を行くに渴乏して甘露に遇ひ、取りて之を食するに、極めて香美爲り、食するに厭足無きが如く、此れも亦是の如し。其れ善男子・善女人の、至到る處に此の法を聞いて厭足無けん」と。重ねて世尊に白さく、「此の經は何等と名くるや、當に云何が奉行すべきや」

を取りて之を捨て去るが如し。然して今汝等も亦復是の如く、如來を捨て已つて來り、枝に從つて實を求む。然るに彼の如來は皆之を觀見したまひて、周遍せざるは靡く、世間を照明して、天人の導きと爲りたまふ。如來は是れ法の眞主なり。汝等も亦當に此の時節有るべし。自然に當に如來の此の義を說きたまふ時に遇ふべし」と。諸比丘對へて曰く、「如來は是れ法の眞主にして、其の義を廣く演べたまふと雖も、然も尊者は、世尊記して、其の義を廣說するに堪任すと爲したまへり」と。迦旃延報へて曰く、「汝等諦に聽いて善く之を思念せよ。吾當に演說して、其の義を分別すべし」と。諸比丘對へて曰く、「甚だ善し」と。是の時諸比丘、卽ち其の教へを受く。

迦旃延告げて曰く、「今如來の言ふ所の『我の論ずる所は、天・龍・鬼神の能く及ぶ所に非らず、亦世に著するに非らず、復世に住するに非らず。然も我彼に於て解脫を得、諸の狐疑を斷じ、復猶豫無し』とは、如今の衆生の徒、鬪訟を好喜び、諸の亂想を起せばなり。又如來言はく、『我中に於て染著心を起さず』とは、此れは是れ[一〇]貪欲使・瞋恚・邪見・欲世間使・憍慢使・疑使・無明使にして、或は刀杖苦痛の報ひに遇ひ、人と鬪訟し、若干不善の行を起し、諸の亂想を起し、不善の行を興す。若し眼、色を見ては識想を起す、[一一]三事相因れば便ち更樂有り、已に更樂有れば便ち痛有り、已に痛有れば便ち所覺有り、已に覺有れば便ち想有り、已に想有れば便ち之を稱量し、若干種の想著の念を起す。若し耳聲を聞き、鼻香を嗅ぎ、舌味を甞め、身細滑を更め、意法を知りて識想を起し、三事相因れば便ち更樂有り、已に更樂有れば便ち痛有り、已に痛有れば便ち覺有り、已に覺有れば便ち想有り、已に想有れば便ち之を稱量し、中に於て若干種の想著の念を起す。此れは是れ貪欲使・瞋恚使・邪見使・憍慢使・欲世間使・癡使・疑使なり。皆刀杖の變を起し、若干種の變を興して稱計す可からず。若し人有りて是の說を作さく、『亦眼無く、亦色無くして更樂有り』と。此の事然らず。設し復更樂無くして痛有りと言はゞ、此れ亦然らず。設し痛無くして想著有りと言はゞ、此の

【一〇】貪欲使以下七結をあぐ。

【一一】三事相因るとは、根(感官)と境(對象)と識との三。

時世尊、食後尼拘屢園從り、[七]毘羅耶致聚中に往至し、一樹下に在りて坐したまひき。是の時[八]執杖釋種、迦毘羅越を出でゝ世尊の所に至り、前に在りて默然として住す。爾の時執杖釋種、世尊に問ふて言さく、「沙門は何の勅教を作し、何等の論を爲したまふや」と。世尊告げて曰はく、「梵志、當に知るべし、我の所論は天・龍・鬼神の能く及ぶ所に非らざるなり。亦世に著するに非らず、復世に住まるに非らず、我の論ずる所は、正しく斯れを謂ふ耳」と。是の時執杖釋種、[九]儼頭嘆吒し已つて、便ち退いて去りぬ。爾の時如來座從り起ち、還つて所止に詣りたまへり。

爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「向者彼の園中に在りて坐せしに、執杖釋種有りて我所に來至して、我に問ふて言く、『沙門は何等の論を作すと爲すや』と、吾之に報へて曰く、『我の論ずる所は、天世人の能く及ぶ所に非らざるなり。亦世に著するに非らず、復、世に住まるに非らず、我の論ずる所は、正しく斯れを謂ふ耳』と。是の時執杖釋種、此の語を聞き已つて、便ち退いて去れり」と。爾の時一比丘有り、世尊に白して言さく、「云何が亦世に著せず、復世に住まるに非らざるや」と。世尊告げて曰はく、「我の論ずる所の如きは、都て世に著せず、今欲に於て解脱を得ば、釋種の狐疑を斷じ、衆想有ること無きが如し。我の論ずる所は、正しく此れを謂ふ耳」と。爾の時世尊、此の語を作し已つて、即ち起ちて室に入りたまひぬ。

是の時諸比丘、各相謂ひて言く、「世尊の向に論じたまふ所、略して其の義を說きたまへり。誰か能く廣く此の義を說くに堪任せん乎」と。是の時諸比丘、自ら相謂ひて言く、「世尊は恒に尊者大迦旃延を嘆譽したまへり。今唯迦旃延有りて、能く此の義を說く耳」と。是の時衆多の比丘、迦旃延に詣けて曰く、「向者如來は略して其の義を說きたまへり。唯、願くは尊者、當に廣く之を演說して、事々分別し、諸人をして解ることを得使むべし」と。迦旃延報へて曰く、「猶し聚落に人有りて、彼の村を出で、眞實の物を求めんと欲し、彼若し大樹を見れば、便ち取りて斫殺し、其の枝葉

【七】毘羅耶致聚中、巴利文には大林のベールヷ樹の下となる。(Mahāvana beluva)。
【八】執杖釋種 (Daṇḍapāṇi sakka)。
【九】儼頭(Sisaṁ okampeti)。肯く。

天・乾沓和に非らず　鬼・羅刹・神に非らず　天師阿私陀とは　今我身是れなり。

我今汝の心中の所念を知るが故に、梵天上從り來下せし耳。梵天は此を去ること極めて玄遠と爲す。彼の帝釋身も亦復是の如し。轉輪聖王も亦得可からず、此の苦行を以ては、釋梵・四天王と作る可からず」と。是の時天師阿私陀、便ち此の偈を說きぬ。

心の內の若干の念　外服して麁獷なり　但正見を勤修して　惡道を遠離せよ　心戒淸淨の行
口行も亦復然り　惡念を遠離せば　必ず當に天上に生ずべし。

と。是の時七梵志、天師に白して曰く、「審に是れ天師なる乎」と。報へて曰く、「是なり。但今梵志、裸形を以ては天上に生ずることを得ず、未だ必ずしも此の苦行を修めて、梵天の處に生ずることを得ず、又形體を露暴し、若干の苦行を作し、彼處に生ずることを得るに非らず。能く心意を攝し、移動せざら使むれば、便ち天上に生ぜん。卿等の習ふ所を以ては、彼處に生ずることを得可からず』と。大王、此の義を觀察して、裸形を以て、名けて阿羅漢と爲さゞるなり。其れ凡夫の人にして、眞人を知らんと欲せば、此の事然らず、又復眞人は能く習ふ所の凡夫の行を分別す。又復凡夫の人は凡夫の行を知ること能はず。眞人は便ち能く凡夫の行を知るなり。但大王、之を知り、當に方便して、久遠以來、今に適るに非らずと知るべきなり。當に以て之を觀ずべし。是の如く大王、當に方便を以て之を學ぶべし」と。爾の時波斯匿王、世尊に白して言さく、「如來の說きたまふ所、甚だ快哉と爲す。世人の能く曉了する所に非らず。然るに國事猥りに多し、所止に還らんと欲す」と。佛王に告げて曰はく、「王宜しく時を知るべし」と。爾の時王、卽ち座從り起ち、世尊の足を禮し、便ち退いて去りぬ。爾の時波斯匿王、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

## 十

[六]聞くこと是の如し。一時佛、釋翅迦毘羅衞國尼拘屢園に在し、大比丘衆五百人と倶なりき。爾の

【六】 M. 18. Madhupiṇḍika. 「中阿含經」第一一五經「蜜丸喩經」(卷二八)。

形の婆羅門有りて、世尊を去ること遠からずして過ぎぬ。是の時波斯匿王、此の諸人の世尊を去ること遠からずして過ぐを見、卽ち佛に白して言さく、「此の諸人を觀るに、經過して住まらず、皆是れ少欲知足にして、家業有ること無し。今此の世間に阿羅漢とは、此の人を最も上首と爲ん。然る所以は、衆人の中に於て極めて苦行を爲し、利養を貪らざればなり」と。世尊告げて曰はく、「大王、竟に未だ眞の阿羅漢を識らず。裸形露體を以て、名けて阿羅漢とは爲さず。大王、當に知るべし、此れ皆眞實の行に非らず、當に念じて久遠の來變を觀察すべし。又復當に親しむ可きには親しむことを知り、近づく可きには近づくことを知るを觀ずべし。然る所以は、過去久遠世の時七梵志有り、一處に在りて學ぶ、年極めて衰弊し、草を以て衣裳と爲し、食するに菓蓏を以てし、諸の邪見を起し、各此の念を生ずらく、『我等此の苦行の法を持して、後大國王と作ら使めん。或は釋梵・四天王を求めん』と。

爾の時[五]阿私陀天師有り、是れ諸の婆羅門の祖父なり。彼の梵志の心中の所念を知り、卽ち梵天上從り沒して、七婆羅門の所に來至す。是の時阿私陀天師、天の服飾を去り、婆羅門の形を作し、露地に在りて經行す。是の時七梵志、遙に阿私陀の經行するを見、各瞋恚を懷いて是の語を作さく、「此れは是れ何等の著欲の人なるや、我等梵行人の前に在りて行く。今當に呪ふて之を灰滅すべし」と。是の七梵志、卽ち手に水を掬ひ、彼の梵志に灑ぎ呪ふて曰く、「汝今速に灰土と爲れ」と。然して婆羅門遂に瞋恚を懷くに、天師の顏色倍す更に端正なり。然る所以は、慈は能く瞋りを滅すればなり。是の時七梵志便ち是の念を作さく、「我等將た禁戒退轉すと爲さゞる乎。我等正に瞋恚を起すに、彼の人便ち自ら端正なり」と。爾の時七人、天師の與に便ち此の偈を說きぬ。

天・乾沓和　羅刹・鬼神と爲す乎　是の時何等と名くるや　我等之を知らんと欲す。

と。是の時阿私陀師、卽時に偈もて報へて曰く、



【五】阿私陀(Asita)。

復比丘有り、佛に白して言さく、「存在することを欲すること五日」と、或は四日と言ひ、或は三日・二日・一日と言ふ者、爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「止みなん、止みなん、比丘、此れも亦是れ放逸の法にして、死想を思惟爲るに非らざるなり」と。爾の時復一比丘有り、世尊に白して言さく、「我能く死想を修行するに堪任す」と。比丘佛に白して言さく、「我時到つて衣を著け、鉢を持して舍衛城に入り、乞食し已つて還えつて舍衛城を出で、所在に歸へつて靜室中に入り、七覺意を思惟して命終を取れり。此れ則ち死想を思惟するなり」と。世尊告げて曰はく、「止みなん、止みなん、比丘、此れも亦死想を思惟し修行するに非るなり。汝等諸比丘の說く所は、皆是れ放逸の行にして、是れ死想を修行するの法に非るなり」と。是の時世尊、重ねて比丘に告げたまはく、「其れ能く[三]婆迦利比丘の如きは、此れ則ち名けて死想を思惟すと爲すなり。彼の比丘は善能く死想を思惟し、此の身の惡露不淨を厭患す。若し比丘にして死想を思惟し、繫念在前して心移動せず、出入息往還の敎を念じ、其の中間に於て七覺意を思惟せば、則ち如來の法に於て饒益する所多し。然る所以は、一切諸行は皆空、皆寂にして、起る者、滅する者皆是れ幻化にして眞實有ること無ければなり。是の故に比丘、當に出入息の中に於て、死想を思惟すべくんば、便ち生・老・病・死・愁・憂・苦・惱を脫せん。是の如く比丘、當に是の如く學を作すを知るべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

九

[四]聞くこと是の如し。一時佛、舍衛國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時波斯匿王、即ち群臣に勅すらく、「速に寶羽の車を嚴されよ。吾世尊の所に往いて、禮拜し、問訊せんと欲す」と。是の時大王即ち城を出でゝ、世尊の所に至り、頭面に足を禮し、一面に在りて坐す。爾の時如來、無央數の衆の與に圍遶せられて法を說きたまへり。是の時七尼犍子復七裸形の人有り、復七黑梵志有り。復七裸

【三】婆迦利比丘(Vakkali)。舍衛城の婆羅門の家に生る、佛弟子中信解脫第一と稱せらる。病苦に堪えずして自殺す。

【四】cf. M. 93. Assalāyana. 「中阿含經」第一五一「阿攝和經」(卷三七)。

人、道に近く舍を作りて、當來過去に止宿を得使むる者、是れを均頭第七の功德、稱計す可からずと謂ふなり。是れを均頭、七功德の法、其の福量る可からずと謂ふなり。若しは行き、若しは坐し、正使命終するも、其の福の後に隨ふこと、影の形に隨ふが如く、其の德稱計す可からず。言く『當に爾許の福有るべし、亦大海水の升斗之を量る可からざるが如し』。言く『當に爾許の水有るべし』、此の七功德も亦復是の如く、其の福稱限す可からず。是の故に均頭、善男子・善女人、當に方便を求めて七功德を成辦すべし。是の如く均頭、當に是の學を作すべし」と。爾の時均頭、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

八

[二] 聞くこと是の如し。一時佛、舍衛國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「汝等當に死想を修行し、死想を思惟すべし」と。時に彼の座上に一比丘有り、世尊に白して言さく、「我常に修行して死想を思惟す」と。世尊告げて曰はく、「汝云何が思惟して死想を修行するや」と。比丘、佛に白して言さく、「死想を思惟する時、意に存することを欲すること七日、七覺意を思惟せば、如來の法中に於て饒益する所多く、死後恨み無し。是の如く世尊、我死想を思惟す」と。世尊告げて曰はく、「止みなん、止みなん、比丘、此れ死想の行を行ずるに非らず。此れを名けて放逸の法と爲すなり」と。

復一比丘有り、世尊に白して言さく、「我能く死想を修行するに堪任す」と。世尊告げて曰はく、「汝云何が修行して死想を思惟するや」と。比丘、佛に白して言さく、「我今是の念を作さく、『意に存在することを欲すること六日、如來の正法を思惟し已つて、便ち命終を取る。此れ則ち增益する所有り。是の如く死想を思惟す』」と。世尊告げて曰はく、「止みなん、止みなん、比丘、汝も亦是れ放逸の法にして、死想を思惟するに非らざるなり」と。

【二】 A. VI. 19. A. VIII. 73.

# 卷の第三十五

## 七日品の餘

### 七

[一]聞くこと是の如し。一時佛、阿踰闍江水の邊に在し、大比丘衆五百人と倶なりき。是の時大均頭、閑靜の處に在りて是の念を作さく、「頗ふらくは此の義功德を增益すること有りや、此の理無しと爲んや」と。是の時均頭、即ち座從り起ち、世尊の所に往至し、頭面に足を禮し、一面に在りて坐す。爾の時均頭、佛に白して言さく、「世尊、向者閑靜の處に在りて是の念を作しぬ、『頗ふらくは、此の理行ずる所の衆事、功德を益することを得ること有り耶』と、我、今世尊に問ひまつらん、唯、願くは之を說きたまへ」と。世尊告げて曰はく、「功德を增益することを得可し」と。均頭佛に白して言さく、「云何が功德を增益することを得るや」と。世尊告げて曰はく、「增益するに七事有り、其の福稱量す可からず。亦復人の能く此れを算計する者無し。云何が七と爲すや。是に於て族姓子、若しは族姓女、未だ曾て僧伽藍を起さゞる處に、中に於て興立する者は、此の福計る可からず。復次に均頭、若しは善男子・善女人、能く床座を持して、彼の僧伽藍に施す者、及び比丘僧の與に。是れを均頭、第二の福稱計す可からずと謂ふなり。復、次に均頭、若しは善男子・善女人にして、食を以て彼の比丘僧に施す。是れを均頭、第三の福、稱計す可からずと謂ふなり。

復、次に均頭、若しは善男子・善女人、遮雨衣を以て比丘僧に給施する者、是れを均頭、第四の功德、其の福量る可からずと謂ふなり。復次に均頭、若しは族姓子・族姓女、若しは藥を以て比丘僧に施す者、是れを第五の福稱計す可からずと謂ふなり。復、次に均頭、若しは善男子・善女人、曠野に好井を作る者 是れを均頭、第六の功德稱計す可からずと謂ふなり。復次に均頭、善男子・善女

[一]「中阿含經」第七經「世間福經」(卷二)。

是れを此の漏娯樂所斷と謂ふなり。云何が有漏威儀所斷なるや。此に於て比丘、若し眼に色を見るも色想を起さず、亦染汚の心を起さず、眼根を具足して亦缺漏無く而して眼根を護る、若し耳に聲を聞き、鼻に香を嗅ぎ、舌に味を知り、身に細滑を知り、意に法を知るや、都て染汚の心を起さず、亦想著を起さず、而して意根を護る。若し其の威儀を攝せずば、則ち有漏を生ず。若し其の威儀を攝せば、則ち有漏の患ひ無し。是れを此の漏威儀所斷と謂ふなり。

彼れ何等か有漏思惟所斷なるや、是に於て比丘、念覺意を修め、無欲に依り、無汚に依り、滅盡に依りて出要を求め、法覺意・精進覺意・喜覺意・猗覺意・定覺意・護覺意を修め、無欲に依り、無汚に依り、滅盡に依りて出要を求む。若し此れを修めずば、則ち有漏の患ひを生じ、設し能く修めば、則ち有漏の患ひを生ぜじ。是れを此の漏思惟所斷と謂ふなり。若し復比丘、比丘の中に於て、諸の所有の漏、見斷とは便ち見、之を斷じ、恭敬斷とは、便ち恭敬之を斷じ。親近斷とは、親近之を斷じ、遠離斷とは遠離之を斷じ、威儀斷とは威儀之を斷じ、思惟斷とは思惟之を斷ず。是れを比丘、一切の威儀を具足し、能く結を斷じ、愛を去り、四流を度し、漸々に苦を越ゆと謂ふなり。是れを比丘、有漏の法を除き、諸佛世尊の常に施行し、一切の有形の類を慈念する所を、今已に施行すと謂ふなり。汝等常に閑居樹下を樂しみ、勤加精進して懈怠有ること勿れ。今勤加せずば、後悔ひるも益無けん。此れは是れ我訓敎なり」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

# 增壹阿含經卷第三十四

惟を作して、便ち[二四]三法を滅す。云何が三と爲すや、[二五]身邪・戒盜・疑にして、設し知見せずば則ち有漏の行を增し、設し見・聞・念・知せば、則ち有漏の行を增さず、已に知り、已に見ば、有漏便ち生ぜず、是れを此の漏見所斷と謂ふなり。彼れ云何が漏恭敬所斷なるや。是に於て比丘、飢寒に堪え忍び、風雨・蚊虻・惡言・罵辱に勤苦し、身に痛惱を生じ、極めて煩疼爲り、命、斷たんと欲するに垂んとし、便ち能く之を忍ぶ。若し爾らずば、便ち苦惱を起す。設し復能く堪え忍べば、是の如く生ぜず。是れを此の漏恭敬所斷と謂ふなり。彼れ云何が漏親近所斷なるや。是に於て比丘、心を持して衣を受け、榮飾を興さず、但其の形體を支へんと欲し、寒熱を除かんと欲し、風雨をして其の身に加へさら令めんと欲し、又形體を覆ふて外露せ令めず。又心を持し、時に隨つて乞食し、染著の心を起さず、但趣くに形體を支へて、故痛をして差すことを得、新しき者をして生ぜず、衆行を守護し、觸犯する所無く、長夜に安隱にして、梵行を修め、久しく世に存せ使めんと欲す、復心意を持して床座に親近し、亦榮華の服飾を著けず、但飢寒・風雨・蚊虻の類を除き、趣くに其の形を支へて、道法を行ずることを得んと欲す。又復、心を持して、醫藥に親近し、染著の心を生ぜず、彼の醫藥に於て、但疾病をして除愈せ使めんと欲するが故に、身體安隱を得、設し親近せずば、則ち有漏の患ひを生ず。若し親近せば、則ち有漏の患ひ無し。是れを此の漏親近所斷と謂ふなり。

彼云何が有漏遠離所斷なるや。是に於て比丘、亂想を除去すること、猶し惡象・駱駝・牛・馬・虎・狼・狗・蛇蚖・深坑・危岸・荊棘・峻崖・深泥の如く、皆當に之を遠離すべく、惡知識と與に從事すること莫かれ、亦復惡人に相近づかず、能く熟ら思惟して、心首を去らされ、設し將護せずば、則ち有漏を生ぜん。設し擁護せば、則ち有漏を生ぜじ。是れを有漏遠離所斷と謂ふなり。彼れ云何娛樂所斷なるや。是に於て比丘、欲想を生じて捨離せず、設し瞋恚想を起して亦捨離せず、設し復、疾想を起して亦捨離せず、設し捨離せずば則ち有漏を生ぜん、設し能く捨離せば、便ち能く有漏を起さじ、

【二四】三法とは、身見・戒禁取見・疑の三、三結に同じ。
【二五】身邪(Sakkāyadiṭṭhi 身見)。戒盜(Sīlabbataparāmāso 戒禁取)。疑(Vicikicchā)。

りや、我今當に過去久遠有るべし』と。或は復思惟すらく『過去久遠無し。云何が當に過去久遠有るべけんや、誰か過去久遠有りと爲すや。云何が復、當來の久遠有りや、我、今當に將來の久遠有るべし』と。或は復言く『將來の久遠無し。云何が當に將來の久遠有るべけんや、誰か將來の久遠有りと爲んや、云何が此の衆生の久遠有りや、此の衆生の久遠は何れ從り來ると爲んや、此れ從り命終して、當に何處に生ずべきや』と。彼の人此の不祥の念を起し、便ち六見を興し、展轉して邪見を生ず。我見有り、審に此の見有り、我見有ること無し、審に此の見を興す、我見有り、我見無し、中に於て審に見を起す。又復、自ら身を觀じ、復此の見を興し、已に於て已を見ず。復、此の見を興し、無我に於て無我を見ず、中に於て此の見を起す。

爾の時彼の人復此の邪見を生ず、我とは卽ち是れ今世亦是れ後世なり、常に世に存して朽敗せず、亦、變易せず、復、移動せず。是れを名けて邪見の聚と爲すと謂ふなり。邪見・災患・憂悲・苦・惱は皆此れに由つて生じ、療治す可からず、亦復捨つる能はず、遂に苦の本を增す。是れに由つて沙門の行、涅槃の道を爲さゞるなり。又復、比丘、賢聖の弟子は其の法を修行して、次叙を失はずく、善能く擁護して善知識と共に從事し、彼、能く分別して思惟す可からず、法も亦能く之を知り、思惟す可き所の法は亦能く之を知り、彼思惟す應からざる所の法は亦之を思惟せず、思惟す應き所の法は之を思惟す。彼れ云何が思惟す應からざる法は、之を思惟せざるや、是に於て諸法の未生の欲漏生じ、已生の欲漏增多し、未生の有漏を生じ、已生の有漏增多し、未生の無明漏生じ、已生の無明漏增多す。是れを此の法は之を思惟す應からずと謂ふなり。彼れ何等の法か思惟す應き者は之を思惟するや。是の諸法に於て、未生の欲漏生ぜず、已生の欲漏之を滅し、未生の有漏生ぜず、已生の有漏は之を滅し、未生の無明漏生ぜず、已生の無明漏は之を滅す、是れを此の法の之を思惟す應可きを思惟し、彼思惟す應からざるは亦之を思惟せず、思惟す可きは便ち之を思惟すと謂ふなり。彼れ是の如き思

べし。是の如く阿難、當に是の學を作すべし」と。爾の時阿難、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

### 六

[三二]聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「我今當に極妙の法を說くべし。初めも中も竟りも善く、義理深邃にして、具足し、梵行を修むることを得、此の經を名けて淨諸漏の法と爲す。汝等善く之を思念せよ」と。諸比丘對へて曰さく、「是の如し世尊」と。是の時諸比丘、佛從り敎へを受く。

世尊告げて曰はく、「彼云何が名けて淨諸漏の法と爲すや。或は有漏有り、[三三]見に緣つて斷ずることを得、或は有漏有り、親近して斷ずることを得、或は有漏有り、遠離して斷ずることを得、或は有漏有り、娛樂もて斷ずることを得、或は有漏有り、威儀もて斷ずることを得、或は有漏有り、思惟して斷ずることを得。彼れ云何が有漏は見に由つて斷ずることを得るや、是に於て凡夫の人は聖人を視ず、如來の法に順從せず、賢聖の法を擁護すること能はず、善知識に親近せず、善知識と與に從事せず、其れ法を聞き、思惟す應き所の法も亦分別せず、思惟す應からざる者、之を思惟し、未生の欲漏生じ、已生の欲漏便ち增多し、未生の有漏生じ、已生の有漏便ち增多し、未生の無明漏生じ、已生の無明漏便ち增多す、此の法思惟す應からざるに之を思惟す。彼れ云何が法の思惟す應くして、然も此の法を思惟せざるや、言ふ所の法を思惟すとは、未生の欲漏をして生ぜざら使め、已生の欲漏をして之を滅し、未生の有漏をして生ぜざら令め、已生の有漏をして之を滅し、未生の無明漏をして生ぜざら令め、已生の無明漏をして之を滅す。是れを此の法を思惟す應可くして思惟せず、思惟す應からざる所の者を便ち之を思惟し、思惟す應き者は復之を思惟せず、未生の欲漏をして生じ、已生の欲漏をして增多し、未生の有漏生じ、已生の有漏をして增多し、未生の無明漏をして生じ、已生の無明漏をして增多すと謂ひ、彼の人是の如きの思惟を作さく、「云何が過去久遠有

【三二】 M. 2. Sabbāsava.「中阿含經」第一〇經漏盡經（卷二）、後漢安世高譯「一切流攝守因經」一卷。

【三三】 巴利文にては以下を見（Dassana）、制御（Saṃvara）、受用（Paṭisevana）、忍受（Adhivāsana）、逃避（Parivajjana）、除遣（Vinodana）、修習（Bhāvana）の七法によつて煩惱の鎮めらるゝことをいふ。

是の時阿難、此の長者を將ひて、世尊の所に往至し、到り已つて頭面に足を禮し、佛に白して言さく、「今此の長者、出家學道することを得んと欲す。唯、願くは如來、當に與に鬚髪を剃除し、學道することを得使めたまふべし」と。佛、阿難に告げたまはく、「汝今躬ら此の長者を度す可し」と。是の時阿難、佛の教勅を受け、即時に長者の與に鬚髪を剃除し教へて、三法衣を著け令め、正法を學ば使めぬ、是の時阿難、彼の比丘に教へて曰く、「汝當に念じて修行すべし。佛を念じ、法を念じ、比丘僧を念じ、戒を念じ、施を念じ、天を念じ、休息を念じ、安般を念じ、身を念じ、死を念ぜよ。當に是の如きの法を修行すべし。是れを比丘、此の十念を行ぜば、便ち大果報を獲て甘露の法味を得と謂ふなり」と。是の時毘羅先、是の如きの法を修行し已つて、即ち其の日命終して、四天王中に生じぬ。

是の時阿難、即ち彼の身を闍維し、還つて世尊の所に至り、頭面に足を禮し、一面に在りて立ちぬ。爾の時阿難、世尊に白して言さく、「向者比丘、毘羅先は今已に命終して、何處に生ぜりと爲んや」と。世尊告げて曰はく、「今、此の比丘、命終して四天王中に生ぜり」と。阿難、佛に白して言さく、「彼に於て命終して、當に何處に生ずべきや」と。世尊告げて曰はく、「彼に於て命終して、當に三十三天に生ずべく、展轉して豔天・兜術天・化自在天・他化自在天に生じ、彼從り命終して復還來して乃ち四天王中に至らん。是れを阿難、毘羅先比丘は七反天人の中に周旋し、最後に人身を得て出家學道し、當に苦際を盡すべしと謂ふなり。然る所以は、斯れ如來に於て信心有るが故に、阿難、當に知るべし、此の閻浮提地は南北二萬一千由旬、東西七千由旬なり。設し人有りて閻浮里地の人を供養せば、其の福多しと爲すや不や」と。阿難、佛に白して言さく、「甚だ多し、甚だ多し、世尊」と。佛、阿難に告げたまはく、「若し衆生有りて、牛を𣫍するが如き頃、信心絕えずして十念を修行する者は、其の福量る可からず、能く量る者有ること無し。是の如く阿難、當に方便を求めて、十念を修行す

に白して言さく、「今我能く此の長者をして、出家學道せ使めん」と。

爾の時阿難、世尊を辭し已つて、彼の長者の家に往至し、門外に在りて立つ。是の時長者、遙に阿難の來るを見、即ち出でゝ奉迎し、便ち請じて坐せ使む。時に阿難、長者に語げて曰く、「今我是れ一切智人の邊に聞く。然して如來は今汝の身を記して、却後七日にして、當に身壞命終して、啼哭地獄の中に生ずべし」と。長者聞き已つて即ち恐懼を懷き、衣毛皆竪ち、阿難に白して曰く、「頗ふらくは此れ因緣の、七日の中に命終せざら使むること有り乎」と。阿難告げて曰く、「此れ因緣の、七日の中命終を免るゝことを得令むること無し」と。長者復白して言く、「頗ふらくは因緣有りて、我、今命終して啼哭地獄の中に生ぜざる乎」と。阿難告げて曰く、「世尊も亦此の敎へ有り、『若し當に長者にして、鬚髮を剃除し、三法衣を著け、出家學道すべくんば、便ち地獄の中に入らじ』と、汝今宜しく出家學道す可くんば[二〇]彼岸に到ることを得ん」と。長者白して言く、「阿難並に前に在りて去れ、我正に爾して當に往くべし」と。是の時阿難、便ち捨て去りぬ。長者便ち是の念を作さく、「七日と言はゞ、猶常には遠しと爲す。吾、今宜しく五欲自ら娛樂す可し。然して後に、當に出家學道すべし」と。

是の時阿難、明日復、長者の家に至り、長者に語げて曰く、「一日已に過ぎたり、餘六日の在る有り、時に出家す可し」と。長者白して言く、「阿難並に前に在れ、正しく爾して當に尋いで從ふべし」と。然るに彼の長者猶故に去らず。是の時阿難、二日三日乃至六日、長者の家に至り、長者に語げて曰く、「時に出家す可し、後、悔ひるも及ぶこと無けん。設し出家せずんば、今日命終して、當に啼哭地獄の中に生ずべし」と。長者阿難に白して曰く、「尊者並に前に在れ、正しく爾して當に後に隨ふべし」と。阿難告げて曰く、「長者、今日何の神足を以て彼の間に至り、方に先きに吾を遣すと言ふ耶。但今共に一時、倶に往かんと欲す」と。

---

【二〇】彼岸とは、涅槃の異名。生死の世界を此岸といふに對す。

佛と共の事同じからず。須陀洹乃至佛を供養すと雖も、現に報ひを得ざらん。然るに此の七人を供養せば、現世に於て報ひを得ん。是の故に阿難、當に勤加勇猛にして七法を成辦すべし。是の如く阿難、當に是の學を作すべし」と。爾の時阿難、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

五

聞くこと是の如し。一時佛、毘舍離獼猴池の側に在し、大比丘衆五百人と倶なりき。是の時世尊、時到つて衣を著け、鉢を持し、及び阿難を將ひて毘舍離に入りて乞食したまひぬ。爾の時毘舍離の城內に大長者有り、毘羅先と名け、饒財多寶にして稱計す可からず。然るに復、慳貪にして惠施の心無く、唯[二〇]宿福を食して、更に新しきを造らず。爾の時彼の長者、諸の婇女を將ひ、後宮に在りて倡伎樂を作し、自ら相娛樂す。

爾の時世尊、彼の巷に往詣し、知つて阿難に問ふて曰はく、「今倡伎樂を作すと聞く、是れ何れの家と爲すや」と。阿難、佛に白さく、「是れ毘羅先長者の家なり」と。佛、阿難に告げたまはく、「此の長者は却後七日にして命終し、當に啼哭地獄の中に生ずべし。然る所以は、此れは是れ常法として、若し斷善根の人の命終の時には、皆啼哭地獄の中に生ず。今此の長者は、宿福已に盡きて、更に新しきを造らざればなり」と。阿難佛に白して言さく、「頗ふらくは因緣有りて、此の長者をして、七日命終せざら使むる乎」と。佛、阿難に告げたまはく、「此れ因緣の命終せざるを得ること無き乎。昔種えし所の行ひ、今日已に盡く、此れ免る可からず」と。阿難、佛に白して言さく、「頗ふらくは方宜の此の長者をして、啼哭地獄に生せざら令むること有り乎」と。佛、阿難に告げたまはく、「此れ方宜有りて、長者をして地獄に入らざら使む可き耳」と。阿難、佛に白して言さく、「何等の因緣か、長者をして地獄に入らざら使むるや」と。佛、阿難に告げたまはく、「設し此の長者にして、鬚髮を剃除し、三法衣を著け、出家學道せば、便ち此の罪を免るゝことを得るなり」と。阿難、佛



【二〇】宿福とは、前世の善行によつて報ひられし福祐をいふ。

弊魔の境界を度することを得る能はず。然るに此の七使の法に復七藥有り、云何が七と爲すや、貪欲使は念覺意之を治し、瞋恚使は法覺意之を治し、邪見使は精進覺意之を治し、欲世間使は喜覺意之を治し、憍慢使は猗覺意之を治し、疑使は定覺意之を治し、無明使は護覺意之を治す。是れを比丘、此の七使は七覺意を用つて之を治すと謂ふなり。

比丘當に知るべし。我本未だ佛道を成ぜず、菩薩の行を爲せし(時)、道樹下に坐して、便ち斯の念を生ずらく『欲界の衆生は何等の爲に繋せ所るゝや』と。復是の念を作さく『此の衆生の類は七使の爲に生死に流轉し、永く解脱することを得ず。我今此の七使の爲に繋せ所れて解脱を得ず』と。爾の時復是の念を作さく『此の七使は何を用つて之を治すと爲すや』と。復重ねて思惟すらく『此の七使は當に七覺意を用つて之を治すべし。我當に七覺意を思惟すべし。七覺意を思惟する時、有漏心盡きて便ち解脱を得、後無上正眞之道を成じ、七日の中結跏趺坐し、重ねて此の七覺意を思惟せり。是の故に諸比丘、若し七使を捨てんと欲せば、當に念じて七覺意法を修行すべし。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

四

聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「七種の人有りて、事ふ可く、敬ふ可く、是れ世間の無上福田なり。云何が七種の人と爲すや。所謂七人とは、一に行慈、二に行悲、三に行喜、四に行護、五に行空、六に行無想、七に行無願、是れを七種の人、事ふ可く、敬ふ可く、是れを世間の無上の福田と謂ふなり。然る所以は、其れ衆生有りて、此の七法を行ぜば、現法中に於て其の果報を獲ん」と。

爾の時阿難、世尊に白して言さく、「何を以ての故に、須陀洹・斯陀含・阿那含・阿羅漢・辟支佛・佛を說かずして、此の七事を說きたまふ乎」と。世尊告げて曰はく、「行慈の七人其の行、須陀洹乃至

れを第六の不退轉の法と謂ふなり。復、次に比丘、一切世間不可樂想を起し、禪行を習ひ、諸の法教を忍び、上に轉進せば、魔の爲に其の便りを得所れじ。是れを七不退轉の法と謂ふなり。若し比丘有りて此の七法を成就し、共に和順せば、便ち魔の爲に其の便りを得られざるなり」と。爾の時世尊此の偈を說いて言はく、

事業を除去し　又亂を思惟するに非らず　設し此れを行ぜずば　亦三昧を得ざるなり　能く法を樂しむ者は　其の法義を分別す　比丘此の行を樂しまば　便ち三昧定を致さん

是の故に比丘、當に方便を求めて、此の七法を成ずべし。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

三

[一三]聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「我、今當に七使を說くべし。汝等善く之を思念せよ」と。諸比丘對へて曰さく、「是の如し、世尊」と。是の時諸比丘、佛從り敎へを受く。世尊告げて曰はく、「云何が七と爲すや、一には[一四]貪欲使、二には[一五]瞋恚使、三には[一六]憍慢使、四には[一七]癡使、五には[一八]疑使、六には、見使、七には[一九]欲世間使、是れを比丘、此の七使有りて、衆生の類をして、永く幽闇に處り、其の身を纏結し、世間に流轉して休息有ること無く、亦生死の根原を知ること能はさら使むと謂ひ、猶し彼の二牛、一は黑、一は白の共に同一の軛にて、共に相牽引して、相遠ざかることを得ざるが如し。此の衆生の類も亦復是の如く、此の貪欲使・無明使の爲に纏結せ所れて、相離るゝことを得ず、其の餘の五使も亦復追從す。五使七使に適從すること。亦然り。若しは凡夫の人、此の七使の爲に縛せ所るれば、生死に流轉して解脫することを得ず、苦の原本を知ること能はざればなり。

比丘、當に知るべし。此の七使に由つて便ち三惡趣、地獄・畜生・餓鬼有り、此の七使に由つて、



[一三] cf. A. VII. 12. Anusaya (2).

[一四] 貪欲使 (Kāmarāgānusaya)。

[一五] 瞋恚使(Paṭighānusaya)。

[一六] 憍慢使(Mānānusaya)。

[一七] 癡使(Avijjānusaya)。

[一八] 疑使(Vicikicchānusaya)。

[一九] 欲世間使(Bhavarāgānusaya 有貪使)、使とは、煩惱の異名。

承事し、禮敬せば、是れ第五の法にして、是の時便ち外寇の爲に壞所れずと謂ふなり。復、次に阿難、若し跋祇國の人民、他の財寶に貪著せずば、是れを第六法、外寇の爲に壞所れずと謂ふなり。復、次に阿難、若し跋祇國の人民、皆心を同一にし、神寺に向つて其の意を專精せずんば、便ち外寇の爲に壞所れざるなり。是れを第七の法、外寇の爲に壞所れずと謂ふなり。是れを阿難、彼の跋祇の人此の七法を修めば、終に外人の爲に壞所れずと謂ふなり」と。

是の時梵志、佛に白して言さく「設し當に彼の人、一法を成就するも猶壞る可からず。何に況んや七法なり、壞る可けん乎、止みなん、止みなん、世尊、國事猥りに多し、所止に還らんと欲す」と。爾の時梵志、即ち座從り起ちて去りぬ。

彼の梵志去りて遠からず。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく「我今當に七不退轉の法を說くべし。汝等諦に聽いて、善く之を思念せよ」と。諸比丘、佛に白して言さく「唯、然り、世尊」と。爾の時諸比丘、佛從り敎へを受く。世尊告げて曰はく「云何が七不退轉の法と爲すや、比丘當に知るべし。若し比丘にして、共に一處に集り、皆共に和順し、上下相奉じて上に轉進し、諸の善法を修めて退轉せずば、亦魔の爲に便りを得所れじ。是れを初法不退轉と謂ふなり。復、次に衆僧和合して、其の敎へに順從し、上に轉進して退轉せずば、魔王の爲に壞所れじ。是れを第二の法不退轉と謂ふなり。復次に比丘、事務に著せず、世業を修めず、上に轉進せば、魔天の爲に其の便りを得所れじ。是れを第三の不退轉の法と謂ふなり。復、次に比丘、雜書を諷誦して、終日其の情意を策役せず、上に轉進せば、魔王の爲に其の便りを得られず。是れを第四の不退轉の法と謂ふなり。復、次に比丘、其の法を勤修し、睡眠を除去し、恒に自ら警寤して上に轉進せば、弊魔の爲に其の便りを得られず。是れを第五の不退轉の法と謂ふなり。復次に比丘、算術を學ばず、亦人をして之を習は使めず、閑靜の處を樂しみ、其の法を修習し、上に轉進せば、弊魔の爲に其の便りを得られじ、是

二

[二]聞くこと是の如し、一時佛、羅閱城迦蘭陀竹園所に在し、大比丘衆五百人と倶なりき。是の時摩竭國王阿闍世、群臣の中に在りて是の說を作さく、「此跋祇國は極めて熾盛爲り、人民衆多なるも、吾當に攻伐して彼の邦土を攝むべし」と。是の時阿闍世王[三]婆利迦婆羅門に告げて曰く、「汝今世尊の所に往至し、吾姓名を持し、往いて世尊を問訊し、禮敬し、承事して云へ、『王阿闍世世尊に白して言さく、「意に跋祇國を攻伐せんと欲す。爾る可しと爲すや不や。」』と。設し如來にして所說有りたまはゞ、汝善く思惟し、來つて吾に向つて說け。然る所以は、如來の語は終に二有らざればなり」と。

是の時婆羅門、王の敎勅を受け、世尊の所に往至し、共に相問訊し、一面に在りて坐す。是の時婆羅門、佛に白して言さく、「王阿闍世は世尊を禮敬し、承事し、問訊しまつる。又復重ねて白す、『意に往いて跋耆大國を攻伐せんと欲し、先づ來つて佛に問ひまつる、爾る可しと爲すや不や』」と。爾の時婆羅門、衣を以て頭脚を覆ひ、象牙の屐を著け、腰に利劍を帶び、說法す應からず。是の時世尊、阿難に告げて曰はく、「若し跋祇の人民、七法を修めば終に外寇の爲に壞ら所じ。云何が七と爲すや、若し當に跋祇國の人民、盡く一處に集りて、散せざるべくんば、便ち他國の爲に壞ら所じ。是れを初法外寇の爲に敗ら所ずと謂ふなり。

復、次に阿難、跋祇國の人民、上下和順せば、是の時跋祇の人民、外人の爲に擒へ所れじ。是れを阿難、第二の法外寇の爲に壞所れずと謂ふなり。復、次に阿難、若し跋祇國人も亦他を婬し、他の國人の色に著せず。是れを第三の法、外寇の爲に壞所れずと謂ふなり。復、次に阿難、若し跋祇國は此の間從りして傳へて彼に至らず、亦復、彼の間從り傳へ來つて此に至らず。是れを第四の法、外寇の爲に壞所れずと謂ふなり。復、次に阿難、若し跋祇國人にして、沙門・婆羅門を供養し、梵行人に



【二】 A. VII. 20. Vassakāra. 「長阿含經」第二經「遊行經」。「中阿含經」第一四二經「雨勢經」(卷三五)。

【三】 婆利迦(Vassakāra)。雨行と譯す。

爾の時世間に初めて此れ殺生有り。是の時衆多の人民、此の敎令を聞く、『其れ粳米を竊盜する者有らば、刹利の主郎ち取りて之を殺す』と。皆恐懼を懷き、衣毛皆竪ち、各草廬を作り、中に於て坐禪し、其の梵行を修めて、其の心を一にし、家業・妻子・兒婦を捨離して、獨り其の志を靜め、梵行を修む。此れに因つて以來、婆羅門の名姓有り。是の時便ち此の二の種姓有りて、世間に出現す。

比丘當に知るべし。彼の時盜みに由るが故に便ち殺生有り、殺に由るが故に便ち刀杖有り。是の時刹利の主、人民に告げて曰く、『其れ端正にして高才の者有らば、當に此の人民を統べ使むべし』と。又之に告げて曰く、『其れ人民有りて、竊盜する者は其の罪を懲らさ使む』と。爾の時便ち此の毘舍[九]種姓有りて、世に出現す。其の時多く衆生有りて、便ち此の念を生ずらく、『今日衆生の類各共に殺生す。皆業の致す所に由るなり、今來往周旋以て自ら生活す可し』と。爾の時便ち首陀羅[一〇]種姓有りて世間に出現す。爾の時世尊、便ち此の偈を說きたまはく、

初めて刹利種有り　次で婆羅門有り　第三を毘舍と名け　次で復首陀姓なり　此の四種の姓有りて　漸々にして相生ず　皆是れ天身來りて　同じく一色と爲すなり

と。比丘當に知るべし。爾の時此の殺盜心有り、復此の自然の粳米有ること無し。

爾の時五種の穀子有り、一に根子、二に莖子、三に枝子、四に革子、五に果子及び餘の所生の種子なり。是れを五種の子と謂ひ、皆是れ他方の刹土の風吹きて來ら使め、取りて用つて種を作し、此れを以て自ら濟ふなり。是の如く比丘、世間に此の瑞應有りて、便ち生・老・病・死之致有り。今日五盛陰の身有りて、苦際を盡くすことを得ざら使む。此れを名けて劫の成敗時の變易と爲すなり。今吾汝の與に說きしは、諸佛世尊の常に行ず應き所を、今盡く汝の與に之を說けり。當に靜處に閑居することを樂ふべし。當に坐禪を念じて懈怠を起すこと勿るべし。今精誠ならずば、後に悔ゆるも益無けん。此れは是れ我の敎誨なり」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

---

【九】毘舍（Vessa, Vaiśya 梵）、印度四姓の一、一般農工商に從事するもの。
【一〇】首陀羅（Sudda, Śūdra 梵）、印度四姓中の奴隷階級。

食を辦じ儲けぬ。

爾の時彼の粳米更に復生ぜず。是の時衆生各此の念を生ずらく『世間に大災患有り、今此の粳米は遂に本に如かず、今當に此の粳米を分つべし』と。即時に粳米を分ちぬ。爾の時衆生、復此の念を生ずらく『我今自ら粳米を藏す可し。當に他の粳米を盜むべし』と。是の時彼の衆生、自ら粳米を藏し、便ち他の粳米を盜む。彼の主粳米を盜むを見、彼の人に語げて曰く『汝、何故に吾粳米を取りしや、今汝の罪を捨てゝ後、更に犯すこと莫かれ』と。爾の時世間に初めて此の盜心有り。是の時復衆生有りて、此の語を聞き、復、自ら念を生ずらく『我今此の己の粳米を藏す可し。當に他の粳米を盜むべし』と。是の時彼の衆生、便ち己の物を捨てゝ、他物を取りぬ。彼の主見已つて彼の人に語げて曰く『汝今何爲れぞ我粳米を取りし乎』と。然るに彼の人默然として對へず。是の時物主即時に手拳相加へ『自今已後更に相侵すこと莫かれ』と。是の時衆多の人民、衆生の相盜むと聞き、各共に雲集して、自ら相謂ひて言く『世間に此の非法有りて、各、共に相盜む、今當に守田の人を立てゝ田を守護せ使むべし』其れ衆生有りて、聰明高才の者、當に立てゝ守田の主と爲すべし』と。是の時即ち田主を選擇して之に語げて曰く『汝等當に知るべし。世間に此の非法竊盜有り、汝今田を守りて當に其の直を顧みるべし。諸の人民來りて、他の粳米を取らば、即ち其の罪を懲らせ』と。爾の時即ち田主を安んず。比丘、當に知るべし。爾の時其れ田を守る者を號して刹利種と爲す。皆是れ舊法にして今法爲るに非らざるなり。爾の時世尊、便ち此の偈を說きたまはく、

始め刹利種有り　姓中の上なる者　聰明にして高才の人　天人の敬待する所なり

と。

爾の時其れ人民有りて、他物を侵さば、是の時刹利取りて之を懲罰す。然るに復彼の人其の愆を改めざるが故に、復之を犯す。是の時刹利の主、勅して刀杖を作り、彼の人を取りて其の首を梟す。

はず。又彼の天子にして、地肥を食ふことの少き者は、身體重からず、亦復、神足を失はず、亦能く虛空中に在りて飛行す。是の時天子にして、神足を失ひし者は、皆共に號哭して、自ら相謂ひて言く、『我等今日極めて窮厄爲り、復、神足を失へり。』と。卽ち世間に住りて復、天上に還えること能はず、遂に此の地肥を食へり』と。各々顏色を相視る。彼の時天子にして、欲意多き者は、便ち女人と成り、遂に情欲を行ふて共に相娛樂す。是れを比丘、初めて世成るの時、此の淫欲有りて、世間に流布せりと謂ふなり。是れ舊常の法として、女人必ず世に出づ。亦復、舊法今に適ふに非るなり。是の時餘の光音天、此の天子の已に墮落せしを見、皆來り呵罵して之に告げて曰く、『汝等何爲れぞ此の不淨の行ひを行ぜしや』と。是の時衆生復是の念を作さく、『我等當に方便を作して、宜しく共に止宿し、人をして見ざら使むべし』と、轉々して屋舍を作り、自ら形體を覆へり。是れを比丘、此の因緣有りて、今屋舍有りと謂ふなり。

比丘、當に知るべし。或は是の時有りて、地肥自然に地に入りて後、轉じて粳米を生ず、極めて鮮淨爲り。亦皮表無く、極めて香好爲り、人をして肥白せ令む。朝に收めば暮に生じ、暮に收めば朝に生ず、是れを比丘、爾の時始めて此の粳米の名有りて生ずと謂ふなり。比丘、或は是の時有つて、人民懈怠して生活を勤めず。彼の人便ち是の念を作さく、『我今何爲れば日々此の粳米を收めん。當に二日に一收す應し』と。是の時彼の人二日に一たび粳米を收む。爾の時人民展轉して懷妊し、此れに由つて轉た生分有り、復衆生有りて、彼の衆生に語げて言く、『我等共に粳米を取らん』と。是の時彼の人報へて曰く、『吾已に二日の食糧を取れり』と。此の人聞き已つて復、此の念を生ずらく、『我當に四日の食糧を儲くべし』と。卽時に四日の食糧を辦ず。復、衆生有りて、彼の衆生に語ぐらく、『共に相將ひて、外に粳米を收む可し』と。此の人報へて曰く、『吾已に四日の食糧を收めたり』と。彼の人聞き已つて便ち此の念を生ずらく、『吾當に八日の食糧を辦ずべし』と。卽ち八日の

比丘、當に知るべし。七日出づる時、此の間從り六天に至り、乃至三千大千刹土悉く灰土と爲り、亦形質の兆無し、是の如く比丘、一切行無常にして、久しく保つ可からず、皆盡に歸す。爾の時人民命終し盡して、他方刹土に生じ。若しは天上に生ず。設し復地獄中の衆生の宿罪已に畢つて、天上若しは他方の刹土に生ず。設し彼の地獄の衆生の罪の未だ畢らざる者は復、移りて他方の刹土に至る。比丘當に知るべし。若し七日出づる時、復、日月光明星宿の兆無し。是の時日月已に滅して、復、晝夜無し。是れを比丘、緣の報ひに由るが故に、此の壞敗を致すと謂ふなり。

比丘當に知るべし。劫還つて成就する時、或は是の時有りて、火還つて自ら滅し、虛空の中に大雲の起る有り、漸々に雨を降らす。是の時此の三千大千の刹土、水其の中に遍滿し、水乃ち梵天上に至る。比丘當に知るべし。是の時此の水漸々に停り住して、自ら消滅す。復、風有りて起る。名けて隨嵐と曰ひ、此の水を吹きて一處に聚著す。是の時彼の風千の須彌山、千の祇彌陀山、千の尼彌陀山、千の佉羅山、千の伊沙山、千の毘那耶山、千の鐵圍山、千の大鐵圍山を起し、復、八千の地獄を生じ、復、千の馬頭山・千の香積山・千の般荼婆山・千の優闍伽山・千の閻浮提・千の瞿耶尼・千の弗于逮・千の欝單曰を生じ、復、千の海水を生じ、復、千の四天王宮・千の三十三天・千の豔天・千の兜術天・千の化自在天・千の他化自在天を生ず。

比丘當に知るべし。或は是の時有りて、水滅し地復還つて生ず。是の時地上に自然に地肥有り、極めて香美爲り、甘露に勝れたり。彼の地肥の氣味を知らんと欲せば、猶し蒲桃酒を甜むるが如し。比丘、當に知るべし。或は此の時有りて、光音天自ら相謂ひて言く、「我等閻浮提に至り、彼の地形を觀看せんと欲し、還つて之を復する時、光音天の子世間に來下し、地上に此の地肥の有るを見、便ち指を以て嘗め、口中に著して取りて之を食す。是の時天子にして、地肥を食することの多き者は、轉じて威神無く、叉光明無く、身體遂に重くして骨肉を生じ、卽ち神足を失ふて復、飛ぶこと能

るべし。若し世間に三日出現する時、四大海水千由旬の內に、水自然に竭き、漸々にして乃ち七千由旬に至り、水自然に竭く。比丘、當に知るべし。若し四日世に出現する時は、四大海水、深さ千由旬在り。是の如く比丘、一切諸行は皆悉く無常にして、久しく住することを得ず。

比丘、當に知るべし。或は是の時有りて、若し世間に五日出づる時有り。是の時四大海水、餘は七百由旬の水有りて、漸々に百由旬に至る。比丘當に知るべし。若し五日出づる時、是の時海水一由旬在り。漸々に水竭きて遺餘無し。若し五日出づる時、餘は正しく七尺の水在り。五日出づる時、海水盡く竭きて遺餘有ること無し。比丘當に知るべし。一切行無常にして、久しく住することを得ず。比丘當に知るべし。或は是の時有りて、六日出づる時、此の地厚さ六萬八千由旬、皆悉く烟出す。須彌山も亦漸々に融壞す。若し六日出づる時、此の三千大千國土皆悉く融壞すること、猶し陶家の瓦器を燒くが如きなり。是の時三千大千の刹土も亦復是の如く、洞然として火出で、周遍せざるは靡し。比丘當に知るべし。若し六日出づる時、八大地獄も亦復消滅し、人民命終す。須彌山に依る五種の天も亦復命終し、三十三天・豔天乃至他化自在天も亦復命終し、宮殿皆空なり。若し六日出づる時は、是の時須彌山及び三千大千の刹土、皆悉く洞然として遺餘無し。是の如く比丘、一切行無常にして、久しく住することを得ず。比丘當に知るべし。或は是の時有りて、若し七日出づる時、是の時此の地厚さ六萬八千由旬、及び三千大千の刹土と雖も、皆悉く火起る。若し復七日出づる時、此の須彌山、漸々に融壞し、百千由旬自然に崩落し、永く餘り有ること無く、亦復塵烟の分を見ず。況んや灰を見んをや。是の時三十三天乃至他化自在天の宮殿皆悉く火然たり。此の間の火炎乃ち梵天上に至る。新生の天子にして、彼の天宮に在る者、由來劫燒を見ざりしに、此の炎光を見、普く恐懼畏を懷き、火の爲に燒かる。然るに彼の舊生の天子等、曾て劫燒を見れば、便ち來つて後生の天子を慰勞し、『汝等恐懼を懷くこと勿れ。此の火終に此の間に來至せず』と。

北縱廣八萬四千由旬にして、須彌山に近く、南に大[二]鐵圍山有り、長さ八萬四千里、高さ八萬里なり。又此の山の表に[三]尼彌陀山有りて、彼の山を圍む。尼彌陀山を去りて復山有り。佉羅山と名く。此の山を去りて復更に山有り、俾沙山と名く。此の山を去りて復更に山有り、馬頭山と名く。復更に山有りて、[四]毘那耶山と名く。毘那耶に次いで山有り、鐵圍大鐵圍山と名く。鐵圍の中間に八大地獄有り、一一の地獄に十六の隔子有り。

然して彼の鐵圍山は、閻浮里地に於て饒益する所多く、閻浮里地にして、設し鐵圍山無くば、此の間恒に當に臭處たるべし。鐵圍山の表に香積山有り。香積山の側に八萬四千の白象王有りて、彼の間に止住し、各六牙有りて、金銀校飾す。彼の香山中に八萬四千の窟有り、諸象彼に在りて居止す。皆金・銀・水精・琉璃の造る所にして、最上の象には釋提桓因躬自ら之に乘り、最下の者には、轉輪聖王之に乘る。香積山の側に摩陀池水有り、皆優鉢蓮華・拘牟頭華を生ず。然して彼の諸の象、根を掘りて食ふ。摩陀池水の側に復山有りて、優闍伽羅と名く。然して彼の山皆若干種の草木を生じ、鳥獸虫蟲悉く彼の間に在り。彼の山に依りて皆神通得道の人有りて、彼の間に住す。次に復山有り、般荼婆と名く。次に復、山有りて耆闍崛山と名く。此れは是れ閻浮里地所依の處なり。

比丘當に知るべし。或は是の時有つて、若し此の世間、壞敗せんと欲する時は、然も天降雨せず種うる所の生苗復長大せず。諸有の小河泉源皆悉く枯竭す。一切諸行皆無常に歸し、久しく住することを得ず、比丘當に知るべし。或は是の時有つて、此の四大駛河所謂[五]恒河・[六]辛頭・[七]死陀・[八]婆叉亦復枯竭して遺餘無し。是の如く比丘、無常百變は正しく此れを謂ふ耳。比丘、或は是の時有りて、若し此の世間に二日出づる時有り。是の時百草樹木皆悉く凋落す。是の如く比丘、無常變易して、久しく停ることを得ず。是の時諸の泉源小水皆悉く枯竭す。比丘當に知るべし。若し二日出づる時、爾の時四大海水百由旬の内、皆悉く枯竭し、漸々に七百由旬に至り、水自然に竭く。比丘、當に知



【二】鐵圍山(Cakravāḍa 梵)。
【三】尼彌陀山 (Nimindhara 梵)。
【四】毘那耶山(Vinataka梵)。
【五】恒河(Gaṅgā)。
【六】辛頭(Sindhu 梵)。
【七】死陀(Sītā 梵)。
【八】婆叉(Avksu 梵)。

へ」と。世尊諸比丘に告げて曰はく、「汝等善く之を思念して、心懷に藏在せよ」と。諸比丘對へて曰さく、「是の如し、世尊」と。爾の時諸比丘、佛從り敎へを受けぬ。

　世尊告げて曰はく、「須彌山は極めて廣大爲り、衆山の及ぶ所に非らず。若し比丘にして須彌山を知らんと欲せば、水上に出づること高さ八萬四千由旬、水に入ること亦深さ八萬四千由旬なり。然して須彌山は四種の寶の造る所にして、金・銀・水精・琉璃なり。又四角有り、亦四種の造る所にして、金・銀・水精・琉璃なり。金の城には銀の郭、銀の城には金の郭、水精の城には琉璃の郭、琉璃の城には水精の郭あり。然して須彌山上には五種の天有り、彼に在りて居止す。皆宿緣に由つて彼の間に住す。云何が五と爲すや、所謂彼の銀の城の中には細脚天有りて、彼に在りて居止す。彼の金の城の中には、尸利沙天有りて、彼に在りて居止す。水精の城の中には歡悅天有りて彼に在りて居止す。琉璃の城の中には力盛天有りて、彼に在りて居止す。金銀城の中間に毘沙門天王彼に在りて居住し、諸の閲叉を將ひ、稱計す可からず。金城と水精城との中間に、毘留博叉天王有りて、諸の龍神を將ひ、彼に在りて居止す。水精城と琉璃城との中間に、毘留勒叉天王有りて、彼に在りて居止し、琉璃城と銀城との中間に、提頭賴吒天王有りて、彼に在りて、居止す。比丘、當に知るべし。須彌山の下に阿須倫有りて居止す。若し阿須倫、三十三天と共に鬪はんと欲する時、先づ細脚天と共に鬪ひ、設し勝つことを得ば、復、金城に至り、尸利沙天と共に鬪ひ、已に尸利沙天に勝たば、復水精城に至り、歡悅天と共に鬪ひ、已に彼に勝たば復琉璃城に至り、已に彼の天に勝たば便ち三十三天と共に鬪ふなり。

　比丘當に知るべし。須彌山の頂に三十三天彼に在りて居止し、晝夜照明の光、自ら相照らすが故に、此れを致す耳。須彌山に依つて日月流行し、日天子の城郭縱廣五十一由旬、月天子の城郭は縱廣三十九由旬にして、最大の星は縱廣一由旬、最小の星は縱廣二百歩なり。須彌山の頂は東西南

# 卷の第三十四

## 七日品第四十の一

一

「[一]聞くこと是の如し。一時佛、舍衛國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時衆多の比丘、食後皆普會講堂に集り、是の如きの論議を作す、「此の須彌山は極めて廣大爲り、衆山の及ぶ所に非らず。甚奇甚特、高廣にして極めて峻し。是の如きも久しからずして、當に復壞敗して遺餘有ること無かるべし。須彌山に依りて更に大山有り、亦復壞敗せん」と。爾の時世尊、天耳を以て衆多の比丘の是の論を作すを聞き、即ち座從り起ち、彼の講堂の所に往至し、即ち座に就きたまふ。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「汝等此に在りて、何等の論を爲すや、何の施行する所(有らん)と欲するや」と。諸比丘對へて曰さく、「諸人此に集りて、其れ法の事を論ぜり、向きに論說する所は皆、自ら如法なり」と。世尊告げて曰はく、「善い哉、比丘、汝等出家して正しく法論をす應し。亦復賢聖の默然たるを捨てざれ。然る所以は、若し比丘にして、一處に集聚せば、當に二事を施行すべし。云何が二と爲すや、一に當に共に法論すべし。二に當に賢聖の默然たるべし。汝等此の二事を論ぜば、終に安隱を獲て時宜を失はじ。汝等向者に何等の如法の義を作せしや」と。諸比丘對へて曰さく、「今衆多の比丘、此の堂に來集して、是の如きの論議を作せり『甚奇甚特、此の須彌山は極めて高く、廣大なり。然るに此の須彌山は是の如きも、久しからずして、當に復敗壞すべし。及び諸の四面の鐵圍山も亦、當に是の如く壞敗すべし』と。向者に此に集まりしは、如法の論を作せしなり」と。世尊告げて曰はく、「汝等此の世間の境界の壞敗の變を聞かんと欲する乎」と。諸比丘佛に白して言さく、「今正しく是れ時なり。唯、願くは世尊、時を以て演說し、衆生の類の心をして、解脫を得使めたま

【一】A. VII. 62, Suriya. 「中阿含經」第八經、七日經(卷二)。

以て道を成じ、涅槃界に至ることを得、獨り戒清淨なるに非らずして、滅度に至ることを得、猶し七重の樓上に上らんと欲する有らば、要らず當に次を以て至るべきが加く、戒清淨の義も亦復是の如し。漸々に心を至し、心に由つて見に至り、見に由つて猶豫無きに至り、猶豫無き淨に由つて行跡に至り、淨行跡に由つて道に至ることを得、淨道に由つて知見に至ることを得、淨知見に由つて涅槃に至ることを得」と。

是の時舍利弗、卽ち稱して「善い哉、善い哉、快く此の義を說けり。汝今何等と名くと爲すや。諸の比丘梵行の人、汝を稱して何等の號を(爲すや)」と。滿願子言く、「我今名けて滿願子と爲す。母の姓は彌多那尼なり」と。舍利弗言く「善い哉、善い哉、滿願子、賢聖の法中實に等倫無し。甘露を懷抱して、演布するに窮り無し。我、今問ふ所の甚深の義は、汝盡く演說せり。設し當に諸の梵行の人、首を以て戴き、世間を行くべくんば、猶其の恩に報ゆることを得ること能はず。其れ來り親近し問訊する者有らば、彼の人快く善利を得ん。我、今亦其の善利を得て、其の敎へを承受せり。滿願子報へて曰く、「善い哉、善い哉、汝の所言の如し。汝今何等と名くと爲すや。諸の比丘何等の號を爲すや」と。舍利弗報へて曰く、「我は[四五]優波提舍と名け、母を[四六]舍利と名く。諸比丘吾を號して[四七]舍利弗と爲す」と。滿願子言く、「我、今大人と共に論ぜり。先きに亦法の大を知らざりき。主此の間に來至せり。設し當に知るべし、尊者舍利弗の此に來至せば、亦此の辯共に相酬答すること無けん。然るに尊、此の甚深の義を問ひ、尋いで時に發遣せり、善い哉、舍利弗、佛弟子中最も上首爲り。恒に甘露の法味を以て自ら娛樂す。設し諸の梵行の人、首を以て尊者舍利弗を戴き、世間を行きて歲從り歲に至ること、猶斯須の恩を報ゆること能はざるべし、其れ衆生有りて、來つて尊者を問訊し、親近せば、彼の人快く善利を得ん。我等も亦快く善利を得ん」と。爾の時二賢彼の園に在りて、共に是の如く論議しぬ。是の時二人各所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

等法及び寶度　水及び城郭喩と　識と均頭と二輪と　波蜜及び七車となり。

# 增壹阿含經卷第三十三

---

【四五】優波提舍(Upatissa)。
【四六】舍利(Sāri)。
【四七】舍利弗(Sāriputta)。

此の義を解し、智者は自ら悟ること、猶し今日波斯匿王、舍衞城從り婆祇國に至る兩國の中間に七乘車を布くが如し。是の時波斯匿王、城を出でゝ先づ一車に乘りて。第二車に至り、卽ち第二車に乘りて復第一車を捨て、小しく復、前行して、第三車に乘りて、第二車を捨て、小しく復前行して第四車に乘りて第三車を捨て、小しく復、前行して第五車に乘りて第四車を捨て、又復、前行して第六車に乘りて第五車を捨て、又復、前行して第七車に乘りて第六車を捨てゝ婆祇國に入らん。是の時波斯匿王、已に宮中に至り、設し人有りて問はん、『大王、今日何等の車に乘りて此の宮に來至すと爲すや』と。彼の王何をか報へんと欲するや」と。舍利弗報へて言く「設し當に人有りて問はゞ、當に是の如く報ふべし。曰く『吾れ舍衞城を出でゝ、先づ第一車に乘りて第二車に至り、復、第二車を捨てゝ第三車に乘り、復、第三車を捨てゝ第四車に乘り、復、第四車を捨てゝ第五車に乘り、復、第五車を捨てゝ第六車に乘り、復、第六車を捨てゝ第七車に乘りて婆祇國に至れり。然る所以は、皆前車に由りて第二車に至り、展轉相因つて彼の國に至ることを得たりしなり』と。設し人有りて問はゞ當に是れを之に報ふと作すべし」と。滿願子報へて曰く「戒清淨の義も亦復是の如し。心清淨に由つて見清淨を得、見清淨に由つて、猶豫を除く清淨に至ることを得、猶豫無き義に由つて行跡清淨に至ることを得、行跡清淨の義に由つて、道清淨に至ることを得、道清淨の義に由つて知見清淨に至ることを得、知見清淨の義に由つて涅槃の義に至ることを得、如來の所に於て梵行を修むることを得るなり。然る所以は、戒清淨の義は是れ受入の貌なり。然して如來は受入を除か使むることを說きたまふ。心清淨の義も亦是れ受入の貌なり。然も如來は受入を除くことを說きたまふ。乃至知見の義も亦是れ受入なり。如來は受入を除くことを說きたまふ。乃至涅槃は如來の所に梵行を修むることを得るなり。若し當に戒清淨なるべくんば、如來の所に於て梵行を修むることを得ん、凡夫の人も亦當に滅度を取るべし。然る所以は、凡夫の人も亦此の戒法有り。世尊の說きたまふ所は、次を

至す。是の時滿願子、一樹下に在りて結跏趺坐す。舍利弗も亦復一樹下に在りて端坐思惟す。是の時舍利弗、便ち座從り起ち、滿願子の所に往至し、到り已つて共に相問訊し、一面に在りて坐す。爾の時舍利弗、滿願子に問ふて曰く、「云何が滿願子、世尊に由つて梵行を修むることを得て、弟子と爲りしと爲す乎」と。滿願子報へて曰く、「是の如し、是の如し」と。時に舍利弗復問ふて曰く、「復世尊に因つて[三九]清淨戒を修むることを得る乎」と。滿願子言く、「非なり」と、舍利弗言く、「[四〇]心清淨に由つて如來の所に於て、梵行を修むと爲す乎」と。滿願子報へて曰く、「非なり」と。舍利弗言く、「[四一]見清淨の爲に如來の所に於て梵行を修むることを得る乎」と。滿願子報へて曰く、「非なり」と。舍利弗言く、「云何が[四二]猶豫無きが爲に、梵行を修むることを得る乎」と。滿願子報へて曰く、「非なり」と。舍利弗曰く、「[四三]行跡清淨に由るが爲に、梵行を修むることを得る乎」と。滿願子報へて曰く、「非なり」と。舍利弗言く、「云何が道の中に於て[四四]智修清淨にして梵行を修むることを得る乎」と。滿願子報へて曰く、「非なり」と。舍利弗言く、「云何が知見清淨にして梵行を修むることを得る乎」と。滿願子報へて曰く、「非なり」と。舍利弗言く、「我今問ふ所、如來の所に於て梵行を修むることを得る乎」と、汝、復吾に報へて言ふ。『是の如し』と、吾、復問ふに、『智慧心清淨、道知見清淨にして梵行を修むることを得る耶』と、汝、復言ふ『非なり』と。汝、今云何が如來の所に於て梵行を修むることを得る耶」と。滿願子報へて曰く、「戒清淨の義とは、能く心をして清淨なら使む。心清淨の義とは、能く見をして清淨なら使む。見清淨の義とは能く猶豫無くして清淨なら使む。猶豫無くして清淨の義とは、能く行跡をして清淨なら使む。行跡清淨の義とは能く道をして清淨なら使む。道清淨の義とは、能く知見をして清淨なら使む。知見清淨の義とは能く涅槃の義に入ら使む。是れを如來の所に於て梵行を修むることを得と謂ふなり」と。舍利弗言く、「汝今說く所の義、何の趣向する所ぞや」と。滿願子言く、「我、今當に譬喩を引いて此の義を解すべし。智者は譬喩を以てせば、

---

【三九】清淨戒云々とは、戒行を清めるために修行するやの意。
【四〇】心清淨に由つて云々とは、心を清むるための修行の意。
【四一】見清淨云々とは、見解を清めるための意。
【四二】猶豫無き云々、疑ひを離るゝための意。
【四三】行跡清淨云々とは、證悟の道を知るための意。
【四四】智修清淨とは、智慧を得るための意。

人を敎へて其の戒を修め使め、已身三昧成就し、復他人を敎へて三昧を行ぜ使め、已身智慧成就し、復他人を敎へて智慧を行ぜ使め、已身解脱成就し、復他人を敎へて解脱を行ぜ使め、已身解脱見慧成就し、復他人を敎へて此の法を行ぜ使め、身能く敎化して厭足有らず、説法に懈倦無かりしや」と。爾の時諸比丘、世尊に白して言さく、「比丘滿願子は、此の諸比丘の中に於て、敎化に堪任し、已身阿練若行を修め、亦復阿練若行を歎譽し、已身補衲衣を著け、少欲知足にして精進勇猛なり。乞食して閑靜の處を樂しみ、戒・三昧・智慧・解脱・解脱見慧成就し、復他人を敎へて此の法を行ぜ使め、自ら能く敎化し、説法に厭足無かりき」と。

爾の時世尊、諸比丘の與に微妙の法を説きたまひ、是の時諸比丘、佛の説法を聞き已つて、小しく左右に停り、便ち座從り起ち、佛を遶ること三匝して、便ち退いて去りぬ。爾の時舍利弗、世尊を去ること遠からざるに、結跏趺坐し、正身正意に繫念して前に在り。爾の時舍利弗便ち是の念を作さく、「今滿願子は快く善利を得たり。然る所以は、諸の梵行の比丘、其の徳を歎譽し、然も復世尊は其の語を稱可して、亦之に逆ひたまはず。我當に何れの日に彼の人と共に相見て、與に談論することを得べきや」と。

是の時滿願子、本生處に於て敎化周く訖り、漸々に人間を敎化し、世尊の所に來至し、頭面に足を禮し、一面に在りて坐す。爾の時世尊、漸く與に法を説きたまふ。是の時滿願子、説法を聞き已つて、即ち座從り起ち、頭面に足を禮し、便ち退いて去り、尼師壇を以て右肩の上に著け、晝闇園中に往詣す。爾の時一比丘有り、遙に滿願子、尼師壇を以て右肩の上に著け、彼の園中に至るを見、見已つて即ち舍利弗の所に往至し、舍利弗に白して言く、「世尊の常に歎じたまふ所の滿願子、方に如來の所に至り、佛從り法を聞き、今園中に詣る。尊者宜しく是れ時を知るべし」と。

是の時舍利弗、比丘の語を聞き、即ち座從り起ち、尼師壇を以て右肩の上に著け、彼の園中に往

は、衆生の類の心の所念是れなり。晝日火然たりとは、身・口・意に造る所の行是れなり。婆羅門とは是れ阿羅漢なり。智者とは是れ學人なり。山を鑿つとは精進の心是れなり。刀とは智慧是れなり。負物とは是れ五結なり、山とは是れ憍慢なり。蝦蟇とは瞋恚の心是れなり。肉聚とは貪欲是れなり。枷とは五欲是れなり。二道とは疑是れなり。樹枝とは是れ無明なり。龍とは是れ如來・至眞・等正覺是れなり。彼の天の說く所の其の義是の如し。汝今當に熟ら思惟すべくんば、久しからずして當に有漏を盡すべし」と。爾の時迦葉、如來の是の如きの敎へを受け、閑靜の處に在りて自ら修行し、族姓子の鬚髮を剃除し、出家學道する所以の、梵行を修めんと欲し、生死已に盡き、梵行已に立ち、所作已に辦じて、更に復胎を受けず、如實に之を知る。爾の時迦葉便ち阿羅漢を成じぬ。爾の時迦葉、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

十

[三七]聞くこと是の如し。一時佛、羅閱城迦蘭陀竹園所に在し、大比丘衆五百人と俱なりき。[三八]滿願子も亦五百の比丘を將ひ、本生處に遊びぬ。爾の時世尊、羅閱城に於て九十日夏坐し已つて、漸々に人間に在りて遊化し、舍衞城中祇樹給孤獨園に來至したまひぬ。爾の時衆多の比丘、各人間に散在し亦世間の所に來至し、到り已つて頭面に足を禮し、一面に在りて坐しぬ。

爾の時世尊、諸比丘に問ひたまはく、「汝等何處に在りて夏坐を爲せしや」と。諸比丘對へて曰さく、本所生の處に在りて夏坐を受けぬ」と。世尊告げて曰はく、「汝等所生の處の比丘の中、能く自ら阿練若を行じ、復能く阿練若を稱譽し、自ら乞食を行じ、復他人を敎へて乞食を行ぜ使めて、時宜を失はず、自ら補衲衣を著け、復他人を敎へて補衲衣を著け使め、自ら知足を修め、亦復知足の行を歎譽し、自ら少欲を行じ、亦復少欲の行を歎說し、自ら閑靜の處を樂しみ、復他人を敎へて閑靜の處に在り、自ら其の行を守り、復他人を敎へて其の行を守ら使め、已身戒具清淨にして、復他

【三七】 M. 24 Rathavinita.「中阿含經」第九經「七車經」(卷二)。

【三八】 滿願子(Mantāpiputta)。佛弟子中說法第一の稱あり、憍陳如の甥にあたる。具には富樓那滿願子(Puñña mantāniputta)マンターニの子なる富樓那の義。

山を鑿つ時に當り、必ず當に[二九]蝦蟇を見るべし。今當に蝦蟇を捨つべし。汝今當に山を鑿つべし。山を鑿つ時に當りて、當に[三〇]肉聚を見るべし。已に肉聚を見れば、當に之を捨離すべし。汝今當に山を鑿つべし。山を鑿つ時に當り、當に[三一]枷を見るべし。已に枷を見れば、便ち之を捨離せよ。汝今當に山を鑿つべし。已に山を鑿てば當に[三二]二道を見るべし。已に二道を見れば、當に之を捨離すべし。汝今當に山を鑿つべし。已に山を鑿てば、當に[三三]樹枝を見るべし。已に樹枝を見れば、當に之を捨離すべし。汝今當に山を鑿つべし。已に山を鑿てば當に[三四]龍を見るべし。已に龍を見れば共に語ること勿れ。當に自ら歸命し、慕ふて所を得令むべし。比丘、當に善く此の義を思念すべし。設し解らずば、便ち舍衞城に往至し、世尊の所に到りて此の義を問ひまつれ。若し如來にして所説有らば、善く念じて之を行ぜよ。然る所以は、我今亦、人・沙門・婆羅門・魔若しは魔天の能く此の義を解る者有るを見ず、如來及び如來の弟子、若しは我從り聞きしを除く』と。是の時迦葉天に報へて曰く、「此の事甚だ佳なり」と。

爾の時迦葉、清旦世尊の所に至り、到り已つて頭面に足を禮し、一面に在りて坐し、此の因緣を以て具に世尊に白す。爾の時迦葉世尊に問ひて曰さく、「今當に如來に義を問ひまつるべし。天の所説は何の趣向する所ぞや、何を以ての故に舍は夜烟有りて、晝は便ち火然たるや、何を以ての故に名けて婆羅門と爲すや、何を以ての故に名けて智者と爲すや。又山を鑿つと言ふは其の義何の趣向する所なるや、刀と言ふは亦解せざる所なり。何を以ての故に名けて負物と爲すや、又山と言ふは其の義云何、何を以ての故に復蝦蟇と言ふや、何を以ての故に復肉聚と言ふや、何を以ての故に、復枷と言ふや、何を以ての故に復二道と言ふや、樹枝の義其の義云何、何を以ての故に龍と名くるや」と。世尊告げて曰はく、「舍とは卽ち是れ形體なり。四大色の所造にして、父母の血脈を受けて漸々に長大し、恒に當に養食に乏しきこと有ら令めざるべし。是れ[三五]分散の法なり。[三六]夜烟有りと



【二九】巴利文には dvidhāpatha(刺叉)となる。
【三〇】巴利文には caṅgavāra(箱)。
【三一】巴利文には kumma(龜)。
【三二】巴利文には asisūna(屠牛者の劍)。
【三三】巴利文には maṁsapesi(肉片)。
【三四】龍(Nāga)。
【三五】分散の法とは、やがてこわれゆくもの。
【三六】巴利文によれば、「晝になせしことを夜に於て種々考ふることを夜烟るといひ、夜種々に考へしことを晝に於て身に口に行ふを晝燃ゆ」といふ。

るは亦快からず哉」と。爾の時世尊、彼の比丘の心中の所念を知りたまひ、彼の比丘に告げて曰はく、「今如來の前に在りて是の念を作すこと勿れ、然る所以は、轉輪聖王は七寶を成就し、四神足有りて能く及ぶ者無しと雖も、猶三惡之趣地獄・畜生・餓鬼の道を免れず。然る所以は、轉輪聖王は四禪・四神足を得ず、四諦を得ず。此の因緣に由つて復三惡趣に墮す。人身甚だ得難しと爲し、八難に遭値して出づることを求むるも甚だ難く、正しく國中に生ずることも亦復易からず。善良の友を求むるも亦復易からず、善知識と相遇ふことを欲するも亦易からず。如來の法中に從つて學道せんと欲することも亦復遇ひ難く、如來の出現甚だ遭ふ可からず。演ぶる所の法教も亦復是の如し。四眞諦及び四非常を解ること、實に聞くことを得可からず。轉輪聖王は此の四法に於て亦究竟することを得ず。若し比丘、如來世に出現する時、便ち此の七寶有りて世間に出現せん。如來の七覺意寶は至邊究竟にして、天人の譽むる所なり。比丘今日善く梵行を修め、此の現身に於て苦際を盡くすことを得るに、此の轉輪聖王の七寶を用ふる乎」と。爾の時彼の比丘、如來の是の如きの教へを聞き、閑靜之處に在りて道教を思惟し、族姓子の鬚髮を剃除し、出家學道する所以の無上の正業を修めんと欲し、生死已に盡き、梵行已に立ち、所作已に辦じて更に復有を受けず、如實に之を知り、爾の時彼の比丘、便ち阿羅漢を成ぜり。爾の時彼の比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

## 九

〔二三〕聞くこと是の如し。一時尊者〔二四〕童眞迦葉、舍衛國〔二五〕晝闇園中に在り。是の時迦葉夜半に經行す。爾の時天有り、迦葉の所に來至し、虛空中に在りて、迦葉に語げて言く、「比丘、當に知るべし、『此の〔二六〕舍は夜便ち烟有り、晝日火然たり』と、婆羅門智者に語げて曰へり。『汝今刀を持し、山を鑿てよ、山を鑿つ時に當つて、必ず當に〔二七〕負物有るを見るべし。當に之を拔濟し、汝重ねて山を鑿つべし。山を鑿つ時に當り、必ず當に〔二八〕山を見るべし。汝今當に山を捨つべし。汝今當に山を鑿つべし。

〔二三〕M. 23. Vammika.
〔二四〕童眞迦葉（Kumārakassapa）。童子迦葉ともいひ、佛弟子中善說第一と稱せらる。
〔二五〕晝闇園（Andhavana 暗林）。
〔二六〕舍、巴利文には vammika（蟻垤）。
〔二七〕負物、巴利文には laṅgī（閂）。
〔二八〕巴利文には uddhumāyika（水泡）となる。

進めば便ち進む。是の如く比丘、轉輪聖王は此の典兵寶を成就す。比丘當に知るべし、轉輪聖王は此の七寶を成就するなり」と。

是の時彼の比丘、世尊に白して言さく、「轉輪聖王は云何が四神足を成就して、快く善利を得るや」と。佛比丘に告げたまはく、「是に於て轉輪聖王は顏貌端正にして世の希有なり。世人に出過すること、猶し彼の天子に能く及ぶ者無きがごとし。是れを轉輪聖王、此の第一神足を成就すと謂ふなり。復次に轉輪聖王は聰明にして世を蓋ひ、事として練らざるは無し。人中の雄猛なり。爾の時智慧の豐かなること此の轉輪聖王に過ぐるもの無し。是れを此の第二の神足を成就すと謂ふなり。復次に轉輪聖王は復疾病無く、身體康强にして、飮食す可き所自然に消化し、便利の患ひ無し。是れを比丘、轉輪聖王、此の第三の神足を成就すと謂ふなり。復、次に比丘、轉輪聖王は壽命極めて長壽にして計る可からず。爾の時人の命、轉輪聖王の壽に過ぐる無し。是れを比丘、轉輪聖王此の第四の神足を成就すと謂ふなり。是れを比丘、轉輪聖王に此の四神足有りと謂ふなり」と。

爾の時彼の比丘、佛に白して言さく、「若し轉輪聖王、命終の後、何處に生ずと爲んや」と。世尊告げて曰はく、「轉輪聖王は命終の後三十三天に生じ、壽天の千歲なり。然る所以は、轉輪聖王は自ら殺生せず、復、他人を敎へて殺生せざら使め、自ら竊盜せず、復他人を敎へて偸盜せざら使め、自ら淫泆ならず、復、他人を敎へて淫を行はざら使め、自ら妄語せず、復、他人を敎へて妄語せざら使め、自ら十善の法を行じ、復他人を敎へて十善を行ぜ使む。比丘、當に知るべし。轉輪聖王は此の功德に緣つて、命終の後三十三天に生ずるなり」と。

爾の時彼の比丘、便ち是の念を作さく、「轉輪聖王は甚だ貪慕なる可し。是れ人と言はんと欲せは、復是れ人に非らず。然るに其の實は天に非らずして、又天事を施行し、諸の妙樂を受け、三惡趣に墮せず。若し我今日、持戒勇猛にして、所有の福をして、將來の世に轉輪聖王と作ることを得使む

悅色を以て王の顏貌を視る。是の如く比丘、轉輪聖王は此の玉女の寶を成就するなり」と。是の時比丘、佛に白して言さく、「轉輪聖王は云何が居士寶を成就するや」と。世尊告げて曰はく、「是に於て比丘、轉輪聖王の世に出現する時、便ち此の居士寶有りて世間に出現す。長からず、短からず、身體紅色にして、高才にして智達し、事として開かざるは無し、又天眼通を得たり。

是の時居士、王の所に來至し、王に白して言さく、「唯、願くは聖王、延壽窮り無からんことを。若し王にして金銀珍寶を須ひんと欲せば、盡く當に供給すべし』と。是の時居士天眼を以て觀じ、寶藏の有る者、寶藏の無き者皆悉く之を見、王の所須有る寶は隨時給施す。是の時轉輪聖王、彼の居士を試みんと欲し、時に便ち此の居士を將ひて水を度り、未だ彼の岸に至らざるに、便ち居士に語げて言く、『我今金銀珍寶を須ひんと欲す。正しく爾り、便ち辦ぜよ』と。長者報へて曰く、『前に岸上に至れ、當に供給すべし』と。轉輪聖王言く、『我今此の間に寶を須ふ。岸上に至りて須ひず』と。是の時居士卽ち前んで長跪叉手して水に向ふ。尋いで時に水中に七寶涌出す。是の時轉輪聖王、彼の長者に語ぐらく、『止みなん、止みなん、居士、更に寶を須ひずと。是の如く比丘、轉輪聖王は此の居士寶を成就するなり』と。

是の時比丘、佛に白して言さく、「轉輪聖王は云何が典兵寶を成就するや」と。世尊告げて曰はく、「是に於て比丘、轉輪聖王世に出現する時、便ち此の寶有りて、自然に來應す。聰明にして世を蓋ひ、豫じめ人の情を知り、身體好色なり。轉輪聖王の所に來至し、聖王に白して言く、「唯、願くは聖王、快く自ら娛樂せよ。若し聖王兵衆を須ひんと欲せば、正に念ぜよ、給辦せん。進止の宜、時節を失はじ』と。是の時典兵寶、王の所念に隨ひて兵衆を雲集して王の左右に在り。是の時轉輪聖王、典兵寶を試みんと欲す。是の時便ち是の念を作さく、『我兵衆をして正しく爾く雲集せ使めん』と。尋いで時に兵衆、王の門外に在り。若し轉輪聖王、意に兵衆をして住ら使めんと欲せば、便ち住り、

日初めて出でんと欲する（時）、此の象寶に乘りて、四海の外に遊び、人民を治化す。是の如く轉輪聖王は象寶を成就するなり」と。

是の時比丘、世尊に白して言さく、「轉輪聖王は云何が馬寶を成就するや」と。世尊告げて曰はく、「轉輪聖王世に出現する時、是の時馬寶西方從り來る。毛衣極めて青く、尾毛朱光にして、行くに移動せず。能く虛空を飛在して、罣礙せ所るゝ無し。見已りて極めて喜悅を懷き、『此の馬寶は實に殊妙爲り、今當に之を役すべし。又體性良善く、暴疾有ること無し。吾今當に此の馬寶を試むべし』と。是の時轉輪聖王、卽ち此の馬に乘り、四天下を經て人民を治化し、還來して王の治處に至る。是の如く比丘、轉輪聖王は馬寶を成就するなり」と。比丘佛に白して言さく、「復何の緣を以て珠寶を成就する乎」と。世尊告げて曰はく、「是に於て比丘、轉輪聖王の世に出現する時、是の時珠寶東方從り來る。八角四面有り。火光有りて長さ一尺六寸なり。轉輪聖王見已つて便ち是の念を作さく、『此の珠寶は極めて殊妙爲り、吾今當に之を試むべし』と。是の時轉輪聖王、夜半に悉く四部の兵を集め、此の摩尼寶を以て高幢の頭に擧著す。是の時光明彼の國界を照らすこと十二由旬なり。爾の時城中の人民の類、此の光を見已つて、各々自ら相謂ひて言く、『日今已に出でたり、家事を理む可し』と。是の時轉輪聖王、殿上に在りて、普く人民を見、已に還つて宮中に入る。是の時轉輪聖王、此の摩尼を持し、宮內に擧著し、內外悉く明るく周遍せざるは靡し、是の如く比丘、轉輪聖王は此の珠寶を成就するなり」と。

爾の時比丘、佛に白して言さく、「轉輪聖王は云何が玉女寶を成就するや」と。世尊告げて曰はく、「比丘當に知るべし。若し轉輪聖王世に出現する時、自然に此の玉女寶の現ずること有り、顏貌端正にして面桃華の色の如く、長からず、短からず、白からず、黑からず、體性柔和にして卒暴を行ぜず、口氣憂鉢華香を作し、身栴檀香を作し、恒に聖王の左右に侍從して時節を失はず。常に和顏

て曰はく、「是の時轉輪聖王、十五日清旦、沐浴して頭を洗ひ、大殿上に在りて玉女圍遶す。是の時輪寶の千輻具足するもの、東方從り來つて殿前に在り、光曜煌々として、人の造る所に非らず。地を去ること七仞にして、漸々に王の前に至りて住す。轉輪聖王見已つて便ち是の說を作さく、『吾舊人の邊從り聞く、轉輪王十五日に頭手を沐浴し、殿上に在りて坐す。是の時輪寶、自然に東方從り來り、王の前に在りて住す。吾今當に此の輪寶を試むべし』と。是の時轉輪王、右手を以て輪寶を執りて是の說を作さく、『汝今法を以て迴轉し、非法を以てすること莫かれ』と。是の時輪寶自然に迴轉し、又空中に在りて住す。轉輪聖王復四部の兵を將ひて、亦虛空中に在り。是の時輪寶迴つて東方に向ふ。轉輪聖王も亦寶輪に從つて去る。若し輪寶住する時、是の時轉輪聖王の將ひる所の衆、亦中に在りて住す。是の時東方の粟散王及び人民の類、遙に王の來るを見、皆悉く起ちて迎ふ。又金鉢を以て碎銀を盛り、銀鉢に碎金を盛りて轉輪聖王に奉上して、王に白して言さく、「善くぞ來れり、聖王、今此の方域は人民熾盛にして、快樂稱計す可からず。唯、願くは大王、當に中に於て治化すべし』と。是の時轉輪聖王、彼の民に告げて曰く、「汝等當に法を以て治化し、非法を以てすること莫かれ、亦殺生・竊盜・婬泆すること莫かれ、愼しみて非法もて治化すること莫かるべし」と。是の時輪寶復移りて、南方・西方・北方に至り、普く人民を綏化し、還來して王の治處に至り、地を去ること七仞にして住す。是の如く比丘、轉輪聖王は此の輪寶を成就するなり」と。

是の時比丘、世尊に白して言さく、「轉輪聖王は云何が象寶を成就するや」と。世尊告げて曰はく、「比丘當に知るべし。轉輪聖王は十五日中に於て、沐浴澡洗して大殿上に在り。是の時象寶南方從り來る。六牙有り、衣毛極めて白く、七處齊整して、皆金銀珍寶を以て之を挍飾し、能く虛空に飛行す。爾の時轉輪聖王、見已つて便ち是の念を作さく、『今此の象寶は極めて殊妙にして、世の希有爲り。體性柔和にして卒暴を行ぜず。我今當に此の象寶を試むべし』と。是の時轉輪聖王、清旦、

八

聞くこと是の如し。一時佛、舍衛國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「若し轉輪聖王世間に出現せば、爾の時便ち好地を選擇して城郭を起さん。東西十二由旬、南北七由旬にして、土地豐熟し、快樂言ふ可からず。爾の時彼の城の外郭、七重に圍繞し、七寶其の間に厠る。所謂七寶とは金・銀・水精・琉璃・琥珀・瑪瑙・琿璖なり。是れを七寶と謂ふなり。復七寶の塹有りて、彼を遶ること七重にして、極めて深廣爲り、人の踰え難き所なり。其の間に皆金沙有り。復七寶の樹有り、兼ねて其の間に生ず。然るに彼の樹復七種の色有り。金・銀・水精・琉璃・琿璖・瑪瑙・琥珀なり。然るに彼の城の中に周匝して七重の門有り。皆悉く牢固なり。亦七寶の所造あり。銀門には金の間を以て其の間に施し、金門には銀の間を以て其の間を錯り、水精の門には琉璃の間を以て其の間を錯り、琉璃の門には水精の間を以て其の間を錯り、瑪瑙の門に琥珀の間を以て其の間を錯り、甚だ快樂と爲し、實に言ふ可からず。然して彼の城中の四面に四の浴地有りて、一一の浴池は縱廣一由旬にして、自然に水有り、金・銀・水精の所造なり。銀池水は凍つて便ち銀寶を成じ、金池水は凍つて便ち金寶を成ず。然して轉輪聖王此れを以て用ふと爲すなり。

爾の時彼の地の城中に七種の音聲有り、云何が七と爲すや。所謂貝聲・鼓聲・小鼓聲・鐘聲・細腰鼓聲・舞聲・歌聲なり。是れを七種の聲と謂ふなり。爾の時人民此れを以て恒に相娛樂す。然して彼の衆生に寒溫有ること無く、亦飢渴無く、亦疾病無し。然して轉輪聖王世に在りて遊化し、此の七寶及び四神足を成就し、缺減有ること無く、終に亡失無し。轉輪聖王は云何が七寶を成就するや。所謂、輪寶・象寶・馬寶・珠寶・玉女寶・居士寶・典兵寶なり。復千子有りて、極めて勇猛爲り、能く外寇を降伏す。此の閻浮里地は刀杖を以て彼の國を化せざるなり。

爾の時一比丘有りて、世尊に白して言さく、「轉輪聖王は云何が輪寶を成就するや」と。世尊告げ

法覺意・精進覺意・喜覺意・猗覺意・定覺意・護覺意なり。是れを世尊、此の七覺意有りと謂ふは、正しく此れを謂ふ耳」と。爾の時尊者均頭、此の語を說き已つて、所有の疾患皆悉く除愈して、衆惱有ること無し。是の時均頭、世尊に白して言さく、「藥の中盛なるは所謂此の七覺意の法是れなり。藥の中盛なる者を言はんと欲せば、此の七覺意に過ぎざるなり。今此の七覺意を思惟して、所有の衆病皆悉く除愈せり」と。

爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「汝等此の七覺意の法を受持し、善く念じて諷誦し、狐疑有ること勿れ。佛・法・衆に於て、彼の衆生の類の所有の疾患皆悉く除愈す。然る所以は、此の七覺意は甚だ曉了すること難し。一切の諸法皆悉く了知し。一切の諸法を照明すること、亦良藥の一切の衆病を療治するが如く、猶し甘露食の厭足無きが如し。若し此の七覺意を得ずば、衆生の類は生死に流轉せん。諸比丘、當に方便を求めて七覺意を修むべし。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

## 七

〔三〕聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「若し轉輪聖王世間に出現する時、便ち七寶有りて世間に出現す。所謂輪寶・象寶・馬寶・珠寶・玉女寶・居士寶・典兵寶、是れを七寶と爲し、是れを轉輪聖王世に出現する時、便ち此の七寶有りて、世間に流布すと謂ふなり。若し如來世間に出現する時、便ち七覺意寶有りて世間に出現す。云何が七と爲すや。所謂念覺意・法覺意・精進覺意・喜覺意・猗覺意・定覺意・護覺意世に出現す。若し如來世間に出現する時、便ち此の七覺意寶有りて世間に出現するなり。是の故に諸比丘、當に方便を求めて、此の七覺意を修むべし。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

【三】 S. 46. 42 Cakkavatti. 「中阿含經」第五八經七寶經（卷一一）。宋、施護譯、「輪王七寶經」一卷。「雜阿含經」第七二一經（卷二七）。

當に閑居樹下に在りて、善く其の行を修し、懈怠有ること勿るべし。此れは是れ我教誨なり」と。

爾の時諸比丘、佛の所説を聞いて歡喜奉行しぬ。

六

三 聞くこと是の如し。一時佛、舍衛國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時に當り、尊者均頭、身に重患を抱き、床褥に臥在して自ら起居すること能はず。是の時均頭便ち念ずらく、「如來世尊は今日垂愍せ見れず、又重患に遭ひ、命在ること久しからざらん。醫藥に接せざればなり。又聞く世尊の言ひしに、「一人度せずば吾終に捨てず」と。然るに今獨り遺棄せ見る。將何ぞ苦なる哉」と。

爾の時世尊、天耳を以て、均頭比丘の是の稱怨を作すを聞きたまひぬ。是の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「汝等皆集り、均頭比丘の所に至つて、其の所疾を問へ」と。諸比丘對へて曰さく、「是の如し、世尊」と。世尊衆多の比丘を將ひ、漸々に均頭比丘の房に至りたまひぬ。是の時均頭・遙に如來の來りたまふを見、即ち自ら地に投ず。爾の時世尊、均頭に告げて曰はく、「汝今患ひを抱き、極めて篤重と爲すや、下床を須ひざれ、吾自ら座有り」と。爾の時世尊、均頭に告げて曰はく、「汝の患ふ所増すと爲んや、損すと爲んや、増損せざる乎。能く吾敎へを受くるに堪任すること有りや」と。是の時均頭比丘、佛に白して言さく、「弟子の今日患ふ所極めて篤し、但増有りて損すること無し、服する所の藥草、周遍からざるは靡し」と。世尊問ふて曰はく、「病を瞻視する者竟に是れ誰と爲すや」と。均頭白して言さく、「諸の梵行來り見て瞻視す」と。爾の時世尊、均頭に告げて曰はく、「汝今吾與に七覺意を説くに堪ふる乎」と。均頭是の時三たび自ら七覺意の名を稱説し、「我今如來のみ前に、七覺意の法を説くに堪任す」と。世尊告げて曰はく、「若し能く如來に向つて説くに堪任せば、今便ち之を説け」と。

是の時均頭、佛に白して言さく、「七覺意とは、何等を七と爲すや、所謂念覺意、如來の所説なり



處(Viññāṇañcāyatana)に到達すること。

【一八】 識處天、前項〔一七〕を見よ。

【一九】 無有處云々とは、第七識住にして、更に識無邊處と超越して、何ものも起生することなき無所有處(Ākiñcaññāyatana)に到達すること。

【二〇】 無有處天、前項〔一九〕を見よ。

【二一】 cf. S. 46. 16 Gilāna.

城郭に諸の穀米多く、外寇敢えて來り侵さゞるが如し。

復、次に比丘、四增上心の法を思惟して、亦脱漏せず。是れを比丘、此の第五の法を成就すと謂ひ、弊魔波旬も其の便りを得ざること、彼の城郭に諸の薪草多く、外人來つて觸燒すること能はざるが如し。復次に比丘、四神足を得て、爲す所に難きこと無し。是れを比丘、此の第六の法を成就すと謂ひ、弊魔波旬も其の便りを得ざること、彼の城內に器杖の備具るが如し。復、次に比丘、具に能く一〇陰入界を分別し、亦復、十二因緣所起の法を分別す。是れを比丘、此の七法を成就すと謂ひ、弊魔波旬も其便りを得ざること、彼の城郭の主の聰明高才にして、收む可くんば則ち收め、捨つ可くんば則ち捨つるが如し。今此の比丘も亦復是の如く、具に知り、陰持入の諸病を分別す。若し比丘有りて、此の七法を成就せば、弊魔波旬は終に其の便りを得じ。是の故に諸比丘、當に方宜を求めて、陰持入及び十二因緣を分別し、次第を失はざるべくんば、便ち魔界を度して其の中に處らじ。是の如く比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

五

一一聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「我今當に一二七神止處を說くべし。汝等諦に聽いて善く之を思念せよ」と。諸比丘對へて曰さく、「是の如し、世尊」と。是の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「彼れ云何が名けて七神識住處と爲すや、所謂衆生、若干種の身想と(あり)、所謂人及び天なり。又復衆生、若干種身にして一想有り、所謂一三梵迦夷天なり。初めて世に出現す。又復、衆生一身にして若干種想あり。所謂光音天なり。又復衆生、一身にして一想あり、所謂一四遍淨天なり。又復衆生、一五無量の空あり、一六空處天なり。又復衆生、一七無量の識あり、一八識處天なり。又復衆生、一九無有處あり、二〇無有處天なり。是れを比丘、七識住處と謂ふなり。我今已に七識處を說けり。諸佛世尊の人民に施行し、接度す可き所、今日已に辦せり。

【一〇】陰入界とは、五陰十二入、十八界のこと。陰持界に同じ。前出。

【一一】A. VII. 41 Citta.

【一二】七神止處は、又七識住、七神識住處ともいひ、果報によつて生を受け心の安住する七處にして、識卽ち精神狀態を七分して三界の有情に配當せしもの。

【一三】梵迦夷天(Brahmakāyikadeva)。色界初禪天の通名、梵天のこと。七識住の第二、卽ち種々の身と一想とを有するものは、初めて此の天に生れし神々なり。梵天をみよ。

【一四】遍淨天(Subhakiṇṇadeva)。色界第三禪天の第三、この天界は樂しみの感覺最も勝れ、遍く淸らかなればこの名あり。

【一五】無量の空云々は、第五識住にして、一切の色想を超越し、障礙の想を滅し、種々想を付け、空間の無限のみの思惟せらるゝ空無邊處(Ākāsānañcāyatana)に到達すること。

【一六】空處天、前項【一五】を見よ。

【一七】無量の識云々、第六識住にして、空無邊處を超越して「識は無限なり」と識の無限のみの思惟せらるゝ識無邊

と爲すや、然るに彼の城郭極めて高峻爲り、修治齊整す。是れを彼の王先づ第一の法を成就すと謂ふなり。復、次に彼の城の門戸牢固なり。是れを彼の城第二法を成就すと謂ふなり。復次に彼の城の外塹極めて深く且つ廣し。是れを此の城第三の法を成就すと謂ふなり。復、次に彼の城の内に、諸の穀米多く、倉庫に盈滿す。是れを彼の城第四の法を成就すと謂ふなり。復、次に彼の城、諸の薪草饒し。是れを彼城第五の法を成就すと謂ふなり。復、次に彼の城諸の器杖多く、諸の戰具を備ふ。是れを彼の城六法を成就すと謂ふなり。復、次に彼の城主極めて聰明高才にして、豫め人の情を知り、鞭つ可くんば則ち鞭ち、治す可くんば則ち治す。是れを彼の城七法を成就し、外境來り侵すこと能はずと謂ふなり。是れを比丘、彼の城の國主、此の七法を成就せば、外人嬈近することを得ずと謂ふなり。

此れ比丘も亦復是の如し。若し七法を成就せば、弊魔波旬其の便りを得じ。云何が七と爲すや、是に於て比丘、戒律成就し、威儀具足し、小律を犯すも尚畏る。何に況んや大なる者をや。是れを比丘、此の第一の法を成就せば、弊魔其の便りを得じと謂ふこと、猶し彼の城高廣にして極めて峻しく、沮壞す可からざるが如し。復、次に比丘、若し眼色を見るも想著を起さず、亦、念を興さず、眼根を具足して缺漏する所無く、眼根・耳聲・鼻香・舌味・身觸・意法を護ること亦復是の如く、亦想を起さず、意根を具足して亂想無く、具足して意根を擁護せん。是れを比丘、此の第二法を成就すと謂ひ、弊魔波旬は其の便りを得ざること。彼の城郭の門戸の牢固なるが如し。

復、次に比丘、多聞にして忘れず、恒に念じて正法道教を思惟し、昔經歴せし所を皆悉く備に知る。是れを比丘、此の第三法を成就すと謂ひ、弊魔波旬は其の便りを得ざること、彼の城郭の外塹極めて深く、且つ廣きが如し。復、次に比丘、諸の方便を多くし、所有の諸法、初めも善く、中も善く、竟りも善く、具足し清淨の梵行を修むることを得、是れを比丘、此の第四法を成就すと謂ひ、彼の

固ならず。彼の身・口・意に善を行じ、後復身・口・意に不善の法を行じ、身壞命終して地獄の中に生る。是れを此の人水を出でゝ還えり沒すと謂ふなり。彼れ何等の人か水を出でゝ觀看するや、是に於て或は人有つて信善根有り、身・口・意行に更に其の法を增益せず、自ら守りて住す。彼れ身壞命終して阿須倫中に生ぜん。是れを此の人、水を出でゝ觀ずと謂ふなり。彼れ何等の人か水を出でゝ住すとは、是に於て或は人有つて、信精進有り、三結使を斷じ、更に退轉せず、必ず究竟に至りて無上道を成す。是れを此の人水を出でゝ住すと謂ふなり。

彼、何等の人か水を測らんと欲するやとは、是に於て或は人有つて信根精進して、恒に慚愧を懷き、三結使を斷じ、婬・怒・癡薄く、此の世に來至して苦際を斷ず。是れを此の人、水を渡る者と謂ふなり。彼、何等の人か彼岸に至らんと欲するや。或は人有りて信根精進にして、下五結[八]を斷じ、阿那含を成じ、即ち彼に般涅槃して、更に此の世に來らず。是れを此の人彼の岸に至らんと欲する者と謂ふなり。何等の人か已に彼岸に至る者とは、是に於て或は一人有つて、信根精進にして慚愧を懷き、有漏を盡くして無漏を成じ、現法中に於て自ら娛樂し、生死已に盡き、梵行已に立ち、所作已に辦じて更に復胎を受けず、如實に之を知り、此の無餘涅槃界に於て般涅槃す。是れを此の人已に彼岸に渡る者と謂ふなり。是れを比丘、此の七人の水喩有りと謂ひ、汝等に向つて說くなり。諸佛世尊の應に修行し、人民を接度すべき所を今已に施行せり。當に閑靜處に在り、若しは樹下に在りて、當に坐禪を念じて懈怠を起すこと勿るべし。此れは是れ我の教誨なり」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

四

[九]聞くこと是の如し。一時佛、舍衛國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「聖王は遠國に在りて治化するに、七法成就せば、怨家盜賊の爲に擒獲せ所れざるなり。云何が七

【八】下五結とは、五下分結のこと。前卷索引をみよ。

【九】A. VII. 63 Nagara.「中阿含」經第三經「城喩經」(卷一)。

如似たり。復、次に賢聖の弟子にして、念じて護有り、自ら身に樂有るを覺え、諸の賢聖の求護する所の念具足して三禪に遊在するは、彼の樹にして雹節を生ずるに如似たり。復、次に賢聖の弟子にして、苦樂已に盡き、先きの愁憂無く、苦無く、樂無き護念淸淨の四禪に遊志するは、彼の樹の漸々に開敷するに如似たり。復、次に賢聖の弟子の、有漏を盡くし、無漏心解脫・智慧解脫を成じ、現法中に於て自ら娛樂し、生死已に盡き、梵行已に立ち、所作已に辦じて、更に復胎を受けず、如實に之を知るは、彼の樹の皆悉く花を敷くに如似たり。是の時賢聖の弟子の戒德の香、遍く四遠に聞こえ、稱譽せざる者無く、四月の中自ら相娛樂し、心四禪に遊び、行本を具足す。是の故に諸比丘、當に方便を求めて、戒德の香を成就すべし。是の如く比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

三

[七]聞くこと是の如し。一時佛、舍衛國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に說きたまはく、「我、今當に七事水喩の人を說くべし。亦是の如く、諦に聽け、諦に聽いて善く之を思念せよ」と。諸比丘對へて曰さく、「是の如し、世尊」と。世尊告げて曰はく、「彼れ云何が七事水喩にして、人に似ること、猶し人有つて水底に沒在するが如く、復、人有つて暫く水を出で〻還つて沒するが如く、復、人有つて水を出で〻觀看するが如く、復、人有つて頭を出して住するが如く、復、人有つて水中に於て行くが如く、復、人有つて水を出で〻彼岸に到らんと欲するが如く、復人有つて已に彼岸に到るが如し。是れを比丘、七事水喩の世に出現すると謂ふなり。

彼れ云何が人、水底に沒在して、出づることを得ざるや。是に於て或は一人有つて、不善の法其の體に遍滿し、當に劫數を經歷して、療治す可からざるべし。是れを此の人水底に沒在すと謂ふなり。彼れ何等の人か水を出で〻還つて沒するや。或は一人有つて信根漸く薄く、善法有りと雖も牢



【七】A. VII. 15 Udakūpama.「中阿含經」第四經「水喩經」（卷一）。失譯「鹹水喩經」一卷。

「三十三天の【四】晝度樹は、本縱廣五十由旬、高さ百由旬、東西南北蔭覆すること五十由旬なり。三十三天彼に在りて、四月自ら相娯樂す。比丘當に知るべし。或は是れ時有りて、彼の晝度樹の華葉凋落萎黃して地に在り。爾の時諸天此の瑞應を見、普く歡喜を懷き、欣びの情內發し『此の樹久しからずして、當に更に華實を生ずべし』と。比丘當に知るべし、或は是れ時有りて、彼の樹の華實皆悉く凋落捐棄して地に在り。是の時三十三天、倍、復歡喜し、自ら相謂ひて言く『此の樹は久しからずして、當に灰色と作るべし』と。比丘當に知るべし、復、數時を經歷して、彼の樹便ち灰色と作る。是の時三十三天、已に此の樹を見て灰色と作し、甚だ喜悅を懷き、自ら相謂ひて言く『今此の樹は已に灰色を作せり、久しからずして當に【五】羅網を生ずべし』と。是の時三十三天、此の晝度樹已に羅網を生ぜしを見『久しからずして當に【六】霍節を生ずべし』と。爾の時三十三天、見已つて復歡喜を懷き『此の樹今日已に霍節を生ぜり、久しからずして當に復開敷すべし』と。比丘、當に知るべし、三十三天已に此の樹の漸々に開敷するを見、各歡喜を懷き『此の樹久しからずして漸々に開敷し、久しからずして當に盡く華を著くべし』と。比丘當に知るべし。或は是れ時有りて、彼の樹普く悉く開敷し、皆歡喜を懷き『此の樹今日皆悉く華を著けたり』と。

爾の時此の香ひ風を逆へ、百由旬の內香を聞がざる者無し、爾の時諸天、四月の中彼に於て自ら相娯樂し、樂しみ計る可からず。此れも亦是の如し。若し賢聖の弟子にして、意に出家學道せんことを欲する時は、彼の樹の始めて、凋落せんと欲するに如似たり。復次に賢聖の弟子にして、妻と財とを捐棄て、信堅固を以て出家學道し、鬚髮を剃除するは、彼の樹葉の落ちて地に在るに如似たり。比丘、當に知るべし。若し賢聖の弟子にして、貪欲の想無く、不善の法を除き、歡喜を念持して、志初禪に遊ぶは、彼の晝度樹にして灰色を作すに似たり。復、賢聖の弟子にして、有覺有觀息み、內に歡喜有りて、其の一心を專らにし、無覺無觀、心二禪に遊ぶは、彼の樹にして羅網を生ずるに

【四】晝度樹（Pāricchatta-ka）、波利質多羅樹と音譯し、忉利天に生ふる樹。

【五】羅網、「中阿含經」には網と譯す。蕾なり。

【六】霍節、「中阿含經」には如鳥喙と譯す。蕾のふくらみ。

彼の人の上に出づ。比丘復二人有り、云何が二と爲すや、彼の一人比丘の所に至り、至心に法を聽き、彼の第二人は比丘の所に至らず、至心に法を聽かず。彼の至心に法を聽く者は、彼の人に於て最第一と爲す。比丘復二人有り、云何が二と爲すや、彼の一人有りて、能く法を觀察し、受持し、諷誦す、彼の第二人は受持し、諷誦すること能はず。彼の人にして受持し、諷誦する者は、此の人に於て上れ、最も第一と爲す、比丘復二人有り、云何が二と爲すや。彼の一人有りて、法を聞きて其の義を解し、彼の第二人は法を聞きて、其の義を解せず。彼の人にして、法を聞いて義を解する者は、此の人に於て最尊第一なり。比丘復二人有り、云何が二と爲すや、彼の一人有りて、法を聞き、法について法を成就す。彼の第二人は法を聞かず、法について法を成就せず。彼の人にして法について法を成就する者は、此の人に於て第一なり、比丘復二人有り、云何が二と爲すや。彼の一人、法を聞いて能く修行するに堪忍し、分別して正法を護持す。第二人は其の法を修行するに堪忍すること能はず。彼の能く法を修行する者は、此の諸人に於て最尊第一なること、猶し牛の酪有り、酪に由つて酥有り、酥に由つて醍醐有るが如く、最も第一と爲し、能く及ぶ者無し。此れも亦是の如く、若し人有りて能く修行する者は、此の人最も第一と爲し、能く及ぶ者無し。是れを比丘、人根を觀察すと謂ふなり。若し人有りて此れを了らずば、則ち比丘に非るなり。其れ比丘にして、法を聞き、其の義を分別する者を以て、此れを最上と爲すなり。是の如く比丘、人根を觀察せよ。若し比丘有りて七法を成就せば、現法中に於て快樂無爲にして、意欲漏を斷ずること、亦疑ひ有ること無し。是の故に比丘、當に方便を求めて、此の七法を成ずべし。是の如く比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

二

[三]聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、

【三】A. II. 65 Päricchatta-ka.「中阿含經」第二經「晝度樹經(卷一)」。宋、施護譯「圍生樹經」一卷。

時宜を知るなり。

云何が比丘、自ら能く己を修むるや。是に於て比丘、能く自ら己を知り、『我今此の見・聞・念・知有り、是の如きの智慧有り、行歩進止直に正法に隨ふ』と。若し比丘有りて、自ら智慧の宜しきを知り、出入行來する能はずば、此れ比丘に非るなり。其れ比丘にして、能く己を修め、進止の宜しきを以てせば、此れを名けて、自ら己の行を修むと爲すなり。是れを比丘、能く自ら己を知ると謂ふなり。云何が比丘、自ら止足を知るや。是に於て比丘、能く自ら睡眠・覺寤・坐臥・經行・進止の宜しきを調量し、皆能く止足を知る。若し比丘有つて、是れを知る能はずば、則ち比丘に非らざるなり。其れ比丘にして、能く此れを解了するを以ての故に、名けて知足と爲すなり。是の如きを比丘、名けて知足と爲すなり。

云何が比丘、大衆に入るを知るや、是に於て比丘、大衆を分別し『此れは是れ刹利種、此れは是れ婆羅門衆、此れは是れ長者衆、此れは是れ沙門衆なり』と、我當に此の法を以て、宜しく則ち、彼の衆中に適くべく、語る可く、默す可く、皆悉く之を知る。若し比丘有りて、衆に入るを知らずば、此れ比丘に非らざるなり。其れ比丘、大衆に入るを知るを以て、名けて衆に入るを知ると爲すなり。是れを比丘、大衆に入るを知ると謂ふなり。云何が比丘、衆人の根元を知るや。比丘當に知るべし。二人有り、云何が二と爲すや。彼、或は一人有りて、園中に往至し、比丘を親覲せんと欲す。彼の第二人は彼に至りて、比丘を觀見することを喜ばず。彼の人園中に至り、比丘を親覲せんと欲する者は、此人を最上と爲すなり。比丘復、二人有り、云何が二と爲すや、彼の一人、比丘の所に至ると雖も、然も其の(時)宜を問はず。彼の第二人も亦寺中に往至して比丘を見ずば、彼の寺に至るの人を最第一と爲すなり。比丘復、二人有り、云何が二と爲すや、彼の一人は比丘の所に至り、時宜を問訊し、彼の第二人は比丘の所に至りて、時宜を問訊せず。彼の人の寺に至る者は、最尊第一にして、

# 卷の第三十三

## 等法品第三十九[一]

一

[二]聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「若し比丘有りて七法を成就せば、現法中に於て樂を受くること窮り無く、漏を盡すを得んと欲せば、便ち能く之を獲ん。云何が七法と爲すや。是に於て比丘、法を知り、義を知り、時を知り、又能く自ら知り、復、能く足るを知り、亦復、衆中に入りて、衆人を觀察することを知る。是れを七法と謂ふなり。云何が比丘、法を知るや。是に於て比丘、法を知るとは、所謂、契經・祇夜・偈・因緣・譬喩・本末・廣演・方等・未曾有・廣普・授決・生經なり。若し比丘有りて、法を知らずば、十二部經を知らざらん。此れ比丘に非らざるなり。其れ比丘、能く法を解了するを以ての故に、名けて法を知ると爲す。是の如きは比丘、法を解了するなり。

云何が比丘、義を解了するや。是に於て比丘、如來の機趣を知り、深義を解了し、疑難する所無きなり。若し比丘有りて、義を解了せざる者は、此れ比丘に非らざるなり。其れ比丘、能く深義を知るを以ての故に、名けて義を解すと爲すなり。是の如きは比丘、能く義を分別するなり。云何が比丘、其の時宜を知るや。是に於て比丘、其の時節を知り、觀を修む可き時に、便ち觀を修め、止を修む可き時に、便ち止を修め、默す可きに、默を知り、行く可きに、行くを知り、誦す可きに、誦すを知り、前人に授く可きに、便ち前人に授け、語る可きに、語るを知る。若し比丘有りて、此れを知らずば、止觀・進止の宜しきを知らざらん。此れ比丘に非らざるなり。若し復、比丘にして、其の時節を知らば、時宜を失はじ。此れを名けて其の方宜に隨ふと爲すなり。是の如きは比丘、其の



---

【一】等法品以下莫畏品に至る三品は七法を明す。

【二】A. VII. 64 Dhammaññu. 「中阿含經」第一經善法經、(卷一)。吳支謙譯「七知經」一卷。

り、智慧多聞なり」と、我長夜に恒に此の念を生ずらく、『更に能く六師と共に論ずるもの有ること無し。唯、如來及び此の比丘尼有り』」と。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「汝等頗ふらくは、餘の比丘尼にして能く外道を降伏すること、此の比丘尼の如きを見る乎」と。諸比丘對へて曰さく、「不なり、世尊」と、世尊告げて曰はく、「諸比丘、我聲聞中第一の比丘尼にして、能く外道を降伏するものは、所謂輸盧比丘尼是れなり」と。爾の時諸比丘、佛の所説を聞いて歡喜奉行しぬ。

十二

聞くこと是の如し、一時佛、舍衛國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「六の細滑・更樂・入有り、云何が六と爲すや、所謂、眼・耳・鼻・舌・身・意入なり。是れを六入と謂ふなり。凡夫の人若し眼に色を見ば、便ち染著の心を起し、捨離すること能はず。彼已に色を見ば極めて愛著を起し、生死に流轉して解る時有ること無し。六情も亦復是の如く、染著の想意を起し、捨離すること能はず。是れに由つて流轉して解る時有ること無し。若しは世尊・賢聖の弟子は、眼色を見已つて染著を起さず、汚心有ること無く、卽ち能く此の眼の無常の法・苦・空・非身の法なることを分別す。六情も亦復是の如く、染汚の心を起さず、此の六情の無常・苦・空・非身の法を分別し、當に此れを思惟する時、便ち二果を獲、現法中に於て阿那含若しは阿羅漢を得ること、猶し人有りて、極めて飢え穀麥を修治し、揚治して淨から令め、取りて之を食し、飢渇を除去せんと欲するが如し。賢聖の弟子亦復是の如く。此の六情に於て汚露不淨を思惟せば、卽ち道跡を成じて無餘涅槃界に入らん。是の故に比丘、當に方便を求めて、此の六情を滅すべし。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所説を聞いて歡喜奉行しぬ。

増壹阿含經卷第三十二

布施し、持戒し、時に隨つて供給して、乏しきこと有ら令めざるも、亦復、此の福報無し」と。先比盧持言く、「言語有ること無く、亦言語の報ひ無く、唯、默然たるは快樂し」と。尼犍子曰く、「言語有り、亦言語の報ひ有り。沙門瞿曇も亦是れ人なり、我も亦是れ人なり。瞿曇知る所有れば、我等も亦知る所有り。沙門瞿曇に神足有らば、我も亦神足有り。若し彼の沙門にして一神足を現ぜば、我等當に二の神足を現ずべし。彼二の神足を現ぜば、我四の神足を現ぜん。彼四を現ぜば、我八を現ぜん。彼八を現ぜば、我十六を現ぜん。彼十六を現ぜば、我三十二を現じ、恒に增多せ使め、終に彼の爲に屈せず、與に力を角することを得るに足る。設し彼れ我等の論を受けずば、卽ち是れ彼の咎なり。人民聞き已れば復、供養せず、我等便ち供養を得ん」と。

是の如き時比丘尼有りて、此の語を聞いて云く、「六師一處に集在して、此の論本を生ず『沙門瞿曇は人の論を受けず、我等は勝つことを得るに足らん』」と。是の時輸盧尼比丘尼、虛空を飛在して彼の六師に向ひて此の偈を說かく、

我師は等倫無く、最尊にして過ぐる者無し　是れ彼の尊の弟子　名けて輸盧尼と曰ふ　汝設し
境界有らば　便ち我と論議せよ　我、當に事事に報ふべし　師子の鹿を掩ふが如し　且つ我尊
師を捨てゝ　本如來無くば　我、今比丘尼　能く外道を降すに足らん

と。是の比丘尼、此の語を說き已り、六師、尙仰いで顏色を視ること能はず。況んや與に論議せんをや。是の時毘舍離城の人民の類、遙に比丘尼の虛空の中に在りて、六師と共に論議し、然も六師の之に報ふること能はざるを見、各々稱慶歡喜すること無量なり。「六師今日彼れを屈折す」と。是の時六師極めて愁憂を懷き、毘舍離城を出でゝ去り、更に城に入らず。是の時衆多の比丘、輸盧比丘尼の、六師と共に論じて、勝つことを得しを聞き、聞き已つて世尊の所に至り、頭面に足を禮し、此の因緣を以て具に世尊に白せり。世尊諸比丘に告げたまはく、「輸盧比丘尼は大神足有り、大威神有

の如く阿難、當に是の學を作すべし」と。是の時世尊、諸の比丘衆を將ひて、毘舍離城に往詣し、城門中に住して、便ち此の偈を說きたまはく、

今以て如來を成じ　世間の最第一なり　此の至誠の語を持てば　毘舍離は他無けん　復至誠の法を以て　涅槃界に至ることを得ん　此の至誠の語を持てば　毘舍離は他無けん　復以て至誠の僧は賢聖の衆第一なり　此の至誠の語を持てば　毘舍離は他無けん　二足安隱を獲　四足も亦復然り　道を行くものも亦吉祥にして　來る者も亦復然り　晝夜に安隱を獲　觸嬈する者有ること無し　此の至誠の語を持てば　毘舍をして他無から使めん

と。如來此の語を說き已りたまふや、是の時羅剎・鬼神各自ら馳走して、其の所に安ぜず、更に復毘舍離城に入らず、諸有の疾病の人、各除愈を得たり。

爾の時世尊、彌猴池の側に遊在したまひ、國土人民承事して衣被・飲食・床臥の具・病瘦の醫藥を供養し、其の貴賤に隨つて、各、來つて佛及び比丘僧に餉し、亦八關齋を受けて時節を失はず。是の時毘舍離城內に六師有り、彼に在りて遊化す。所謂[二三]六師とは、不蘭迦葉[二四]・阿夷耑[二五]・瞿耶樓[二六]・波休迦栴[二七]・先比盧持[二八]・尼犍子[二九]等なり。是の時六師、一處に集在して是の說を作さく、「此の沙門瞿曇、此の毘舍離城に住し、人民の爲に供養せ所る、然るに我等人民の爲に供養せ所れず。我等往いて彼と與に論議す可し。何者か勝を得、何者か如かざらん」と。不蘭迦葉曰く、「諸有の沙門婆羅門は他語を受けず、方便して詰を致さん。此れ沙門・婆羅門の法に非らず。然して此の瞿曇沙門は他語を受けず、方便して難を致さん。我等那んぞ彼と論議することを得ん」と。阿夷耑言く、「施無く、受無く、亦與ふる者無く、亦、今世、後世無し。衆生の類も亦善惡の報ひも無し」と。瞿耶樓說いて曰く、「恒水の側に在りて人民を殺害すること稱計す可からず。肉を積むこと山を成し、恒水の左に在りて諸の功德を作さんも、此れに緣りて都て善惡の報ひ無し」と。波休迦旃言く、「正使ひ恒水の左に在りて

【二三】六師とは、釋尊時代に王舍城を中心として、居住し、多くの徒を擁し、博學を誇り、盛に詭辯を弄せし、著名なる六人の外道。六師外道といふ。
【二四】不蘭迦葉(Pūraṇakassapa)。
【二五】阿夷耑(Ajitakesakambali)。具には阿耆多翅舍欽婆羅。
【二六】瞿耶樓(Makkhali Gosāla)。具には末伽梨拘舍梨。
【二七】波休迦栴(Pakudhakaccāyana)。
【二八】先比盧持(Sañjaya Belaṭṭhiputta)。又刪闍耶毘羅梨子に作る。
【二九】尼犍子(Nigaṇṭha Nātaputta)、具には尼犍若提子といふ。これに六師外道の所說、漢巴との內容を異にす。

見、極めて歡喜を懷き、自ら勝ふること能はず。『我今太子、虛空に騰在すること、彼の飛鳥の如し』と、又辟支佛を成ぜしことを知らず、之に告げて曰く、『兒、今來下して此の殿上に至り、吾と共に相娛樂せよ』と。是の時阿難、彼の辟支佛、尋いで殿上に下りぬ。父母を度せんと欲せしが故に、時に王語げて曰く、『太子は今日何爲れぞ此の婇女の衣を著け、又鬚髮を剃りて、人と異ること有るや』と。辟支佛報へて曰く、『予の今著くる所は、甚だ奇雅と爲す。常人の習ふ所に非らず』と。時に王報へて曰く、『何に緣つてか更に宮中に至らざるや』と。辟支佛言く、『今自り已後復欲を習はず、亦此の五欲の中に樂しまず』と。時に王語げて曰く、「設し此の五欲の中に樂しまずば、吾後園の中に在りて住せよ』と。

爾の時國王、即ち自ら園中に至り、屋舍を造立せり。是の時辟支佛、父母を度せんと欲するが故に、便ち彼の園館の中に住し、王の供養を受け、數時を經歷し、便ち〔三〕無餘涅槃界に於て般涅槃す。王、舍利を取りて之を耶維し、彼處に於て大神祠を立てたり。是の時王、復餘日を以て園中に往至して觀看し、彼の神寺の彫落し、壞敗せしを見、見已つて便ち是の念を作さく、『此れは是れ我兒の神寺なり。今已に彫壞せり』と。是の時國王、即ち己の蓋を以て、彼の神寺の上を覆ふ。皆愛心の未だ盡きざるに由つてなり。是の故に阿難、是の觀を作すこと莫かれ、爾の時の善化王には即ち我身是れなり。時に兒を以ての故に一蓋寺上を覆ひしを以て、此の德本に緣つて、天人の間に流轉し、數百千變して轉輪聖王と爲り、或は帝釋・梵天と爲りぬ。我爾の時是の辟支佛を知らざりき。設し我是の辟支佛を知らば、其の德稱量す可からざらん。若し如來にして、無上正眞道を成ぜずば、更に二千五百反、轉輪聖王と作り、天下を治化せしなり。道を成ぜしを以ての故に、今、此の二千五百蓋有りて、自然に應現す。是れを阿難、此の因緣に緣つて如來は笑みし耳、諸佛に承事するの功德乃ち爾り、稱計す可からずと謂ふなり。是の故に阿難、當に方便を求めて、諸佛世尊を供養すべし。是



【三】無餘涅槃界、前卷索引無餘泥洹界に同じ。

と無し。便ち諸の山神・樹神・天地神明に向ひて、兒息有らんことを求めん』と。又、未だ數日を經ざるの中に、夫人懐妊す。是の時日光夫人、王に白して言さく、『大王當に知るべし、我、今娠めること有るを覺知す、宜しく自ら將護すべし』と。復八九月を經て、一男兒を生み、顔貌端正にして、面桃華の色の如し。夫人見已りて極めて歡喜を懷き、往いて大王に示す。王見て歡喜踊躍して自ら勝ふる能はず、及び八萬四千の夫人、生れし太子を見、亦各歡喜せり。是の時國王、諸の群臣・國師・道士を召して之を瞻相せ使め、又與に字を立て、世に稱傳せ使む。爾の時、相師前んで王に白して言さく『今太子を生めり。極めて端正にして世と異ること有りと爲す。其れ見ること有らん者は愛念せざるは莫し。今、當に立てゝ愛念と名くべし』と。自ら已に字を立て竟つて、各所在に還える。是の時國王、太子を愛念し、未だ曾て目を離さず。即ち太子の與に〔三〇〕三時講堂を起こし、復婇女を以て其の中に充滿し、王、太子と共に相娯樂す。爾の時太子便ち是の念を作さく、『此の中の婇女は頼ふらくは、常に存して世間を離れず、亦變易せざること有らん。然るに彼の衆中を觀ずるに、盡く皆無常にして、常に世に存する者有ること無く、悉く是れ幻僞にして、眞實有ること無し。人民の類をして愛樂に染著せ使むるは、皆之を遠離することを知らざるなり。我、今復此れを用ふと爲んや、捨てゝ道を學ぶ可し』と。

　是の時愛念太子、即ち其の日を以て鬚髮を剃除し、三法衣を著け、出家學道し、尋いで即ち其の夜に諸の結縛を斷じ、〔三一〕有集の法は皆是れ磨滅すと思惟し、辟支佛と成じ、成佛し已つて便ち此の偈を說かく、

　欲は無常の法　變易して實に定まること無し　此れを大患爲りと知り　獨り遊びて與俱ならず

と。是の時辟支佛、此の偈を說き已つて、即ち虛空に飛在し、彼の蜜絺羅城を遶ること三匝せり。是の時國王、高殿上に在りて、及び諸の宮人と共に相娯樂す。辟支佛の城を遶ること三匝するを

---

〔三〇〕三時講堂とは、夏、冬、雨時の三時殿のこと。夏、冬、雨時にそれらの宮殿に暑、寒、雨を避けるために建立す。

〔三一〕有集の法とは、集められしもの、作られしもの、生滅變化の支配を受けるものの意。

詣したまひぬ。爾の時阿闍世王、高樓の上に在りて、及び持蓋のもの一人を將ゆ。爾の時王、遙に世尊の彼の國界に向ひたまふを見、便ち自ら歎息し、左右に告げて曰く、「我等此の長者の爲に欺かる。我今復活きんことを用ふるが爲に、乃ち如來をして、此の國界を出さ使めまつりぬ」と。

是の時阿闍世王、五百蓋を持し、往いて世尊を送りまつりぬ、塵有りて身を坋しまつらんことを恐れてなり。羅閱城中に復五百の寶蓋有りて如來の後に從へり。是の時釋提桓因、世尊の心中の所念を知り、復、五百の寶蓋を以て、虛空中に在り、塵土有りて如來の身を坋しまつることを恐れてなり、及び諸の河神復、五百の寶蓋を持して、虛空中に在り。是の時毘舍離城の人民の類、世尊の今當に城に入りたまふべきを聞き、復、五百の寶蓋を持し、前んで世尊を迎へまつる。爾の時二千五百の寶蓋有りて、空中に懸在せり。爾の時世尊、此の蓋を見已つて、即ち時に便ち笑みたまへり。此れは是れ諸佛世尊の常法なり。設し如來の笑みたまふ時は、口中便ち五色の光有りて出づ。青・黃・白・黑・赤なり。侍者阿難、此の光明を見たてまつりて此の思惟を作さく、「此れは是れ何の緣ぞや、設し世尊にして笑みたまはゞ、必ず因緣有らん、事として虛ならずして爾り」と。

是の時阿難、長跪叉手して世尊に白して言さく、「如來は終に妄りに笑みたまはず。笑みたまはゞ必ず當に緣有るべし」と。世尊告げて曰はく、「汝、今此の二千五百の寶蓋の如來を供養するを見る乎」と。阿難佛に白さく、「唯、然り、之を見たてまつる」と。世尊告げて曰はく、「若し如來にして、出家學道せずば、當に二千五百世、轉輪聖王と作りて、人民を治化すべし。如來は出家學道せしを以て、更に此の寶蓋を受けず。阿難當に知るべし、過去久遠に王有り、善化治と名け、蜜絺羅王に在りて、法を以て治化し、接納するに方有りて、此の閻浮里地を統べ、令に從はざる者は靡し。爾の時彼の王に八萬四千の夫人婇女有り、皆是れ剎利種姓なり。第一の夫人を名けて日光と曰ひ、亦、兒息の繼嗣者無かりき。是の時彼の王、便ち是の念を作さく、『我今此の閻浮里地を統ぶ。然るに今兒息有るこ

に聖王を記したまふに虚妄無く、吐きたまふ所の言教終に二有ること無し。如來は言へり、『王は父王を取りて之を害せり、此の罪本に緣りて、當に阿鼻地獄の中に入りて、一劫を經歷すべし。復尋いで過を如來の所に改めしかば、今當に拍毬地獄の中に生ずべく、彼に於て命終して、當に四天王中に生ずべく、展轉して他化自在天中に生じ、還つて復次に四天王中に來生し、二十劫中三惡趣に墮せず、天人の中に流轉し、最後に身を受け、信堅固を以て出家學道し、名けて除惡辟支佛と曰ひ、世に出現せん』」と。王此の語を聞き已つて歡喜踊躍して、自ら勝ふること能はず、即ち大長者に告げて曰く、「汝、今何の願ひを欲求するや、吾當に之を與ふべし」と。長者王に白さく、「求願する所の者、王違は見ること勿れ」と。阿闍世王告げて曰く、「汝今但說け、何の願ひを欲求するや、吾之に違せじ」と。長者王に白さく、「毘舍離城の人民災ひに遇ひ、鬼神の爲に害せ所るゝことを稱計す可からず、如今羅刹・鬼神極めて暴虐爲り、唯、願くは大王、世尊を放つことを聽し、彼の國に至りて、彼の鬼神をして各々馳散せ令めよ。然る所以は、我等曾て聞くならく、『若し如來の至到りたまふ處は、天・龍・鬼神も其の便りを得じ』と。唯、願くは大王、世尊の彼の國界に至りたまふことを聽許せよ」と、王、此の語を聞き已つて便ち長歎息し、長者に告げて曰く、「此の願ひは極めて大なり。常人の及ぶ所に非らず。汝、若し當に吾に隨つて、城廓・村落・國財・妻子を求めば、吾、之を悋まず。我慮らざりき、汝、當に世尊を屈顧せんとは。然るに我先きに已に所求の願ひを許せり、今、汝の意に隨はん」と。是の時長者、極めて歡喜を懷き、即ち座從り起ち、辭退して去り、世尊の所に往至して言さく、「阿闍世王は已に世尊を放つことを許せり。彼の國界に詣りたまへ」と、世尊告げて曰はく、「汝並に前に在れ、如來は自ら當に時を知るべし」と。是の時長者、頭面に足を禮し、佛を遶ぐること三匝して、即ち退いて去りぬ。

是の時世尊、清旦諸の比丘衆を將ひ、前後に圍遶せられ、迦蘭陀竹園所を出でゝ、毘舍離城に往

世尊告げて曰はく、「恐懼を懐くこと勿れ、汝、今往いて王の所に至り、此の事を白して言へ、『如來は前きに王の身を記して終に虚妄無く、所言に二無し。父王を咎無くして取りて之を害せり。當に阿鼻地獄の中に生じ、一劫を經歴すべし。然るに今日以て此の罪を離れ、其の過罪を改め、如來の法中に於て信根成就せり。此の徳本に縁つて此の罪を滅することを得て、永く餘り有ること無く、今身に於て命終せば當に拍毬地獄の中に生ずべし。彼に於て命終して、當に四天王上に生ずべし。彼に於て命終して、燄天上に生じ、燄天上に於て命終して、兜術天・化自在天・他化自在天に生じ、復還つて、次いで以て四天王中に來至せん。大王、當に知るべし。二十劫中惡趣に墮せず、恒に人中に在りて、最後に身を受け、信堅固を以て鬚髪を剃除し、三法衣を著け、出家學道して、名けて除惡辟支佛と曰はん』と。彼の王此の語を聞き、便ち歡喜踊躍して自ら勝ふること能はず。亦當に汝に告げて是の語を作すべし。『汝の求むる所の要願に隨はん、吾之に違はず』と。是の時長者、世尊に白して言さく、「我、今當に世尊の威神を持して、彼の王の所に至るべし」と、即ち座從り起ち、頭面に足を禮して、彼の王の所に往きぬ。

爾の時阿闍世王、諸の群臣と與に高殿上に在りて、講論する所有り。是の時大長者、王の前に往至す。王遙に來るを見、群臣に語げて曰く、「若し當に此の人今此所に至るべくんば、汝等取りて何をか爲さんと欲するや」と。或は是の說を作す有り、「我等當に取りて之を五兀すべし」と。或は言く、「當に其の首を梟すべし」と。阿闍世王言く、「汝等催り取りて之を殺さば、吾を見んこと須ひざれ」と。

是の時長者、此の語を聞き已つて、極めて恐懼を懷き、尋いで時に高聲して是の語を作さく、「我は是れ佛の使する所なり」と。王、佛の音を聞き已つて卽ち座を下り、右膝を地に著け、如來の所に向ひ、彼の長者に問ふて曰く、「如來は何をか敎勅せ所れしや」と。長者報へて曰く、「世尊は前き

することを得使令め、一切衆生を捨てざること、母の子を愛するが如し。設し當に人有りて請じまつれば、如來は便ち來りたまはん。阿闍世王は終に留住めじ。誰か能く阿闍世王界に往至して、世尊に白して云く、『我等の城中、今此の困厄に遭ふ、唯、願くは世尊、慈愍し屈顧したまへ』といふに堪えんや」と。

爾の時大長者有り、名けて最大と曰ひ、彼の衆に集在せり。是の時諸人、長者に語げて曰く、「我等聞く、『沙門瞿曇の至到する處、諸邪・惡鬼の能く害する者無し。若し當に如來にして此の間に至りたまふべくんば、便ち能く此の災患を除きたまはん』と、汝、世尊の所に往き、具に此の意を白し、此の城廓をして永く存在することを得使む可し」と。是の時長者默然として衆人の語に從ひ、即ち座從り起ちて家の中に至り、到り已つて道路の行具を辦じ、諸の使人を將ひて世尊の所に往至し、頭面に足を禮し、一面に在りて坐す。爾の時長者、世尊に白して言さく、「毘舍離城中の人民、此の災患に遇ひ、人民の類の死亡する者多計なり。彼の城中一日の內、車を連らねて尸を載せて動くこと百數有り、唯、願くは世尊、垂愍接度して、彼の遺餘の人をして、安處に拔擇せ使め、無爲を得令めたまへ。又聞くならく「世尊の至到りたまふ處、天・龍・鬼神も敢えて嬈近せず』と、願くは屈顧を垂れて彼の城中に至り、彼の人民を度し、無爲に安處(せしめ)たまへ」と。世尊告げて曰はく、「我今已に羅閱城の阿闍世王の請を受く。諸佛世尊の言に二有ること無し。若し當に阿闍世王にして聽さ見れば、如來は當に往くべし」と。最大長者、佛に白して言さく、「此の事甚だ難し、阿闍世王は終に如來を放ちて彼の國に至ら使めざらん。然る所以は、阿闍世王は我國土に於て毫釐の善有ること無く、長夜に方便を求めて、彼の民を害せんと欲へり。設し當に阿闍世王にして我を見れば、即ち我を取りて殺さん、況んや復此の事を陳ぶることを得んや。若し當に彼の國の人民、鬼神の爲に害せ所ると聞かば、歡喜すること無量ならん」と。

然る所以は、此れ波斯匿王の所說なり。汝等亦當に四部衆の與に、廣く其の義を演ぶべし。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

十一

[一九] 聞くこと是の如し。一時佛、羅閱城迦蘭陀竹園所に在し、大比丘衆五百人と倶なりき。爾の時阿闍世王、群臣に告げて曰く、「汝等速に羽寶の車を駕せ、吾往いて世尊を見たてまつらんと欲す」と是の時群臣、王の教勅を受け、卽ち羽寶の車を駕し、前んで王に白して言さく、「嚴駕已に辦ぜり、王、宜しく時を知るべし」と。時に王、寶羽の車に乘り、世尊の所に往至し、頭面に足を禮し、一面に在りて坐す。爾の時阿闍世王、世尊に白して言さく、「唯、願くは世尊、我請を受け、羅閱城に在りて、九十日夏坐したまへ」と。爾の時世尊、默然として王の請を受けたまふ。是の時王、世尊の默然として請を受けたまひしを見、卽ち座從り起ち、頭面に足を禮し、便ち退いて去りぬ。

是の時阿闍世王、時に隨つて衣被・飲食・床臥の具・病瘦の醫藥を供養しぬ。爾の時毘舍離城に鬼神興盛し、人民の死亡するもの、稱計す可からず、一日の中死する者百數にして、鬼神羅刹其の中に充滿し、面目黃色にして、或は三四日を經て死する者あり。是の時毘舍離の人民恐懼し、皆一處に集りて共に論議すらく、「此の大城中極めて熾盛爲り、土人豐熟して富樂限り無く、彼の天宮釋の所住處の如し。然るに今日此の鬼神の爲に害せ所れ、盡く當に死亡し、丘荒すること、猶し山野の如くなるべし。誰か能く此の神德有りて、此の災患を却くるや」と。是の時人民各自ら相謂ひて曰く、「我等聞く、『沙門瞿曇有りて、至到る所は、衆邪・惡鬼嬈近することを得ず』と。若し當に如來此に來至すべくんば、此の諸の鬼神、各自ら馳散せん。但今日世尊は此の羅閱城に在りて住し、阿闍世の爲に供養せ所る。將恐らくは、此の間に來つて遊化したまはざらん」と。或は復是の說を作す有り、「如來は大慈悲有りて、衆生を愍念したまひ、遍く一切を觀じて未だ度せざる者をして、度

【一九】 Dhp. A. III. p. 436f.

めて和順爲り、法について法を成就し、戒成就し、智慧成就し、解脫成就し、解脫見慧成就す。是れ所謂聖衆とは四雙八輩、此れは是れ如來の聖衆にして敬ふ可く、貴ぶ可く、世間の大福田なり。是れを如來の第二の功德と謂ふなり。復、次に如來に四部の衆有り、施す所の行法皆之を習行し、更に重ねて受けて如來を觸擾せず。是れを如來の第三の功德と謂ふなり。復、次に世尊、我刹利の姓、婆羅門・居士・沙門の高才にして世を蓋ふもの、皆來り集つて論議するを見る。『我等は當に此の論を以て、往いて如來に問ひまつるべし。設し彼の沙門瞿曇にして、此の論に報へずば、則ち缺くるところ有るなり。設し當に能く報ふべくんば、我等當に其の善なることを稱すべし』と、是の時四姓、世尊の所に來至して此の論を問ひ、或は復、默然たる者有り。爾の時世尊、彼れの與に法を說きたまひ、彼れ法を聞き已つて、更に復事を問はず、況んや復論することを欲せんや、皆、如來に師事しまつらん。是れ第四功德なり。

復次に諸の六十二見、世人を欺誑して正法を解せず、此れに由つて愚を致す。然るに如來は能く此の諸の邪見の業を除き、其の正見を修めたまふ。是れを第五の如來の功德と謂ふなり。復、次に衆生、身・口・意に惡を行ず。彼、若し命終に、如來の功德を憶はゞ、三惡趣を離れて天上に生ずることを得ん、正使ひ極惡の人も天上に生ずることを得ん、是れを第六の如來の功德と謂ふなり。其れ衆生有りて如來を見たてまつらば、皆恭敬の心を起して之を供養しまつらん」と。

世尊告げて曰はく、「善い哉、善い哉、大王、乃ち能く如來の前に師子吼を作し、如來の功德を演ぶ。是の故に大王、常に當に心を興して、如來に向ふべし。是の如く大王、當に是の學を作すべし」と。爾の時世尊、王波斯匿の與に、微妙の法を說きて歡喜せ使令めたまひぬ。是の時大王、佛の說法を聞き已つて、卽ち座從り起ち、世尊の足を禮し、便ち退いて去りぬ。王の去りて未だ久しからざるに、佛、比丘に告げたまはく、「汝等當に此の法を持して供養し、善く諷誦して念ずべし。

て頭面に足を禮し、一面に在りて住す。是の時王、比丘に白して曰く、「如來は今所在爲るや、吾之を見たてまつらんと欲す」と。衆多の比丘報へて曰く、「世尊は此の講堂の中に在りて住したまへば、往いて之を見たてまつる可し。以て難しと爲すこと勿れ。王去らんと欲する時、徐に其の足を擧げて、聲有ら令めること無かれ」と。

是の時波斯匿王、還つて彼の侍人を顧視す。是の時侍人便ち是の念を作さく、「王、今獨り世尊と相見る。我此に住まる應し」と。是の時王、獨り世尊の所に往至す。爾の時世尊、天眼を以て、波斯匿王、門外に在りて立つを觀見たまふ。是の時世尊、卽ち座從り起ち、王の與に門を開きたまふ。王世尊を見たてまつり、頭面に足を禮し、自ら姓名を稱ふらく、「我は是れ波斯匿王なり」と、三たび自ら號を稱す。世尊告げて曰はく、「汝は今是れ王なり、我は今釋種にして出家學道せり」と。時に王、佛に白さく、「唯、願くは世尊、延壽無窮にして、天人をして安きを得使めたまへ」と。世尊告げて曰はく、「大王當に延壽無窮にして、法を以て治化し、非法を以てすること莫かるべから使めよ。諸有の法を以て化すれば、皆天上善處に生じ、正使命終の後は名稱朽ちずして、世人に傳へ所れん。云く、「昔國王有り、法を以て治化し、未だ嘗て枉ま有らず、設し人民有りて、此の王の境界に住し、王の功德を歎じ、思憶して忘れずば、王の身は天上に在りて、六事の功德を增さん。云何が六と爲すや、一には天壽、二に天色、三に天樂、四に天の神足、五に天豪、六に天光なり』と、是の故に大王、當に法を以て治し、非法を以てすること莫かれ。「我今日身中に此の功德有り應に天人の恭敬禮拜を受くべし」と。王佛に白して言さく、「如來の功德は人の禮拜を受く應し」と、世尊告げて曰はく、「汝今云何が言ふや『如來は人の禮拜を受く應し』」と。王、佛に言さく、「如來に六の功德有りて應に人の禮拜を受くることを得べし、云何が六と爲すや、如來の正法は甚だ和雅爲り、智者の修行する所なり。是れを『如來の初功德、敬ふ可く、事ふ可し』と謂ふなり、復、次に如來の聖衆は極

爾の時彼の女人、眼・耳・鼻・舌・身・意を觀じて、所有無しと了し、便ち閑靜の處に在りて此の法を思惟し、彼の女人復六情の主無きことを思惟し、四等心を得、身壞命終して梵天の上に生ぜり。比丘當に知るべし。若し無常想を思惟し、無常想を廣布せば、盡く欲・色・無色愛・憍慢・無明を斷じ、皆悉く除盡せん。是の故に比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

十

[一六]聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時波斯匿王[一七]御車人に告げて曰く、「汝今羽寶の車を辦ぜよ、吾外に出でゝ遊觀せんと欲す」と。是の時彼の人、王の教勅を受け、即ち羽寶の車を辦じ、前んで王に白して曰さく、「已に羽寶の車を嚴駕せり、王宜しく是れ時を知るべし」と。波斯匿王此の人を將ひて、便ち舍衞城を出で、彼の園觀に至る。諸の樹木皆聲響無く、亦人民無く、寂然として空虛なるを觀じ、見已つて便ち、如來の諸法の本を說きたまひしを憶ひぬ。是の時彼の人、王の後に在りて、扇を執りて王を扇ぎぬ。「此の園果の樹木皆聲響無く、亦人民無く、寂然として空虛なり。我今如來・至眞・等正覺を請じ、此に在りて遊化せんと欲す。然るに知らず、如來今所在爲ることを、我往いて覲たてまつらんと欲す」と。侍人報へて曰く、「釋種に村有り、名けて[一八]鹿堂と曰ふ。如來彼に在りて遊化したまふ」と。波斯匿王告げて曰く、「此の鹿堂は此を去ること遠近なるや」と。侍人王に白さく、「如來の住處は此を去ること遠からず。其の道里を計るに三由旬有り」と。是の時波斯匿王告げて曰く、「速に羽寶の車を辦ぜよ、我今如來を見たてまつらんと欲す」と。是の時彼の人、王の教へを受け已つて、即ち駕車を辦じ、前んで王に白して曰く、「車今已に駕せり、王、是れ時を知れ」と。王即ち車に乘りて彼の村に往詣す。

爾の時衆比丘の輩、露地に於て經行す。是の時王、車を下り、衆多の比丘の所に至り、到り已つ

【一六】 cf. M. 89. Dhammacetiya. 「中阿含經」第二一三經「法莊嚴經」(卷五九)。
【一七】 御車人、巴利文には Dīgha kārāyana。
【一八】 鹿堂、巴利文には medaḷumpa。

今正に眼色、又復口中優鉢華香を作し、身栴檀香を作すに著す。是の時辟支佛左手を舒べ、右手を以て眼を挑り、掌中に著して之に告げて曰く、『愛する所の者は此の謂ひなり。大妹、今日著すと爲すは何れの處ぞ。猶し癰疽の如く、一として貪る可きものなし。然して此の眼の中も亦不淨を漏らす、大妹、當に知るべし、眼は浮泡の如く、亦牢固ならず、幻僞にして眞に非らず、世人を誑惑す、眼・耳・鼻・口・身・意皆牢固ならず、欺詐にして眞ならず。口は是れ唾器にして不淨の物を出し、純ら白骨を含む。身は苦器爲り、磨滅の法爲り、恒に臭きを盛る處、諸虫の擾す所にして、亦畫瓶の如く、内に不淨を盛る。大妹、今日著を爲すは何れの處ぞ。是の故に大妹、當に其の心を專らにして思惟すべし。此の法は幻僞にして眞ならず。妹の如く眼色無常なりと思惟せば、所有の著欲の想自ら消滅せん。耳・鼻・口・身・意皆悉く無常なり。此れを思惟し已れば、所有の欲意自ら當に消除すべし。六入を思惟せば、便ち欲想無けん』と。是の時長者の女、便ち恐懼を懷き、即ち前んで辟支佛の足を禮し、辟支佛に白して言さく、『自今已去過ちを改め、善を修し、更に欲想を興さじ、唯、願くは悔過を受けたまへ』と、是の如く再三修行す。辟支佛報へて曰く、『止みなん、止みなん、大妹、此れ汝の咎に非らず、是れ我宿罪なり、此の形を受けしが故に、人をして欲を起すの情意を見せ使むるなり。當に熟ら眼を觀ずべし。此の眼は我に非らず、我も亦彼の有に非らず、亦我造りしに非らず、亦彼の爲せしに非らず。即ち無有の中從り生ぜり、已に有なれば便ち自ら壞敗す。亦往世・今世・後世に非らず、皆合會因緣に由る。所謂合會因緣とは、是れに緣つて是れ有り、此れ起れば則ち起り、此れ無くば則ち無し。此れ滅すれば則ち滅す。眼・耳・鼻・口・身・意も亦復是の如く、皆悉く空寂なり。是の故に大妹、眼色に著すること莫かれ、色に著せざるを以て、便ち安隱之處に至り、復情欲無し。是の如く大妹、是の學を作すべし』と。爾の時辟支佛、彼の女人の與に四非常の法を說き已つて、虛空に昇在し、十八變を現じ、所止に還歸へりぬ。

設し復人有りて、此の[一〇]六種の虫を取りて、一處に繫著して、東西南北を得ず。是の時六種の虫、復勤轉せずと雖も、亦離れざるが故に、此の内に處る。六情も亦復是の如し。各々所主有りて、其の事同じからず。觀ずる所別異にして、若しは好、若しは醜なり。爾の時比丘、此の六情を繫ぎて一處に著す。是の故に諸比丘、當に念じて、專精にして意錯亂せざるべくんば、是の時弊魔波旬終に其の便りを得ず、諸善功德皆悉く成就せん。是の如く諸比丘、當に念じて眼根を具足すべくんば、便ち二果を得、現法中に於て阿那含果を得、若しは阿羅漢果を得ん。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

九

聞くこと是の如し。一時佛、波羅㮈鹿野園中に在し、大比丘衆五百人と俱なりき。爾の時世尊諸比丘に告げたまはく、「當に無常想を思惟し、無常想を廣布すべし。已に無常想を思惟し、無常想を廣布せば、便ち欲愛・色愛・無色愛を斷じ、盡く憍慢・無明を斷ぜん。何を以ての故に、昔者久遠世の時辟支佛有り、善目と名け、顏貌端正にして、面桃華の色の如く、視瞻審諦にして、口は優鉢華香を作し、身は栴檀香を作す。

是の時善目辟支佛、時到つて衣を著け、鉢を持し、波羅㮈城に入つて乞食し、漸々に大長者の家に至り、門外に在りて、默然として立つ。是の時長者の女、遙に道士有りて、門外に在りて立つを見る、端正にして雙び無く、顏貌殊特にして世の希有なり、口は優鉢華香を作し、身は栴檀香を作す。便ち欲心を起し、彼の比丘の所に向ひ、便ち是の說を作さく、「汝今端正にして、面桃華の色の如く、世の希有たり。我今女人に處り、亦復端正なれば、共に合會す可しと雖も、然も我家中財多く、珍寶資財無量なり。然れば沙門と作ること甚だ易からずと爲す」。と。

是の時辟支佛問ふて曰く、「大妹よ、今何れの處に染著すと爲すや」と。長者の女報へて曰く、「我

敬す。然る所以は、斯の山中は純ら是れ眞人にして、雜錯の者有ること無し。若し彌勒佛にして、世に降神する時は此の諸の山名各々別にして異るも、此の仙人山は更に異名無し。此の賢劫の中、此の山名も亦異らず。汝等比丘、當に此の山に親近し、承事恭敬すべくんば、便ち當に諸の功德を增益すべし。是の如く比丘當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

## 八

[九]聞くこと是の如し。一時佛、舍衛國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「汝等專念にして自ら己れを修めよ。云何が當に專念すべきや。是に於て比丘、行く可きに行くを知り、擧動・進止・屈伸・俯仰・著衣の法則・睡眠・覺寤・或は語り、或は默するに皆悉く時を知る。若し復比丘心意專ら正しければ、彼の比丘欲漏未だ生ぜずば便ち生ぜず、已に生ずれば便ち之を滅し、未生の有漏をして生ぜざら使め、已生をして之を滅せ令め、未生の無明漏をして生ぜざら使め、已生をして之を滅せ令め、若し專念にして六入を分別して、終に惡道に墮せず。云何が六入を惡道と爲すや、眼此の色を覩じて、若しは好、若しは醜、好を見れば則ち喜び、惡を見れば喜ばず。若しは耳聲を聞き、若しは好、若しは醜、好を聞けば則ち喜び、不好を聞けば則ち喜ばず。鼻・口・身・意も亦復是の如く、猶し六種の虫各性行有りて各所行を異にして、同じからざるが如し。若し人有りて繩を取り、之を纏縛し、狗[一〇]・野狐[一一]・獼猴[一二]・鱣魚[一三]・蚖蛇[一四]・飛鳥[一五]を取りて、皆悉く之を縛し、共に一處に繫ぎて之を放つ。爾の時六種の虫、各性行有り。爾の時狗、意の中に村の中に赴趣かんと欲し、野狐は意の中に、塚間に趣赴かんと欲し、鱣魚は意の中に、水中に趣かんと欲し、獼猴は意の中に山林の間に向かんと欲し、毒蛇は意の中に、穴の中に入らんと欲し、飛鳥は意の中に空に飛在せんと欲す。爾の時六種の虫、各々性行有りて共に同じからず。

【九】S. 35. 206. Chapāṇa.

【一〇】狗(Kukkura)。
【一一】野狐(Sigāla)。
【一二】獼猴(Makkaṭa)。
【一三】鱣魚(Suṁsumāra)とは鰐のこと。
【一四】蚖蛇(Ahi)。
【一五】飛鳥(Pakkhi)。

く、

諸佛の未だ出でたまはざる時は　此の處は賢聖の居にして　自ら悟るの辟支佛此の山中に居り
き　此れを仙人山と名け　辟支佛の所居なり　仙人及び羅漢　終に空しく缺ける時無し。

と。

是の時諸の辟支佛、卽ち空中に於て、身を燒いて般涅槃を取りぬ。然る所以は、世に二佛の號無きが故に滅度を取りし耳。一商客中に終に二の導師無く、一國の中亦二王無し。一佛の境界に二の尊號無し。然る所以は、過去久遠に、此の羅閱城中に王有り、喜益と名けぬ。彼恒に地獄の苦痛を念じ、亦餓鬼・畜生の痛を念ぜり。爾の時彼の王、便ち是の念を作さく、『我今恒に地獄・畜生・餓鬼の苦痛を憶ふ。我今宜しく更に此の三惡道の中に入るべからず。今宜しく盡く國王の正位、妻子僕從を捨て信堅固を以て、出家學道すべし』と。爾の時大王喜益、此の衆苦を厭ひ、卽ち王位を捨て、鬚髮を剃除し、三法衣を著け、出家學道して空閑の處に在りて、自ら己を剋し、五盛陰を觀じ、無常を觀了しぬ。所謂『此れは色、此れは色の集、此れは色の盡、痛・想・行・識も亦復是の如く、皆悉く無常なり』と、當に此の五盛陰を觀ぜし時、『諸の集む可き法は　盡く是れ滅法なり』と、此の法を觀じ已つて、然る後に辟支佛道を成じぬ。是の時喜益辟支佛、已に道果を成じて、便ち此の偈を說かく、

我地獄の苦　畜生の五道の中を憶ひ　之を捨てゝ今學道し　獨り逝いて憂ひ無し。

と。

是の時此の辟支佛、彼の仙人山中に在り。比丘當に知るべし。此の方便を以て知る、此の山中に恒に神通の菩薩・得道の眞人有ることを。仙道を學ぶ者は其の中に居る。是の故に名けて仙人の山と曰ひ、更に異名無し。若し如來にして世に出現せざる時は、此の仙人山中の諸天、恒に來つて恭

# 卷の第三十二

## 力品第三十八の二

### 七

[一]「聞くこと是の如し。一時佛、羅閱城耆闍崛山中に在し、大比丘衆五百人と倶なりき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「汝等此の靈鷲山を見る乎」と。諸比丘對へて曰さく、「唯、然り、之を見る」と。「汝等當に知るべし。過去久遠世の時、此の山に更に異名有りき、汝等復此の[二]廣普山を見る乎」と、諸比丘對へて曰さく、「唯然り、之を見る」と。「汝等當に知るべし、過去久遠に、此の山に更に異名有りと、今と同じからざりき。汝等[三]白善山を見る乎」と。諸比丘對へて曰さく、「唯然り、之を見る」と。「過去久遠に此の山に更に異名有りて、今と同じからざりき。汝等、頗ふらくは、此の[四]負重山を見る乎」と、諸比丘對へて曰さく、「唯然り、之を見る」と。「汝等頗ふらくは、此の[五]仙人掘山を見る乎」と。諸比丘對へて曰さく、「唯然り、之を見る」と。「此の山は過去久遠も亦此の名と同じく、更に異名無かりき。然る所以は、此の仙人山に、恒に神通の菩薩、得道の羅漢、諸の仙人の所居の處有り。又辟支佛も亦中に在りて遊戲せり。我今當に辟支佛の名號を說くべし。汝等諦に聽いて善く之を思念せよ。辟支佛有り、[六]阿利吒・[七]婆利吒・審諦童辟支佛・[八]善觀辟支佛・究竟辟支佛・聰明辟支佛・無垢辟支佛・帝奢念觀辟支佛・無滅無形勝・最勝極大極雷雷光明辟支佛と名く。此れ比丘、諸の辟支佛は、若しは如來の出世せざる時、爾の時此の山中に、此の五百の辟支佛有りて、此の仙人山中に居しぬ。如來兜術天上に在りて、來生せんと欲せし時、淨居天子自ら來つて此に在つて相告ぐらく、『普く世間に勅して、當に淨土を淨むべし。却後二歲にして、如來は當に世に出現したまふべし』と。是の時諸の辟支佛、天人の語を聞き已つて皆虛空に騰在して、此の偈を說

【一】 M. 116. Isigiri, Mtu. p. 357.
【二】 廣普山 (Vepulla pabbata)、音譯して毘布羅山といふ。
【三】 白善山(Paṇḍava pabbata)。
【四】 負重山(Vebhāra pabbata)。
【五】 仙人掘山(Isigiri pabbata)。
【六】 阿利吒(Ariṭṭha)。
【七】 婆利吒(Upariṭṭha)。
【八】 善觀(Sudassana)。

は、此の因縁に縁つて殺害すること限り無し。後に誓願を作して、佛に値ふことを願欲し、今解脱を得て阿羅漢を成ぜり。此れは是れ其の義なり。當に念じて奉行すべし」と。

爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「我弟子中第一の聰明にして、捷疾智の者は、所謂鴦掘魔比丘是れなり」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

増壹阿含經卷第三十一

衆人に報へて曰く、『我聾と爲るに非らず。汝等衆人、斯れは是れ聾耳。汝等願ふらくは、女人、還つて女人を見て、相恥づること有りしを見し乎、城中の生類は盡く是れ女人なり。唯、清淨太子有りて。是れ男子矣。若し我清淨太子の門に至らば、當に衣裳を著くべし』と。是の時城中の人民自ら相謂ひて言く、『此の女の說く所、誠に我意に入れり。我等は實に是れ女にして、男に非ざるなり。唯、清淨太子有りて乃ち是れ男なり。我等は今日當に男子の法を行ふべし』と。是の時城中の人民、各戰具を辦じ、鎧を著け、杖を持して父王の所に往至し、父王に白して曰さく、『二願を欲求せん、唯聽許せ見れよ』と。王之に報へて曰く、『何等か二願なるや』と、人民王に白さく、『王、存せんと欲せば、當に清淨太子を殺すべし。太子にして存せんと欲せば、今當に王を殺すべし。我等は清淨太子に承事するに堪任せず、國の常法を辱むるものなり』と。是の時父王便ち此の偈を說く、

家の爲に一人を忘れ　村の爲に一家を忘る　國の爲に一村を忘れ　身の爲に世間を忘る。

と。是の時父王、此の偈を說き已つて、人民に告げて曰く、『今正に是れ時なり、汝等の意に隨はん』と。是の時諸人、清淨太子を將つて、兩手を取りて之を縛し、將ひて城外に詣り、各相謂ひて言く、『我等咸共に瓦石を以て打ち殺さん、何ぞ一人殺すことを須ひん乎』と。

是の時清淨太子、死せんと欲する時に臨みて是の說を作し又誓願を作さく、『諸の人民、吾を取りて枉殺せよ、然も父王は自ら我與に願へり。我今死を受くるも亦敢えて辭せず。我をして將來の世に、當に此の怨みを報ふべから使めよ。又眞人の羅漢に値ひて、速に解脫を得せ使めよ』と。是の時人民、太子を取りて殺し已つて、各自ら散り去りぬ。諸比丘、是の觀を作すこと莫かれ、爾の時の大果王とは豈異人ならん乎、今の鴦掘魔師是れなり。爾の時の婬女とは、今の師の婦是れなり。爾の時の人民とは今の八萬の人民の死せし者是れなり。爾の時の清淨太子とは、今の鴦掘魔比丘是れなり。死せんと欲する時に臨みて、是の誓願を作し、今還つて怨みを報じ、手を免れること無き

の故に哭く耳』と。侍臣還つて太子に白さく、『此の女人は夫主の爲に棄て所れ、又盜賊を畏る。是の故に哭く耳』と、太子告げて曰はく、『此の女人を將ひて、象廐の中に著けよ』と。彼に到りても復哭く。復將ひて馬廐の中に至るも復哭く。太子復侍臣に語げて、『將來して此に在け』と。即ち將ひて堂に入るも復中に於て哭く。太子躬自ら問ふて曰く、『何すれぞ復哭くことを爲すや』と。婬女報へて曰さく、『太子、女人は單弱にして、極めて恐怖を懷く、是の故に哭く耳』と。太子告げて曰く、『吾床上に上れ、無畏を得べし』と。是の時女人默然として語らず、亦復哭かず。是の時女人、即ち衣裳を脫ぎ、前んで太子の手を捉へて、已の胸の上に擧著し、即時に驚覺し、漸々に欲想を起し、欲心を起せしを以て便ち身を之に就けぬ。

是の時清淨太子、明日清旦父王の所に往きぬ。是の時父王、遙に太子の顏色の常日と殊なるを見、見已つて便ち是の說を作さく、『汝今欲する所の事を果す乎』と。太子報へて曰く、『大王の所言の如し』と。是の時父王、歡喜踊躍して自ら勝ふること能はず、並に是の說を作さく、『何の願ひと欲求するや、吾當に之を與ふべし』と。太子報へて曰く、『賜願する所の者、復中に悔ひること勿れ、當に其の願ひを求むべし』と。時に王報へて曰く、『汝の所言の如し、終に中に悔ひず、何の願ひを欲求するや』と。太子、王に白さく、『大王、今日閻浮提內を統領し、皆悉く自由にし、閻浮提里の內の諸の未だ嫁がざる女を、先づ我家に適ぎ、然る後に嫁せ使めん』と。是の時王曰く、『汝の言ふ所に隨はん』と、王即ち國內の人民の類に勅して曰く、『諸有の女にして、未だ門を出でざる者は、先づ清淨太子に詣ら使め、然る後に之を嫁せよ』と。

爾の時彼の城中に女有り、須蠻と名く。次で王の所に至る應し。是の時須蠻長者の女、露形倮跣して衆人中に在りて行き、亦羞恥無し。衆人見已つて各相對談すらく、『此れは是れ長者の女にして、名稱遠く聞こゆ。云何が露形にして人中に在りて行くや、驢の如くして何ぞ異ならん』と。女

て、王復告げて曰く、『吾汝の與に婦を娶らんと欲す』と、太子王に白さく、『婦を娶ることを須ひず』と。是の時父王、群臣・人民に告げて曰く、『我本兒息無し、經歷すること久遠にして、方に一子生みしに、今肯じて婦を娶らず、清淨にして瑕無し』と。

爾の時王、太子に字を轉じて名けて清淨と曰ふ、是の時清淨太子、年三十に向ふ。王復群臣に勅して曰く、『吾今年已に衰微するに、更に兒息無し。今唯清淨太子有り、今應に王の高位を太子に授與すべし。然るに太子、五欲の中に樂しまず、當に云何が國事を理むべきや』と、群臣報へて曰さく、『當に方便を爲して、五欲を樂しま使むべし』と。是の時父王、卽ち鐘を椎ち、鼓を鳴らし、國中の人に勅すらく、『其れ能く清淨太子をして、五欲を樂しま使むる者は、吾當に千金及び諸の寶物を賜與すべし』と。爾の時女人有り、名けて婬種と曰ふ。盡く六十四變を明にす。彼の女人、王の敎令有りて、『其れ能く王の太子をして、五欲を習は使むる者に、當に金千斤及び諸の寶物を賜與すべし』と聞き、卽ち父王の所に往至し、之に告げて曰さく、『千金及び諸の寶物を與へ見るれば、能く王の太子をして、五欲を習は使めん』と。父王報へて曰く、『審に能く爾らば、當に重ねて相賜すべし。言信を負はざれ』と。時に婬女、王に白さく、『王の太子は何處に寢宿を爲すや』と、王報へて曰く、『東の堂上に在りて、女人有ること無し。唯一男兒有りて、彼に在りて侍衞す』と、女人白して曰さく、『唯、願くは大王、內宮中に勅して、退遮せ見るゝこと勿れ。意に隨つて出入せん』と。

是の時婬女、卽ち其の夜二を鼓ちし時、太子の門側に在りて、佯つて聲を擧げて哭く。是の時太子、女人の哭き聲を聞き、便ち侍人に勅して曰く、『是れ何人ぞ、斯に於て哭くや』と。侍人報へて曰く、『此れは是れ女人、門の側に在りて哭く』と。太子告げて曰く、『汝速に往いて、哭く所由を問へ』と。時に彼の侍臣往いて之に哭く所由を問ふ、婬女報へて曰く、『夫主に棄て見れたり。是

是の時如來、鴦掘魔の所說を可したまひぬ。是の時鴦掘魔、已に如來の之を然可したまふを見、即ち座從り起ち、世尊の足を禮し、便ち退いて去りぬ。

是の時諸比丘、世尊に白して言さく、「鴦掘魔は本何の功德を作して、今日聰明黠慧にして、面目端正なること世の希有なるや。復、何の不善行を作して、今、身上に於て生類を殺害せしこと稱計す可からざるや、復何の功德を作して、今に於て如來に値ひまつて阿羅漢道を得しや」と。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「昔、過去久遠、此の賢劫の中に於て佛有り、迦葉如來・至眞・等正覺と名け、世に出現したまひぬ。迦葉如來、世を去るの後、王有り、大果と名け、國界を統領し、閻浮提を典せり。爾の時彼の王に八萬四千の宮人婇女有りて、各々兒息無し。爾の時大果王、諸の樹神・山神・日月・星宿に向ひ、周く男女を欲求せざる所無かりき。爾の時王の第一夫人の身即ち懷妊し、八九月を經て便ち男兒を生む。顏貌端正にして世の希有なり。是の時彼の王、便ち是の念を生ずらく、『我本兒息有ること無かりしに、爾許の時を經て今方に兒を生ぜり、宜しく當に字を立て、五欲の中に於て自ら娛樂ま使むべし』と。

是の時王、諸の群臣の能く相を瞻る者を召して、之に告げて曰く、『我今已に此の兒を生めり、各與に字を立てよ』と。是の時群臣、王の教へを聞き已つて、即ち王に白して言さく、『今此の太子は極めて奇妙爲り、端正にして比ひ無く、面は桃華の色の如し、必ず當に大力勢有るべし。今當に字を立てゝ名けて大力と曰ふべし』と。是の時相師、太子の與に字を立て已つて、各座從り起ちて去りぬ。是の時國王、此の太子を愛愍し、未だ曾て目前を去らざりき。是の時太子、年八歲に向ひ、諸の臣佐を將ひて父の所に往き、朝賀問訊す。父王、復是の念を作さく、『今此の太子は極めて自ら奇特なり』と、即ち之に告げて曰く、『吾今汝の與に婦を娶らん、何如乎』と。太子王に白さく、『子今年幼し、何ぞ娉娶を須ひんや』と。是の時父王權りに停めて與に婦を娶らざりき。復二十歲を經

魔と名け、衆生を殺害すること稱計すべからず。今復城中に在りて乞食す」と。是の時城中の人民、各々瓦石を以て打つ者、或は刀を以て斫る者有りて、頭目を傷壞し、衣裳裂盡し、流血體を汚せり。即ち舍衞城を出でゝ、如來の所に至りぬ。是の時世尊、遙に鴦掘魔の頭目傷破し、流血衣を汚し、來れるを見、見已つて便ち是の說を作したまはく、「汝今之を忍べ、然る所以は、此の罪は乃ち永劫に之を受く應し」と。是の時鴦掘魔、世尊の所に至り、頭面に足を禮し、一面に在りて坐す。爾の時鴦掘魔、如來の前に在りて、便ち此の偈を說かく、

　堅固にして法句を聽き　堅固にして佛法を行じ　堅固にして善友に親しまば　便ち滅盡處に至らん　我本大賊爲り　名けて鴦掘魔と曰ふ　流れに漂はは所れ　尊之を拔濟したまふを蒙むる　今自らの歸する業を觀じ　亦當に法の本を觀ずべし　今已に三明に逮び　佛の行業を成就せり　我本　無害と名け　殺害せしこと計る可からず　今眞諦實と名けて　一切を害せず　設し復身・口・意に　都て害する心識無くば　此れを無殺害と名く　何に況んや思想を起さんや　弓師は能く角を調へ　水人は能く水を調ふ　巧匠は其れ木を調へ　智者は自ら身を調ふ　或は鞭杖を以て伏し　或は言語を以て屈し　竟に刀杖を加へず　今我自ら降伏せり　人前に過惡を爲し後止めて復犯さず　是れ世間を照らすこと　雲消えて月の現るゝが如し　人前に過惡を爲し後止めて復犯さず　是れ世間を照らすこと　雲消えて日の現るゝが如し　比丘の老少壯　佛法行を修行す　是れ世間を照らすこと　彼の月雲の消ゆるが如し　比丘の老少壯　佛法を修行する者　是れ此の世間を照らすこと　日雲の消ゆるが如し　我今痛を受くること少く　飲食自ら足るを知り　盡く一切苦を脫す　本緣今已に盡きたり　更に死の跡を受けず　亦復生を樂しまず　今正に時節を待ち　歡喜して亂れず。

と。

---

【三】　無害（Ahiṁsaka）。

し、世尊の恩を蒙むりて、此の難を免るゝことを得ん。國事猥りに多し、城池に還らんと欲す」と。世尊告げて曰はく、「王、是れ時を知れ」と。爾の時國王、即ち座從り起ち、頭面に足を禮し、便ち退いて去りぬ。

爾の時鴦掘魔、阿練若を作し、五納衣を著け、時到つて鉢を持し、家々に乞食し周くして復始む。補納弊壞の衣を著くるも、極めて麁醜爲り。亦復、露坐するも形體を覆はず。是の時鴦掘魔、閑靜の處に在りて自ら其の行を修む。族姓子の出家學道せし所以の、無上の梵行を修めんと欲し、生死已に盡き、梵行已に立ち、所作已に辦じて更に復胎を受けず、實の如くに之を知り、時に鴦掘魔便ち阿羅漢を成じ、六通清徹にして塵垢有ること無く、已に阿羅漢を成じ、時到つて衣を著け、鉢を持して舍衞城に入りて乞食しぬ。

是の時婦女有り、產に臨みて甚だ難し、見已つて便ち是の念を作さく、「衆生の類は極めて苦痛爲り、惱みを受くること限り無し」と。是の時鴦掘魔、食後衣鉢を收擧め、尼師檀を以て肩上に著け、世尊の所に往至し、頭面に足を禮し、一面に在りて坐す。爾の時鴦掘魔、世尊に白して言さく、「我向きに衣を著け、鉢を持して舍衞城に入つて乞食し、一婦女の身體重く妊むを見たり。是の時我便ち是の念を作せり、『衆生は苦を受くること、何ぞ斯に至るや』」と。世尊告げて曰はく、「汝今彼の婦人の所に往いて是の說を作せ、『我賢聖從り生れて以來、未だ曾て殺生せず』と、此の至誠の言を持てば、此の母人の胎をして、他無きことを得使めん」と。鴦掘魔對へて曰さく、「是の如し、世尊」と。是の時鴦掘魔、即ち其の日衣を著け、鉢を持して舍衞城に入り、彼の母人の所に往至し、彼の母人に語げて曰く、「我賢聖從り生れて以來、更に殺生せず、此の至誠の言を持てば、胎をして解脫を得使めん」と。是の時母人の胎、即ち解脫を得たり。

是の時鴦掘魔、城中を乞食せしに、諸の男女、大小之を見、各々自ら相謂ひて言く、「此れは鴦掘

坐す。爾の時世尊、王に問ふて曰はく、「大王、今日何れに所至せんと欲して、身體を塵汚して、乃ち斯に至りしや」と。波斯匿王、佛に白して言さく、「我今國界に賊有り、鴦掘魔と名く、極めて兇暴爲り、一切衆生に於て慈心有ること無く、國をして丘荒し、人民をして流迸せ使むるは、皆此の賊に由る。彼れ今人を取りて之を殺し、指を以て鬘と爲す。此れは是れ惡鬼にして、人爲るに非るなり。我今此の人を誅伐せんと欲す」と。

世尊告げて曰はく、「若し當に大王、鴦掘魔の、信心堅固にして、出家學道せしを見るべくんば、王、當に之を奈何がすべき」と。王、佛に白して言さく、「知れば復如何、但當に承事し、供養し、時に隨つて禮拜すべし。然るに復世尊、彼れは是れ惡人にして、毫釐の善も無く、恒に殺害せり。能く此の心有りて出家學道せん乎、終に此の理無けん」と。

是の時鴦掘魔、世尊を去ること遠からざるに結跏趺坐し、正身正意に繫念前に在り。爾の時世尊、右手を伸し、王に指示して曰はく、「此れは是れ賊、鴦掘魔なり」と。王此の語を聞いて便ち恐怖を懷き、衣毛皆竪つ。世尊、王に告げたまはく、「恐怖を懷くこと勿れ、往いて前に至る可し。自ら當に王の意を悟るべき耳」と。是の時王、佛語を聞き、卽ち鴦掘魔の前に至り、鴦掘魔に語げて曰く、「汝今姓は誰ぞ」と。鴦掘魔曰く、「我姓は[一〇]伽伽、母を[一一]滿足と名く」と。是の時王、足を禮し已つて、一面に在りて坐す。爾の時王、問ふて曰く、「善く此の正法の中に樂しみて、懈怠有ること勿れ、清淨の梵行を修めて、苦際を盡くすことを得よ。我當に形壽を盡くして衣被・飮食・床臥の具・病瘦の醫藥を供養すべし」と。是の時鴦掘魔、默然として對へず。王、卽ち座從り起ち、頭面に足を禮して還えり、世尊の所に詣り、頭面に足を禮し、一面に在りて坐す。是の時王復佛に白して言さく、「降らざる者をして降ら使め、伏せざる者をして伏せ使めたまふ。甚奇、甚特、曾て有らざる所なり。乃ち能く極惡の人を降伏したまへり。唯、願くは天尊、命を受くること窮り無く、生民を長養

【一〇】伽伽(Gagga)。指鬘の父の姓。

【一一】滿足(Mantāni)。

亦此の言有り、『如來の出世は甚だ遇ひ難しと爲す。時々億劫に乃ち出づ。彼出世の時、度せざる者をして度せ令め、解脱せざる者をして、解脱を得令む。彼六見を滅するの法を説く、云何が六と爲すや、言く我見有る者は卽ち我見を滅するの法を説く。我有ること無き者も亦、與に有ること無き我見の法を滅することを説いて言く、「我有るの見、我有ること無きの見、亦與に有我見、無我見の法を説く。復自ら觀察し、觀察の法を説き、自ら無我の法、亦非我説、亦非我不説の法を説く。若し如來出世せば、此六見を滅するの法を説かん』と、又、我奔走せし時、能く象馬・車乘に及び、亦人民に及びぬ。然るに此の沙門行くに暴疾ならず、然も我今日此れに及ぶこと能はず、必ず當に是れ如來なるべし」と。是の時鴦掘魔便ち此の偈を説かく、

　即時
尊今我爲の故に　微妙の偈を説きたまへり　惡者は今眞を識る　皆尊の威神に由るなり
に利劍を捨て丶　深坑の中に投ぜん　今沙門の跡を禮し　卽ち沙門と作ることを求めん。

と。是の時鴦掘魔卽ち前んで佛に白して言さく、「世尊、唯、願くは沙門と作ることを聽したまへ」と。世尊告げて曰はく、「善くぞ來れり、比丘と」と、卽時に鴦掘魔便ち沙門を成じ、三法衣を著けぬ。爾の時世尊、便ち此の偈を説きたまはく、

汝今已に頭を剃りぬ　結を除くも亦當に爾るべし　結滅せば大果を成じ　復愁・憂・苦・惱無けん。

と。是の時鴦掘魔、此の語を聞き已つて、卽時に諸の塵垢盡きて法眼淨を得たり。

爾の時世尊、鴦掘魔比丘を將ひ、還つて舍衞城の祇園精舍に詣りたまひぬ。是の時王波斯匿、四部の衆を集め、往いて賊鴦掘魔を攻伐せんと欲し、是の時王便ち是の念を作さく、「我今世尊の所に往至し、此の因緣を以て、具に世尊に白す可し。若し世尊にして所說有らば、當に之を奉行すべし」と。爾の時王波斯匿、卽ち四部の兵を集め、世尊の所に往き、頭面に足を禮し、一面に在りて

に生ぜん』と。是の時鴦掘魔母に語げて曰く、「母今且らく住まれ、我先きに沙門瞿曇を取りて殺さん、然る後に當に食すべし」と。是の時鴦掘魔即ち母を放ち、往いて世尊を逐ひ、遙に世尊の來りたまふを見るに、亦金聚の如く、照らさゞる所靡し。見已つて並に笑ひて是の語を説かく、「今此の沙門は定んで我手に在り、必ず殺すこと疑はず。其れ人民有りて此の道を行かんと欲する者は、皆大衆を集めて此の道を行く。然るに此の沙門は獨りにして伴侶無し。我、今當に取りて之を殺すべし」と。

是の時鴦掘魔、即ち腰の劍を拔き、往いて世尊を逆ふ。是の時世尊、尋いで還えつて復道を徐に行歩したまふに、鴦掘魔は奔馳して逐ふも亦、如來に及ぶこと能はず。是の時鴦掘魔、世尊に白して言さく、「住まれ、住まれ、沙門」と。世尊告げて曰はく、「我自ら住まる耳、汝自ら住まらざるなり」と。是の時鴦掘魔並に走り、遙に此の偈を説かく、

去りて復住まると言ひ　我に語げて住まらずと言ふ　我與に此の義を説け　彼住まりて我住まらずとのことを。

と。爾の時世尊、偈を以て報へて曰はく、

世尊は已に住まると言ひ　一切を害せず　汝今殺心有り　惡の原を離れず　我慈心の地に住し一切の人を愍護す　汝地獄の苦を種え惡の原を離れず。

と。

是の時鴦掘魔、此の偈を聞き已つて、便ち是の念を作さく、「我今審に惡を爲せし耶、又師我に語げて言く、『此れは是れ大祠にして、大果報を得ん、能く千人を取りて殺し、指を以て鬘に作らば、其の所願を果さん、此の如きの人、命終の後善處天上に生ぜん。設し所生の母及び沙門瞿曇を取りて殺さば、當に梵天上に生ずべし』と」。是の時佛、威神を作し、神識惛寤す。諸の梵志の書籍にも

事に於て省みざるなり」と。世尊此の語を聞きたまふと雖も、故に進みて住りたまはず。

爾の時鴦掘魔の母、食を持して鴦掘魔の所に詣りぬ。是の時鴦掘魔、便ち是の念を作さく、「吾指鬘は數を充たすと爲すや不乎」と。是の時卽ち指を數ふるに數に充たず、復、更に重ねて數ふるに、唯一人の指少し。是の時鴦掘魔左右を顧視して生人を求覓め、取りて之を殺さんと欲す。然して四遠を顧望するも、亦人を見ず。便ち是の念を作さく、「我師は敎ふるところ有り、『若し能く母を害せば、必ず當に天に生ずべし』と。我今母躬ら來つて此に在り、卽ち取りて之を殺し、指を得て數を充たし、天上に生ず可し」と。

是の時鴦掘魔、左手に母の頭を捉へ、右手に劍を拔きて母に語げて言く、「小しく住まれ、阿母」と。是の時世尊、便ち是の念を作さく、「此の鴦掘魔は當に[九]五逆を爲すべし」と、卽ち眉間相を放ちたまひ、光明普く彼の山林を照らしたまひぬ。是の時鴦掘魔、光明を見已つて、復、母に語げて言く、「此れは是れ何の光明か、此の山林を照らすや。將た國王諸の兵衆を集めて、我身を攻伐するに非らざる乎」と。是の時母告げて曰く、「汝今當に知るべし。此れは日月の火光に非らず、亦釋・梵天王の光明に非らず」と。爾の時其の母、便ち此の偈を說きぬ。

此れは火の光明に非らず　日月釋梵に非らず　鳥獸驚き怖れず　和鳴して常と殊なり　此の光は極めて清淨にして　人をして悅ぶこと無量ならしむ　必ず是れ尊最勝　十力此の間に至りたまふなり　天、世人の中に於て　天眼もて世界を視そなはす　故に汝の身を度せんと欲し　世尊は此に來至したまふ。

と。

是の時鴦掘魔、佛の音響を聞き、歡喜踊躍して自ら勝ふること能はず、便ち是の語を作さく、「我師も亦敎誡有りて、我に勅して曰く、『設し汝能く母を害し、并せて沙門瞿曇を殺せば、必ず梵天上

---

【九】五逆、前卷索引五逆罪をみよ。

世間の所有の力　天人の中に遊在するに　福力最も勝れ爲り　福に由つて佛道を成ず。
是の故に阿那律、當に方便を求めて、此の六法を得べし。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所説を聞いて歡喜奉行しぬ。

六

[七]聞くこと是の如し、一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時衆多の比丘有りて、舍衞城に入りて乞食し、王波斯匿の宮門外に、衆多の人民有りて、中に於て手を擧げて喚呼し、皆怨みを稱へて、「國界に賊有り、鴦掘魔と名け、極めて兇暴爲り、生類を殺害すること稱計す可からず、慈悲無く、一切衆生の國界に於て、人民の厭患せざるは無く、日に人を取りて殺し、指を以て鬘と爲す。故に名けて指鬘と爲す。唯、願くは大王、當に往いて共に戰ふべし」と聞く。是の時衆多の比丘、乞食し已つて、還つて祇洹精舍に詣り、衣鉢を收攝し、尼師檀を以て肩上に著け、世尊の所に往至し、頭面に足を禮し、一面に在りて坐す。爾の時衆多の比丘、世尊に白して言さく、「我等衆多の比丘、舍衞城に入つて乞食し、衆多の人民、王宮の門外に在りて、怨みを稱へて訴辭するを見たり。『今王、國界に賊有り、鴦掘魔と名け、人と爲り兇暴にして、慈心有ること無く、一切衆生を殺害せり、人亡び國虚しきは、皆此の人に由るなり。又人の指を取りて以て華鬘と爲す』」と。爾の時世尊、彼の比丘の語を聞き已つて、即ち座從り起ち、默然として行きたまひぬ。

是の時世尊、尋いで彼の所に到りたまふ。諸有の薪を取り、草を負ふ犁作の人、及び牛羊を牧する者、世尊の彼の道に詣りたまふを見、各佛に白して言さく、「沙門、沙門、彼の道に從ふこと勿れ、然る所以は、此の路の側に賊有り、鴦掘魔と名け、中に於て止住す。諸有の人民にして、此の道に就かんと欲する者は、要らず十人或は二十人、或は三十・四十・五十人集るも猶過ぐることを得ず、盡く鴦掘魔の爲に擒獲せ所る。然るに沙門瞿曇は獨り侶有ること無し、鴦掘魔の爲に觸嬈せ所るれば、

【七】 M. 86. Aṅgulimāla.「雜阿含經」第一〇七七經、(卷三八)別譯「雜阿含經」第一六經(卷一)、西晋竺法護譯「佛說鴦掘摩經」一卷、西晋法炬譯「佛說鴦崛髻經」一卷、劉宋、求那跋陀羅譯「央掘魔羅經」一卷。

【八】 鴦掘魔(Aṅgulimāla)。譯して指鬘といふ。

食と爲し、意は法を以て食と爲す。我今亦涅槃に食有りと說く」と。阿那律佛に白して言さく、「涅槃は何等を以て食と爲すや」と。佛阿那律に告げたまはく、「涅槃は無放逸を以て食と爲す。無放逸に乘ずれば、無爲に至ることを得ん」と。阿那律佛に白して言さく、「世尊、眼は眠りを以て食と爲すと言ふと雖も、然も我睡眠に堪えじ」と。

爾の時阿那律、故き衣裳を縫へり。是の時眼遂に敗壞して天眼を得、瑕穢有ること無し。是の時阿那律、凡常の法を以て衣裳を縫ひ、縷をして針の孔中に通ぜ使むることを得る能はず。是の時阿那律、便ち是の念を作さく、「諸の世間の得道の羅漢は、當に我與に針を貫くべし」と。是の時世尊、天耳の淸淨なるを以て、此の音聲を聞きたまへり。「諸の世間の得道の阿羅漢は、當に我與に針を貫くべし」と。

爾の時世尊、阿那律の所に至り、之に告げて曰はく、「汝針を持して來れ、吾汝の與に之を貫かん」と、阿那律佛に白して言さく、「向きに稱說する所は、「諸の世間の、其の福を求めんと欲する者は、我與に針を貫けと謂ふなり」と。世尊告げて曰はく、「世間に福を求むるの人、復我に過ぐるもの無し。如來は六法に於て厭足有ること無し。云何が六と爲すや、一には施、二には敎誡、三には忍、四には法說・義說、五には衆生を將護し、六には無上正眞の道を求む。是れを阿那律、如來は此の六法に於て、厭足有ること無しと謂ふなり」と。阿那律曰さく、「如來の身は眞に法の身なるに、復、更に何の法を求めんと欲したまふや。如來は已に生死の海を度し又愛著を脫したまへり。然るに今は故に、福の首爲ることを求めたまふや」と。世尊告げて曰はく、「是の如し、阿那律、汝の所說の如く、如來も亦此の六法を知りて、爲に厭足無し。若し當に衆生にして、罪惡の原、身・口・意の所行を知るべくんば、終に三惡趣に墮せじ、其の衆生罪惡の原を知らざるを以ての故に、三惡趣の中に墜墮するなり」と。世尊便ち此の偈を說きたまはく、

法を受くれば快く睡眠り　意錯亂有ること無し　賢聖の說く所の法は　智者の樂しむ所なり
猶し深淵の水の　澄淸にして瑕穢無きが如く　是の如く法を聞く人は　淸淨にして心樂受なり
亦大方石の　風に動くこと能はざる所なるが如く　是の如く毀譽を得るも　心傾動有ること
無し

と。

是の時世尊、阿那律に告げたまはく、「汝王法を畏れてや、及び盜賊を畏れて道を作す乎」と。阿那律報へて曰さく、「不なり、世尊」と。佛、阿那律に告げたまはく、「汝何故に出家學道せしや」と。阿那律、佛に白して言さく、「此の老・病・死・愁・憂・苦・惱、苦の爲に惱まさ所るを厭患せしが故に、之を捨てんと欲し、是の故に出家學道せり」と。世尊告げて曰はく、「汝今族姓子、信心堅固にして出家學道せしや、世尊、今日躬自ら法を說くに、云何が中に於て睡眠せしや」と。

是の時尊者阿那律、卽ち座從り起ち、偏へに右肩を露はし、長跪叉手して世尊に白して言さく、「今自り已後形融け、體爛るとも、終に如來の前に在りて坐して睡らじ」と。爾の時尊者阿那律、曉に達するも眠らず、然も睡眠を除去すること能はず、眼根遂に損しぬ。爾の時世尊、阿那律に告げて曰はく、「勤加精進する者は調戲蓋と相應す。設し復、懈怠せば結と相應す。汝の今の所行は、當に其の中に處るべし」と。阿那律佛に白さく、「前に已に如來の前に在りて誓へり、今復本要に違ふこと能はず」と。

是の時世尊、耆域に告げて曰はく、「阿那律の眼根を療治せよ」と。耆域報へて曰さく、「若し阿那律にして小しく睡眠せば、我當に目を治すべし」と、世尊阿那律に告げて曰はく、「汝寢寐る可し。然る所以は、一切の諸法は食するに由りて存す、食するに非らずば存せず。眼は眠りを以て食と爲し、耳は聲を以て食と爲し、鼻は香を以て食と爲し、舌は味を以て食と爲し、身は細滑を以て

時に我復此の念を生ずらく、『此の識は最も原首爲り、人をして此の生・老・病・死を致さ令む。然るに此の生・老・病・死の生ずるの原本を知ること能はざること、猶し人有りて、山林中に在りて、行くに小徑道を逐ひ、小しく復前行して、舊の大道、古昔諸人中に在りて行く處を見るが如し。是の時彼の人便ち復此の道を行き、小しく復前進して、舊城郭を見、園觀浴池皆悉く茂盛す。但、彼の城中に居民有ること無し。此の人見已つて本國に還歸り、前んで王に白して言く、「昨、山林に遊びて、好き城郭を見たり。樹木繁茂す、但し彼の城中に人民有ること無し。大王、人民をして彼の城に在りて止住せ使む可し」』と。是の時國王、此の人の語を聞き、即ち人民を居止す。然して此の城郭還えつて復故の如く、人民熾盛にして快樂比ひ無し。諸比丘、當に知るべし、我昔、未だ菩薩を成ぜずして、時に山中に在りて學道して、古昔の諸佛の遊行したまひし所の處を見、便ち彼の道に從つて即ち生・老・病・死の起る所の原本を知り、生有れば滅有ること、皆悉く分別して、生の苦、生の集、生の盡、生の道を知り、皆悉く了知せり。有・取・愛・痛・更樂・六入・名色・識・行・癡も亦復是の如し。無明起れば則ち行起り、行を造る所の者は復識に由る。我今已に識を明にせり。今四部衆の與に此の本を說かん、皆當に此の原本の起る所を知るべし。苦を知り、集を知り、盡を知り、道を知り、念じて分明なら使め、已に六入を知れば、則ち生・老・病・死を知り、六入滅すれば則ち生・老・病・死、滅す。是の故に比丘、當に方便を求めて、六入を滅すべし。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

五

聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、無央數百千萬衆の與に說法を爲したまひき。爾の時阿那律、彼の座上に在り。是の時阿那律、衆中に在りて睡眠りぬ。爾の時佛、阿那律の睡眠れるを見たまひて、便ち此の偈を說きたまはく、

名色有り』と。『此の識は何に由つて有るや』と、是れを觀察せし時、『行に由つて識を生ず』と。時に我復是の念を作さく、『行は何に由つて生ずるや』と。是れを觀察せし時、『行は癡に由つて生ず。無明は行に緣り、行は識に緣り、識は名色に緣り、名色は六入に緣り、六入は更樂に緣り、更樂は痛に緣り、痛は愛に緣り、愛は取に緣り、取は有に緣り、有は生に緣り、生は死に緣り、死は愁・憂・苦・惱に緣りて稱計す可からず。是の如きを名けて、苦盛陰の所集と爲す』と。

我爾の時、復、是の念を作さく、『何の因緣に由つて生・老・病・死を滅するや』と、我是れを觀察せし時、『生滅すれば老・病・死、滅す』と。時に復、此の念を生ずらく、『何に由つて生無きや』と、此の生の原を觀じて、『有、滅すれば、生則ち滅す』と。復念ずらく、『何に由つて有無きや』と。時に此の念を生ずらく、『取、無くば則ち有無し』と。時に我此の念を生ずらく、『何に由つて取を滅するや』と。是れを觀察せし時、『愛、滅すれば取則ち滅す』と。復此の念を生ずらく、『何に由つて愛、滅するや』と、重ねて更に觀察し、『痛、滅すれば愛即ち滅す』と。復思惟すらく、『何に由つて痛を滅するや』と。是れを觀察せし時、『更樂、滅すれば則ち痛滅す』と。復思惟すらく、『更樂は何に由つて滅するや』と、是れを觀察せし時、『六入、滅すれば、則ち更樂滅す』と。復觀ずらく、『此の六入は何に由つて滅するや』と、當に觀察すべき時に、『名色、滅すれば則ち六入滅す』と。復觀ずらく、『名色は何に由つて滅するや。識滅すれば則ち名色滅す』と。復觀察すらく、『此の識は何に由つて滅するや』と、『行、滅すれば則ち識滅す』と。復觀ずらく、『此の行は何に由つて滅するや、癡[六]、滅すれば則ち行滅し、行滅すれば則ち識滅し、識滅すれば則ち名色滅し、名色滅すれば則ち六入滅し、六入滅すれば則ち更樂滅し、更樂滅すれば則ち痛・滅し、痛滅すれば則ち愛滅し、愛、滅すれば則ち取滅し、取滅すれば則ち有滅し、有、滅すれば則ち生滅し、生滅すれば則ち老・病、滅し、老・病、滅すれば則ち死滅す。是れを名けて、五盛陰の滅と爲すと謂ふなり』と。



【六】癡は、無明に同じ。

知れば、卽ち此の盛陰の本末を知らん」と。爾の時世尊、便ち此の偈を說きたまはく、

世間に五欲有り　意を第六の生と爲す　以て內外の六を知る　當に念じて苦際を盡くすべし。

是の故に當に方便を求めて、內外の六事を滅すべし。是の如く梵志、當に是の學を作すべし」と。爾の時彼の梵志、佛の是の如きの敎へを聞き、思惟し翫習して心懷を去らず、卽ち座上に於て諸の塵垢盡きて法眼淨を得たり。爾の時彼の梵志、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

四

[五]聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「我本菩薩爲りし時、未だ佛道を成ぜざる中に此の念有り、『此の世間は極めて勤苦と爲す。生有り、老有り、病有り、死有り、然して此の五盛陰は本原を盡くすことを得ざるなり』と。是の時我復是の念を作さく、『何の因緣に由つて、生・老・病・死有るや、復、何の因緣に由つて、此の災患を致すや、當に此の時を思惟すべし』と。復此の念を生ずらく、『生有れば則ち老・病・死有り』と。爾の時當に思惟すべし。是の時復更に念を生ずらく、『何の因緣に由つて此に生ずること有りや、有に由つて生あり』と。復此の念を生ずらく、『有は何に由つて有るや、我當に思惟すべし』と。是の時便ち此の念を生ぜり。『此の有は取に由つて有り』と。復念ずらく、『此の取は何に由つて有るや』と。爾の時智を以て之を觀じ、『愛に由つて取有り』と。復更に思惟すらく、『此の愛は何に由つて生ずるや』と、重ねて之を觀察し、『痛に由つて愛有り』と。復更に思惟すらく、『此の痛は何に由つて生ずるや』と。當に是の觀察を作すべき時に、『更樂に由つて此の痛有り』と。復、重ねて思惟すらく、『此の更樂は何に由つて有るや』と、我此の念を生ぜし時、『六入に緣つて此の更樂有り』と。時に我重ねて思惟すらく、『此の六入は何に由つて有るや』と、是れを觀察せし時、『名色に由つて六入有り』と。時に我復是の念を作さく、『名色は何に由つて有るや』と。是れを觀察せし時、「復、識に由つて

---

【五】 S. 12. 65. Nagara.

ん、「此の諸の賢士は無常想を修めず、無常想を廣布せざるが故に、此の鬪訟を致す耳。彼れ鬪諍するを以て、其の義を觀ぜず、其の義を觀ぜざるを以て、則ち迷惑の心有り、彼れ已に此の愚惑に執じて、命終せば、三惡道、餓鬼・畜生・地獄の中に入らん。是の故に諸比丘、當に無常想を修め、無常想を廣布すべくんば、便ち瞋恚・愚惑の想無く、亦能く法を觀じ、亦其の義を觀じ、若し命終の後、三善處に生じ、天上・人中・涅槃の道に生ぜん。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

三

【二】聞くこと是の如し、一時佛、摩竭國【三】憂伽支江水の側に在しき。爾の時世尊、一樹下に詣り、躬自ら座を敷いて坐し、正身正意に繫念して在前したまひぬ。爾の時【四】一梵志有りて、彼の處に往至す。是の時梵志、世尊の脚跡の妙へ爲るを見、見已つて便ち此の念を生ずらく、「此れは是れ、何人の跡なるや、是れ天・龍・鬼神・乾沓和・阿須倫・人若しは非人と爲すや、是れ我先祖の梵天と爲す耶」と。是の時梵志、即ち跡を逐ふて前進し、遙に世尊の一樹下に在りて坐したまひ、正身正意に繫念し在前したまふを見、見已つて是の語を作さく、「是れ天と爲す耶」と。世尊告げて曰はく、「我は是れ天に非らず」と。「乾沓和と爲す耶」と。世尊告げて曰はく、「我は乾沓和に非らざるなり」と。「是れ龍の子と爲す乎」と、對へて曰はく、「我は是れ龍に非らざるなり」と。「閱叉と爲す耶」と。佛、梵志に報へたまはく、「我は閱叉に非らず」と。「是れ祖父と爲す耶」と、佛報へて曰はく、「我は祖父に非らず」と。

是の時婆羅門、世尊に問ふて曰さく、「汝は今是れ誰ぞや」と。世尊告げて曰はく、「愛有れば則ち受有り、受有れば則ち愛有り、因緣合會し、然る後に各々相生ずること、此の如し。如の如く五苦盛陰は斷絕の時有ること無し。以て愛を知り已れば、則ち五欲を知り、亦外の六塵、內の六入を

【二】A. IV. 36.「雜阿含經」第一〇一經(卷四)別譯「雜阿含經」第二六七經(卷一三)。
【三】憂伽支(Ukkaṭṭhā)。
【四】一梵志は、巴利文には Doṇa brāhmaṇa。

# 卷の第三十一

## 力品第三十八の一

一

聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、

「六凡常の力有り、云何が六と爲すや、小兒は啼くを以て力と爲し、所說有らんと欲せば、要らず當に先づ啼くべし。女人は瞋恚を以て力と爲し、瞋恚に依り已つて、然る後に所說す。沙門・婆羅門は忍を以て力と爲し、常に下ることを念じ、人に下りて然る後に自ら陳ぶ、國王は憍傲を以て力と爲し、此の豪勢を以て、而して自ら陳說す。然して阿羅漢は專精を以て力と爲して、自ら陳說す。諸佛世尊は大慈悲を成じ、大悲を以て力と爲して衆生を弘益す。是れを比丘、此の六凡常の力有りと謂ふなり。是の故に比丘、常に念じて此の大慈悲を修行せよ。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて、歡喜奉行しぬ。

二

聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、

「汝等當に無常想を思惟し、無常想を廣布すべし。已に無常想を思惟し、無常想を廣布せば、盡く欲界愛・色界・無色界愛を斷じ、亦無明・憍慢を斷ぜんこと、猶し火を以て草木を燒焚き、永く盡くして餘り無く、亦遺跡無きが如く、此れも亦是の如し、若し無常想を修せば、盡く欲愛・色・無色愛・無明・憍慢を斷じて、永く餘り有ること無けん。然る所以は、比丘、當に無常想を修すべき時、欲心無し、彼、欲心無きを以て、便ち能く法を分別し、其の義を思惟して、愁・憂・苦・惱有ること無し。彼、已に法の義を思惟せば、則ち愚惑無けん。修行の人若し鬪諍有る者を見ば、彼れ便ち是の念を作さ

【一】 A. VIII. 27. Bala.

て自ら縛し、來つて如來の化を受けぬ。夫れ如來を見たてまつる者は、終に虚妄無きこと、猶し人有りて海に入り、寶を取りて、必ず剋獲する所有りて、終に空しく還えらざるが如く、此れも亦是の如し。其れ衆生有りて、如來の所に至る者は、要らず法の寶を得、終に空しく還らざるなり」と。
爾の時世尊、諸童子の與に微妙の法を說いて、歡喜せ使令めたまひぬ。爾の時諸の童子、佛從り法を聞き已つて、即ち座從り起ち、佛を遶ること三匝して、頭面に足を禮し、便ち退いて去りぬ。爾の時諸の童子、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

# 增壹阿含經卷第三十

漸に與に妙論を說きたまひぬ。所謂論とは施論・戒論・生天の論、欲は穢惡爲り、婬は不淨行なり、出要を樂と爲すと。爾の時世尊、已に尼揵子の心開け、意解するを見、諸佛世尊の常に說法したまふ所の苦・集・盡・道を、盡く彼の尼揵子の與に之を說きたまひぬ。是の時尼揵子、卽ち座上に於て諸の塵垢盡きて法眼淨を得たり。是の時世尊、便ち此の偈を說きたまはく、

祠祀は火を上と爲し　詩書は頌を首と爲す　人中王は最爲り　衆流は海を源と爲す　星中月を明と爲し　光明は日最勝たり　上下及び四方　諸の地は出す所の物なり　天及び人民の類は佛を無上尊と爲す　其の德を求めんと欲せば　三佛は最上爲り。

と。爾の時世尊、此の偈を說き已つて、卽ち座從り起ちて、去りたまひぬ。是の時尼揵子の五百の弟子、師の佛の敎化を受けしを聞き、聞き已つて各々自ら相謂ひて言く、「我等の大師は、云何が瞿曇を師宗するや」と。是の時諸弟子、毘舍離城を出で、中道に在りて立つ。是の時尼揵子、佛所に至り、法を聽かんと欲す。是の時世尊、尼揵子の與に法を說きたまひ、勸めて歡喜せ令めたまふ。尼揵子法を聞き已つて、卽ち座從り起ち、頭面に足を禮し、便ち退いて去りぬ。

是の時尼揵子の弟子、遙に師の來るを見、各々自ら相謂ひて言く、「此の沙門瞿曇の弟子、今道に著して來る。各々瓦石を取りて、之を打ち殺せ」と。時に諸の童子、尼揵子、弟子の爲に殺さ所しを聞き、世尊の所に往至し、頭面に足を禮し、一面に在りて坐す。爾の時諸の童子、世尊に白して言さく、「如來の敎化す可き所の尼揵子は今、弟子の爲に殺さ所ぬ。今已に命終して何處に生ぜしと爲すや」と。世尊告げて曰はく、「彼れは是れ有德の人なり、四諦具足し、三結使滅して須陀洹を成じ、必ず苦際を盡くせり。今日命終して三十三天に生じ、彼れ彌勒佛を見已つて、當に苦際を盡くすべし。此れは是れ其の義なり。當に念じて修行すべし」と。爾の時諸の童子、世尊に白して言さく、「甚奇、甚特なり、此の尼揵子は世尊の所に至り、論議と捔せんと欲し、還つて己の論を以

易の法と爲すや、汝頗ふらくは、有と見る乎」と。對へて曰さく、「無きなり」と。「云何が尼犍子、汝是れを常なりと言ふ、此の理は義と相應せざる乎」と。

是の時尼犍子、世尊に白して言さく、「我今愚癡にして、眞諦を別たず、乃ち此の懷を興し、瞿曇と共に論じて、『色は是れ常なり』と言へり。猶し猛獸師子の遙に人の來るを見て恐怖心有るが如き乎、終に此の事無し。今日如來も亦復是の如く、毫釐も有ること無し。我今狂惑にして、未だ深義を明さず、乃ち敢えて沙門瞿曇を觸嬈せり。所說過多なり、猶し盲者の眼を得、聾者の徹聽し、迷へる者路を見、目無きもの色を見るが如く、沙門瞿曇も亦復是くの如し。無數に方便して、爲に法を說きたまへり。我今自ら沙門瞿曇・法・比丘僧に歸しまつる。今自り以後、形壽を盡くして、優婆塞爲ることを聽したまへ、復殺生せじ、唯、願くは瞿曇及び比丘僧、當に我請を受けたまふべし。佛及び比丘僧に飯はしまつらんと欲す」と。爾の時世尊、默然として請を受けたまひぬ。

是の時尼犍子、世尊の默然として請を受けたまふと見、即ち座從り起ち、佛を遶ぐること三匝し、頭面に足を禮して去り、毘舍離の童子の所に往詣し、到り已つて童子に語げて曰く、「汝等我を供養す應き所の具は、當に以て時に我に給し、非時を以てすること莫かるべし。我今沙門瞿曇及び比丘僧を請ぜり、明、當に之に飯はすべし」と。是の時諸の童子、各飲食の具を辦じ、持し用つて之に與ふ。是の時尼犍子、卽ち其の夜を以て、種々の甘饌飲食を辦じ、好き座具を敷き、時の到れることを白して、「今正に是れ時なり、唯、願くは神を屈したまへ」と。

是の時世尊、時到りて衣を著け、鉢を持し、諸の比丘僧を將ひて毘舍離に入り、尼犍子の家に往至し、到り已つて座に就きたまひ、及び比丘僧各次第して坐しぬ。是の時尼犍子、已に佛と比丘僧との座の定まりしを見、自ら手づから斟酌して、種々の飲食を行じ、佛と比丘僧との食し訖るを見、清淨水を行き、便ち一小座を取りて、如來の前に在りて坐し、法を聞かんと欲す。爾の時世尊、漸

爾の時童子有り、名けて頭摩と曰ふ。集りて彼の衆中に在り。是の時頭摩童子世尊に白して言さく、「我今施行する所有るに堪任す。亦所說せんと欲す」と。世尊告げて曰はく、「意に隨つて之を說け」と、頭摩童子佛に白して言さく、「猶し村落を去ること遠からざるに、好き浴池有り、然して彼の浴池に虫有り、脚饒し。然して村落の人民、男女大小往いて浴池の所に至りて、此の虫を出し、各々瓦石を以て此の虫を取り、之を打ちて手脚を傷破し、彼の虫意に還つて水に入らんと欲するも、終に此の事無きが如く、此の尼犍子も亦復是の如し。初め意猛盛にして、如來と共に論じ、心に姤みの意を懷き、兼ねて憍慢を抱けり。如來は盡く以て之を除きたまひ、永く餘り有ること無し。此の尼犍子は更に終に重ねて如來の所に至りて、共に論議すること能はざるなり」と。

是の時尼犍子、頭摩童子に語げて曰く、「汝、今愚惑にして眞僞を別たず、亦汝と共に論ぜず、乃ち沙門瞿曇と共に論ずるなり」と。是の時尼犍子、佛に白して言さく、「唯、義理を問ひたまへ、當に更に之を說くべし」と。世尊告げて曰はく、「云何が尼犍子、轉輪聖王は老・病・死をして至らざら使めんと欲するも、爾ることを得可き乎。彼の聖大王は此の願ひを果す耶」と。尼犍子報へて曰さく、「此の願ひを果さゞるなり」と。「此の色をして有ら使めんと欲し、此の色をして無から使めんと欲して、此れを果す可き乎」と。尼犍子報へて曰さく、「果さゞるなり、瞿曇」と。世尊告げて曰はく、「云何が尼犍子、色は是れ常なるや、是れ無常と爲すや」と。尼犍子報へて曰さく、「色は無常なり」と。「設し復、無常ならば變易の法と爲すや、汝復此れは是れ我と見るや、我は是れ彼の有と許す乎」と。對へて曰さく、「不なり、瞿曇」と。痛・想・行・識は是れ常と爲すや、是れ非常と爲すや」と。對へて曰さく、「無常なり」と。世尊告げて曰はく、「設し復無常ならば變易の法と爲すや、汝頗ふらくは有と見る乎」と。對へて曰さく、「無きなり」と。世尊告げて曰はく、「此の五盛陰は是れ常なるや、無常なるや」と。尼犍子報へて曰さく、「無常なり」と。佛言はく、「設し復、無常ならば、變

「汝今虚空の中を觀よ」と。是の時尼犍子仰いで空中を觀ずるに密跡金剛力士を見、又空中の語を聞く、「設し汝如來の論に報へずば、當に汝の頭を破りて、七分と作すべし」と。見已つて驚恐し、衣毛皆竪ち、世尊に白して言さく、「唯、願くは瞿曇、當に救濟せ見るべし。今更に問論したまへ、當に相酬對すべし」と。世尊告げて曰はく、「云何が尼犍子、轉輪聖王は當に復老ゆべき乎。亦當に頭白く、齒落ち、皮緩み、面皺むべき耶」と。尼犍子報へて曰さく、「沙門瞿曇、此の語有りと雖も、我義の如くんば、色は是れ常なり」と。世尊告げて曰はく、「汝善く思惟して後、之に報へよ、前と後とは義相應せず、但共に論ぜよ、聖王は當に復老ゆべき乎、亦當に頭白く、齒落ち、皮緩み面皺むべき耶」と。尼犍子報へて曰さく、「轉輪聖王は老ひ使むることを許すや」と。世尊告げて曰はく、「轉輪聖王は常に能く己の國に於て自由を得たり。何を以ての故に老を却け、病を却け、死を卻くること能はざるや、我は老・病・死を用ひず、我は是れ之を常とす、然ら使めんと欲す應きこと、其の義可なる乎」と。是の時尼犍子默然として對へず。愁憂ひて樂しまず、寂然として語らず。

是の時尼犍子、身體より汗出で、衣裳を汚汗し、亦坐處に徹して乃ち地に至る。世尊告げて曰はく、「尼犍子、汝、大衆の中に在りて師子吼し、『汝等童子、我と共に瞿曇の所に至り、與共に論議して、當に降伏し、長毛の羊を捉へて、意に隨つて東西して、疑難無きが如かるべし。亦大象の深水中に入り、意に隨つて自ら遊び、亦畏るゝ所無きが如く、亦兩の健丈夫、一の劣者を捉へ、火上に在りて炙り、意に隨つて轉側するが如し』と。又復汝は說けり、『我常に能く論じて大象を害せり、此の如く樑柱草木斯れ皆無情なるも、與共に論議して、能く屈伸低仰せ使め、亦能く腋下をして、汗を流さ使む』と」。爾の時世尊、三法衣を擧げて尼犍子に示して曰はく、「汝、如來の腋に流汗無きを觀るや、然るに汝今日返つて更に汗有りて、乃ち地に徹せり」と。是の時尼犍子、復默然として對へず。

【三】密迹金剛力士は、前卷索引密迹力士をみよ。

て諸弟子を誡訓するや」と。佛、尼犍子に告げたまはく、「我の說く所は、色は無常なり、無常なれば即ち是れ苦なり、苦なれば即ち是れ無我なり。無我なれば即ち是れ空なり、空なれば彼は我有に非らず、我は彼の有に非らず。痛・想・行・識及び五盛陰は皆悉く無常なり、無常なれば即ち是れ苦なり、苦なれば無我なり、無我なれば是れ空なり、空なれば彼我有に非らず、我は彼の有に非らず、我の敎誡は其の義是の如し」と。尼犍子報へて曰く、「我此の義を聞くを樂しまず、然る所以は、我の解る所の義の如きは、色は是れ常なり」と。世尊告げて曰はく、「汝今且く心意を專らにして、妙理を思惟せよ。然る後に之を說かん」と。尼犍子報へて曰さく、「我今說く所は、色は是れ常なり。此の五百の童子も其の義亦爾り」と。世尊告げて曰はく、「汝今說く所、『色は是れ常にして、此の五百の童子も其の義亦爾り』と」。世尊告げて曰はく、「汝今己の辯を以て之を說くに、何ぞ彼の五百人を引くと爲ん乎」と。尼犍子報へて曰さく、「我今色は是れ常なりと說く、沙門は何等を言論せんと欲するや」と。世尊告げて曰はく、「我今色は無常なり、亦復無我なりと說く、權詐言數此の色なる者有らば、亦眞實無く、固無く、牢無きこと亦薩搏の如く、是れ等は磨滅の法、是れ變易の法なり。汝今方に色は是れ常なりと說かば、我還つて汝に問はん、意に隨つて我に報へよ。云何が尼犍子、轉輪聖王は已れの國に還つて、自在を得るや不乎。又彼の大王は、脫す應からずして之を脫し、繫ぐ應からずして之を繫ぎ、爾ることを得可き乎」と。尼犍子報へて曰さく、「此の聖王には此の自在の力有り、殺す應からざる者も能く之を殺し、繫ぐ應からざる者も能く之を繫ぐ」と。世尊告げて曰はく、「云何が尼犍子、轉輪聖王は當に復老ゆべき乎。頭白く面皺衣裳垢に坋るゝや」と。是の時尼犍子、默然として報へず。世尊再三之を問ひたまふも、彼れ亦再三默然として報へざりき。

是の時密跡金剛力士、手に金剛の杵を執り、虛空中に在りて、之に告げて曰く、「汝今論に報へずば、如來の前に於て、汝の頭を破つて七分と爲さん」と。爾の時世尊、尼犍子に告げて曰はく、

以は、我義の如きは、色は是れ常なり。沙門の義は色は無常なり。何れの日か當に沙門瞿曇を見て與共に論議すべく、當に沙門瞿曇の顚倒の心を除くべし」と。

爾の時毘舍離城の五百の童子、一處に集在し、所論有らんと欲す。是の時尼犍子、五百の童子の所に往至し、童子に語げて曰く、「汝等皆來れ、共に沙門瞿曇の所に至らん。然る所以は、意に彼の沙門瞿曇と共に論ぜんと欲す。彼の沙門をして正諦の道を見ることを得し使ん。沙門の說く所は、『色は無常なり』と、我義の如きは、色は是れ常なり。猶し力士の手に長毛の羊を執らへ、意に隨つて將ひて東西し、亦疑難無きが如く、我も今亦是の如し。彼の沙門瞿曇と論議し、我に隨つて捉へ、捨てゝ疑難無きこと、猶し猛象凶暴にして六牙有り、深山の中に在りて戲れ、亦難き所無きが如く、我も今亦復是の如し。彼と論議して亦疑難無きこと、猶し兩健丈夫、一の劣者を捉へ、火上に在りて炙り、意に隨つて轉側するに、亦疑難無きが如く、我今彼と論議するも亦疑難無し。我論議中尙能く象を害す、何に況んや人を乎。亦能く象をして東西南北せ使めんこと、豈人の如からざらん乎。今此の講堂の樑柱は無情の物、尙能く移轉せ使む。何に況んや人と共に論じて、能く我に勝れん乎。彼の血をして面孔從り出して命終せ使めん」と。

共の中に或は童子有りて是の言を作さく、「尼犍子は終に沙門と論議すること能はじ、但恐らくは、沙門瞿曇、尼犍子と論議せん耳」と。或は是の說を作す有り、「沙門は尼犍子と論議すること能はず。尼犍子は能く沙門と共に論議せん」と。是の時尼犍子便ち是の念を作さく、「設令し沙門瞿曇の所說にして、馬師比丘の如くんば、相酬するを得るに足るも、若し更に義有らば、聞き已つて當に知るべし」と。

是の時尼犍子、五百の童子を將ひ、前後に圍遶せられて世尊の所に往至し、共に相問訊し、一面に在りて坐す。是の時尼犍子、世尊に白して言さく、「云何が瞿曇、何の教誡有り、何の教へを以

不漏行を知る。然る所以は、我今亦此の念を生ぜり、諸有の人民、女人と手足相加へば、諸の亂想を起す。我時に便ち此の念を生ず、此の人の行ひ清淨ならず、婬・怒・癡と共に相應す。第一の更樂は女人是れなり。第一の可欲は所謂眼根相視て然して彼の女人、或は語り、或は笑ひて男子を繫綴し、或は共に言語して男子を繫綴す。是の時我れ便ち此の念を生ぜり。此の六人は盡く不清淨の行を行ず。如來の今日說きたまふ所、甚だ過ぎたり。猶し盲者の目を得、迷へる者路を見、愚者の道を聞き、目有るの人の色を見るが如く、如來の說法も亦復是の如し。我今自ら佛・法・衆に歸しまつる。今自り後、復殺生せじ、唯、願くは優婆塞爲ることを受けよ」と。爾の時生漏梵志、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

十

[一九]聞くこと是の如し。一時佛、毘舍離城外の林中に在し、大比丘衆五百人と倶なりき。爾の時尊者[二〇]馬師、時到つて衣を著け、鉢を持し、城に入つて乞食しぬ。是の時[二一]薩遮尼犍子、遙に馬師の來れるを見、卽ち往いて馬師に語げて曰く、「汝の師は何等の義、何の敎訓有り、何の敎誡を以て弟子に向ひて說法する乎」と。馬師報へて曰く、「梵志、色は無常なり、無常なれば卽ち是れ苦なり。苦なれば卽ち是れ無我なり。無我なれば卽ち是れ空なり。空なれば彼は我有にあらず、我は彼の有に非らず。是の如きは智人の學ぶ所なり。痛・想・行・識は無常なり、此の五盛陰は無常なれば卽ち是れ苦なり、苦なれば卽ち是れ無我なり、無我なれば卽ち是れ空なり。空なれば彼我有に非らず、我彼の有に非らず、卿知らんと欲せば、我師の敎誡は其の義是の如し。諸の弟子の與に是の如きの義を說きたまふなり」と。

是の時尼犍子、兩手を以て耳を掩ひて是の言を作さく、「止みなん、止みなん、馬師、我此の語を聞くを樂しまず。設し瞿曇沙門にして、此の敎へ有らば、我實に聞くを樂しまざるなり。然る所

---

[一九] M. 35. Saccaka.「雜阿含經」第一〇〇經（卷四）。
[二〇] 馬師（Assaji）。
[二一] 薩遮尼犍子 （Saccaka-nigaṇṭha-putta）。

有りて、云何が梵行を修むることを得て、缺漏有ること無く、清淨にして梵行を修むるや」と。世尊告げて曰はく、「若し人有りて戒律具足して、所犯無くば、此れを清淨にして、梵行を修得すと名く。復次に梵志、若し眼有りて色を見るも、想著を起さず、識念を起さず、惡想を除き、不善の法を去り、眼根を全うすることを得、是れを此の人、清淨にして梵行を修むと謂ふなり。若し耳聲を聞き、鼻香を嗅ぎ、舌味を知り、身細滑を知り、意に法を知るも、都て識想無く、想念を起さず、清淨にして梵行を修むることを得、其の意根を全うす。此の如きの人、梵行を修むることを得て、缺漏有ること無し」と。婆羅門、佛に白して言さく、「何等の人か梵行を修めず、清淨行を具足せざるや」と。世尊告げて曰はく、「若し人有りて、倶に會せば此れを非梵行と名く」と。婆羅門、佛に白して言さく、「何等の人か漏行具足せざるや、世尊告げて曰はく、「若し人有りて女人と交接し、或は手足相觸れ、心懷に檝在して忘失せず。是れを梵志、行じて具足せず、諸の淫泆を漏らし、婬・怒・癡と共に相應すと謂ふなり。

　復、次に梵志、或は女人と共に相調戲し、言語相加ふ。是れを梵志、此の人行じて全く具せず、婬・怒・癡を漏らし、梵行具足して、淸淨行を修めずと謂ふなり。復、次に梵志、若し女人有りて、惡眼相視て移轉せず、中に於て便ち婬・怒・癡の想を起し、諸の亂念を生ず。是れを梵志、此の人梵行して淨からず、梵行を修めずと謂ふなり。復次に梵志、若し復人有りて、遠く聞き、或は哭聲を聞き、或は笑聲を聞き、中に於て婬・怒・癡を起し、諸の亂想を起す。是れを梵志、此の人清淨にして、梵行を修めず、と婬・怒・癡と共に相應し、行じて全具せずと謂ふなり。復次に梵志、若し人有りて、曾て女人を見、後更に想を生じ、其の頭目を憶ひ、中に於て想を生じ、屏閑の處に在りて婬・怒・癡を生じ、惡行と相應す。是れを梵志、此の人梵行を修せずと謂ふなり」と。是の時生漏梵志、世尊に白して言さく、「甚奇、甚特、此の沙門瞿曇も亦梵行を知り、亦不梵行を知り、亦漏行を知り、亦

爾の時世尊、梵志に告げて曰はく、「刹利種の者は、常に鬪訟を好み、諸の技術多く、作務を好み喜び、所要究竟して終に中休せず」と。梵志問ふて曰さく、「梵志は意に何をか求むる所ぞ」と。世尊告げて曰はく、「梵志は意に呪術を好み、要らず居家を作し、閑靜の處を樂しみ、意梵天に在り」と。又問ふて曰さく、「國王は意に何をか求むる所ぞ」と。世尊告げて曰はく、「梵志、當に知るべし、王の意に欲する所は、國政を得、意兵仗に在りて財寶に貪著す」と。「盜賊は意に何をか求むる所ぞ」と。世尊告げて曰はく、「賊は意に盜竊心姦邪に在りて、人類をして所作を知らざら使めんと欲す」と。「女人は意に何をか求むる所ぞ」と。世尊告げて曰はく、「女人は意男子に在りて、財寶に貪著し、心、男女を繫ぎ、心、自由を欲す」と。

爾の時梵志、世尊に白して言さく、「甚奇、甚特、盡く爾許の變を知り、實の如くにして虛ならず。今日比丘は意に何を求むる所ぞ」と。世尊告げて曰はく、「戒德具足し、心道法に遊び、意四諦に在りて、涅槃に至らんと欲す。此れは是れ比丘の求むる所なり」と。是の時生漏梵志、世尊に白して言さく、「是の如し、世尊、比丘の所行意移轉す可からず。其の義實に爾り、瞿曇、涅槃とは極めて快樂爲り、如來の所說は乃ち過多爲り、猶し盲者の視ることを得、聾者の聽くことを得、闇に在る者明を見るが如く、今日如來の所說も亦復是の如し。異り有ること無し。我今國事猥りに多し、所止に還えらんと欲す」と。世尊告げて曰はく、「宜しく是れ時を知るべし」と。是の時生漏梵志、即ち座從り起ち、佛を遶ること三匝して、便ち退いて去りぬ。爾の時生漏梵志、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

九

[一八]聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時生漏梵志、世尊の所に往至し、頭面に足を禮し、一面に在りて坐す。爾の時梵志、世尊に白して言さく、「此の中に頗ふらくは比丘

【一八】 A. VII. 47. Methunā.

し、誰か此の八萬戸の虫を造りしや」と。爾の時彼の比丘、是の念を作して思惟すらく、「便ち二果を獲ん、阿那含若しは阿羅漢なり」と。爾の時世尊、便ち此の偈を說きたまはく、

三百六十の骨　此の人身の中に在り　古佛の演ぶる所　我今亦之を說く　筋に五百枚有り　脈數に亦是の如し　虫に八萬種有り　九萬九千の毛なり　當に身を觀ずるに是の如くすべし　比丘にして勤めて精進せば　速に羅漢道を得て　涅槃界に往至せん　此の法は皆空寂にして　愚者の貪る所なり　智者は心歡悅して　此の空法の本を聞く。

と。「是れを比丘、此れを第一最空の法と名くと謂ふなり。汝等の與に如來の所施の法を說けり、我今已に慈哀心を起すと爲す。我今已に辦ぜり。常に當に念じて其の法を修行し、閑居の處に在りて坐禪し、思惟して懈怠有ること勿るべし。今修行せずば、後に悔ひるも益無けん。此れは是れ我敎訓なり。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

八

〔六〕聞くこと是の如し、一時佛、舍衛國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時〔七〕生漏梵志、世尊の所に往至し、共に相問訊して一面に在りて坐す。爾の時生漏梵志世尊に白して言さく、「瞿曇、刹利は今日意に何を求めんと欲するや、何の行業有りて、何の敎へに著すと爲し、究竟して何事を爲すや。婆羅門は、意に何を求めんと欲し、何の行業有り、何の敎へに著すと爲し、何事を究竟するや、國王は今日意に何を求めんと欲し、何の行業有るや、何の敎へに著すと爲し、究竟して何事を爲すや、盜賊は今日、意に何を求めんと欲し、何の行業有りて、何の敎へに著すと爲し、究竟して何事を爲すや、女人は今日、意に何を求めんと欲し、何の行業有りて、何の敎へに著すと爲し、究竟して何事を爲すや」と。



〔六〕 A. VI. 52. Khattiya.
〔七〕 生漏梵志 (Jāṇussoṇi brāhmaṇa)。

なり。是れ無くば則ち無く、此れ滅すれば則ち滅す。無明、滅すれば則ち行滅し、行、滅すれば則ち識滅し、識、滅すれば則ち名色、滅し、名色、滅すれば則ち六入滅し、六入、滅すれば則ち更樂滅し、更樂、滅すれば則ち痛滅し、痛、滅すれば則ち愛滅し、愛、滅すれば則ち取滅し、取、滅すれば則ち有滅し、有、滅すれば則ち生滅し、生、滅すれば則ち死滅し、死、滅すれば則ち愁・憂・苦・惱皆悉く滅し盡す。假號の法を除く。耳・鼻・舌・身・意・法も亦復是の如く、起る時は則ち起るも、亦、來處を知らず、滅する時則ち滅するも、亦滅處を知らず。其の假號の法を除く、彼の假號の法とは、此れ起れば則ち起り、此れ滅すれば則ち滅す。此の六入も亦人の造作無く、父母に由つて胎有る者も、亦因緣無くして有り、此れも亦假號にして前有對を要し、然る後に乃ち有り、猶し木を鑽ちて火を求め、前有對を以て然る後に火生じ、火も亦木從り出でず、亦木を離れず。若し復人有りて、木を劈りて火を求めるも亦得ること能はず、皆因緣に由つて合會し、然る後に火有るが如く、此の六情の病を起すも亦復是の如く、皆緣に由つて會し、中に於て病を起すなり。此の六入起る時は則ち起るも、亦來るを見ず、滅する時則ち滅するも、亦滅を見ず。其の假號の法を除く。父母の合會に因由して有るなり」と。

爾の時世尊、便ち此の偈を說きたまはく、

先きに當に胞胎を受くべし　漸々にして凍酥の如く　遂に復息肉の如く　後轉じて像形の如し
先きに頭項頸を生じ　轉じて手足の指を生ず　支節各々生じ　髮毛爪齒成る　若し母飲食する時　種々若干の饌　精氣用つて活命し　受胎の原本たり　形體以て成滿し　諸根缺漏せず
母に由つて出生を得　受胎の苦は是の如し。

比丘、當に知るべし、因緣合會せば乃ち此の身有る耳、又、復比丘、一人身中の骨は三百六十有り、毛孔九萬九千、脈五百有り、筋五百有り、虫八萬戶なり。比丘當に知るべし、六入の身に是の如きの災變有り、比丘當に念じて思惟すべし。是の如きの患ひ、誰か此の骨を作り、誰か此の筋脈を合

根清淨にして殺害心無く、嫉妬心無し。是れを此の六法有りて善處に生ると謂ふなり。云何が六法を修めて涅槃に至るや、所謂六思念の法なり。云何が六と爲すや、所謂身に慈しみを行ひて瑕穢無く、口に慈しみを行ひて瑕穢無く、意に慈しみを行ひて瑕穢無し。若し利養の具を得ば、能く人の與に等しく、共に之を分ちて悋想無く、禁戒を奉持して瑕疵無きは、智者の貴ぶ所なり。是の如きの戒、能く諸有の邪見正見を具足し、賢聖出要して能く苦の本を盡くすことを得、是の如きの諸見、皆悉く分明す。是れを六法涅槃に至ることを得と謂ふなり。汝、今比丘、當に方便を求めて、此の六法を行ずべし。是の如く比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時彼の比丘、重ねて座從り起ち、舍利弗の足を禮し、「我、今重ねて自ら懺悔せん、愚の如く、惑の如くして、眞を別たざりき。唯、願くは舍利弗、我悔過を受けよ、後復犯さじ」と。舍利弗曰く、「汝の悔過を聽さん。賢聖の法中、極めて曠大爲り、能く自ら往を改め、來を修めて、復更に犯すこと莫かれ」と。爾の時彼の比丘、舍利弗の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

七

[二]聞くこと是の如し、一時佛、舍衛國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「我今當に第一の最空の法を說くべし。汝等善く之を思念せよ」と。諸比丘對へて曰さく、「是の如し世尊」と。爾の時諸比丘、佛從り敎へを受く。世尊告げて曰はく、「彼云何が名けて第一の最空の法と爲すや。若し眼起る時は則ち起るも、亦來處を見ず、滅する時は則ち滅するも、亦滅處を見ず、假號の法、因緣の法を除く。云何が假號・因緣なるや、所謂是れ有れば則ち有り、此れ生ずれば則ち生ず。[三]無明は[四]行に[五]緣り、行は[六]識に緣り、識は[七]名色に緣り、名色は[八]六入に緣り、六入は[九]更樂に緣り、更樂は[一〇]痛に緣り、痛は[一一]愛に緣り、愛は[一二]取に緣り、取は[一三]有に緣り、有は[一四]生に緣り、生は[一五]死に緣り、死は愁・憂・苦・惱に緣りて稱計す可からず。是の如く苦陰は此の因緣を成ずる



【二】「雜阿含經」第十三卷第三四經。
【三】無明(Avijjā)。癡ともいひ、四諦の理に對する覺知、卽ち盲目的に生きん〻する根本欲望、渴愛のこと。
【四】行(Saṅkhāra)とは、身口意の三業卽ち過去の業を意味す。
【五】緣る(Paccayā)。
【六】識(Viññāna)とは、心、精神。
【七】名色(Nāmarūpa)とは、有情の身心を組成するの五蘊。
【八】六入(Saḷāyatanāi)は、六處ともいひ、眼・耳・鼻・舌・身・意の六官をいふ。
【九】更樂(Phassa)は、觸ともいひ、感覺又は知覺。
【一〇】痛(Vedanā)は、受ともいひ、感情。
【一一】愛(Taṇhā)とは、欲情。
【一二】取(Upādāna)とは、取著し追求する心。
【一三】有(Bhavā)とは、三界の生。
【一四】生(Jāti)とは、生れるといふこと。
【一五】死(Maraṇa)は、現實の老・病・愁・憂・悲・苦・惱を含みしもの、この十二を十二緣起又は十二因緣といふ。前卷索引「十二緣法」を見よ。

自ら當に之を知りたまふべし。彼の比丘も亦當に之を知るべし。設し是れ有らば、願くは彼の比丘、我懺悔を受くべし」と。

爾の時世尊、彼の比丘に告げたまはく、「汝今自ら悔過す可し。然る所以は、若し悔ひずば、頭便ち破れて七分と爲らん」と。是の時彼の比丘、心に恐怖を懷き、衣毛皆竪ち、即ち座從り起ち如來の足を禮し、世尊に白して言さく、「我、今自ら舍利弗を犯せしを知れり、唯、願くは世尊、我懺悔を受けたまへ」と。世尊告げて曰はく、「汝、比丘、自ら舍利弗に向ひて懺悔せよ、若し爾らずば、頭便ち七分と爲らん」と。是の時彼の比丘、即ち舍利弗に向ひ、頭面に足を禮し、舍利弗に白して言く、「唯、願くは我懺悔を受けよ、愚にして眞を別たざりき」と。

爾の時世尊、舍利弗に告げたまはく、「汝、今此の比丘の悔過を受く可し。又手を以て頭を摩せよ。然る所以は、若し當に此の比丘の懺悔を受けずば、頭破れて七分と爲るべし」と。爾の時舍利弗、手を以て頭を摩し、比丘に語げて曰く、「汝の懺悔を聽さん。愚の如く、惑の如きは、此の佛法中極めて曠大爲り。能く時に隨つて悔過するは善い哉、今汝の懺悔を受けん、後更に犯すこと莫かれ」と。是の如きこと再三なり。

是の時舍利弗、彼の比丘に告げて曰く、「汝更に犯すこと莫かれ、然る所以は、六法有りて地獄に入り、六法天に生じ、六法涅槃處に至る。云何が六と爲すや、他人を害せんと欲し、我已に此の害心を起さば、便ち歡喜踊躍して、自ら勝ふること能はず、我、當に人に教へて、他を害せ使むべし。中に於て害心を起し、已に人を害することを得ば、中に於て歡喜を起し。我、當に此の不馨の問ひを得べし。未だ此の事を起さずば、便ち愁憂ひを懷かん。是れを此の六法有りて、人をして惡趣に墮せ令むと謂ふなり。

云何が六有りて、人をして善處に至ら令むるや、所謂身戒具足し、口戒具足し、意戒具足し、命

なる可し」と。

舍利弗、佛に白して言さく、「母胎を出でゝ自り年八十に向ふ、毎に自ら思惟して、未だ曾て殺生せず、亦妄語せず、正使ひ調戯の中に於ても亦妄語せず、亦復未だ曾て彼此と鬪亂せず。設ひ意を專らにせざるの時も、或は能く此の行有る耳。我今世尊、心意淸淨なり、豈當に梵行人と共に鬪諍すべけん乎。亦此の地も亦淨を受け、亦不淨を受く、屎尿穢惡皆悉く之を受く、膿血・涕唾終に之に逆はず。然るに此地亦惡を言はず、亦善を言はざるが如く、我も亦是の如し、世尊、心移轉せず、何ぞ梵行人と共に諍ひて遠く遊行することを得んや。心專らならざる者に能く此れ有る耳。我今心正し、何ぞ梵行人と共に諍ひて、遠く遊ぶことを得ん乎。亦水亦能く好物をして淨なら使め、亦能く不好物をして淨なら使むるも、彼の水は是の念を作さず、『我是れを淨めて是れを置く』と。我も亦是の如く、異想有ること無し。何ぞ梵行人と共に鬪ひて、遠く遊ぶことを得ん乎。猶し熾火の山野を焚燒して好醜を擇ばず、終に想念無きが如く、我も亦是の如し、豈當に意に梵行人と共に諍ふこと有るべけん乎。亦、掃灑の好醜を擇ばず、皆能く之を除き、終に想念無きが如く、猶し牛の共の雙角無くんば、極めて自ら良善くして、亦佪暴ならず、善く將て御す可く、意の所至に隨ふて、終に疑難無きが如し。唯、然り、世尊、我心は是の如し。亦想の興に傷害する所有らず、豈當に梵行人と共に諍ひて、遠く遊ぶべけん乎。亦旃陀羅の女の弊壞衣を著け、人間に在りて乞食するも亦、禁忌無きが如く、我も亦是の如し、世尊、亦想念無し、當に諍訟を興して遠く、遊ぶべけんや。亦脂釜の處々に漏壞せば、有目の人皆悉く處々の漏出を觀見するが如く、我も亦是の如し、世尊、九孔の中、不淨を漏出す、豈當に梵行人と共に諍ふべけんや。猶し女人の年少端正にして、復死尸を以て彼女の頸を繫げば、之を患々するが如く、世尊、我も亦是の如く、此の身を厭患すること彼の如くして異ること無し。豈當に梵行人と共に諍ひて遠く遊ぶべけん乎。此の事、然らざるなり。世尊、

# 卷の第三十

## 六重品第三十七の二

六

聞くこと是の如し。一時佛、舍衛國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時尊者舍利弗、世尊の所に往詣し、頭面に足を禮し、一面に在りて坐す。爾の時舍利弗、世尊に白して言さく、「我今已に舍衛城に在りて夏坐せり、意に人間に遊化せんと欲す」と。世尊告げて曰はく、「今正に是れ時なり」と。時に舍利弗、卽ち座從り起ち、頭面に足を禮し、便ち退きて去りぬ。時に舍利弗去りて久しからずして、一比丘有り、誹謗の意を懷き、世尊に白して言さく、「舍利弗は諸の比丘と共に、諍ひ競ふて懺悔せず、今、人間に遊行す」と。爾の時世尊、一比丘に告げたまはく、「汝、速に往いて、吾聲を持して舍利弗を喚べ」と。比丘對へて曰さく、「是の如し、世尊」と。

佛、目連・阿難に勅したまはく、「汝等諸の房中の諸比丘をして召し、世尊の所に詣ら使めよ、然る所以は、舍利弗所入の三昧、今、當に如來の前に在りて師子吼を作すべし」と。是の時諸比丘、佛の敎へを聞き已つて、各、世尊の所に集まり、頭面に足を禮し、一面に在りて坐す。是の時彼の比丘、世尊の敎へを受け、卽ち舍利弗の所に往至し、舍利弗に語げて言く、「如來は相見ることを得んと欲したまふ」と。爾の時舍利弗、佛の所に往至し、頭面に足を禮し、一面に在りて坐す。是の時佛、舍利弗に告げて言はく、「汝は向者去りて久しからざるに、一穢行の比丘、我所に來至して、我に白して言く、『舍利弗比丘は諸の比丘と共に諍ひて亦悔過せず、人間に在りて遊化す』と、審實に爾る乎」と。舍利弗、佛に白して言さく、「如來は自ら當に之を知りたまふべし」と。世尊、告げて曰はく、「我自ら知る耳、但今大衆各狐疑を懷けり。汝今大衆の中に於て、以て己れ辯ぜよ、自ら明淨

【一】A. IX. 11.

に此の間に來生し、自ら此の如き無數劫の事を憶せんと欲せば、當に戒德の具足を念じて他念無かるべし。

若し復比丘にして、意に天眼を求めんと欲し、徹視して衆生の類の善趣・惡趣・善色・惡色、若しは好、若しは醜を觀じ、如實に之を知り、或は復衆生有りて、身・口・意に惡を行じ、賢聖を誹謗し、身壞命終して地獄の中に生じ。或は復衆生有りて、身・口・意に善を行じ、賢聖を誹謗せず、心意正見にして、身壞命終して善處天上に生じ、意に是の如きを欲せば、當に戒德の具足を念ずべし。若し復比丘にして、意に有漏を盡し、無漏を成じ、心解脫し、智慧解脫して、生死已に盡き、梵行已に立ち、所作已に辦じて、更に復胎を受けず、如實に之を知らんことを求めんと欲せば彼、當に戒德の具足を念じ、內に自ら思惟して亂想有ること無く、閑處に居在すべし。諸比丘、當に戒德の具足を念じて、他の餘念無かるべし。威儀成就し具足して、少過も常に恐る、何に況んや大をや。若し比丘有りて、意に如來をして共に論ぜ使めんと欲せば、當に戒德の具足を念ずべし。已に戒德具足せば、當に聞の具足を念ずべし。聞已に具足せば、當に施の具足を念ずべし。施已に具足せば、當に智慧の具足解脫知見皆悉く具足することを念ずべし。若し比丘有りて、戒身・定身・慧身・解脫身・解脫知見身を具足せば、便ち天・龍・鬼神の爲に供養せ所見れ、敬ふ可く、貴ぶ可く、天人の奉ずる所なり。是の故に諸比丘、當に五分法身具足の者を念ずべし。是れ世の福田にして、能く過ぐる者無し。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

# 增壹阿含經卷第二十九

## 六重品第三十七の一

「若しは比丘有りて、此の念を生ぜん、『如來は躬ら我に教訓したまはんことを』と。彼の比丘、戒具清淨にして瑕穢有ること無く、止觀を修行し、閑靜の處を樂しまん。若し復比丘にして、意に衣被・飲食・床敷臥の具・病瘦の醫藥を求めんと欲せば、亦當に戒德成就し、空閑處に在りて、自ら修行し、止觀と共に相應すべし。若し復比丘にして、知足を求めんと欲せば、當に戒德の具足を念じ、閑靜處に在りて自ら修行し、止觀と共に相應すべし。若し復比丘にして、求めて四部の衆・國王・人民・有形の類をして所見を識知せ使めんと欲せば、彼當に戒德の具足を念ずべし。若し復比丘にして、意に四禪を求めんと欲せば、悔心無く、亦變易せず、當に戒德の成就を念ずべし。若し復比丘にして、意に四神足を求めんと欲せば、彼れも亦當に戒德を具足すべし。若し復比丘にして、意解脫門に入り、罣礙無からんことを求めんと欲せば、彼れ當に戒德の具足を念ずべし。若し復比丘にして、意天耳を求めて、徹聽して天人の聲を聞かんと欲せば、當に戒德の具足を念ずべし。若し復比丘にして、意他人の心中の所念、諸根の缺漏を知ることを求めんと欲せば、彼れ亦當に戒德の具足を念ずべし。若し復比丘にして、意衆生の心意を知ることを求めんと欲し、『欲心有り、欲心無し、瞋恚心有り、瞋恚心無し、愚癡心有り、愚癡心無し』と、如實に之を知り、『愛心有り、愛心無し、受心有り、受心無し』と如實に之を知り、『亂心有り、亂心無し、疾心有り、疾心無し、少心有り、少心無し、量心有り、量心無し、痛心有り、痛心無し、三昧心有り、三昧心無し、解脫心有り、解脫心無し』と、如實に之を知り、是の如く知らんと欲せば、當に戒德の具足を念ずべし。若し復比丘にして、意に無量の神足を得て、一身を分ちて無數と作し、復還つて合して一と爲し、湧沒自在にして、能く身を化して乃ち梵天に至らんと欲せば、彼れ當に戒德の具足を念ずべし。若し復比丘にして、意に自ら宿世の無數劫の事を憶することを求め、或は一生・二生乃至千生・百千億生・成劫・敗劫・成敗の劫、稱計す可からず。我曾て此に死して彼に生れ、名は某、字は某、或は彼從り終

若し比丘有りて、村落に依りてし住、彼れ時到つて衣を著け、鉢を持して村に入りて乞食す。彼已に乞食し已つて所在に還歸り、手面を洗ひ、一樹下に在りて、正身正意に結跏趺坐し、繫念して前に在り。彼の比丘便ち是の念を作さく、『我今坐を壞らず、要らず當に有漏を盡くして無漏を成ずべし』と。爾の時彼の比丘即ち有漏より心解脫を得、是の如く比丘、宜しく牛師子園中に在るべし。是の如く比丘、恒に勤めて精進して、懈怠有ること莫かれ、所在の處に宗奉せざる者靡し。是の如く比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

四

[一四] 聞くこと是の如し、一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「我今當に呪願を說くべし。六德有り、汝等諦に聽き、善く之を思念せよ」と。諸比丘對へて曰さく、「是の如し、世尊」と。爾の時諸比丘、佛從り敎へを受く、世尊告げて曰はく、「彼れ云何が名けて六德と爲すや、是に於て施主檀越は三法を成就す。云何が檀越施主は三法を成就するや。是に於て檀越施主は信根成就し、戒德成就し、聞成就す、是れを檀越施主は此の三法を成就すと謂ふなり。施物の法復三法を成ず、云何が三と爲すや、然るに彼の物の色成就し、味成就し、香成就す。此の三法有り。是れを比丘、此の六事有りて大功德を獲、名德遠く聞こえ、甘露の報ひを獲と謂ふなり。是の故に諸比丘、若し此の六事を成就せんと欲せば、當に惠施を念ずべし。是の如く比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

五

[一五] 聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、無央數の衆の與に、爲に法を說きたまひき。爾の時座上に一比丘有りて、便ち此の念を生ずらく、「願くは如來、我に告ぐるに論說する所有らんことを」と。爾の時世尊、比丘の心中の所念を知り、諸比丘に告げたまはく、



【一四】 cf. A. VI. 37. Dāna.

【一五】 A. VI. 2. Āhuneyya.

說の如し。然る所以は、阿難比丘は法を聞いて能く持ち、諸法を總攝し、具足して梵行を修行す。此の如きの法は善く聞いて忘れず、亦、邪見無く、四部の衆の與に說法して、言錯亂せず、亦卒暴ならず。離越比丘の所說も亦復快き哉、然る所以は、閑靜の處を樂しみ、人間に處らず、常に念じて坐禪して諍訟有ること無く、止觀と相應して、閑居寂寞なり。阿那律比丘も亦復快き哉、然る所以は、阿那律比丘は天眼第一なり。彼れ天眼を以て三千世界を觀ずること、猶し有眼の人の、掌中に珠を觀ずるが如く、阿那律比丘も亦復是の如し。彼れ天眼を以て、此の三千大千世界を觀じて疑難無し。今迦葉比丘も亦復快き哉、然る所以は、迦葉比丘は己身是れ阿練若行にして、復能く閑居の行を歎說し、身能く乞食し、復能く乞食の德を歎譽し、身に〔二〕補納衣を著け、復能く補納衣の德を歎說す。己身〔三〕足るを知り、復能く知足の德を歎說し、己身巖穴に處り、復能く巖穴に德を歎說す。己身戒成就し、三昧成就し、智慧成就し、解脫成就し、解脫見慧成就し、復能く人に此の五分法身を成ずることを敎へ、身能く敎化し、復能く人を敎へて其の法を行ぜ使む。善い哉、善い哉、目連の所說の如し。然る所以は、目連比丘は大威力有り、神足第一にして心自在を得たり。彼れ意に所爲せんと欲せば、則ち能く之を辦じ、或は一身を化して分ちて萬億と爲し、或は還えつて合して一と爲し、石壁皆過ぎて罣礙有ること無く、涌沒自在にして、亦駛水も亦觸礙無きが如く、空中の鳥も亦足跡無きが如きこと、猶し日月の照さゞる所靡きが如く、能く身を化して乃ち梵天に至る。善い哉、舍利弗の所說の如し。然る所以は、舍利弗は能く心を降伏し、心能く舍利弗を降伏するに非らず。若し三昧に入らんと欲する時は、則ち能く成辦して疑難有ること無きこと、猶し長者の好き衣裳、意に隨つて之を取つて疑難無きが如し。舍利弗比丘も亦復是の如く、能く心を降伏し、心能く降伏するに非らず。舍利弗意に隨つて三昧に入れば、皆悉く在前す。善い哉、善い哉、諸比丘、汝等の所說は、各方便に隨へり。但し今復我說く所を聽け。云何が比丘、牛師子園中に樂しむや。

〔二〕補納衣を著くとは、三衣を著ける人(Tecivariko)。
〔三〕足るを知る(Santuṭṭho)

を說け。牛師子園中の快樂雙び無し、汝今云何が之を說かんと欲するや」と。目連報へて曰く、「是に於て比丘、大神足有り、神足に於て自在を得、彼れ能く無數の千事を變化して疑難無く、亦一身を分ちて無數の身と作し、或は復還つて合して一と爲し、石壁皆過ぎ、湧沒自在なること亦駛河の如く、猶し飛鳥の空中に在りて跡無きが如し。譬へば暴火の山野を焚燒するが如く、亦日月の照らさゞる所靡きが如し。亦能く手を擧げて日月を摩抆し、亦能く身を化して梵天上に至る。此の如きの比丘、牛師子園中を宜しくせん」と。

是の時目連、舍利弗に語げて曰く、「我等各、其の辯に隨つて之を說けり。我等今舍利弗に義を問はん。牛師子園は極めて快樂と爲す。何等の比丘か其の中に在る宜きや」と。舍利弗言く、「若し比丘有りて、能く心を降し、然も彼の比丘の心比丘を降すこと能はず。設し彼の比丘、三昧を得んと欲し、卽時に彼の比丘能く三昧を得、意遠近に隨ひて三昧を成ずる者は、卽ち能く之を成辦すること、猶し長者の家に好衣有りて、箱篋に盛著し、爾の時彼の長者、意に隨つて何等かの衣を取らんと欲し、意に隨つて之を取りて、疑難無く、亦能く意に隨つて三昧の中に入るが如し。此れも亦是の如く、心能く比丘を使ひ、比丘能く心を使ふに非らず、隨意に三昧に入りて亦疑難無し。是の如く比丘能く心を使ひ、心比丘を使ふに非らず。是の如きの人、宜しく牛師子園中に在るべし」と。

是の時舍利弗、諸賢に告げて曰く、「我等其の辯に隨ひて說き、各方宜に隨つて、善く此の義を說けり。今各相將ひて、往いて世尊に問ひまつらん。「云何が比丘、此の牛師子園を樂しみ得るや。若し世尊にして所說有らば、我等當に奉行すべし」と。諸比丘報へて曰く、「是の如し、舍利弗」と。

是の時大聲聞等各々相將ひて、如來の所に往至し、到り已つて頭面に足を禮し、一面に在りて坐す。爾の時大聲聞、此の因緣を以て具に佛に白しす。爾の時世尊、告げて曰はく、「善い哉、阿難の所

修行す、此の如く諸法皆悉く具足して亦漏脫せず、四部の衆の與に說法爲て次第を失はず、亦卒暴ならず、亂想有ること無し。是の如きの比丘、此の牛師子園に在らば快樂しからん」と。

是の時舍利弗、離越に語げて曰く、「阿難は今日已に之を演舌せり。我今復汝に義を問はんと欲す。牛師子園は快樂しきこと是の如し。汝今次に說け、義復云何」と。離越報へて曰く、「是に於て比丘、閑靜の處を樂しみ、思惟し坐禪して[二]止觀と相應す。是の如きの比丘は牛師子園中に樂しむ」と。

是の時舍利弗、阿那律に語げて曰く、「汝今當に快樂の義を說くべし」と。阿那律報へて曰く、「若し比丘有りて、天眼もて觀じ、衆生の類の死者・生者・善色・惡色・善趣・惡趣、若しは好、若しは醜を徹視して、皆悉く之を知る。或は衆生有りて、身・口・意に惡を行じ、賢聖を誹謗し、身壞命終して地獄の中に生ず。或は復衆生有りて、身・口・意に善を行じ、賢聖を誹謗せざること、猶し士夫の空中を觀ずるが如く、備に悉くせざるは靡し。天眼の比丘有り、亦復是の如く、世界を觀じて疑難有ること無し。是の如きの比丘、牛師子園中に在らば、快樂是の如からん」と。

是の時舍利弗、迦葉に語げて曰く、「我今汝に語ぐ、是の如く諸賢已に快樂の義を說けり。汝今次に之を說く應し」と。迦葉報へて曰く、「若し比丘有りて、阿練若行を行じ、復他人に敎へて阿練若を行ぜ使め、閑靜の德を歎說し、己身補納の衣を著け、復他に敎へて頭陀を行ぜ使め、身自ら足るを知り、閑居の處に在り、復他人を敎へて其の行を修め使め、己の身に戒德具足し、三昧成就し、智慧成就し、解脫成就し、解脫見慧成就す、復他人に敎へて其の法を行ぜ使め、其の法を歎說し已つて能く勸化し、復他人に敎へて其の法を行ぜ使め、敎訓して厭足無し。是の如きの比丘、牛師子園中に在らば、快樂比ひ無けん」と。

爾の時尊者舍利弗、大目連に語げて曰く、「諸の賢聖已に快樂の義を說けり。汝今次に快樂の義

【二】 止觀(Cetosamatha)。心寂靜なること。

若し比丘有りて此の六界・六入・六識を解る者は、能く六天を度して更に形を受けん。設し彼に於て壽終らば、此の間に來生し、聰明高才にして、現身上に於て結使を盡くし、涅槃に至ることを得ん」と。

爾の時世尊、目連に告げて曰はく、「汝今還えり、此の比丘を將ひて、彼の佛土に詣れ」と。目連報へて曰さく、「是の如し、世尊」と。是の時目連、復以て五百の比丘を絡盛し、佛を遶ること三匝して、便ち退いて去り、臂を屈伸するが如き頃に、以て彼の佛土に至りぬ。是の時目連、此の比丘を捨て已り、彼の佛足を禮し已つて、還つて此の[七]忍界に來詣しぬ。是の時彼の土の比丘、此の六界を聞き已つて、諸の塵垢盡きて法眼淨を得たり。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「我弟子中、第一の聲聞にして、神足の及び難きは、所謂大目犍連比丘是れなり」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

三

[八]聞くこと是の如し、一時佛、跋耆國[九]牛師子園中に在しき。諸の神足高德の比丘、賢者舍利弗・賢者大目犍連・賢者迦葉・賢者離越・賢者阿難等五百人と倶なりき。是の時大目犍連・大迦葉・阿那律・[一〇]晨旦、舍利弗の所に至れり。然るに阿難、遙に三大聲聞の舍利弗の所に詣るを見、離越に語げて言く、「三大聲聞、舍利弗の所に往至す、我等二人も亦舍利弗の所に往至すべし。然る所以は、備に舍利弗の奇妙の法を說くを聞かん」と。離越報へて曰く、「此の事然る可し」と。

是の時離越・阿難・舍利弗の所に往至す。是の時舍利弗、言く、「善くぞ來れり、諸賢、此の處に就て坐せ」と。是の時舍利弗、阿難に語げて曰く、「我今所問有らんと欲す。此の牛師子園は極めて快樂しと爲す。自然の天香四遠に流布す。云何が當に此の園をして快樂しから使むべきや」と。阿難報へて曰く、「若し比丘有りて、多く所聞有りて忘れず、諸法の義味を總持し、具足して梵行を



【七】忍界とは、娑婆世界のこと。娑婆(Saha 梵)を堪忍又は忍と譯す。忍上ともいひ、此の界は內に煩惱、外に寒暑風雨等の苦を堪え忍ばざるべからざるが故にこの名あり。
【八】M. 32. Mahāyosinga. 中阿含第一八四、牛角娑羅林經(卷四十八)。
【九】牛師子園(Gosingasāla-vanadāya)。
【一〇】晨旦とは、早朝のこと。

り、右脚を梵天上に著けて、此の偈を說くなり」と。爾の時諸比丘、未曾有なりと歎じ、「甚奇甚特、目連比丘は大神足有り、我等懈怠を目連の所に於て起せり。唯、願くは世尊、目連比丘をして、此の五百の比丘を將ひ、此の間に來至せ使めたまへ」と。是の時世尊、遙に道力を現じて、目連をして意を知ら使めたまひぬ。

是の時目連、五百の比丘を將ひて、舍衞城祇樹給孤獨園に來至しぬ。爾の時世尊、數千萬衆の與に說法を爲したまふ。時に大目連、五百の比丘を將ひて世尊の所に至る。然して釋迦文佛の弟子、仰いで彼の比丘を觀る。是の時東方世界の比丘、世尊の足を禮し、一面に在りて坐す。爾の時世尊、彼の比丘に告げたまはく、「汝等比丘、何れ從り來りしと爲すや。是れ誰の弟子なるや、道路に幾時を經しと爲すや」と。彼の五百の比丘、釋迦文佛に白さく、「我等の世界は今東方に在り、佛を奇光如來と名く。是れ彼の弟子なり。然るに我等今日亦復何れ從り來りしと爲すや、幾日を經しと爲すやを知らず」と。世尊告げて曰はく、「汝等、佛の世界を知る乎」と。諸比丘對へて曰さく、「不なり、世尊」と。「汝等今日彼の土に詣らんと欲する乎」と。諸比丘對へて曰さく、「唯、然り、世尊、還つて彼土に詣らんと欲す」と。爾の時世尊、彼の比丘に告げたまはく、「今當に汝の與に[四]六界の法を說くべし。善く之を思念せよ」と。諸比丘對へて曰さく、「是の如し、世尊」と。爾の時諸比丘、佛從り教へを受く。世尊告げて曰はく、「彼れ云何が名けて六界の法と爲すや、比丘、當に知るべし、六界の人は父母の精氣を稟けて生る。云何が六と爲すや、所謂、地界・水界・火界・風界・空界・識界、是れを比丘、此の六界有りて、人身は此の精氣を稟けて[五]六入を生ずと謂ふなり。云何が六と爲すや、所謂、眼入・耳入・鼻入・舌入・身入・意入なり。是れを比丘、此の六入有りて、父母に由つて有ることを得、六入に依るを以て、便ち[六]六識身有りと謂ふなり。云何が六と爲すや、若しは眼識に依りて則ち眼識身・耳識・鼻識・舌識・身識・意識有り、是れを比丘、此れを六識身と名くと謂ふなり。

【四】六界とは、地・水・火・風・空・識界の六にして、有情組成の身心の要素を、主として身體的要素を明にせんとせるもの、六大ともいひ、地界は骨肉、水界は血液、火界は熱氣、風界は呼吸、空界は種種の空隙、識界は種々の心作用を現出す。

【五】六入は、又六處ともいひ、眼・耳・鼻・舌・身・意入これにして、色・聲・香・味・觸・法の對境を認識する機官をいふ。

【六】六識身とは、眼識・耳識・鼻識・舌識・身識・意識身の六をいひ、この六識が六根を通して、對象なる六境を認識するなり。

者は、目連比丘是れなり』と、然るに今日『舍利弗に如かず』と」。爾の時諸比丘、輕慢の想ひを目連の所に起せり。是の時世尊、便ち是の念を作したまはく、「此の諸比丘、輕慢の想ひを生じて、目連に向ひ、罪を受くること計り難し」と。目連に告げて曰はく、「汝神力を現じて、此の衆をして見せ使め、大衆をして懈怠の想を起さ令むること無かれ」と。目連對へて曰さく、「是の如し、世尊」と。是の時目連、世尊の足を禮し、即ち如來の前に於て、沒して現ぜずして、東方七恒河沙の佛土に往詣す。佛有り、奇光如來・至眞・等正覺と名け、彼の土に出現したまふ。是の時目連、凡常の服を以て彼の土に往詣し、鉢盂緣上に在りて行く。又彼の土の人民、形體極めて大なり。是の時諸比丘、目連を見已つて、自ら相謂ひて言く、「汝等此の虫を視るや、正しく沙門に似たり」と。是の時諸比丘、復持して彼の佛に示し、「唯、然り、世尊、今一虫有り、正しく沙門に似たり」と。爾の時奇光如來、諸比丘に告げて曰はく、「西方此を去ること、七恒河沙の彼の土の世界に、佛有り、釋迦文如來・至眞・等正覺と名け、世に出現したまふ。是れ彼の弟子にして、神足第一なり」と。

爾の時彼の佛、目連に告げて曰はく、「此の諸比丘は輕慢の意を起せり。汝神足を現じて、大衆をして之を見せ使めよ」と。目連對へて曰さく、「是の如し、世尊」と。是の時目連、佛の敎へを聞き已つて、鉢盂を以て彼の五百の比丘を絡盛して梵天上に至る。是の時目連、左脚を以て須彌山に登り、右脚を以て梵天上に著く。爾の時便ち此の偈を說く、

常に當に念じて勤加し　佛法を修行し　魔衆の怨を降伏すべし　象を鉤調するが如し　若し能く
此の法に於て　能く行じて放逸ならずば　當に苦の原際を盡し　復衆惱有ること無けん。

と。是の時目連、此の音響を以て、祇洹精舍に遍滿す。諸比丘聞き已つて、往いて世尊に白さく、「目連は何處に住すと爲し、而して此の偈を說くや」と。世尊告げて曰はく、「此の目連比丘は、此の佛土を去ること七恒河沙、正に東方に在り、繩を以て彼の五百の比丘を絡盛し、左脚須彌山に登

し、初めて放捨せず。然るに目連比丘は壽を住めんと欲して、劫に至るも亦復能く辦ず。然るに舍利弗の入る所の三昧は、目連比丘名字を知らざるなり」と。

是の時尊者、舍利弗復是の念を作さく、「三千大千刹土を、目連皆能く移動し、蠕虫の死する者稱計す可からず。然るに我躬自ら聞くならく、『如來の座は移動す可からず』と、我今此の帶を以て如來の座所に繋著す可し」と。是の時目連、復神足を以て此の帶を擧ぐるも、然も動かすこと能はず、時に目連、此の念を生ずらく、「我神足に於て退きしに非らざる乎。今此の帶を擧ぐるも、動かすこと能はず。我今世尊の所に往詣して、此の義を問ひまつらん」と。

爾の時目連、此の帶を捨て已つて、即ち神足を以て世尊の所に至る。遙に舍利弗の、如來の前に在りて坐するを見、見已つて目連、復是の念を作さく、「世尊の弟子にして、神足第一なること、我に出づる者無し、然るに我舍利弗に如かざる乎」と。爾の時目連、佛に白して言さく、「我將に神足に於て退かざる乎、然る所以は、我先きに祇洹精舍を發し、然る後に舍利弗發せり。今舍利弗比丘は先きに如來の前に在りて坐す」と。佛の言はく、「汝神足に於て退くこと有らず、但、舍利弗所入の神足三昧は、汝の解せざる所なり。然る所以は、舍利弗比丘は智慧、量り有ること無く、心自在を得たり、舍利弗の心に從ふに如かざるなり。舍利弗の心は神足自在を得たり。舍利弗比丘の若きは、心の所念の法即ち自在を得たり」と。是の時大目揵連、即時默然たり。

是の時阿耨達龍王、歡喜踊躍して自ら勝ふる能はず。「今舍利弗比丘は、極めて神力不可思議にして、所入の三昧有るも、目連比丘は名字を知らず」と。爾の時世尊、阿耨達龍王の與に微妙の法を說き、勸めて歡喜せ令めたまひ、即ち彼に於て戒を說き、淸旦諸の比丘僧を將ひ、還つて舍衞國祇樹給孤獨園に詣りたまひぬ。

爾の時諸比丘、自ら相謂ひて言く、「世尊は口づから自ら記したまひて、『我聲聞中、神足第一の

の如くなら使むること能はず。是の時目連、其の力勢を盡くし、此の帶を移すも、動か使むること能はず。是の時舍利弗、此の帶を取りて閻浮樹の枝に繫著しぬ。是の時尊者目連、其の神力を盡くして、此の帶を擧げんと欲するも、終に移すこと能はず。當に此の帶を擧ぐべき時に、此の閻浮地大に振動せり。

爾の時舍利弗、便ち是の念を作さく、「目連比丘は倘能く此の閻浮地をして動か使む。何に況んや此の帶をや、我今當に此の帶を持して、二天下に繫著すべし」と。爾の時目連、亦復之を擧げて三天下に繫著し、四天下も亦能く之を擧ぐること、輕き衣を擧ぐるが如し。是の時舍利弗、復是の念を作さく、「目連比丘は、四天下を擧ぐるに堪任して、言ふに足らず、我今此の帶を持して、須彌山腹に繫著せん」と。是の時目連、復能く此の須彌山及び四天王宮、三十三天宮を動かし、皆悉く動搖す。是の時舍利弗、復此の帶を以て千世界に繫ぐ。是の時目連も亦能く動か使む。時に舍利弗、復此の帶を以て二千世界・三千世界に繫ぐも、亦復能く動かす。是の時天地大に動く。唯、如來有りて阿耨達泉に坐して移動したまはざること、猶力士の樹葉を弄びて疑難無きが如し。

是の時阿耨達龍王、世尊に白して言さく、「今此の天地何故に震動せしや」と。爾の時世尊、具に龍王の與に此の本緣を說きたまひぬ。龍王佛に白さく、「此の二人の神力は何者か最も勝るや」と。世尊告げて曰はく、「舍利弗比丘の神力最も大なり」と。龍王佛に白して言さく、「世尊は前に記して言へり、『目連比丘は神足第一にして、是れに過ぐる者無し』」と。世尊告げて曰はく、「龍王、當に知るべし、四神足有り、云何が四と爲すや。自在三昧神力・精進三昧神力・心三昧神力・試三昧神力なり。是れを龍王、此の四神足の力有りと謂ふなり。若し比丘・比丘尼有りて、此の四神力有る者にして、親近修行して放捨せざる者は、此れ則ち神力第一なり」と。阿耨達龍王、佛に白さく、「目連比丘は此四神足を得ざる乎」と。世尊告げて曰はく、「目連比丘も亦此の四神足の力を得、親近修行

華に坐し、七寶を葦と爲す。及び五百の比丘、各々寶蓮華に坐せり。爾の時[三]阿耨達龍王、世尊の所に至り、頭面に足を禮し、一面に在りて住す。

爾の時龍王、遍く聖衆を觀じ已つて、世尊に白して曰さく、「我今此の衆中を觀ずるに、空缺にして具せず。尊者舍利弗無し。唯、願くは世尊、一比丘を遣して、舍利弗を喚び來ら使めたまへ」と。爾の時舍利弗、祇洹精舍に在りて、故き衣を補納せり。爾の時世尊、目連に告げて曰はく、「汝舍利弗の所に至り、舍利弗に語げて云へ、『阿耨達龍王相見ることを得んと欲せり』」と。目連報へて曰さく、「是の如し、世尊」と。

是の時尊者大目連、人の臂を屈伸するが如き頃に、祇洹精舍の舍利弗の所に往至し、舍利弗に語げて言く、「如來敎へ有りて云はく、『阿耨達龍王相見ることを得んと欲す』」と。舍利弗報へて曰く、「汝竝に前に在れ、吾後に當に往くべし」と。目連報へて曰く、「一切の聖衆及び阿耨達龍王、尊顔を遲想し、相見ることを得んと欲す。唯、願くは時に赴きて、時節を輕んずること勿れ」と。舍利弗報へて曰く、「汝、先きに彼に至れ、吾後に當に往くべし」と。是の時目連復重ねて語げて曰く、「云何が舍利弗、神足中、能く吾に勝る乎。然るに今先きに遣はして、前に在ら使むる耶。若し舍利弗にして、時に起たずば、吾當に臂を捉へ、將つて彼の泉に詣るべし」と。

是の時舍利弗、便ち是の念を作さく、「今日目連方便して試み、吾を弄ぶ耳」と。爾の時尊者舍利弗、躬ら帶を解き、目連に語げて曰く、「設し汝神足第一ならば、今此の帶を擧げて、地を離れ使めよ。然る後に吾臂を捉へて、將て阿耨達泉に詣れ」と。是の時目連是の念を作さく、「今舍利弗復我を輕弄して、將に相試みんと欲する乎、今帶を解きて地に在り、云く、『能く擧ぐれば、然る後に吾臂を捉へて、將て泉所に詣れ』」と。是の時目連復是の想を作さく、「此れは必ず因事有らん、苦たらずして爾り」と。即時に手を伸して帶を取りて擧ぐ。然るに帶をして移動すること、毫釐許り

【三】阿耨達(Anotatta)。

# 巻の第二十九

## 六重品第三十七の一

### 一

[一]聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「汝當に六重の法を思念すべし。之を敬ひ、之を重んじ、執して心懐に在りて忘失せ令むること無かれ。云何が六と爲すや、是に於て比丘、身行に慈しみを念じ、鏡に其の形を視るが如く、敬ふ可く、貴ぶ可くして、忘失せ令むること無かれ。復次に口行に慈しみを念じ、意行に慈しみを念じ、敬ふ可く、貴ぶ可く、忘失せ令むること無かれ。復次に法利の具を得て、能く諸の梵行者と與に之を共にし、亦悋想無かれ。此の法は敬ふ可く、貴ぶ可く、忘失せ令むること無かれ。復次に諸有の禁戒朽ちず、敗らず、極めて完具を爲して缺漏無きは、智者の貴ぶ所なり。復此の戒をして分布せ使め、人と共の味を同じから使めんと欲せよ。此の法は敬ふ可く、貴ぶ可く、忘失せ令むること無かれ。復次に正見の賢聖出要を得、是の如きの見、諸の梵行者と共に此の法を同じうせんと欲するも亦、敬ふ可く、貴ぶ可く、忘失せ令むること無かれ。是れを比丘、此の六重の法有りて、敬ふ可く、貴ぶ可く、忘失せ令むること無かれと謂ふなり。是の故に諸比丘、當に身・口・意行を修行すべし。設し利養の具を得ば、當に念じて分布し、貪りの想ひを起すこと莫かるべし。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

### 二

[二]聞くこと是の如し。一時佛、阿耨達泉に在し、大比丘衆五百人と倶なりき。斯れは是れ羅漢にして、三達・六通神足自在にして、心所畏無し。唯一比丘を除く、阿難是れなり。爾の時世尊、金蓮



【一】 A. VI. I. Āhunneyya.

【二】 cf. S. 6. 2. 4. Aruṇavati sāriputra-Maudgalyāna-riddhi-Vivāda. (東大蒐集寫本 26)。cf. 大寶積經十密迹金剛會3. 3

正に當來の諸佛世尊の翼從多少なることも亦、今日の如くして、異り有ること無から使めん。今此經を遊天法本と名く。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時四部の衆、及び五國王、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

増壹阿含經卷第二十八

以て如來に向つて說かく、

　我今問ふ所あらんと欲す　慈悲は一切を護る　佛の形像を作らば　何等の福を得ると爲んや

と。爾の時世尊、復偈を以て報へて曰く、

　大王今之を聽け　少多其の義を演べん　佛の形像を作らば　今當に粗之を說くべし　眼根は初め壞せずして　後天眼を得　白黑分明なるは　佛の形像を作るの德なり　形體常に完具し　意正しくして迷惑せず　勢力常人に倍するは　佛の形像を造る者なり　終に惡趣に墮せず　終に輒ち天上に生る　彼に於て天王と作るは　佛の形像を造るの福なり　餘の福は計る可からず　其の福不思議にして　名聞四遠に遍きは　佛の形像を造るの福なり

善い哉、善い哉、大王、饒益する所多く、天人祐を蒙らん」と。爾の時優塡王極めて歡悅を懷き、自ら勝ふること能はず。爾の時世尊、四部衆と及び五王との與に妙論を演說したまふ。所謂論とは、施論・戒論・生天の論、欲は不淨想、漏を大患と爲し、出要を妙と爲すと。爾の時世尊、以て四部の衆の心開け、意解れるを知り、諸佛世尊の常に說きたまふ所の苦・集・盡・道を盡く彼の與に之を說きたまひぬ。爾の時座上の天及び人民六萬餘人、諸の塵垢盡きて法眼淨を得たり。

　爾の時五王、世尊に白して言さく、「此の處の福妙へにして、最も是れ神地なり。如來は始め兜術天從り來下して此に至りて法を說きたまへり。今此の處を建立して、永く存して朽ちざら(しめ)んと欲す」と。世尊告げて曰はく、「汝等五王、此の處に於て神寺を造立せば、長夜に福を受けて、終に朽敗せじ」と。諸王報へて曰さく、「當に云何が神寺を造立せんや」と。爾の時世尊、右手を伸し、地中從り迦葉如來の寺を出し、五王に示して、之に告げて曰はく、「神寺を作らんと欲せば、當に此れを以て法と爲すべし」と。爾の時五王、即ち彼處に於て大神寺を起しぬ。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「諸の過去恒沙の如來の翼從多少なりしこと、亦今日の如くして、異り有ること無し。

何者か是れ我なるや、我なる者主無し。我今眞法の衆に歸命せん」と。爾の時尊者須菩提、還つて坐して衣を縫へり。

是の時優鉢華色比丘尼、轉輪聖王の形を作し、七寶導從して世尊の所に至る。是の時五國の王遙に轉輪聖王の來るを見、歡喜踊躍して自ら勝ふること能はず。自ら相謂ひて言く、「甚奇甚特、世間に二の珍寶出づ。如來と轉輪聖王となり」と。爾の時世尊、數萬の天人を將ひ、須彌山の頂從り池水の側に來至したまふ。是の時世尊、足を擧げて地を蹈みたまふや、此の三千大千世界は六反震動せり。是の時化の轉輪聖王、漸々に世尊の所に至る。諸の小國の王及び人民の類、各々之を避く。是の時化の聖王已に世尊に近づきしを覺知し、還つて本形に復し、比丘尼と作つて世尊の足を禮しまつる。五王見已つて、各自ら怨みを稱へ、自ら相謂ひて言く、「我等今日極めて所失有り、我等先きに應に如來を見たてまつるべきに、然るに今此の比丘尼、先きに之を見たてまつりぬ」と。是の時比丘尼、世尊の所に至り、頭面に足を禮して、佛に白して言さく、「我今最勝尊を禮しまつる、今日先きに覲省することを得たり。我は優鉢花色比丘尼、是れ如來の弟子なり」と。

爾の時世尊、彼の比丘尼の與に偈を說きて言はく、

善業は以て先づ禮す　最初にして過ぐる者無し　空無解脫門　此れは是れ佛を禮するの義なり

若し佛を禮せんと欲せば　當來及び過去　當に空無法を觀ずべし　此れを禮佛の義と名く

と。是の時五王及び人民の衆、稱計す可からず、世尊の所に往至し、各自名を稱へ、「我は是れ迦尸國王波斯匿なり」、「我は是れ拔蹉國王にして、名けて優塡と曰ふ」と。「我は是れ五都の人民の主にして、名けて惡生と曰ふ」、「我は是れ南海の主、優陀延と名く」、「我は是れ摩竭國の頻毘婆羅王なり」と。爾の時十一〔一六〕那術の人民雲集し、及び四部の衆、最尊の長者千二百五十人、世尊の所に往至し、頭面に足を禮し、一面に在りて立つ。爾の時優塡王、手に牛頭栴檀の像を執り、幷せて偈を

【一六】那術（Nahuta）は、又那由多につくり、數名、或は萬億といひ、或は千億、或は數千萬をいふ。

爾の時世尊、此の偈を說き已つて、便ち中道に詣りたまふ。是の時梵天、如來の右に在りて、銀道の側に處り、釋提桓因水精道の側に在り、及び諸天人虛空中に在りて、散華燒香して倡伎樂を作し、如來を娛樂ましめまつりぬ。

是の時優鉢華色比丘尼、如來今日當に閻浮提の僧迦尸の池水の側に至りたまふべきを聞き、聞き已つて便ち此の念を生ずらく「四部の衆、國王・大臣、國中の人民にして、往かざる者靡からん。設し我當に常法を以て往かば、此れ其の宜しきに非らざるべし。我今當に轉輪聖王の形容を作し、往いて世尊を見たてまつるべし」と。是の時優鉢華色比丘尼、還つて其の形を隱し、轉輪聖王の形を作し、七寶具足す。所謂七寶とは、輪寶・象寶・馬寶・珠寶・玉女寶・典兵寶・典藏寶なり。是れを七寶と謂ふなり。

爾の時尊者須菩提、羅閱城耆闍崛山中に在り。一の山側に在りて衣裳を縫へり。是の時須菩提、世尊の今日閻浮里地に來至したまふに當り、四部の衆の見たてまつらざる者靡きを聞き、「我今は宜しく時に往いて、如來を問訊し、禮拜す可し」と。爾の時尊者須菩提、便ち縫衣の業を捨て、座從り起ち、右脚を地に著く。是の時彼復是の念を作さく、「此れ如來の形は何者ぞ、是の世尊は是れ眼・耳・鼻・口・身・意爲る乎、往いて見ば復是れ地・水・火・風種なる乎、一切諸法は皆悉く空寂にして、造無く、作無し、世尊の所說の偈言の如し。

若し佛を禮せんと欲せば　及び諸の最勝尊を　〔一五〕陰持入の諸種　皆悉く無常と觀ず　曩昔の過去
佛及以び當來の者　今の現在佛の如く　此れ皆悉く無常なり　若し佛を禮せんと欲せば　過去
及び當來　現在の中に於て　當に空法を觀ずべきを說く　若し佛を禮せんと欲せば　過去及び
當來　現在及び諸佛　當に無我を計すべし

と、此の中我無く、命無く、人無く、造作無く、亦形容有教有授の者無し。諸法皆悉く空寂なり。

【一五】陰持入とは、陰界入ともいひ、有情の組成要素を五陰、十二處、十八界に分類せしもの、五陰は身心の要素を心的要素に重きをおきて、五種に分類したも、十二入は十二處ともいひ、認識作用の方面よりの分類、十八界は更に詳說せしもの。

爾の時世尊、數千萬衆と與に、前後を圍遶し、爲に法を說きたまひ、「五盛陰は苦なり」と說きたまふ。云何が五と爲すや、所謂色・痛・想・行・識なり。云何が色陰と爲すや、所謂此の四大身なり。是れ四大所造の色なり。是れを名けて色陰と爲すと謂ふなり。彼れ云何が名けて痛陰と爲すや、所謂、苦痛・樂痛・不苦不樂痛なり。是れを名けて痛陰と爲すと謂ふなり。彼れ云何が想陰と名くるや、所謂三世共會、是れを名けて想陰と爲すと謂ふなり。彼れ云何が名けて行陰と爲すや、所謂身行・口行・意行、此れを行陰と名く。彼れ云何が名けて識陰と爲すや、所謂、眼・耳・鼻・口・身・意識、此れを識陰と名く。彼れ云何が名けて色と爲すや、所謂色とは寒亦是れ色、熱も亦是れ色、飢も亦是れ色、渴も亦是れ色なり。云何が名けて痛と爲すや、所謂、痛とは覺を名く。何物を覺すると爲すや、苦を覺し、樂を覺し、不苦不樂を覺するが故に、名けて覺と爲すなり。云何が名けて想と爲すや、所謂想とは想も亦是れ知なり。靑・黃・白・黑を知り、苦樂を知るが故に、名けて知と爲すなり。云何が名けて行と爲すや、所謂行とは、能く所成有るが故に、名けて行と爲すなり。何等を成ずと爲すや、或は惡行を成じ、或は善行を成ずるが故に、名けて行と爲すなり。云何が名けて識と爲すや、所謂識とは是非を識別し、亦諸味を識る。此れを名けて識と爲すなり。諸天子、當に此の五盛陰を知るべし。三惡道・天道・人道を知り、此の五盛陰滅すれば、便ち涅槃の道有ることを知るなり」と、爾の時此の法を說きたまふ時、六萬の天人有りて、法眼淨を得たり。爾の時世尊、諸天人の與に說法し已つて、卽ち座從り起ち、須彌山の頂に詣り、此の偈を說きたまはく、

　汝等當に勤めて學ぶべし　佛・法・聖衆に於て　當に死の逕路を滅すべきこと　人の象を鈎調するが如し　若し能く此の法に於て　懈怠すること無くば　便ち當に生死を盡すべし　苦の原本有ること無けん

と。

遊化して勞する乎、鬪訟すること無き耶、外道異學は觸嬈すること無き乎」と。目連報へて曰さく、「四部の衆、道を行じて倦むこと無し」と、「但し目連、汝向者是の念言を作せり『如來此に在すも亦煩閙なり』と。此の事然らず、然る所以は、我說法する時、亦久しきを經ず、設し我是の念を作さく、『諸天をして來ら使めんと欲せば、便ち來り、諸天をして來らざら使めんと欲せば、諸天則ち來らず』と。目連、汝世間に還れ却後七日にして、如來は當に僧迦尸國の大池の水側に往くべし」と。是の時目連、臂を屈伸する頃に、還つて舍衞城祇樹給孤獨園に詣り、四部衆に往詣して、之に告げて曰く、「諸賢、當に知るべし。却後七日にして、如來は當に來下して、閻浮里地の僧迦尸の大池の水側に至りたまふべし」と。爾の時四部衆、此の語を聞き已つて、歡喜踊躍して自ら勝ふること能はず。是の時波斯匿王・優塡王・惡生王・優陀延王・頻毘娑羅王、「如來は却後七日にして、當に僧迦尸國の大池の水側に至りたまふべし」と聞き、極めて歡喜を懷き、自ら勝ふること能はず。是の時毘舍離の人民の衆・迦毘羅越の釋種・拘夷羅越の人民の衆、「如來は當に閻浮里地に來至したまふべし」と聞き、聞き已つて歡喜踊躍して自ら勝ふること能はず。爾の時波斯匿王、四種の兵を集めて池水の側に詣り、世尊を見たてまつらんと欲す。是の時五王皆兵衆を集め、世尊の所に往き、如來を觀省しまつることを得んと欲す。及び人民の衆、迦毘羅越の釋皆悉く世尊の所に往く。及び四部の衆皆悉く世尊の所に往き、如來を見たてまつることを得んと欲す。

爾の時七日の頭に臨み、釋提桓因、自在天子に告げて曰く、「汝今須彌山の頂從り、僧迦尸の池水に至るの三道路を作れ、如來の意を觀じまつるに、神足を用ひたまはずして閻浮地に至りたまはん」と。自在天子報へて曰く、「此の事甚だ佳なり、正しく爾り、時に辦ぜん」と。爾の時自在天子、卽ち三道の金・銀・水精を化作しぬ。是の時金道は當に中央に在るべし。水精道の側、銀道の側を挾みて金樹を化しぬ。爾の時に當り、諸の神妙の尊天、七日の中に、皆來つて法を聽きぬ。

度を取りたまはざる乎」と。是の時阿那律、阿難に語げて曰く、「昨夜天有り、我所に來至して云く、『如來は三十三天の善法講堂に在せり』と。汝今且く止めよ、吾今如來の所在を觀ぜんと欲す」と。是の時尊者阿那律、即ち結跏趺坐し、正身正意に心移動せず、天眼を以て三十三天を觀じ、世尊の壁方一由旬に在し、石上に坐したまふを見たてまつる。是の時阿那律、即ち三昧從り起ち、阿難に語げて曰く、「如來は今三十三天に在し、母の與に法を說きたまへり」と。是の時阿難及び四部の衆、歡喜踊躍して自ら勝ふること能はず。是の時阿難、四部衆に問ふて曰く、「誰か能く三十三天に至つて、如來を問訊しまつるに堪任するや」と。阿那律曰く、「今尊者目連は神足第一なり。願くは神力を屈し、往いて佛を問訊しまつれ」と。是の時四部の衆、目連に白して曰く、「今日如來は三十三天に在せり。唯、願くは尊者、四部の姓名を持して、如來を問訊しまつれ。又此の義を持して、往いて如來に白せ、「世尊は閻浮里內に在さば世間道を得ん、唯威神を屈して世間に至りたまへ」と。目連報へて曰く、「甚だ善し、諸賢」と。

是の時目連、四部の敎へを受け、臂を屈伸する頃に、往いて三十三天に至り、如來の所に到りぬ。是の時釋提桓因及び三十三天、遙に目連の來るを見、諸天各此の念を生ずらく、「正に是脩の使ひならん。若しは當に是れ諸王の使ひなるべし」と。是の時諸天皆起ちて往いて迎へ、「善くぞ來れり、尊者」と。是の時目連遙に世尊の無央數の衆の與に說法を爲したまふを見、見已つて此の念を生ずらく、「世尊は此の天中に在すも亦復煩閙なるかな」と。目連往いて世尊の所に至り、頭面に足を禮し、一面に在りて立つ。爾の時目連、佛に白して言さく、「世尊、四部の衆は、如來を問訊しまつり、『起居輕利に遊步康强なるや』」と。又此の事を白さく、「如來は閻浮里內に生長し、世間に於て道を得たまへり。唯、願くは世尊、還つて世間に來至したまへ、四部虛渴して世尊を見たてまつらんと欲す」と。世尊告げて曰はく、「四部の衆をして、業を進めて倦むこと無から使めん。云何が目連、四部の衆は

も、之を見たてまつらず、復、四天王・三十三天・豔天・兜術天・化自在天・他化自在天を觀じ、乃至梵天を觀ずるも、之を見たてまつらず、復、千の閻浮地・千の瞿耶尼・千の欝單曰・千の弗于逮・千の四天王・千の豔天・千の兜術天・千の化自在天・千の他化自在天・千の梵天を觀ずるも、如來を見たてまつらず、復三千大千刹土を觀ずるも復、見たてまつらず。卽ち座從り起ち、阿難に語げて曰く、「我今已に三千大千刹土を觀ずるも、之を見たてまつらず」と。

是の時阿難及び四部の衆、默然として止む。阿難是の念を作さく、「如來は將に般涅槃せざらんとしたまふ乎」と。是の時三十三天、各々自ら相謂ひて言く、「我等快く善利を得たり。唯、願くは七佛、常に世に現れたまはゞ、天及び世人は潤益する所多からん」と、或は天子有りて是の語を作さく、「且く七佛を置くも、但六佛有ら使めば、此れ亦甚だ善し」と。或は天子有りて言く、「但五佛有ら使めん」と。或は言く、「四佛」、或は言く、「三佛」、或は言く「二佛世に出現したまはゞ、潤益する所多からん」と。時に釋提桓因、諸天に告げて曰く、「且らく七佛乃至二佛を置け、但、今日釋迦文佛をして、久しく世に住まら使めば、則ち饒益する所多からん」と。

爾の時如來、意に諸天をして來ら使めんと欲したまはば、諸天便ち來り、意に諸天をして去ら使めんと欲したまはゞ、諸天便ち去る。是の時三十三天、各々自ら相謂ひて言く、「如來は何故に竟日食したまふや」と。是の時釋提桓因、三十三天に告げて曰く、「如來は今日食したまふに、人間の時節を以てしたまひ、天上の時節を用ひたまはざるなり」と。

是の時世尊、三月を經しを以て、便ち是の念を作したまはく、「閻浮里の人、四部の衆は、吾を見ざること久し、甚だ虛渴の想有らん。我今當に神足を捨つべし、諸の聲聞をして、如來の三十三天に在るを知ら使めん」と。是の時世尊、卽ち神足を捨てたまひぬ。時に阿難、阿那律の所に往き、阿那律に白して言く、「今四部の衆、甚だ虛渴有り、如來を見たてまつらんと欲す。然るに今如來は滅

是の時群臣王に白して言さく、「我等形像を作らんと欲す、亦恭敬承事作禮す可きや」と。時に王、此の語を聞き已つて、歡喜踊躍し、自ら勝ふる能はず。群臣に告げて曰く、「善い哉、卿等の說く所至つて妙なり」と。群臣王に白さく、「當に何の寶を以て如來の形像を作るべきや」と。是の時王、卽ち國界の內の諸の奇巧の師匠に勅して、之に告げて曰く、「我今形像を作らんと欲す」と。巧匠對へて曰く、「是の如し、大王」と。是の時優塡王卽ち牛頭栴檀を以て、如來の形像を作る。高さ五尺なり。

是の時波斯匿王、優塡王の如來の形像高さ五尺なるを作りて、供養せしを聞きぬ。是の時波斯匿王、復國中の巧匠を召して、之に告げて曰く、「我今如來の形像を造らんと欲す。汝等時に當つて之を辦ぜよ」と。時に波斯匿王此の念を生ずらく、「當に何の寶を用ひて、如來の形像を作るべき耶」と。斯須にして復是の念を作さく、「如來の形體は煌ぐこと天金の如し、今當に金を以て如來の形像を作るべし」と。是の時波斯匿王純ら[一]紫磨金を以て、如來の像を作る。高さ五尺なり。爾の時閻浮里內に始めて此の二の如來の形像有り。

是の時四部の衆、往いて阿難の所に至り、阿難に白して曰く、「我等如來を渴仰しまつる。所思尊を覲たてまつらんと欲す。如來は今日竟に所在爲るや」と。阿難報へて曰く、「我等も亦復如來の在す所を知らず、但今共に阿那律の所に至つて、此の義を問はん、然る所以は、尊者阿那律は天眼第一にして、淸淨にして瑕穢無し。彼天眼を以て千世界・二千世界・三千大千世界を見、彼、能く知見すればなり」と。是の時四部の衆、阿難と共に阿那律の所に往至し、阿那律に白して曰く、「今此の四部の衆、我所に來至して、我に問ふて曰く、『今日如來は竟に所在爲るや』と、唯、願くは尊者、天眼を以て如來を觀ぜよ。今所在爲るや」と。是の時尊者阿那律、報へて曰く、「汝等且く止めよ、吾今如來は竟に所在爲るやを觀んと欲す」と。是の時阿那律、身を正し、意を正し、念を繫けて在前し、天眼を以て閻浮里內を觀ずるも之を見たてまつらず。復、天眼を以て[二]拘耶尼・[三]弗于逮・[四]欝單曰を觀ずる

【一】紫磨金とは、又紫金ともいひ、紫色を帶ぶる黃金をいふ。

【二】拘耶尼(Aparagoyāna)とは、須彌山を繞る四大州の一にして、須彌山の西に位し、半月形をなし、漢に西牛貨洲とも譯せらる。

【三】弗于逮(Pubbavideha)とは、須彌山の東に在りて、國土は圓形をなし、住民の容貌も圓形をなす。一に東勝身洲ともいふ。

【四】欝單曰(Uttarakuru)。須彌山の北に在りて、正方形の國土をなし、住民の容貌又これに同じ、一に北俱盧洲ともいふ。

還えつて宮中に入りき。

爾の時釋提桓因、佛に白して言さく、「我今當に何の食を以て如來に飯しまつるべき乎。人間の食を用ふと爲んや、自然の天食を用ふと爲んや」と。世尊告げて曰はく、「人間の食を用ひ、用つて如來に食はす可し。然る所以は、我身は人間に生れ、人間に長じ、人間に於て佛を得たり」と。釋提桓因佛に白して言さく、「是の如し、世尊」と。是の時釋提桓因復、佛に白して言さく、「天上の時節を用ふと爲んや、人間の時節を用ふと爲んや」と。世尊告げて曰はく、「人間の時節を用ひん」と。對へて曰さく、「是の如し、世尊」と。是の時釋提桓因、卽ち人間の食を以てし、復、人間の時節を以て如來を飯食しまつりぬ。爾の時三十三天各々自ら相謂ひて言く、「我等今如來の竟日飯食したまふを見たてまつる」と。是の時世尊便ち是の念を作したまはく、「我今當に是の如き三昧に入りて、諸天をして進ま使めんと欲せば、便ち進み、諸天をして退か使めんと欲せば、便ち退くべし」と。是の時世尊、以て此の三昧に入り、諸天を進却するに其の時宜に隨ひたまへり。

是の時人間四部の衆、如來を見たてまつらざること久し。往いて阿難の所に至り、阿難に白して言く、「如來は今所在爲るや、渴仰して見たてまつらんと欲す」と。阿難報へて曰く、「我等も亦復如來の在す所を知らず」と。是の時波斯匿王・優塡王、阿難の所に至り、阿難に問ふて曰く、「如來は今日竟に所在爲るや」と。阿難報へて曰く、「大王、我も亦如來の在す所を知らず」と。是の時二王、如來を思覩し、遂に苦患を得たり。爾の時群臣優塡王の所に至り、優塡王に白して曰さく、「今患ふ所を爲すや」と。時に王報へて曰く、「我今愁憂を以て患ひを成ず」と。群臣王に白さく、「云何が愁憂を以て患ひを成ずるや」と。其の王報へて曰く、「如來を見たてまつらざるに由るが故なり。設し我如來を見たてまつらずば、便ち當に命終すべし」と。是の時群臣便ち是の念を作さく、「當に何の方便を以て、優塡王をして、命終せ令めざら使むべきや。我等宜しく如來の形像を作すべし」と。

便ち退いて去りぬ。是の時世尊、便ち是の念を作したまはく、「此の四部の衆多く懈怠有り、皆法を聽かず、亦方便を求めて身をして證を作さ使めず。亦復未獲の者は獲、未得の者は得ることを求めず。我今宜しく四部の衆をして、法を渇仰せ使む可し」と。爾の時世尊、四部の衆に告げず、復、侍者を將ひたまはずして、臂を屈伸するが如き頃に、祇洹從り現ぜずして三十三天に往至したまへり。

爾の時釋提桓因、遙に世尊の來りたまふを見、諸の天衆を將ひて、前んで世尊を迎へまつり、頭面に足を禮し、請じて座に就か令めまつり、並に是の說を作さく、「善くぞ來りたまへり、世尊、久しく觀省に違ひまつれり」と。是の時世尊、便ち是の念を作したまはく、「我、今當に神足の力を以て、自ら形體を隱くし、衆人をして我の所在を爲すを見ざら使めん」と。爾の時世尊、復是の念を作したまはく、「我今三十三天に於て、身を化し、極めて廣大なら使めん」と。

爾の時、天上の善法講堂に、金石の縱廣一由旬なる有り、爾の時世尊、石上に結跏趺坐し、石上に遍滿したまひぬ。爾の時、如來の母摩耶、諸の天女を將ひ、世尊の所に至り、頭面に足を禮し、一面に在りて坐し、並に是の說を作さく、「奉に違すること甚だ久し、今此に來至したまひて、實に大幸を蒙むる、渇仰して佛を見たてまつらんことを思ひ、今日方に來れり」と。是の時母摩耶、頭面に足を禮し已つて、一面に在りて坐す。釋提桓因も亦如來の足を禮し、一面に在りて坐す。三十三天如來の足を禮し、一面に在りて坐す。是の時諸天の衆、如來彼に在りて天衆を增益し、阿須倫を減損したまふを見ぬ。爾の時世尊、漸く彼の諸天の衆の與に妙論を說きたまへり。所謂論とは施論・戒論・生天の論、欲は不淨想、婬を穢惡と爲し、出要を樂を爲すと。爾の時世尊、以て諸の大衆及び諸天人の心開け、意解けしを見、諸佛世尊の常に說法したまふ所の苦・集・盡・道を、普く諸天の與に之を說きたまひ、各、座上に於て諸の塵垢盡きて法眼淨を得たり。復十八億の天女の衆有りて、道跡を見、三萬六千の天衆法眼淨を得たり。是の時如來の母、卽ち座從り起ち、如來の足を禮し、

飲食を雨らせり。唯、願くは納受したまへ」と。爾の時大目犍連、如來を去ること遠からず。佛王に告げて曰はく、「汝今七寶の飲食の具を持して、大目連に與ふべし。然る所以は、目連の恩を蒙むりて、更に聖賢の地に生るゝを得たればなり」と。波斯匿王、佛に白して言さく、「何の因緣有りて、我更生を言ひたまふや」と。世尊告げて曰はく、「汝朝に我所に至つて法を聽くことを得んと欲せざる乎」と。爾の時二人有り、亦來つて法を聽けり。王此の念を生ずらく、「我此の國界に於て、最も豪尊爲り、衆人の敬する所なり。然るに此の二人は何れ從り來ると爲すや、我を見るも起ちて承迎せず」と。時に王佛に白さく、「實に然り、世尊」と、世尊告げて曰はく、「此れ亦人に非らず、乃ち是れ難陀・優槃難陀龍王なり。彼王の意を知り、自ら相謂ひて言く、『我等此の人王に過無し。何故に反へり來りて我を害するや、要らず當に方宜して此の國界を滅すべし』と。我尋いで龍王の心中の所念を知り、即ち目連に勅して、『今波斯匿王を救ひて、龍に害せ所れ令むること無かる可し』と。即ち我教へを受けて、宮殿上に在りて形を隱して現ぜず、此の變化を作せしなり。是の時龍王、極めて瞋恚を懷き、沙礫石を宮殿上に雨らし、未だ地に墮せざるの頃に、化して七寶の衣裳、飲食の具と作せり。此の因緣に由つて、大王今日便ち更生爲しなり」と。

是の時波斯匿王、便ち恐怖を懷き、衣毛皆竪ち、前跪膝行して如來の前に至り、佛に白して言さく、「唯、願くは世尊、恩垂過厚にして生命を濟ふを得たり」と。復目連の足を禮し、頭面に禮敬して、「尊の恩を蒙むりて生命を濟ふことを得たり」と。爾の時國王便ち此の偈を說きぬ。

唯、尊壽窮り無し　長夜に其の命を護り　苦窮の厄を度脫し　尊の難きを脫することを得るを
蒙むれり

と。是の時波斯匿王、天の香華を以て如來の身に散じ、便ち是の說を作さく、「我今此の七寶を持して三尊に奉上しまつらん、唯、願くは納受したまへ」と。頭面に足を禮し、佛を遶ること三匝して、

く、「是の如し、世尊」と。是の時目連、佛の敎誡を受け、世尊の足を禮し、便ち退いて去り、王宮の上に在つて結跏趺坐し、身をして現ぜざら令む。是の時二龍王雷吼霹靂、暴風疾雨して王宮の上に在り。或は瓦石を雨らし、或は刀劍を雨らすに、未だ地に墮せざるの頃に、便ち優鉢蓮華と爲りて、虛空の中に在り。是の時龍王倍、復瞋恚し、大高山を宮殿上に雨らす。是の時目連復化して種種の飮食と作さ使む。是の時龍王倍、復瞋恚すること熾盛にして、諸の刀劍を雨らす。是の時目連復化して好き衣裳と作さ使む。是の時龍王倍、復瞋恚し、復大沙礫石を雨らして波斯匿王の宮上に在るも、未だ地に墮せざるの頃に、便ち化して七寶と作す。是の時波斯匿王、宮殿中に種々の七寶の雨るを見、歡喜踊躍して自ら勝ふること能はず。便ち是の念を作さく、「閻浮里内の有德の人も、復我に過ぐるもの無し。唯、如來を除く。然る所以は、我家中に粳米一根を種うれば、上生し、收拾するに一斛の米を得、飯するに甘蔗の漿を以てせば、極めて香美爲り。今復宮殿上に於て七寶を雨らす。我便ち能く轉輪聖王と作ることを得ん乎」と。是の時波斯匿王、諸の婇女を領し、七寶收攝す。是の時二龍王自ら相謂ひて言く、「今將に何の意有つてか、我等來り、時に波斯匿王を害せんと欲するに、今日變化して乃ち斯に至るや、所有の力勢、今日盡く現ずるも、猶、波斯匿王の毫釐の分をも動かすこと能はず」と。

是の時龍王、大目犍連の宮殿の上に在りて、結跏趺坐し、身を正し、意を正し、形の傾斜せざるを見、見已つて便ち是の念を作さく、「此れ必ず是れ大目連の所爲なり」と。是の時二龍王、目連を見しを以て便ち退いて去りぬ。是の時目連、龍の去りしを見、還えつて神足を捨てゝ世尊の所に至り、頭面に足を禮し、一面に在りて坐す。時に波斯匿王便ち是の念を作さく、「今此の種々の飮食は先きに食すべからず、當に先づ如來に奉上すべし。然る後に自ら食はん」と。

是の時波斯匿王、卽ち車に珍寶及び種々の飮食を載せ、世尊の所に往至し、「昨日天七寶及び此の

所有らんと欲せば、今正に是れ時なり」と。波斯匿王、佛に白して言さく、「何の因緣有つて、此の閻浮里内をして烟火乃ち爾ら令むるや」と。爾の時世尊告げて曰はく、「難陀・優槃難陀龍王の造る所なり。然るに今大王、恐懼を懷くこと勿れ。今日更に烟火の變無し」と。是の時波斯匿王、便ち是の念を作さく、「我今是れ國の大王にして、人民宗敬して名四遠に聞こゆ。今此の二人は何れ從り來れりと爲すや、吾の此に至りしを見るも亦起ちて迎えず。設し吾境界に住する者ならば、當に之を取閉すべし。設し他界より來りし者ならば、當に取りて之を殺すべし」と。

是の時龍王、波斯匿の心中の所念を知り、便ち瞋恚を興し、爾の時龍王便ち是の念を作さく、「我等此の王所に過ち無きに、更に反つて吾身を害せんと欲す。要らず當に此の國王及び【一〇】迦夷國人を取り、盡く取りて之を殺すべし」と。是の時龍王即ち座從り起ち、世尊の足を禮し、便ち退いて去り、祇洹を離るゝこと遠からざるに、便ち復現ぜず。是の時波斯匿王、此の人の去るを見、未だ久しからずして世尊に白して言さく、「國事猥りに多し。宮中に還えらんと欲す」と。世尊告げて曰はく、「宜しく是れ時を知るべし」と。是の時波斯匿王、即ち座從り起ち、便ち退いて去り、群臣に告げて曰く、「向者の二人は何れの道從り去りしと爲すや、速に之を捕取せよ」と。是の時諸臣、王の教令を聞き、即ち馳走して之を求むるも、處を知らず、便ち宮中に還えりぬ。

是の時難陀・優槃難陀龍王、各、此の念を生ずらく、「我等彼の王所に過無きに、方に我等を取りて、之を害せんと欲せば、我等當に共に彼の人民を害して、遺餘無から使むべし」と。是の時龍王復是の念を作さく、「國中の人民何ぞ過失有り、當に舍衛城の人民を取りて、之を害すべし」と。復重ねて是の念を作さく、「舍衛國の人何ぞ我等に於て過失有り、當に王宮の官屬を取りて、盡く取りて之を殺すべし」と。爾の時世尊、以て龍王の心中の所念を知り、目連に告げて曰はく、「汝今當に波斯匿王を救ひ、難陀・優槃難陀龍王の害する所と、爲さ令むること無かるべし」と。目連對へて曰さ



【一〇】迦夷國とは、迦尸國のこと。

して重責せ見れずば、今自り以後更に敢えて觸嬈して、惡亂想を興さゞらん。唯、願くは聽して弟子と爲したまへ」と。目連報へて曰く、「汝等自ら我身に歸すること莫かれ、我の自ら歸する所の者に、汝等便ち自ら之に歸しまつれ」と。龍王目連に白さく、「我等今日自ら如來に歸しまつらん」と。目連告げて曰く、「汝等此の須彌山に依つて、自ら世尊に歸す可からず。今我と共に舍衞城に至り、乃ち自ら歸しまつることを得可し」と。

是の時目連、二龍王を將ひ、臂を屈伸するが如き頃に、須彌山上從り舍衞城に至りぬ。爾の時世尊、無央數の衆の與に說法を爲したまふ。是の時目連、二龍王に告げて曰く、「汝等當に知るべし、今日世尊は無央數の衆の與に說法を爲したまへば、汝の形を作して、世尊の所に至る可からず」と。龍王報へて曰く、「是の如し、目連」と。是の時龍王還つて龍の形を隱し、化して人の形を作す。長からず、短かゝらず、容貌端正にして桃華の色の如し。是の時目連、世尊の所に至り、頭面に足を禮し、一面に在りて坐す。是の時目連、龍王に語げて曰く、「今、正に是れ時なり。宜しく前進す可し」と。是の時龍王、目連の語を聞き、卽ち座從り起ち、長跪叉手して世尊に白して言さく、「我等二の族姓子、一は難陀と名け、二を優槃難陀と名く。自ら如來に歸しまつり、五戒を受持せん。唯、願くは世尊、優婆塞と爲すことを聽したまへ、形壽を盡して復殺生せじ」と。爾の時世尊、彈指して之を可したまへり。時に二龍王還つて故の座に復し、法を聞くことを得んと欲す。

爾の時波斯匿王、便ち是の念を作さく、「何の因緣有つて、此の閻浮利內をして烟火乃ち爾ら使むるや」と。是の時王波斯匿、寶羽の車に乘り、舍衞城を出でゝ世尊の所に至りぬ。爾の時人民の類、遙に王の來るを見、咸共に起ちて迎へ、「善くぞ來れり、大王、此の座に就く可し」と。時に龍王默然として起たず。是の時波斯匿王、世尊の足を禮し、一面に在りて坐す。是の時大王、世尊に白して言さく、「我今問ふ所有らんと欲す。唯、願くは世尊、事事敷演したまへ」と。世尊告げて曰はく、「問ふ

等共の力勢を盡くして、水を以て三十三天に灑ぐに、然るに此の大龍王は復、我を過ぎて上に去る。我等は正に七頭有るに、今此の龍王は十四頭なり。我等は須彌山を遶ること七匝なるに、今此の龍王は須彌山を遶ること十四匝なれば、我今二龍王、當に共に力を幷せ、與共に戰鬪ふべし」と。

是の時二龍王、極めて瞋恚を懷き、雷電霹靂し、大火炎を放てり。是の時尊者大目連便ち是の念を作さく「凡て龍は戰鬪ふに火を以てし、霹靂す。設し我火を以て霹靂して共に戰鬪はゞ、閻浮里内の人民の類、及び三十三天皆當に害を被むるべし。我今形を化して極小となり、當に與に戰鬪ふべし」と。是の時目連卽ち形を化して小なら使め、便ち龍の口中に入り、鼻の中從り出で、或は鼻從り入つて耳の中從り出で、或は耳の中に入りて眼の中從り出で、以て眼中を出でゝ眉上に在りて行く。爾の時二龍王、極めて恐懼を懷き、卽ち是の念を作さく、「此の大龍王は極めて威力有りて、乃ち能く口中從り鼻中に入り、出でゝ鼻從り眼中に入つて出づ。我等今日實に如かずと爲す。我等龍種は今四生有り、卵生・胎生・濕生・化生なり、然して我等を出づる者有ること無し。今此の龍王の威力は乃ち爾り、共に鬪ふに堪えず。我等の性命死すること斯須に在り」と、皆恐懼を懷き、衣毛皆竪ちぬ。

是の時目連、龍王の心恐懼を懷くを見しを以て、還つて其の形を隱し、常の形容を作し、眼睫の上に在りて行く。是の時二龍王大目連を見、自ら相謂ひて言く、「此れは是れ目連沙門も亦、龍王に非らざるに、甚奇甚特の大威力有りて、乃ち能く我等と共に鬪ふ」と。是の時二龍王、目連に白して言さく、「尊者は何すれぞ我を觸嬈爲ること乃ち爾るや、今何を誡勅する所あらんと欲するや」と。目連報へて曰く、「汝等昨日是の念を作せり、「云何が禿頭の沙門恒に我上に在りて飛ぶや」、今當に之を制御すべし」と。龍王報へて曰く、「是の如し、目連」と、目連告げて曰く、「龍王當に知るべし、此の須彌山は是れ諸天の道路なり、汝の所居の處に非らず」と。龍王報へて曰く、「唯、願くは之を恕

是の時尊者阿那律、即ち座從り起ち、世尊に白して言さく、「我今往いて彼の惡龍を降さんと欲す」と。世尊告げて曰はく、「此の二の惡龍は極めて兇暴爲り、化を受く可きこと難し。卿還つて座に就け」と。是の時尊者　離越・尊者　迦旃延・尊者須菩提・尊者優陀夷・尊者　婆竭各座從り起ち、世尊に白して言さく、「我今往いて惡龍を降伏せんと欲す」と。世尊告げて曰はく、「此の二龍王は極めて兇惡爲り、化を受く可きこと難し。卿還つて座に就け」と。

爾の時尊者大目犍連、即ち座從り起ち、偏へに右肩を露はし、長跪叉手して佛に白して言さく、「彼に往詣して惡龍を降伏せんと欲す」と。世尊告げて曰はく、「此の二龍王は極めて兇惡爲り、降化す可きこと難し、卿今如何が彼の龍王を化するや」と。目連佛に白して言さく、「我先づ彼に至り、形を化すること極めて大にして、彼の龍を恐怯し、後復形を化すること極めて小と爲し、然る後に常の法則を以て之を降伏せん」と。世尊告げて曰はく、「善い哉、目連、汝能く惡龍を降伏するに堪任せん。然して今目連、心意を堅く持して亂想を興すこと勿れ、然る所以は、彼の龍兇惡にして、備へて汝を觸嬈すればなり」と。

是の時目連即ち佛の足を禮し、臂を屈伸するが如き頃に、彼に於て沒し、現ぜずして、須彌山上に往至しぬ。爾の時難陀・優槃難陀龍王、須彌山を遶ること七匝して、極めて瞋恚を興し、大烟火を放てり。是の時目連、自ら本形を隱し、化して大龍王と作り、十四頭有りて須彌山を遶ること十四匝し、大火烟を放ち、當に二龍王の上に在りて住すべし。是の時難陀・優槃難陀龍王、大龍王の十四頭有るを見、便ち恐怖を懷き、自ら相謂ひて言く、「我等今日、當に此の龍王の威力を試み、吾に勝るや不乎を審に爲すべし」と。爾の時難陀・優槃難陀龍王、尾を以て大海中を擲ち、水を以て三十三天に灑ぐも、亦目連の身に著せず。是の時尊者大目連、又尾を以て大海水中に著けば、水乃ち至つて梵迦夷天に到り、幷せて復二龍王の身上に灑ぐ。是の時二龍王、自ら相謂ひて言く、「我

---

【七】離越(Revata)は、又離曰、離波多とも音譯す。

【八】迦旃延(Kaccāyana)、佛十大弟子の一、分別敷演第一と稱せられ、尉禪尼のチャンダパッジョータ王の補師の子、巴利語文典の祖と稱せらる。

【九】婆竭(Sāgata)、佛弟子中大定第一の稱あり。

是の故に諸比丘、當に慈心を一切衆生に起すべし。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所説を聞いて歡喜奉行しぬ。

## 五

〔四〕聞くこと是の如し。一時佛、舍衛國祇樹給孤獨園に在し、爾の時世尊、大比丘衆五百人と倶なりき。爾の時釋提桓因、臂を屈伸するが如き頃に、世尊の所に來至し、頭面に足を禮し、一面に在りて坐す。爾の時釋提桓因、世尊に白して言さく「如來も亦説きたまへり。夫れ如來の出世したまふに、必ず當に五事を爲すべし。云何が五と爲すや、當に法輪を轉ずべし。當に父母を度すべし。信無きの人を信地に立て、未だ菩薩の心を發さゞるものをして、菩薩の意を發さ令め、其の中間に於て當に佛の決を受くべし。此の五の因縁は、如來の出現に必ず當に之を爲すべし。今如來の母三十三天に在し、法を聞くことを得んと欲せり、今如來は閻浮里の內に在つて、四部に圍遶せられ、國王人民皆來つて雲集せり。善い哉、世尊、三十三天に至つて、母の與に説法したまふ可し」と。是の時世尊、默然として之を受けたまひぬ。

爾の時〔五〕難陀・〔六〕優槃難陀龍王、便ち是の念を作さく「此の諸の禿頭の沙門、我上に在りて飛べり。當に方便を作して、虛しく陵さゞら使むべし」と。是の時龍王、便ち瞋恚を興し、大火風を放ち、閻浮里內をして、洞然として火燃たら使めぬ。是の時阿難、佛に白して言さく「此の閻浮里內に、何故に此の烟火有るや」と。世尊告げて曰はく「此の二の龍王便ち此の念を生ぜり『禿頭の沙門、恒に我上に在りて飛べり。我等當に共に之を制して、虛しく陵さゞら令むべし』と、便ち瞋恚を興し、此の烟火を放てり。此の因縁に由るが故に、此の變を致せり」と。

是の時大迦葉、卽ち座從り起ち、世尊に白して言さく「我今往いて彼と共に戰はんと欲す」と。世尊告げて曰はく「此の二龍王は極めて兇惡爲り、化を受く可きこと難し。卿還つて座に就け」と。



〔四〕Dhp. A. III. pp. 224ff. J. IV. 1. 263, Vinaya Cv. V. 8.

〔五〕難陀(Nanda)。

〔六〕優槃難陀(Upananda)。

に生藏消すことを得、四には口中臭からず、五には眼清淨なることを得、是れを比丘、人に楊枝を施せば、五の功德有りと謂ふなり。若し善男子、善女人にして、此の五の功德を求めんには、當に楊枝を以て、用つて惠施することを念ずべし。是の如く比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

四

聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「汝等頗ふらくは、牛を屠す人を見んに、此の財業を以て、後に車馬大象に乘ることを得る乎」と。諸比丘對へて曰さく、「非なり、世尊」と。世尊告げて曰はく、「善い哉、諸比丘、我も亦牛を屠せし人の、牛を殺害し已つて、車馬大象に乘ることを得しを見ず、聞かず。然る所以は、我も亦見ざるなり。屠牛の人は車馬大象に乘ることを得ること、終に此の理無し。云何が比丘、汝等頗ふらくは、羊を屠し、猪を殺し、或は鹿を獵捕するを見、此の如きの人、此の惡を作し已つて、此の財業を得て後、車馬大象に乘ることを得る乎」と。諸比丘對へて曰さく、「非なり、世尊」と。世尊告げて曰はく、「善い哉、諸比丘、我も亦屠牛の人の生類を殺害し已つて、車馬大象に乘ることを得るを見ず、聞かず、終に此の理無し、汝等比丘、若し牛を殺すの人にして、車馬に乘る者を見ば、此れは是れ前世の德、今世の福に非らざるなり。皆是れ前世の宿行の致す所なり。汝等若し羊を殺すの人の、車馬に乘ることを得る者を見ば、當に知るべし、此の人は前世の宿福の種うる所なり。然る所以は、皆殺心を除かざるに由るが故なり。何を以ての故に、若し人有つて惡人に親近し、好んで殺生を喜び、地獄の罪を種うれば、若し人中に來れば、壽命極めて短し、若し復人有つて、好んで偸盜を喜び、地獄の罪を種うれば、彼の牛を屠す人の如く、賤取貴賣して世人を誑惑し、正法を按ぜず、牛を屠すの人も亦復是の如し。殺心に由るが故に此の罪咎を致し、車馬大象に乘ることを得ざるなり。

# 卷の第二十八

## 聽法品第三十六

一

[一]聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「時に隨つて法を聽くに五の功德有り、時に隨つて承受せば次第を失はざらん。云何が五と爲すや、未だ曾て聞かざる者は、便ち之を聞くことを得、已に聞くことを得し者は、重ねて之を諷誦し、見て邪傾せず、孤疑有ること無く、即ち甚深の義を解す。時に隨つて法を聽くに五の功德有り、是の故に諸比丘、當に方便を求め、時に隨つて法を聽くべし。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

二

聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「浴室を造作せば五の功德有り、云何が五と爲すや、一には風を除き、二に病差ゆることを得、三に塵垢を除去し、四に身體輕便なり、五には肥白を得、是れを比丘、浴室を造作せば此の五の功德有りと謂ふなり。是の故に諸比丘、若し四部の衆有りて、此の五功德を求めんと欲せば、當に方便を求めて、浴室を造立すべし。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

三

[二]聞くこと是の如し、一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「人に[三]楊枝を施せば、五の功德有り、云何が五と爲すや、一には風を除き、二に涎唾を除き、三



【一】A. V. 202. Dhamma-savana.

【二】A. V. 208. Kaṭṭhaṁ.

【三】楊枝(Dantakaṭṭha)。

苦々還つて相生ず　苦を度するも亦是の如し　賢聖八品道は　乃ち滅盡處に至る　更に此の生に還えらず　天人間を流轉す　當に苦の原本を盡すべし　永く息みて移動すること無し　我今空跡を見しに　佛の所說の如し　今阿羅漢を得て　更に胞胎を受けず

と、是の時尊者阿難、歎じて曰く、「善い哉、如眞の法を善能く決了せり」と。是の時阿難、便ち此の偈を說く、

善く梵行跡を守り　亦能く道を善修す　諸の一切の結を斷ずるは　眞に佛の弟子なり

と。爾の時阿難、此の偈を說き已つて、卽ち座從り起ちて去り、世尊の所に往至し、頭面に足を禮し、一面に在りて立ちぬ。

爾の時阿難、此の因緣を以て、具に世尊に白しぬ。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「平等に阿羅漢を論ぜんと欲せば、當に言ふべし、僧迦摩比丘是れなり。能く魔の官屬を降伏する者も亦、是れ僧迦摩比丘なり。然る所以は、僧迦摩比丘は七返往いて魔を降し、今方に道を成ぜり。自今已後七返を聽して道を作さん。此の限を過ぐれば、則ち非法と爲すなり」と。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「我聲聞中の第一の比丘にして、能く魔を降伏し、今方に道を成ぜし者は、所謂僧迦摩比丘是れなり」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

增壹阿含經卷第二十七

我亦男女　田業及び財寶無し　亦復、奴婢　眷屬及び營從無し　獨り歩みて侶有ること無く
閑靜處に樂しむ　沙門の法を所作して　正しく佛道を求む　男有り女有る者は　愚者の習行す
る所なり　我常に我身無し　豈男女有らん哉

と。是の時婦母男女、此の偈を說くを聞き已つて、各〻此の念を作さく、「我今日此の意を觀察するが如くんば、必ず家に還らさらん」と。復更に觀察して頭從り足に至り、長歎息し已つて、前んで自ら長跪して是の語を作さく、「設し身・口・意に造る所にして非法ならば、盡く共に之を忍ばん」と、即ち遶ること三匝して所在に退きぬ。

是の時尊者阿難、時到つて衣を著け、鉢を持して舍衞城に入つて乞食し、遙に老母及び女を見て之に問ふて曰く、「向者頗ふらくは僧迦摩を見し乎」と。其の老母報へて曰く、「見しと雖も亦見ることを爲さゞるなり」と。阿難報へて曰く、「頗ふらくは共に言語せし乎」と。老母報へて曰く、「共に言語せしと雖も、我意に入らざりき」と。是の時尊者阿難、便ち此の偈を說きぬ。

火をして水を生ぜ使め　復水をして火を生ぜ使めんと欲するは　空法をして有ら使めんと欲し
無欲をして欲せ使めんと欲するなり

と。是の時尊者阿難、乞食し已り、還えつて祇樹給孤獨園に詣り、僧迦摩の所に往至し、一面に在りて坐し、僧迦摩に語げて曰く、「已に如眞の法を知る乎」と。僧迦摩報へて曰く、「我已に如眞の法を覺知せり」と。阿難報へて曰く、「云何が如眞の法を覺知せし乎」と。僧迦摩報へて曰く、「色は無常なり、此れ無常の義は即ち是れ苦なり、苦なれば即ち無我なり、無我なれば即ち是れ空なり。痛・想・行・識、皆悉く無常なり。此れ無常の義なれば即ち是れ苦なり、苦なれば即ち無我なり、無我なれば即ち是れ空なり。此の五盛陰は是れ無常の義なり。無常の義なれば即ち是れ苦の義なり。我は彼の有に非らず、彼は我有に非らず」と。是の時僧迦摩便ち此の偈を說く、

爾の時僧迦摩婦の母、女の聟の道人と作り、復欲に著せずして家累を捨て、又我女を捐つること聚唾を棄つるが如きを聞きぬ。爾の時此の母、女の所に往至し、女に語げて曰く「汝の聟は實に道を作せし乎」と其の女報へて曰く「女も亦作道を爲すことを許さゞるや不邪」と。其の老母告げて曰く「汝今自ら莊嚴し、好き衣裳を著けて此の男を抱く可し、女、僧迦摩の所に往至せよ」と。爾の時母及び女、共に相將ひて僧迦摩の所に至りぬ。爾の時尊者僧迦摩、一樹下に在りて結跏趺坐せり。是の時婦母二人、前に在りて默然として立ちぬ。是の時老母及び女、僧迦摩を覩じ、頭從り足に至り、僧迦摩に語げて曰く「汝今何故に我女と共に語らさる乎。今此の兒女は汝に出つて生れり。汝の今爲す所は實に非理と爲す。人の許さゞる所なり。汝の今思惟する所の者は、是れ人の行ひに非らず」と。是の時尊者僧迦摩即時に便ち此の偈を說きぬ。

　此れ外にして更に善無く　此れ外にして更に妙無し　此れ外にして更に是無く　善念の是に過ぐるもの無し

と。是の時婦母、僧迦摩に語げて曰く「我女は今何の罪有り、何の非法有りや、今何故に之を捨てて出家學道せしや」と。是の時僧迦摩便ち此の偈を說きぬ。

　臭處に不淨を行じ　瞋恚し妄語を好む　嫉妬の心は正しからずとは　如來の說きたまふ所なり

と。

是の時老母僧迦摩に語げて曰く「獨り我女のみ此の事有るに非らず、一切の女人皆此れと同じき耳。舍衞城中の人民の類、我女を見る者、悉く皆意亂れ、與に交通せんと欲すること、渴して飲まんと欲するが如く、覩て厭足無く、皆想著を起す、汝今云何が之を捨てゝ學道し、方便して謗毀するや、設し汝今日我女を用ひずば、汝の生む所の男女は、還えつて自ら之を錄せん」と。爾の時僧迦摩復此の偈を說きぬ。

色は聚沫の如く　痛は浮泡の如く　想は野馬の如く　行は芭蕉の如し　識は幻の法爲り　最勝の說きたまふ所　此れを思惟し已つて　盡く諸行を觀ず　皆悉く空寂にして　眞正有ること無く　皆此の身に由ると　善逝の說きたまふ所なり　當に三法を滅すべし　色を見ば不淨なりと
此の身是の如く　幻僞にして眞ならず　此れを害法と名く　五陰は牢ならず　已に不眞を解り今上跡に還えるなり

是の如く世尊、我今覺りし所は正しく此れを謂ふ耳」と。世尊告げて曰はく、「善い哉、多耆奢、善く能く此の五盛陰の本を觀察せり。汝今當に知るべし。夫れ行人爲るものは、當に此の五陰の本を觀察すべし。皆牢固ならず、然る所以は、我此の五盛陰を觀察せし時に當り、道樹下に在りて、無上等正覺を成ぜしこと、亦卿の今日觀ぜし所の如し」と、爾の時此の法を說きたまひし時、座上の六十の比丘、漏盡きて意に解しぬ。爾の時尊者多耆奢、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

## 十

[五] 聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時僧迦摩長者子、世尊の所に往至し、頭面に足を禮し、一面に在りて坐す。是の時長者子、佛に白して言さく、「唯、願くは世尊、道次に在ることを聽したまへ」と。是の時長者子、卽ち道を爲すことを得て、閑靜之處に在りて已を剋し、修行して其の法果を成じ、族姓子の鬚髮を剃除し、出家學道する所以の、生死已に盡き、梵行已に立ち、所作已に辦じて、更に復胎を受けず、實の如くに之を知りぬ。是の時僧迦摩便ち阿羅漢を成じぬ。是の時閑靜之處に在りて、便ち此の念を生ずらく、「如來の出現は甚だ遇ひ難しと爲す。多薩阿竭は時々に乃ち出でたまふこと、亦優曇鉢花の時々に乃ち出づるが如し。此れも亦是の如し。如來の世に出現したまふこと、時々に乃ち有り。一切行の滅も亦復遇ひ難く、出要も亦難し。愛盡無欲涅槃此れを乃ち要と爲す」と。



【五】Com. on Thera G. VV. 453—458. 宋慧簡譯佛說長者子六過出家經一卷。

是の時彼の女人、遙に多耆奢を見て便ち笑ふ。時に多耆奢、遙に女人の笑ふを見、便ち此の想念を生ずらく「汝今形體骨立ち、皮纒ふこと、亦畫瓶の如く、内に不淨を盛りて世人を誑惑し、亂想を發さ令む」と。爾の時尊者多耆奢、彼の女人を觀じて、頭從り足に至る。此の形體中に何の貪る可きものあらん、三十六物皆悉く不淨なり。今此の諸物は何從り生ずと爲んや」と。是の時尊者多耆奢復是の念を作さく「我今他の形を觀ずるに、自ら身中を觀ずるに如かずと爲す。此の欲は何從り生ずと爲すや、地種從り生ずと爲す耶、水・火・風種より生ずる耶、設し地種從り生ぜば、地種は堅强にして沮壞す可からず。設し水種從り生ぜば、水種は極めて濡りて獲持す可からず。設し火種從り生ぜば、火種は獲持す可からず。設し風種從り生ぜば、風種は形無くして獲持す可からず」と、是の時尊者便ち是の念を作さく「此の欲は但思想從り生ず」と。爾の時便ち此の偈を說く、

欲我汝の本を知る　但思想を以て生ず　我汝を思想するに非らざれば　則ち汝にして有らさらん

と、爾の時尊者多耆奢、又此の偈を說き、不淨之想を思惟するが如し。即ち彼の處に於て、有漏より心解脫を得たり。時に阿難及び多耆奢、羅閱城を出でゝ、世尊の所に至り、頭面に足を禮し、一面に在りて坐す。是の時多耆奢世尊に白して言さく「我今快く善利を得たり。以て覺る所有り」と。世尊告げて曰はく「汝今云何が自ら覺りしや」と。多耆奢佛に白して言さく「色は牢無く、亦堅固ならず、親見す可からず。幻僞にして眞ならず。痛は牢無く、亦堅固ならず、亦水上の泡の如く。幻僞にして眞ならず。想は牢無く、亦堅固ならず、幻僞にして眞ならず、亦野馬の如し。行も亦牢無く、亦堅固ならず、亦芭蕉の樹の如くして、實有ること無し。識は牢無く亦堅固ならず、幻僞にして眞ならず」と。重ねて佛に白して言さく「此の五盛陰は牢無く、亦堅固ならず、幻僞にして眞ならず」と。是の時尊者多耆奢、便ち此の偈を說く、

ん。我今粗其の義を說けり」と。爾の時彼の比丘、佛從り教へを受け、便ち座從り起ち、世尊の足を禮し、便ち退いて去りぬ。

是の時彼の比丘、閑靜の處に在りて其の法を思惟し、族姓子の鬚髮を剃除し、出家學道する所以の無上の梵行を修めんと欲し、生死已に盡き、梵行已に立ち、所作已に辦じて、更に復、胎を受けず、實の如くに之を知る。爾の時彼の比丘、便ち阿羅漢を成ぜり。爾の時彼の比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

## 九

[四]聞くこと是の如し、一時佛、羅閱城迦蘭陀竹園所に在し、大比丘衆五百人と倶なりき。爾の時阿難・多耆奢時到つて衣を著け、鉢を持し、城に入つて乞食しぬ。是の時多耆奢一巷中に在りて、一女人の極めて端正にして、世の與に奇特爲るを見、見已つて心意錯亂し、常と同じからず。是の時多耆奢即ち偈を以て阿難に向つて說く、

欲火の燒く所　心意極めて熾然たり、願くは此れを滅するの義を說け　多く饒益する所有らん

と。是の時阿難、復、此の偈を以て報へて曰く、

欲は顚倒の法と知る　心意極めて熾然たり　當に想像の念を除くべし　欲意便ち自ら休まん

と。是の時多耆奢、復、偈を以て報へて曰く、

心は形の本爲り　眼は候の原爲り　睡臥は扶接を見る　形、亂草の萎するが如し

と。是の時尊者阿難、即ち前進し、右手を以て多耆奢の頭を摩し、爾の時即ち此の偈を說きぬ。

佛を念ぜば貪欲無く　彼の欲難陀を度す　天を覩れば地獄を現じ　意を制せば五趣を離る

と。是の時多耆奢、尊者阿難の語を聞き已つて、便ち是の說を作さく「止みなん、止みなん、阿難、倶に乞食し訖り、還えつて世尊の所に至らん」と。



【四】 S. 8. 4. Ānanda.

「此れは是れ惡利にして、善利爲るに非らず。此れは是れ惡法にして善法爲るに非らざれば。我今禁戒を捨てゝ還えつて白衣と爲らんと欲す。沙門の禁戒は實に犯す可からず。我俗人の中に於て、分檀布施す可し」と。世尊告げて曰はく、「夫れ女人爲るに五種の惡有り、云何が五と爲すや、一には穢惡、二には兩舌、三には嫉妬、四に瞋恚、五には反復無し」と。爾の時世尊、便ち此の偈を說きたまはく、

悲喜は財義に由り　現るゝに善く內に毒を懷く　人の道の善に趣くを壞る　鷹の汚池を捨つるが如し

是の故に比丘、當に不淨の想を除き、不淨觀を思惟すべし。比丘にして不淨觀を思惟し已れば、盡く欲愛・色愛・無色愛を斷ち、盡く無明憍慢を斷たん。汝、今比丘、欲は何從り生ずるや、髮從り生ずと爲んや。然るに髮は惡露不淨にして、皆幻化に由り、世人を誑惑す。手・爪・齒は形體の屬、乃ち淨處無し、何者か是れ眞にして、何者か是れ實なるや、頭從り足に至る皆悉く是の如し。肝膽五藏、形有るの物、一として貪る可きもの無し。何者か是れ眞なるや。汝、今比丘、欲は何從り生ずるや、汝、今善く梵行を修めば、如來の正法は必ず當に苦を盡くすべし。人命極めて短かく、久しく世に存せず、復壽を極むと雖も百歲を過ぎじ、出づる所幾も無し。比丘、當に知るべし。如來の出世は甚だ値ひ難しと爲す。法を聞くも亦難し、四大の形を受くることも亦復得難し。諸根具足も亦復得難し。中國に生るゝを得ることも亦復値ひ難し。善知識と相遇ふことも亦復得難し。法を聞くことも亦難く、義理を分別することも、亦復得難し。法について法を成就すること、此の事も亦難し。汝、今比丘、設し善知識と與に從事せば、便ち能く諸法を分別し、亦當に人の與に廣く其の義を演ぶべし。設し當に法を聞き已れば、則ち能く分別すべし。能く法を分別し已れば、則ち能く其の義を解說して、欲想・瞋恚・愚癡の想有ること無く、已に三毒を離るれば、便ち生・老・病・死を脫せ

【三】欲愛・色愛・無色愛とは、欲・色・無色界に於ける欲望。

て身體を沐浴したまふに、風尋いで時に差え更に増劇せざりき。是の時長者、後五日にして便ち命終を取り、四天王中に生じぬ。

是の時尊者優頭槃、長者の命終せしを聞き、即ち世尊の所に往至し、頭面に足を禮し、一面に在りて坐す。是の時優頭槃、如來に白して言さく、此の長者命終して何處に生ぜりと爲すや」と。世尊告げて曰はく、「此の長者は命終して四天王中に生ぜり」と。優頭槃佛に白して言さく、「此の長者彼に於て命終し、當に何處に生ずべきや」と。世尊告げて曰はく、「彼に於て命終し、當に四天王中に生じ、三十三天乃至他化自在天に生ずべし。彼に於て命終し、復、四天王中に來生せん。此の長者は身六十劫中、惡趣に墮せず。最後に人身と作ることを得、鬚髪を剃除し、三法衣を著け、出家學道して辟支佛を成ぜん。然る所以は湯施の德、其の福乃ち爾ればなり。是の故に優頭槃、恒に念じて衆僧を浴し、聞說道教せば是の如し。優頭槃當に是の學を作すべし」と。爾の時尊者優頭槃、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

八

聞くこと是の如し、一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時異比丘有り、梵行を修むることを樂しまず。禁戒を捨てゝ還えつて白衣と爲らんと欲す。是の時彼の比丘、世尊の所に往至し、頭面に足を禮し、一面に在りて坐す。爾の時彼の比丘、世尊に白して言さく、「我今梵行を修むることを樂しまず。禁戒を捨てゝ還えつて白衣と爲らんと欲す」と。世尊告げて曰はく、「汝今何故に梵行を修むることを樂しまず、禁戒を捨てゝ還えつて白衣と爲らんと欲するや」と。比丘報へて曰さく、「我、今心意熾盛にして、身中火燃たり。若し我女人の、時に端正にして雙び無きを見ば、我爾の時便ち是の念を作さん。『此の女人をして、我と共に交はら使めん』と。又復是の念を作さく、『此れは正法に非らず、設し我此の心に從はゞ、則ち正理に非ざらん』と。我、爾の時復是の念を作さく、

給す。是の時尊者優頭槃、此の使人を將ひて長者の門外に往至して住し、默然として語らず。是の時長者遙に道人有りて、門外に在つて立つを見、卽時に便ち此の偈を說く、

汝今默然として住し　頭を剃り袈裟を著く　何等を欲求せんと爲るや　何の故に因由して來るや

と。爾の時優頭槃復此の偈を以て報へて曰く、

如來無著尊　今日風發を患ひたまへり　設し溫湯有らば如來洗浴したまわんと欲す。

と。是の時長者默然として報へず。是の時五道大神、毘舍羅先に告げて曰く、「長者湯を以て相惠む可し。必ず當に福無量を獲べし。當に甘露の報ひを得べし」と。是の時、長者報へて曰く、「我に自ら五道大神有り。此の沙門を用つて能く何等の事を加益爲んや」と。是の時、五道大神、便ち此の偈を說く、

如來の生じたまふ時に當り　天帝來下して侍す　更に誰か是れを出づる者　能く與共に儔匹せんや　五道神を用ふるが爲に　濟す所有ること能はず　寧ろ釋師を供養せば　便ち大果報を獲ん

と。

爾の時五道大神、復重ねて長者に語げて曰く、「汝好く自ら身・口・意行を守護せよ、汝五道大神の威力を知らざる乎」と。是の時五道大神、卽ち大鬼神の形を化作し、右手に劍を執り、長者に語げて曰く、「今我身は是れ五道大神なり。速に此の沙門に湯を與へよ。足を稽留すること勿れ」と。

是の時長者便ち是の念を作さく、「甚だ奇なり、甚だ特なり、五道大神乃ち此の沙門を供養す」と。卽ち香湯を以て道人に授與し、復、石蜜を以て沙門に授與しぬ。是の時五道大神、自ら此の香湯を執りて、優頭槃と共に世尊の所に至り、此の香湯を以て如來に奉上せり。爾の時世尊、此の香湯を以

應からず。若しは飲食の時向禮す應からず。是れを比丘、此の五事の向禮す應からざる有り。復、五事の時を知るの禮有り。云何が五と爲すや、儞婆の中に在らず、大衆の中に在らず、道路に在らず、亦病痛ならず、復飲食に非らず。此れ應に向禮すべし。是の故に諸比丘、當に方便して、時を知るの行を作すべし」と。爾の時、諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

七

聞くこと是の如し、一時佛、羅閱城迦蘭陀竹園所に在し、大比丘衆五百人と倶なりき。爾の時世尊、優頭槃に告げたまはく、「汝今羅閱城に入りて、少しく溫湯を求めよ。然る所以は、我今日の如きは、脊風痛を患へばなり」と。優頭槃佛に白さく、「是の如し、世尊」と。是の時優頭槃佛の教へを受け已り、時到つて衣を著け、鉢を持し、羅閱城に入りて湯を求む。爾の時尊者優頭槃、便ち是の念を作さく、「世尊は何の因緣有りて、我をして湯を求め使めたまふや。如來は諸結已に盡き、諸善普く會したまへり。然るに如來は復是の語を作したまはく、『我今風を患ふ』と。又復世尊は姓名を授けたまはず、當に誰の家に至るべきや」と。

是の時尊者優頭槃、天眼を以て羅閱城の男子の類の、必ず度す應き者を觀じぬ。是の時羅閱城中を見るに長者有り、毘舍羅先と名く。善根を種えず、戒無く信無く、邪見にして、佛・法・衆に於て邊見と共に相應す。彼れ便ち此の見有り、施無く、與無く、受くる者有ること無く、亦復、善惡の果報有ること無く、今世、後世無く、父無く、母無く、世に沙門婆羅門等の成就する者、今世、後世に於て、自身に作證して、自ら遊化するもの無く、壽命極めて短かくして、五日を餘すの後、當に命終を取るべし。又五道大神に事ふ。是の時優頭槃便ち是の念を作さく、「如來は必ず此の長者を度せんと欲したまふ。然る所以は、此の長者は命終の後、當に啼哭地獄の中に生ずべし」と。是の時優頭槃便ち笑ふ。五道大神、遙に笑ふを見、卽ち其の形を隱して人像と作り、優頭槃の所に來至して使令を

【一】cf. S. 7. 2. 3. Dhp. A. III. pp. 232—233.
【二】優頭槃(Upavāna)。

を作すべし」と。爾の時、諸比丘、佛の所説を聞いて歡喜奉行しぬ。

五

聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「女人に五の欲想有り、云何が五の欲想と爲すや、一に豪貴の家に生れ、二に富貴の家に嫁適し、三に我夫主をして言從ひ、語を用ひ使め、四に多く兒息有り、五に家に在るに獨り己に由るを得、是れを比丘、女人は此の五事の可欲の想有りと謂ふなり。

是の如く比丘、我比丘にも亦五事の可欲の想有り。云何が五と爲すや、所謂、禁戒・多聞・三昧成就・智慧・智慧解脱なり。是れを比丘、此の五事の可欲の法有りと謂ふなり」と。爾の時、世尊、便ち此の偈を説きたまはく、

我は豪族の種に生れ　亦富貴の家に適き　能く夫主を役使し　福に非らずんば剋獲せじ　我をして兒息饒から使め　香華自ら嚴飾す　此の想念有りと雖も　福に非らずは剋獲せじ　信戒にして成就し　三昧移動せず　智慧も亦成就し　懈怠にして剋へず　尋いで道果を得んと欲し　生死の淵に由らず　願くは涅槃に至らんと欲し　懈怠して剋せず

と。是の如く諸比丘、當に方便を求め、善法を行じて、不善法を除去すべし。漸く當に前進して、中悔の心有ること無かるべし。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所説を聞いて歡喜奉行しぬ。

六

聞くこと是の如し、一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「五事の人に向つて應に禮すべからざる有り。云何が五と爲すや、若し偸婆の中に在りて向禮す應からず。大衆の中に在りて向禮す應からず。又道路に在りて向禮す應からず。病痛著床に向禮す

園觀は淸涼を施し　及び好き橋梁を作り　河津は人民を渡し　幷せて好き房舍を作る　彼の人日夜の中に　恒に當に其の福を受くべし　戒定成就するを以て　此の人必ず天に生ぜん

「是の故に諸比丘、當に念じて此の五惠施を修行すべし。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

四

聞くこと是の如し。一時佛、舍衛國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「女人に五力有りて夫主を輕慢す。云何が五と爲すや、一には色力、二に親族の力、三に田業の力、四に兒力、五に自守力なり。是れを女人に此の五力有りと謂ふなり。比丘當に知るべし。女人は此の五力に依つて、已に便ち夫主を輕慢す。設し復、夫主一力を以てせば、盡く彼の女人を覆蔽す。云何が一力と爲すや、所謂富貴の力なり。夫れ人は貴を以てせば色力如かず。親族・田業・兒・自守、盡く如かざるなり。皆一力に由つて爾許の力に勝るなり。

今弊魔波旬も亦五力有り。云何が五と爲すや、所謂、色力・聲力・香力・味力・細滑力なり。夫れ愚癡の人にして、色・聲・香・味・細滑の法に著せば、波旬の境界を度すること能はず。若し聖弟子にして、一力を成就せば、爾許の力に勝る。云何が一力と爲すや、所謂、無放逸の力なり。設し賢聖の弟子にして、無放逸を成就せば、則ち色・聲・香・味・細滑の拘繫する所と爲らず。以て五欲に繫せ所れずば、則ち能く生・老・病・死の法を分別し、魔の五力に勝ち、魔の境界に墮せず、諸の畏難を度し、無爲の處に至らん」と。爾の時、世尊、便ち此の偈を說きたまはく、

戒は甘露の道爲り　放逸は死の徑爲り　貪らざれば則ち死せず　道を失ふを自ら喪ふと爲すなり

と。佛、諸比丘に告げたまはく、「當に念じて修行すべし。放逸ならざれ。是の如く諸比丘當に是の學

以て五事を見ば、則ち此の人正聚に住すと爲すと知るなり。云何が五と爲すや。應に笑ふべくんば則ち笑ひ、應に歡喜すべくんば則ち歡喜し、應に慈心を起すべくんば則ち慈心を起し、恥づ可くんば、則ち恥ぢ、善を聞けば意に著す、當に知るべし、此の人已に正聚に住するなり。是の故に諸比丘、當に邪聚を除きて、正聚に住すべし。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

二

聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「如來世に出現する時、必ず當に五事の爲めなるべし。云何が五と爲すや、一には當に法輪を轉ずべし。二には當に父母を度すべし。三には無信の人を信地に立て、四には未だ菩薩の意を發さゞるものをして、菩薩の心を發さ使め、五には當に將來佛に決を授くべし。若し如來世に出現する時は、當に此の五事の爲めなるべし。是の故に諸比丘、當に慈心を起して、如來に向ふべし。是の如く比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

三

聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「五の惠施にして、其の福を得ざるもの有り。云何が五と爲すや、一には刀を以て人に施し、二には毒を以て人に施し、三には野牛を以て人に施し、四には婬女を人に施し、五には神祠を造作す。是れを比丘、此の五施有りて、其の福を得ずと謂ふなり。比丘、當に知るべし。復、五施有りて大福を得令む。云何が五と爲すや、一には園觀を造作し、二に林樹を造作し、三に橋梁を造作し、四に大船を造作し、五に當來、過去の與に房舍住處を造作す。是れを比丘、此の五事有りて、其の福を得令むと謂ふなり。爾の時、世尊、便ち此の偈を說きたまはく、

# 卷の第二十七

## 邪聚品第三十五

一

聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時、世尊、諸比丘に告げたまはく、「若し人有りて邪見聚に在る者は、何の想像有り、何の相貌有るや」と。爾の時諸比丘、世尊に白して言さく、「如來は是れ諸法の王、諸法の尊なり。善い哉、世尊、當に諸比丘の與に此の義を說きたまふべし。我等聞き已つて、當に之を奉行すべし」と。世尊告げて曰はく、「汝善く之を思念せよ。吾當に汝の爲に其の義を分別すべし」。諸比丘對へて曰さく、「是の如し、世尊」と。爾の時諸比丘、佛從り敎へを受けぬ。

世尊告げて曰はく、「邪聚に在るの人は、當に五事を以て之を知り、以て五事を見るべくんば、則ち此の人邪聚に住するを知るなり。云何が五と爲すや、應に笑ふべくして笑はず、應に歡喜すべき時に歡喜せず、應に慈心を起すべくして慈心を起さず、惡を作して恥ぢず、其の善語を聞いて意に著せず。當に知るべし。此の人必ず邪聚に住するなり。若し衆生有りて邪聚に住せば、當に此の五事を以て之を知るべし。

復次に衆生有りて、正聚に住する者有らば、何の相貌有り、何の因緣有るや」と。爾の時諸比丘、佛に白して言さく、「如來は是れ諸法の王、諸法の尊なり。唯、願くは世尊、當に諸比丘の與に此の義を說くべし。我等聞き已つて當に之を奉行すべし」と。世尊告げて曰はく、「汝等善く之を思念せよ、吾當に汝の爲に其の義を分別すべし」と。諸比丘對へて曰さく、「是の如し、世尊」と。爾の時諸比丘、佛從り敎へを受けぬ。世尊告げて曰はく、「正聚に在るの人は、當に五事を以て之を知るべく、

利を取り、人民減少す。故に城廓の所居の處有ること無から使む。瞿曇、今日出す所自ら過多なるを以て、猶僥者の伸ぶることを得、盲者の眼目を得、冥中に明を得、無目の者の爲に眼目を作すが如し。今沙門瞿曇は、無數に方便して、法を說きたまへり。我今重ねて自ら佛・法・衆に歸しまつる。願くは優婆塞爲ることを聽したまへ。形壽を盡くして、敢えて復殺さゞらん。若し沙門瞿曇にして、我の若し乘象・騎馬を見たまはゞ、我由つて恭敬しまつらん。然る所以は、我王波斯匿・頻毘娑羅王・優塡王・惡生王・優陀延王の爲に、梵の福を受くれば、我恐らく此の德を失はん。設し我右肩を偏露する時は、唯、願くは世尊、我禮拜を受けたまへ。設し我步行する時、瞿曇の來りたまふを見れば、我當に履を去るべし。唯、願くは世尊、我禮拜を受けたまへ」と。

爾の時世尊、儼頭して之を可したまひぬ。是の時生漏梵志、歡喜踊躍して自ら勝ふること能はず。前んで佛に白して言さく、「我今重ねて自ら沙門瞿曇に歸しまつる。唯、願くは世尊、優婆塞爲ることを聽したまへ」と。

爾の時世尊、漸く與に法を說き、歡喜の心を發さ使めたまふ。梵志法を聞き已つて、即ち座從り起ち、便ち退いて去りぬ。爾の時生漏梵志、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

# 增壹阿含經卷第二十六

て時ならず、雨以て時ならず、種うる所の根栽長大なるを得ず、其の中の人民の死する者をして路に盈た使むるなり。梵志當に知るべし、此の因緣に由つて、國をして毀壞し、民をして熾盛ならざら使むるなり。復次に梵志、人民の類の所行非法なれば、便ち雷電霹靂自然の應へ有り。天雹雨を降らし、生苗を壞敗す。爾の時人民の死する者計り難し。

復次に梵志、人民の類の所行非法にして、共に相諍ひ競ひ、或は手拳を以て相加へ、瓦石相擲てば、各々自ら其の命を喪ふ。復次に梵志、彼の人民の類、已に共に諍ひ競へば、其の所に安ぜず、國主寧かならず、各、兵衆を興して、共に相攻伐し、大衆中に至りて、死する者計り難し。或は刀を被むる者有り、或は矟箭に死する者有り。是の如く梵志、此の因緣に由つて、民をして減少し、復熾盛ならざら使むるなり。復次に梵志、人民の類の所行非法なるが故に、神祇をして祐けて、其の便りを得使めず、或は困厄疾病に遭ひて床に著し、降々する者少く、疫死する者多し。是れを梵志、此の因緣に由りて、民をして減少し、復熾盛ならざら使むと謂ふなり」と。

是の時生漏梵志、世尊に白して言さく、「瞿曇の說きたまふ所、甚た快しと爲す哉、此の人本の減少の義を說きたまふ。實に如來の敎へは、本城廓有るも今日磨滅し、本人民有るも今日丘荒す。然る所以は非法有るを以て、便ち慳疾を生じ、已に慳疾を生ずれば、便ち邪業を生じ、以て邪業を生ずるが故に、便ち天雨ふるに時ならず、五穀熟せず、人民熾ならず、故に非法をして流行せ使め、天災變を降らし、生苗を壞敗す。彼非法を行じ、貪慳疾に著するを以て、是の時國主寧かならず、各、兵衆を興し、共に相攻伐し、死する者計り叵し。故に國土をして流荒し、人民をして迸散せ使むるなり。今日世尊の說きたまふ所、甚だ善快哉、非法に由るが故に此の災患を致す。正しく他の爲に捉へ所れ使むれば、便ち其の命を斷たる。非法に由るが故に便ち盜心を生じ、盜心を生ずるを以て、後王を殺すことを爲し、以て邪業を生じ、非人は其の便りを得、此の因緣に由つて、便ち命

所以は、此の諸の結使は是れ魔の境界なればなり。若し比丘有りて、魔の境界に在らば、終に生・老・病・死を脱せず、愁・憂・苦・惱を脱せず。我今此れを苦際と說く。若し復比丘、心移動せず、結使に著せざれば、便ち生・老・病・死・愁・憂・苦・惱を脱せん。我今此れを苦際と說く。是の故に諸比丘、當に是の學を作すべし。結使有ること無かれ、魔界を越出せよ。是の如く比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて、歡喜奉行しぬ。

九

聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時尊者阿難、世尊の所に至り、頭面に足を禮し、一面に在りて立ちぬ。是の時阿難、世尊に白して言さく、「夫れ盡と言ふは、何等の法に名けて盡と言ふや」と。世尊告げて曰はく、「阿難、色は無爲因緣にして此の名有り、無欲無爲を滅盡の法と名く。彼の盡とは名けて滅盡を曰ふなり。痛・想・行・識は無爲無作、皆是れ磨滅の法にして、欲無く、汚無し。彼の滅盡の故に滅盡と名く。阿難當に知るべし。此の五盛陰は欲無く作無く、磨滅の法爲り。彼の滅盡なる者を名けて滅盡と爲す。此の五盛陰は永く已に滅盡し、更に復、生ぜざるが故に滅盡と名く」と。是の時尊者阿難、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

十

聞くこと是の如し、一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時生漏梵志、世尊の所に往至し、頭面に足を禮し、一面に在りて坐す。是の時生漏梵志世尊に白して言さく、「云何が瞿曇、何の因緣有り、何の宿行有りて、此の人民の類をして、盡有り、滅有り、減少する者有ら使むるや。本城廓爲りしに、今日已に壞れ、本人民有りしに、今日丘荒するや」と。世尊告げて曰はく、「梵志、知らんと欲せば、此れ人民の所行の非法に由るが故に、本城廓有りしも今日磨滅し、本人民有りしも、今日丘荒せ使むるは、皆生民慳貪にして、結縛習行し、愛欲の致す所に由るが故に、風雨をし

當に反復を知るべし。其の恩養を識り、小恩も尙忘れず、何に況んや大なる者をや、慳貪を懷くこと勿れ、又自ら譽めず、他人を毀らざれ。是の如く比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所説を聞いて歡喜奉行しぬ。

八

[三]聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「昔釋提桓因三十三天に告げて曰く、『若し諸賢、阿須倫と共に鬪ふ時、設し阿須倫如かずして、諸天・勝を得ば、汝等[四]毘摩質多羅阿須倫を捉へ、將來して此に至り、身を五繫爲よ』と。是の時毘摩質多羅阿須倫、復諸の阿須倫に告げて曰く、『卿等今日諸天と共に鬪ひ、設し勝つことを得ば、便ち釋提桓因を捉へ、縛して此の間に送れ』と。比丘當に知るべし、爾の時二家共に鬪ひ、諸天勝つことを得て、阿須倫は如かざりき。是の時三十三天、躬、毘摩質多羅阿須倫王を捉へ、其の身を束縛し、將ひて釋提桓因の所に詣り、中門外に著し、自ら彼の五繫を觀じぬ。是の時毘摩質多羅阿須倫王、便ち是の念を作さく、『此れ諸天の法正しく、阿須倫の所行は非法なり。我今阿須倫を樂しまず、便ち當に即ち此の諸天宮に住まるべし』と。是の時以て此の念を生じて言く、『諸天の法は正しくして、阿須倫は非法なり。我此の間に住まらんと欲す』と。此の念を作し已りぬ。

是の時毘摩質多羅阿須倫王、便ち自ら身を覺知するに縛繫無く、五欲自ら娛樂しむ。設し毘摩質多羅阿須倫王、此の念を生じ已つて言く、『諸天は非法にして、阿須倫の法は正し。我此の三十三天を用ひず、還えつて阿須倫の宮に詣らんと欲す』と。是の時阿須倫王の身五繫せ被れ、五欲の娛樂自然に消滅しぬ。比丘、當に知るべし、纒縛の急なること、此の事に過ぐるもの莫し。魔の縛する所復斯れより甚し。設し結使魔の與に已に縛せ被れ、動けば魔に縛せ被れ、動かずば魔に縛せ被れず。是の故に諸比丘、當に方便を求めて、心をして縛せ被れず、閑靜の處を樂しま使むべし。然る



【三】 S. 11. 1. 4. Vepacitti.

【四】 毘摩質多羅阿須倫(Vepacitti asura)。

と、此れ得可からず。滅盡の法をして、盡きざら使めんと欲すること、此れ得可からず。夫れ老の法をして、老ひざら使めんと欲すること、此れ得可からず。夫れ病の法をして、病まざら使めんと欲すること、此れ得可からざるなり。夫れ死の法をして、死せざら使めんと欲すること、此れ得可からざるなり。是れを比丘、此の五事有りて、最も得可からずと謂ふなり。若しは如來世に出づるも、若しは如來世に出でざるも、此の法界は恒に住すること故の如くして、朽敗せず、喪滅の聲、生・老・病・死、若しは生、若しは逝有りて、皆本に歸す。是れを比丘、此の五難得の物と謂ふなり。當に方便を求めて、五根を修行すべし。云何が五と爲すや、所謂信根・精進根・念根・定根・慧根なり。是れを比丘、此の五根を行じ已れば、便ち須陀洹を成じ、家家一種より轉進して斯陀含を成じ、轉進して五結使を滅して阿那含を成じ、彼に於て般涅槃して此の世に來らず、轉進して有漏盡きて無漏・心解脫・智慧解脫を成じ、自身に證を作して自ら遊化し、更に復胎を受けず、實の如く之を知る、當に方便を求めて、前の五事を除き、後の五根を修むべし。是の如く比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて、歡喜奉行しぬ。

七

聞くこと是の如し。一時佛、舍衛國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「今五人有りて療治す可からず。云何が五と爲すや、一には諛諂の人は療治す可からず。姦邪の人は療治す可からず。惡口の人は療治す可からず。嫉妬の人は療治す可からず。反復無きの人は療治す可からず。是れを比丘、此の五人有りて、療治す可からずと謂ふなり」。爾の時世尊、便ち此の偈を說きたまはく、

姦邪惡口の人　嫉妬と反復無きと　此の人療す可からず　智者の棄つる所なり。

「是の故に諸比丘、常に當に正意を學び、嫉妬を除去し、威儀を修行し、所說の法の如くなるべし。

無く、初禪に遊び、覺有り、觀有りて念を息め、歡樂に猗りて二禪に遊び、樂有ること無く、護念清淨にして自ら身に樂有るを知り、諸賢の求むる所の護念清淨なる者の三禪に遊び、彼苦樂已に滅して愁憂有ること無く、苦無く、樂無き護念清淨なる四禪に遊ぶ。彼三昧の心を以て、清淨にして瑕穢無く、亦無所畏を得、復三昧を得て、自ら無數の世事を憶ふ。彼便ち過去の事を憶ひ、若しは一生・二生・三生・四生・五生・十生・二十生・三十生・四十生・五十生・百生・千生・萬生・數千萬生、成劫[九]・敗劫[一〇]・成敗の劫[一一]に、我嘗て彼處に生じて、姓は某、字は某、此の如きの食を食し、是の如きの苦樂を受け、壽命の長短、彼に死して此に生れ、此に死して彼に生れし、因緣の本末皆悉く之を知る。彼れ復三昧心の清淨にして瑕穢無きを以て、無所畏を得、衆生の類の生者・死者を觀ず。彼れ復天眼を以て衆生の類の生者・死者・善趣・惡趣・善色・惡色を觀じ、若しは好、若しは醜、行所の種に隨つて、皆悉く之を知る。或は衆生の類有つて、身・口・意に惡を行じ、賢聖を誹謗して邪業の本を造れば、身壞命終して地獄の中に生ず。或は復、衆生有つて、身・口・意に善を行じ、賢聖を誹謗せず、身壞命終して善處天上に生ず。復・清淨なる天眼を以て、衆生の類の若しは好、若しは醜、善趣・惡趣・善色・惡色を觀じて、皆悉く之を知りて無所畏を得、復施心ありて漏を盡し、後此の苦を觀じ、實の如く之を知る。『此れは是れ苦、此れは是れ苦の集、苦の盡、苦の出要なり』と實の如く之を知る。彼れ是の觀を作し已つて、欲漏心・有漏心・無明漏心より解脫を得、已に解脫を得て便ち解脫智を得、生死已に盡き、梵行已に立ち、所作已に辦じて更に復胎を受けず、實の如く之を知れり。是の時鷄頭梵志、便ち阿羅漢を成じぬ。爾の時尊者鷄頭、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

六

[一二] 聞くこと是の如し、一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「世間に五事最も得可からず。云何が五と爲すや、喪ふ應き物をして、喪はざらしめんと欲するこ



【九】成劫とは、天地が成・住・壞・空の四劫に涉つて生滅變化する、その天地の成立の劫をいふ。
【一〇】敗劫とは、又壞劫ともいひ、天地破壞の劫といふ。
【一一】成敗の劫とは、その生滅變化の長時を通じていふ。
【一二】A. V. 48. Thānaṁ.

歡喜踊躍し、自ら勝ふること能はず、前んで佛に白して言さく、「唯、願くは世尊、道次に在りて、沙門と作ることを得ることを聽したまへ」と。爾の時雞頭梵志、即ち道を爲すことを得、諸根寂靜にして自ら其の志を修め、睡眠を除去し、設し眼色を見るも亦想念を起さず、其の眼根も亦惡想流馳の諸念なくして眼根を護る。若し耳聲を聞き、鼻香を嗅ぎ、舌味を知り、身細滑を知り、細滑の想を起さず、意法を知るも亦然り。是の時便ち五の結蓋の人心を覆蔽する者を滅し、人をして智慧無から令め、亦殺害の意無くして其の心を淨め、殺さず、殺すことを念せず、人に殺すことを敎へず、刀杖を執らず、仁慈の心を起して一切衆生に向ひ、不與取を除去し、盗心を起さずして其の意を淨め、恒に施心有りて、一切衆生に於ても亦盗まざら使め、已に婬泆ならず、亦復人を敎へて婬せざら使め、恒に梵行を修め、清淨にして瑕穢無く、梵行中に於て其の心を淨め、亦妄語せず、亦人に敎へて妄語を行ぜ使めず、恒に至誠を念じて、世人に虛詐誑惑有ること無く、中に於て其の心を淨め、復兩舌ならず、亦人に敎へて兩舌せ使めず。若し此の[八]間語を聞かば、傳へて彼に至らず、設し彼の間語は傳へて此に至らず、中に於て其の意を淨め、食に於て足るを知り、氣味に著せず、榮色に著せず、肥白に著せず、但其の形體を支へんと欲して其の命を全から使め、故痛を除き、新なる者をして生ぜざら使めんと欲し、修行道を得て長く無爲の地に處ること、猶し男女有りて、脂膏を以て瘡に塗る者の如し。但・除愈せんと欲するが故なり。此れも亦是の如く、食に於て足るを知る所以は、故痛を除愈し、新なる者をして生ぜざら使めんと欲してなり。

或は復是の時、行道に達曉し、時節を失はず、三十七道品の行を失はず、或は坐し、或は行きて睡眠蓋を除去し、或は初夜の時、或は坐し、或は行きて睡眠蓋を除去し、或は中夜の時、右脇を地に著け、脚と脚とを相累ね、意を繫ぎて明に在り。彼れ復・後夜時を以て、或は坐し、或は經行して其の意を淨む。是の時飲食に足るを知り、經行に時節を失はず、欲不淨想を除去し、諸の惡行

---

【八】間語は、具には離間語といひ、双方の間を離間するが如き言語。

南方に二十一千、西方に二十一千、北方二十一千の阿羅漢此の講堂に集る。爾の時講堂に八萬四千の阿羅漢有りて一處に集在せり。

是の時頻毘娑羅王、諸の群臣を將ひて、世尊の所に至り、頭面に足を禮しまつり、及び比丘僧を禮す。是の時鷄頭梵志、比丘僧を見已つて、歡喜踊躍して自ら勝ふる能はず、飯食の具を以て佛及び比丘僧に飯はし、手自ら斟酌し、歡喜して辭せず。然るに故に遺餘の食有り、是の時、鷄頭梵志、前んで佛に白して言さく、「今佛及び比丘僧に飯し、故に遺餘の飲食の有る在り」と。世尊告げて曰はく、「汝今佛及び比丘僧を請じて、七日供養す可し」と。梵志對へて曰く、「是の如し、瞿曇」と。是の時鷄頭梵志、卽ち前んで長跪し、世尊に白して言さく、「今佛及び比丘僧を請じ、七日供養し、自ら當に衣被・飲食・床敷臥の具・病瘦の醫藥を供給すべし」と。爾の時世尊、默然として請を受けたまひき。

爾の時大衆の中に比丘尼有り、舍鳩利と名く。是の時、比丘尼世尊に白して言さく、「我今心中に念を生ぜり、頗らくは釋迦文佛の弟子の漏盡阿羅漢有りて、此に集らざるや、又天眼を以て東方界・南方・西方・北方を觀じ、皆悉く之を觀ずるに、來らざる者は靡く、皆悉く雲集せり。今此の大會は純ら是れ羅漢眞人の雲集なりや」と。世尊告げて曰はく、「是の如し、舍鳩利、汝の言ふ所の如く、此の大會は純ら是れ眞人にして、東・西・南・北の集らざる者無し」と。爾の時世尊、此の因緣を以て諸比丘に告げたまはく、「汝等頗らくは、比丘尼中天眼徹視すること、此の如き比丘尼を見るや」と。諸比丘對へて曰さく、「見ざるなり、世尊」と。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「我聲聞中第一の弟子にして、天眼第一なる者は、所謂舍鳩利比丘尼是れなり」と。

時に鷄頭梵志、七日の中聖衆に衣被・飲食・床敷臥の具・病瘦の醫藥を供養し、復華香を以て如來の上に散ず。是の時此の華虛空中に在つて、七寶の交露臺を化作す。是の時梵志、交露臺を見已つて

故に悲泣して乃ち斯に至るや」と。時に頻毘婆羅王、佛に白して言さく、「敢えて悲泣せず、但念ずるなり。後世の人民聖興を覩ず、當來の人財物に慳著して威徳有ること無く、尙此の奇寶の名を聞かず。何に況んや見んや。今如來奇特の變有りて、世に出現を蒙むる。是の故に悲泣するなり」と。世尊告げて曰はく、「當來世の國王人民は、實に此の變を覩さらん」と。爾の時世尊、即ち國王の與に法を說き、歡喜の心を發さ使めたまひ、王、法を聞き已つて、即ち座從り起ちて去りぬ。

是の時毘沙門天王、即ち其の日鷄頭梵志に語げて曰はく、「汝右手を舒べよ」と。是の時鷄頭即ち右手を舒ぶ。毘沙門天王即ち金鋌を授與し、又之に告げて曰く、「自ら此の金鋌を以て地上に投ぜよ」と。是の時梵志即ち地上に投じて、乃ち百千兩金を成ず。毘沙門天王報へて曰く、「汝此の金鋌を持して城中に入り、種々の飮食を買ひ、持して此の間に來れ」と。是の時梵志、天王の敎へを受け、即ち此の金を持して城に入り、種々の飮食を買ひ、持して厨所に來る。是の時毘沙門天王、梵志を沐浴し、與へて種々の衣裳を著せ、手に香火を執り、時の到れるを白すことを敎へて、「今正に是れ時なり。願くは尊、屈顧したまへ」と。是の時梵志即ち其の敎へを受け、手に香爐を執りて、時到れることを白さく、「唯、願くは屈顧したまへ」と。

爾の時世尊已に時の至れるを知り、衣を著け、鉢を持し、諸の比丘衆を將ひて、講堂の所に往至し、各次第して坐す。及び比丘衆も亦次第して坐す。是の時鷄頭梵志、飮食極めて多く、然して衆僧復少きを見、前んで世尊に白して言さく、「今日飮食極めて豐多爲り、然るに比丘僧少し、不審なり、云何」と。世尊告げて曰はく、「汝今梵志、手に香爐を執り、高臺の上に上り、東南西北に向つて是の說を作せ、「諸の釋迦文佛の弟子の六神通を得、漏盡阿羅漢なる者は、盡く此の講堂に集れ」と。梵志白して言さく、「是の如し、世尊」と。是の時梵志、佛從り敎へを受け、即ち樓上に上り、諸の漏盡阿羅漢を請ぜり。是の時東方に二十一千の阿羅漢有りて、東方從り此の講堂に來詣す。

梯階の上には、琉璃樹を化作す。亦各種稱計す可からず。復雜寳を以て其の間に廁り、復七寳を以て其の上を覆ひ、周匝四面に好き金鈴を懸く。然して彼の鈴の聲は皆八種の音を出す。復好き床座を化作し、敷くに好褥を以てし、繒幡蓋を懸く、世の希有とする所なり。爾の時 牛頭栴檀を以て火を燃やして食と作し、羅閱城の側十二由旬は香薰其の中に遍滿せり。

是の時摩竭國王、諸の群臣に告ぐらく、「我深宮に生長するも、初め此の香を聞かざりき。羅閱城の側は、何に緣つてか此の好香を聞くや」と。群臣王に白さく、「此れは是れ鷄頭梵志、食厨中に在りて、天の栴檀香を燃やせばなり。是れ其の瑞應なり」と、是の時頻毘娑羅王、諸の群臣に勅すらく、「速に羽寳の車を嚴駕せよ、吾世尊の所に往至して、此の緣を問訊せんと欲す」と。是の時諸臣王に報ふらく、「是の如し、大王」と。頻毘娑羅王卽ち世尊の所に往至し、頭面に足を禮し、一面に在りて立つ。爾の時國王、此の鐵厨の中に五百人有りて食を作すを見、見已つて便ち是の語を作さく、「此れは是れ何の飲食を作す所ぞや」と。時に諸の鬼神、人形を以て報へて曰く、「鷄頭梵志、佛及び比丘僧を請じて、之を供養せり」と。是の時諸國王復遙に高廣の講堂を見、侍人に問ふて曰く、「此れは是れ何人の造る所の講堂なるや、昔未だ有らざりし所なり。誰の爲に造る所なるや」と。群臣報へて曰く、「此の緣を知らず」と。是の時頻毘娑羅王是の念を作さく、「我今世尊の所に至つて、此の義を問はん。然り佛世尊は事として知らざるは無く、事として見ざるは無し」と。

是の時摩竭國頻毘娑羅王、世尊の所に往至し、頭面に足を禮し、一面に在りて坐す。爾の時頻毘娑羅王、世尊に白して言さく、「昔日此の高廣の講堂を見ざりしに、今日之を見る。昔日は此の鐵厨を見ざりしに、今日之を見る。將是れ何物ぞや、是れ誰の變と爲すや」と。世尊告げて曰はく、「大王當に知るべし、此れは是れ毘沙門天王の造る所、及び自在天子此の講堂を造りしなり」と。是の時摩竭國王卽ち座上に於て悲泣交ゝ集り、自ら勝ふること能はず。世尊告げて曰はく、「大王、何



【七】牛頭栴檀とは、又赤栴檀ともいひ、南印度摩羅耶山中に生じ、栴檀香木中最もすぐれしもの。

爾の時梵志卽ち其の婦を將いて世尊の所に至り、共に相問訊して一面に在りて坐す。又復其の婦、如來の足を禮し、一面に在りて坐す。爾の時梵志此の因緣を以て、具に世尊に白しぬ。爾の時世尊、梵志に告げて曰はく、「汝今如來及び比丘僧の爲に、其れ飮食を辦ずべし」と。爾の時梵志、還えりて其の婦を熟視す。時に婦報へて曰く、「但だ佛の敎へに隨ひまつれ、疑難するに足らず」と。爾の時梵志卽ち座從り起ち、前んで佛に白して言さく、「唯、願くは、世尊及び比丘衆、當に我請を受けたまふべし」と。是の時世尊、默然として梵志の請を受けたまひぬ。

爾の時釋提桓因、世尊の後に在りて、叉手して侍せり。爾の時世尊、回顧して釋提桓因に謂ひたまはく、「汝此の梵志を佐けて、只に食具を辦ずべし」と。釋提桓因佛に白して言さく、「是の如し、世尊」と。爾の時毘沙門天王、如來を去ること遠からずして、諸の鬼神衆を將ふ。稱計す可からず。遙に世尊を扇ぎまつりぬ。是の時釋提桓因、毘沙門天王に語げて曰く、「汝も亦此の梵志を佐けて、此の食具を辦ず可し」と。毘沙門報へて曰く、「甚だ善し、天王」と。

是の時毘沙門天王、前んで佛の所に至り、頭面に足を禮し、佛を遶ること三匝して、自ら其の形を隱し、人の像を化作し、五百鬼神を領し、食具を供辦しぬ。是の時毘沙門天王、諸鬼神に勅すらく、「汝等速に栴檀林中に往至して、栴檀を取れ、鐵厨の中に五百の鬼神有り、中に於て食を作す」と。是の時釋提桓因、自在天子に告げて曰く、「毘沙門今日已に鐵厨を造り、佛比丘僧と與に飮食を作さんとす。汝今講堂を化作して、佛比丘僧をして、中に於て飯食を得使む可し」と。自在天子報へて曰く、「此の事甚だ佳なり」と。是の時自在天子、釋提桓因の語を聞き、羅閱城を去ること遠からざる(所)に、七寶の講堂を化作す。所謂七寶とは、金・銀・水精・琉璃・瑪瑙・赤珠・車璖なり。復四の梯階を化作す。金・銀・水精・琉璃なり。金の梯階の上には銀樹を化作し、銀の梯階の上には金樹を化作し、金根・銀莖・銀枝・銀葉なり。若し復金の梯階の上には、銀葉・銀枝を化作し、水精の

各々三兩の金錢を出し、以て食具を供せん」と。爾の時羅閱城中に梵志有り、名けて鷄頭と曰ふ。極めて貧匱爲り。趣しりて自ら存活し、金錢の輸ぶ可き無し。便ち諸の梵志の爲に驅逐せ所れて、衆の中より出さ使む。是の時雞頭梵志、還つて家中に至り、其の婦に告ぐらく、「卿今當に知るべし。諸の梵志等に驅逐せられて、衆に在ることを聽さず。然る所以は、金錢無きに由るが故なり」と。時に婦報へて言く、「還えつて城中に入り、人に隨つて債を擧げ、必ず當に之を得べし」と。又其の主に語ぐらく、「七日の後、當に相報償すべし。設し償はずば、我身及び婦は沒して奴婢と爲らん」と。

是の時梵志、其の婦の言に隨つて卽ち城中に入り、處々に求索め了るも得ること能はず。還えつて婦の所に至り、之に告げて曰く、「吾所在に求索め了るも得ること能はざりき。當に之を如何がすべきや」と。時に婦報へて曰く、「羅閱城の東に大長者有り、不奢蜜多羅と名け、饒財多寶なり。彼に往至して之を債ることを求む可し。『三兩の金錢を與へらるれば、七日の後に自ら當に相還えすべし。設し還えさずば、我身及び婦は沒して奴婢と爲らん』と。是の時梵志、婦從り語を受け、不奢蜜多羅に往詣し、從つて金錢を求む。「七日を過ぎずして、自ら當に相還えすべし。若し相還えさずば、我婦を與へ、身を沒して奴婢と爲さん」と。是の時不奢蜜多羅、卽ち金錢を與へぬ。是の時鷄頭梵志、此の金錢を持して還えり、婦の所に至りて之に告げて曰く、「已に金錢を得たり、當に何をか方宜すべきや」と。時に婦報へて言く、「此の錢を持して、衆中に之を輸ぶべし」と。時に彼の梵志、卽ち金錢を持し、衆中に往いて之を輸びぬ。諸の梵志等此の梵志に語げて曰く、「我等辦具已に訖れり。此の金錢を持して所在に還歸す可し。此の衆中に住することを須ひざれ」と。時に彼の梵志卽ち還えりて舍に至り、此の因緣を以て、婦に向つて之を說きぬ。其の婦報へて言く、「我等二人は共に世尊の所に至り、自ら微意を宣べまつらん」と。

や」と。世尊告げて曰はく、「善い哉、善い哉、大王、饒益する所多く、天世人の爲に福田と作らん」と。爾の時頻毘娑羅王、世尊に白して言さく、「唯、願くは世尊、明日宮中に就いて食したまへ」と。爾の時頻毘娑羅王、已に世尊の默然として請を受けたまひしを見、時に王尋いで起ちて頭面に足を禮し、便ち退いて去りぬ。

爾の時世尊、明日清旦衣を著け、鉢を持し、城に入り、王宮中に至り、各、次第して坐す、爾の時王給するに百味の食を以てし、手自ら斟酌して、歡喜して亂れず。爾の時頻毘娑羅王、世尊の食し訖りたまふを見、鉢器を除去し、便ち一卑座を取りて、如來の前に在つて坐す。爾の時世尊、漸く王の與に微妙の法を說き、歡喜の心を發さ令めたまひぬ。爾の時世尊、諸大王及び群臣の類の與に、微妙の法を說きたまふ。所謂論とは施論・戒論・生天の論、欲は不淨想、淫を穢惡と爲し、出要を樂と爲すと。爾の時世尊、已に彼の衆生の心開け、意解けて復狐疑無きを知り、諸佛世尊の常に說法したまふ所の苦・集・盡・道。爾の時世尊、盡く與に之を說きたまひ、當に座上に於て六十餘人、諸の塵垢盡きて法眼淨を得、六十の大臣及び五百の天人、諸の塵垢盡きて法眼淨を得たり。爾の時世尊、即ち頻毘娑羅王及び諸の人民の與に此の頌偈を說きたまはく、

祠祀は火を上と爲し　書中は頌を最と爲す　王は人中の尊爲り　衆流は海を源と爲す　星中の月は照明なり　光明は日を上と爲す　上下及び四方は　諸の所有の萬物なり　天及び世の人民は　佛を最尊上と爲す　其の福を求めんと欲する者は　當に佛を供養すべし。

と。爾の時世尊此の偈を說き已つて、便ち座從り起ちて去りたまひぬ。爾の時羅閱城中の人民の類、其の貴賤に隨ひ、家の多少に從つて、佛及び比丘僧を飯はせり。

爾の時世尊、迦蘭陀竹園中に在して住したまひ、國界の人民供養せさる者靡し。爾の時羅閱城中の諸の梵志等、次いで食を作す應し。是の時彼の梵志一處に集在し、各、是の論を作さく、「吾等

んで王に白して言さく、「嚴駕已に訖れり、王、是れ時を知りたまへ」と。爾の時頻毘娑羅王、寶羽の車に乘り、羅閱城を出でゝ舍衞城に往詣し　漸く祇洹精舍に至り、祇洹精舍に入らんと欲す。夫れ水を頭に灌ぎし王法に、五の歲容有り。悉く之を一面に捨てゝ世尊の所に至り、頭面に足を禮し、一面に在りて坐す。爾の時世尊、漸く與に微妙の法を說きたまふ。爾の時王、法を聞き已つて世尊に白して言さく、「唯願くは如來、當に羅閱城に在つて夏坐すべし。亦當に衣被・飮食・床敷臥の具・病瘦の醫藥を供給すべし」と。爾の時世尊默然として、頻毘娑羅王の請を受けたまふ。是の時王已に世尊の默然として請を受けたまひしを見、卽ち座從り起ち、頭面に足を禮し、遶ること三匝して、便ち退いて去り、還えつて羅閱城に詣り、宮中に入りぬ。

爾の時頻毘娑羅王、閑靜處に在りて、便ち此の念を生ず、「我も亦如來及び比丘僧に、其の形壽を盡くして、衣被・飮食・床敷臥の具・病瘦の醫藥を供養するに堪任す、但だ當に其れ下劣を愍れむべし」と。是の時頻毘娑羅王、尋いで其の日群臣に告げて曰く、「我昨日此の念を生ぜり、『我能く形壽を盡して如來及び比丘僧に、衣被・飮食・床敷臥の具・病瘦の醫藥を供養し、亦復當に諸の下劣を愍れむべし』と。汝等各々相率ひて、次第に如來諸賢に飯はしまつれば、長夜に福を受くること窮り無からん」と。爾の時摩竭國王、卽ち宮門前に於て大講堂を起し、復種々の食具を辦ぜり。

爾の時世尊、舍衞國を出で、及び五百の比丘を將ひて、漸々に人間を遊化し、羅閱城迦蘭陀竹園所に至りたまひぬ。是の時頻毘娑羅王、世尊の迦蘭陀竹園中に來至したまふと聞き、尋いで時に羽寶の車に乘り、世尊の所に至り、頭面に足を禮し、一面に在りて坐す。爾の時頻毘娑羅王、世尊に白して言さく、「我閑靜の處に在りて、便ち此の念を生ぜり。我今日の如きは、能く衣被・飮食・床敷臥の具・病瘦の醫藥を供辦し、便ち下劣の家を念じ、卽ち群臣に告げぬ、『汝等各々飮食の具を供辦し、次第に佛に飯はしまつれ』と。云何が世尊、此れは是れ其の宜なるや、其の宜に非らずと爲す

と謂ふなり。爾の時世尊、便ち此の偈を說きたまはく、

人は天を善處と爲し　良友は善利を爲し　出家は善業を爲し　有漏盡きて無漏なり。

と。比丘當に知るべし、三十三天は五欲に著す。彼人間を以て善處と爲し、如來に於て出家を得、善利を爲して三達を得。然る所以は、佛世尊は皆人間を出で、天に由つて得るに非らざるなり。是の故に比丘、此に於て命終し、當に天上に生ずべし」と。爾の時彼の比丘、世尊に白さく、「云何が比丘、當に善趣に生ずべきや」と。世尊告げて曰はく、「涅槃とは卽ち是れ比丘の善趣なり。汝今比丘、當に方便を求めて涅槃に至ることを得べし。是の如く比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

四

聞くこと是の如し、一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「沙門出家に五の毀辱の法有り、云何が五と爲すや、一に頭髮長し、二に爪長し、三に衣裳垢に坋れ、四に時宜を知らず、五に多く所論有り、然る所以は、論說有ること多ければ比丘、復五事有り、云何が五と爲すや、一に人言を信ぜず、二に其の敎へを受けず、三に人の喜び見ざる所なり。四に妄言し、五に彼此と鬪亂す。是れを多く論說するの人に此の五事有りと謂ふなり。比丘當に此の五を除きて、邪想無かるべし。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

五

聞くこと是の如し、一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸の比丘五百人と俱なりき。爾の時頻毘婆羅王、諸の群臣に勅すらく、「速に寶羽の車を嚴駕せよ、吾舍衞城に至つて、親しく世尊を覲たてまつらんと欲す」と。是の時群臣、王の敎勅を聞き、卽ち寶羽の車を駕し、前

りて食せり。此の因縁に由つて、無數劫中に地獄の中に入り、今此の對ひを受く。我爾の時坐し見て之を笑ひしかば、今頭痛を患ふ。石もて押すに似たり。猶し頭を以て須彌山を戴くが如し。然る所以は、如來は更に形を受けず、已に衆行を捨て、諸の厄難を度せり。是れを比丘、此の因縁に由つて、今此の報ひを受くと謂ふなり。諸比丘、當に身・口・意・行を護るべし。當に念じて梵行の人を恭敬し、承事すべし。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

三

[五]聞くこと是の如し、一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊諸比丘に告げたまはく、「當に天子の命終せんと欲する時、五の未曾有の瑞應有るべし。而して現在前す。云何が五と爲すや、一に華冠自ら萎み、二に衣裳垢に坋れ、三に身體汚臭、四に本座を樂しまず、五に天女星散ず。是れを天子、當に命終する時、此の五の瑞應有りと謂ふなり。爾の時天子極めて愁憂ひを懷き、胸を椎ちて喚叫す。爾の時諸天子、此の天子の所に來至し、此の天子に語げて言く、「汝今爾來善處に生ず可し。快く善處を得、快く善利を得ん。已に善利を得ば、當に善業に安處することを念ずべし」と。爾の時諸天之を教授す。

爾の時一比丘有り、世尊に白して言さく、「三十三天は云何が善處に生ずることを得、云何が快く善利を得、云何が善業に安處するや」と。世尊告げて曰はく、「人間は天に於て則ち是れ善處なり。善處を得、善利を得る者は正見の家に生れ、善知識と與に從事し、如來の法中に於て信根を得、是れを名けて、快く善利を得と爲すと謂ふなり。彼れ云何が名けて善業に安處すと爲すや。如來の法中に於て信根を得、鬚髮を剃除し、信堅固を以て出家學道す。彼れ學道するを以て戒性具足し、諸根缺けず、飲食足るを知り、恒に念じて經行し、[六]三達明を得、是れを名けて善業に安處を爲す



【五】 ff. Itivuttaka 83.

【六】 三達明とは、三達、三明に同じ。

悉く消滅し、身壞命終して阿鼻地獄中に入る。復天火有りて內宮殿を燒く。爾の時世尊、天眼を以て流離王及び四種の兵の、水に漂はされ、皆悉く命終して、地獄の中に入るを觀見たまへり。爾の時世尊便ち此の偈を說きたまはく、

惡を作すこと極めて甚しと爲す　皆身口行に由る　今身も亦惱みを受け　壽命も亦短促なり
設し家の中に在るの時は　火の燒く所と爲り　若し其の命終の時は　必ず地獄の中に生ぜん。

と。

爾の時衆中の多くの比丘、世尊に白して言さく、「流離王及び四部の兵、今已に命終して、何處に生ずと爲すや」と。世尊告げて曰はく、「流離王は今阿鼻地獄の中に入れり」と。諸比丘世尊に白して言さく、「今此の諸釋は、昔日何の因緣を作して、今流離王に害せ所れしや」と。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「昔日の時、此の羅閱城中に捕魚の村有り、時に世極めて飢儉にして、人草根を食し、一升の金を一升の米に貿えぬ。時に彼の村の中に大池水有り、又復魚饒し。時に羅閱城中の人民の類、往いて池中に至り、魚を捕へて之を食せり。爾の時に當つて、水中に二種の魚有り、一を拘璅と名け、二を兩舌と名く。是の時二魚各、相謂ひて言く、「我等此の衆人に於て、先きに過失無し。我は是れ水性の虫にして平地に處らず。此の人民の類皆來つて食噉ふ。我等設し前世の時、少多の福德有らば、其れ當に用つて怨を報ずべし」と。

爾の時村の中に小兒有り、年八歲に向ふ、亦魚を捕へず、復命を害するに非らず。然して復彼の魚岸上に在らば、皆悉く命終せり。小兒見已つて極めて歡喜を懷きぬ。比丘當に知るべし、汝等是の觀を作すこと莫かれ。爾の時の羅閱城中の人民の類とは、豈異人ならんや、今の釋種是れなり。爾の時の拘璅魚とは、今の流離王是れなり。爾の時の兩舌魚とは、今の好苦梵志是れなり。爾の時の小兒にして、魚の岸上に在るを見て笑ひし者とは、今の我身是れなり。爾の時釋種坐して魚を取

天上に生ぜり。爾の時世尊、城の東門に詣り、城中の烟火洞然たるを見、即時に此の偈を說きたまはく、

一切行は無常なり　生ずれば必ず死有り　生ぜずば則ち死せず　此の滅を最樂と爲す。

と。

爾の時世尊諸比丘に告げたまはく、「汝等盡く來つて尼拘留園中に往詣せよ」と、座に就て坐す。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「此れは是れ尼拘留園なり。我昔中に在りて、諸比丘の與に廣く其の法を說けり。如今は空虛にして、人民有ること無し。昔日の時數千萬衆、中に於て道を得、法眼淨を得たり。今より以後、如來は更に復此の間に至らじ」と。爾の時世尊、諸比丘の與に說法し已り、各、座從り起ちて去り、舍衞祇樹給孤獨園に往きぬ。

爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「今流離王及び此の兵衆久しからずして、世に在り、却後七日にして盡く當に磨滅すべし」と。是の時流離王、世尊の記したまふ所を聞きぬ。『流離王及び諸の兵衆、却後七日にして盡く當に消滅すべし』と。聞き已つて恐怖し、群臣に告げて曰く、「如來は今已に之を記したまふ、云く、『流離王は久しからずして、世に在り、却後七日に兵衆と盡く當に沒滅すべし』と、汝等外境を觀じて、盜賊・水火・災變の來りて、國を侵す者有ること無かれ。何を以ての故に、諸佛如來の語は二有ること無く、所言終に異らざればなり」と。爾の時好苦梵志、王に白して言く、「王、恐懼すること勿れ、今外境に盜賊畏難有ること無し。亦水火・災變無し。今日大王快く自ら娛樂めよ」と。流離王言く、「梵志當に知るべし。諸佛世尊の言に異り有ること無し」と。時に流離王、人をして日を數へて七日頭に至ら使む。王大に歡喜踊躍して、自ら勝ふること能はず。諸の兵衆及び諸の婇女を將ひて阿脂羅河の側に往きて自ら娛樂み、卽ち彼に於て宿す。是の時夜半に非時の雲有り、雲起り、暴風疾雨す。是の時流離王及び兵衆盡く水に漂はされ、皆

爾の時、世尊、諸比丘を將ひ、舍衞城を出でゝ迦毘羅越に往至したまひぬ。時に五百の釋女、遙に世尊の諸比丘を將ひて、來りたまふを見、見已つて皆慚愧を懷く。爾の時釋提桓因及び毘沙門天王、世尊の後に在つて扇ぐ。爾の時世尊、還顧して釋提桓因に語げて言はく、「此の諸の釋女は皆慚愧を懷けり」と。釋提桓因報へて言さく、「是の如し、世尊」と。是の時釋提桓因、即ち天衣を以て此の五百女の身體の上を覆ふ。爾の時世尊毘沙門天王に告げて曰はく、「此の諸の女人は飢渴すること日久し、當に何らかの方宜を作すべし」と。毘沙門王佛に白して言さく、「是の如し、世尊」と。是の時毘沙門天王、即ち自然の天食を辦じて、諸の釋女に與へて、皆悉く充足せり。

是の時、世尊漸く諸女の與に微妙の法を說きたまふ。「所謂諸法は皆當に離散すべし、會すれば別離有り、諸の女當に知るべし、此の五盛陰は皆當に此の苦痛諸惱を受けて、五趣の中に墮すべし。夫れ五盛陰の身を受くれば、必ず當に此の行報を受くべし。已に行報有れば、便ち當に胎を受くべし。已に胎分を受くれば、復當に苦樂の報ひを受くべし。設し當に五盛陰無かるべくんば、便ち復形を受けず。若し形像を受けずば、則ち生有ること無し。生有ること無きを以て、則ち老有ること無し。老有ること無きを以て、則ち病有ること無し。病有ること無きを以て、則ち死有ること無し。死有ること無きを以て、則ち合會別離の惱み有ること無し。是の故に諸女、當に此の五陰成敗の變を念ずべし。然る所以は、五陰を知るを以て則ち五欲を知り、五欲を知るを以て則ち愛法を知り、愛法を知るを以て則ち染著の法を知る。此の衆事を知り已れば、則ち復胎を受けず、胎を受けざるを以て、則ち生老病死無し」と。爾の時世尊、衆の釋女の與に漸く此の法を說きたまふ。「所謂論とは施論・戒論・生天の論、欲は不淨想、出要を樂と爲す」と。爾の時世尊、此の諸女の心開け、意解けしを觀じたまひ、諸佛世尊の常に說法したまふ所の苦・集・盡・道。爾の時世尊盡く彼れの與に之を說きたまふ。爾の時諸の女、諸の塵垢盡きて法眼淨を得、各、其の所に於て命終を取りて、皆

在りて住まるを聞くも、竟に諸の妓女を辭せず、便ち出でゝ外に在りて王と相見る。「善くぞ來れり、大王、入りて小しく駕を停む可し」と。時に流離王報へて言く、「豈吾諸釋と共に闘ふを知らざらんや」と。祇陀對へて曰く、「之を聞けり」と。流離王報へて言く、「汝今何故に妓女と遊び戯れて我を佐けざりしや」と。祇陀王子報へて言く、「我衆生の命を殺害するに堪任せざりき」と。是の時流離王、極めて瞋恚を懷き、即ち復劍を拔きて祇陀王子を斫り殺せり。是の時祇陀王子、命終の後三十三天中に生れ、五百の天女と共に相娛樂す。爾の時世尊天眼を以て、祇陀王子以て命終を取り、三十三天に生れしを觀じ、即便ち此の偈を說きたまはく、

人天中に福を受くるは　祇陀王子の德なり　善を爲さば後に報ひを受く　皆現報に由るが故に
此に憂ひて彼こに亦憂ふ　流離は二處の憂ひなり　惡を爲さば後に惡を受く　皆現報に由るが故に　當に福祐の功に依るべし　前に作し後も亦然り　或は獨りにして爲さば　或は復人知らず　惡を作して惡を知る有り　前に作し後も亦然り　或は獨りにして爲さば　或は復人知らず　人天中に福を受け　二處倶に福を受く　善を爲さば後に報ひを受く　皆現法に由るが故に
此に憂ひ彼こに亦憂ふ　惡を爲さば二處の憂ひなり　惡を爲さば後に報ひを受く　皆現法に由るが故に。

と。

是の時五百の釋女、自歸して如來の名號を稱喚しまつらく、「如來は此に於て生れ、亦此の間從り出家學道して、後成佛したまへり。然るに佛今日永く此の苦惱に遭ひ、此の毒痛を受くることを憶せ見れず、世尊は何故に憶せ見れざるや」と。爾の時世尊、天耳の淸徹なるを以て、諸の釋女の怨みを稱し、佛に向ふを聞きたまひぬ。爾の時、世尊、諸比丘に告げたまはく、「汝等盡く來れ、共に迦毘羅越を觀、及び諸親の命終を看ん」と。比丘對へて曰さく、「是の如し、世尊」と。

に隱在して如今出でざるや」と。爾の時諸臣、王の敎令を聞き、即ち水中に入りて摩呵男を出だせしに、已に命終を取れり。爾の時流離王以て摩呵男の命終を見ぬ。時に王方に悔心を生ず「我今祖父已に命終を取れり。皆親族を愛するに出るが故に、我先きに當に命終を取るべきを知らざりき。設し當に知るべくんば、終に來つて此の釋を攻伐せざりき」と。

是の時流離王九千九百九十萬人を殺し、流血河を成す。迦毘羅越城を燒き、尼拘留園中に往詣す。是の時流離王五百の釋女に語げて言く、「汝等愼しみて愁憂ふること莫かれ、我は是れ汝の夫、汝は是れ我婦なり。要らず當に相接すべし」と。是の時流離王便ち手を舒べて一釋女を捉へて、之を弄ばんと欲す。時に女問ふて曰く、「大王何をか所爲せんと欲するや」と。時に王報へて言く、「汝と情通せんと欲す」と。女、王に報へて曰く、「我今何故に婢生の種と情通せんや」と。是の時流離王、甚だしく瞋恚を懷き、群臣に勅して曰く、「速に此の女を取りて、其の手足を刖り、深き坑の中に著せよ」と。諸臣王の敎令を受け、其の手足を刖り、坑中に擲著す。及び五百の女人皆王を罵りて言く、「誰れか此の身を持して婢生の種と共に交通せんや」と。時に王瞋恚り、盡く五百の釋女を取りて、其の手足を刖り、深き坑の中に著す。是の時流離王、悉く迦毘羅越を壞り、已つて還り、舍衞城に詣りぬ。

爾の時祇陀太子、深宮中に在りて、諸の妓女と共に相娛樂す。是の時流離王、倡伎の聲を作すを聞き、即便ち之を問ふ。「此れは是れ何の音聲か乃ち斯に至るや」と。群臣王に報へて言く、「此れは是れ祇陀王子、深宮中に在りて倡伎樂を作して、自ら娛樂むなり」と。時に流離王即ち御者に勅すらく、「汝此の象を回して祇陀王子の所に詣れ」と。是の時守門人、遙に王の來るを見、王に白して言く、「王小しく徐行せよ。祇陀王子今宮中に在りて、五樂自ら娛しむ。相觸燒すること勿れ」と。是の時流離王、即時に劍を拔き、守門の人を取りて之を殺す。是の時祇陀王子、流離王の門外に

「汝年幼小なるに、何故に我等の門戸を辱しめしや。豈諸釋の善法を修行するを知らずや。我等は倘虫をも害すること能はず、況んや復人命をや、我等能く此の軍衆の一人を壞るも萬人に敵す。然して我等復是の念を作す。然るに衆生を殺害すること稱計すべからず。世尊も亦是の說を作したまへり。「夫れ人、人命を殺害せば、死して地獄に入らん。若し人中に生ずれば、壽命極めて短かからん」と。汝速に去りて復此に住まらざれ」と。是の時奢摩童子卽ち國を出でて去り、更に迦毘羅越に入らざりき。

是の時流離王、復門中に至り、彼の人に語げて曰く、「速に城門を開きて、稽留を須ひざれ」と。是の時諸釋自ら相謂ひて言く、「與に門を開く可し。不可と爲すや」と。爾の時弊魔波旬釋の衆中に在り、一釋の形を作して、諸釋に告げて言く、「汝等速に城門を開き、共に困しみを今日に受くること勿れ」と。是の時諸釋卽ち與に城門を開く。是の時流離王卽ち群臣に告げて曰く、「今此の釋衆人民極めて多し、刀劍の能く害盡する所に非らず、盡く取りて脚を地中に埋め、然る後に暴象をして踏み殺さ使めよ」と。爾の時群臣、王の敎勅を受け、卽ち象を以て之を蹈み殺す。時に流離王、群臣に勅して曰く、「汝等速に好き面手の釋女五百人を選べよ」と。時に諸臣、王の敎令を受け、卽ち五百の端正の女人を選び、將ひて王の所に詣りぬ。

是の時摩呵男釋、流離王の所に至つて、是の說を作さく、「當に我願ひに從ふべし」と。流離王言く、「何等を願はんと欲するや」と。摩呵男曰く、「我今水底に沒在し、我遲疾に隨つて、諸の釋種をして逃走を得使めん。若し我水を出づれば、意に隨つて之を殺せ」と。流離王曰く、「此の事大に佳なり」と。是の時摩呵男釋、卽ち水底に入り、頭髮を以て樹の根に繫ぎて命終を取れり。是の時迦毘羅越の城中の諸釋、東門從り出で、復南門從り入り、或は南門從り出でゝ還えつて北門從り入り、或は西門從り出でゝ北門從り入る。是の時流離王、群臣に告げて曰く、「摩呵男父何故に水中

と。

是の時流離王、迦毘羅越に往詣す。時に諸の釋種、「流離王四部の兵を將ひ、來つて我等を攻む」と聞き、復四部の衆を集め、一由旬の中に往いて流離王を逆ふ。是の時諸釋一由旬の內に、遙に流離王を射る。或は耳孔を射て其の耳を傷けず、或は頭髻を射て其の頭を傷つけず、或は弓を射て壞り、或は弓弦を射て其の人を害せず、或は鎧器を射て其の人を傷けず、或は床座を射て其の人を害せず、或は車輪を射壞つて其の人を傷けず。或は幢麾を壞つて其の人を害せず。是の時流離王、此の事を見已つて便ち恐怖を懷き、群臣に告げて曰く、「汝等此の箭を觀て、何れ從り來ると爲すや」と。群臣報へて曰く、「此れ諸の釋種、此を去ること一由旬中に箭を射て來ら使む」と。流離王報へて言く、「彼れ設し心を發して、我を害せんと欲はゞ、普く當に死に盡くべし。宜しく中に於て舍衞に還歸る可し」と。是の時好苦梵志、前んで王に白して言く、「大王、懼るゝこと勿れ、此の諸の釋種は、皆戒を持てば、虫をも尙害せず、況んや人を害せんや。今宜しく前進せば、必ず釋種を壞らん」と。

是の時流離王、漸々に前進して、彼の釋種に向ふ。是の時諸釋退きて城中に入る。時に流離王、城外に在りて、之に告げて曰く、「汝等速に城門を開け、若し爾らずば、盡く當に汝を取りて之を殺すべし」と。

爾の時迦毘羅越城に釋童子有り、年十五に向ふ。名けて奢摩と曰ふ。流離王今門外に在りと聞き、卽ち鎧を著け、仗を持し、城の上に至りて、獨り流離王と共に鬪ふ。是の時奢摩童子、多く兵衆を殺害す。各々馳散して並に是の說を作さく、「此れは是れ何人ぞや、是れ天爲るや、是れ鬼神爲るや。遙に見るに小兒に似たるが如し」と。是の時流離王便ち恐怖を懷き、卽ち地孔中に入りて之を避く。時に釋種、流離王の衆を壞りしを聞く。是の時諸釋卽ち奢摩童子を呼び、之に告げて曰く、

はく、

親族の蔭は涼し　釋種は佛より出づ　盡く是れ我枝葉なり　故に斯の樹下に坐するなり。

と。是の時流離王復是の念を作さく、「世尊は今日釋種より出でたまへば、吾應に往いて征すべからず。宜しく此れを齊めて本土に還歸る可し」と。是の時流離王卽ち舍衞城に還えりぬ。

是の時好苦梵志、復王に語げて曰く、「王當に本釋種に辱しめ所れしを憶ふべし」と。是の時流離王、此の語を聞き已つて、復四種の兵を集め、舍衞城を出でて迦毘羅越に詣る。是の時大目犍連、流離王の往いて釋種を征せんとすと聞き、聞き已つて世尊の所に至り、頭面に足を禮し、一面に在りて立つ。爾の時目連、世尊に白して言さく、「今日流離王、四種の兵を集め、往いて釋種を攻めんとす。我今流離王及び四部の兵を他方世界に擲著せ使むるに堪任す」と。世尊告げて曰はく、「汝豈能く釋種の宿緣を取りて、他方世界に著せんや」と。時に目連佛に白して言さく、「實に宿命の緣をして、他方世界に著せ使むるに堪えず」と。爾の時世尊、目連に語げて曰はく、「汝還えつて座に就け」と。目連復佛に白して言さく、「我今此の迦毘羅越を移して、虛空中に著するに堪ゆ」と。世尊告げて曰はく、「汝今能く釋種の宿緣を移して、虛空中に著するに堪ふるや」と、目連報へて曰さく、「不なり、世尊」と。佛、目連に告げたまはく、「汝今還えりて本位に就け」と。爾の時目連、復佛に白して言さく、「唯、願くは聽許したまふに鐵籠を以てし、迦毘羅越城の上に疏覆せんことを」と。世尊告げて曰はく、「云何が目連、能く鐵籠を以て宿緣を疏覆するや」と。目連佛に白さく、「不なり、世尊」と。佛目連に告げたまはく、「汝今還えりて本位に就け、釋種今日宿緣已に熟せり、今當に報ひを受くべし」と。爾の時世尊、便ち此の偈を說きたまはく、

空をして地と爲さ使め　復地をして空と爲さ使めんと欲すること　本緣の繫ぐ所にして　此の緣は腐敗せざるなり。

の統領する所なり」と。時に曰く、「汝等速に嚴駕して、[三]四部の兵を集めよ、吾往いて釋種を征せんと欲す」と。諸臣對へて曰く、「是の如し、大王」と。是の時群臣、王の敎令を受け、即ち四種の兵を運集せり。是の時流離王、四部の兵を將ひて迦毘羅越に往至す。

爾の時衆多の比丘、「流離王往いて釋種を征す」と聞き、世尊の所に至り、頭面に足を禮し、一面に在りて立ち、此の因緣を以て具に世尊に白せり。是の時世尊、此の語を聞き已つて、即ち往いて流離王を逆へ、便ち一枯樹の下に在す。枝葉有ること無し。中に於て結跏趺坐したまひぬ。是の時流離王遙に世尊の樹下に在して坐したまふを見、即ち車を下りて世尊の所に至り、頭面に足を禮し、一面に在りて立つ。爾の時流離王世尊に白して言さく、「更に好樹有り、枝葉繁茂す、[四]尼拘留等なり。何故に此の枯樹の下に坐したまふや」と。世尊告げて曰はく、「親族の蔭の故に、外人に勝さる」と。是の時流離王、便ち是の念を作さく、「今日世尊の故に親族爲り、然れば我今日は應に本國に還えるべし、往いて迦毘羅越を征すべからず」と。是の時流離王即ち辭して還えり退きぬ。

是の時好苦梵志復王に白して言く、「當に本釋の爲に辱しめ所れしを憶ふべし」と。是の時流離王、此の語を聞き已つて、復瞋恚を興し、「汝等速に嚴駕して四部の兵を集めよ、吾往いて迦毘羅越を征せんと欲す」と。是の時群臣、即ち四部の兵を集め、舍衞城を出で、迦毘羅越に往詣して、釋種を征伐す。是の時衆多の比丘、聞き已つて往いて世尊に白さく、「今流離王兵衆を興し、往いて釋種を攻めんとす」と。爾の時世尊、此の語を聞き已つて、即ち神足を以て、往いて道側に在し、一樹下に在りて坐したまへり。時に流離王、遙に世尊の樹下に在して坐したまふを見、即ち車を下りて世尊の所に至り、頭面に足を禮し、一面に在りて立つ。爾の時流離王、世尊に白して言さく、「更に好樹有るに、彼に在して坐したまはず、世尊は今日何故に此の枯樹の下に在して坐したまふや」と。世尊告げて曰はく、「親族の蔭は外人に勝るなり」と。是の時世尊、便ち此の偈を說きたま

【三】四部の兵とは、象軍、馬軍、車軍、步軍をいふ。

【四】尼拘留、前卷索引尼拘類樹を見よ。

爾の時、迦毘羅衛城中に新に一講堂を起せり。天及び人民、魔若しは魔天、此の講堂中に在りて住せず。時に諸の釋種、各、自ら相謂ひて言く、「今此の講堂成來し、未だ久しからずして畫彩已に竟らん、猶し天宮の如くして、異り有ること無けん。我等先づ應に如來を請じ、中に於て供養すべし。及び比丘僧と。我等をして福を受くること窮り無から令めん」と。是の時釋種、卽ち堂上に於て種種の座具を敷き、繒幡蓋を懸け、香汁を地に灑き、衆の名香を燒く。復好水を儲へて諸の明燈を燃せり。

是の時流離太子、五百の童子を將ひて、講堂の所に往至し、卽ち師子之座に昇りぬ。時に諸の釋種、之を見、極めて瞋恚を懷き、卽ち前んで臂を捉へて門外に逐ひ出し、各、共に之を罵り、「此れは是れ婢の子、諸天世人も未だ中に居る者有らざるに、此の婢の生物敢えて中に入つて坐す」と。復流離太子を捉へて之を撲ち、地に著す。是の時流離太子、卽ち地從り起ち、長歎息して後ろを視る。是の時梵志子有り、名けて好苦と曰ふ。是の時流離太子、好苦梵志子に語げて曰く、「此の諸の釋種、我を取りて毀辱し、乃ち斯に至る。設し我後に王位を紹ぐ時は、汝當に我に此の事を告ぐべし」と。是の時好苦梵志報へて曰く、「太子の敎への如し」と。時に彼の梵志子、日三時に太子に白して曰く、「釋に辱しめ所れしを憶へ」と、便ち此の偈を說きぬ。

一切は盡に歸す　果熟せば亦當に墮すべし　合會せば必ず當に散ずべし　生有れば必ず死有りと。

是の時波斯匿王、壽に隨つて世に在り、後に命終を取り、便ち流離太子を立てゝ王と爲せり。是の時好苦梵志、王の所に至りて是の說を作さく、「王當に本釋に毀辱せ所れしを憶ふべし」と。是の時流離王報へて曰く、「善い哉、善い哉、善く本事を憶ふ」と。是の時流離王、便ち瞋恚を起し、群臣に告げて曰く、「今人民の主は是れ何人と爲すや」と。群臣報へて曰く、「大王、今日は流離王

婢子を與へて親を結ぶべけん」と。其の衆中に或は言く、「當に與ふべし」と。或は言く、「與ふべからず」と。

爾の時一釋有り、彼の衆中に集り、摩呵男と名く、衆人に語げて言く、「諸賢、共に瞋恚すること勿れ、然る所以は、波斯匿王は、人と爲り暴惡なり、設し當に波斯匿王來らば、我國界を壞らん。我今躬自ら、當に往いて、波斯匿王と相見て、此の事情を說くべし」と。時に摩呵男の家中の婢、一女を生み、面貌端正にして、世の希有なり。時に摩呵男、此の女を沐浴し、與へて好衣を著せ、寶羽の車に載せ、送つて波斯匿王に與ふ。又王に白して言く、「此れは是れ我女なり、共に親を成すべし」と。

時に波斯匿王、此の女を得て極めて歡喜を懷き、即ち此の女を立てゝ第一の夫人と爲せり、未だ數日を經ずして身懷妊し、復八九月を經て一男兒を生めり、端正にして雙び無く、世の殊特とする所なり。時に波斯匿王、諸の相師を集め、此の太子の與に字を立てり。時に諸の相師、王の語を聞き已つて、即ち王に白して言さく、「大王、當に知るべし、夫人を求めたまひし時、諸釋共に諍ひて、或は言く『當に與ふべし』と、或は言く、『與ふ可からず』と、彼れ此れ流離せしめたり。今當に名を立つべし、名けて毘流離と曰さん」と、相師號を立て已り、各、座從り起ちて去りぬ。

時に波斯匿王、此の流離太子を愛し、未だ曾て目前を離れず。然るに流離太子、年八歲に向へり。王之に告げて曰く、「汝今已に大なり、迦毘羅衞に詣り、諸の射術を學ぶ可し」と。是の時、波斯匿王、諸の使人に給して、大象に乘せ使む。釋種の家に往詣し、摩呵男の舍に至り、摩呵男に語げて言く、「波斯匿王、我をして此に至り、諸の射術を學ば使む。唯、願くは祖父母、事々に敎授したまへ」と。時に摩呵男報へて曰く、「術を學ばんと欲せば、善く之を習ふ可し」と。是の時摩呵男釋種、五百の童子を集め、共に術を學ば使む。時に流離太子、五百童子と共に射術を學べり。

---

【二】 毘流離（Virūḍhaka）とは、流離王とも瑠璃王ともいひ、舍衞城主波斯匿王の子、父王を弑し迦毘羅城の釋迦族を亡ぼす。

此の五盛陰を思惟せば、時に便ち阿羅漢を成ぜん」と。

諸比丘問ふて曰く、阿羅漢の比丘は、當に何等の法を思惟すべきや」と。舍利弗報へて言く、「汝等の所問何ぞ其れ過ぐる乎、羅漢の比丘は、所作已に過ぎて、更に行を造らず、有漏より解脱を得、五趣生死の海に向はず、更に有を受けて、造作する所有らず。是の故に諸賢、持戒の比丘・須陀洹・斯陀含・阿那含は、當に此の五盛陰を思惟すべし。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時、諸比丘、舍利弗の所説を聞いて歡喜奉行しぬ。

二

[1]聞くこと是の如し。一時佛、波羅㮈仙人鹿野苑中に在しき。爾の時、如來、成道して未だ久しからず、世人之を稱して大沙門と爲しき。爾の時波斯匿王、新に王位を紹げり。是の時波斯匿王、便ち此の念を作さく、「我今新に王位を紹げり、先づ釋家の女を取るべし。設し我に與ふれば、乃ち我心に適ひ、若し我に與へ見れずば、今當に力を以て往いて之に逼らん」と。爾の時波斯匿王、即ち一臣に告げて曰く、「迦毘羅衞に往至して、釋種の家に至り、我名字を持して、彼の釋種に告げて云へ、『波斯匿王は問訊す、起居輕利なるや、問ひを致すこと無量なり』と。又彼の釋に語げよ、『吾釋種の女を取らん、設し我に與へんと欲せば、德を抱きて永く已まん、若し違せ見るれば、當に力を以て相逼らん』」と。

爾の時大臣、王の教勅を受け、迦毘羅衞國に往至す。爾の時、迦毘羅衞の釋種五百人、一處に集在せり。是の時大臣、即ち五百の釋種の所に往至し、波斯匿王の名字を持して、彼の釋種に語げて言く、「波斯匿王は起居輕利なりやと問訊すること慇懃にして、意を致すこと無量なり。吾釋種の女を取らんと欲す。設し吾に與ふれば、是れ其の大幸なり。若し與へずば、當に力を以て相逼るべし」と。時に諸の釋種、此の語を聞き已つて、極めて瞋恚を懐き、「吾等は大姓なり、何に縁つてか當に



【1】 Dhp. A. I. pp. 337ff.

# 卷の第二十六

## 等見品第三十四

一

聞くこと是の如し、一時尊者舍利弗、舍衛城祇樹給孤獨園に在し、大比丘衆五百人と倶なりき。爾の時衆多の比丘、舍利弗の所に到り、共に相問訊し、一面に在りて坐す。爾の時衆多の比丘、舍利弗に白して言く、「戒成就の比丘は、當に何等の法を思惟すべきや」と。舍利弗報へて言く、「戒定就の比丘は、當に五盛陰を思惟すべし。云何が五と爲すや、所謂、色陰・痛陰・想陰・行陰・識陰なり。無常なれば苦と爲し、惱と爲し、多く痛畏と爲し。亦當に苦・空・無我と思惟すべし。爾の時戒成就の比丘にして、此の五盛陰を思惟せば、便ち須陀洹道を成ぜん」と。

比丘、舍利弗に白して言く、「須陀洹の比丘は、當に何等の法を思惟すべきや」と。舍利弗報へて言く、「須陀洹の比丘も亦、當に此の五盛陰は苦と爲し、惱と爲し、多く痛畏と爲すと思惟すべし。亦當に苦・空・無我を思惟すべし。諸賢、當に知るべし、若し須陀洹の比丘にして、此の五盛陰を思惟せば、時に便ち、斯陀含果を成ぜん」と。

諸比丘問ふて曰く、「斯陀含の比丘は、當に何等の法を思惟すべきや」と。舍利弗報へて言く、「斯陀含の比丘も亦、當に此の五盛陰は苦と爲し、惱と爲し、多く痛畏と爲すと思惟すべし。亦當に苦・空・無我を思惟すべし。爾の時斯陀含の比丘にして、當に此の五盛陰を思惟せば、時に便ち阿那含果を成ぜん」と。

諸比丘問ふて曰く、「阿那含の比丘は、當に何等の法を思惟すべきや」と。舍利弗報へて言く、「阿那含の比丘も亦、當に此の五盛陰は苦と爲し、惱と爲し、多く痛畏と爲すと思惟すべし。亦當に

曰さく、「我等世尊、寧ろ人の床臥の具を受けて、鐵床の上に臥せじ。然る所以は、此の毒痛・稱計す可からざればなり」と。世尊告げて曰はく、「彼の愚癡の人は戒行有ること無し。沙門に非らずして是れ沙門と言ひ、梵行有ること無くして、梵行を修むと言はんより、寧ろ當に鐵の床上に臥すべし。無戒を以て他の信施を受けざれ。何を以ての故に、鐵の床上に臥するの痛みは斯須の間なれば、無戒を以て他の信施を受けざれ。比丘當に知るべし。我今日の如く、無戒の人の趣向する處を觀ずるに、設し彼の人聞かば、形體枯悴し、沸血面孔從り出で、便ち命終を取れば、女人と共に相交遊せず、人の禮敬の德を受けず、人の衣被・飮食・床敷臥の具・病瘦の醫藥を受けず、其れ無戒の人は、後世・前世の罪を觀ぜず、命根を顧みざるを以て、此の苦痛を受け、無戒の人は當に三惡趣の中に生ずべし。然る所以は、其れ惡行を造くるを以ての致す所なればなり。如來は今日善行の人の趣向する所を觀察するに、正使へば毒に中り、刀の爲に傷つけ所れて、自ら命根を斷たん。何を以ての故に、此の身を捨てゝ天の福を受けんと欲せばなり。當に善處に生ずべし。皆前世に善行を受けしに由つての報ひの致す所なり。是の故に比丘、當に〔三〕戒身・定身・慧身・解脫身・解脫所見身を修行すべし。今世に其の果報を獲て、甘露道を得使め、正使亦人の衣被・飮食・床敷臥の具・病瘦の醫藥を受けて過失無く、又檀越をして福を受くること窮り無から使めんと欲せよ。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時此の法を說きたまふ時、六十の比丘、漏盡きて意に解り、六十の比丘は還えつて法服を捨てゝ白衣と作りぬ。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

五王及び月光と　尸婆と二種の鬪ひ　二掃と二の行法と　去住に二種有り　枯樹は最も後に在り

# 增壹阿含經卷第二十五



【三】戒身・定身・慧身・解脫身・解脫所見身とは、五分法身のこと。前に出づ。

如きの人は、寧ろ此の火中に投入するとも、女人と共に相交遊せざれ。然る所以は、彼の人寧ろ此の苦痛を受くとも、此の罪を以て地獄の中に入り、苦を受くること無量ならざればなり。

云何が比丘、寧ろ人の禮拜恭敬を受くと爲んや、寧ろ人をして、利劍を取つて其の手足を斷た使めんや」と。諸比丘對へて曰さく、「寧ろ恭敬禮拜を受けて、人をして劍を以て、其の手足を斷た使めざらん。然る所以は、其の手足を斷たば、痛み稱計す可からざればなり」と。世尊告げて曰はく、「我今汝等に告げん、沙門の行に非らずして、是れを沙門と言ひ、梵行の人に非らずして、是れを梵行と言ひ、正法を聞かずして、正法を聞くと言ひ、清白の行無くして善根を斷つ、是の如きの人は、寧ろ身を投じて此の利劍を受けよ。無我を以て他の恭敬を受けざれ。然る所以は、此の痛みは斯須の間耳、地獄の苦痛は稱計すべからざればなり。

云何が比丘、寧ろ人の衣裳を受くと爲んや、寧ろ熱鐵の鍱を以て、用つて身を纏裹せんや」と。諸比丘對へて曰さく、「寧ろ以て人の衣裳を受けて、此の苦痛を受けじ。然る所以は、此の毒痛稱計すべからざればなり」と。世尊告げて曰はく、「我今重ねて汝に告げん、無戒の人は寧ろ熱鐵の鍱を以て、其の身を纏裹して、人の衣裳を受けざれ。然る所以は、此の痛みは須臾の間耳。地獄の苦痛は稱計す可からざればなり。

云何が比丘、寧ろ人の信施の食を受くると爲んや、寧ろ以て熱鐵の丸を呑むとせんや」と。諸比丘對へて曰さく、「寧ろ人の信施の食を受けて、熱鐵の丸を呑まじ。然る所以は、此の痛みは堪ふ可からざる處なればなり」と。世尊告げて曰はく、「我今汝に語げん、寧ろ熱鐵の丸を呑みて、無戒を以て人の信施を受けざれ。然る所以は、熱鐵の丸を呑むの痛みは斯須の間なれば、無戒を以て他の信施を受けざれ。

云何が比丘、寧ろ人の床敷の具を受くると爲んや、寧ろ熱鐵の床上に臥するや」と。諸比丘對へて

に任せば、意屋舍に著し、人の奪はんことを畏恐れ、或は意財產に著して、復人の奪はんことを恐る。或は多く物を集むること、猶し白衣の親々に貪著し、人をして親々の家に至ら使めんと欲するが如く、恒に白衣と共にして相往來す。是れを比丘、一處に住する人に此の五の非法有りと謂ふなり。是の故に諸比丘、當に方便を求めて、一處に住すること勿るべし。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

九

聞くこと是の如し。一時佛、舍衛國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「一處に住せざる人に五の功德有り。云何が五と爲すや、屋舍を貪らず、器物を貪らず、多く財物を集めず、親族に著せず、白衣と共に相往來せざるなり。是れを比丘、一處に住せざる人に、此の五の功德有りと謂ふなり。是の故に諸比丘、當に方便を求めて、此の五事を行ずべし。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

十

〔一〕聞くこと是の如し、一時佛、摩竭國光明池の側に在しき。爾の時世尊、大比丘衆五百人と倶に、人間に在りて遊化したまひき。爾の時世尊、遙に大樹の火の爲に燒か所ゝを見、見已つて如來、更に一樹下に詣り、到り已つて樹下に就いて坐したまへり。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「云何が比丘、寧ろ身を持して此の火中に投ずと爲んや、寧ろ端正の女人と與にして、共に交遊せんや」と。爾の時諸比丘、佛に白して言さく、「寧ろ女人と共に相交遊せん、身を投げて此の火中に入らじ。然る所以は、此の火の毒熱稱計すべからず、其の命根を斷ち、苦を受くること無量なればなり」と。世尊告げて曰はく、「我今汝等に告ぐ、沙門の行に非らずして、是れを沙門と言ひ、梵行の人に非らずして、是れを梵行と言ひ、正法を聞かずして、我法を聞くと言ひ、淸白の法無き是の



【一】A. VII. 68. Aggi. 中阿含第五經木積喩經(卷一)。

に、水を以て地に灑がず、瓦石を除去せず、其の地を平整せず、端意地を掃かず、穢惡を除去せざるなり。是れを比丘、掃地の人にして、五の功德を成ぜずと謂ふなり。

比丘當に知るべし、掃地の人にして、五の功德を成ず。云何が五と爲すや、是に於て偸婆を掃くの人にして、水を以て地に灑ぎ、瓦石を去り、其の地を平整にし、端意地を掃き、穢惡を除去せば是れを比丘、五事有りて、人をして功德を得令むと謂ふなり。是の故に諸比丘、其の功德を求めんと欲せば、當に此の五事を行ずべし。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

七

一〇 聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時、世尊、諸比丘に告げたまはく、「長く遊行するの人に五の艱難有り、云何が五と爲すや、是に於て恒に遊行する人は、法教を誦せず、誦する所の敎は之を忘失し、定意を得ず、以て三昧を得るも、復之を忘失し、法を聞くも持つこと能はず。是れを比丘、多く遊行する人に、此の五難有りと謂ふなり。

比丘、當に知るべし。多く遊行せざる人に五の功德有り、云何が五と爲すや、未だ曾て法を得ずして法を得已り、得て復忘失せず、多聞にして能く所持有り、能く定意を得、以て三昧を得て復之を失はず。是れを比丘、多く遊行せざる人に、此の五功德有りと謂ふなり。是の故に諸比丘、多く遊行すること莫かれ。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

八

聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時、世尊、諸比丘に告げたまはく、「若し比丘有つて、恒に一處に止まれば、五の非法有り、云何が五と爲すや、是に於て比丘、一處

【10】 A. V. 221. Dīghacārika.

爾の時、彼の比丘、此の如き教勅を受けて、卽ち不淨の相を思惟し、不淨の想を思惟せしを以て、爾の時有漏より、心解脫を得、無爲處に至れること、彼の第五人の鎧を著け、仗を持し、軍に入りて戰鬪ひ、彼衆敵を見るも恐怖有ること無く、設ひ來つて害する者有るも、心移動せず、能く外寇を破して、他界中に居るが如し。是れに由つての故に、今此の人能く魔衆を破し、諸の亂想を去つて、無爲處に至ると說くなり。是れを第五人世に出現すと謂ふなり。比丘、當に知るべし。世間に此の五人有りて世間に出現するなり。是の故に諸比丘、當に念じて欲不淨想を修行すべし。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時、諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

五

聞くこと是の如し、一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時、世尊、諸比丘に告げたまはく、「夫れ掃地の人に、五事有れば功德を得ず。云何が五と爲すや。是に於て掃地の人にして、逆風を知らず、順風を知らず、復聚を作さず、復糞を除かずば、然も地を掃くの處復淨潔に非らず。是れを比丘、掃地の人、五事有りと雖も、大功德を成ぜずと謂ふなり。

復次に比丘、掃地の人五功德を成ず。云何が五と爲すや、是に於て掃地の人にして、逆風・順風の理を知り、亦聚を作すことを知り、亦能く之を除きて遺餘を留めずば、極めて淨好なら令めん。是れを比丘、此の五事有りて、大功德を成ずと謂ふなり。是の故に諸比丘、當に前の五事を除き、後の五法を修むべし。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

六

聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時、世尊、諸比丘に告げたまはく、「若し人有つて偸婆を掃くも、五の功德を得ず。云何が五と爲すや、是に於て人有り、偸婆を掃く

戰鬪の人と謂ふなり。

復次に比丘有りて村落に住在し、彼の比丘村の中に女人有るを聞き、聞き已つて衣を著け、鉢を持して村に入つて乞食す、身・口・意を守護ず、彼れ女人の端正にして雙び無きを見、中に於て便ち欲意を起し、或は女人と共に相捻挃し、或は手拳相加へて、便ち禁戒を捨て還えつて、白衣と爲ること、彼の第四の戰鬪の人の、大軍の中に在つて、他の爲に捉へ所れ、命根を喪失ふが如し。是れに由るが故に、今此の人を說くなり。復次に比丘有り、村落中に人有つて、世の希有なりと聞く、彼れ此れを聞くと雖も、欲想を起さず。彼の比丘時到つて衣を著け、鉢を持し、村に入つて乞食し、而して身・口・意を守護り、彼れ女人を見ると雖も、欲想を起さず、邪念有ること無く、設ひ女と共に言語往返するも、亦欲想を起さず、亦邪念無し。設し女人と共にし、共に相捻挃し、手拳相加ふれば、爾の時便ち欲想を起し、身・口・意便ち熾盛なり。欲意已に熾盛なれば、還えつて園中に詣り、長老の比丘の所に至り、此の因緣を以て長老の比丘に向つて之を說く、『諸賢當に知るべし、我今欲意熾盛にして、自ら禁制すること能はず、唯、願くは法を說いて、欲の惡露不淨を視せ使めよ』と。

是の時長老の比丘告げて曰く『汝今當に觀ずべし、此の欲は何從り生ずと爲すや、復何に從つて滅するや。如來の說きたまふ所は『夫れ欲を去らんと欲せば、不淨觀を以て之を除き、及び不淨觀の道を修行せよ』と。是の時長老の比丘、便ち此の偈を說いて言く、

設し顚倒を知る者は　心を加へて熾盛なり　當に諸の熾心を去るべし　欲意止みて休息なり

と、『諸賢之を知る、欲は想從り生じ、想念を興すを以て便ち欲意を生ず、或は能く自ら害し、復他人を害し、若干の災患の變を起し、現法中に於て、其の苦患を受け、復後世に於て苦を受くること無量なり。欲意除くを以て亦自ら害せず、他人を害せず、現法の報ひに於て其の苦を受けず。是の故に今當に想念を除くべし。想念無きを以て便ち欲心無し、欲心無きを以て便ち亂想無し』と。

【九】現法(Ditthevadhamma)とは、現在のこと。

謂ふなり。復次に第二に戰鬪の人は、鎧を著け、仗を持し、軍に入つて戰鬪ふ。彼れ風塵を見て畏懼を生ぜざるも、但擊鼓の音を聞いて、便ち恐怖を懷く。是れを第二の人と謂ふなり。復次に第三の人は、鎧を著け、仗を持し、軍に入りて戰鬪ひ、彼れ風塵を見て畏怖を生ぜず、設ひ鼓角の聲を聞いて畏懼を起さゞるも、彼れ若し高幢を見れば、便ち恐怖を懷き、戰鬪ふに堪えず。是れを第三の人と謂ふなり。復次に第四の戰鬪の人は、鎧を著け、仗を持し、軍に入りて戰鬪中に、若し風塵を見ても畏懼を起さず、若し鼓角の音を聞くも復恐懼せず、若し高幢を見るも亦怖畏せず、設しは他の爲に捉へ所れ、或は命根を斷たゝる。是れを第四の人と謂ふなり。復次に第五の人有り、鎧を著け、仗を持し、軍に入つて共に鬪ふ。彼れ盡く能く壞る所有りて、廣く國界に接す。是れを第五の人、世に出現すと謂ふなり。

比丘、當に知るべし、今此の比丘中にも亦五種の人有りて、世間に出現す。云何が五と爲すや、或は一比丘有つて村落中に住し、彼れ女人有り、端正にして雙び無く、桃華の色の如くなるを聞く。彼の比丘時到つて衣を著け、鉢を持し、村に入つて乞食し、根門を守らず、身・口・意法を護らず、彼れ若し女人を見ば、便ち欲意を起し、還えつて禁戒を捨て、白衣の法を習ふこと、彼の初人の揚塵の聲を聞き、戰鬪に堪えずして、便ち恐怖を懷くが如し。我是れに由るが故に此の人を說くなり。

復次に比丘有り、村落に住す。彼の村の中に女人有り、端正にして比ひ無く、面桃華の色の如くなると聞き、便ち戒を捨てゝ白衣の法を習ふこと。彼の第二の鬪人の但鼓角の聲を聞きて、戰鬪に堪えざるが如く、此れも亦是の如し。復次に比丘有り、村落に住在し、女人有りて、彼の村落に在るを聞き、彼れ聞き已つて便ち欲意を起し、若し女人を見るも欲想を起さず、但女人と共にし、共に相調戲し、中に於て便ち禁戒を捨て、白衣の法を習ふこと、彼の第三の人の、遙に幢を見已つて、便ち恐怖を懷き、戰鬪に堪えざるが如し。是れに由るが故に、今此の人を說くなり。是れを第三の



【八】根門とは、感官の戸のこと。

如し。

復次に一比丘有り、村落に依つて彼に住し、村の中に女人有るを聞けり。然るに比丘時到り、衣を著け、鉢を持し、村に入つて乞食し、彼若し女人を見るも欲想を起さず、設ひ共に言笑するも亦欲想を起さず、設ひ復共に相捻挃するも亦復欲想を起さず。是の時比丘、此の身中の三十六物惡穢不淨を觀じ『誰か此れに著する者ぞ、何に由つて欲を起すや、此の欲は何れの所に止まると爲すや、頭從りと爲ん耶、形體より出づる耶』と、此の諸物を觀じ了つて、所有無し。頭從り足に至るも亦復是の如し、五藏の屬する所、想像有ること無く、亦來處無し、彼緣本を觀じて、從來する處を知らず。彼復是の念を作す『我此の欲は因緣に從つて生ずと觀ず』と。彼の比丘此れを觀じ已つて、欲漏より心解脫を得、有漏より心解脫を得、無明漏より心解脫を得、便ち解脫智を得、生死已に盡き、梵行已に立ち、所作已に辦じて、更に復胎を受けず、實の如くに之を知る。彼の第五の戰鬪の人、衆敵を難しとせずして、自ら遊化するが如し。是れに由るが故に、我今說く『此の人は愛欲を捨てゝ、無畏の處に入り、涅槃の城に至ることを得』と。是れを比丘、此の五種の人有りて、世に出現すと謂ふなり」と。爾の時世尊、便ち此の偈を說きたまはく、

我汝の本を知らんと欲し　意思想を以て生ず　我思想生ずるに非らず　且つ汝にして有らず

と。「是の故に諸比丘、當に惡穢婬不淨行を觀じ、色欲を除去すべし。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

四

[七]聞くこと是の如し、一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「五の戰鬪の人有りて世に出現す。出何が五と爲すや、或は一人有り、鎧を著け、仗を持し、軍に入つて戰鬪ふ。彼れ風塵を見て便ち恐怖を懷き、敢えて彼の大陣の中に入らず。是れを第一の人と

【七】A. V. 76. Yodhājīva.

しは他の爲に捉へ所れて、乃ち死に至るも恐怖を懷かず、能く他軍の境界を壞り、外れること無くして人民を領す。是れを第五の戰鬪の人と謂ふなり。是の如く比丘、世間に此の五種の人有り。今比丘衆の中にも亦、此の五種の人有りて世に出現す。云何が五と爲すや、或は一比丘有りて、他の村落に遊ぶ。彼村の中に婦人有りて、端正にして雙び無く、面桃華の色の如きを聞く。彼聞き已つて時到り、衣を著け、鉢を持し村に入つて乞食し、卽ち此の女人の顏貌の雙び無きを見、便ち欲想を起し、三衣を除去し、還つて、禁戒を捨てゝ居家と作ること、猶し彼の鬪人、小しく風塵を見て以て恐怖を懷くが如きは此の比丘に似るなり。

復次に比丘有り、女人有つて村落中に在りて住し、端正にして比ひ無きを聞き、時到つて衣を著け、鉢を持し、村に入つて乞食す。彼若し女人を見るも欲想を起さず。但彼の女人と共に相調戲し、言語往來す。此の調戲に因つて、便ち法服を捨て、還えつて白衣と爲る。彼の第二人の風塵を見て怖れざるも、但高幢を見て便ち恐怖を懷くが如し。此の比丘も亦復是の如し。

復次に一比丘有り、村落中に女人有りて、容貌端正にして、世の希有なり。桃華の色の如きを聞き、時到つて衣を著け、鉢を持し、村に入つて乞食し、若し女人を見るも欲想を起さず、設ひ女人と共に相調戲するも、亦復欲意の想を起さず、但彼の女人と手拳相加へ、或は相捻挃し、中に於て便ち欲想を起し、三法衣を捨て、還えつて白衣と爲り、家業を習ふこと、彼の第三人の、陣に入る時、風塵を見、高幢を見るも恐怖せず、弓箭を見て便ち恐怖を懷くが如し。

復次に一比丘有り、村落中に女人有りて、面容端正にして世の希有なりと聞き。時到つて衣を著け、鉢を持し、村に入つて乞食す。彼れ若し女人を見るも欲想を起さず、設ひ共に言語するも、亦復欲想を起さず、設し彼の女人と共に相捻挃せば、便ち欲想を起すも、然も法服を捨てゝ家業を習はざるは、彼の第四人の軍に入つて、他の爲に獲られ、或は命根を喪ひて、出づることを得ざるが

遭値ひて阿羅漢を得たり。然して比丘、當に知るべし、復寶珠を以て如來の上に散ぜり。是の功德を持して、今母胎に處り、手に雙珠を執つて、母胎の中より出で、價閻浮提に値す、生るゝ日に當り便ち是の說を作せり『復、拘樓孫如來を請じ、使人の多きを求めん』と。今五百の徒衆を將ひて我所に來至し、出家學道して阿羅漢を得たり。復七日の中に於て、拘樓孫如來を供養し、四事の供養を得ることを求め、今日衣被・飮食・床敷臥の具・病瘦の醫藥に乏しからず。此の功德に緣りてなり。餘の比丘の及ばざる所にして、釋提桓因、身來つて供養して其の所須を給し、又且つ諸天轉じて村落に告げ、四部の衆をして尸婆羅有ることを知ら使むるは、此れ其の義なり。我弟子中の第一の福德者は尸婆羅比丘是れなり」と、爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

三

[六] 聞くこと是の如し、一時佛、舍衛國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「五健丈夫は戰鬪に堪任して世に出現す。云何が五と爲すや。是に於て人有り、鎧を著け、仗を持し、軍に入りて戰鬪ひ、遙に風塵を見ば便ち恐怖を懷く。是れを第一の戰鬪の人と謂ふなり。復次に第二の戰鬪の人は、鎧を著け、仗を持し、軍に入つて戰はんと欲し、若しは風塵を見るも恐怖を懷かず。但し高幢を見ば、便ち恐怖を懷き、前んで鬪ふに堪えず。是れを第二人と謂ふなり。復次に第三の戰鬪の人は、鎧を著け、仗を持し、軍に入つて戰鬪はんと欲し、彼若しは風塵を見、若しは高幢を見るも、恐怖を懷かざるも、若し弓箭を見ば、便ち恐怖を懷き、戰鬪ふに堪えず。是れを第三人と謂ふなり。復次に第四の戰鬪の人は、鎧を著け、仗を持し、軍に入つて共に鬪ひ、彼若しは風塵を見、若しは高幢を見、若しは箭を見るも恐怖を懷かず、但陣に入りし時、便ち他の爲に捉へ所れ、或は命根を斷たる、是れを第四の戰鬪の人と謂ふなり。復次に第五の戰鬪の人は、鎧を著け、仗を持し、陣に入つて戰はんと欲し、彼若しは風塵を見、若しは高幢を見、若しは箭を見、若

【六】A. V. 75. Yodhājīva 戰士。

所生の處、饒財多寶にして乏短する所無く、手中をして空缺の時有ら令むること無く、乃至母の胞胎中にも亦空しからざら使めん』と。

此の劫中に於て復毘舍羅婆如來・至眞・等正覺・明行成・善逝爲り。世間解・無上士・道法御・天人師・佛・世尊と號しまつる。爾の時長者有り、善覺と名け、饒財多寶なり。復毘舍羅婆如來・至眞・等正覺及び比丘僧を請じまつれり。時に彼の長者、使人少し。是の時長者躬自ら種々の甘饌飲食を辦じ、彼の如來に飯し、是の誓願を作さく『我此の功德を持して、所生の處常に三尊に値ひまつりて、短乏する所無く、恒に使人多く、將來の世に如來に値ひまつるに、今日の如から令めん』と。

今此の賢劫中に佛有り、拘樓孫如來・至眞・等正覺と名け、世に出現したまひぬ。爾の時長者有り、多財と名く。復拘樓孫如來を請じ、七日の中佛及び比丘僧を飯はし、衣被・飲食・床敷臥の具・病瘦の醫藥を供養し『所生の處常に饒財多寶にして、貧賤の家に生るゝこと莫く、我所生の處をして、恒に四事の供養を得使め、四部の衆、國王・人民の爲に宗敬せ所見れ、天龍・鬼神・人若しは非人に接遇せ所見れん』と。諸比丘當に知るべし。爾の時耶若達梵志とは豈異人ならんや、是の觀を作すこと莫かれ。然る所以は、今の月光長者は今の身是れなり。爾の時の放牛の人を尸婆羅と名け、酪を以て佛を供養せし者は、今の比丘尸婆羅是れなり。爾の時の善財賈人とは豈に異人ならんや、是の觀を作すこと莫かれ、今の尸婆羅比丘是れなり。爾の時の善覺長者とは豈異人ならんや。是の觀を作すこと莫かれ。今の尸婆羅比丘是れなり。爾の時の多財長者とは豈異人ならんや、是の觀を作すこと莫かれ、今日の尸婆羅比丘是れなり。諸比丘當に知るべし、尸婆羅比丘は此の誓願を作せり、『我所生の處をして、恒に端正にして雙び無く、常に富貴の家に在りて生れ使め、將來の世をして、世尊に値遇せ使め、設し我爲に法を說きたまはゞ、即ち解脫を得、出家して沙門と作ることを得ん』と。此の功德に緣つて、今、尸婆羅比丘は富貴の家に生るゝことを得、端正にして雙び無く、今我に

持して、佛乃び比丘衆に施せ』と。時に放牛人對へて曰さく、『是の如し、世尊』と。是の時放牛人、更に重ねて酪を行くも、猶故らに遺餘の酪在り。放牛人復佛に白して言さく、『今故らに遺餘の酪有りて在るや』と。是の時如來此の人に告げて曰はく、『今此の酪を持して、比丘尼衆・優婆塞・優婆夷衆に與へて、充飽することを得使めても、故らに遺餘の酪有りて在る可し』と。爾の時、佛、放牛人に語げたまはく、『汝今此の酪を持して檀越主人に與へよ』と。對へて曰さく、『是の如し』と。尋いで復檀越主人に與へしも、故らに遺餘の酪の有る在り。復乞人貧匱の者に施與せしも、亦遺餘の酪有る在り。來つて佛に白して言さく、『故らに遺餘の酪有りて在るや』と。時に佛告げて曰はく、『今此の酪を持して淨地に瀉著、若しは水中に著せよ。然る所以は、我人天及び世に有りて、能く此の酪を消す者を見ず、唯如來を除く』と。時に放牛人即ち佛の敎へを受け、此の酪を持して水中に著しぬ。尋いで時に水中に大火炎出でて、高さ數十仞なり。是の時放牛人、此の變怪を見已つて、未曾有と歎じ、還えつて世尊の所に至り、頭面に足を禮し、叉手して住し、復此の誓願を作さく、『今此の酪を持して四部の衆に施與し、設し當に福德有るべくんば、此の福祐に緣つて、八難の處に墮すること莫く、貧匱の家、所生の處に生るゝこと莫く、六情完具し、面目端正にして亦家に在ること莫く、將來の世をして亦此の如きの聖尊に値は使めん』と。

比丘當に知るべし、三十一劫に復佛有り、式詰如來と名け、世に出現したまへり。是の時式詰如來、野馬世界に遊化し、大比丘十萬人と俱なりき。是の時式詰如來時到つて衣を著け、鉢を持して城に入つて乞食したまひぬ。時に彼の城中に大商客有り、名けて善財と曰ふ。遙に式詰如來を見たてまつり、諸根寂靜にして容貌端正、三十二相八十種好有りて其の身を莊嚴し、面は日月の如し。見已つて便ち歡喜の心を發し、前んで世尊の所に至り、頭面に足を禮し、一面に在りて坐す。爾の時賈人好き寶珠を以て、如來の上に散じ、其の微心を現し、普く誓願を作さく、『此の功德を持して

達、清旦好き座具を敷き、尋いで復城門中に詣りて酪を求む。爾の時に當り、放牛の人有りて酪を持す。尸婆羅と名け、祠祀に往かんと欲す。是の時耶若達梵志、放牛人に語げて曰く、『卿、酪賣者、吾當に價を與ふべし』と。尸婆羅報へて曰く、『我今祠祀せんと欲す』と。婆羅門報へて曰く、『汝今天を祀るに何の所求を爲すや、但賣りて我に與へよ、當に重く價を顧るべし』と。放牛の人報へて曰く、『梵志、今、酪を用ふと爲すや』と。梵志報へて曰く、『我今毘婆尸如來及び比丘僧を請ぜり、然して飲食盡く辨ぜしに、唯酪有ること無し』と。是の時、尸婆羅、梵志に問ふて曰く、『毘婆尸如來とは何等の相貌を爲すや』と。梵志報へて曰く、『如來とは與に等しきもの無く、戒具清淨にして、慧・定三昧皆及ぶ可からず。天上人中に能く及ぶ者無し』と。

是の時耶若達梵志、如來の德を歎說す、尸婆羅聞き已つて心開け、意解けぬ。是の時、尸婆羅、梵志に語げて曰く、『我今躬ら此の酪を持し、往いて如來に施し、復用つて天を祀つると爲ん』と。是の時、耶若達梵志、此の放牛人を將ひて家中に往至し、卽ち時の到れることを白して、『今正に是れ時なり。唯尊、屈顧したまへ』と。

時に如來以て時の到れるを知り、衣を著け、鉢を持し、諸比丘を將ひ、前後に圍遶せられて、耶若達梵志の家に至り、各、次第して坐す。是の時、放牛人、如來の容貌、世の希有にして諸根恬怕、三十二相八十種好有りて、其の身を莊嚴すること、亦日月の如く、猶し須彌山の如く、衆山の上に出で、光明遠く照らして、潤ひを蒙らざること靡きを見、見已つて歡喜し、便ち世尊の所に前進して是の說を作さく、『設し當に如來の功德にして、梵志の論ずる所の如くんば、此の一瓶の酪をして、盡く衆僧を充さ使むべし』と。爾の時尸婆羅、世尊に白して言さく、『願くは此の酪を受けたまへ』と。是の時如來、鉢を舒べて酪を受けたまひ、亦復、比丘僧に與ふるも、猶ほ故に酪有り。爾の時放牛人、世尊に白して言さく、『今故に餘の酪有りや』と。時に如來告げて曰はく、『汝今更に此の酪を

時長者其の敎へを承受け、此の百千兩金を持し、尊者尸婆羅の房中に著けて、便ち退いて去りぬ。

是の時尸婆羅、諸比丘に告ぐらく「諸の乏しき所有る者は、此に來至して之を取れ、若し復衣被・飮食・床敷臥の具・病瘦の醫藥を須ふれば、皆來つて之を取れ、餘處に在りて之を求むること勿れ」と、展轉して相告げて之を知ら令めぬ。

是の時衆多の比丘、世尊に白して言さく「此の尸婆羅は、昔何の福を作して、長者の家に生れ、端正にして儔び無く、桃華の色の如きや、復何の福を作して、兩手に珠を捉へて、母胎の中より出でしや。復何の福を作して、五百人を將ひて如來の所に詣り、出家學道して、如來の世に値ひしや。復何の福を作して、至到る處に、衣食自然にして、短乏する所無く、餘の比丘の能く及ぶ者無きや」と。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく「過去久遠九十一劫に佛有り、毘婆尸如來・至眞・等正覺・明行成・善逝爲り・世間解・無上士・道法御・天人師・佛・世尊と號しまつり、世に出現して槃頭國界に遊在したまひ、六十萬八千衆と俱なり、四事の供養、衣被・飮食・床敷臥の具・病瘦の醫藥なり。爾の時梵志有り、名けて耶若達と曰ふ。彼の土界に住して饒財多寶なり。金・銀・珍寶・車璖・馬瑙・眞珠・琥珀、稱計す可からず。是の時耶若達、彼の國界を出で、毘婆尸如來の所に往至し、到り已つて共に相問訊し、一面に在りて坐せり。是の時毘婆尸如來、漸く與に法を說き、便ち歡喜の心を發しぬ。是の時耶若達、毘婆尸如來に白さく『唯、願くは、當に我請を受くべし、佛及び比丘僧に飯はさんと欲す』と。是の時如來默然として請を受けたまへり。耶若達梵志以て世尊の默然として請を受けたまひしを見、卽ち座從り起ち、佛を遶ること三匝して去り、家中に至り、種々の甘饌飮食を辦じぬ。

是の時耶若達、夜半に便ち是の念を作さく『我今已に種々の飮食を辦ぜり。唯乏しきは酪無し、明日清旦當に城門中に往くべし。其れ酪を賣る者有らば、盡く當に之を買ふべし』と。是の時耶若

時か當に曉くべし。自ら當に百千兩金を以て、尸婆羅に施すべし」と。是の時長者、卽ち其の日家中に百千兩金に直する者なるを檢校し、卽ち持して尸婆羅の所に詣り、到り已つて頭面に足を禮し、一面に在りて住す。爾の時長者、百千兩金を以て、尸婆羅に奉上し、並に是の語を作さく、「唯、願くは此の百千兩金を受けんことを」と。是の時尊者尸婆羅報へて曰く、「當に長者をして福を受くること、窮り無から使むべく、長壽自然ならん。然るに復如來は、比丘の百千兩金を受くることを許したまはず」と。

是の時長者便ち世尊の所に往至し、到り已つて頭面に足を禮し、一面に在りて坐しぬ。爾の時彼の長者、世尊に白して言さく、「唯、願くは世尊、尸婆羅比丘をして、此の百千兩金を受け使めて、我をして其の福を蒙ら使めたまへ」と。

爾の時世尊、一比丘に告げたまはく、「汝、尸婆羅比丘の所に往至して云へ、吾卿を喚ぶ」と。比丘對へて曰さく、「是の如し、世尊」と。是の時彼の比丘、佛從り敎へを受け、卽ち彼の尸婆羅の所に往至し、如來の語を以て之に告げぬ。是の時尊者尸婆羅、彼の比丘の語を承け、卽ち世尊の所に往至し、頭面に足を禮し、一面に在りて坐しぬ。爾の時世尊、尸婆羅に告げて曰はく、「汝今此の長者の百千兩金を受けて、其の福を蒙ら使む可し。此れは是れ宿緣の業なれば、其の報ひを受く可し」と。尸婆羅對へて曰さく、「是の如し、世尊」と、是の時尊者尸婆羅、卽時に達嚫を說きぬ。

衣及び餘物を施して　其の福德を求めんと欲せば　天世人に往至して　五欲自ら娛樂まん　天從り人中に至り　有を度して疑難無し　涅槃無爲處は　諸佛の樂しむ所なり　施惠するに難ずること無くば　此れ福祐を獲ることを蒙むらん　當に慈惠心を起して　作福に懈り有ること無かるべし

と。是の時尊者尸婆羅、長者に語げて言く、「此の百千兩金を持して、我房中に著く可し」と。爾の

爾の時世尊、尸婆羅の與に微妙の法を說きたまひぬ。是の時尊者尸婆羅、如來從り法を聞き已つて、卽ち座從り起ち、世尊の足を禮し、右に遶ること三匝して、便ち退いて去りぬ。

是の時尊者尸婆羅、卽ち其の日に衣を著け、鉢を持し、舍衞城に入つて乞食し、漸々に叔父の家に往詣し、到り已つて門外に在りて、默然として立ちぬ。是の時長者、尊者尸婆羅の門外に在りて、乞食するを見、卽ち之に語げて曰く、「汝昨日何故に來らざりしや、我昨日百千兩金を以て惠施せり、我一張氎を以て、持し用つて卿に施す可し」と。尸婆羅對へて曰く、「我今氎を用ふと爲さず、今日來りしは故らに食を乞ふ耳」と。長者對へて曰く、「我昨日百千兩金を以用て惠施せり、更に復惠施すること能はず」と。是の時尊者尸婆羅、長者を得度せんと欲するが故に、便ち空中を飛在し、身水火を出し、坐臥經行意の造る所に隨ふ。是の時長者此の變化を見已て、便ち是の說を作さく、「還えり來下して座に就く可し。今當に相施すべし」と。是の時尊者尸婆羅、卽ち神足を捨て、尋いで來つて座に就けり。是の時彼の長者、弊惡の飮食の極めて麁醜爲るを以て、尊者尸婆羅に與へて之を食は使めぬ。是の時尊者尸婆羅、豪家に生長して飮食自ら恣まなり。但彼の長者を以ての故に此の食を受け、便ち之を食せり。是の時尊者尸婆羅、食し訖り、還えつて所在に詣りぬ。卽ち其の夜、虛空神天來つて長者に語げて曰く、

善施は極めて大施なり　乃ち尸婆羅に與ふ　欲無くば以て解脫し　愛斷ぜば以て疑ひ無し

と。夜半と淸旦との二時に此の偈を說きぬ。

善施は極めて大施なり　乃ち尸婆羅に與ふ　欲無くば以て解脫し　愛斷ぜば以て疑ひ無し

と。

是の時長者、天人の語を聞いて、便ち是の念を作さく、「我昨日百千兩金を以て外道に施與せしに、乃ち此の應へ無し。我今日弊惡の食を以て、尸婆羅に施與せしに、乃ち此の應へを致せり。何れの

つて夏坐を受けぬ。
是の時釋提桓因、尸婆羅の心中の所念を知り、卽ち山中に於て浮圖を化作す。園果樹木皆悉く備具る。周匝に浴池有りて、五百の高台を化作す、復五百の床座を化作し、復五百の小床座を化作し、復五百の繩床を化作し、天の甘露を以て之を食す。是の時尊者尸婆羅、便ち是の念を作さく、「我今已に夏坐し訖れり。如來を見たてまつらざること甚だ久し。今往いて世尊を親覲す可し」と。卽ち五百の比丘を將ひて、以て舍衞城に往けり。爾の時盛熱にして、比丘衆皆悉く汗出で、身體を汚染せり。

是の時尊者尸婆羅、是の念を作さく「今日比丘衆、身體極めて熱し、少し許りの雲を得て、上に在つて細雨せば、甚だ是れ佳事なり。小浴池に値ひて少しく漿を得ん」と。此の念を生ぜしを以て、卽ち空中に大雲有りて細雨を作す。亦浴池有り。四の非人有りて好き甘漿を負へり。毘沙門王の遣はす所「唯、願くは尊者、此の甘漿を受けたまへ、及び比丘僧に施さん」と。爾の時此の漿を受け已つて、比丘僧の與に之を飲ま使む。爾の時尸婆羅復是の念を作さく「我今此の間に在りて止宿す可し」と。是の時釋提桓因、尸婆羅の心中の所念を知り、卽ち道側に於て五百の房舍を化作し、床臥備具る。是の時諸天、飲食を奉上し、尸婆羅食し訖り、卽ち座從り起ちて去りぬ。

爾の時尊者尸婆羅の叔父、舍衞城內に在つて住す。饒財多寶にして、短乏する所無し。然るに復慳貪にして、布施を肯ぜず、佛・法・衆を信ぜず、功德を造らざりき。是の時諸の親族、此の人に語げて曰く「長者、此の財貨を用ふと爲す、然るに復後世の遺糧を作らざるや」と。爾の時彼の長者、此の語を聞き已つて、一日の中に百千兩金を以て布施し、外道梵志に與へて、三尊に向はざりき。是の時尊者尸婆羅、叔父百千兩金を以て、外道異學に施與し、布施して三尊に與へざるを聞けり。是の時尊者尸婆羅、祇洹精舍に往詣し、世尊の所に至り、頭面に足を禮し、一面に在りて坐す。

許して沙門と作さ使めたまふ。未だ幾日を經ざるに、便ち阿羅漢を成じ、六通清徹して八解脫を具せり。是の時五百の童子、前んで佛に白して言さく「唯、願くは世尊、沙門と作ることを聽したまへ」と。世尊は默然として之を可したまひ、出家して未だ幾日を經ざるに、便ち阿羅漢を成ぜり。

爾の時尊者尸婆羅、還えつて舍衞國の本邦の處に在り、衆人敬仰して四事の供養、衣被・飲食・床褥・臥具・病瘦の醫藥を得たり。是の時尊者尸婆羅、便ち是の念を作さく「我、今此の本邦の中に在り、極めて煩閙爲り。今人間に在りて遊化す可し」と。是の時尊者尸婆羅、時到つて衣を著け、鉢を持し、舍衞城に入つて乞食し、乞食し已り、還えつて所止に詣り、座具を收攝し、衣を著け、鉢を持し、祇洹精舍を出で、五百の比丘を將ひ、前後に圍遶せられ、人間に在りて遊化し、至到る處に供養せざる者無く、皆衣被・飲食・床褥・臥具・病瘦の醫藥を供給す、復諸天有り、諸の村落に告ぐらく「今尊者尸婆羅有り、阿羅漢を得て福德第一なり。五百の比丘を將ひて、人間に在りて遊化す。諸賢往いて供養す可し、今爲さゞれば、後に悔ゆるも益無けん」と。

是の時尊者尸婆羅、便ち是の念を作さく「今甚だ此の供養を厭ひ患ふ。當に何處に之を避けて、人をして吾處を知らざら令むべきや」と。是の時卽ち深山の中に入る。諸天復村落間に在りて、各各告げて曰く「今尊者尸婆羅、此の山中に在り、往いて供養すべし。今爲さゞれば、後に悔ゆるも益無けん」と。是の時人民、天の語を聞き已つて、卽ち飲食を負ひ、尊者尸婆羅の所に往詣し、「唯、願くは尊、住りたまはらんことを、我等の爲の故に」と。

是の時尸婆羅、漸々に人中に遊化す、羅閱城迦蘭陀竹園所に來至し、大比丘五百人と俱なり。亦衣被・飲食・床褥・臥具・病瘦の醫藥の供養を得たり。時に尸婆羅復是の念を作さく「我今向に何處に在りて夏坐せんや、人をして吾處を知らざら令めんや」と。復重ねて是の念を作さく「當に耆闍崛山の東、廣普山の西に在りて、中に於て夏坐すべし」と。卽ち五百の比丘を將ひて、彼の山中に在

の時月光長者世尊に白して言さく、「我、今居家の田業を持して、盡く此の兒に與へん、唯、願くは世尊、當に與に名を立つべし」と。世尊告げて曰はく、「此の兒の生れし時、人、皆、東西に馳せ走つて是れを尸婆羅鬼と云へり。今卽ち名字を立てゝ尸婆羅と名けん」と。爾の時世尊、漸く長者及び長者婦の與に妙論を說きたまふ。所謂論とは施論・戒論・生天の論、欲は不淨想、漏を大患と爲し、出要を妙と爲す。爾の時世尊、以て長者及び長者婦の心開け、意解けて復狐疑無きを見、諸佛世尊の常に說きたまふ所の法、苦・集・盡・道(を說きたまへり)。是の時世尊、盡く長者の與に之を說き、歡喜の心を發さ令めたまひ、長者夫婦は、卽ち座上に於て、諸の塵垢盡きて法眼淨を得しこと、猶し新しき白氎の染むるに色を爲し易きが如し。是の時長者夫婦も亦復、是の如く、卽ち座上に於て法眼淨を得、彼れ法を見しを以て諸法を分別し、已に猶豫を度して復狐疑無く、無所畏を得、如來の深奧の法を解し、卽ち五戒を受けぬ。爾の時世尊、便ち此の偈を說きたまはく、

　祀祠は火を上れりと爲し　諸の論頌は首爲り　王は人中の尊爲り　海は衆流の源爲り　月を星の中の明と爲し　日は衆明の最爲り　八方及び上下　生ずる所の萬の品物　其の福を求めんと欲せば　三佛を最も尊しと爲す

と。爾の時世尊、此の偈を說き已り、卽ち座從り起ちて去りたまひき。

　是の時長者、五百の童子を求めて、尸婆羅に侍衞せ使む。是の時尸婆羅、年二十に向へり。父母の所に往至し、父母に白して言さく、「唯、願くは二尊、許して出家學道せ使めたまへ」と。爾の時二親、卽便ち聽許せり。然る所以は、世尊は先きに之を記したまひしを以てなり。「當に五百の童子を將ひて、世尊の所に至り、沙門と作らんことを求むべし」と。是の時尸婆羅及び五百人、父母の足を禮し、便ち退いて去り、世尊の所に至り、頭面に足を禮し、一面に在りて立ちぬ。爾の時尸婆羅、世尊に白して言さく、「唯、願くは聽許して道次に在ることを得させたまへ」と。是の時世尊卽便ち聽

ず可からず。學道の人は復年幼なりと雖も、亦輕んず可からず。是れを長者、此の四事有り、最も輕んず可からずと謂ふなり」と。是の時天神、便ち此の偈を說けり。

國王は復小なりと雖も　斬害は其の法に由る　小火は未だ熾ならずと雖も　山草木を焚燒す
神龍は小を現ずと雖も　降雨は時宜に隨ふ　學ぶ者年幼稚なるも　人を度すること量り有ること無し

と。爾の時月光長者、心開け、意解け、歡喜踊躍して自ら勝ふること能はず、即ち前進して世尊の所に至り、頭面に足を禮し、一面に在りて坐し、此の因緣を以て、具さに世尊に白せり。爾の時世尊、長者に告げて曰はく、「今此の小兒は極めて大福有り、此の小兒にして若し當に大とならば、當に五百の徒衆を將ひ、我所に來至して出家學道し、阿羅漢を得て、我聲聞中福德第一にして、能く及ぶ者無かるべし」と。

是の時長者、此の語を聞き已り、歡喜踊躍して自ら勝ふること能はず。世尊に白して言さく、「世尊の敎への如し。尼犍子の語の如きに非らざるなり」と。是の時月光長者、重ねて世尊に白さく、「唯、願くは請を受けたまへ、及び比丘僧と幷せて、此の小兒を愍みたまへ」と。爾の時世尊、默然として請を受けたまへり。時に長者、以て默然として請を受けたまふを見、即ち座從り起ち、頭面に足を禮し、便ち退いて去り、還えつて家中に至り、種々の甘僎飲食を供辦し、好き座具を敷き、淸旦自ら白さく、「時到れり、唯、願くは神を降したまへ」と。

是の時世尊、以て時の到れるを知り、諸比丘を將ひ、前後に圍遶せられ、舍衞城に入り、長者の家に至り、即ち座に就きたまへり。是の時長者、佛・比丘僧の座已に定まれるを見、即ち種々の飲食を辦じ、手自ら斟酌し、歡喜して亂れず。已に食し竟れるを見、鉢器を除去して淸淨水を行き、更に小座を取つて、如來の前に在りて坐し、佛の說きたまふ所の妙法を聞くことを得んと欲す。是

と。是の時夫人、此の語を聞き已り、歡喜踊躍して自ら勝ふること能はず。此の因緣を以て、盡く月光長者に向つて是の語を說けり。時に長者便ち是の念を作さく、「是れ將是れ何の緣なるや、我今當に此の事を以て、[五]尼犍子に向つて說くべし」と。卽ち此の兒を抱き、尼犍子の所に詣り、頭面に足を禮し、一面に在りて坐す。是の時月光長者、此の因緣を以て、具に尼犍子に向つて說く、時に尼犍子、此の語を聞き已つて、長者に告ぐらく、「此の兒は薄福の人なり。身を益すること無し。當に取りて之を殺すべし。若し殺さずば、門戶衰耗して、皆當に死し盡すべし」と。

是の時月光長者是の思惟を作さく、「我前後來兒息有ること無し。此の因緣に由つて天地に請求し、處として遍からざるは無し。乃ち爾許の年歲を經歷して、方に此の兒を生めり。我今此の兒を取りて殺すに堪えず。當に更に餘の沙門・婆羅門に問ひて、我疑ひを斷た令むべし」と。

爾の時如來成佛して、未だ久しからざるに、衆人稱號して大沙門と名けたり。是の時月光長者、便ち是の念を作さく、「我此の因緣を以て、具さに大沙門に向つて、之を說くべし」と。是の時長者、卽ち座從り起ち、此の兒を抱きて世尊の所に往詣す。中道に復是の念を作さく、「今長老の梵志の年過ぎて耆艾なるもの有り、聰明黠慧にして、衆人の敬待する所なり。彼れ尙知らず、見ず、況んや此の沙門瞿曇、年少にして學道未だ久しからず、豈能く此の事を知らん乎。將恐る、吾疑ひの解けざらんことを。我今宜しく中道にして家に還える可し」と。

是の時天神有り、昔長者と知舊たり。長者の心中の所念を知り、虛空中に在つて之に告げて曰く、「長者、當に知るべし。小しく前進す可し。必ず當に利を獲べし。大果報を得、亦當に甘露の處に至るべし。如來の出世は甚だ遇ひ難しと爲す。如來の甘露の雨を降らしたまふこと、時時にして乃ち有り。又復長者、四事の最小なること有りて輕んず可からず。云何が四と爲すや、國王は小なりと雖も、最も輕んず可からず。火は小なりと雖も、亦輕んず可からず。龍は小なりと雖も、復輕ん

【五】尼犍子(Nigantha)とは、耆那教徒。經典中に裸形外道といふは此の徒をいふ。此の徒に裸形の徒と、白衣の徒との二派あり。

二

聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時舍衞城中に月光長者有り。饒財多寶にして、象馬七珍皆悉く備具し、金・銀・珍寶稱計すべからず。然るに月光長者に兒息有ること無し。爾の時長者、兒無きを以ての故に、天神に求禱し、日・月・天神・地神・鬼子母・四天王・二十八大神鬼王、釋及び梵天・山神・樹神・五道の神・樹木・藥草に請求し、處として周からざるは靡し、皆悉く歸命して一男兒を賜はらんと。

爾の時月光長者婦、數日の中を經て、便ち自ら懷妊し、卽ち長者に語ぐらく、「我自ら娠らむこと有りしに覺ゆ」と。長者聞き已つて歡喜踊躍し、自ら勝ふること能はず、卽ち夫人の與に好き床座を敷き、好き甘食を食し、好き衣裳を著けしむ。是の時夫人八九月を經て、便ち男兒を生めり。顏色端正にして世の希有なり。桃華の色の如し。是の時此の兒兩手に無價の[四]摩尼珠を執り、卽時に便ち此の偈を說けり。

此の家に願ふらくは財有り　寶物及び穀食となり　我今惠施して　貧しきをして乏しきこと有ること無から使めんと欲す　若し此れ物無くんば　財寶及び穀食なり　今無價の珠有り　常に用つて人に惠み施さん。

と。是の時父母及び家中の人、此の語を聞き已つて、各々馳走す。「云何が乃ち此の鬼魅の種を生ぜしや」と。唯父母有り、兒を哀愍するが故に、東西に馳走せず、卽ち時に母、兒に向ひて此の偈を說く

天乾沓和なるや　鬼魅及び羅刹爲るや　是れ誰ぞ姓字は何ぞや　我今之を知らんと欲す

と。是の時小兒復偈を以て母に報へて曰さく、

天・乾沓和に非らず　鬼魅・羅刹にも非らず　我は今父母より生れたり　是れ人疑ふに足らず

---

【四】摩尼珠（Maṇi）。譯して珠・寶・無垢・離苦・如意等といひ、寶珠の名、多く龍王の腦中より出で、隨意に衣服、財寶等を出すより如意珠と名く。

ることを得、五欲の中、聲を最妙と爲すなり。

大王當に知るべし、若し香を妙なりと言はゞ、當に平等に之を論ずべし。然る所以は、香に於て氣味有るが故に、若し香に氣味無くんば、衆生の類は終に染著せざらん。其れ味有るを以ての故に、五欲の中、香を最妙と爲すなり。然るに香に過失有り、若し香に過失無くば、衆生は則ち厭患せじ、其れ過失有るを以ての故に、衆生之を厭患するなり。然して香に出要有り、若し當に香に出要無くば、此の衆生の類は、生死の海を出づることを得じ、其の出要を以ての故に、衆生は無畏涅槃の城中に至ることを得、五欲の中、香を最妙と爲すなり。

然るに復大王、若し味を妙なりと言はゞ、當に平等に之を論ずべし。然る所以は、味に於て氣味有るが故に、若し味に氣味無くんば、衆生の類は終に染著せじ。其れ氣味有るを以ての故に、五欲の中、味を最妙と爲すなり。然るに味に過失有り、若し當に味に過失無くんば、衆生は則ち厭患せじ、其れ過失有るを以ての故に、衆生之を厭患するなり。然して味に出要有り、若し當に味に出要無くんば、此の衆生の類は、生死の海を出づることを得じ。其の出要を以ての故に、衆生は無畏涅槃の城中に至ることを得、五欲の中、味を最妙と爲すなり。

然るに復大王、當に知るべし。細滑を妙なりと言はゞ、當に平等に之を論ずべし。然る所以は、細滑に於て氣味無くんば、衆生は終に染著せじ、其れ味有るを以ての故に、五欲の中細滑を最妙と爲すなり。然して細滑に過失有り、若し細滑に過失無くんば、衆生の類は則ち之を厭患せじ。其れ過失有るを以ての故に、衆生之を厭患するなり。然して細滑に出要有り、若し當に細滑に出要無くんば、此の衆生の類は、生死の海を出づることを得じ、其の出要を以ての故に、衆生は無畏涅槃の城中に至ることを得、五欲の中、細滑を最妙と爲すなり。是の故に大王、樂しむ處に心卽ち染著す。是の如く大王、當に是の知を作すべし」と。爾の時五王、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

若し復聲を聽く時は　欲する所必ず克つ可し　聞き已つて倍す歡喜し　所願に疑ひ有ること無し　彼此の聲を得るを以て　之を貪るの意解けず　此れを以て歡喜を爲し　之に從つて最も妙と爲すなり　若し復香を嗅ぐ時は　欲する所必ず克つ可し　嗅ぎ已つて倍す歡喜し　欲する所に疑ひ有ること無し　彼此の香を得るを以て　之を貪るの意解けず　此れを以て歡喜を爲し　之に從つて最も妙と爲すなり　若し復味を得る時は　欲する所必ず克つ可し　得已つて倍す歡喜し　欲する所に疑ひ有ること無し　彼此の味を得るを以て　之を貪るの意解けず　此れを以て歡喜を爲し　之に從つて最も妙と爲すなり　若し細滑を得る時は　欲する所必ず克つ可し　得已つて倍す歡喜し　欲する所に疑難無し　彼れ細滑を得るを以て　之を貪るの意解けず　此れを以て歡喜を爲し、之に從つて最も妙と爲すなり

と、是の故に大王、若し色を妙なりと言はゞ、當に平等に之を論ずべし。然る所以は、色に於て氣味有るが故に、若し色に味無くんば、衆生は終に染著せじ。其れ味有るを以ての故に、五欲の中、色を最妙と爲すなり。然るに色に過失有り、若し當に色に過失無くば、衆生は則ち厭患無からん。其れ過失有るを以ての故に、衆生之を厭患するなり。然して色に出要有り、若し當に色に出要無くんば、此の衆生の類は生死の海を出づることを得じ。其の出要を以ての故に、衆生は無畏涅槃の城中に至ることを得、五欲の中、色を最妙と爲すなり。

然るに復大王、若し聲を妙なりと言はゞ、當に平等に之を論ずべし。然る所以は、聲に於て氣味有るが故に、若し聲味無くんば、衆生は終に染著せじ、其れ味有るを以ての故に、五欲の中、聲を最妙と爲すなり。然るに聲に過失有り、若し當に聲に過失無くんば、衆生は則ち厭患無からん。其れ過失有るを以ての故に、衆生之を厭患す。然して聲に出要有り、若し當に聲に出要無くば、此の衆生の類は、生死の海を出づることを得じ、其の出要を以ての故に、衆生は無畏涅槃の城の中に至

と。

是の時諸王、波斯匿王の語を聞き已つて、便ち共に相將ひて世尊の所に至り、頭面に足を禮し、一面に在りて坐す。是の時波斯匿王、以て共に五欲を論ずる所の者を、具さに如來に白せり。爾の時世尊、諸の五王に告げて曰はく、「諸王の論ずる所、各、時宜に隨へり。然る所以は、夫れ人の性行にして、深く色に著する者は、厭足無きを視る。此の人色に於て最妙最上にして復過ぐる者無し。爾の時彼の人、聲・香・味・細滑の法に著せず、五欲の中色を最妙と爲すなり。若し復人有つて、性行聲に著せば、彼れ聲を聞き已つて、極めて歡喜を懷きて厭足無し。此の人聲に於て最妙最上にして、五欲の中聲を最も妙と爲すなり。若し復人有つて、性行香に著せば、彼れ香を聞き已り、極めて歡喜を懷きて厭足無し、此の人香に於て最妙最上にして、五欲の中、香を最も妙と爲すなり。若し復人有りて、性行味に著せば、彼れ味を知り已り、極めて歡喜を懷きて厭足無し、此の人味に於て最妙最上にして、五欲の中、味を最も妙と爲すなり。若し復人有りて、性行細滑に著せば、彼れ細滑を得已り、極めて歡喜を懷きて厭足無し。此の人細滑に於て最上最妙にして、五欲の中、細滑を最も妙と爲すなり。若し復彼の人にして、心以て色に著せば、爾の時彼の人、聲・香・味・細滑の法に著せざるなり。若し復彼の人の性行にして、聲に著せば、爾の時彼の人、色・香・味・細滑の法に著せざるなり。若し復彼の人の性行にして香に著せば、爾の時彼の人、色・聲・味・細滑の法に著せざるなり。若し復彼の人の性行にして味に著せば、爾の時彼の人、色・聲・香・細滑の法に著せざるなり。若し復彼の人の性行にして、細滑に著せば、爾の時彼の人、色・聲・香・味の法に著せざるなり」と。是の時世尊、便ち此の偈を說きたまはく、

欲意熾盛なる時は　欲する所必ず克つ可し　得已つて倍す歡喜し　所願に疑ひ有ること無し
彼此の欲を得るを以て　貪欲の意解けず　此を以て歡喜を爲し。之に緣つて最も妙と爲すなり

# 卷の第二十五

## 五王品第三十三

### 一

聞くこと是の如し、一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時五大國王、波斯匿を首と爲し園觀の中に集在し、各、此の論を作せり。云何が五王と爲すや、所謂 波斯匿王・毘沙王・優塡王・惡生王・優陀延王なり。

爾の時五王一處に集在し、各、此の論を作さく、「諸賢、當に知るべし、如來は此の五欲を說きたまへり、云何が五と爲すや、若しは眼・色を見て甚だ愛敬して念ず、世人の希望する所なり。若しは耳、聲を聞き、鼻、香を嗅ぎ、舌、味を知り、身、細滑を知る。如來は此の五欲を說きたまへり。此の五欲の中、何れが最妙なるや、眼、色を見るを妙と爲す耶、耳、聲を聞くを妙と爲す耶、鼻、香を嗅ぐを妙と爲す耶、舌、味を知るを妙と爲す耶、身、細滑を知るを妙と爲す耶、此の五事は何れを最妙と爲すや」と。其の中或は國王有りて是の說を作さく、「色は最も妙爲り」と。或は是の論を作す有り、「聲は最も妙爲り」と。或は是の論を作す有り、「香は最も勝れたり」と。或は是の論を作す有り、「味は最も妙爲り」と。或は是の論を作す有り、「細滑は最勝爲り」と。是の時色を妙なりと言へるは優陀延王の所說なり。聲を妙なりと言へるは優塡王の所論なり。香を妙なりと言へるは惡生王の所論なり。味を妙なりと言へるは波斯匿王の所論なり。細滑を妙なりと言へるは毘沙王の所論なり。是の時五王各、相謂ひて言く、「我等共に此の五欲を論ず。然るに復何れを妙と爲すやを知らず」と。是の時波斯匿王、四王に語げて曰く、「今如來は近く、舍衞國祇樹給孤獨園に在はせり、我等盡く共に世尊の所に至り、斯の義を問ひまつり、若し世尊にして敎勅したまふ所有らば、當に共に奉行すべし」

【一】 S. 3. 2. 2. Pañcarājāni.

【二】 巴利文には波斯匿王の外名をあげず。

【三】 細滑とは、觸卽ち觸覺のこと。

つて施すべし。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所説を聞いて歡喜奉行しぬ。

善と不善と禮佛と　天使と歲と五瑞　文茶と親と瞻病　五施と隨時施となり。

# 增壹阿含經卷第二十四

に[四二]施安、四に[四三]施力、五に[四四]施辯なり。是れを五と爲すと謂ふなり。復次に檀越施主は施命の時、長壽を得んと欲し、施色の時端正を得んと欲し、施安の時無病を得んと欲し、施力の時能勝無から令めんと欲し、施辯の時無上正眞の辯を得んと欲す。比丘當に知るべし。檀越施主は惠施の日に此の五の功德有り」と。爾の時世尊、便ち此の偈を說きたまはく、

施命色及び安　力辯を第五と爲す　五の功德已に備りて　後に無窮の福を受く　智者は當に施を念じ　貪欲の心を除去すべし　今身に名譽有り　生天も亦復然り。

と、「若し善男子・善女人有りて、五功德を得んと欲せば、當に此の五事を行ずべし。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

十二

[四五]聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「時に應ずるの施に五事有り、云何が五と爲すや、一に遠來の人に施し、二に遠去の人に施し、三に病人に施し、四に[四六]儉時に施し、五に若し初めて[四七]新果蓏若しは穀食を得ば、先づ持戒精進の人に施與し、然る後に自ら食ふ。是れを比丘、時に應ずるの施に、此の五事有りと謂ふなり」と。爾の時世尊、便ち此の偈を說きたまはく、

智者は時に應じて施し　信心斷絕せず　此に於て快く樂を受け　生天の衆德備はる　時に隨つて惠施を念ぜば　福を受くること　響の應ずるが如し　永く已に短乏無く　所生常に富貴なり　施は衆行の具爲り　無上位に至ることを得　億施も　想ひを起さずば　歡喜遂に增益せん　心中に此の念を生ぜば　亂意永く餘り無し　身の安樂を覺知して　心便ち解脫を得ん　是の故に有智の人は　男と女とを問はず　當に此の五施を行じ　方便宜しきを失ふこと無かるべし。

と。是の故に諸比丘、若し善男子・善女人にして、此の五事を行ぜんと欲せば、當に念じて時に隨

【四二】施安(Sukhaṁ deti)。
【四三】施力(Balaṁ deti)。
【四四】施辯(Paṭibhānaṁ deti)。
【四五】A. V. 36. Kala.
【四六】儉時(Dubbhikkha)とは、托鉢すとも食を得られざる時をいふ。
【四七】新果蓏(Navasassāni, navaphalāni)。

こと無し。是れを師子、檀越施主は此の第三の德を獲と謂ふなり。

復次に師子、檀越施主は命終の後、當に二處に生ずべし。或は天上に生じ、或は人中に生れん、天に在つては天の爲に敬はれ、人に在つては人の尊貴と爲らん。是れを師子、檀越施主は此の第四の德を獲と謂ふなり。

復次に師子、檀越施主は智慧遠く衆人の上に出で、現身に漏を盡くして後世を經ず。是れを師子、檀越施主は此の第五の德を獲と謂ふなり。夫れ人にして惠施せば五德有つて恒に已の身に隨はん」と。爾の時世尊、便ち斯の偈を說きたまはく、

心常に惠施を喜はゞ　功德具足して成じ　衆に在りて疑難無く　亦復、所畏無けん　智者は當に惠施するに　初めに變悔の心無かるべくんば　三十三天に在りて　玉女圍遶せん。

爾る所以は、師子、當に知るべし、檀越施主は二の善處に生じ、現身に漏を盡くして、無爲處に至ればなり」と。爾の時世尊、便ち此の偈を說きたまはく、

施は後世の糧に爲り　要らず究竟處に至らん　善神常に將護して　亦復歡喜を致さん。

然る所以は、師子、當に知るべし、布施の時恒に歡悅びを懷けば、身意牢固にして、諸善の功德皆悉く具足し、三昧意を得て亦錯亂せず、實の如くに之を知らん。云何が實の如くに知るや。苦諦を實の如くに知り苦集・苦盡・苦出要を實の如くに知る。是の故に師子、當に方便を求めて、時に隨つて惠施すべし。若し聲聞道、辟支佛道、佛道を得んと欲せば、皆悉く意の如からん。是の如く師子、當に是の學を作すべし」と。爾の時師子、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

十一

[三九]聞くこと是の如し。一時佛、舍衛國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「若しは檀越施主、惠施の日に五事の功德を得ん。云何が五と爲すや、一に[四〇]施命、二に[四一]施色、三

【三九】A. V. 37. Bhojana.
【四〇】施命(Ayum deti)。
【四一】施色(Vaṇṇaṁ deti)。

若し復比丘、瞻病人にして五法を成就せば、便ち時に差ゆることを得、床褥に著かざらん。云何が五と爲すや、是に於て瞻病之人、良醫を分別し、亦懈怠せず、先きに起きて後に臥し、恒に喜びて言談し、睡眠を少くし、法を以て供養して飮食を貪らず、病人の與に說法するに堪任す。是れを比丘、瞻病之人にして此の五法を成就せば、便ち時に差ゆることを得と謂ふなり。是の故に比丘、若し瞻病人なる時は、當に前の五法を捨てゝ、後の五法に就くべし。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時、諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

十

[三六]聞くこと是の如し。一時佛、[三七]毘舍離獼猴林中に在し、大比丘衆五百人と倶なりき。爾の時[三八]師子大將、便ち世尊の所に往至し、頭面に足を禮し、一面に在りて坐す。爾の時佛、師子に告げたまはく、「云何が師子、家中恒に布施するや」と。師子、佛に白して言さく、「常に四の城門外、及び都市に於て、時に隨つて布施し、缺くること有ら令めず、食を須ふるものには食を給し、衣裳・香華・車馬・坐具、彼れの須ふる所に隨つて皆給與せ令しむ」と。佛、師子に告げたまはく、「善い哉、善い哉、乃ち能く惠施して悋想を懷かざれ、施主檀越、時に隨つて惠施するに、五の功德有り、云何が五と爲すや、是に於て檀越施主は名聞四遠して衆人歎譽す、『某甲の村落に檀越施主有り、恒に喜びて沙門・婆羅門を接納し、隨所に給與して乏しきこと有ら令めず』と。是れを師子、檀越施主は此の第一の德を獲と謂ふなり。

復次に師子、檀越施主にして、若し沙門・刹利・婆羅門・長者衆の中に至り、慚愧を懷かず、亦畏る所無きこと、猶し師子獸王の、群鹿の中に在りて、亦畏難無きが如し。是れを師子、檀越施主は此の第二の德を獲と謂ふなり。

復次に師子、檀越施主は衆人敬仰し、見る者歡悅すること、子の父を見るが如く、瞻視して厭く

【三六】 A. V. 34. Sīha.
【三七】 巴利文には大林重閣講堂(Mahāvana kūṭāgārasālāya)となる。
【三八】 師子大將(Sīhasenāpati)。

る。形壽を盡くして優婆塞爲ることを聽せよ、復殺生せざらん。國事猥りに多し、今宮に還えらんと欲す」と。那羅陀曰く、「今正に是れ時なり」と。是の時王座從り起ち、足を禮し、遶ること三匝して去りぬ。爾の時文茶王、那羅陀の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

## 八

[三四] 聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「疾病の人にして五法を成就せば、時に差ゆることを得ずして、恒に床褥に在らん。云何が五と爲すや、時に病人飲食を擇ばず、時に隨つて食せず、醫藥に親近せず、憂・喜・瞋、多く、慈心を起して瞻病人に向はず。是れを比丘、疾病の人にして此の五法を成就せば、時に差ゆることを得ずと謂ふなり。

若し復病人にして五法を成就せば、便ち時に差ゆることを得。云何が五と爲すや、是に於て病人、選擇して食し、時に隨つて食し、醫藥に親近し、愁憂ひを懷かず、咸慈心を起して瞻病人に向ふ。是れを比丘、病人にして此の五法を成就せば、便ち時に差ゆる(ことを得)と謂ふなり。是の如く比丘、前の五法は當に捨離することを念ずべし。彼の五法は當に共に奉行すべし。是の如く比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

## 九

[三五] 聞くこと是の如し、一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「若し瞻病人にして五法を成就せば、時に差ゆることを得ずして、恒に床褥に在り。云何が五と爲すや、是に於て瞻病之人は良藥を別たず、懈怠にして勇猛心無く、常に瞋恚を喜び、亦睡眠を好み、但だ食を貪るが故に病人を瞻視し、法を以て供養せざるが故に、亦病人の與に語談往返せず、是れを比丘、若し瞻病之人にして、此の五法を成就せば、時に差ゆることを得ずと謂ふなり。



【三四】 A. V. 124. Upaṭṭhāna.

【三五】 A. V. 123. Upaṭṭhāna.

ふ可からずと謂ふなり。是れを大王、第五の愁憂の刺、心意に染著すと謂ひ、凡夫の人に此の法有り、生・老・病・死の來る處を知らざればなり。

又復聞く、賢聖の弟子は死す應き所の者は便ち死す。是の時彼の人憂・愁・苦・惱を起さず。當に是の學を作すべし。『我今死すること獨り一已に非らず、餘人も亦此の法有り。我設し中に於て愁憂を起さば、此れ其の宜しきに非らず。或は能く親族をして憂ひを起し、怨家をして歡喜せ使め、食は消化せず、卽ち當に病を成じ、身體煩熱し、此の緣本に由つて便ち命終を致すべし』と。爾の時便ち能く愁畏の刺を除去せば、生・老・病・死を脫し、復災患・苦惱の法無けん」と。

是の時大王、尊者那羅陀に白して曰く、「此れを何の法と名くるや。當に云何が奉行すべきや」と。那羅陀言く、「此の經は名けて除憂之患と曰ふなり、當に念じて奉行すべし」と。時に王報へて曰く、「實に所說の如く、愁憂ひを除去せり。然る所以は、我此の法を聞き已つて、所有の愁苦今日永く除けり、若し尊者、敎勅する所有らば、數々宮中に至れ、當に相供給すべし。國土人民をして、長く福を受けて窮り無から使めん。唯、願くは尊者、廣く此の法を演べて、永く世に存し、四部の衆をして、長夜に安隱なら使めよ。我今自ら尊者那羅陀に歸せん」と。那羅陀曰く、「大王、自ら我に歸すること莫かれ、當に自ら佛に歸しまつるべし」と。時に王問ふて曰く、「今佛は何處に在すや」と。那羅陀曰く、「大王、當に知るべし、迦毘羅衛大國の轉輪聖王種にして、釋姓より出で、彼の王に子有り、名けて悉達と曰ふ。出家學道して、今自ら成佛を致り。釋迦文と號しまつる。當に自ら彼に歸すべし」と。大王復問ふ、「今何れの方に在すや、此を去ること幾ばくの所ぞや」と。那羅陀曰く、「如來は已に涅槃を取りたまへり」と。大王曰く、「如來の滅度を取りたまふこと何ぞ其れ速疾きや、若し當に世に在しますべくんば、數千萬由旬を經とも、當に往いて覲省すべけんに」と。是の時卽ち座從り起ち、長跪叉手して是の說を作さく、「我自ら如來と法と比丘僧とに歸しまつ

爾の時便ち能く憂畏の刺を除去せば、便ち生・老・病・死を脫し、復災患・苦惱の法無けん。復次に大王、老ゆ應きの物便ち老ひ、已に老ゆれば便ち愁・憂・苦・惱・痛、言ふ可からず。『我愛する所の者、今日已に老ひたり』と。是れを老ゆる物便ち老ゆれば、中に於て憂・愁・苦・惱を起し、痛み言ふ可からずと謂ふなり。是れを大王、第三の愁憂の刺、心意に染著すと謂ふなり。凡夫の人に此の法有り、生・老・病・死の來る處を知らざればなり。

又復聞く、賢聖の弟子は老ゆ應き所の物は便ち老ゆ。是の時彼の人、愁・憂・苦・惱を起さず、當に是の學を作すべし。『我今老ゆる所、獨り一已に非らず、餘人も亦此の法有り、設し我中に於て愁ひを起さば、此れ其の宜しきに非らず、或は能く親族をつて憂ひを起し、怨家をして歡喜せ使め、食は消化せず、卽ち當に病を成じ、身體煩熱し、此の緣本に由りて、便ち命終を致すべし』と。爾の時便ち能く憂畏の刺を除去せば、生・老・病・死を脫し、復災患苦惱の法無けん。次に復大王、病む應き物は便ち病み、已に病めば便ち愁・憂・苦・惱・痛、言ふ可からず。『我愛する所の者、今日已に病めり』と。是れを病む物は便ち病み、中に於て愁・憂・苦・惱を起し、痛み言ふ可からずと謂ふなり。是れを大王、第四の愁憂の刺、心意に染著すと謂ふなり。凡夫の人は此の法有り、生・老・病・死の來る處を知らざればなり。

又復聞く、賢聖の弟子は、病む應き所の物は便ち病むと、是れを彼の人、愁・憂・苦・惱を起さずと謂ふなり。當に是の學を作すべし。『我今病む所は、獨り一已に非らず。餘人も亦此の法有り。設し我中に於て愁憂を起さば、此れ其の宜しきに非らず。或は能く親族をして憂ひを起し、怨家をして歡喜せ使め、食は消化せず、卽ち病を成じ、身體煩熱し、此の緣本に由つて便ち命終を致すべし』と。爾の時便ち能く愁畏の刺を除去せば、生・老・病・死を脫し、復災患・苦惱の法無けん。復次に大王、死す應きの物は便ち死し、已に死せば、是れを死する物、中に於て愁・憂・苦・惱を起し、痛み言

し智者有ら使めば　終に是れを思惟せず　外敵便ち愁ひ有りて　其の便りを得じ　威儀禮節具はれば　施を好みて悋心無けん　當に此の方便を求めて　其の大利を獲使むべし　設し得可からさら使めば　我及び彼の衆人　愁ひ無くば便ち患ひ無く　行報知ること如何。

又大王、當に知るべし、失ふ應きの物は便ち之を失ひ、已に失へば便ち愁・憂・苦・惱・痛言ふ可からず。『我愛する所の者を今日已に失へり』と。是れを、物を失へば便ち之を失ひ、中に於て愁・憂・苦・惱を起し、痛み言ふ可からずと謂ふなり。是れを大王、第一の愁刺、心意に染著すと謂ふなり。凡夫の人に此の法有り、生・老・病・死の來る處を知らざればなり。

又復聞く、賢聖の弟子は失ふ應き所の物、便ち之を失ふも、是の時彼の人、愁・憂・苦・惱を起さず、當に是の學を作すべし。『我の今失ふ所は獨り一已に非らず、餘人も亦此の法有り。設し我中に於て愁憂を起さば、此れ其の宜しきに非らず、或は能く親族をして愁憂を起し、怨家をして歡喜せ使め、食は消化せず、即ち當に病を成じ、身體煩熱し、此の緣本に由つて便ち命終を致すべし』と。爾の時便ち能く憂畏の刺を除去せば、便ち生・老・病・死を脱し、復災患苦惱の法無けん、復次に大王、滅す應きの物は便ち之を滅し、已に滅せば便ち愁・憂・苦・惱・痛、言ふ可からず。『我愛する所の者今日已に滅せり』と、是れを、物を滅せば便ち之を滅し、中に於て愁・憂・苦・惱・痛を起し、言ふ可からずと謂ふなり。是れを大王、第二の愁刺、心意に染著すと謂ふなり。凡夫の人に此の法有り、生・老・病・死の來る處を知らざればなり。

又復、聞く、賢聖の弟子は、滅す應き所の物は便ち之を滅す。是の時彼の人愁・憂・苦・惱を起さず、當に是の學を作すべし。『我今滅する所は、獨り一已に非らず、餘人も亦此の法有り。設し我中に於て愁憂を起さば、此れ其の宜しきに非らず、或は能く親族をして憂ひを起し、怨家をして歡喜せ使め、食は消化せず、即ち當に病を成じて身體煩熱し、此の緣本に由つて便ち命終を致すべし』と。

時に善念報へて曰さく、「大王の敎への如し」と。卽ち王の敎へを受けて、長者竹園中に往至し、那羅陀の所に至り、頭面に足を禮し、一面に在りて立つ。爾の時善念、尊者那羅陀に白して言く、「尊、當に之を知るべし。大王の夫人は今已に命終せり。此れに緣つて苦惱して食せず、飮せず、亦復王、法國事を治めず、今來つて尊顏を覲省せんと欲す、唯願くは善く、與に法を說き、王をして復愁苦無から使めよ」と。那羅陀報へて言く、「來らんと欲せば、今正に是れ時なり」と。是の時善念已に敎令を聞き、卽ち頭面に足を禮し、便ち退いて去り、王の所に往至して、王に白して言さく、「已に沙門に語げたり、王宜しく之を知るべし」と。

是の時卽ち善念に勅すらく、「汝速に寶羽の車を嚴駕せよ、吾今往いて沙門と相見んと欲す」と。是の時善念、卽ち寶羽の車を嚴駕し、前んで王に白して言さく、「嚴駕已に辦ぜり、王是れ時を知れ」と。是の時王、寶羽の車に乘り、城を出てゝ那羅陀の所に詣り、步みて長者竹園中に入る。夫れ人王の法としての、五威容を除き捨てゝ一面に著し、那羅陀の所に至り、頭面に足を禮し、一面に在りて坐す。是の時那羅陀、王に告げて曰く、「大王、當に知るべし、夢幻の法は愁憂ひを起し、泡沫の法及び雪揣を以て愁憂を起す。亦復華法の想を以て愁憂を起す可からず。然る所以は、今五事有り、最も得可からず、是れ如來の所說なり。云何が五と爲すや、夫れ物は應に盡くべし、盡きざら使めんと欲すること、此れ得可からざるなり。夫れ物は應に滅すべし。滅せざら使めんと欲すること、此れ得可からず。夫れ老之法をして、老ひざら使めんと欲すること、此れ得可からず。復次に病法をして、病まざら使めんと欲すること、此れ得可からず。復次に死法をして、死せざら使めんと欲すること、此れ得可からず。是れを大王、此の五事有りて、最も得可からずと謂ふなり。是れ如來の所說なり」と。爾の時那羅陀、便ち此の偈を說けり。

愁憂と惱みを以てせず共れ福祐を獲よ　設し愁憂を懷くこと有らば　外境其の便りを得ん　若

者の覺知する所、痛・想・行・識は無常なり。無常なれば是れ苦なり、苦なれば無我なり。無我なれば是れ空なり。空なれば有に非らず、不有に非らず、此れ智者の覺知する所なり。此の五盛陰は無常・苦・空・無我にして有に非らず、諸の苦惱多く、療治す可からず、恒に臭處に在つて久しく保つ可からず。悉く觀ずるに我有ること無し、今日此の法を觀察せば、便ち如來を見たてまつると爲し已る」と。世尊告げて曰く、「善い哉、善い哉、沙彌、即ち汝の大沙門爲ることを聽さん」と。爾の時彼の沙彌、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

七

〔三〇〕聞くこと是の如し。一時尊者〔三一〕那羅陀、〔三二〕波羅梨國長者竹林中に在りき。爾の時〔三三〕文茶王の第一夫人、命終を取り、王甚だ愛敬し、念じて未だ曾て懷ひを去らざりき。是の時一人有り、王の所に至り、王に白して言さく、「大王、當に知るべし。第一夫人は今已に命終せり」と。是の時王、夫人の無常を聞き、即ち愁憂ひを懷き、來人に告げて曰く、「汝速に夫人の死屍を輿せ、麻油の中に著けて、我をして之を見せ使めよ」と。是の時彼の人、王の敎命を受け、即ち往いて夫人の身を持して、麻油の中に著けぬ。爾の時王、夫人の逝喪を聞き、極めて愁惱を懷き、食せず飲せず、復法を持たず、王事を理めず。是の時左右に一人有り、名けて善念と曰ふ。恒に大王の與に劍を執れり。大王に白して曰さく、「大王、當に知るべし、此の國界中に沙門有り、那羅陀と名く、阿羅漢を得て大神足有り、博識多知にして、事として練らざるは無く、辯才勇慧にして、語常に笑ひを含めり。願くは王、當に彼に往至して、其の說法を聽くべし。若し王にして法を聞かば、復愁・憂・苦・惱無からん」と。王之に報へて曰く、「善い哉、善い哉、善く此の語を說けり、汝今善念、先づ往いて彼の沙門に語げよ。然る所以は、夫れ轉輪聖王は至る所有らんと欲せば、先づ當に人を遣すべし。先きに信を遣さずして至らば、此の事然らず」と。

---

〔三〇〕 A. V. 50. Nārada.

〔三一〕 那羅陀(Nārada)。

〔三二〕 波羅梨國(Pāṭaliputta)は、華氏城と譯す。巴連弗・波吒釐子城とも音譯し、中印度摩竭陀國の首府、現今のパトナ(Patna) はその舊地。

〔三三〕 文茶王(Muṇḍa)。

を爲さん者は、父母を辭せずば、沙門と作ることを得ず」と。是の時長者子、世尊に白して言さく、「要らず當に父母をしての聽許さ使むべし」と。世尊告げて曰はく、「今正に是れ時なり」と。

爾の時長者子、卽ち座從り起ち、頭面に足を禮し、便ち退いて去り、還つて所在に至り、父母に白して言さく、「唯、願くは聽許して、沙門と作ることを得させたまへ」と。父母報へて言く、「我等今日唯一子有り、然して家中の生業饒財多寶なり。沙門の法を行ずること、甚だ易からずと爲す」と。長者子報へて言さく、「如來の出世は億劫にして乃ち有り、甚だ遇ふべからず。時々に乃ち出でたまふ耳、亦優曇鉢華の時々に乃ち有るが如き耳、如來も亦復是の如く、億劫にして乃ち出でたまふ耳」と。是の時長者子の父母、各ゝ共に嘆息して是の言を作さく、「今正に是れ時なり。汝の所宜に隨へ」と。

是の時長者子、頭面に足を禮し、便ち辭して去り、世尊の所に往至し、頭面に足を禮し、一面に在りて立つ。爾の時彼の長者子、世尊に白して言さく、「父母に聽さ見たり。唯、願くは世尊、聽して道を作さ使めたまへ」と。

爾の時世尊、舍利弗に告げたまはく、「汝今此の長者子を度して、沙門と作さ使めよ」と。舍利弗對へて曰さく、「是の如し、世尊」と。爾の時舍利弗、佛從り教へを受け、度して沙彌と作し、日々敎誨しぬ。是の時彼の沙彌、閑靜處に在つて、自ら剋修し、族姓子の出家學道して、鬚髮を剃除し、無上の梵行を修むる所以は、苦を離るゝことを得んと欲してなり。是の時沙彌、卽ち阿羅漢を成じ、世尊の所に往至し、頭面に足を禮し、世尊に白して言さく、「我今已に佛を見たてまつり、法を聞き、都て疑ひ有ること無し」と。世尊告げて曰はく、「汝今云何が佛を見、法を聞いて狐疑無きや」と。沙彌佛に白して言さく、「色は無常なり。無常なれば卽ち是れ苦なり、苦なれば是れ無我なり、無我なれば卽ち是れ空なり。空なれば有に非らず、不有に非さるなり。亦復無我なり。是の如きは智

我は今財を求めず　食に非らず服飾に非らず　故に來るは汝の爲の故に　善く察して我語を
聽けよ　汝本の所説を憶するや　天上にて誓ひを言ひし時　人中に當に佛を見たてまつるべし
と　故に來つて相告ぐる耳　諸佛の出興は難し　説法も亦復然り　人身獲可からず　亦　優曇
花の如し　汝今我に隨つて來れ　倶に如來の容を觀たてまつらん　必ず當に汝の爲に　至要の
善趣を説きたまふべし。

と。是の時長者子、舍利弗の語を聞き已つて、卽ち父母の所に往至し、頭面に足を禮し、一面に在りて立つ。是の時長者子、父母に白して言さく、「唯、願くは聽許したまへ、世尊の所に至り、承事禮敬して、康强を問訊せん」と。父母報へて曰く、「今正に是れ時なり」と。長者子卽ち香花及び好白氎を集め、尊者舍利弗と共に、相隨つて世尊の所に往至し、頭面に足を禮し、一面に在りて住す。爾の時舍利弗、世尊に白して言さく、「此の長者子は、此の羅閲城中に居し、三尊を識らず、唯願くは世尊、善く與に法を説きて、度脱を得令めたまへ」と。

是の時長者子、遙に世尊を見たてまつるに、威容端正にして諸根寂靜なり。三十二相八十種好有りて、其の身を莊嚴す。亦須彌山王の如く、面は日月の如く、之を視るに厭くこと無し。前進して足を禮し、一面に在りて住す。爾の時長者子、卽ち香華を以て如來の上に散じ、復新しき白氎を以て如來に奉上し、頭面に足を禮し、一面に在りて住す。是の時世尊、漸く與に法を説きたまふ。所謂論とは施論・戒論・生天の論なり。欲は不淨、漏是れを大患と爲し、出家を要となす」と。是の時世尊、以て小兒の心開け、意解せるを知り、諸佛世尊の常に説きたまふ所の法、苦・集・盡・道。是の時世尊、盡く彼の長者子の與に説きたまふ。是の時長者子、卽ち座上に於て、諸の塵垢盡きて法眼淨を得、復瑕穢無し。是の時長者子、卽ち座從り起ち、頭面に足を禮し、世尊に白して言さく、「唯、願くは世尊、出家して沙門と作ることを得せ使むるを聽したまへ」と。世尊告げて曰はく、「夫れ道

---

【一九】 優曇花(Udumbara)は、優曇鉢華に同じ。前卷索引を見よ。

佛・法・衆に歸しまつる。其の形壽を盡くして、眞の佛子と爲らん、天子を用ふるに非らず」と。是の如きことと三たびに至り、此の語を說き已つて、復『猪胎に處らず、乃ち當に更に長者の家に生るべし』。是の時彼の天、此の緣を見已つて、卽ち釋提桓因に向つて此の偈を說く、

善緣は惡緣に非ず　法の爲にして財の爲に非らず　導引するに正道を以てす　此れは尊の歎ずる所なり　尊より惡に墮せざるを蒙むる　猪胎は甚だ因り難し　自ら察して長者に生れ　彼に因つて當に佛を見たてまつるべし。

と。是の時天子、時に壽の長短に隨つて、羅閲城中の大長者の家に生る。是の時長者婦、自ら娠めること有るを知り、十月滿たんと欲して一男兒を生む。端正無雙にして世の希有なり。是の時釋提桓因、以て此の兒の十歲に向へるを知り、數々往いて告ぐらく、「汝本の所作の緣本を憶ふ可し、自ら言へり、『我當に彼に因つて佛を見たてまつるべし』と。今正に是なり、世尊を見たてまつる可し。若し往かざれば、後に必ず悔ひ有らん」と。

是の時尊者舍利弗、時到つて衣を著け、鉢を持して羅閲城に入り、乞食して漸々に彼の長者の家に往至し、門外に在つて靜然として住す。爾の時長者子、舍利弗の衣を著け、鉢を持する容貌の殊特なるを見、見已つて便ち舍利弗の前に往至して是の說を作さく、「汝今是れ誰ぞや、誰の弟子と爲すや、何れの法を行ずと爲すや」と。舍利弗言く、我師は釋種より出で、中に於て出家學道したまへり。師は如來・至眞・等正覺と名けまつり、恒に彼れ從り法を受く」と。是の時小兒、卽ち舍利弗に向つて此の偈を說きぬ。

尊は今靜然として立ち　鉢を持し容貌整へり　今何等を求めんと欲するや　誰の與に此に在りて住するや。

と。是の時舍利弗復偈を以て報へて曰く、

寶の宮殿悉く當に忘失すべし。及び五百の玉女亦當に星散すべし。我食する所の甘露は、今は氣味無し」と。是の時釋提桓因彼の天子に語げて言く、「汝豈如來の偈を說きたまふを聞かずや。

一切行無常なり　生ずれば必ず死有り　生ぜずば則ち死せじ　此の滅を最樂と爲す。

と。汝今何故に愁憂して乃ち斯に至るや。一切行は無常の物なるに、有常なら使めんと欲すること、此の事然らざるなり」と。天子報へて言く、「云何が天帝、我那んぞ愁憂せざるを得ん、我今天身淸淨にして瑕穢無し、光日月に喩ふるに、照さゞる所靡し。此の身を捨て已つて、當に羅閱城中の猪腹中の生に生るべし。生れて恒に屎を食ひ、死する時は刀の爲に割かれん」と。是の時釋提桓因、彼の天子に語げて言く、「汝今自ら佛・法・衆に歸すべし。若し爾の時に當つて、便ち三惡趣[三八]に墮せざらん」と。是の時天子報へて言く、「豈當に三尊に歸するを以て、三惡趣に墮せざるべけんや」と。釋提桓因曰く、「是の如し、天子、其れ自ら三尊に歸すること有らん者は、終に三惡趣に墮せざるなり。如來も亦此の偈を說きたまへり。

諸有の自ら佛に歸するものは　三惡趣に墮せず　漏を盡くして天人に處り　便ち當に涅槃に至るべし。

と。爾の時彼の天、釋提桓因に問はまく、「今如來は竟に所在爲るや」と。釋提桓因曰く、「今如來は摩竭國羅閱城中、迦蘭陀竹園所に在し、大比丘衆五百人と俱なり」と。天子報へて言く、「我今此の力の、彼に至りて如來を觀省するを、得可きこと有ること無し」と。釋提桓因報へて言く、「天子當に知るべし、右膝を地に著け、長跪叉手して、下方界に向ひて是の說を作せ、『唯、願くは世尊、善く之を觀察したまへ、今乖窮の地に在り、願くは之を矜愍したまへ、我今自ら三尊如來無所著に歸しまつる』」と。

是の時彼の天子、釋提桓因の言に隨ひ、卽便ち長跪して下方に向ひ、自ら姓名を稱へ、「自ら

---

【三八】三惡趣とは、地獄・餓鬼・畜生の三惡界をいふ。

十五清淨の日　五百の比丘集る　諸の結縛悉く解け　愛無く更に生ぜず　轉輪大聖王　群臣に圍遶せられ　普く諸の世界　天上及び世間を遍くす　大將は人中の尊なり　人の爲に導師と作る　弟子徒從を樂しみ　三達[二六]　六通[二七]徹す　皆是れ眞の佛子なり　塵垢の者有ること無し　能く欲愛の刺を斷つ　今日自ら歸命しまつる。

と。爾の時世尊、多者奢の所説を可したまひき。是の時多者奢是の念を作さく、「如來は今日我所説を可したまへり」と、歡喜踊躍して自ら勝ふること能はず。卽ち座從り起ち、佛を禮し、却いて退還して本位に就く。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「我聲聞中第一の造偈の弟子は、所謂多者奢比丘是れなり。是れ所説に疑難無きも、亦是れ多者奢比丘是れなり」と。爾の時諸比丘、佛の所説を聞いて歡喜奉行しぬ。

## 六

聞くこと是の如し。一時佛、羅閱城迦蘭陀竹園所に在し、大比丘衆五百人と倶なりき。爾の時三十三天に一天子有り、身形に五の死の瑞應有り。云何が五と爲すや、一に華冠自ら萎む。二に衣裳垢に坋る。三に腋下の流汗、四に本位を樂しまず、五に玉女違叛す。爾の時彼の天子、愁憂苦惱し、胸を椎ちて歎息す。時に釋提桓因、此の天子の愁憂苦惱して胸を椎ち、歎息するを聞き、便ち一天子に勅すらく、「此れ何等の音聲ぞや、乃ち此の間に徹するや」と。彼の天子報へて言く、「天子、當に知るべし、今一天子有り、命將に終らんと欲して五の死の瑞應有り、一に華冠自ら萎み、二に衣裳垢に坋れ、三に腋下の流汗、四に本位を樂しまず、五に玉女違叛す」と。爾の時釋提桓因、彼の終らんと欲する天子の所に往至し、彼の天子に語げて言く、「汝今何故に愁憂苦惱して、乃ち斯に至るや」と。天子報へて言く、「尊者因提、那んで愁憂苦惱せざるを得ん、命將に終らんと欲して、五の死怪有り、華萎み、衣裳垢膩き、腋下に流汗し、本處を樂しまず、玉女違叛す。今此の七

【二六】三達とは、三明ともいひ、もと梨倶・夜珠・沙磨の三吠陀に通曉することの義に用ひられしが、佛陀はこの三明の字を取り入れて宿命通、天眼通、漏盡通の三を三明といひ、宿命通とは有情の宿世の境遇を追念する智にして、天眼通とは有情の未來の生死の因果を知る智をいひ、漏盡通とは有漏の煩惱を滅盡して如實の四諦の理と知り、再び迷ひの存在を受けざるをいふ。

【二七】六通とは、五通に漏盡通を加へしもの。前卷索引五通を見よ。

くして、能く及ぶ者無く、最尊最上にして、未だ道意を起さゞる者をして、道意を發さ使め、衆人の未だ寤めざるものをして、尊は之を寤め令め、未だ法を聞かざる者をして、之を聞か使め、迷へる者の爲に徑路を作り、恒に正法を以てしたまふ。此の事緣を以て、如來は衆人に咎無く、亦身・口・意に過無きなり」と。

是の時舍利弗、世尊に白して言さく、「我今如來に向つて自ら陳べまつらん。然るに如來及び比丘僧に咎無き乎」と。世尊告げて曰はく、「汝今舍利弗、都て身・口・意の所作に非行無し。然る所以は、汝今智慧の能く及ぶ者無し。種々の智慧・無量の智慧・無邊智・無與等智・疾智・捷智・甚深の智・平等の智・少欲知足にして靜處を樂しみ、諸の方便多くして、念じて錯亂せず、總持三昧の根原具足し、[二三]戒成就・三昧成就・智慧成就・解脱成就・解脱見慧成就し、勇悍にして能く所說を[二四]忍し、惡無く非法を爲さず、心性庠序にして卒暴を行ぜざること、猶し轉輪聖王の最大の太子、當に王位を紹ぐべく、法輪を轉ずるが如し。舍利弗も亦是の如く、無上の法輪を轉ず。諸天世人及び龍・鬼・魔・若しは魔天の本轉ぜざる所なり。汝の今說く所、常に法義の如く、未だ曾て理に違せざるなり」と。

是の時舍利弗、佛に白して言さく、「此の五百の比丘、盡く當に歲を受くべし。此の五百人は盡く如來に咎無き乎」と。世尊告げて曰はく、「亦此の五百の比丘の身・口・意行を責めじ、然る所以は、此の舍利弗は大衆の中、極めて淸淨爲り、瑕穢有ること無し。今此の衆中、最小下坐のものも、須陀洹道を得て、必ず當に上不退轉の法に及ぶべし。是れを以ての故に、我此の衆を怨責せざるなり」と。

爾の時[二五]多耆奢、此の衆中に在り、即ち座從り起ち、前んで世尊の所に至り、頭面に足を禮し、世尊に白して言さく、「我今堪任して所論有らんと欲す。」と。世尊告げて曰はく、「所說有らんと欲せば、今正に是れ時なり」と。多耆奢即ち佛前に於て、佛及び比丘僧を歎じて此の偈を說きぬ。

【二三】戒成就・三昧成就・慧成就・解脱成就・解脱見慧成就の五を五分法身といひ、佛陀の具有する五種の功德身にして、或は制御の德、三昧は亂を止めるの德、慧は簡擇の德、解脱は煩惱の得脱をいひ、解脱見慧とは自ら「我解脱せり」と知るをいふ。

【二四】忍とは、忍は認にして、認可すること。

【二五】多耆奢(Vangīsa)は、又婆耆舍につくる。佛弟子中の即興詩人にして、舍衞城の婆羅門の子。

恒沙の過去佛　弟子清淨の心　皆是れ諸佛の法にして　今の釋迦文に非らず　辟支に此の法無く　歳無く弟子無し　獨り逝いて伴侶無く　他の與に法を說かず　當來の佛世尊　恒沙にして計る可からず　彼れも亦此の歳を受くること　今の瞿曇の法の如し。

と。是の時尊者阿難、此の語を聞き已つて、歡喜踊躍して自ら勝ふること能はず。卽ち講堂に昇つて、手に揵椎を執り、並に是の說を作さく、「我今此の如來の信の鼓を擊たん。諸有の如來の弟子衆は、盡く當に普く集るべし」と。爾の時復此の偈を說けり。

魔の力怨を降伏し　結を除きて餘り有ること無し　露地に揵椎を擊たん　比丘聞いて當に集るべし　諸の法を聞かんと欲する之人は　生死の海を度流し　此の妙へなる響音を聞き　盡く當に此に雲集すべし。

と。爾の時尊者阿難、已に揵椎を擊ち、世尊の所に至り、頭面に足を禮し、一面に在りて住し、世尊に白して言さく、「今正に是れ時なり、唯願くは世尊、何をか勅使せ所るゝや」と。是の時世尊、阿難に告げて曰はく、「汝※次に隨つて坐せよ、如來は自ら當に時を知るべし」と。是の時世尊、草座に坐して諸比丘に告げたまはく、「汝等盡く當に草座に坐すべし」と。諸比丘對へて曰さく、「是の如し、世尊」と。時に諸比丘各々草座に坐せり。是の時世尊、默然として諸比丘を觀じ已り、便ち諸比丘に勅したまはく、「我今歳を受けんと欲す。我衆人に過咎無き乎、又身・口・意に犯さゞりしや」と。如來此の語を說き已りたまふや、諸比丘默然として對へず。是の時復再三諸比丘に告げたまはく、「我今歳を受けんと欲す。然るに我衆人に過無き乎」と。是の時尊者舍利弗、卽ち座從り起ち、長跪叉手して世尊に白して言さく、「諸の比丘衆は如來、身・口・意に過無しと觀察す。然る所以は、世尊は今日度せざる者を度し、脫せざる者を脫し、般涅槃せざる者をして般涅槃せ令め、救ひ無き者の爲に救護を作し、盲しひの者に眼目と作り、病者の爲に大醫王と作りたまひ、三界に獨り尊



※次とは、席次のこと。

を作さば、地獄の中に如似たり。卿等、身・口・意淨からざるが故に、斯の罪を致せしなり』と。比丘當に知るべし。閻羅王便ち是の說を作さく、『我當に何れの日に此の苦難を脫るべきや。人中に生じ已つて人身を得ば、便ち出家を得て鬚髮を剃除し、三法衣を著け、出家學道せん』と。閻羅王にして尙是の念を作す、何況んや、汝等今人身を得て、沙門と作ることを得たり。是の故に諸比丘、常に當に念じて、身・口・意行を行じて、缺くること有ら令むること無かれ。當に五結を滅して五根を修行すべし。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

## 五

〔一九〕聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國〔二〇〕東苑鹿母園中に在し、大比丘衆五百人と倶なりき。是の時世尊、七月十五日〔二一〕露野地に於て座を敷きたまひ、比丘僧前後に圍遶しき。佛、阿難に告げて曰はく、「汝今露地に於て、速に揵椎を擊て、然る所以は、今七月十五日、是れ〔二二〕受歲の日なればなり」と。是の時尊者阿難、右膝を地に著け、長跪叉手して便ち此の偈を說く、

淨眼與に等しきなく　事として練らざるは無し　智慧染著無きに　何等をか受歲と名くるや。

と。爾の時世尊、復偈を以て阿難に報へて曰はく、

受歲は三業を淨む　身・口・意の所作なり　兩々の比丘對して　自ら作せし所の短を陳ぶ　還つて自ら名字を稱し　今日衆歲を受けんと　我も亦意を淨めて受けん　唯願くば其の過を原ねよ。

と。爾の時阿難、復偈を以て其の義を問ひて曰さく、

過去の恒沙の佛　辟支及び聲聞　盡く是れ諸佛の法なるや　獨り是れ釋迦文なるや。

と。爾の時佛復偈を以て、阿難に報へて曰はく、

---

【一九】 S. 8. 7. Pavāraṇā. 中阿含第一二一經請々經（卷二九）、別譯西晉竺法護譯の受新歲經一卷、宋法賢譯の解夏經一卷、雜阿含第一二一二經（卷四十五）。別譯雜阿含第二二八經（第十二）これに該當す。

【二〇】 東苑鹿母園（Pubbārāma migāramātu-pāsāda）とは、毘舍佉（Visākhā）の敎團に獻上せしもの。毘舍佉は鴦伽國に生れ、陀羅闍那（Dhanañjaya）の娘、玉耶女（Sujātā）の姉にして、常に布施して敎團に乏しきことなからしめしより僧伽の母と稱せらる。ミガーラ（Migāra）に嫁し、夫を感化して、佛に歸せしめしより、夫は妻を母と呼べり。故にこゝに鹿母（Migāramātu）といふ。

【二一】 露野地（Ajjhokāsa）とは、又露地、露處ともいひ、上に屋根なく、樹蔭なき露天の草原といふ。

【二二】 受歲（Pavāraṇā）とは、自恣ともいひ、安居の終りし日に行はるゝ、安居比丘の懺悔日。僧伽に伺ひて、安居中の自が犯罪について、疑ひあれば、その指示を乞ふなり。

等當に相供給すべし』と。是の時獄卒罪人を取りて仰臥し、大熱鐵丸を取り、罪人をして之を呑ま使む。然れば罪人の苦を受くること稱計す可からず。是の時熱鐵丸、口從り下過し、腸胃爛盡して、苦を受くること量り難し。要らず當に罪をして滅せ使め、然る後に乃ち出づべし。

然れば彼の罪人、此の苦痛を受くに堪えず、還つて復熱屎地獄・刀劍地獄・大熱灰地獄に入り、還り來つて爾許の地獄を經、是の時彼の衆生、苦を受くるに堪えず、還つて頭を廻らして熱屎地獄の中に至る。是の時獄卒、彼の衆生に語りて曰く、『卿等何所に至らんと欲するや、何れ從り來ると爲すや』と。罪人報へて曰く、『我等自ら何所從り來れりと爲すやを知ること能はず。今復當に何所に至るべきやを知らず』と。獄卒問ふて曰く、『今何物を須ふるや』と。罪人報へて曰く、『我等極めて渴けり、水を須ひ飲まんと欲す』と。是の時獄卒、罪人を取りて仰臥し、銅を融かして口に灌ぎて、下過せ使令め、中に於て罪を受くること具に計る可からず。要らず當に罪をして滅せ使め、然る後に乃ち出づべし。

是の時彼の人此の苦を受くるに堪えず、還つて沸屎地獄・劍樹地獄・熱灰地獄に入り、還つて大地獄の中に入る。比丘當に知るべし。爾の時罪人の苦痛稱計す可きこと難し。設ひ彼の罪人、眼に色を見るも、愛樂せず、設ひ復聲を聞き、香を嗅ぎ、味を知り、身細滑を更め、意法を知るも皆瞋恚を起す。然る所以は、本善行を作さゞりし報ひに由るなり。恒に惡業を作せしが故に、斯の罪を致すなり。

是の時閻羅王、彼の罪人に勅して曰く、『卿等善利を得ず、昔人中に在つて、人中の福を受けしも、身・口・意行與に相應せず、亦〔一八〕惠施・仁愛・利人・等利せざりき。是れを以ての故に今此の苦を受くるなり。此の惡行は父母の爲せしに非らず、亦國王・大臣の所爲に非らざるなり。諸有の衆生にして、身・口・意・清淨にして沾汚有ること無くば、光音天に如似たり。諸有の衆生にして、諸の惡行



〔一八〕惠施云々、前卷索引四事供養をみよ。

閉づ。要らず當に罪を滅せ使めて、然る後に乃ち出づべし。是の時彼の罪人、復數百萬歲を經て、乃ち復出づることを得、人中の所作の罪、要らず當に畢ら使むべし。是の時獄卒復罪人を取りて、鐵斧を以て罪人の身を斫り、爾許の罪を經て、之を更め使令め、要らず當に罪苦をして畢盡せ使め、然る後に乃ち出づべし。

比丘當に知るべし。或は復時有つてか、彼の東門復更に一たび開く。是の時彼の衆生、復東門に詣れば、門復自ら閉じて出づることを得ず。設し復外に出づることを得ば、復大山有り、往いて之に趣く。彼山中に入れば、兩山の爲めに壓せ所るゝこと、猶し麻油を壓するが如く、中に於て苦を受くること稱計す可からず。要らず當に苦を盡くして、然る後に乃ち出づべし。爾の時彼の罪人轉た前進することを得ば、復熱灰地獄に値ふ。縱廣數千萬由旬、中に於て苦を受くること稱計す可からず。要らず當に其の罪の原を畢つて、然る後に乃ち出づべし。轉た復前進せば、次で刀刺地獄有り、是の時罪人復此の刀刺地獄の中に入れば、便ち大風有りて起り、此の罪人の身體筋骨を壞り、中に於て苦を受くること稱計す可からず。要らず當に罪滅して然る後に乃ち出づべし。

次に復大熱灰地獄有り。是の時罪人復此の大熱灰地獄の中に入れば、形體融爛して、苦を受くること無量なり。要らず當に罪を滅せ使めて、然る後に乃ち出づべし。是の時罪人此の熱灰地獄を出づることを得と雖も、復刀劍地獄に値ふ。縱廣數千萬里なり。是の時罪人此の刀劍地獄の中に入り、中に於て苦を受くること稱計す可からず。要らず當に罪を滅せ使めて、然る後に乃ち出づべし。

次に復沸屎地獄有り、中に細虫有つて骨に入り、髓に徹して此の人を食ひ、此の地獄を出づることを得と雖も、前んで獄卒に値ふ。是の時獄卒、罪人に問ふて曰く、『卿等何所に至らんと欲するや、何れ從り來ると爲すや』と。罪人報へて曰く、『我等は從來する所を知らず、亦復當に何所に至るべきやを知らず、但我等今日極めて飢困爲り、意に食を須ひんと欲す』と。獄卒報へて曰く、『我

是の時獄卒復、罪人を取りて、其の舌を拔き、背後に擲著し、中に於て苦を受くること稱計す可からず。死を求むるも得ず。是の時獄卒、復罪人を取りて刀山上に著し、或は其の脚を斷ち、或は其の頭を斷ち、或は其の手を斷ち、要らず當に罪を滅せ使めて、然る後に乃ち出づべし。

是の時獄卒復、熱せる大鐵葉を以て、罪人の身を覆ふこと、生ける時に衣を著くるが如く、當時の苦、痛毒、處り難しと爲す。皆貪欲の故に由るが故に、故に斯の罪を致すなり。是の時獄卒、復罪人をして、五種の役を作さ使め、驅つて偃臥せ令しめ、其の鐵釘を取つて、其の手足に釘ち、復一釘を以て其の心に釘ち、中に於て斯の苦痛を受くること、實に言ふべからず、要らず當に罪を滅せ使めて、然る後に乃ち出づべし。

是の時獄卒、復罪人を取つて其の身を顚倒し、鑊の中に擧著す。時に身下に至り、皆悉く爛盡す。若し還つて上に至れば、亦復、爛盡し、若し四邊に至るも亦復爛盡し、酸楚、毒痛、稱計す可からず。現るゝも亦爛れ、現れざるも亦爛るゝこと、猶し大釜に小豆を煮、或は上り、或は下るが如く、今此の罪人も亦復是の如し。現るゝも亦爛れ、現れざるも亦爛れ、中に於て苦を受くること稱計す可からず。要らず當に罪を受け畢つて、然る後に乃ち出づべし。

比丘當に知るべし。或は復時有つてか、彼の地獄中に、數年を經歷して、東門乃ち開く。是の時罪人復往いて、門に趣けば、門自然に閉づ。是の時彼の人皆悉く地に倒れ、中に於て苦を受くること具に稱る可からず。或は時に各々自ら怨債を稱し、『我汝等に由つて、門を出づることを得ざるなり』と。爾の時世尊、便ち此の偈を說きたまはく、

愚者は常に喜悅すること　亦光音天の如し　智者は常に憂ひを懷くこと　獄中の囚れに如似たり。

と。「是の時大地獄中に百千萬歲を經歷して、北門復開く。是の時罪人復北門に向へば、門便ち復

に如似たり。刀山・劍樹四面を圍遶し、復鐵の[一六]疏籠を以て其の上を覆へり。爾の時世尊、便ち此の
偈を說きたまはく、

　四壁に四の城門あり　廣長にして實に牢爲り　鐵籠の覆ふ所　出でんことを求むるも期有ること無し　彼の時鐵地の上に　火然として極めて熾爲り　壁は方百由旬にして　洞然として一種の色たり　中央に四柱有り　之を視れば實に恐畏す　及び其の劍樹の上は　鐵嘴の鳥の止まる所なり　臭處實に居り難く　之を視れば衣毛堅つ　種々の畏器　[一七]隔子十六有り。

と。比丘當に知るべし。是の時獄卒、若干の苦痛を以て此の人を殘打し、若し彼の罪人脚を擧げて獄中に著くる時、血肉斯に盡きて唯骨の在る有り。是の時獄卒、此の罪人を將ひて、復利斧を以て其の形體を斫る。苦痛計り難く、死を求むるも得ず、要らず當に罪滅するの後、乃ち爾り脫することを得べし。彼人間の所作の罪業に於て、要らず除盡せ使めて後、乃ち出づることを得るなり。

　是の時彼の獄卒、此の罪人を將ひて、刀劍樹に緣り、或は上り、或は下る。是の時罪人、樹上に在るを以て、便ち此の鐵嘴の鳥の爲めに食はれ、或は其の頭を啄み、腦を取つて之を食ひ、或は手脚を取つて骨を打ち、髓を取るも、然も罪未だ畢らず。若し罪畢らば、然る後に乃ち出づるなり。

　是の時獄卒、彼の罪人を取りて、熱の銅柱を抱きて坐せ使む。前世の時婬泆を喜びしが故なり。故に此の罪を致すなり。罪の爲に追はれて、終に脫がるゝことを得ず。是の時獄卒、脚の跟從り筋を拔き、乃ち項中に至つて前に之を挽く。或は車を載せ、或は進み、或は退きて自在を得ざら使め、其の中に苦を受くること稱計すべからず。要らず當に罪を滅せ使めて、然る後に乃ち出づべし。

　是の時獄卒、彼の罪人を取りて、火山上に著し上下に驅使す。是の時極めて爛盡爲り。然る後に乃ち出づ。是の時罪人、此の因緣に由つて死を求むるも得ず。要らず當に罪を除き盡くさ使めて然る後に乃ち出づべし。

---

【一六】疏籠とは、目のあらい籠。

【一七】隔子とは、小地獄のこと。

復第四の天使を以て、彼の人に告げて曰く、『云何が男子、身は枯木の如く、風去り、火歇きて情想無く、五親圍遶して號哭するを』と。罪人報へて曰く、『是の如し、大王、我已に之を見たりき』と。閻羅王曰く、『汝何故に是の念を作さゞりしや、「我も亦當に此の死を免れざるべし」』と。罪人報へて曰く、『實に爾り、大王、我實に覺らざりき』と。閻羅王曰く、『我も亦汝の此の法を覺らざりしを信ず。今當に汝を治して、後犯さゞら使むべし。此の不善の罪は父に非らず、母の爲せしに非らず、亦國王・大臣・人民の造る所に非らず。汝本自ら作して、今自ら罪を受くるなり』と。

是の時閻羅王、復第五の天使を以て、彼の人に告げて曰く、『汝本人爲りし時、賊有つて牆を穿ち、舍を破り、他の財寶を取り、或は火を以て燒き、或は道路に隱藏し、設し當に國王の爲に擒得せらるれば、或は手足を截り、或は取つて之を殺し、或は牢獄に閉著し、或は反縛して市に詣り、或は沙石を負は使め、或は取つて倒懸し、或は箭を攢めて射、或は融銅を以て其の身に灌ぎ、或は火を以て炙き、或は其の皮を剝ぎ、還つて之を食せ使め、或は其の腹を開き、草を以て之に擣き、或は以て湯中に之を煮、或は刀を以て斫輪して其の頭を落し、或は象の脚を以て蹈み殺し、或は標頭に著けて乃ち死に至りしを見ざりしや』と。罪人報へて曰く、『我實に之を見たりき』と。閻羅王曰く、『汝何故に私に他物を盜み、情事有るを知つて、何爲ぞ之を犯せしや』と。『是の如し、大王、我實に愚惑なりき』と。閻羅王曰く、『我も亦汝の所言を信ず。今當に汝の罪を治して、後犯さゞら使むべし。此の罪は父母の爲せしに非らず、亦國王・大臣・人民の爲せし所に非らず、自ら其の罪を作り、還つて自ら報ひを受くるなり』と。

是の時閻羅王、以て罪を問ひ已つて、便ち獄卒に勅すらく、『速に此の人を將ひて、往いて獄中に著けよ』と。是の時獄卒、王の敎令を受け、此の罪人を將ひて、往いて獄中に著く、地獄の左側極めて火然爲り、鐵城・鐵廓、地も亦鐵なり。四の城門有り、極めて臭處爲り、屎尿に染汚せ所見るゝ

汝自ら生法の要行を知らざりし耶、〔一三〕身・口・意法に諸の〔一四〕善趣を修めんことを』と。罪人報へて曰く、『是の如し、大王、大王の教への如し。但愚惑爲りしなり。善行を別たざりき』と。閻羅王曰く、『卿の所說の如く其の事異らず、亦復知る、卿は身・口・意行(に善)を作さず、但今日を爲せしなり。當に汝の放逸の罪行を治むべし。父母の爲せしに非らず、亦國王大臣の所爲に非らず、本自ら罪を作して、今自ら報ひを受くるなり』と。是の時閻羅王、先づ其の罪を問ひ、却へり勅して之を治せり。

次に復第二の天使、彼の人に問ふて曰く、『汝本人爲りし時、老人の形體極劣にして、行步に苦竭し、衣裳垢に坌れ、進止に戰掉し、氣息呻吟して、復少壯の心無きを見ざりしや』と。是の時罪人報へて曰く、『是の如し、大王、我已に之を見たり』と。閻羅王報へて曰く、『汝當に自ら知るべし。「我今亦此の〔一五〕形老の法有り、老と爲るは厭ふ所なれば、當に其の善行を修むべし」』と。罪人報へて曰く、『是の如し、大王、爾の時は實に之を信ぜざりき』と。閻羅王報へて曰く、『我實に之を知る。汝身・口・意(に善)行を作さざりき。今當に汝の罪を治して、後に犯さざら使むべし。汝の作せし所の惡は、父母の爲せしに非らず、亦國王・大臣・人民の所造に非らず、汝今自ら其の罪を造りて、當に自ら報ひを受くべし』と。是の時閻羅王、此の第二の天使を以て約勅し已りぬ。

復第三の天使を以て、彼の人に告げて曰く、『汝前身に人作りし時、病人有るを見ざりしや。臥して屎尿の上に在つて、自ら起居すること能はざるを』と。罪人報へて曰く、『是の如し、大王、我實に之を見たりき』と。閻羅王曰く、『云何が男子、汝自ら知らざりしや、「我も亦、當に此の病有るべし、此の患ひを免れじ」』と、罪人報へて曰く、『實に爾り、大王、我實に之を見ざりき』と。閻羅王曰く、『我も亦之を知る、愚惑は解らず、我今當に、汝を罪に處して、復犯さゞら使むべし。此の罪行は父に非らず、母の爲せしに非らず、亦國王、大臣の造作せし所に非らず』と。是の時閻羅王、此れを以て敎勅し已りぬ。

〔一三〕身口意法とは、身口意行に同じ。
〔一四〕善趣とは、善(Kalyāṇa)のこと。
〔一五〕形老の法(Jarādhamma)とは、老ゆる性質のものの意。

ん』と。是れを比丘、此の五因緣有つて佛を禮するの功德と謂ふなり。是の故に諸比丘、若し善男子、善女人有りて、佛を禮せんと欲せば、當に方便を求めて、此の五功德を成ずべし。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

## 四

[三] 聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「猶し屋舍に兩門有りて相對し、人有り中に在つて住し、復人有り上に在つて住し、其の下の出入行來を觀、皆悉く知見するが如く、我も亦是の如し。天眼を以て衆生の類を觀じ、生者・終者・善趣・惡趣・善色・惡色・若しは好、若しは醜、行ずるに隨つて種うる所、皆悉く之を知る。若し復衆生有つて、身に善を行じ、口に善を行じ、意に善を行じて賢聖を誹謗せず、正見の法を行じて、等見と想應せば、身壞命終して善處天上に生ぜん。是れを名けて、衆生善を行ずと謂ふなり。若し復衆生有つて、此の善法を行じ、惡行を造らずば、身壞命終して人中に來生せん。若し復衆生有つて、身口意に惡を行じ、不善行を造らば、命終の後餓鬼中に生ぜん。或は復衆生有つて、身口意に惡を行じ、賢聖を誹謗し、邪見と相應せば、命終の後畜生中に生ぜん。或は復衆生有つて、身口意に惡を行じ、不善行を造り、賢聖を誹謗せば、命終の後地獄の中に生ぜん。

是の時獄卒、此の罪人を將ひて閻羅王に示し、並に是の說を作さく、『大王、當に知るべし、此の人前世に、身意に惡を行じ、諸の惡行を作し已つて、此の地獄の中に生ぜり。大王、當に觀ずべし、此の人何の罪を以て治せんや』と。是の時閻羅王、漸く彼の人の與に、私に其の罪を問ひ、彼の人に告げて曰く、『云何が男子、汝本前世に人身爲りし時、人生るゝこと有らば人身と作ることを得、胎に處るの時、極めて困厄爲り、痛み實に處り難し。其の長大するに及び、將養乳哺身體を沐浴するを見ざりし耶』と。是の時罪人報へて曰く、『實に見たり、大王』と。閻羅王曰く、『云何が男子、

【三】 M. 130. Devadūta. 中阿含第六四經天使經(卷十二)。別譯に東晉竺曇無蘭譯の鐵城泥犁經一卷、劉宋慧簡譯の閻羅王五天使者經一卷あり。

如し。世尊」と。爾の時諸比丘、佛從り教へを受く。世尊告げて曰はく、「彼云何が名けて不善聚と爲すや、所謂五蓋なり。云何が五と爲すや、貪欲蓋・瞋恚蓋・睡眠蓋・調戲蓋・疑蓋なり。是れを名けて五蓋と爲すと謂ふなり。不善聚を知らんと欲せば、此れを名けて五蓋と爲すなり。然る所以は、比丘當に知るべし、若し此の五蓋有らば、便ち畜生・餓鬼・地獄の分有らん。諸の不善の法は皆此れに由つて起る。是の故に諸比丘、當に方便を求めて、貪欲蓋・瞋恚蓋・睡眠蓋・調戲蓋・疑蓋を滅すべし。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

三

聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「承事して佛を禮するに五事の功德有り。云何が五と爲すや、一に端正、二に好聲、三に多財饒寶、四に長者の家に生れ、五に身壞命終して善處天上に生る。然る所以は、如來は與に等しきもの無く、如來は信有り、戒有り、聞有り、慧有り、善色有つて成就すればなり。是の故に五功德を成就するなり。

復何の因緣を以て、佛を禮して端正を得るや、佛の形像を見已つて歡喜の心を發すを以てなり。此の因緣を以て端正を得るなり。復何の因緣を以て好き音聲を得るや、如來の形像を見已つて、三たび自ら南無如來・至眞・等正覺と稱號するを以てなり。此の因緣を以て好き音聲を得るなり。復何の因緣を以て多財饒寶なるや。彼如來を見たてまつりて大施を作すに緣つて、華を散じ、燈を然やし、及び餘の絕す所の物となり。此の因緣を以て大財寶を獲るなり。復何の因緣を以て長者の家に生るるや。若し如來の形を見已つて、心に染著無く、右膝を地に著け、長跪叉手して、至心に佛を禮すればなり。此の因緣を以て長者の家に生るゝなり。復何の因緣を以て身壞命終して、善處天上に生るゝや。諸佛世尊の常法に、『諸有の衆生、五事の因緣を以て如來を禮せば、便ち善處天上に生れ

# 卷の第二十四

## 善聚品第三十二[一]

一

[二]聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「我今當に[三]善聚を說くべし。汝等善く之を思念せよ」と。諸比丘對へて曰さく、「是の如し、世尊」と。諸比丘佛從り教へを受く。世尊告げて曰はく、「彼れ云何が名けて善聚を爲すや、所謂[四]五根是れなり。云何が五と爲すや、所謂[五]信根・[六]精進根・[七]念根・[八]定根・[九]慧根なり。是れを比丘、此の五根有りと謂ふなり。若し比丘有つて五根を修行せば、便ち須陀洹を成じ、不退轉の法を得て、必ず至道を成じ、其の行を轉進して斯陀含を成じ、此の世に來つて其の苦際を盡くし、其の道を轉進して阿那含を成じ、復此の世に來り、卽ち復般涅槃を取り、其の行を轉進して、有漏盡きて無漏心解脫・智慧解脫を成じ、自身に作證して自ら遊戲し、生死已に盡き、梵行已に立ち、所作已に辦じて、更に復、胎を受けず、實の如くに之を知らん。善聚と言ふは卽ち五根是れなり。然る所以は、此れ最大の聚、衆聚中の妙なればなり。若し此の法を行ぜずば、則ち須陀洹・斯陀含・阿那含・阿羅漢・辟支佛及び如來・至眞・等正覺を成ぜざるなり。若し此の五根を得ば、便ち四果三乘の道有らん。善聚と言ふは、此の五根を上と爲すなり。是の故に諸比丘、當に方便を求めて、此の五根を行ずべし。是の如く諸比丘、當に是の學を作すべし」と。爾の時諸比丘、佛の所說を聞いて歡喜奉行しぬ。

二

[一〇]聞くこと是の如し。一時佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく、「我今當に[一一]不善の聚を說くべし。汝等當に善く之を思念すべし」と。諸比丘對へて曰さく、「是の



---

【一】善聚品以下聽法品まで五法を明す。
【二】A. V. 2.
【三】善聚(Kusalarāsi)。
【四】五根(Pañca-indriyāni)とは、證悟の道具となるもの。
【五】信根(Saddha-indriya)とは、佛陀に對する不壞の信仰をいふ。
【六】精進根(Viriya-indriya)とは、勤根ともいひ、惡法をすてゝ善法を勸め勵むこと。
【七】念根(Sati-indriya)。己れのなせしことを正しく記憶すること。
【八】定根(Samādhi-indriya)とは、心寂靜の境に入ること。
【九】慧根(Paññā-indriya)とは、四聖諦を知る智慧のこと。
【一〇】A. V. 52. Rāsi.
【一一】不善聚(Akusalarāsi)。

◇　　◇

# 目次

（本丁）　（通頁）

②

# 阿含部

九

林五邦譯

# 國譯一切經

大東出版社藏版